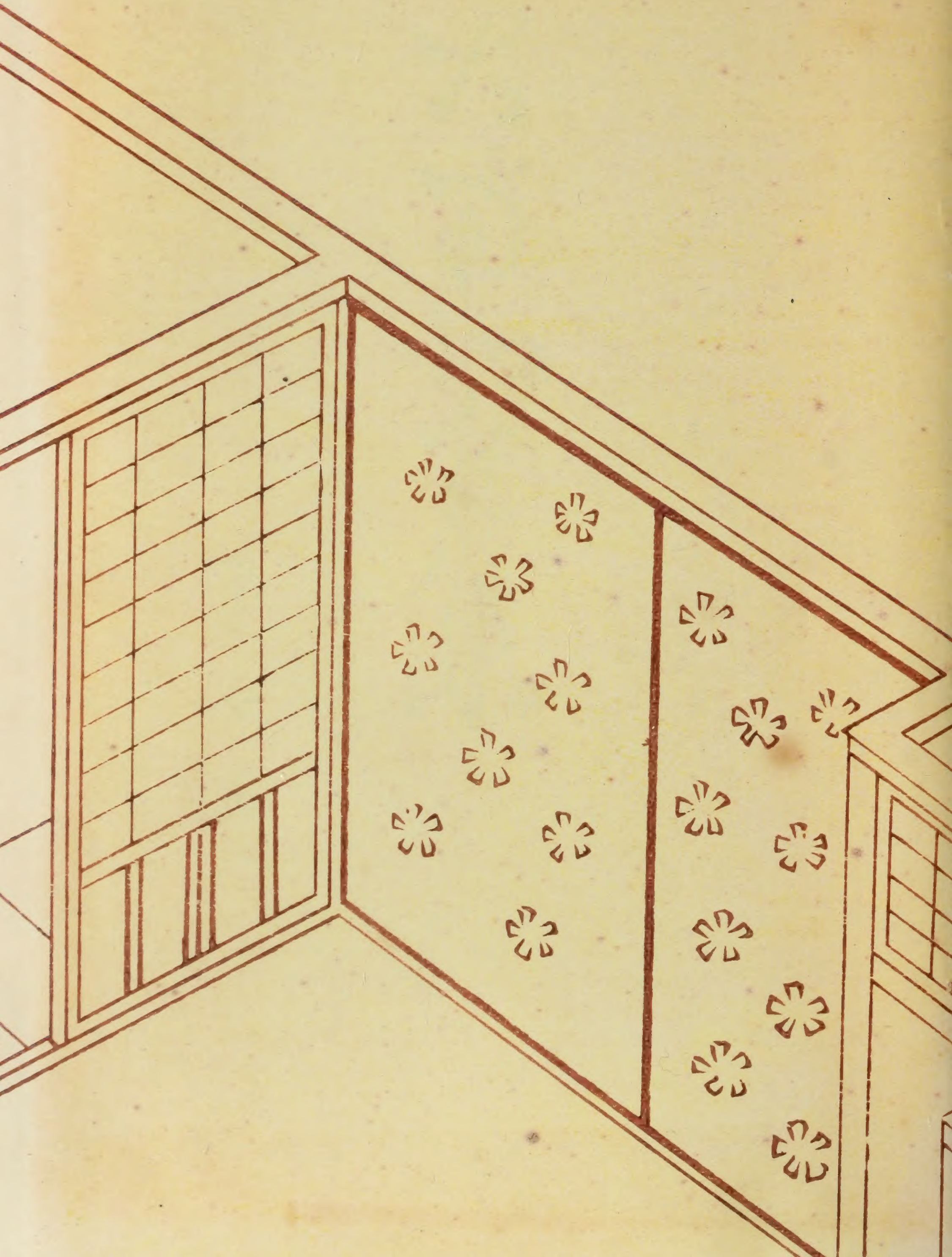




大南北全集

第七巻

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

大南北全集 第七卷

東京 春陽堂刊行

大南北全集 第七卷 目次

挿繪目次

口繪解説

■卷頭に挿入した色刷り本版の錦繪は「曾我梅菊念力弦」石部屋の場で、南北特有のエロチックシーンを、たつぷりと出してゐる。粂三郎の姿態も、この優を描いた錦繪に多く見られる艶美なそれの代表的なものである。

■今度の卷には、挿入する錦繪を多く發見する事が出來なかつた。菊五郎の六三の錦繪は、殊によるとこの狂言の役ではないかも知れぬが、彼れが一生に度々勤めて、脚本こそ變れ、役柄や拵らへの變らぬ六三の姿の、見本として入れたのである。「敵討櫓太鼓」に入れたのは、序幕の尾上多見藏の姿である。

■「曾我梅菊念力弦」は、安政元年にその正本仕立ての草双紙が發行されたので、舞臺面を偲ぶ栞に、重要な場を拔いて、コロタイプにして入れて置いた。この似顔は、スツカリ安政時代の人氣役者に變へてある。

■「敵討櫓太鼓」も、萬延元年に再演の折、草双紙が發行されたので、これも重要な二場を選んで、

その箇所へ挿入した。

■三狂言とも、初演の番附があつたので、例の通りその場面々々へ挿んで置いた。



尾上
菊五郎
桐山
紋次
岩井粂三郎
国貞画



解說及年表

菊宴月白浪

この狂言は、文政四年九月九日初日の、河原崎座に上演された通し狂言である。いはゆる「忠臣藏」の「書替へ」である。世界をその後日譚に取つて、巧みに原作の俤を、變つた姿で寫し出してゆくのが覘ひどころなのである。

序幕の「禪覺寺」は、勿論「忠臣藏」の大序の當込みである。二幕目の「九太夫閑居」は、四段目の判官切腹で、三幕目の「山名館」は、十一段目の討入りである。四幕目の「新鳥越」は、大した當込みもないらしいが、舞臺面は五段目の勘平切腹を暗示してゐる。五幕目の「花屋敷」と六幕目の「三圍堤」は、すつかり七段目の形式で行つてゐる。七幕目の「兩國橋」は五段目である。八幕目の「小名木川」と、九幕目の「女夫石」で九段目を見せ、十幕目の「淨瑠璃」は十段目の當込み、大切の「牛の御前」は、別に當込みもなく、狂言の括りをつけたまでゝある。

二ッ玉の代りに兩國の花火を使つたり、角兵衞獅子を出して手負ひ獅子を利かせたりする、斯うした狂

言は、今日の眼から見られたら、單なるお茶番としか思はれないかも知れぬ。併し、文政時代の江戸の觀客には、堪らなく嬉しい狂言だつたのである。その證據には、菊五郎中心の無人芝居でありながら、興行成績が大成功だつたのでも解る。

黄表紙や洒落本が代表する安永天明度には、芝居でも洒落た狂言が流行つた。文政度にも、可成り洒落た狂言が出た。「菊宴月白浪」も、その一種であらう。併し、同じ洒落た狂言でも、隔たつたこの兩年度では、趣きが大變違ふ。前者のは、餘裕があつて明るい。後者のは、陰鬱で、しつッこい。文政度の洒落は、泰平な生活に倦怠し切つた、刺戟は無いか〳〵と探してあるく江戸人の需要から起つたものである。同じ洒落にしても、多少變態である。病的である。狂言に「書替へ」が喜ばれたのは、今度はどういふ方法で原作の俤を見せるだらうか、といふ、變つた味ひ方が流行したからである。南北は、舌が痲痺してしまつたやうな江戸の觀客に、取替へ引替へ、いろ〳〵な調理法で刺戟的な膳部を提供した。本狂言もひどく膩の甘い、ワザけた所があるやうに見えるけれども、どうして、當時の江戸人には、實以て珍味の料理だつたのである。

さうした味の狂言は、外の時代になると、そぐはぬと見えて、「菊宴月白浪」は、再演されなかつた。爰に、書きおろしの役割を記して置く。

桃の井の奥女中、加古川（中村大吉）浪人、斧九郎兵衛。古骨買ひ、與五郎後ニ直助（二ヤク嵐冠十郎）鹽谷縫之助後ニ箱持ち佐助（尾上多見藏）鹽谷の腰元、浮橋後ニ藝者お京（市川瀧三郎）種ヶ島六太夫。林平内（二ヤク坂東善次）山伏、萬象院海山。花屋鋪の菊塢。奥野左仲太（三ヤク松本虎藏）北村傳次（尾上春五郎）近藤源四郎。口入れ、上野屋五郎三（二ヤク松本錦吾）礒上鄉助。町抱へ、猪之助（二ヤク坂東國藏）高野島五郎師泰。小山田源吾。丁稚、與茂太（三ヤク尾上仙藏）入間丑兵衛。一力升屋勘九郎（二ヤク松本染五郎）太田了竹。家主、李右衛門（二ヤク市川の助）山名次郎左衛門。教信寺の雲哲實ハ百姓與一兵衛、雇ひ婆、おとら（三ヤク大谷門藏）越後獅子、飾間宅兵衛（市川門三郎）石堂數馬之助（尾上松助）女達、金簪のおかる。伊吾餅の女房、おりん（二ヤク市川門之助）石切り、佛權兵衛實ハ垣坂三平。餅賣り、伊吾（二ヤク二世關三十郎）鹽谷家の浪人、斧定九郎後ニ盗賊、曉星五郎（三世尾上菊五郎）

曾我梅菊念力弦（そがきやうだいおもひのはりゆみ）

文政元年一月十日初日の、都座の初春狂言で、南北が六十四歳の春の作である。例に依つて、世界を曾我にして、對面を眞中に据ゑ、前後を世話狂言で行つてゐる。今度は、おその六三「八重霞の世界」と、おばん長右衛門「桂川の世界」を組み合せて、全體の趣向を立てたのである。三代目菊五郎は、いなせな

役が大好きだつたので、大工の六三を度々演じた。從つて「八重霞の世界」、は南北も盛んに使つてゐる。菊五郎がこの狂言で演じた二役のうち、大工の六三は菊五郎の希望で筆を執つた役であらう。そして、新藤徳次郎といふ兇賊は、南北が案出して菊五郎に演じさせた役であらう、新藤徳次郎といふ盜賊については、詳しい事は知らないが、慥かにこの當時捕へられた、實在の盜賊だつた筈である。この作を最初にして、その後は、いろ〳〵な徳次郎狂言が現はれてゐる。

作中に出てくる、石部屋といふ質屋は、廿縄といふ事になつてゐるが、これは高輪の事なのである。必要もないのに、わざ〳〵高輪に場所を極めたのは、何か理由があるに違ひない。一番目で針の宗庵が、何の用もないのに、異名を桂長庵云々と名乘つてゐるのもをかしい。これは、慥かに當時の三面記事を脚色したものだらうと思ふ。高輪邊の質屋に强盜が入つた事や、長庵といふ惡醫者が死んだ事なぞが、材料になつたものであらう。

新藤徳次郎の件は、南北の作中でエロチックな部の見本であるし、二番目なぞは、なか〳〵にすぐれた點も多いのだが、初演の折は入りがあまり無かつた。一體、この都座といふのは、不入り續きで閉場した、市村座の跡を引受けて開場したのであるが、俳優を中村座の大久保今助が一手に吸收してしまつた爲に、菊五郎だけの無人芝居になつてしまつたせゐか、開場毎に不入り續き、僅か一年で、又ぞろ櫓が

替つてしまふ位で、世間からも相手にされなかつた。その時分の狂歌に「都座に過ぎたる物が二つあり、延壽太夫に鶴屋南北」とあるのを見ても、都座の不評判と、南北の名聲とが想像される。

初演の折の役割は、左の通りであつた。

工藤左衞門祐經。六三郎女房、おきぬ（二ヤク中村大吉）福島屋清兵衞。おはんの母、おかや。八幡三郎行氏（三ヤク荻野伊三郎）丁稚、勘吉實ハ久上の禪司坊。片岡下郎、段介（二ヤク坂東彥三郎）工藤犬坊丸祐友（尾上松助）工藤中老、宇佐美（市川おの江）小林の朝比奈。片岡幸之進。町抱へ、七郎助（三ヤク荻野仙花）鬼王新左衞門。家主、箱根の畑右衞門。福島屋の廻し、市助（三ヤク坂東善次）梶原源太景季。大工、勘六。（二ヤク大谷候兵衞）鬼王女房、月小夜。石部屋才次郎。湯屋の番頭、平助（三ヤク桐山紋治）石部屋金兵衞。堤幸左衞門（二ヤク坂東三八）船越十右衞門實ハ赤澤十内（市川門三郎）山崎小文次。手代、勘藏（二ヤク松本錦吾）手下、山姥の權九郎（尾上傳三郎）箱根の兒、閉坊。石部屋下女、お袖。惡玉善吉（二ヤク市川新藏）手越の少將實ハ賴朝息女、大姬。福島屋の女房、お梶（二ヤク山科甚吉）福島屋の娘分、おぎん（瀨川路之助）義太夫師匠、豐梅（岩井梅藏）見世物師、梶の長兵衞。近江小藤太成家（二ヤク澤村四郎五郎）化粧坂少將實ハ祐經息女、犬姬。稻野谷おはん後ニめでた若松のおとし。稻野谷娘十六夜後ニ仲町藝者おその（三ヤク岩井粂三郎）曾我の五郎時致。帶屋長右衞門實ハ盜賊新藤德次郎後ニ針の宗庵。大工、柚の六三郎實ハ團三郎（三ヤク三世尾上菊五郎）

この狂言は、天保九年一月の中村座で再演されてゐる。その時の名題は「扇曲曙曾我」で、矢張り菊五郎が座頭の一座だつた。その時の役割は

徳次郎、六三（二ヤク尾上菊五郎）清兵衛（五世松本幸四郎）おはん（尾上菊次郎）おその、おきぬ（二ヤク尾上榮三郎）七郎助（坂東彦三郎）段介（尾上松助）おかや（中村芝鶴）金兵衛（關歌助）幸左衛門、長兵衛（二ヤク尾上菊四郎）權九郎（松木染五郎）十右衛門（坂東佐十郎）

尤も、この時は役名が變つてゐた。六三を後藤甚五郎、おそのをその八、長兵衛を牛の五兵衛、七郎助を伊太郎、清兵衛を鎌倉屋傳三、十右衛門を梅澤小五郎兵衛、なぞと變へてあつた。何かの都合で、「八重霞」の世界を嫌つたものであらう。

安政元年になつて、この狂言を正本仕立ての草双紙に直したものが、紅英堂から出版された。樂亭西馬綴る、國貞描くで、名題は「新當織帶屋縫合」となつてゐる。上演こそ二度しか無かつたが、その頃まで話しには殘る程の、有名な狂言だつたのである。

敵討櫓太鼓

文政四年五月五日初日の、河原崎座に上演された通し狂言で、「敵討禰未刻太鼓」へ、八百屋お七と白木

屋お駒を持つて來て結びつけたものである。「品川釜鳴屋の場」や「染井吉祥院の場」なぞは、南北一流の筆法で、堪らなく面白い舞臺である。

原作は八幕あるのだが、殘念な事には全部揃つてゐない。六幕目までしか見當らないのだ。しかも五幕目も、跡の方が缺けてゐるから、左にその筋だけを書いて補塡して置く。尤も、この狂言の眼目は、二目と四幕目なので、收容出來なかつた分は、單に筋を辿るだけの幕で、あまり重要な場ではないのである。

五幕目の友平住家が、引返しで幕が明くと、脊中合せの長屋で、佃の喜藏實は八丈小僧吉三とお七とが、新世帶を張つてゐる。若い二人が、米を磨いだり味噌を摺つたり、馴れぬ事に失敗するをかしみがあつて、そこへおくまが、相の山の門附けになつて通りかゝる。お七は、戸倉十内とおくまとの間に出來た娘なのだ。おくまはそれを知りながら、亭主殺しの惡名を負つたお尋ね者の身なので、名乘らずに別れる。その跡で、藤助の手許へ、神妙劍の一卷が入つたといふ事が解る。吉三郎は、小湊の乘合船で盜んだ盜賊は藤助であらうと誤解し、友平が鳥眼なのに乘じて、按摩に化けて再び友平の内へゆく。舞臺が元の友平住居に戻り、爰で神妙劍の一卷を盜まうとして、立廻りになり、爰へ島川太平が忍んで來て、闇に乘じて藤助友平を切つて逃げる。跡で名乘り合つて見ると、吉三郎と藤助は實の兄弟と解るので、吉三郎も前非後悔し、吉三道心辨長と名を改め、兩人に代つて仇討を

誓約する。藤助と友平は死んでしまふ。この次が太鼓櫓の場になるのである。

七幕目は間註所の場で、捕へられたお七とおくまが調べられる。調べる役人は戸倉十内と海老名軍藏である。十内は囚人が自分の妻と娘なのに驚き、どうかして助けようと思ふのだが、土左衛門が持出した證據があつて、どうしても助ける事が出來ぬ。是非なく死罪を申し渡し、廻ると鈴ヶ森の刑場で、爰でお七とおくまは刑罪をうける事になる。その間際に大赦が下つて、兩人は助命される。

大詰は品川の海岸で、秋月一學と改めた島川太平が、安達家へ有りつき、行列美々しく乘り込まうとする所へ、吉三道心辨長がかけつけ、首尾よく太平を討つて仇を報じる。

初演の役割は左の通りであつた。

四六のおくま(中村大吉)島川太平後ニ秋月一學。三吉おちい土左衛門(二ヤク嵐冠十郎)磯貝藤助實ハ尾花染五郎(尾上多見藏)源次兵衛娘、お雪(尾上松助)安森腰元、おさご(市川瀧三郎)鷲の首太左衛門。築地法印學山(二ヤク坂東善次)安森下郎、豆助。判人、狸の金八(二ヤク松本虎藏)道具屋與七(尾上呑五郎)菊坂小源次(松本錦吾)安森源次兵衛。富岡屋吉助(二ヤク市川門三郎)八山新五左衛門、家主、長右衛門。八百屋後家、おたけ(三ヤク大谷門藏)釜鳴屋武兵衛、堤彌藤次(二ヤク松本染五郎)八百屋若い者、丈八。海老名軍藏(二ヤク淺尾友藏)磯貝實右衛門實ハ尾花六郎右衛門、阿部丈助實ハ駕籠舁き、彌作(二ヤク中村十藏)鐵灸お杉。八百屋娘、お七(二ヤク市川

門之助）磯貝下部、友平（關三十郎）問屋人足、白山傳吉。八丈小僧吉三後ニ吉三道心辨長（二ヤク三世尾上菊五郎）

萬延元年十一月の守田座で、この狂言が再演された。尤もこの時は、合法ヶ辻の世界に直し、外の狂言も混入してあつたので、大分違つてゐるが、染井別莊の場と友平住家の場は、大體原作通りで、その外は、三世櫻田治助が所々手を入れたのである。世界が合法ヶ辻になつたので、友平は孫七、藤助は南與兵衞、おくまはお駒、島川太平が平岡丹平、なぞと直された。吉三が後に發心して、吉三道心合法と名乘る趣向に變へたのである。この時の役割は

吉三郎（市川市藏）お七（澤村田之助）お駒（市川新車）孫七（嵐雛助）與兵衞（市川九藏）丹平（嵐冠五郎）

等であつた。

猶、明治になつてから、原作のまゝで、中島座と開盛座に演じられた事がある筈だが、役割や年月を審かにする事が出來なかつた。

渥美清太郎識

菊宴月白浪

きくのえんつきのしらなみ

菊宴月白浪

初段　甘縄禪覺寺の段

役名――鹽谷縫之助。高野島五郎師泰。石堂數馬之助。山名次郎左衞門。種ケ島六太夫。北村傳次。杉森伊太八。禪覺寺住職。腰元、浮橋。下部、與五郎。斧定九郎。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕、眞中に誂へ大きなる鹽谷判官の石塔。この左これより低き大星の石塔この左右義士四十六の石塔並べ、何れも樒の生花立てあり、下手に假番小家、これに鹽谷の定紋の付きし幕を張り、すべて甘縄禪覺寺墓場、義士一周忌法事の體。爰に次郎左衞門、老けたろ拵へ、麻上下、大小にて、床几にかゝり居る。その後に上下の侍ひ二人扣へ、次に島五郎、ふつゝり前髪、麻上下大小、この側に傳次、麻上下大小、介添にて扣へ居る。住僧、紫衣七條の袈裟、柄香爐を持ち、黑衣の番僧二人附添ひ居る。鐃鉢、木魚の音にてよろしく幕明く。

住僧　これは〱、山名次郎左衛門どの、高野島五郎どの、今日は鹽谷判官どの丶家臣、四十七人の義士一周忌、追福の御參詣でござりまするか。

島五　アイヤ〱、鹽谷家の奴等が法事などに、父次郎左衛門や、この島五郎が、何の好みに構ふものか。聞くも穢らはしい。

傳次　御主人がこれへお出でたは、高野島五郎さまの、御家督の事についてのお出。

次郎　まだそればかりぢやない。浪人者の縫之助が、家來の法事をすると聞き、不相應な事でもしをらうかと、御用の次手に來て見りやァ

高野　案に違はぬこの結構、假番家を立てた上に、鹽谷の紋の幕を張り、事仰々しきこの體は

次郎　上を恐れぬ致し方。上聞に達したら、お咎めあるは知れた事。

住僧　アイヤ、山名公。この幕の儀は、縫之助どのが張られたのではござりませぬ。

傳次　さうして、何者が此やうに、仰山な事はしましたな。

住僧　されば、この禪覺寺の儀は、鹽谷家代々の菩提所にて、未だ家繁昌の砌り、當寺へ寄附の幕にござれば、愚僧が申しつけ、張らせましてござれば、縫之助どのにお咎めはござるまいと存じまする。

次郎　さすれば、その儀にお咎めはない。して、縫之助は參つて居るかな。

住僧　ハツ、家來の者は、先ほど相見え、御饗應の用意いたし居ります。して、山名公には、何ゆゑこれまで御入來でござりまする。

次郎　この山名がこれへ參つたは、去る曆應元年、鎌倉中を騷がして、一旦御改易と相成りし、高野ならびに鹽谷の兩家。然るにこの度高野の家寶、菅家の正筆、鹽谷の重器花筐の短刀、右の品々足利家へ差上げるに於ては、その恩賞として改めて、五千貫づゝの所領をば、兩家へ下し賜はるとの御內意に依つて右の寶、內見の爲罷り越したのだ。

傳次　御主人島五郎さまには、山名公の御次男にて、師直公へ御養子にお出でなされ、その後高野家退轉にて、御實家へ暫くお預けのうち

次郎　悴が養家の高野なれば、この山名が身に替へて、家再興を願ひしに、お聞濟みあつて、寶內見となつたるも、我が子不便の親の情。

島五　さはさりながら、心憎きは鹽谷の家督、石堂どのが取持ちにて、これも所領は五千貫、さすれば敵同士の鹽谷家と同高。何とやら、心よからぬ儀ではござらぬか。

次郎、それも案じる事はない。次郎左衞門は其方が親だワ。何も申すな。仕樣はさま〴〵胸にあるわえ。

トこなし。この時向うにて

呼び　石堂數馬之助さまお入り。

ト三味線入りの音樂になり、向うより石堂數馬之助、鹽谷縫之助、麻上下、大小にて、白木の箱入りの短刀を三方に載せ、持ち出る。跡より上下の侍ひ草履取り附添ひ出て、花道にとまる。佳僧出迎ひ

佳僧　これは〱、石堂右馬之丞どの〻御子息數馬之助どの。山名公を始めとして

島五　高野島五郎師泰、先刻よりこれに

傳次　お待ち申しあげまする。

數馬　遲刻の段は眞平御容赦。

佳僧　先づ〱これへ。

三人　お通りなされませう。

數馬　然らば御免。

ト矢張り右の鳴り物にて、殘らず舞臺へ來り、數馬之助、次郎左衞門の次へ床几にか〻ろ。上下の侍ひは數馬之助の後に扣へ、縫之助は下手に皆々よろしく住ふ。

次郎　數馬どの、御親父には如何なされて、御出席はござらぬな。

數馬　父右馬之丞今日は、細川家へ上使の役目。それゆゑ若輩の某に罷り越し、兩家の寶内見いたせ

との儀。萬事よろしくお指圖を。

次郎　して、同道召されたその仁は。

數馬　あれなるは、家の重器を差上げて、家督相續の願ひ人、鹽谷縫之助どの。

縫之　兄判官存生の砌りは、いまだ部屋住みにて、お見知りなき縫之助。かねて石堂どのを以て願ひ置きし、家再興の儀、何卒よろしくお執成しの儀を。

島五　石堂どのにも高野再興、お取計らひの儀を幾重にも

兩人　願ひ上げ奉ります。

數馬　イヤモ、兩家とも勳功のお家柄、なか〳〵以て某が、お取持ちと申す儀ではござらぬ。再興なすは、天下の規模と申すものでござる。

島五　御兩家さまへ、何がなおもてなしと存ぜしかど

縫之　長々流浪の我れ〳〵ゆゑ、心ばかりの用意の品……急いでこれへ。

兩人　持參いたせ。

ト下座と下手の奥にて

六伊　ハア、。

ト音樂になり、下座より種ケ島六太夫、麻上下、大小にて、上下侍ひと兩人して、菓子の折を一ツづゝ持つて出る。下手より杉森伊太八、同じく麻上下大小にて、上下侍ひと兩人して、白木の臺に丁銀を載せしを一ツづゝ持つて出で來り、双方とも石堂山名の前へ一ツづゝ直し置き、はるか下がつて

六太　高野島五郎が家臣、種ケ島六太夫。

伊太　鹽谷縫之助家來、杉森伊太八、

六太　主人申しつけに依つて、何がな饗應と存ぜしかど、暈酒制禁の寺院にござれば

伊太　心に任せぬ不調法の品、何卒

兩人　御受納下されませう。

數馬　これは御兩所より、痛み入つたるこの音物。父右馬之丞へ吹聽いたすでござらう。

次郎　高野の音物は、見事な折、受納いたすでござらうが、縫之助どのゝ音物は、この山名は受取れぬ。

縫之　そりや又何ゆゑ。

次郎　さればサ。食物の贈答は、へつらひに非ず。金銀の音物は、まひなひ賄賂、人におもねり、へつらひて、家を立てんなんぞとは、誠の武士のせぬ事だ。心の穢れた侍ひの物は、目に見るも穢れだ。きり〳〵持つて下がらつしやい。

ト目録臺を足にて蹴飛ばす。縫之助ちつと無念のこなし

縫之　まひなひ賄賂にあらねども、尊敬なさん心より、身に不相應の音物が、却つてお氣に違へばとて土足を以て蹴返すとは、餘りといへば。

次郎　何がどうした。

トきつと云ふ。縫之助こたへかね、ずつと立つて既に斬らよと見える。伊太八驚き「モシ」と押へる。

六太　ヤア、兄判官に懲りもせず、柄に手をかけ亂心同然。殊に上使に等しき山名公に向ひ、詞を返す不禮の高矩。

傳次　イデ、我れ〳〵が。

ト立上がらうとするを

仕僧　アイヤ、各々方、暫くお待ちなされい。

兩人　なぜ留めさつしやる。

仕僧　さればでござる、縫之助どのゝ音物が、お心に叶ひませぬゆゑ。不禮とのお咎めは、御尤もにはござれども、これもその例なきにもござりませぬ。去ぬる鹽谷桃の井が、饗應のその折から

伊太　高貞の家來どもは、不骨者にて賄賂を知らず、若狭之助どのよりは、師直公へ品を盡した、音物

を差上げられしが、鹽谷の難儀。

住僧　かゝる事には手懲り致した、縫之助どのゝ御家來衆にござりますれば、手を盡したる斯くの仕合せ。師直公と同じやうに心得ましたは、全くこれに居ります伊太八が不調法。

伊太　幾重にも御高免、偏へに願ひ上げまする。

數馬　イカサマ、こりや縫之助どのゝ存じた儀ではござるまい。家來の者の心得違ひと見えますれば、御容赦なされて遣はされい。

次郎　何かにつけて鹽谷どのを、取持ち召さるゝ數馬どのゝお詞、承知いたしてござる。

數馬　御承知とあれば何より大慶。然る上は兩家とも、願ひの趣きを

島五　書中に認めござりますれば、何卒よろしく

縫之　御披露を

ト島五郎は數馬、縫之助は次郎左衞門へ、懷中の願書を差出す。兩人取つて披き見て

數馬　島五郎どのゝ願書の趣き、父へ申し達して、よろしく取計らひ致すでござらう。

島五　有り難う存じます。

次郎　縫之助どのゝ願書。こりや取次は相成らぬ。

縫之　イヤ、憚りながら山名さま、何ゆゑあつて縫之助の願書、お取次は成りませぬな。

次郎　この訴状の文言では、押して所領を願ふも同然。一體兩家お取立ては、まだ表向きの沙汰ではないワ。石堂どのゝ取持ち召された、鹽谷の寶は身が内見し、また身共が取持ちの、高野の寶は石堂どのが内見召され、我れ〳〵より上聞に達した上、お取立てはお上の御慈悲だ。それにこの願書の表では、上を恐れぬ先くぐり文言、斯樣な書附け差上ぐる時は、取次いたす某等が、不念と相成る。この文面で承知する人があらば、その人を頼まつしやい。この山名はマア成らぬ。

島五　この島五郎なぞは逐一に、山名どのへ問ひ合せて認めたれば、一字一點非太刀は請けぬ。御發明なお方は、また格別なものだ。

縫之　今日内見の今となり、願書のお取次下されぬ時は、鹽谷の家名花咲く期なし。文面不案の縫之助麁文もあらば、お指圖下さりませ。認め直して差上げませう程に、何卒山名公のお情をもつて、お取次の儀を幾重にも

次郎　それが卽ち輕はずみだ。いま差當つて聞いたとて、それで事が濟まうと思ふか。不案内なら不案内の樣に、なぜ石堂どのへでも聞合せぬのだ。

數馬　アイヤ、その心付かざるも、先祖の家名が立てたいと、思ふ一圖で無理ならず。他から物事見受け

る時は、仕損じ仕落はあるならひ。既に智者と呼ばれたる。御自分にも、一失がござりますれば

次郎　これサ、數馬どの、何が身共が一失でござる。

數馬　貴殿の御次男島五郎どのを、一旦高野へ養子に遣はされたとは申しながら、實心高野の再興をお取持ちなら、師直が妾腹にも、男子一人あるよし。尤も母は産後に歿りて、當時行き方知れずとは申せども、草を分つて詮議なさば、知れぬと申す儀もござりますまい。

次郎　ヤア。

數馬　正しく高野師直が、血筋の一子を打捨てゝ、貴殿の實子に高野の家督は、近頃以て智者の一失と、父右馬之丞が申されました。

次郎　サ、それは。

數馬　そこを顯に申さぬも、俗にいふ浮世の義理。さすれば共々鹽谷の再興を、お取持ち遣はされたがよくござらうと、憚かりながら存じます。

次郎　イヤ、お若いに似ぬ御辯舌。年取つた次郎左衛門なぞは及ばぬ事、この上は共々に、お取持ち仕らう。

數馬　お聞屆けあつて拙者も大慶。

住僧　先刻より餘程の間、氣鬱を晴らす爲、愚僧が不束なる手前を、一服差上げたうござれば、客殿にて暫く御休息。

次郎　そりやようござらう。數馬どのも御一緒に。

島五　然らば持參の一軸は。

數馬　後ほど内見仕らう。

六伊　この上ともに主人の身の上。

島縫　何卒よろしく。

次郎　石堂どの

數馬　山名どの

住僧　御案内仕りませう。

ト唄になり、住僧先に次郎左衛門、數馬之助、島五郎、六太夫、伊太八、めい〳〵思ひ入れあつて、伴僧、上下の侍ひ、皆々附いて下座へ入る。縫之助殘り、こなしあつて

縫之　アヽ、めぐる月日に關守なく、早一周忌の今月今日、石堂どのゝ情にて、再び花咲く鹽谷の家名。これも忠死の四十七人、その靈魂の守護ならん。それにつけても兄君の御靈前へ、家の重器花筐

の短刀を、手向けて追善回向せん。

ト短刀の箱を眞中の石塔の前へ直し

鈴光院殿朝散太夫吹毛玄利大居士。莊嚴淨土。南無阿彌陀佛々々々々々々。

トよろしく拜禮あつて

大星始め忠死の者へも、心ばかりの水を手向けて。それ〳〵。

ト三味線入りの禪のツトメになり、そこに有る閼伽手桶を持ち來り、柄杓にて、めい〳〵の墓へ水を手向けて居る。向うより浮橋、屋敷女中の拵へ、跡より與五郎、ポツトかづら、石持の布子、一本差しにて、包みを脊負ひ、墓手桶と樒の花を持ち、供をして出て來り

與五　モシ〳〵、浮橋さま、お前はいつもと違つて、強氣と足早でござりますが、どうしても彼のお方の顏を見ようと思つて、それで其やうに。

浮橋　なんの。さうではなけれど。

與五　ヨウ〳〵、お樂しみ様〳〵。

トおだてる。浮橋恥かしさうに顏を隱す。與五郎、舞臺を見て

モシ、あそこに墓掃除してござるは、どなたでござりませうな。

ト舞臺へ思ひ入れ。浮橋見て嬉しきこなし。

浮橋　エヽ、この人とした事が、人を弄る様なこと云はしやんせずと、早うござんせ。

トいそ〳〵と本舞臺へ來る。與五郎も付いて來り

モシ、縫之助さま。

縫之　ヤア、其方は浮橋。

浮橋　おなつかしうござりまする。

ト縫之助に寄り添ふ。

縫之　其方はマア、どうして爰へはおぢやつたのぢや。

浮橋　ハイ、今日は大星さまや皆さんの、御一周忌にござりますれば、お墓參りに。

與五　それは付けたり有やうは、あなたのお顔を、久しう御覽じやらぬゆゑでござりまする。

縫之　ほんに、久しう逢はぬうち、どうか少しやつれたやうな。

浮橋　少しはやつれもござりませうかいなア。お家離散の前方より、あなたに附添ひ御流浪のうち、お側離れぬ私しが

與五　どういふはずみか浮橋さまの、お腹に云ひ分が出來たとやらで、慥か今月が、丁度五月とやらで

ござりますとサ。

縫之　ヤヽ。すりや、身共が胤を浮橋が

浮橋　アイ。

ト恥かしき思ひ入れ。

縫之　それはマア、めでたいわいなう。

ト喜ぶ。

浮橋　斯うした仲とは知りもせず、あの兄様の胴欲な、ついした色か何ぞのやうに、わしは高野のお出入りにて、御恩になつた權兵衛が妹に、敵同士の鹽谷の血筋、縫之助と不義あつては、なき師直さまへ立たぬと云うて

與五　たつた一人の妹御を、可哀さうに勘當なされて、行き所に困らつしやるところを、淺草邊に頼もしい女中があつて、そこに世話になつてござるうち、フトわしがお目にかゝり、樣子を聞けばあなた樣の、お胤を宿したとある事を、加古川さまへお話し申したところが、鹽谷家に由縁のあるお方なら、打捨てにはならぬから、どうぞ共々お世話申してくれいとのお頼みなれば、その日の煙りを立てかねる私しなれど、及ばずながら時々の、御樣子を伺つて居りますばかりでござりま

す。

縫之　それはマア、其方のいかい世話ではある。して、その加古川といふは何者ぢや。

浮橋　アイ、加古川さまといふは、定九郎さまの女房さま、以前は桃の井さまの奥勤めさしやんしたうち云ひ交してやゝさんまで産ましやんしたところが、其うちにお家の騒動にて、ちり〴〵ばら〳〵。

與五　其お二人の中のお子は、加古川さまの親里、播州の飾間宅兵衛さまに預けおき、加古川さまは定九郎さまの、跡を追うてござつたゆゑ、親御の所へ入れようとなされたれど、固意地な九郎兵衛さま、親の許さぬ轉び合ひ、内へは足踏みならぬと、以ての外の不機嫌ゆゑ、以前は九郎兵衛さまに勤めた小者のこの與五郎、その縁でお預かり申すうち、定九郎さまは親御の手前を憚りて、それより一向お便りもござりませぬ。

縫之　ハテ、定九郎は、見かけは堅藏らしいが、色事師ぢやなア。

與五　イヤ、色事師の段でか、加古川さまが不斷云はつしやるには、此やうに定九郎さまが便りして下さんせぬは、まだ伯州にござる時、瑜迦山へ御代參の、ざこ寐の夜に、何國の誰れか知りもせぬ、女中を捕へて戯れに、又の證據と割り笄を、その女中に遣らつしやつたとあれば、大方その女中に逢はしやつて、それでこの加古川が事は、思うても下さらぬのかと、愚痴を云はつしやるも無

理ではござりませぬ。その御案じやらこの頃は、加古川さまは、ぶら〳〵病ひ、御看病申さうに
も、何をいふにも手一つにて。

浮橋　ほんに女子も及ばぬ介抱と、加古川さんも喜んでござんすわいな。

縫之　ハテ、下々に似合はぬ深切な者ぢやなア。

與五　なんの、今日一周忌の義士方に比ぶれば、何でもない事でござります。

縫之　して、其方の、今のすぎはひは。

與五　ハイ、朝は疾うから飯炊いたり、晝は古骨買ひませう、夜は御家來のこの與五郎。お世話と申す
も屆かぬ勝。今日は浮橋さまのお供ゆゑ、モシ、柳原を一本きめて參りました。即ち内は山谷の
新鳥越でござります。

縫之　ほんに氣輕な男ではあるぞ。

與五　モシ、浮橋さま、わしが時々あなたの所へ參りますると、わしでも知つた事のやうに、强氣に恨
みつらみを仰しやつたが、爰へ來ると、モヂついてばかり。

浮橋　ぢやといふて。

與五　アヽ、爰らが潮來節に云ふ、まさか顏見りやといふところであらう。



浮橋　與五郎どのゝ、何云うてぢややら、云ひたい事は山々なれど
與五　そんなら、早く胸づくしでもお取りなされ。
浮橋　それぢやというて、お前方に見られるのが恥かしいわいな。
與五　その斟酌なら斯うして居ります。
　　ト着物をすつぽり冠つて後向きになる。
　サア、ずつと張込んで、仰しやりませ〳〵。
浮橋　なんの、その様にせいでもよいわいなア。
與五　エヽ、そんな事ではいかない。張込んで〳〵。
　　ト着物を冠つたまゝ後向きに浮橋を縫之助の方へ段々に押しやる。浮橋、もぢついて居る。
浮橋　モシ、殿さま、お前様はお恨みでござりまする。
縫之　アヽ、コレ〳〵浮橋、わしや何にも其方に恨まれる覺えはない。
浮橋　エヽ、お前様はなア。
　　ト合ひ方になり
　聞えませぬ、胴欲な。わたしが兄さん權兵衛どのゝ片意地から、あなたのお側を遠ざけられ、以

前鹽谷さまのお末を勤めた、頼もしい女中さんに、三月越しも世話になるうちに、問ひ音信もして下さんせぬは、あんまりでござんすわいな。

縫之　成る程、さう云やれば皆尤もぢやが、今まで便りをせぬ譯を、よう聞いてたも……今度家の重寶、花筐の短刀を、足利家へ差上げれば、その恩賞として五千貫の所領、頂戴するまでは愼み守る身なるゆゑなか／＼便りどころではないわいなう。さりながら、家中離散のその時も、宿へも下がらず附添うて、身共が不自由の其うちを、介抱してたもつた其方、家再興のその時は、奥にもしようと思うて居る。便りせざるは惡かつたが、必ず恨んでばしたもんなや。

浮橋　ほんにマア、さうしたおめでたい事のあるとは、露ほども存じませず、女子の淺い心から、恨み云うたは勿體ない。御免なされて下さりませ。

縫之　なんの其やうに謝る事があつて。

浮橋　イエ／＼、今更何と申しやうがござりませぬわいなア。

　　ト此うち下座より六太夫出かゝり、窺ひ居る。與五郎、顔を上げ

與五　エヽ、もどかしい。そこで云ひ合つて居ちやア人が聞くと惡い。

　　トあたりを見て

幸ひなあの假番屋。

浮橋　サア、殿さま。

縫之　わつけもない、判官さまの墓前で

與五　その判官さまも奥方の、顔を眺めてござつたから起つたこと。

縫之　ぢやというて

與五　エヽ、ござりませ。

トもぢ／＼する兩人を無理に下手へ押しやる。兩人下手の番屋へ入る。與五郎ほつと溜め息をつき、

したが、爰に斯うして立つても居られまい。

トあたりを見廻し

成る程、殿様と大星さまとのお墓ばかり、綺麗に掃除してあつて、外の義士の墓の穢ない事わえ。武家方といふものは物ぐさい者だ。斯うして居るうちドレ、お墓の掃除をしてあげやうか。

ト誂らへ禪のツトメやうな鳴り物になり、腕まくりして

エヽ、脇差が邪魔だ。

トよき所へ拔いて置き、水を掛け／＼、石塔を皆々掃除してこなし。

ホイ、水が無くなつた。

ト始終右の鳴り物にて、手桶を提げ下座へ入る。六太夫そつと窺ひ出て、眞中の墓に手向けある箱を盗み、中より短刀を取出し、目釘を拔き、中心を取つて、これをどうしようといふ思ひ入れにて、あたり見廻し、與五郎が置きし脇差を見つけ、寸尺を合せ、うまいといふ思ひ入れにて、短刀と中心を摺りかへ、箱を元の通りにして、三方の上へ直して

六太 まづこれでよし。併し、この脇差を、今の奴が見たなら、おれがのだと持つて行くであらう。ア、コレ、どこぞへ隱して置きたいものだが。

トあたりを見て、下の方草井戸の脇へ隱し

斯うしておいて、日が暮れたらば直ぐにこれを…… よし〳〵。

ト頷づき、下座へ入る。木魚入りの合ひ方になり、向うより斧定九郎、深編笠、好みの形にて出て來り

定九 夢によく似たる夢かな墓参り。光陰既に一周り。世にうらやましき義士の人々。黄泉までも君の御側・並ぶ石碑は四十七士。せめて手向けを、さうぢや〳〵。

ト右の鳴り物にて本舞臺へ來り

さるにても、この定九郎は、宿世いかなる業因にや、鹽谷代々の家老職、斧九郎兵衛が悴と生れ、十五の年より御近習勤め、若氣の至り奥勤めの、加古川と不義の科ゆゑ、改易なりしその跡にて、思ひがけなきお家没落。大星どのを始めとして、四十七人譽の仇討、その忠心に似もやらず、父九郎兵衛は不義士と呼ばれ、我れは殊更勘當の、身の上ながら心底は、親と一つでない事を、せめて草葉の亡君へ、申し譯いたさん爲め、今日御命日のお墓參り、手向けの水はこの傍りに

ト井戸の側へ行き、立て札を見て

ムウ、首洗ひ井と記したるは、さては師直が首級、この所にて洗ひしか。我れもその夜に在り合さば、一番鎗の高名して、敵師直が首引提げ、御墓前に手向けんもの。思へば〳〵殘念な。

ト思はず井戸を見込む思ひ入れあつて

さうだ。返らぬ此くり言、思はぬ怒りも廟所へ恐れ。

ト繩釣瓶にて水を汲まうとする。この時下座より與五郎、うろ〳〵傍を探しながら出る。定九郎は六太夫の隱したる脇差を、ふつと見付け、取上げ

この草叢に一腰が。

ト不思議さうに見る。

與五　アモシ、それはわしのでござりまする。方々探して居ました。此方へ下さりませ。

ト取らうとする。與五郎を見て

定九　ヤ、其方は以前の下部、與五郎でないか。

與五　あなたは若旦那定九郎さま、思ひがけない、この所で

定九　義士の面々一周忌ゆゑ、餘所ながら今日の佛參。

與五　左樣でござりまするか。さぞあなたもこの人々が、お羨ましうござりませう。

定九　誠に腸を斷つ思ひ。推量しやれ。

與五　御尤もでござります。さりながらお前樣は、只今はどれにお出でなされます。

定九　この定九郎が今の住所は、親の家を出でてより、いづくにそれと定めなく

與五　左樣でござりますか。あなたや御子息の芳松さまの事を、加古川さまがお案じなされて、久しい間、御病氣でお出でなされます。

定九　その事も風の便りに聞いたなれど、今まで音信は致さぬのも、親の手前を憚りて、それゆゑの事なれば、必ず無情の者と思うて呉れな。加古川にも云うて聞かせてくれ。それは格別、何ゆゑこの所に腰の物を

與五　ハイ、それは

ト浮橋の供をして來た事を云ひかれる思ひ入れ。

定九　以前は武家の家來の與五郎。ハテ、麁相千萬。

與五　これは何でござります、お墓の掃除を致します時、ツイ爰へ置きました。

ト脇差を取る。この時六太夫出て來り、惘りして

六太　コレ〳〵、その脇差を、どこへ持つて行くのだ。

與五　これは異な事を云ふお侍ひだ。わしが脇差を、わしが持つて行くのに、大きにお世話だ。

六太　これがお世話を燒かずに居られるものか。その脇差は、どうも遣られぬ〳〵。

定九　これはしたり、見受けますればお歷々の御身分さまが、なんで下部の脇差を、遣られぬとは云はつしやるぞ。

六太　サア、遣られぬといふのは、オヽ、この脇差は、これはおれがのだ。

與五　ヤ、途方もない事を云ふ。こんながた〳〵丸を、ナニ立派なお侍ひが。こりやアわしのでござります。

六太　イヤ、世の中に似た脇差は、いくらもある。しかも印がある。

與五　その印は何でござります。
六太　その印は、中身が慥か鐵だ。
與五　ハヽヽヽ。他愛も無い事。この人は狂人ださうだ。
六太　イヤ、狂人ではない、間違ひだ／＼。
　　ト脇差を爭ふ。與五郞引たくり
與五　この侍ひは、何だか不氣味で、相手になるも馬鹿々々しい、といつたところがお二人樣を、爰へ置き申しては……イヤ、あなた樣には、まだいろ／＼お話しもござりますけれど、爰にまご付いて居たら、着物まで剝がれるも知れぬ。門前の矢大臣で、ちよつと引かけて參ります……モシ、私しは、ちよつと行つて直ぐに參ります。
　　ト假番屋へ思ひ入れして
イエ、若旦那、直ぐに行つて參ります。
　　ト禪のツトメになり、ツイと向うへ入る。
六太　コリヤ／＼、それはおれがのだ。
　　ト追ひかける。定九郞留めて

定九　わづか下部の腰の物、あの見苦しい一腰を、それほど所望のお侍ひ。何か仔細の

六太　ヤ。

定九　ハテ、御仁體がそこねまする。

六太　それでもあれを

ト行きにかゝる。定九郎留める。この時下手の番屋より、縫之助浮橋出かゝるを定九郎ちよつと見て

定九　コレ。

ト目で知らせる。これにて兩人引込む。

六太　二人は慥か

ト定九郎へだてる。

定九　ハヽア、爰らが花に

ト六太夫また寄るを、扇にて額をぴつしやり。

嵐ぢやなア。

トよろしくこなし。道具廻る

本舞臺三間の間、中足の二重、大欄間をおろし、正面瓦燈口、左右金襖、上下塗り骨障子屋體、すべて禪覺寺書院の掛り、爰に次郎左衛門、數馬之助、以前の形にて居並び、緣先に以前の侍ひ、二人扣へ居る。時の太鼓の頭に黄ばくの鳴り物にて、よろしくこの道具納まる。

次郎　ソレ、呼び出せ。

侍ひ　ハツ。

ト上下へ向ひ

侍ひ　高野の養子島五郎どの

同　鹽谷の舍弟縫之助どの

同　家々の寶内見の時刻

兩人　急いでこれへ。

島縫　ハア。

ト三味線入り黄ばくの鳴り物になり、下手より島五郎、一軸を三方に載せ持つて、六太夫、傳次付いて出る。上手より縫之助、短刀の箱を三方に載せ持ち、伊太八付いて出で來り、双方とも山名石堂に會釋して左右に扣へる。

島五　お召しに隨ひ、高野島五郎師泰。
縫之　鹽谷縫之助高矩
六太　臣下の者ども附添ひ
五人　罷り出ましてござりまする。
侍ひ　イザ、內見の品を
縫島　ハツ。

ト兩人こなしあつて

島五　卽ち師直が家の寶、菅家の正筆。
縫之　高貞の重器、花筐の短刀。
兩人　御檢分下さりませう。

ト島五郎は數馬之助の前、縫之助は次郎左衞門の前へ双方の寶を据ゑ置き、引下がつて平伏して居る。
數馬之助、ちり手水を遣ひ、箱より出し、よく〳〵見て

數馬　イカサマ、高野の家寶菅家の一軸、若輩の我れ〳〵が、眞僞はしかと分らねども、兼ねて父より聞き傳へたる道眞公の墨蹟、ハヽア見事。高野氏には流石お家柄、結構な寶を相傳あられたなア。

島五　お譽めのお詞、家の面目でございます。

次郎　イヤ又、鹽谷どのゝ重器、花筐の短刀は、その上を越すお寶ゆゑ、今日の内見いたすのも、我れ我れが譽でござる。

ト箱の紐を解き、中身を拔きかけ、恟りしてこなし

縫之助どの、これが鹽谷の重寶、花筐の短刀でござるかな。

縫之　ハッ、いかにも左樣にござりまする。

次郎　ハヽア、錆びたりな赤いわし。アノ爰な、縫之助の大騙りめが。

縫之　ナニ拙者を騙りとは。

次郎　斯樣な品を差上げ、我れ〳〵を一ぱいはめようとは、大騙りであらうがな。

ト短刀の箱ぐるみ縫之助へ投げつける。縫之助、恟りして取上げ見て

縫之　ヤヽ、最前持參の折までは、念に念入れ改めて、所持なしたる短刀が、コレ此やうな似せ物とは。

ホヽホイ。

ト驚き、當惑のこなし

數馬　アヽ、イヤ〳〵、縫之助どの、內見のその席で、似せ物とは如何なる仔細で

縫之　サ、その申し譯は。
次郎　なんのあるものか。これといふも、うつそりから起つた事だ。一體鹽谷の再興を取持ちさつしやる石堂どの、これにお嫡子數馬之助どのがござるが、貴殿の御親父右馬之丞どのは、人を知らぬお方と見へて、折角お取持ちなされた鹽谷の家督が、此やうな呆痴の侍ひと聞き知つたら、いかな鹽谷最屓でも、少しは呆れさつしやらう。
傳次　誠に蛙の子は蛙に似ると、兄判官に劣りなき、縫之助の大だわけ。
敵役　ムヽ、ハヽヽヽ。
數馬　あれ聞かれたか縫之助どの、執成し致した親人まで、後指をさゝれるぞや。何ゆゑ似せ物の短刀を
六太　その短刀も、折角拙者がものしたを、又ものされて
數馬　エヽ。
六太　イエサ、似せ物だから、何でも人に物されたのでござらうわい。
傳次　六太夫どの、知れた事を云はつしやるな。
次郎　ヤイ、縫之助、この次郎左衞門を盲目だと思ふのか。そんな炭掻き同然な品を、花筐の短刀で候

ふなどと、まじめで人をたぶらかす、アノ爰な祿盜人めが。

縫之　こりやあんまりな悪口雜言。

ト次郎左衞門の側へツカ〳〵と來て、擬勢する。

次郎　何があんまりだ。次郎左衞門は上使同然だぞ。うぬがやうな生盜人は、以後の見せしめだ。カウカウ〳〵。

ト二重へ縫之助を引付け、扇にて打据ゑ、突き放す。縫之助、よろ〳〵として、ぢつと無念のこなし。

縫之　身の誤りに是非なくも、ぢつと蟄して居ればとて、あまりといへば

次郎　なんだ〳〵。打ち据ゑられて口惜しいか。それほど口惜しく思ふなら、五千貫の所領に有付く、誠の短刀をそこへ出せ。

縫之　サ、それは。

次郎　出さねば矢ツ張り祿盜人か。

縫之　サア。

次郎　云ひ譯あるか。

縫之　サア。

次郎　サア。
兩人　サア／＼。
次郎　寶を出さねば、鹽谷の家は、一生涯埋れ木だぞ。
浮之　この身に覺えなき事ながら、なくて叶はぬ寶の紛失。今まで願ひし再興も、執成し頼みし石堂どのへ、申し譯には、この場に於て。
　　ト腹切らうとする。この以前より定九郎、下手より出て窺ひ居たりしが、この時前へ、ツカ／＼と出て鹽谷を留めて
定九　こりや御短慮な。マア／＼、お待ちなされませ。
縫之　ヤア、其方は定九郎、縫之助がこの場の切端、その申し譯に
定九　その申し譯はござりまする。
縫之　なんと。
定九　あなたの御身の御難儀を、拵らへた者がござりまする。
縫之　ヤヽ、身が越度を拵らへた者が。そりやいづくに、名は何と。
定九　外でもござりませぬ、この定九郎でござりまする。

皆々　サア。

ト驚ろく。

縫之　イヤ、そりや僞りぢや。これへ參るまでは正眞の品、殊に今日只今まで、勘當同然の其方が、仕業であらう筈がない。

定九　たとへ何と仰せあつても、家來をかばふお慈悲の一言、取換へたる似せ物は拙者が誤り……憚りながら山名さま、科人は定九郎めでござります。

次郎　イヤ、その手は喰はぬ。誠其方が失なつたにもしろ、陪臣の定九郎、お取上げはないワ。家來の越度は主人の越度だ。なぜ我れ〳〵へ、似せ物を突きつけた。

縫之　似せ物と存じて、何しに御内見に入れませうや。

次郎　たとへ御身が知らぬにしても、似せ物で濟まうと思ふかァ、こりやァ聞えた。鹽谷高野の遺恨の元は、師直が判官をば、井の内の鮒の譬へ、それを根に持ち殿中を騷がした、その二の舞が徒黨の奴ら、四十七人世の人が、忠臣者と云ひはやすも、主人の呆痴が家來の名聞、その弟の縫之助、家の寶を摺り換へられ、迂濶にこれ〳〵持つて出たは、鮒に劣つた大腰抜け。

定九　そりやあんまりな御雜言。毛頭縫之助が存ぜぬ事。科人はこの定九郎

次郎　エヽ、やかましい。陪臣の其方に詮議はせぬ。すッ込んでおらう。

島五　アヽ、これを思へば養父たる、師直は仕合せ者。我れらがやうな子を貰つたお庇には、寶内見も首尾よく濟んで、明日からは五千貫の知行取り。これに付けてもお氣の毒なは、縫之助どのでござるて。寶紛失の申し譯は、腹でも切らずばなるまいかい。

六太　その腹も切る術を、どうして〳〵知るものか。いつその事に松の木で、首でも縊るが相應だ。

傳次　それも出來ずば破れ扇で、四海波でも謳ふがいゝ。侍ひの風上に置くも穢れ。

島五　近頃もつて笑止千萬。

三人　ハヽヽヽ。

ト笑ふ。縫之助ぢつとこなしあつて、數馬之助を見て氣を替へ

縫之　何れも方のお下げすみ、骨身に通つて無念とは、存じながらも身の誤り、申し譯には、この場に於て。

トまた腹を切らうとするを

數馬　ソレ留めい。

定九　ハツ……數馬之助さまのお詞。マア〳〵、お待ち下さりませう。

縫之　ぢやというて。
數馬　うろたへてか縫之助どの、判官どの〻血筋といふは、貴殿一人より外にはあるまいが。おてまへが死んで何者が、寶の詮議仕出して、鹽谷の家は立てうと思ふぞ。先祖へ不孝といふところへ、心付かぬか鹽谷どの、逆上せてか縫之助どの。
縫之　ハア〻。
次郎　ア〻コレ數馬どの、流石はお若い。勿論自身の寶とはいひながら、お上の御用の品ゆゑに、差上げよとある短刀を、紛失させた科人なりや、縛り首は當り前。それを切腹させるのは、この山名が情でござる。それに留立ておしやつて、お上への申し譯は、何としようと思はつしやる。
數馬　ハテサ、その科人は定九郎と、自身の白狀。
次郎　イ〻ヤ、ありや陪臣者、家來の越度は主人の越度だ。
數馬　イ〻ヤ、そりやひが言。君恥かしめを請くる時は臣死すの本文。まこと縫之助が越度でも、家來が代つて切腹なすに、御批判はござるまい。
次郎　サ、それは。
數馬　若輩者の差出口、眞平御容赦下されい。

次郎　イヤモ、どうとも御勝手〳〵。

ト面ふくらしてゐる。

數馬　コリヤ、定九郎、寶內見の我れ〳〵へ、似せ物をさし付けた、その科に依つて切腹申しつくるぞ。

定九　ハツ……古主に代つて切腹なさば、親九郎兵衞が不義士の汚名、少しは削る爲もござれば、この場に於て

ト脇差へ手を掛ける。

數馬　イヤ、この場では相成らぬ。

定九　とは又何ゆゑ

數馬　不義士と呼ばれし九郎兵衞が悴、古主の菩提所といひ、佛地を穢すは恐れであらう。

定九　實に御尤もなる御仰せ。然らば親九郎兵衞が、浪宅は伊皿子町、それへ引取り切腹の

數馬　檢使は跡より遣はさん。

定九　ハツ……數ならぬ身も侍ひの、數に入つてか有り難い、足利家より御檢使とは、死期の本望、この身の本懷。

次郎　その檢使こそ島五郎、介添は六太夫。

數馬　アイヤ山名どの、陪臣づれの定九郎へ、天下の諸侯の島五郎どのを、検使とは筋違ひ。

島五　憚りながら數馬之助どの、この島五郎を天下の諸侯と、仰せではござれども、當時お預けの身分なれば、矢張り陪臣同然なりや、検使に罷り越したりとも、さのみ筋違ひとは申されますまい。

次郎　さうだ〳〵。臆病未練の不義士の悴、もし身代りも計られず。

傳次　その狂言をさせぬ爲、島五郎さまに六太夫どのとは、さすが山名公の御發明。

島五　検使首尾よく相勤め、菅家の一軸差上げれば、五千貫の知行取り。

六太　高野家再興なす時は、お預けのうち長々と、お附き申した忠臣の、我れ〳〵までも元の立身。

次郎　まだその上に鹽冶家へ、下されんとある五千貫も、縫之助が紛失の、寶詮議を仕出だすまでは、高野家へお預け地。

島五　ヤヽ、すりや合して所領は一萬貫。

敵役　エヽ、有り難い。

ト喜ぶ。

縫之　エヽ、聞けば聞く程片落ちな

定九　強慾非道の御計らひ。

ト きつとなる。

數馬　コリヤ、何事も父に任せて。

縫之　ハツ。これより直ぐに寶詮議。

定九　我れは冥途へ。

次郎　急ぐ使ひは。

敵役　檢使の我れ〳〵。

ト次郎左衞門縫之助こなし。六太夫、傳次兩人、定九郎にかゝるを、左右の利腕を捕へて

定九　然らば後刻。

次郎　首を洗つて

ト立上がるを數馬之助、扇にて押へる。定九郎は傳次を見事に返す。双方とたん木の頭。

定九　相待ち申す。

ト目禮する。縫之助、島五郎ちよつと氣味の立廻り。舞臺の皆々よろしく、拍子　幕

二段目　斧閑居の段

三段目　山名館の段

役名――斧定九郎、斧九郎兵衞。山名次郎左衞門、入間丑兵衞。近藤源四郎。奥野左仲太。小山田源吾。磯上郷助。川村傳藏。望月雲八。玉蟲市平。外村源内。大沼郡右衞門。岡村李平。伊藤五平太。大熊官藏。北村傳次。種ヶ島六太夫。高野島五郎師泰。中間、伴助。山伏、萬象院海山。出前持ち、仁八。質屋手代、嘉助。召仕、おりん。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、向う襖、上の方に稻荷の祠、鈴提げてあり、正面錠卸ろせし鎧櫃を直し、いつもの所に丸木柱の竹簀戸、斧九郎兵衞と書きし表札、寒竹の垣根、すべて伊皿子町浪宅の體。爰に近藤源四郎、浪人の拵へ。丑兵衞、廣袖、道樂者の形。海山、法印の拵へ。仁八、蕎麥屋のかつぎ。膳を取ちらし、嘉助、質屋の手代にて、風呂敷に破れ麻上下三具包みたるを持ち、嘉助源四郎立ちかゝり居る。皆々とめて居る體。かん／＼の合ひ方にて引返して幕明く。

嘉助　コレ、源四郎さま、ぶたしつたの／＼。濟まぬぞ／＼。

源四　ぶつたがどうした。うぬ、叩ッ挫いて

トまた立ちかゝる。

海山　コレサ、もうよいではないか。あんな奴は打ッちやつて置かつしやい。

丑兵　ぶつたところが、手にも足らぬよい〳〵だ。死ぬと悪い。ぶち放しにするがいゝ。

嘉助　ナニよい〳〵だ。どこにおれがよい〳〵だ。そんな男ぢやアないぞ。とつけもない。

仁八　コレサ〳〵、とつけもない。貴様には頭にも毛がないワ。ハヽヽヽ。

三人　ほんに若いやうな爺イだ。ハヽヽヽ。

嘉助　ナニ爺イだ。おらア二才だワ。爺イで質屋がなるものか。この耄碌めら。

三人　このよい〳〵め。どうした。

ト嘉助を捕へ、さいなむ。又かん〳〵の合ひ方、向うより斧九郎兵衛、古袴大小、老けたる拵へにて、ゆで蛸を提げ籠へ入れ、その中へ樒の花を一ッにして、これを提げ出て來り、内の様子を見つけ、足早に來り、これを留めて

九郎　これはしたり〳〵、主の留守に、何を其やうに喧嘩をするのぢや。おとなしくもない衆ぢや。

海丑　これは主人、歸らつしやりましたか。

源四　九郎兵衛どの、お聞きくだされ。其許の留主に、我が先祖から傳はつた、上下を遣はして、二分貸せと申せば、この質屋めが上下三具で、三百文しか貸せぬと申して、返しに來ました。餘りな奴ゆゑ、打擲いたしました。

嘉助　モシ〳〵、九郎兵衛さま、お前の通でこの上下を、二分付けろとは、あんまりな無理ゆゑ、斷りを云ひに來たこの嘉助を、この人がぶちました〳〵。

トわめくを九郎兵衛制して

九郎　コレ〳〵、質屋の手代、其やうに聲高に云やるな。浪人こそ致せ、身も斧九郎兵衛、貴樣達も又留主をしながら、此やうに跡を取散らして、みだら千萬。鎭まらつしやい〳〵。

皆々　アイ〳〵、これはわしらが惡うござつた。

九郎　ナニ近藤氏、おてまへも又惡いぞや。此やうな上下で、誰れが又貳百疋用足す者があらう。その上に身が方の通を遣はして、この九郎兵衛までに外聞をかゝすやうな事。以後を嗜なまつしやれ。

源四　成る程、さう云はれては一言もござらぬ。誤り入つてござります。

九郎　コリヤ質屋、お身も九郎兵衛が挨拶ぢや。料簡しやれ〳〵。

嘉助　ハイ〳〵、お前樣がさう仰しやれば、私しも立つと申すもの。モシ近藤さま、大きに不調法申し

ました。

丑兵　イカサマ、この男は質屋だけ解つた男だ。その代り今度から、おいらが置く質は、よく貸してもらふぞ。

海山　本尊の不動樣も、二朱の通用だが、あれも壹分付けてもらふぞよ。

丑兵　サア、仲直りだ。〆めろ〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて手を打つ事。

九郎　それでよい〳〵。町人ぢやというて、無理な事云うては跡の爲に惡い。然し、跡の爲といへば、今日は腹切つて忠義を立てた、古傍輩の命日ゆゑ、佛へ手向けようと、コレ〳〵、樒を買つて來たぞ。

源四　アヽ、九郎兵衞どのは芝の濱へ、肴を買ひにござつたではないか。

ト提げ籠を差出す。

九郎　されば、今ゆで立の蛸があつたゆゑ、一杯買つて歸りがけ、次手に樒も買つて戻つたわい。

仁八　ナニ、ゆで蛸と佛へ上げる樒と一緒に。イヤ、物に構はぬお方だわえ。

丑兵　して、九郎兵衞さまは、今日精進かえ。

九郎　エヽ、馬鹿な事を。身共精進はきつい嫌ひ。それぢやによつて、今日も自分に蛸を買うて來た。

酢蛸にして飲まうではあるまいか。

海山　コレ／＼、肴はあつても

皆々　酒はないワ／＼。

仁八　酒は斯うしやせう。わしが持つて來た蕎麥の道具を、古鐵買ひにくらはして、一升取つて來やせう。

九郎　この男としたことが、そりやァおぬしが主人の道具ぢやないか。

仁八　ハテ、どうでお前の内へ貸した蕎麥の代は、未來だと思つたから、内の前をしくじり次手に、この道具を酒にして、お前の内の居候ふサ。

九郎　ハテ、てめえは諦めのよい男だ。

源四　コレ／＼、ぬし達は解らぬ手合ひだ。その酒は源四郎が、内中探して、古兜が有つたから、ぼろ買ひに賣つて、これ／＼、一升取つて置いた。

ト片脇より一升徳利を出す。

九郎　これはしたり、あの兜は大事な品。おてまへ、見附けて賣つたか。アヽ、折角嗜なんでおいたのに、アヽ、身の上の一大事とはなりにけりぢや。ハヽヽヽ。

丑五　ナニお前、兜がいる物か。主の敵は大星が討つてしまふし、戰はなし。賣つてもいゝわな。
九郎　イヤ〳〵、戰の爲ではない。鍋燒の時分に、鍋の代りに不自由だ。
皆々　ハテ、とんだお侍ひだ。
源四　時に質屋、今の上下に何ぞ添へやうが、もちつと貸さねえか。
嘉助　添へ物があれば隨分貸しますぞ。
源四　そんなら何ぞ添へて遣りたいものだが。
　　ト あたりを見廻し
ある〳〵。あの松の木にかゝつて居る、あの蜂の巣を添へて借りよう。
　　ト松の枝にある蜂の巣を取りに行く。九郎兵衞へだてゝ
九郎　これはしたり、身共さへ取らずに置く蜂の巣、惡冗談も程がある。アヽ、手もつけてもらふまい。馬鹿々々しい。
嘉助　左やう〳〵。蜂の巣を質に取る質屋がナニあるものか。
源四　それなら、お馬を自身に乘り出して、番頭を口說いて見よう。
嘉助　それがようございます。ハイ旦那、お暇申します。

ト兩人門口へ出る。

九郎　エヽ、折角酒の工面をして。アヽ、歸つてから飲むがよい。

皆々　待つて居るぞえ。早く歸りねえ。

源四　さうしよう。ドリヤ、行つて來よう。

ト四ツ竹になり、源四郎嘉助向うへ入る。皆々殘り

丑兵　サア〳〵、跡は酒だ〳〵。

仁八　何ぞ買ひ物があらば行つて來ようかえ。

海山　マア、何にしろ法印が、降魔の利劍で蛸を拵らへやうか。

ト指して居る劍で爼板を引寄せ、蛸を拵らへにかゝる。

九郎　アヽ、法印だけに劍で蛸を拵らへるか。イヤ、呆れた不動だ。ハヽヽヽ。

ト唄、時の鐘になり、皆々捨ぜりふよろしく、向うより定九郎、前幕の形にて、思案の體にて出て來り、花道にて表札を見つけ、思ひ入れあつて

定九　すりや、この家が親人の隠れ家。絶えて久しき音信さへも

ト門口へ來り、内を窺ひ

仁八　親仁樣、お宅にござりまするか。

丑兵　誰れだ〳〵……モシ、掛取りが來たさうだ。

九郎　歸してしまへ〳〵。

仁八　イヤ〳〵、歸す事はない。掛取りならば、斷り云うて歸すまでの事。此方へ通しやれ。

定九　サ、此方へ入りなさい。

御免なされまし。

ト内へ入り、思ひ入れあつて

九郎　親仁さま、定九郎めでござります。その後は打絶えました。御堅固の體、喜ばしう存じます。

ア、悴か、久しう便りもせぬが、何と思うて來たのぢや……コレ、あの者がこの九郎兵衞が悴、常から話す定九郎といふ、親とは違うて實體者。誠に鳶が鷹とやら。ア、不意氣な生れサ。

海山　エヽ、此お人が、お話しの御子息どのかえ。

丑兵　モシ、いゝ所へお出でだ。憚り申しやせう。

ト茶碗を出す。定九郎樣子を見て

定九　噂に違はぬ、無法暮しの親仁さま。さりながら、御浪人なされても、昔を忘れぬ御氣質は、海老

九郎　錠おいた鎧櫃の、お嗜なみは又格別。アヽ、この鎧櫃か。鎧はとうに具足屋へ賣つて、殘りの鎧櫃は有つても調法。こりや米櫃にして使ふ。ハヽヽヽ。コレ悴、わりや放蕩にはならぬか。其やうに偏屈では世渡りがならうか。おりや段々と寄る年、氣儘に暮らさいでは樂みもないといふもの。さればこそ、殿の家斷絶の頃も、あの物堅い大星が、心を盡した亡君の敵、師直どのを討つたところが、忠義の武士と云はれたばかりで、命助けようといふ者もなく、四十七人が殘らず切腹。なんとマア、べら坊な話しではないか。

丑兵　そんなものサ。

九郎　サ、さう思うたゆゑに、その相談に一味もせず、不忠者と云はれても、命延はり、人を騙つても飲食するのが、人間の一徳ぢや。これはいつそ貴樣達、待遠でござらう。サ、さしませうか。

海山　マア〱、おてまへより〱。コレ、この蛸は新場かして、素敵に旨いの。

九郎　それは有り難い。然しおれが齒に合へばよいが。

ト茶碗を受け、酒を飲み、鉢を引寄せ、蛸を喰はうとする。定九郎留めて

定九　イヤモシ、親仁さま、今日は忠死を遂げし大星どのはじめ、忠臣義士の面々が、切腹いたせし即ち命日、せめて今日ばかりでも、精進なさるゝお心はござりませぬか。

九郎 古傍輩の命日ゆゑ、この蛸を喰ふなとは、こりやヤイ、そちや若いが、愚痴な事云ふものぢや。昔平家の侍ひは、壇の浦の海中で、蟹になつた例があつて、目鼻の付いた平家蟹。鹽谷の家中が蛸になつたか、ならぬか知らぬが、鹽谷蛸といふは今まで聞かぬワ。八本足のこの蛸に、鹽谷の家中がなるならば、八ッ頭のありといふ、山田の大蛇は何にならうか。

海山 左やう〳〵、八ッ頭なら芋にならう。

丑兵 七面さまは頭が七ツ。

仁八 近江の百足は足が百本。

九郎 親を睨めて鮃になるな。なるなら江戸前。ハヽヽヽ。いかいたわけな。

ト大鉢を引寄せ、蛸を喰ひ、茶碗酒を引かけ

イヤ、又これが何より樂しみ。

ト思ひ入れ。定九郎きつとなつて

定九 その邪まな親仁樣、大恩請けし御主人を、何とも思はぬ傍若無人。それゆゑ世上の口の端に、不義士といへは鹽谷家の、斧九郎兵衞と小兒まで、噂いたすを親仁樣、あなたは御存じござらぬのか。エヽ、見下げ果てた、お前樣はなう。

九郎　なんだ、不義士だ。コリヤ、その不義士とはわれが事。殿の盛んな其うちに、桃の井どの、奥勤め、加古川といふ中老と、親の許さぬ不義はたらき、子までおのれは産ましたと、噂は聞けど今日まで、その女めに逢ひもせず、よし逢ひたりとも他人向き。それでもおのれは親ばかり、不義士とばかり思ひ居るか。エヽ、爰な不孝者めが。

定九　その加古川と不義の科、折を見合せ親人へ、お詫の程と存じ居つたが、モウ今日は是非々々に、お願ひ申して嫁か孫かと、お許し請けんと參りし私し。御立腹は尤もながら、その儀ばかりを今日只今、お許し請けに參りました。親仁樣、定九郎めがお願ひ、聞分けあつて偏に御免を

九郎　エヽ、知らぬわえ。一旦ならぬと云ひ出しては、心の解けぬこの九郎兵衞、重ねて云ふな。聞く耳持たぬぞ。

定九　左樣ござらば是非がない。然らば重ねてこれ程も、申しませぬと云ひたいが、理を非に枉げてお願ひ申す。お聞濟みのないうちは、動かず去らず親の內、貧乏ゆるぎも仕らぬ。是非ともお願ひ申さにやならぬ。不孝の私しこの家に、お置きなされて下さりませ。

九郎　そりやモウわれが氣根次第。居しかつてなりと詫び事いたせ。おれも一旦云ひ出すからは、どう願うても承引せぬ。

定九　然らばこの上親と子が、勿體ないが根くらべ、是非とも叶へてもらひまする。親仁様、御不請ながらお宅の端に、さし置かれて下さりませ。
九郎　女は内へ呼ばねども、勘當もせぬ悴の其方、願ひとあらばいつまでも、この家にあつて詫言いたせ心に叶はぬ其うちは、いつまでなりと
定九　お邪魔いとはず
九郎　親がこの家に
定九　悴の私し
九郎　氣根つよくも
定九　願ひ叶はにや歸りませぬ。
九郎　ハテ、根のよい
定九　親仁さま
九郎　悴。
定九　お邪魔ながらもお宅を暫く。
九郎　ヤア

定九　御拝借願ひまする。

ト唄になり、思ひ入れあつて定九郎奥へ入る。皆々こなしあつて

九郎　見さしつたか。悴ながらも、ハテ、偏屈な。

丑兵　折角工面のこの酒も

海山　滅入つたせるか

三人　しらけました。

九郎　さうとも〳〵。堅い悴を追ひ退けて、これから酒ぢや。

仁八　酌をしませう。

九郎　ドリヤ、飲み直して

ト茶碗を差出す。この時向うにて

作助　上使。

ト呼ぶ。皆々愕りして

三人　なんだ上使だ……モシ、酒でも賣りに來たのかな。

九郎　待ちやれ、上使といふは武家の玄關へ來る筈ぢやが、以前は武士でも陪臣の、殊に浪人斧九郎兵

衞、町家住居へ上使の知らせ。マア、何にしろ支度いたして。コレ、貴樣達も、上使なら出迎ひを

三人　モシ〳〵、こんな形でもよからうかの。

九郎　それには今の古上下、質屋の貸さぬ代物なれども、いはゞ上下、腐つても鯛、それなりと引かけて

三人　呑みこみました。この上下で

九郎　出迎ひ賴む。ドリヤ、支度して來ようか。

ト唄になり、九郎兵衞奥へ入る。三人めい〳〵上下を取つて付ける。

丑兵　なんだ。こりやア誠に布巾にもならぬ麻上下。

海山　この形には相應だ。

仁八　擔ぎは誠に初めて着る、とんだ袴着だ。

三人　ハヽヽヽ。

ト入相の鐘になり、三人上下を着る事。仁八、暖簾口より行燈を出して灯す。また向うにて

伴助　上使。

ト呼ぶ。大鼓謠になり、向うより島五郎、六太夫、前幕の形にて出で來り、跡より伴助、草履を摑み出で來り、花道にて六太夫指圖する。伴助心得、先へ拔けて門口へ來り

上使。

ト また呼ぶ。内の三人悩りして

海山　エヽ、やかましい。また上使か。

仁八　先刻からその支度をして居るワ。騒々しい。

丑兵　コレ、さう云つては物に間違ひが出來る。おれがいゝやうに、こぢつけるから退いて居さつし。

ト 先へ出て門口の簀戸を明け

御上使これへ。

三人　お通りありませう……芝居のやうだ。

ト 笑ふ。鳥五郎、六太夫へ囁く。よろしくあつて

鳥五　上使でござれば罷り通る。

ト 太鼓謠の切れにて三人内へ入り、皆々の形を見て肝を潰し、小氣味わるく、うぢ〳〵して居る。

丑兵　コレ〳〵、御上使、上使といふものは、ずつと上座へ通るものだ。それにまご〳〵して居るは、上使馴れぬのか。なぜ上座へ通らぬ。

海山　サア〳〵、上座へ通つてもらはう〳〵。上座とは、ズツと向うの事だ。

仁八　行かずばおいら達が、引摺つて連れて行かうか。
三人　挨拶をさつしやいなく。
ト立ちかゝる。上使の三人恂りして
六太　ア、、コレく、上座いたすく。サ、若殿、上座なされませ。
島五　致さいで。上座は存じ居るが、餘り出迎ひが
三人　出迎ひがどうしました。
島五　イヤく、どうも致さぬ。上使でござれば上座いたすぞ。
六太　拙者も上座いたしまするぞ。
伴助　旦那、わしも上座いたしませうか。
六太　たわけづらめ。折助が上座になるものか。そこらに居ろ。
伴助　ハイく。
ト兩人上座へ通り、思ひ入れあつて
島五　コレ、出迎ひの衆、床几を借用いたさう。
三人　よくいろくな事を云ふ。

トそこらを尋ねて、踏臺と酒の空樽を見付け、持つて來り
サア、ズツと低いが、これでもなされ。

二人　承知々々、然らばこれへ。

ト腰を掛ける。

丑兵　モシ〳〵、御上使様とやら、用があらばあるやうに

三人　云ひ出して下さりませ。

六太　サ、その上使の趣きは。

島五　この家の主、斧九郎兵衛へ申し聞かしたいが、その九郎兵衛は他行かな。

三人　イヽヤ、主は奥に。

トこの時奥にて

九郎　その御請けは九郎兵衛め、それへ參つてお目見得仕りませう。

ト合ひ方になり、九郎兵衛、麻上下に着替へ出て來り、よき所に住ひ、思ひ入れあつて

これは〳〵、存じよりませぬ。陪臣と申し、殊に浪人、町家住居の斧九郎兵衛、見苦しきこの閑居へ、お越しなされし御兩所さま、憚りながら御家名が、承はりたう存じまする。

島五　ムウ、鹽谷浪人斧九郎兵衛と申すは其方か。コリヤ、山名家より高野家へ、養子に罷り越したる島五郎と申す者。親師直存生で居られなば、なんの陪臣風情……と申すところぢやが、何を申すも手前どもも浪人同然、それゆゑ罷り越した。且は物事早く解るやうにと、親の山名どのとも口談の上参つた。ハテ、其方が斧九郎兵衛か。初めて逢うたな。

六太　イヤサ、斧氏、身共ことは、若殿島五郎どの、近習役を勤むる種ケ島六太夫と申す者。主人はいまだ若年ゆゑ、介添に参つた。以後は見知つて下されいサ。

九郎　これは〳〵、あなたが高野家へ、御養子にお出でなされし島五郎さま、其許は種ケ島六太夫どの、ようぞや御入來して、陪臣の拙者が宅へ、恐れ多くも上使とはな。

島五　申し渡す一條、餘の儀でない。今朝未明禪覺寺に於て、高野鹽谷兩家の寶、持參いたしたその上にて、家名再興ある條、武將よりの御下知。然るところ鹽谷縫之助、家の寶花筐の短刀、持參のところ、其方が悴定九郎、その時禪覺寺にあつて、今日その短刀を失ひしとの事。家來の越度は主人の科、縫之助へ掛りしところ、石堂數馬之助が計らひにて、その科は定九郎と事極り、直さま切腹のところなれども、寺院と申し據ろなく、親九郎兵衛がこの宅へ罷り越させたは、親山名が情の計らひ。

六太　科の次第は右の通り。短刀失ひし斧定九郎、この家に於て切腹いたさせ、見屆け歸れと主人の指圖。わざ／＼參つた。斧氏、上使の趣き斯くの通り、急ぎ悴の定九郎、腹を切らせる用意をさつしやい。

九郎　すりや悴めが鹽谷家の、短刀紛失をその身に引受け

島五　切腹の願ひ聞屆けたる上は

六太　きり／＼腹を切らさつしやい。九郎兵衞どの。

九郎　成る程、左樣ござらば悴めに、この所にて親九郎兵衞、勸めて腹を切らせませう、と申したらよからうが、そりや罷り成らぬ。アヽ、九郎兵衞め、不承知でござる。

島六　ナニ不承知だ。そりや又なぜ／＼。

九郎　ハテ、よく考へて見さつしやい。主人鹽谷の家は退轉。その敵を討たんが爲め、師直どのを夜討にせんと、企てた由良之助、その義士の中へさへ、一味せぬ九郎兵衞は、主人は格別、親の跡が立てたいゆゑ。不義士となつたばつかりに、拙者も悴もお祟りなく、浪人しても命を全う。それに今更主人の弟、縫之助どのが科を引請け、切腹もすさまじい。悴は何と申さうとも、實の親の九郎兵衞は罷り成らぬ、一人の悴に腹切れと、上使に來る呆痴の始り。身共は今では浪人の、鹽谷の家から知行も取らぬ。親がそれなら悴とてその通り。此よしを山名殿へ、きり／＼歸つて返答

さつしやい。イヽ馬鹿〳〵しい。たわけた事を。

島五　ヤア、云はせて置けば過言な老ぼれ。

六太　役目の某し、其まゝにして歸らうか。

伴助　親仁が承引いたさずば、踏ん込んであの定九郎を、この下郎めが。

ト一腰をひねくり、思ひ入れある。

海山　折助め、じたばたするな。

丑兵　おいらも近所で念頃の、内の息子に腹を切らせるものか。

仁八　大きな間拔けだ。ハヽヽヽ。

島五　ヤア、過言な奴の彼奴らに構はず、九郎兵衞を

六太　主人の屋敷へ引立て、この場の雜言、御前に於て。

ト九郎兵衞へかゝる立廻り。伴助寄るを三人引付け居る。この時奥より定九郎、塗り三方の上へ腹切り刀をのせ持ち、ヅカ〳〵と出てこの中へ入る。九郎兵衞見て思ひ入れ。定九郎留めて

定九　親人、不禮なさるゝな。

九郎　ヤア、悴が身は主なしの素浪人、どなたこなたの容赦はない。上使の二人を追ひ歸して

ト立ちかゝる。

島六　ヤア、無禮千萬。

ト寄るを定九郎留める。皆々立ちかゝるを定九郎へだてゝ、持つたる三方を下へ置き、皆々を留めるはずみに、上着袴ぬけて白の形、水上下になる。皆々見て

島五　ヤ、定九郎が

皆々　この形は。

九郎　さては悴は疾よりも、覺悟極めて參つたか。

定九　先程主人の身に代ると、詞つがうて參りしも、末期に及んで今一目、親人さまに逢ひたい願ひ。其うち着込み白小袖、無紋の上下死裝束、御上使さま、親どもが何と申さうとも、死ぬる拙者が承知の上は、お氣遣ひなう、切腹の御見屆け下さらば、有り難う存じまする。

島五　その筈の事。用意がよくば

定九　ハッ。

九郎　すりや悴にはこの親が、彼ほど云ふをも聞分けなく

定九　主人の御舍弟縫之助さま、あなたの越度を身に引受け、切腹いたして鹽谷のお家を、再び立てた

い拙者が存念。親仁さま、先立ちまするも主人のお爲と、御容赦の程、偏へに願ひあげまする。

ト思ひ入れ。九郎兵衞こなしあつて

九郎 是非がない。これ程まで云ひ聞かすに聞分けなく、現在一人の親を捨て、呆痴な主に見返る悴め日本一の阿房の鏡。親の心を無にするたわけ、腹を切るとも、くたばるとも勝手にしおれ。おのれが腹の切やうを、親がこれにて見物する。コレ皆の者、其うち酒だ。サ、爰へ來い／＼。

海山 そんなら爰で、腹切り見物いたすのか。

丑兵 見る物多きその中に、腹切りを見物。

三人 始めていたす。

九郎 コリヤ悴、未練の死ざま働いて、笑ひ草になるな。

ト九郎兵衞始め三人付いて二重へ上がり、酒盛りする。

定九 聞分けあつて拙者も滿足、只この上は御兩所へ、一ツのお願ひ。何卒失せし短刀の、縫之助さま尋ね出さば、御沙汰ござつて五千貫の、その御知行は何卒異議なく、下し置れて鹽谷のお家を

ト思ひ入れ。島五郎聞いて後を向く、定九郎こなしあつて

ア、、彼様申すも未練の至り。たとへ死んでも魂魄殘り、彼の楠木が云ひし如く、生替り死替り、

お主のお家を引起さいで

ト思ひ入れあつて、きつと氣を替へ

南無阿彌陀佛。

ト腹切り刀へ手をかける。

九郎　コリヤ、悴、待て〳〵。

定九　なぜお留めなされまする。

九郎　疊が血になる。

定九　エヽ。

九郎　表替へして間のない疊、血で穢されては跡で迷惑。コレ〳〵貴樣達、奥の疊を取出して、腹切る下へ敷いて下さい。

三人　心得ました。

ト誂らへの合ひ方になり、捨ぜりふにて奥より疊一疊釣つて來り、よき所へ裏返して敷く。此うち向うより女乘り物一挺、中間一人付いて來り、門口へ乘り物を置き、中間陸尺は下手へ入る。九郎兵衞以前の椽を取つて

九郎　幸ひ買つて來た樒、悴が腹切る一本花。コレ、必ず古疊の上で切りませうぞ。血に穢されてたまるものか。

ト疊の四方へ樒をさし込む。定九郎この上へ坐り

定九　親仁樣のお手づから下さる花は、あの世へ土産、有り難う存じまする。

島六　いらざるくり言、きり〳〵腹を

定九　承知いたした。

ト定九郎短刀を取上げ、九郎兵衞の樣子に目を付ける。心引見てスワと云はゞ檢死を切らん樣子。九郎兵衞は、定九郎が誠腹切るか僞りならんとこの體を見屆け、これも同じく檢死を切つて定九郎を助けんといふ心にて目を付ける。定九郎短刀を持ちかへる。この時駕籠の内よりおりん、かゝへ帶、丸綿の形にて出て門口に窺つて居る。

お見屆け下さりませう。

ト腹へ突き立てようとする。

りん　待つた〳〵、こちの人、御生害、暫くおとゞまり下さりませ。モシ、私しでござりまする。

ト門口の外より云ひながら内へ入る。定九郎見て

定九　ヤヽ、そちや加古川が召仕ひの……イヤ、身が女房の加古川、定めて樣子は聞いたであらう。

りん　ハイ、樣子承りまして、お許しもなき此お宅へ、加古川さまの……アイヤ、あなたと深う云ひ交し、子仲まであるわたしは加古川、ナ、モシ、親御さまのお氣に叶はぬわたしが、顏押拭うて參りましたも、あなたの樣子を聞くと其まゝ、驚きまして召仕ひの……イヤ、召仕ひも連れる隙なく、走り來る間の足も定めず。モシ、わたしやアノお前の女房でござります。今際のきはに、どうぞ別れを

トいろ〳〵と云ひ廻して思ひ入れ。定九郎呑みこむこなし。九郎兵衞これに心を付ける事。

定九　申すに違はず、そちや某と、親の許さぬ不義の科。これまで親人お逢ひなされぬ加古川、未練なる願ひながら、彼れめをあなたの嫁なるぞと、お詞下したまはらば、相果てまする末期に及び、心の安堵、この儀をひたすら願はしう存じまする。

九郎　イカサマ、今日まではこの親も、固意地を云うて居たが、今死際に悴が願ひ、聞屆けて遣はさうが併し其方が死んだ跡で、あの女や出來た餓鬼まで厄介は御免ぢや。その世話はせぬぞ。それ承知なら逢うて遣らうワ。

定九　有り難う存じまする……聞いたか加古川、親仁さまのお心もほぐれし、身共も滿足。サヽ、これへ

參つて

りん　アイ〳〵、わたしが爲には舅御樣、お側へ參つて心置きなう。

ト内へ通るを、兩人思ひ入れあつて

島五　コリヤ、待て〳〵。たとへ由緣の者なりとも、今切腹のこの席へ、緣ある者は猶以て、叶はぬ事だ……といふ所だが、六太夫、女の事だ、苦しうあるまい。

六太　左やう〳〵。男は決してなりませぬが、女はお通しなされても、苦しうはござりませぬ。拙者などは至つて女が……アイヤ、嫌ひでござるが、腹切りの節は、まゝあるならひでござりまする。

島五　さうぢや〳〵、ずつと、近う參れ。身が側へ參れ〳〵。

九郎　コリヤ、御上使には情のお詞。コリヤ女、忰も必ず、疎かに思ふな。今まではこの親は、隱し妻に子まである事、聞いたばかりで七年あまり、打捨て置いたが、いはゞ今日が暇乞ひぢや。嫁舅ぢやと申してくれう。また親が見る前、今際の祝言いたさせくれうぞ。

定九　すりや、親人の見らるゝ前にて

りん　夫婦の杯いたすとは、エヽ、有り難うござりまする。

九郎　それにつけても御檢使の手前……ハッ、お聞きの通りこの所にて、未來の土産、夫婦の杯、何

卒御両所のお情にて、杯の間暫時御容赦。

島五　こりやよからう。杯事とは羨ましい。酒よからう、この山名……サ、今は高野の島五郎、お合ひ致さうと云ひたいが、そりやアならぬ。上を恐れぬ何のたは言。

六太　祝言などとは以ての外。ならぬぞ／＼。

九郎　ならぬとあれば是非がない。老の願ひの叶はぬ上は、刀にかけてもこの儀を只管、眞劍づくにてお願ひ申す。

ト刀を引提げ立ちかゝる。両人驚き、思ひ入れあつて

両人　アヽコレ、そんなら勝手に杯させやれ。

九郎　それにて安堵。コレ、貴樣達、酌を頼むぞ。

北兵　呑みこみました。ドリヤ、わしが酌を

ト茶碗徳利を持ちゆき、定九郎の前へ置く。

九郎　アヽコレ、祝言の杯は、女の方からさすが格式。さりながら、この杯は暇乞ひと祝言を、一ツに交ぜた事なれば、こりや逆にして伜の方から、女へさゝずば誠の加古川。

定九　エ。



ト目を付ける。九郎兵衞、似せ加古川と察し

九郎　サ、誠の加古川ナ、親が誠の嫁の加古川、取持つ杯、其方始めて。

定九　然らば拙者が。

ト茶碗を取る

丑兵　一ッつぎやす。

ト酌をする。定九郎飲んで

定九　逆さに廻すも今際の祝言。

トおりんへさす。おりん取上げて思ひ入れあり

りん　有り難うござりまする、ならう事ならこの祝言、病氣でお出での加古川さまに

定九　アコレ、それゆゑ逆さに男の方から、さす杯も心あつての、ナ……コレ、めでたう一つ。

トおりん取上げる。丑兵衞酌して、おりん飮んで

りん　して、この杯は。

九郎　矢張り悴へ。

りん　ハイ。

ト定九郎へ戻す。

定九　これが納めの

ト又取つて一ツ受け、ぐつと飲む。九郎兵衛思ひ入れ。

九郎　今はの際の忰が杯、この親がもらはう。

定九　それは憚り。然らば親人。

トさす。九郎兵衛とつて

九郎　子を先だてるも、これも浮世の

ト丑兵衛酌する。ぐつと飲み

これは忰へ返杯いたす。

定九　有り難うござりまする。

六太　杯濟めば、きりく腹を

兩人　切つてしまへ。

定九　お見屆け下さりませう。

六太　然らば介錯。

九郎　用意はよいか。

定九　云ふにや及ぶ。

ト短刀を腹へ突き立てようとして、側へ詰め寄つて居る、六太夫の足を掻いてのめらす。

島五　おのれ、手向ひか。

ト入れ替つて定九郎へ切つて行くを、定九郎、持つたる短刀を島五郎へ投げつける。これにて「アツ」と倒れる。また來る六太夫の刀を拔いて兩人を切り倒す。この體を見て丑兵衞、海山「ワツ」というて奥へ走り入る。伴助驚き、駈け寄るを、おりんさゝゆる。立廻りにて、おりんの衣裳、綿ばうし脱げて、下女の形になる。定九郎、伴助を見事に切つて捨てる。九郎兵衞思ひ入れあつて

九郎　悴、出かした。

ト寄るを三方へ短刀をのせ、九郎兵衞が目先へ突付け

定九　親仁樣、御用意よくば。

九郎　上使を切つたその上にて、親が目先へこの短刀。

定九　お腹なされて下さりませ。

九郎　ヤヽ、なんと。

ト替つた合ひ方になり、兩人きつとなり

親に生害すゝむるは、酒興なしたか定九郎。

定九　イヽヤ酒興も仕らぬ。

りん　酒興なされぬお心にて、なぜ又親御へ腹切り刀はさしつけた。

九郎　腹切り刀はさしつけた。

定九　その申し譯は後しての事。御生害なき前方に、あなたに望む一品あり、外でもござらぬ、斧家の秘書。

九郎　すりやこさふきの忍びの一卷。

定九　いかにも左やう。

九郎　望みとあらば、肌身離さぬ品ながら

ト懷より袱紗包みの一卷を差出す。定九郎取つて開き見て、すた〳〵に引裂き捨てる。

ヤヽ、大切なる家の秘書を、何ゆゑ引裂き捨てたのだ。

定九　似せ物ゆゑに。

九郎　なんと。

定九　誠の一卷、お讓りなされて下さりませ。
九郎　似せも誠も、他にはないわい。
定九　イヽヤござる。誠忍術記せし一卷、悴にまでお包みあるは、身状知れざるあぶれ者の、入込む
この家は一人住み。それゆゑ人の心付かざるやう、お隱しある所は正しく、目つけ置きたる
ト杯に使ひし有り合ふ茶碗を蜂の巢へ打ちつける。蜂の巢割れて一卷落ちる。蜂は飛び去る。
りん　落ちたは正しくこれ一卷。
ト取って定九郎へ渡す。
定九　案に違はぬこの一卷、親仁さま、お讓りなされて下さりませ。
九郎　眼力違はぬ身が悴、讓り與へん、受取れよ。
定九　ハヽア、有り難や。忍術記せしこの一卷、只今受取る上からは、御身の存念、一時に晴らさせ申
さん。親仁樣、悴に代つていさぎよく、お腹なされて下さりませ。
りん　すりや、あなたには狹くよりも
九郎　身が心底を
定九　實の悴の私しまでに、お隱しあるか、お情ない。

トきつと云ふ。これより替つた合ひ方になり

去々年大星親子を始め、四十餘人の義士の輩、亡君の仇敵、師直を討ち亡せしその後は、心惰弱の親人さま、胸中お明しなされぬは、逸物あらんと家を退き、近しき鹽谷の古傍輩、この家の内へ入込ませ、父の胸中探らせしに、拙者が心と一致の心底。さこそあらんと存ぜしところ、俄に山名が計らひにて、高野の寶を武將へ差上げ、家再興を願ふの樣子。おのれ仇ある師直の、國家を立させまじき妨げは、菅家の正筆奪ひ取らんと、存じきつたるその日より、鹽谷の浪人狩り催し、山名の館へ盜賊と、なつて込入るその手段。今日とても兩家の寶、禪覺寺にて御内見はこれ屈竟、奪ひ取らんと心掛けしが、内見の役目といふは、鹽谷に縁者の石堂どのと、聞いて本意なく其まゝに、則を延せしに情なや、縫之助さまの誤りにて、お家の短刀紛失も、これ皆山名が仕業ならんと、同心なしたる近藤氏、忍びに入つて窺ふところ、心得がたき事どもあり、斯る時こそ忍びの術、こさふきの一卷を、申し請けんと存ずるゆゑ、絶えて久しき親人に、切腹など、の僞り表裏。この一卷の手に入つたるは、孫呉が秘書、六韜三略。一時に山名へ亂入して、高野の寶その上に、正しくお家の短刀も、隱しあらんと存ずるゆゑ、その詮議なさんが爲。それゆゑ斯くの次第でござります。

九郎　すりや、悴には疾くよりも

定九　心にもなき事ながら、お主の爲と高野の寶、手に入れん其ために

りん　さてはあなたは侍ひの

定九　切取り強盜、武士の常。

九郎　この加古川も似せ物と、目を付け置きしに下ざまの、水仕の姿は、して又素性は。

りん　お察しありしに違ひなう、私しことは加古川さまの、お部屋に勤めし水仕の女、りんと申せし蓮葉者。加古川さまは御病氣、その名代は親御樣の、御存生のうち祝言の、杯事して嫁舅の、名乘り合ひが濟むならば、今にも知れぬ加古川さま、斯やう／＼と申しなば、御病氣御快氣あらうかと、御子息さまにお願ひ申し、加古川さまのお名を騙り、山出し下女が猿智慧に、僞り申したその荒増し。旦那樣、御免なされて下さりませ。

九郎　さこそと推察なしたる某、まつた悴は菩提所にて、縫之助さま寶の越度、滿座の中にて山名が我まゝ。殊には主人の身の科を、其方引受け切腹の願ひを立て、家に歸つて來りしは、敵の緣者の島五郎を、打捨てたその跡で、この親に自殺させ、不義士の汚名を消させんと、又二ツには親と別れの杯を願はんため、二道掛けた其方が心底、なんと違ひはあるまいがな。

定九　流石は親人、驚き入つたる御眼力、殊に御身は大星に、一味なされぬ不忠の武士、人の嘲り譏りをも、おいとひなきも忠義の一ツ。

九郎　義士の面々かたらうて、高野の館へ込入つて、身は鐵石とかたまれど、先も名におふ高野の家、手だれの者もあらんは治定、萬一仕損じ討死なすか、又は本望とげざる以前、搦め捕らるゝものならば、それまで盡す千辛萬苦も、一時に空しく水の泡。それゆゑ我れは卑怯にも命延はり、義士の成行き見屆けて、すは師直を討洩らせしと聞くならば、後詰めに扣へて本望をと、思ひの外、世に類ひなき立派なる仇討、武士の鏡と世上の風聞。我れは空しくこの年月、本意にあらぬ不義士の汚名。

りん　不忠が卽ち忠義に增る親人のお心、その御方とも知らずして、不義士といへば世の人が、九郎兵衞ならでなきやうに、お噂を申しますのが、おいとしう存じます。

九郎　悴が心底見屆ける上からは、其方に遣はす一品あり。

ト合ひ方になり、九郎兵衞立つて古鏡を取つて來り、懷より短冊を出し、定九郎の前へ置き

この鏡こそ其方が、産の母の筐にて、いはゞ女の魂が、賣り殘つたも今日爰で、盡せぬ緣の親子三人、今こそ揃うて對面なせ。

ト定九郎、鏡を取上げ

定九　すりや、これが母人のお筐でござりまするか。おなつかしう存じまする。

ト鏡の面をきつと見て

子は親に似るなるものを松山の、戀しき時は鏡をぞ見る。

九郎　さほど二親戀しくば、今日あつて明日なき九郎兵衞、我が亡き跡にて短冊の、長短二句を連續させよ。

定九　ナニ、この短册を……「いとかく今日をおしまざらまじ」

九郎　その上の句の短册は、高野の家中垣坂氏へ、養子に遣はす其方が兄、二人は双子の兄弟なるワ。

定九　すりや、高野の家中に拙者が實の

九郎　兄は不通に高野の家中、作左衞門へ遣はす砌り、後して兄弟めぐり逢ふ、證據にならんと今の詠歌、上下分けて劍に添へ、養子に遣はす兄三平。まだ幼年のその砌り、子供喧嘩に相手を殺め、國を拂はれ追放と、聞いたばかりに今日まで、行くへ知れざる悴が親、垣坂氏にも妹誕生、養父は程なく病死と聞き、いま改めてこの親が、兄弟證據のその爲に。汝にくるゝその短册。

定九　お心ありげなこの短册、歌を證據に、別れし兄に

九郎　巡り逢ひなばこの親が、成行き語れよ定九郎。さはさりながら大家の屋敷、込入る人數の手當はありや。

定九　それぞ親人常々に、招ぎ置かれし不義士の輩。

九郎　その數およそ四十六人。

定九　皆某が手下に隨ひ

りん　さては世にいふ盜賊の、その名も矢張り斧氏と

定九　イヽヤ鹽谷の素浪人、非義非道ぞと沙汰あらば、これ亡君の御恥辱。それゆゑ暫く假名して、賊と義士とは替れども

九郎　忠死なしたる大星が、その名を揚げし例にならひ

定九　今よりしては

トきつと空を見る。この時誂らへの鳴り物になり、空より星大分顯るゝ。

ハテ心得ぬ。大星天に渡るは、急兵のしるし、天下にとつては兵火の凶瑞。さりながら、この身にとつては卽ち吉瑞。星の一字を名によんで

九郎　曉かけて寶の詮議。

ト定九郎思ひ入れあつて

定九　その曉とは好き吉事。傳へ聞く漢の名將起りし時

りん　五星、國に現はれ、忽ち楚國を亡ぼすと聞く。

定九　然らば五星を我が名に呼び、曉星五郎と改名して、富貴の家々大小名、寶詮議は差當る、山名の館へ亂入の、今より賊の張本人、寶取り得て鹽谷の家國、引起さんは目の當り。アラ〳〵、喜ばしやなア。

九郎　嬉しやそれにて身も安堵、心置きなう寶の詮議。跡に心を殘させぬ、門出は卽はち

ト三方引寄せ、白刃を腹へ突き立てる。

りん　ヤヽ、親御さまには御切腹。

ト駈寄つて介抱する。

定九　跡は拙者がこの身に引受け

九郎　不義士の汚名を斷ち切る切腹。

定九　使者の兩人手にかければ、猶豫ならざる今宵のうち、山名の館へ直さま亂入。

九郎　併し相手は大家の山名。

りん　もしや手だれの者あつて

九郎　手におまるその時は

定九　敵の枝葉を絶すには

　ト思ひ入れあつて、下の松の木をきつと見て、拔打ちに枝を切り落し

まツこの通り。

　ト切り枝を九郎兵衞の目先へ差出す。

九郎　見事。

　ト喜ぶ思ひ入れ。

定九　一挺の弓の勢ひたり、東南西北の敵を安く

九郎　亡ぼせ悴。

定九　いふにや及ぶ。

　トきつとなる。この時祠の鈴、ぐわら〳〵と鳴る。

りん　小宮にかけし鈴の音は

　ト宮の内より源四郎、忍びの形にて出て

源四 首尾は上首尾。

ト藪の内物音して

皆々 お頭、めでたう。

ト龕燈を差出す。おりん門口を明け、表を窺ふ。雀大分飛ぶ。

定九 ヤレ音高し。

ト左右を制す。おりんは門口をしめる。九郎兵衛は前へへたる。此とたん木の頭。

秘すべし〳〵。

トこなし。皆々よろしく合ひ方時の鐘にて

ひやうし 幕

本舞臺、正面朱塗りの門先、左右白壁の塀、見越しの松。すべて山名屋敷の體。時の鐘にて幕明く。

ト下手と向うより吉例の仕出し、夜そば賣り按摩、玉子賣り、いろ〳〵の仕出し行き違ひ、捨ぜりふにて下手と向うへ入る。本釣り鐘誂らへの合ひ方になり、向うより定九郎、黒の忍び頭巾、野袴ぶつさき羽織、重ねわらんぢ、大小にて、誂への龕燈を照らし、跡より源四郎、奥野、小山田、磯上、川村、望月、玉蟲、外村、大沼、岡村、伊藤、大熊、入間丑兵衛、外に四人ほど何れも忍び頭巾、黒具、丸ぐ

け、黑股引、手甲、垂れわらんぢ、盜人の拵らへにて、鋸もぢりの類を腰に差し、一本差し、龕燈を
持ち並よく出で來り、花道に居並び

定九　いかに方々、我れ持ち傳へたるこさふきの一卷、手に入りし上からは、たとへ堅固の城廓にても、忍び込むこと心の儘。自然さゝゆる者あるとも、人命斷たざる一味の心體。斯く申す曉星五郎を始めとして。我れに隨ふ賊徒の面々、必ず麁忽なきやうに、我が采配に從はれよ。

源四　いかにも仰せの如く、不義士と沙汰させ身をやつし、事を計る某は、近藤源四郎兼次。

奥野　奥野左仲太。

小山　小山田源吾。

磯上　磯上郷助。

川村　川村傳藏。

望月　望月雲八。

玉蟲　玉蟲市平。

外村　外村源内。

大沼　大沼權右衛門。

岡村　岡村杢平。

伊藤　伊藤五平太。

大熊　大熊官藏。

丑兵　入間丑兵衞、みな大星由良之助が、後詰めに殘りし

皆々　鹽谷の浪人。

定九　この星五郎に一味の輩、その勢四十餘人の賊、金銀衣服に目なかけそ。取得る品は一軸、短刀。

　必らずともに

皆々　心得ました。

　ト矢張り鳴り物にて皆々舞臺へ來り、殘らず裏向きになり、龕燈にて屋敷の樣子を見る事。門內にては夜廻りの拍子木、八ツを打つ。岡村、伊藤、誂らへの繩梯子をば塀へかける。川村、大熊、梯子を傳ひ內へ入る。內には夜廻りの聲にて

夜廻　狼藉もの。泥坊々々。

　ト呼び立て、夜廻りの音する。直ぐに呼子の笛を吹く。內より門を開き、番の侍ひを縛り、大熊、川村、忍び入れといふ思ひ入れ。皆々心得門內へ入る。內にて早拍子木を打つ。

侍ひ　盗人入りしぞ。方々油斷あるな。泥坊々々。

ト呼び立て、アリヤ〳〵の聲、門内より侍ひ中間走り出て

大勢　盗賊でござるぞ〳〵。

ト立騒いで入る。これより早太鼓になり、源四郎走り出る。跡より侍ひ二人、槍を持ち、源四郎へ突いてかゝる。立廻りあつて一人を見事に切る。これを見て一人は逃げて入る。源四郎追駈け入る。知らせにつき道具廻る。

本舞臺、正面、緣側付きの二重、障子立て切り、奥座敷の體。上の方、柴垣、石の手水鉢、石燈籠、植込み右の道具納まる。

ト矢張り早太鼓「アリヤ〳〵」の聲にて、傳次、大わらは、拔刀。大熊、川村、外村、大沼、四人を相手にして立廻りながら出で來り

傳次　ヤア、心得ざる盗賊ども。何ゆゑあつてかゝる狼藉、

大熊　鹽谷家の失せたる短刀。

川村　正しく當家へ持ち來らん。



大沼　それのみならず高野の寶。
外村　菅家の正筆すみやかに
四人　渡したく。
傳次　その二品を盗みにうせたは、合點のゆかぬ盗賊ども。惡く寄つたら撫切りだぞ。
四人　何を小癪な。

トこれより四人を相手に大立廻り、さまぐあつて下手へ入る。正面の障子を蹴飛ばし、岡村、伊藤、玉蟲、小山田走り出る。次郎左衞門、寢卷の形、一軸の箱を持ち、四人を追つて出で來り、立廻りあつて

次郎　ヤア、合點のゆかぬ盗人ども、金銀衣類に目をかけず、高野の重寶菅家の正筆、預かり居るを存じた奴ら。何ゆゑあつてこの品に、心を掛けるは心得ず。
小山　さてこそ高野が菅家の一軸、それ奪ひ取つて
三人　合點だ。

トかゝるを次郎左衞門、切り立てく立廻りよろしくあつて、四人を追ひ散らし、上の方柴垣の前にて、箱を持つて、手水鉢の水を飲み、息をする。この時垣の内より白刃出て、次郎左衞門を貫く。これ

にて苦み倒るる。誂らへの鳴り物になり、垣を押分けて定九郎、白刃を引提げ窺ひ出て、箱を奪ひ取り、一軸を見る。この時奥より源四郎、丑兵衛、黒装束の人數殘らず出で來り

皆々　お頭。

定九　して、紛失せし鹽谷家の短刀は。

皆々　探しますれど、かいくれ在所は

定九　ハテ殘念な。正しく當家と思ひの外、さては外手へ渡りしか。さはいへ高野の菅家の一軸

皆々　手に入りましたか。

定九　灯をこれへ。

皆々　心得ました。

ト龕燈を見せる。定九郎改め見て

定九　疑ひもなき菅家の正筆。

ト次郎左衛門よろぼひながら

次郎　おのれ盜賊、その一軸を。

トかゝるを定九郎、見事に切り捨てる。

定九　主人の御無念、これで少しは
皆々　出來ました。
定九　コレ。

ト思ひ入れ。これを木の頭。定九郎、につこりとして、白刃を庭先の手拭にて拭ふ。きざみにてよろしく。

幕

四段目　淺草新鳥越の段

役名――下部、與五郎。家主、杢右衛門。鹽谷縫之助。腰元、浮橋。奥女中、加古川。雇ひ婆、おとら。芋賣り、源六。稽古娘、おたき。同、おせん。長屋の女、おろく。佛權兵衛。

本舞臺、正面鼠壁、暖簾口、上の方押入、この上手反古貼りの障子屋體、下の方竈のかゝり、鍋釜手桶水瓶勝手道具一式。いつもの所に門口、誂らへの井戸あり、すべて、新鳥越借家の體。幕の内よりおとら、雇ひ婆アの拵らへにて、七輪に向ひ、藥を煎じて居る。おたき、おせん、小娘にて、塗り桶にて綿を紬ぎ、この側に合長屋のおろく、莨のんで居る。時の鐘、てんつゝにてよろしく幕明く。

ろく　ハテサテ、お長家に居ますから、毎日遊びに參ります。必ず構うて下さりまするな。

とら　取込んで居りますから、お構ひ申しませぬ。一服お上がりなされませ。
たき　モシ、おせんさん、あの鐘は七つでござりますかえ。
せん　爰の與五郎さんは、いつもよりか遲うござんすな。
とら　ほんに、もう日の暮れるに間もあるまい。稽古はそれでしまうて、また明日お出で。
ろく　この子供衆は、よう精が出ますな。それにつけお前は、毎日御苦勞でござりますな。
とら　ハイ、わたしも爰の内に、病人がござりますゆゑ、與五郎さんに賴まれて、參りました雇ひ婆ァ。御病人の介抱さへすれば、外に用がないゆゑ、弟子衆を連れて、綿の稽古して居りますわいの。
ろく　それは御苦勞でございます。爰の御病人も、見ますれば屋敷風の、女中のやうでござりますが、與五郎さんの爲には、何でござりますえ。
とら　サア、わたしも詳しい事は存じませぬが、慥か與五郎さんの爲には、大事の主筋、鹽谷家の浪人定九郎さまとやらのお內儀との事。仔細あつて夫婦別れして、與五郎さんの內へ來てござるとの事でござります。
ろく　與五郎さんも、貧苦の中で、病人を介抱するとは、奇特な事でござります……ほんに、もう日が暮れるさうな。お暇申しませう。

たき　をばさん、わたしも一緒に參じませう。
せん　左樣なら、お師匠さん、また明日。
とら　そんなら又お出で。
三人　御病人を大事に。
とら　どなたも、ようお出でなされました。
トてんつゝ、時の鐘にて三人向うへ入る。下の路地口より源六、古半纏の形にて、芋賣りながら出て來り
源六　芋、芋……モシ、芋のしまひはようござりますか。
とら　今日は皆留守ぢやから、明日の朝來ておくれ。
源六　ハイ〳〵。芋、芋。
トてんつゝ花道へかゝる。向うより與五郎、古浴衣、三尺帶の拵らへにて、傘の古骨買ひの荷物の内へ目籠、子供の手遊び、竹細工の蛇、その外いろ〳〵入れて、擔ぎ出て來り、源六に行合ひ
與五　芋屋さん、今お歸りなされますか。
源六　モシ、古骨屋さん、芋がしまひだ。安くして買つて下さりませ。

與五　しまひなら買はうが、一升いくらだ。

源六　値切りなさんな。ぐつと負けて八十八文サ。

與五　イヤア、そりやァ高い〱。五十に買はう。

源六　ちつと安いが負けて置く。何升あげます。

與五　一升五十の割で十六文下さい。

源六　どうも十六文は賣り憎い。五合買つて下さりまし。

與五　五合買つては否りぢやが、ぐつとはづんで五合買ひませう。その代りに、よく量つて下さいよ。

源六　ハイ〱、畏まりました。

ト芋を量る。與五郎、じろ〱見て

與五　アヽ、コレ〱、それでは量りが悪い〱……。それ〱、其やうに親芋は、御免ぢや〱……此方の方に腐つたのがある、取替へて下され。

ト兩人此うち捨ぜりふよろしく、五合升に芋を量り出して

源六　サア、入れ物を出して下されまし。

與五　その入れ物は、どうしたものであらう。

ト荷の中より笊を出し

芋屋さん、爰へ下さりませ……ソリヤ、錢よ。

ト錢を渡す。

源六　ハイ、有り難うござります。又お願ひ申します。

與五　ドリヤ、これから芋で樂しみませう。

トてんつゝにて、源六は芋を呼びながら向うへ入る。與五郎舞臺へ來り

おとらどの、いま戻りました。

とら　オヽ、與五郎さま、今お歸りか。嘸お草臥れでござりませう。

與五　イヤモウ、わしは馴れた商賣ゆゑ、さのみ苦勞にもなりませぬが、時に御病人様は、今日はどうでござりました。

とら　御病人様も、今日はいつもよりは、鹽梅がよいかして、今もすや／＼と寢てござる樣子。

與五　それは重疊々々。お起し申すもいかゞ。矢張り其まゝ寢かして

ト云ひながら荷物を内へ取入れ、件の芋を桶へ打明ける。

とら　お前も時分であらう、夜食になされませぬか。

與五　わしは今歸りがけに、芋を買つて來たれば、ゆるりと煮て喰ひます。お前は早う歸つて休息さつしやりませ。

とら　お前が戻れば、御病人も心強いといふもの。そんならわしは歸りまして、また明日參じませう。

與五　モシ〳〵お前、歸るなら、わしが着て居る浴衣を、洗濯しては下さるまいか。

とら　ハイ〳〵、畏まりました。

ト與五郎着て居る浴衣を脫いで、おとらに渡し、有り合ふ古き襦袢を着て

與五　モシ、裸虫の洗濯、今から洗うて、明日商賣に出られるやうに賴みます。

とら　合點でござんす。左樣なら與五郎さま、また明日參りませう。

ト時の鐘、合ひ方になり、おとら、單物を持ち、向うへ入る。與五郎あと見送つて

與五　モシ、どうぞ明日の朝までに賴みますぞや。まだ袷にも有りつかぬ。早く賴みますぞ……こりやモウ暮れかゝつて來た。油があつたかしらぬ。

ト行燈を出し、火打ち箱にて火を打ち、行燈へ移し

さて、これから芋を拵らへやうか。庖丁は慥か爰らに

ト尋ね見て

人に留主を頼めば、我が內ながら勝手が知れぬ。庖丁が見へぬか。よし〳〵、爰に好いものがある。

トあたりを見廻し、序幕の脇差を取つて來り

災ひも三年とやら、こりや以前の勤め道具。ドリヤ、芋の料理にかゝりませう。

ト唄になる。時の鐘、與五郎、芋を拵らへかゝる。此うち向うより縫之助、絹やつし、着流し、一本差しにて、前幕の浮橋の手をとつて出で來り

縫之　コレ〳〵浮橋、其方と此やうにして步くが嬉しさに、うか〳〵とこれまで來たが、爰は何といふ所ぢや。

浮橋　爰は山谷の新鳥越と申す所でござります。定九郎さまの御內寶、仔細あつて疾から居られます。桃の井家の御中老、加古川さまの隱れ家でござります。

縫之　聞き及んで居る加古川が事。定九郎と二人が仲に、芳松といふ子まで生したとの事。いよ〳〵左樣かな。

浮橋　サア、互ひに思ひ合うた仲なれども、お家の騷動より引別れ、今にては召仕ひの與五郎方にて、御病氣との事。

縫之　それを思へば、定めがたなき人の身の上。某とても鹽谷の家を、相續なさんと思へども、家の重器、花筐の短刀を、失ひしゆゑ願ひは叶はず、この身は一生埋れ木同然。縫之助は腰拔け武士と云はれうより、いつそ切腹なして、未來に於て申し譯。

浮橋　その寶の紛失も、元の起りはわたしから。それゆゑあなたのお胤をば、宿せしとあつて兄さまに勘當請けしこの身の上。あなたが其お心なら、わたしも長らへては居りませぬ。どうぞ一緒に未來へ旅立ち。

縫之　そんなら二人、今宵のうちに。

浮橋　さりながら、お世話になつた加古川さまや、與五郎どのにも逢うた上、餘所ながらの暇乞ひ。

縫之　わしも一緒に行きたいが、加古川や與五郎に、逢うてはどうも面目ない。其方が暇乞ひしやる間、跡へ戻つて待つて居るぞや。

浮橋　そんなら少しの間、お待ち遊ばして下さりませ。

縫之　オヽ、よい時分に來て合圖しよう。その時必ず、コレ浮橋。

浮橋　畏まりました。左樣なれば殿樣。

縫之　早う行ておぢや。

ト唄になり、縫之助引返して向うへ入る。浮橋舞臺へ來り

浮橋　ハイ、ちよつとお頼み申しまする〳〵。

與五　誰れか知らぬが、用なら内へ入らつしやりませ。

浮橋　左樣ならお許しなされませ。

ト内へ入る。

與五　女の聲ぢや。誰れぢや知らん。

浮橋　ハイ。浮橋でござります。

與五　ヤレ〳〵、ようござらつしやりました。サ、一服お上がりなされまし。

ト茶、莨盆なぞ出す。

浮橋　モシ〳〵、必ずお構ひなされますな。

與五　時に一人で今時分、どこへござりました。

浮橋　ハイ、そこまで縫之助さまと……イエサ、縫之助さまの御苦勞遊ばすお家の寶、早う知れますやう、又は加古川さまの御本服願ひがてら、觀音樣へ參詣に參じました。

與五　それはお奇特な事でござりまする。お前樣も、その深切があるならば、なんと物は相談ぢやが、

思ひ切つては下さるまいか。

浮橋　思ひ切れとは、そりや何を。

與五　縫之助さまを。

浮橋　エヽ、そりや又なぜでござんすえ。

與五　ハテ知れた事、お前とお二人の仲は、よもや此やうになるまいと思ひの外、縫之助さまはお前の色香に迷ひ、お家の事もどこへやら、その上花筐の短刀まで失うたも、皆お前から起つた事……イヤサ、さうではないが、みな縫之助さまが心得違ひ。大事の寶を紛失させ、今ではあの通りの御身の上。お前もお若いが、女は氏なくて玉の輿とやら、今のうち御料簡なされませ。

浮橋　それぢやといふて、あれ程まで深く云ひかはして、もしや寶の出ぬ時は、二人一緒に死なうとまで

與五　ヤア。

浮橋　サア、どうもその事ばかりは。

與五　ならぬと云はつしやりますか。そりやお心が狭いといふもの。ハテ、縫之助さまばかり男ぢやあるまいし、一旦お二人の仲を遠ざかれば、お世話になつた定九郎さまや、加古川さまへも義理も立つ。爰の道理を聞き分けて、どうぞ思ひ切つて下さりますまいか。

浮橋　事を分けてのお詞なれど、所詮寳の知れぬ時は、生長らへぬわたしら二人……サア、二人が仲を遠ざかり、それでお心が濟む事なら、どうなりと致しますわいなア。

與五　よう云うて下さりました。一旦退いて下さらば、縫之助さまを放埒者と云はせぬやう、世間の譏りを防ぐ道理。又二ツには加古川さまも、御病氣ながら、これをお聞きなされたら、さぞお喜びでござりませう。併しながら、お前樣が思ひ切つても、向うが思ひ切らぬ時は、益ない事。とても事に縫之助さまが、御得心なさるやう、切れ文書いては下さるまいか。

浮橋　サア、それはな。

與五　ハテ、その位に致さぬと、一向譯が立ちませぬ。幸ひ硯箱も爰にあり、ちよつと一筆、お書きなされまし。

ト有り合ふ硯箱を無理に突つける。浮橋これを幸ひに、死ぬる覺悟ゆゑ書置をするといふ思ひ入れにて

浮橋　それならわたしがツイ一筆。

與五　サア〳〵、行燈をよく搔き立つて、其うち、わしは一服下さらうか。

ト時の鐘、合ひ方になり、浮橋、文を書く。與五郎、莨のみ、捨ぜりふあつて

與五　ヤレ〳〵嬉しや。これで縫之助さまは、女にかゝつて現をぬかし、大切な寳を失うたなどゝ、世

の人口を除くといふもの。追付け寶手に入りなば、鹽谷のお家相續。さすれば若旦那定九郎さま御夫婦の忠義も立つといふもの……モシ〳〵、其やうに長たらしく書くには及びませぬ。ツイ一筆、切れますと、書いてやらつしやりませ。

浮橋　イエ〳〵、さうぢやござんせぬ。あなたにも、よう御得心のゆくやうに。

與五　イカサマ、それもさうかえ。そんならとつくり解るやうに、お書きなされませ。

ト此うち浮橋、文を書きしまひ、よく封じて

浮橋　この文を縫之助さまに上げさへすれば、さらりと解るわたしが切れ文。與五郎さん、お前からあなたへ、お上げなされて下さりませ。

與五　オツト、よし〳〵。併し、この切れ文を、縫之助さまが御覽じたら、寶は失ふその上に、女には見放され、やけむちやになつて、お前を殺さうと云はうも知れぬ。お前は奥の納戸へ行つて、隱れてござりませ。

浮橋　左樣ならわたしは。

與五　加古川さまのお床へ行つて

浮橋　お見舞がてらの暇乞ひ。

與五　エ。
浮橋　左樣なら御免なされませ。
ト唄になり、ツイと暖簾口へ入る。
與五　ヤレ〳〵、芋を煮て夜食にしようと思へば、さま〴〵の用が出來た。ドリヤ、これから芋を煮て飯に致さうか。
ト捨ぜりふにて芋を鍋へ入れ、竈を焚きつける。よき時分、てんつゝになり、向うより杢右衛門、家主にて出で來り、直ぐに舞臺へ來て
杢右　與五郎どの、内に居るか。爰明けて下さい〳〵。
ト無性に叩く。
與五　ハイ〳〵、いま明けます〳〵。
ト竈をくべながら戸を明ける。これにて杢右衛門、ひよろ〳〵と内へこけ込み
杢右　オヽ、痛い〳〵。明けるなら明けると、斷つて明けるがよい。すんでの事、怪我をするところであつた。
與五　これはどなたかと思つたら、お家主の杢右衛門さま、何の御用でお出でなされました。

杢右　何の用とは、コレ與五郎、こなた正直者と思つたら、思ひの外に太い人ぢやな。尤も引越して來た月は、家賃も拂うたが、その後は一向寄越さぬ。催促すれば留主ばかり遣つて、逢うた事がない。そこで今夜は仕掛けて來ました。是非とも家賃の勘定、して下さい／＼。

與五　成る程、御尤もではござりまするが、今晩と申しては、此方も難澁。今一兩日、どうぞお待ちなされて下さりませ。

杢右　イヤ／＼、その云ひ譯も、もう喰はぬ／＼。もうこの上は家財かざい、見倒しに賣つて腹癒せをせにやなりませぬ。先づ奥から先へ引立てゝ參りませう。

ト立ちかゝる。與五郎とめて

與五　御尤もでござります。さりながら、一言申し上げたい儀がござります。マア／＼、お待ちなされて下さりませ。

杢右　アヽ、コレ／＼與五郎、こなたの主人が煩らへば、家主に損を掛けても大事ないか。

與五　全くさういふ譯ではござりませぬが。

杢右　そんなら、雨露を凌いだ家賃を、いま拂ふか。

與五　サア、それは。



李右　但し家財を賣り拂ふか。
與五　サア、それは。
李右　與五郎、返事はどうするのだ。
與五　モシ、お家主さま、成る程、御立腹は御尤もでござりまするが、御存じの通り、わしが大恩受けた御主人が、御病氣で御難儀。今は誰れ一人として世話をする者もなければ、私し方へ引取つて、看病はして居ますものゝ、何をいふにも貧乏暮らし、紙屑や傘の古骨買ひ歩き、わづか百か百五十の、儲けの中から藥代。わしはこの頃は、米の飯といふものは、喰つた事もござりませぬ。これもお主が大切さ。爰の道理を聞き分けて、一兩日のところ、お待ちなされて下さりませ。
　　ト この長ぜりふのうち李右衞門、ほろ〳〵泣き出し、愁ひの思ひ入れにて
李右　コレ與五郎、さても〳〵、こなたは忠義な者ぢやなア。今の詞を聞いては、家賃を取る氣は毛頭ござらぬ。この上は、家賃の通はこの通り。
　　ト 帳面を矢立にて消す。
與五　ヤア〳〵、左樣ならお聞濟み下さりますか。有り難うござります。
李右　ヤレ〳〵。正直な人でござる。此やうな心でなければ、忠心者とは云はれますまい。そんなら與

五郎どの、御病人にもよく云つて下さい。こなたの忠義な事も地主へ話して、御褒美を貰うて進ぜませう。

ト云ひ〳〵門口へ出る。

與五　イエ〳〵、それでは冥加が恐ろしうござりまする。

杢右　イヤ〳〵、こなたの樣な忠心者を、此まゝ置いては家主の役が濟まぬ。

與五　左樣なら、よろしうお願ひ申しまする。

杢右　ドリヤ、お暇申しませう。

ト時の鐘、合ひ方になり、杢右衞門向うへ入る。

與五　ヤレ〳〵、世間に人鬼はないと、よく云うたもの。これといふも、お主樣を大事にかけるお庇。エヽ有り難い〳〵。何かに取紛れ、加古川さまの御病氣もお尋ね申さぬ。

ト障子の内を窺ひ

すや〳〵寢てござるさうな。お起し申すも如何。何かはお目が覺めての事。ドリヤ、夜食に致さうか。

ト膳椀を出して、以前の芋を盛り、飯を喰ふことよろしくあつて

ヤア〳〵、この芋はまだ煮へぬらしい。中には石のやうなもあり、焦げ臭いのもある。折角の芋を玉なしにしたわい。

ト捨ぜりふあつて飯を喰ひしまひ、あたり片附け、行燈を拵らへ

まづ、これで腹は大丈夫だ……ヤ、忘れて居た。加古川さまのお藥を、まだ煎じずにあつた。ドリヤ、お藥を煎じようか。

ト七輪へ藥鍋をかけ煎じ居る。時の鐘になり、向うより縫之助、以前の形にて出て來り、あたりへ思ひ入れあつて、窺ひ〳〵門口へ來て

縫之　浮橋は居ぬか〳〵。

ト門口を叩く。與五郎聞耳立て

與五　さういふ聲は、縫之助さまではござりませぬか。

ト門口を明ける。

縫之　オヽ、わがみは與五郎。浮橋はどうしたく〳〵。

與五　縫之助さま、あなたさまの所へ、いま參らうと思つてゐますところでござります。

縫之　そりや何でいの。

與五　マア〳〵、お入りなされませ。

ト　これにて縫之助、内へ入る。上手障子屋體より加古川、病ひ鉢卷、病氣の體にて、障子を明け、縫之助を見て

加古　ナニ、御次男縫之助さま。思ひがけない、爰へはどうして。

縫之　ヤア、其方は加古川。

與五　モシ、加古川さま、縫之助さまは病犬同然、滅多に側へ寄らつしやりまするな。

縫之　イヤモウ、わしが放埒ゆゑ寶の紛失、今更二人の者に、顔を合すも面目ない。

加古　サア、その御放埒にさせまい爲、及ばずながら私しどもゝ、心を痛めて居りまするが、世間の人の口の端に、かゝるあなたの御身持、最前より一間にて、樣子を承はり居りますれば、與五郎が實意にて、一度あなたと浮橋さまの仲を裂き、人の噂を除かん爲に、浮橋さまに退き狀書かせ、與五郎が慥かに持つて居ります筈

縫之　ナニ、浮橋が退き狀書いたとは、ほんまの事か。

與五　お家の爲には換へられませぬ。退き狀書かせ置きましたれども、相手の女中は、疾うにあなたを思ひ切つて居りますゆゑ、あなたもすつぱり思ひ切つてしまはつしやりませ。

縫之　ムウ、すりや今の間に心變りぢやよな。さういふ事とは露知らず、情ある女と思ひ、今までうかうか騙されたが、腹が立つわいの〳〵。

與五　御尤もでござります。

縫之　サヽ、その退き狀、見せい〳〵。

與五　文はこれでござります。

縫之　そんならこれが

加古　早う御覽じませ。

ト縫之助、書面を見て

縫之　何ぢや。「書置の事」

與五　モシ、書置なぞと讀み違へずと、心を鎭めてとつくりと、讀んで御覽じませ。

縫之　ドレ。

ト封を切り

「誠にこれまで加古川さま御夫婦、與五郎どのゝお世話は、海山にも譬へがたなく、有り難く存じ上げまゐらせ候。縫之助さまがこの度の御難儀、元は私しより起りし事なれば、今更御見捨て申し候

うては、女子の義理立ち申さず候、それゆゑ道ならぬ事ながら共々覺悟極めり〳〵」

加古　ヤヽ、そりや退き狀の文體ではない。してその跡は。

縫之　「せめて餘所ながら御暇乞ひと存じ、參り候ふところ、事を分けての御意見ゆゑ、是非に及ばず退き狀と僞り、斯く認めり〳〵、何事も浮世の約束事と思し召しお許しくだされ候やう願ひ上げり〳〵」

加奥　ヤヽヽ。

縫之　日頃の心知りながら、疑つたは惡かつた。この縫之助こそ、大切なる家の寶を失ひ、何面目に存命でゐられう。この場に於て。

ト刀の柄に手をかける。

加古　ソレ、留めや。

與五　モシ、早まつた事なされますな。

ト與五郎、縫之助を留める。この時奥より浮橋出て來り、この體を見て思ひ入れあつて、與五郎が手を刎いたる刀を取り

浮橋　わしも一緒に、南無阿彌陀佛。

縫之　ヤ、其方は浮橋、マア待ちや。

ト縫之助は浮橋を留め、刀を取つて見て

與五　ヤヽ、こりや正しく家の重寶、花筐の短刀。どうしてこれに。

加古　何と仰しやります。私しの刀が、花筐のお短刀とは。

與五　お家の重寶所持する與五郎、さては其方が惡心にて。

縫之　アヽ申し、滅相な。その刀は私しのがらくた丸、この間禪覺寺へお供の時、差して參つてそれからは、たつた今、芋を切るに拔いたばかり、毛頭私しは存じませぬ。

加古　さてはこの間禪覺寺にて、何者の爲にやら奪ひ取られしを、廻りくてこの所へ來りしも、全く佛神の加護、與五郎が存じた事ではない、皆わしが惡いゆゑの事。必ず與五郎を疑うてたもるなや。

與五　すりや、何者やら摺替へしを、與五郎も心付かず、持ち歸りしとや。それなれば、女子の淺い心から、疑うたはわしが惡かつた。堪忍しやく。

加古　すりや、お疑ひは晴れましたか。有り難う存じまする。何は兎もあれお家の重寶、花筐のお短刀

皆々　これぞ花咲く前表ならん。

エヽ、忝い。

ト皆々嬉しきこなし。與五郎思ひ入れあつて

與五　お短刀の知れる上は、お二人さまには、もう死ぬには及びませぬ。

縫之　この上はこの重寶、某が持参なし

與浮　片時も早くお上へ言上。

加古　寶の在所知れたる上は、急くには及びませぬ。殊には夜分と申し、大切な品所持なし、お步行も如何。今宵は爰に御一宿、明けなばお上へ訴へ

與五　鹽谷の家名御相續。

縫之　然らば今宵は、この所に一宿いたさん。それまでは大切なる品、加古川、しかと預け置くぞ。

加古　ハヽ、お家の重器、慥かに守護いたすでござりませう。

ト件の短刀を鞘に納めて思ひ入れ。

與五　イヤ　めでたい〳〵。今にお家は萬々歳。そのお喜び次手に、申し加古川さま。

ト兩人に思ひ入れ。加古川呑みこみ

加古　オヽ、それ〳〵。今宵は爰に御一宿、お二人さまは奥へござつて。

與五　積る話しを花嫁花聟、誰れに遠慮もござりませぬ。むさくろしくとも奥へござつてしつぽりと。

二人　それぢやというて。
　　　ト恥かしき思ひ入れ。
加古　ハテ、御遠慮も事に依る。明日はお家へ歸參の門出。
與五　町の住居も今宵が限り。
浮橋　そんなら殿樣。
縫之　造作にならうか。
加與　御ゆつくりと
縫之　浮橋、來やれ。
　　　ト縫之助浮橋こなしあつて奥へ入る。
加古　先づこれで一つの安堵、明日はわたしも夫にお目にかゝり、この短刀をお手渡し。其方もさぞ草臥れたであらう。早う休息しや。
與五　有り難うござります。あなたには御病中、夜風が染みましては如何。その品を御大切に、ゆるりと御休息なされませ。
加古　さうしませうわいなう。

與五　ドレ、お手を取りませう。

ト加古川を障子屋體の内へ入れて、よろしく此方へ來り

さて〳〵、今夜は怪しからぬ晩だわえ。芋を煮れば邪魔が入つて焦げつく。寢ようとすれば邪魔が入り、今度はもう何事もあるまい。ドリヤ、一寢入りやらかしませうか。

ト與五郎、押入れより天德寺と箱枕を出して寢ろ。時の鐘になり、向うより以前のおとら出て來り

とら　與五郎さんは寢てであらうが、ちよつと起して、さうぢや〳〵。

ト本舞臺へ來り

ハイ、お頼み申します〳〵。

ト門口を叩く。與五郎思ひ入れあつて

與五　イヤ、怪しからぬ晩だわえ。また誰れか來たさうな。誰れだ〳〵。

ト云ひながら起きて門口を明ける。

とら　ハイ、わたしでござります。雇ひ婆アのおとらでござんす。

與五　いま時分何しにござつた。

とら　お前の浴衣を洗濯しようと思つたら、袂から桐唐草の錦の守袋。こりやお前のでござんせうな

ト懐より守を出す。

與五　成る程、これは、おれが子供の時から持つて居る、桐唐草の守袋。

とら　この桐唐草の守袋を、子供の時より持つてござるとあれば、そんならお前は、高野家の惣領御さま。

ト與五郎、思ひ入れあつて

與五　この婆ァは寝ぼけたさうな。とんだ事を云はつしやる。

とら　成る程、御存じないは御尤も。お前は過ぎゆかれし師直さまの、お胤に相違ござりませぬ。

與五　この婆ァ様は、いよ／＼寝ぼけて居るわえ。

とら　ハテ、證據はこの守袋。桐唐草の錦の裂れ、この織物は高野家より外にない錦。中には誕生の書付け、延慶元年四月四日誕生の男子とござります。數へて見れば今年までは三十二年、お前の年も三十二歳、年恰好といひ高頰の痣まで、父御によう似たその面ざし、疑ひもなき高野の御惣領。

與五　成る程、お前の樣子を聞けば、割符の合つた今の話し。さりながら、どうしてこなたは、それをば委しく。

とら　サア、もと私しは高野のお家に腰元奉公、その頃親御師直さま、手廻りの女にお手を付けられ、程

なく懷妊、奧方の御嫉妬強く、是非に及ばずお暇下され、月日重りお前を產み落して、七夜の内に母御は御病死。わたしもその後お暇もらひ、年月經る其うちに、師直さまには去年の騷動。お家も沒落。お前の爲には弟御の島五郎さまも、鹽谷の浪人斧九郎兵衞が爲に、御最期なされたとの事。血筋が絕えたのみならず、高野のお家の重寶紛失、その品の無い時は、高野のお家は一生埋れ木。血筋といふはお前一人。その紛失の正筆を尋ね出して、高野のお家を引起す、御所存はござりませぬか。

與五　ハテ、それはとんだ話しがあるもの。たとへおれが高野の胤にもせよ、その正筆とやらがあるにもせよ、古骨買ひの與五郎が、どうして其やうな事がなりませう。

とら　エヽ、腑甲斐ないそのお心。併しそれも尤も。この間から見て居れば、現在親御の仇敵、鹽谷の家來の定九郎が女房、加古川とやらを隱まひ、忠義を盡すは第一に、親御へ不孝でござりませう。お前樣も、武士の胤ではござりませぬか。口惜しくはござりませぬか。コレサ、物を云はつしやりませ〳〵。人にばかり口を利かせ、エヽ、張合ひのない與五郎さん。去年までは出頭第一、師直さまのお胤でありながら、これ程云つても無念には思し召さぬか。併し、以前は武士の胤でも今では貧しい町人の暮し、氏より育ちとはいふものゝ、サア、此やうに申しまするも、お前を思

ふゆゑの事。どうぞ心を取り直し、高野のお家を引起す、お心はござりませぬか。

ト云つても與五郎、默つてゐるゆゑ

與五　エヽ、これ程云つて聞かせても、物をも云はぬ腰拔け男。この上は、わしが爲にも古主の仇、奥の病人は鹽谷の家來、斧定九郎が女房。あの加古川とやらも敵の身寄り、早う追ひ出すのが、親御へ孝行ではござりませぬか。

與五　成る程、こなたの話しを聞いては、尤ものやうではござるが。

とら　追ひ出す外ござりませぬが、出來ませぬか。

與五　勿體ない、どうしてマア大事のお主様を。

とら　その大事のお主さまが氣にくはぬ。お前さんがその心では、よう追ひ出すまい。わしが行つて、あの女中を

ト立ちかゝるを與五郎留めて

與五　コレ、待たつしやい。わしを其やうに思うて下さる事なら

とら　敵の身寄りを叩き出し、菅家の正筆手に入れて、親御の家名を引起す、御所存でござりますか。

與五　サア、マア、どうなりとしませうが、その時こなたも共々に、ナ……コレ

ト　おとらに囁く。

とら　オヽ、承知だや〳〵。其お心なら、草葉の陰にござる師直さまも、さぞお喜び。そんなら何かは今宵の内に、

與五　吉左右知らせるそれまでに、わしが身許の割れぬやうに。

とら　それも承知。古骨買ひの與五郎と、上べを包む寶の詮議。

與五　そんならおとしい。

とら　必らず和子様。

與五　コレ。

ト押へる。おとら氣を變へ

とら　與五郎さん、明日お目にかゝりませう。

ト時の鐘にて、おとら向うへ入る。與五郎跡見送り

與五　あの婆アめ、明いた儘の出放題に、いろ〳〵な事を吐かし居るゆゑ、騙しては歸したが、又うしやアがらねばよいが。これからもう一遍寝直さうか……ほんに忘れて居た。その前に旦那さまへお藥を上げませう。

ト與五郎、思ひ入れあつて門口を締め、上手の一間を明け、件の短刀へ手をかけるを、この時加古川、その手をチツと取る。與五郎ぎよつと思ひ入れある。

加古　何者ぢや〳〵。この短刀を何と致す。

與五　サ、これは。

ト詰まる。加古川薄明りゆゑ、思ひ入れあつて、よく〳〵見て

加古　ヤア、その聲は與五郎ぢやないか。

ト云ひながら短刀を持つた儘、ツカ〳〵と出て

コレ與五郎、わが身はこの短刀を何としやるのぢや。

與五　サ、これはな。

トもぢ〳〵する。

加古　アヽ聞えた。今までそれとは知らざれども、最前誠の短刀と、聞いて朝夕の活計に迫り、こりや慾心が兆したのぢやな。

與五　サ、それは。

加古　チエヽ、おのれはな。幼い時より舅御の、九郎兵衛さまのお屋敷にて、人となつたる下部の與五

郎。そのお主の難儀となるべき、寶に目をかけるとは、恩を知らぬ人非人めが。

トこれにて與五郎思ひ入れあつて

與五　成る程、その思し召しは御尤もではござりまするが、貧乏すれば現在のお主さまにも、其やうに思はれるが、口惜しうござりますわいの。

加古　でも、この品に、心をかけるではないか。

與五　サア、御料簡違ひでござります。それも物の間違ひ。

加古　とは又なぜに。

與五　サア、その短刀がお手に入りましても、柔弱の縫之助さま、いつぞや禪覺寺にて、浮橋さまと戯むれのうち、佞人の者に摺替へられた程の御氣性。又ぞろ大切な品、途中があつては如何と存じ、今宵密かに定九郎さまへ、お手渡し致さうとした、我が存念でござりまする。

加古　成る程、お身持墮落の縫之助さま、迂濶にお手渡し致せぬ一腰。それは格別、そんなら其方は定九郎さまの、お在家を存じて居るか。

與九　サア、若旦那のお出なさるゝ所を、

加古　存じて居るなら、なぜわたしにも知らせ、同道しては行きやらぬぞいの。

與五　其やうに仰しやるのは御尤もなれど、あなたとお別れなされし後は、お家の騒動、それゆゑにこゝ若旦那には、御大望の事あつて、多くの手下を語らひ、富家を見込んで切取り強盗、以前に變る只今の御身の上。

加古　ヤヽ、すりや夫には切取り強盗とは。ハテ、思ひがけない。ホイ

ト加古川思ひ入れ。

與五　サヽ、あなたがお聞きなされたら、この通り御病氣中と申し、張詰めたお心も弱らうかと、それゆゑ只今まで、あなた樣へは御沙汰なく、この短刀を持つて行かうと、致しましたわたしが誤り。爰の道理をお聞濟みあつて、お免しなされて下さりませ。

加古　成る程、其やうに云やれば、尤ものやうにはあれど、その申し譯はまだ立たぬ。

與五　そりや又なぜでござりまする。

加古　ハテ、仔細あつて別れてござる、夫定九郎どの、わしも久しうお目にかゝらぬゆゑ、戀しう思うて居る夫の在所を、わしに云つて聞かさぬは、其方の不深切といふもの。それぢやに依つて、この申し譯は

與五　立たぬと仰しやれば是非に及びませせぬ。併し殘念なは、今まで盡した忠義も水の泡。この上は下

郎が腹わた、忠か不忠かお目に掛けませう。南無阿彌陀佛。

ト短刀の鞘を抜き拂ひ、腹切らんとする手を留め

加古 コレ、滅多な事をしまいぞ。

與五 イヤ、下部がどん腹を

加古 ハテマア、待ちやいなう。

與五 すりや、お疑ひは晴れましたか。

加古 いかにも、その心なら我が夫の、お出でなされし所を、云うて聞かしや。

與五 あなたがお案じなさるゝと察し、今まで申し上げませぬ。困難にお暮らし遊ばす若旦那、今は葛飾のあたりに、密かにお暮らしでござりまする。

加古 嬉しや、それ聞いて一ツの安堵。この上は、短刀手に入るこそ幸ひ、この品を持參いたし、鹽谷の家名引起し、夫の忠義立てるが肝要。今より直さま隠れ家へ。サヽ、與五郎、供しや。

與五 御貞節なるあなた様、その思し召しは御尤もなれども、未だ御病中と申し、殊に夜風が身に障りましては

加古 又ぞろ障りのなきうちに、夫に逢うて慥かに手渡し。

與五　さほどに思し召すなら、今宵のうちに縫之助さまの、お供いたしては如何でござります。

加古　イヤ〳〵、最前其方が云やつた通り、色に耽り、柔弱の縫之助さま、折角手に入つた品、迂濶には渡されぬ。併し短刀手に入れし事を、片時も早うお知らせ申し、あなたにもお喜ばせ申したいもの。大儀ながら其方、今から定九郎どのへこの事を、お知らせ申して來てたも。

與五　左樣なれば、若旦那さまへこの事を。

加古　大儀ながら。

ト此うち與五郎、うち〳〵して

與五　左樣なら一走り行つて參じます。モシ、奧のお二人樣、あなたにも、お風を召されぬやうになされませ。

加古　その事は必ず案じやるな。

與五　モシ、藥はあれに煎じてござります……左樣なら、留守をお賴み申します。

加古　オヽ、合點ぢや。そんなら與五郎、大儀ながら。

與五　モシ、大切な品もござりますれば、戸締りをよくお心付けて。

ト云ひ〳〵門口へ出る。

加古　夜更けぬうちに。

與五　ドリヤ、行つて參じませうか。

ト時の鐘になり、與五郎、花道よき所まで行き、思ひ入れあつて取つて返し、下の方へさし足して入る。合ひ方になり、加古川、思ひ入れあつて

加古　見かけによらぬ與五郎が深切、天も憐れみたまひてや、思はず手に入るこの一品。一旦お家は御改易、その以前六年跡、この身が桃の井家に腰元奉公するうち、夫定九郎どのと忍び合ひ、二人が仲に芳松といふ子まで儲け、いかにわしが辰の年月揃ひしとて、その子の芳松が辰の年月揃ひしも、不思議の一つ。それより二人が家出なし、その後鹽谷の家沒落。殿の御無念を散ぜんと、大星どの始め家中の人々は、亡君の仇討なし、その節夫は家出ゆゑ、一味徒黨に洩れたるを、不義士との世の嘲り。恥辱を雪がん其ために、縫之助さまを以て、お家相續を願ふと雖も、御次男さまには柔弱の御身の上。この品お手渡し致したけれども、又ぞろ遲中あつてはお家の名折れ。どうぞ夫にこの品をお渡し申し、忠義の道を立てさせたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。時の鐘になり、路地口より紺看板らしき物を着たる一本差しの若い者、弓張り提灯を持ち出て來り、花道まで行き、足音高く取つて返し、門口へ來て

若者　お頼み申します〳〵。
ト戸を叩く。
加古　ハイ〳〵、どなたさまでござります。此方へお入りなされませ。
若者　左様なら御免下さりませ。
ト内へ入る。加古川見て
加古　何れからのお使ひでござります。
若者　私しは大星大三郎方より、使ひの者でござります。こなたに縫之助さま、浮橋どのござるとの事。主人申しますは、夜中ながら密かに申し談したき事ござりますゆゑ、お二人さまもろとも、お出で下さりますやう、申しつけましてござります。
加古　これは〳〵、夜中に御苦勞に存じます。御家老の御子息様が、何か密々とは氣遣はしい。……モシ、縫之助さま、浮橋どの。
ト呼ぶ。奥にて
縫之　オイ〳〵、今そこへ。浮橋も一緒に。
ト合ひ方にて、縫之助浮橋出で來り

浮橋　これは〳〵加古川さま、御病氣中と申し、まだこれにお出でなされまするか。

縫之　して、身共に用といふは。

加古　別儀でもござりませぬが、只今過急に大三郎どのより、あなた方お二人に、密々の用事がござりまして。

縫之　そりや大方縫之助に、家相續いたせよと、御内意あつたゆゑ、その事であらう。

浮橋　殊には紛失の品も手に入り、此やうな喜ばしい事はござりませぬ。

縫之　そんなら、ちつとも早く大三郎方へ。

浮橋　見ますれば、與五郎どのが居りませぬが、どちらへか參じましたかえ。

加古　只今短刀の手に入りし事を、夫定九郎方へ。

縫之　知らせに參つたか。それもよし〳〵。サヽ、浮橋、おぢや。

浮橋　左樣ではござりますが、御病中の加古川さま、只お一人置きましては。

加古　お案じ下さりますは、有り難う存じますが、今晩は大分心ようござります。私しよりは浮橋さま、あなたは御胤を宿せし大事の御身、心を付けてお出でなされませ。

浮橋　有り難う存じまする。左樣なら縫之助さま。

縫之　然らば短刀は其方に。

加古　お氣遣ひ遊ばしまするな。明朝まで私しが

縫之　そんなら加古川

浮橋　お大事になされませ。

ト若者先に兩人付いて向うへ入る。加古川跡を見送り、思ひ入れあつて

加古　隨分道を氣をつけて……嬉しや〳〵。お家の跡目、大三郎どのまで御内意の上は、御運の開くは今のうち。お家相續あらば、夫の念願も叶ふといふもの。嬉しや〳〵。餘り嬉しい事の重なりしやら、どうか疝へが

トよき所へ住ひ、癪の痛む思ひ入れ。この時ばつたり音して、下家より出刃庖丁を突き出し、加古川を貫く。これにて加古川「アツ」と苦しむ。時の鐘、凄き合ひ方になり、疊を刎ね上げ、下家より與五郎、以前の形にて、出刃を持ち出る。加古川苦しみながら見て

ヤヽ、其方は與五郎。

ト立上がるを又一刀切り下げ、加古川が持つたる短刀へ手を掛ける。加古川やるまいと、ちよつと立廻つて與五郎に縋り付く。

チエヽ、玆な人でなしめが。かよわい女を騙し打とは卑怯な奴。最前といひ、今といひ、こりや慾に迷うたのぢやなア。

與五　いかにもこなたの推量の通り、今まで盡せし忠義の道も、乳母が話しに我が素性、明かして見ればこの與五郎は、師直公の落胤と、聞いたる時は五體の惱亂、知らぬ事とて今日までも、現在敵に膝を屈し、月日を送つた無念さゆゑ、縫之助浮橋めも、おびき出して途中にて、殺らしてしまふ手つがひして、寶を隱せば鹽谷は埋れ木。其うち管家の正筆手に入れて、父の家名はおれが相續するのだワ。何は兎もあれ、あの品渡せ。

加古　すりや其方は高野の血筋とや。思ひがけないその素性。この事夫に知らせたい。おなつかしいはわが夫。死する今際に芳松が顏、一目見たい。夫子に名殘が、惜しいわいなう／＼。

與五　もがく／＼。それ程二人に逢ひたくば、未來で逢はしてやる程に、おとほね立てずと、くたばりおらう。

加古　主人に刃向ふ極重惡人。たとへこの身はひしびしほになるとても、この短刀はお上へ差上げ、鹽谷の家を引起す、夫の忠義には換へられぬ。

與五　役にも立たぬ忠義呼はり。その繰り言は未來で吐かせ。

加古　ヤア、いはれざるその一言。人に報ひがあるものか、無いものか。おのれ此まゝ安穩で置くべきや。

ト きつとなり、思ひ入れ。

與五　こま言いはずと、くたばつてしまへ。

加古　何をおのれが

ト 立廻りあつて、加古川を切り倒す。この時薄ドロ〳〵になり、陰火燃へ出る。與五郎見て

與五　さては加古川、迷うたな。

加古　たとへ此まゝ殺されても

與五　オヽ、勝手に恨みを

ト 加古川に止めを刺し、こなしあつて

病みほうけても流石は加古川、なか〳〵手強い奴だ……併し死骸は、此まゝ置いては事の破れ。ハテ、どうしたものだ……よし〳〵、何ぞにくるんで宮戸川へ。

ト 件の短刀を腰に差し、有り合ふ蒲團へ加古川の死骸をくるんで居る。此うち向うより以前の杢右衞門小錢を三貫、袋に入れ肩に載せ、氷砂糖の袋入りを持ち出で來り、門口へ來て

杢右　與五郎どの、寐さつしやりましたか〳〵。

ト戸を叩く。これにて與五郎うろたへ、蒲團にくるみし死骸に枕をさせ、二枚折りの屛風を立て廻し、加古川の寢て居る體に見せ、自分も天德寺を引かけ、寢て居たる思ひ入れにて、現のやうに

與五　出たのがない、通らつしやい〳〵。

杢右　コレサ〳〵、物貰ひではない。家主の杢右衞門でござる。明けて下さい〳〵。

與五　ナニ家主だ。そいつは大變〳〵。

ト思ひ入れあつて

モシ、大家さん、印形なら明日にして下さりませ。

杢右　其やうな事ではない。よい話しがあつて來た。

與五　ナニいゝ話しだ。そいつは耳より。サア、此方へお入りなされませ。

ト門口を明ける。杢右衞門内へ入る。與五郎見て

モシ、よい話しとは何でござります。

杢右　外の事でもない、こなたが貧窮の中で、お主へ忠義を盡す事を、地主へ話したら、それは奇特な事とあつて、錢三貫文を下された。有り難く頂戴さつしやれ。

與五　それは有り難うございます。御病人に申し聞かせましたら、嘸お喜びでござりませう。

杢右　この氷砂糖はわしが志し、御病人に進ぜて下さい。

與五　何から何まで、有り難う存じまする。

杢右　時に、病人はどうでござるな。

與五　たつた今ころりと……イヤサ、ころりとゆきさうなところでござりましたが、大分ようござりまする。

杢右　それは重疊々々。早くこの事を話して喜ばして下さい。

與五　ハイ／＼、畏りました。

ト件の品を枕頭へ持ち行き、加古川と話しをするやうにて

モシ、加古川さま、只今お家主さまが見へられまして、あなたの御病氣御介抱申し上げた事を、地主様へお話し申したら、わしが忠義を御感心なされ、御褒美のお救ひ錢を、三貫文下されました……ヘイ／＼、成る程／＼、左様でござりまする……ヘイ／＼、左様でござります。イヤモウ、世間に人鬼はないと、よく云つたものでござりまする……成る程／＼。ヘイ／＼、畏まりした。

ト加古川と話しするやうに捨ぜりふよろしくあつて、また此方へ來て

只今の事を申しましたら、御病人も殊の外喜び、お前さまへよろしくと申しました。

李右　それでも、こなたと話しが出來るやうで、大きにようござる。

與五　ハイ、今晩なぞは、大分よろしうござります。

李右　ドレ、ちよつと御病人に、わしも逢うて歸りませう。

ト立上がる。與五郎恂りして

與五　アヽモシ、病人の見舞ひに行くとは、怪しからぬ事を。

李右　見舞ひに行つては惡うござるか。

與五　惡い段ではござりませぬ。

李右　そりや又なぜでござる。

與五　サア、それは……オヽ、それ〳〵、病人に家主は大毒でござりまする。

李右　何を云はつしやる。ドレ、ちよつと病人に

與五　アヽ申し、それではどうも

李右　ハテ、わしが志しを話して行きませう。

トさゝへる與五郎を押へのけ、屏風を明け、加古川の死骸を見て

イヤア、病人が切られて居る〳〵。

　ト ぶる〳〵しながら

コレ與五郎どの、あの病人を何者が

　ト思ひ入れ。與五郎、出刃庖丁をひらりと見せて

與五　默つて居ろ。

　トぢつと思ひ入れ。杢右衛門ぶる〳〵して居る。與五郎我が形を見て、杢右衛門に着物を脱げといふ思ひ入れ。これにて逃げようとするを引ツ捕へ、衣類を剝ぎ取り、その着物を着て、逃げにかゝろ杢右衛門に猿轡をかけ、三尺帶にて後ろ手に縛り、暖簾口へポント蹴込む。短刀は腰に差し、今の錢を懷へ入れ、蒲團にくるみし死骸を見て

ちつとも早くこの死骸。

　ト九つの拍子木、時の鐘に成り、與五郎、件の死骸を抱き起す。此うち向うより權兵衛、町人形、一本差しにて、千住宿と記したる火の消えし小提灯を持ち出て來り

權兵　今打つのは九ツだな。提灯を消したら、犬が吠へてならぬ。どうぞ火を一つ借りたいものだが……向うに燈が見える。あれへ便つて

ト本舞臺へ來り

モシ、提灯が消えて難儀いたします。火を一つ貸して下さりませ。

ト與五郎この聲を聞き、行燈を吹き消す。忍び三重になり、權兵衞思ひ入れあつて門口を明け、内を見て

ヤア、今まであつた燈が消えたは。

ト合點のゆかぬ思ひ入れにて

モシ、お頼み申します／＼。

ト内へ入り、暗き思ひ入れ。與五郎、死骸を抱へ、門口へ出ようとして、思はず兩人行き當る。權兵衞何心なく死骸に手をかけ、生血したゝりしといふ心にて、慄りして透し見て、取らうとする。與五郎振り切つて死骸を抱へしまゝ門口へ出かける。此うち與五郎、以前の守袋を落す。權兵衞、跡へたぢたぢとする時、守袋手にさはるゆゑ、取上げ透かし見て

今のは慥か

ト思ひ入れ。與五郎この聲を聞いて、外より門口をぴつしやりしめる。木の頭。與五郎死骸を擔ぎあげる。權兵衞、守袋へ思ひ入れ。兩人ともこの仕組よろしく、きざみにて、ひやうし　幕

五段目　　隅田川花屋鋪の段

役名――石切り、佛權兵衞。箱持ち、佐助實ハ鹽谷縫之助。北村傳次。一力升屋の勘九郎。花屋鋪の菊塢。口入れ、上野屋五郎三。教信寺の雲哲實ハ百姓與一兵衞。中間、角助。藝者、お京實ハ腰元浮橋。女達、金笄のおかる。越後獅子、飾間の宅兵衞。獅子舞ひ、兼松。同、鶴松。定九郎一子、芳松。

本舞臺、三間の間、眞中九尺の亭屋體。この柱に御茶と書いたる掛け行燈、左右萩の植込み、四ツ目垣。上下ともに秋の七草の盛り。上の方枝折り門。すべて隅田川花屋鋪正寫しの飾りつけ、よき所に床几二脚並べ、爰に菊塢、坊主にて道行振を着たる形、馬盥に花を活けて居る。下女のお露、茶をはこび、勘九郎、吉原女郎屋の亭主の形。内藝者のお民、お鐵、供の若い衆喜助、皆々床几へかゝり居る。兼松、鶴松、外に子役の芳松、角兵衞獅子にて舞つて居る。宅兵衞、親仁の形、太鼓打つてゐる。角兵衞獅子の鳴り物、流行り唄を冠せ、よろしく賑やかに幕明く。

ト兼松等よろしく曲をする。芳松は只うろ／＼する。

兼松　コレ〱、この餓鬼は、おらにばかり曲をさせて、なぜマゴ〱して居るのだ。

宅兵　其やうに叱らずとも、まだ馴れぬ事ゆゑ。よう教へてやるがよいわいの。

鶴松　全體貴樣の太鼓の打やうが悪い。斯ういふ拍子に叩きなせえ。

　　ト太鼓を取り、こなしあつて

これは野中の一本杉、むら〱しやんと突ツ立つた。御方便だナハレヤ……と云ふ振りで叩かにやア、曲が出來るものか……コレ〱、この拍子の時は、斯う逆立ちをして

　　トして見せる。芳松出來ぬゆゑ、うろ〱する。

エヽ、不器用な餓鬼だ。斯う逆さになるのだ。

　　ト芳松をとらへ、逆さにするとて拋り出す。宅兵衛あわてヽ

宅兵　コレ〱、滅相な。大事の預かり物、この子を、其やうにむごうせずと、教へたがよいわいの。

兼松　口で教へても、覺えないゆゑ折檻するのだ。こなたもよくこの餓鬼を庇ふが、そんな生ぬるい事でいけるものか。馬鹿な親仁だ。

　　ト宅兵衛むつとして

宅兵　まだ馴れぬ事ゆゑ、不器用は知れた事ぢや。馬鹿な親仁と云はいでもの事ぢや。

兼松　云つたらどうする。

ト立ちかゝる。菊塢、喜助とめて

菊塢　コレ〳〵、どうしたものだ。旦那方の前で獅子と親仁の、喧嘩をするといふ事があるものか。靜かにさつしやい〳〵。

兼松　イエ、しやすめえ。なぜ親仁と獅子と喧嘩をしねえものかえ。とんだ馬鹿な坊主だ。

菊塢　なんだ坊主だ……坊主丸儲けといふ事がある。こいつは餘ッぽど緣起がいゝわえ。

喜助　成る程、お前も餘ッぽど慾張り團扇だ。

兼松　うちわでも外輪でも、留めやうが氣にくはねえ。

菊塢　これサ、そんなに强情云はずと、おれに免じて、坊主料簡して下さい、和尙だから。

喜助　ひどい所で洒落るの。

兼松　否だ〳〵。合點しねえ〳〵。

トまた宅兵衞にくつてかゝる。流行り唄になり、向うより北村傳次、羽織袴大小。角内、中間の形。五郎三、袴羽織、人足の口入れの拵らへ。佛權兵衞、羽織袴、石屋の亭主にて出る。跡より雲哲、木綿頭巾、麻の衣、同心者の拵らへにて、播州加古川敎信寺石塔建立と書きし幟、外箱を脊負ひ出て來る。權

兵衞、花道より先へ駈拔け、この喧嘩の中へ入り

權兵　コレ〳〵、年寄と子供を捕へて、どういふ間違ひか知らぬが、料簡さつしやい〳〵。

鶴松　モシ〳〵旦那、お前さん方の知つた事ぢやァござりやせん。打つちやつて置いて下さい〳〵。

權兵　サア、知らぬは當り前だが、爰にお屋敷の旦那もござるものだ。譯は知らねど、わしがちよつと挨拶だ。

ト懷より一分出して

これで酒でも飲んで濟ますがよいわサ。

宅兵　モシ〳〵、それではわしが、お氣の毒でござります。

權兵　ハテ、大事ござらぬ〳〵……サア、野暮を云はずと、濟ました〳〵。

兼松　こんな事をしなすつちやァお氣の毒だが、折角の御挨拶だから、料簡いたしやせう。

ト一分を取る。

菊塢　イヤァ、「角兵衞獅子一分貰つて目を廻し」と言ふ前句があるが、目も廻さずに金百疋。

喜助　お前、羨やましからうな。

菊塢　馬鹿を云はつしやい。

五郎　モシ、權兵衞さん、とんだ所で自腹を切つたね。

權兵　そこが異名の佛權兵衞、どうも見ても居られませぬ……コレ、若い衆、隨分年寄りと子供だ、いたはつてやらつしやいよ。

兼松　ハイ〳〵。そんなら父さん、また先へ行きやせう。

宅兵　こりやアあなた、有り難うござりまする。どなたも、おやかましうござりました。

ト宅兵衞、兼松、鶴松に芳松附いて入る。

菊塢　餘ツほど根生の惡い男だな。

つゆ　ほんに憎てらしい人ぢやわいな。モシ、どなたもこれへお掛なされませ。

ト茶を汲んで出す。傳次始め皆々床几へかける。

勘九　あなたは山名の御家中、北村傳次さまではござりませぬか。

傳次　これは一力升屋の亭主勘九郎、大分派手やかな。

勘九　今日は内の藝者を連れまして、七草見物に參りました。上野屋の親方と、石屋の權兵衞さんもお供かえ。

五郎　ハイ、今日は權兵衞さんのお招きで、旦那方のもてなし、お取持ちに參りました。

角内　お供に參りました私しも、誠に腹いつぱい。併し、殘念なは、屋根船へ玉子燒を殘して參りました。

五郎　意地の穢ない事を云ふ男だ。

勘九　穢ないと云へば、跡から參つた坊主は、何でござりまする。

雲哲　ハイ〳〵、わしは播州教信寺の所化。當國へは始めての旅僧。石塔の建立でござりまする。御合力をお願ひ申しまする。

菊塢　なんだ、石塔の建立だ……本堂の建立は聞いたが

角内　石塔の建立とは、こいつは珍らしい。

權兵　加古川の教信寺は、鹽谷の菩提所。それに石塔建立とは、ハテ變つた

雲哲　イヤ、これには段々譯のござります事。

勘九　兎も角も、旦那方の前で穢ならしい。奉加にも附いてやらう程に、マア奧庭の方へ廻つて來さつし。

雲哲　ハイ〳〵、有り難うござります。左樣なら後程お賴み申します。

勘九　もう付込みか。早く行け〳〵。

雲哲　ドリヤ、御近所を修行して來ようか。

ト雲哲下手へ入る。

五郎　時に吉原の親方、俄はどうでござりますね。

勘九　イヤモ、相變らず賑やかでござります……それはさうと、モシ旦那、今日の御趣向は、マア、どういふものでござりまする。

傳次　此やうに毎日遊山に出るも、一つには殿御病氣と云ひしは僞り、誠は

ト少し小聲になり

お屋鋪へ夜盜込入り、その夜に敢へなく殿は闇討、高野家へ御養子の、島五郎さまも打たれし上、菅家の一軸その時紛失。それゆゑにこそ跡目なければ、まづ高野家は滅亡。然れども先年師直公、奥女中にお手をつけられ、懷妊してお暇出でたる者ある由、跡にて聞けば御男子誕生。これは全く高野の血筋、その女は産後に病死と聞く。身は當殿よりのお指圖にて、高野の血筋たるその御男子を尋ねる爲、且は一軸詮議せんと、今日は上野、あすは木母寺、毎日々々遊山はしながら、甚だ心を痛め居るて。

五郎　それゆゑに、人入れの私しも、共々御詮議いたしませうと、お供を致して歩きまする。

權兵　先年師直さまへお出入りの石屋、佛一體彫みあげましたが、殊の外お氣に入り、直さま異名を佛

権兵衞、御恩を請けたる高野のお石碑、その御用をば私しへ、仰せつけられ下さるやう、山名さまの御家中、北村傳次さま、あなたを只管お願ひ申します。

勘九　ハヽア、それで今日のお振舞ひか。併し旦那、外の詮議と違ひ、此やうに遊びながらのお役目は、兼帯で御遊山をなされますやうなものでござります。

権兵　わしは八百善の仕出しを申し付け置きましたが、まだ埒が明きませぬが、人を走らせまする。モシ、先生、お杯の支度をお頼み申します。

菊塢　承知いたしました。まづ其うちに、櫻の湯でも召上がり、七草をば御覧下さりませう。

ト杯の用意をする。

権兵　わしは、ちよつと云ひつけて參りまする。御免下さりませう。

ト権兵衞は下手へ入る。

傳次　コレ、五郎三、町人どもが取持ちにて、藝者が參ると申したが、あの者か。

五郎　イエ〳〵、あれは升屋の内藝者でござりまする。

角内　ナニ間違ひがある。何が間違ひだえ〳〵。

喜助　お供さん、お前も交ぜッ返しな。間違ひぢやねえ、江戸藝者の事だよ。

角内　井戸替へをするのかえ。
勘九　ハヽヽヽ。こいつは困りものだ。
ト流行り唄になり、向うより浮橋、藝者の拵らへ、縫之助、箱廻しの形にて、風呂敷に包みし三味線箱を持ち、跡よりお絹、花屋舗の下女にて、案内して出で來り
縫之　モシ、今日から初出の新子でござりまする。よろしく御贔屓お願ひ申しまする。
きぬ　なんのマア、御挨拶わいなア。お客は私しどもへ、お出でなされてゞござりまする。ちつとも早う
浮橋　モシ、よろしうお頼み申しまする。
きぬ　サア、お出でなされませ。
ト三人、本舞臺へ來て
やうく只今參りました。
浮橋　どなたも御免なされませ。
傳次　イヤア、ソリヤ、藝者が來たぞく。
勘九　成る程、傳次さまのお連れなされた町藝者は、格別。妙々。

傳次　コリヤ〱、箱持ちの男は、勝手へ參つて、休息いたせ〱。
縫之　ハイ〱、畏まりました。
　　ト三味線箱をそこへ出し、奥へ行かうとする。浮橋思ひ入れ。
浮橋　アヽモシ、お前は爰に居て下さんせ。
勘九　これはどうしたものだ。お客の座敷に箱持ちが居ては見苦しい。勝手へ行かつしやい。
傳次　それ〱、第一遊びの邪魔だ。早く勝手へ行つて、休息いたせ〱。
　　トこの時縫之助、顏見合せ
縫之　ヤ、其方は。
傳次　あなたは鹽谷の御次男、縫之助さま。ハア、變つた形で
縫之　面目次第もござらぬ。
勘九　ハヽア、そんなら鹽谷さまの御次男が、町藝者の箱持ち、とんだ世の中だ。それから見ればこちとらは旦那株だ。なんぼ以前は大名の子でも、今は藝者の箱廻しだ。カウ、一つ飲まつしやい。
　　ト杯をさす。
縫之　イヤモウ、何を云ふも時世時節、この身になつては八方旦那、左樣なら一つ下さりませう。

傳次　成る程、以前は兎も角も、今は藝者の箱廻し、近附きの爲、持ち合せたこの杯。

ト投げてやる。縫之助、むつとして氣を取り直し

縫之　ハイ、有り難うござりますが、わしは一向に

勘九　杯が小さくば、爰に好い物が

ト花活の馬盥を出し

これで一つ飲まつしやい。

縫之　ヤ……アノこれで

傳次　以前は大名、鹽谷の御次男、女狂ひの世に落ちて、女犬の跡に付きまとふ、小胸の悪い畜生侍ひ。この馬盥が相應だ。

縫之　いかに時世といひながら、滿座の中でこの悪口。この身の不幸を侮つて、厄病神で敵とは、武士に似合はぬ卑怯な心體。

勘九　藝者の箱持ち、男もよければ、女も綺麗な、あぢな目付も仕なしぶりも、來ると其まゝ睨んだ色事。

浮橋　アヽモシ、どうしてわたしと主に限つて

傳次　うぬが廻しのその男を、主と吐かすが矢ツ張り戀路。

角内　その色男にあやかる爲

喜助　その馬盥をぐつと干し

兩人　後はおいらが相伴しようワ。

縫之　こりや又あんまりな。

ト無念のこなし。

浮橋　アヽコレ、爰でお客の御機嫌を、そこねぬうちに、酒は飲まずと、この場を早う。

菊塢　逃げるが勝だ〳〵。

ト目で知らせる。

傳次　イヽヤ逃がさぬ。但し、おれがさした杯が、穢ないといふのか。

角内　お旦那の杯を嫌つた箱持ち。

喜助　イケ生しらけたこの野郎め。

兩人　飲まにやア、おいらが腕づくで、

ト縫之助にかゝる。よろしく立廻つて兩人を投げのける。

傳次　身共が家來を手籠めにした、憎くい箱持ち。

勘九　うぬはおれが。
　　ト立ちかゝる。浮橋これを留める。女形皆々傳次を留めて
きぬ　今日初出の此お方、麁相があらば、わたしどもがお詫ごと。
女皆　お前は少つとも早う、この場をば
縫之　成る程、何を云ふにも堪忍が第一。
角內　うぬ、よくおれを
　　ト又かゝるを突きのけ、縫之助向うへ走り入る。
勘九　相手の野郎を追ッ駈けろ。
喜角　うぬ、待ちやァがれ。
　　ト兩人同じく追ッ駈けて揚幕へ入る。直ぐに向うより角內引返し出て、花道よき所にて見事に返る。摺り鉦入り、出の唄になり、おかる、派手なる衣裳、女達、好みの形、尺八を差し、帶の結び目へ錠を卸ろした誂らへの拵らへ。喜助の手を捻ぢあげ、醉ひたるこなしにて、よろしく出で來る。跡より縫之助付いて出で、角內また起上がつてかゝる。立廻つて、しやんととまり
喜角　アイタヽヽ。こりやァ女め、どうするのだ。

かる　ハテ、どうと云ふのは三味線に、付添ふ廻しの絲よりも、細いお方を皆寄つて、引いて見ようと思ふのは、ほんにいらざる左平次と、醉つて云ふのぢやなけれども、主は浮世を忍び駒、そこへ付込む野路馬さん、撥のあたりがちよつとなと、さわりと聞けば忽ちに、破れかぶれの猫の皮、にやんと皆さん、そんなものではないかいなア。

トよろしく思ひ入れ。

角内　三味線盡しの達引なら

喜助　われから先へ引〆めてくれう。

かお　醉つてよろつく足許に、丁度氣轉な杖柱、さらば一緒に行かうわいなア。

トこれにて皆々舞臺へ來る。

つゆ　おかるさん、よい所へ

女皆　ようござんしたなア。

傳次　身共が家來へ無禮の女め。

勘九　わりやア一體何といふ

かる　名を問はれては恥ながら、男嫌ひとこの帶の、結び目ぴんと錠前の、看板打つた金簪の、名は

かると云ひやんす。

勘九　そんなら噂の女達

傳次　其かるならば猶の事、なんで身共が家來をば

かる　何にも樣子は知らねども、わたしが世話して藝者に仕込んだこの子の事。それに付き添ふ廻しの男、今日が初出の町藝者、何が遺恨で出面早々、お前方は苛めなさんす。

勘九　お客がさしたこの杯、飮まぬと吐かした野郎ゆゑ。

かる　そりやこの器で飮まぬゆゑ、若い男を手籠めにする。こりや尤もと云ひたいが、ちつと無理でござんせう。ハテ、下戸なら飮むまいと云ふぢやござんせぬか。あの人の名代に、わたしが飮めばお前方の心も濟むでござんせう。なんの造作もない事を

ト右の馬盥に一ぱいつぎ、飮まうとする。

浮橋　アヽコレ、其やうに酒を過しては

縫之　跡でどのやうな事を引出さうやら

ト留める。おかる、その手を拂ひ

かる　ハテ、大事ござんせぬ。なんのこれに一つや二つ、醉ふやうなわたしぢやござんせぬ。

ト ぐつと飲み干して

サア、これで杯の名代は、さらりと濟んだ。まだこの外に、何ぞ云ひ分あるならば、何なと云ひなさんせいなア

傳次 イヽヤ、云ひ分は外にはないが、あの野郎が名代ならば、女のわれをちよつと相手に

ト傳次、おかるにかゝるを

かる こりや面白いお侍ひさん、男の代りに女のわしを、名乘つて取つたこの腕を、じつとしても居られますまい。お望みならば、ちつとはお手が

ト傳次を捻上げ、投げのけて

サア、女に投げられ、お腹が立つなら、サア、切らしやんせ〳〵。

ト舞臺へ横に寢る。勘九郎呆れて

勘九 コレ、おかる、相手は侍ひ。なんぼわれが女でも、麁相があらば身の上だぞ。

かる 身の上合點、出入りはわたしが引受けた。その代りにはこの二人、わたしが預かる。サア、二人とも、愛想はずとも、ちつとも早う

浮橋 それぢやといふて此まゝに

縫之　其やうに酒に醉うては危ないもの。
かる　ハテ、酒に醉つたら千人力の、マア、兎も角もわたしに任せて
きぬ　おかるさんなら大丈夫。サア、お前方もマア奥へ。
女皆　わたしらも御一緒に
浮橋　そんなら、おかるさん

トおかるうなづく。

縫之　必ずともに
かる　ハテ、ようござんす

トおかるこなし。

つゆ　サア、ござんせいなア。

ト流行り唄になり、皆々奥へ入る。

角喜　あの野郎を遣つては

ト行きにかゝる。おかる留めて

かる　相手はこれから此おかる。サア、存分にしなさんせ。

ト また横に寢る。皆々思ひ入れ。

サア、切らしやんせ。切らぬのかえ……憚りながら交りなし、金簪のおかるが體、思ひの儘に切らしやんせ、切つて血が出ざアをかしかろ。

ト醉ひたるこなしにて、そこへ寢る。皆々思ひ入れあつて

勘九 イヤハヤ、呆れた女だ。

傳次 女と思ひ、容赦いたせば附上がる、憎くい下素女め。

皆々 この上は四人がゝりで

ト四人立ちかゝる。權兵衞、ツカ〳〵と出で

權兵 まづ〳〵、暫らくお待ち下さりませう。

傳次 そちや石屋の權兵衞、なんで身共を

勘九 留めに出たのは、アヽ聞えた。この女に氣がある噂、それでこなたは庇ふのか。

權兵 イエ、左樣ではござりませぬが、最前から見請けましたるところ、取り所もない女の生醉ひ、お相手になつては却つて人の物笑ひ。帶の結び目に錠卸ろし、女のざいに意地を張り、喧嘩好みの暴れ者、無理な酒でも飮ませずば、人も除けては通しますまい。町人ながら少しばかりは小口も

きゝまする佛權兵衞、醉が醒めてのその上で、とつくり申し聞かせませう。あなたの御恥辱にならぬやう、私しが計らひまする程に、何卒この女を私しに、お預け下さりませうならば、有り難うござりまする。

五郎　權兵衞どのゝ申さるゝも、一理ござりますれば

菊塲　これは只管、權兵衞どのへ。

傳次　成る程、醉ひどれを相手にしては武士が立たぬ。醉の醒めたるその上で

權兵　とつくり申し聞かせまする。

傳次　とは云ふものゝ、おかるめ。

勘九　ハテ、かるならば、かるにして置け呼子鳥。

菊塲　これは秀逸。

傳次　然らば權兵衞。

權兵　きつとお待ちなされませ。

ト唄になり、皆々奥へ入る。權兵衞殘り、思ひ入れあつて

此マア醉どれの形わいの。

ト合ひ方になり權兵衛、おかるに見惚れし思ひ入れにて、だん〳〵側へ寄らうとして、又あたりを見て氣を替へ

お誂らへの石碑の註文は。コウツト

ト懷より註文書を出し

玉垣から、まづちよつと當つて、この恰好では、餘程脊が高くなるが

ト此やうな事云ひながら、又おかるへ目を付け、側へ寄り

ハテ、餘ッほど醉つて居るさうだ。

ト手を叩く。奥よりお露出て來る。これにて囁く。呑みこんで、枕を持つて來る。權兵衛、枕をおかるにあてがふ。おかる、現にて枕をする。權兵衛、枕紙を見て又お露に囁く。呑みこみ、硯箱を出して奥へ入る。權兵衛、鼻紙を出し、何やら書いて思ひ入れ。この時おかる寢返りして手を延す。權兵衛、書いたる文をその手に握らせる。おかる、現にて文を捨てる。權兵衛、文を取上げ、本意なき思ひ入れにて、奥へ行かうとして、又おかるの額を、よく〳〵見て寄りかゝる。おかる心付いても、矢張り眠りながら

かる　誰れだや〳〵。

ト現のやうに云ふ。権兵衛飛び退き、知らぬ顔して居る。おかる、目を覺まして

お前は権兵衛さん、わたしや爰へ、どうして寝て居たのぢやえ。

権兵　どうしてどころか、権兵衛が、大事のお客へ無禮たら〴〵。それゆゑに詫び言して、おぬしの命はおれが貰うた。

かる　さうかえ。ちつともわたしや知らなんだ。忝うござんす。ドリヤ、奥へ行つて

ト行きさうにする。権兵衛留めて

権兵　これはしたり、おかる坊、いはゞ大事の命をば、助けた佛権兵衛、ちつとも知らなんだ忝なうござんす、ドリヤ奥へ行つてと、ツイと行かうとは、そりやあんまりであらう。

かる　それでは禮の云ひやうが、少ないと云はしやんすのかえ。

権兵　さうではないが、ちつとはどうかおれが深切、命を助けた恩返しに

かる　おいて下さんせ。お前に命を助けて下さんせと、わたしが頼んだかいなア。よし又命の瀬戸になるとても、人を頼むほど命が惜しくば、金簪のおかるとは云はれぬわいなア。また命を助けた程の恩があれば、どういふ禮をすればいゝのぢやえ。

権兵　サア、さう立派に出られては、甚だ挨拶に困るが、大概おれが心の内を

かる　知つて居やんす。知れて居るゆゑ、わたしや奥へ。

權兵　そりや又なぜ。

かる　わたしや男と、差向ひになるのさへ大嫌ひ。

權兵　どういふ譯で男は嫌ひだ。

かる　そりやわたしも知らぬが、男嫌ひと看板は、帶に付けたるこの錠前。

權兵　それはあんまり氣強いぞよ。常からおぬしに心のあるこの權兵衞、男の口から恥かしい、云ふに云はれぬ心の丈。いま書いたこの文、これをばどうぞ。

トおかるへ渡す。

かる　權兵衞さん、お前も餘ッほど昔者、今時こんな野暮らしい、文とはあんまり呆れるわいな。

ト投げ返す。

權兵　これはどうしたものだ。いよ／＼おぬしは、どうあつても

かる　お氣の毒だが、否でござんす。

權兵　ハテサテ根強い……併し、おれが文でも捨てゝも置かれず

ト文を取上げ

コレ、おかる、おぬしがあくまで其やうに、强情を云ひ通せば、おれも權兵衞、出入り屋敷のお侍ひさまへ、無禮のおぬし、一番相手にせねば。

かる　こりや面白い。得心せぬを腹立つて、先刻の衆の肩を持つ、異名は佛權兵衞さんが

權兵　鬼にもなつて、この場でちよつと。

　　トおかるの後より抱く。

かる　なんぼわたしがお前をば、嫌うて居ればとて、後抱きのはてゝんごう、よしてもおくれ。

　ト振り切る。この時權兵衞、懷より文を落す。これを知らず

權兵　ところを斯うして

　ト又かゝるを氣味合ひの立廻り。トゞおかる、有り合ふ莨盆を取つて打ちつける。

かる　アタしつこい、知らぬわいなア。

　トついと奧へ入る。權兵衞、呆れし思ひ入れ。續いて奧へ入らうとする。奧より傳次、角内出で來り

　權兵衞を見て

傳次　其方は石屋の權兵衞、何を其やうに、うろ〳〵致す。

角内　大方あの女と、角力でも取つたのでござりませう。

ト此うち傳次、權兵衞の落せし文をそつと拾ひ、袂へ入れる。

權兵　あなた樣は、何れへお越しなされまする。

傳次　今日は格別のもてなし、過分。最前の女めが、無禮の扱ひも聞きたけれども、まづ今日は此まゝに歸宅いたす。

角內　左樣ならば、直さまお歸りでござりまするか。

傳次　いかにも。角內、供いたせ。

ト行きさうにする。

權兵　ア、イヤノヽ、傳次さま、暫らくお待ち下さりませう。

傳次　何ぞ身共に用でもあるか。

權兵　ちとあなた樣にお願ひの筋が。

傳次　願ひがあらば、早く申せ。

權兵　別の儀でもござりませぬが、私しも以前は高野の家中、垣坂作左衞門が忰、三平と申しました者幼年の砌り、聊かの口論より、傍輩の子供に手を負はせ、旣にお仕置にもあふべきところ、師直公のお聞きに達し、命助かり町家へ使り、人となりましたる其うち、跡にて親どもに娘一人儲けし

沙汰。即ち私しが爲には妹、この者は武家方へ御奉公、親どもは病死、殊に大恩のお家は、大星が手立にて、夜討の騷動、只今は沒落、血筋の絶えたる高野のお家、ほのかに聞けば師直公の落胤、そのお方を尋ね出し、且はいつぞや强盜込入り、紛失なしたる菅家の一軸、詮議仕出してお家の再興、町人ながらも私しが願ひ。その所へあなた樣より、石塔の御註文下され、誂らへとのお頼み。大恩ある師直公の御石碑、身を粉に碎きましても、私しが一心に仕上げたうござりまする。何分この度の御用、私しめに仰せ付けられ下さりませうなれば、有り難い仕合せにござりまする。

傳次　ナニサマ、一通り、願ひ尤もなれども、その用を申しつける事罷り成らぬ。

權兵　エ……そりや又なぜでござります。

傳次　其方が妹といふは、只今參つたあの藝者、以前は鹽谷の腰元、浮橋と申した女、縫之助と乳繰り合ひ、身ごもつて居るとの事。さすれば高野の家中の娘が、敵同士の鹽谷の弟、その胤をはらんで居て濟むと思ふか。その腹の子が、若し男子であらば、ます／＼鹽谷家には跡目が出來、高野の家は血筋が絶え、いよ／＼家は立たぬに極まるわえ。

權兵　サア、それゆゑにこそ妹は、疾くより勘當いたし、縁は切つてござりまする。

傳次　妹を勘當いたせしとて、いまだ縁の切れぬ證據は、コレこの文。

ト いま拾ひし文を出す。

權兵　その文は

傳次　爰で拾つたコレこの文、こりやア其方が手跡、女へ遣はす濡れ文。此かるめは、あの藝者と縫之助を、隱まつて世話するといふ事。その女に心を掛ける其方、高野の家の血筋を立てたいとは、出る儘の僞り表裏。それゆゑこの役目は云ひつけられぬワ。

權兵　すりや、どのやうに願ひましても

傳次　いつかな叶はぬ。ならぬ事だワ。

ト權兵衞思ひ入れあつて

權兵　御尤も。

ト合ひ方になり、脇差を拔き、有り合ふ八寸の上にて左の小指を切り

町人ながらも私しが心底。縫之助浮橋を世話するあのおかるに、付け文いたせし私しゆゑ、お疑ひは御尤も。この上は女にも、心を寄せませぬといふ私しが潔白、どうぞお聞き屆け下されませう。

ト傳次思ひ入れあつて

傳次　イカサマ、男氣な其方、心底とつくり見屆けた。役目申しつけう。

權兵　すりや、私しが願ひの通り
傳次　その代りにはわれが妹の、浮橋が腹にある、鹽谷の血筋の根葉を斷て。それを見屆けたその上に
て、其方が願ひを
權兵　すりや妹が胎内を
傳次　鹽谷の血筋も絶える道理。
ト權兵衞こなしあつて
權兵　承知いたしましてござりまする。
傳次　まだその上にこの程は、所々に盗賊はびこる噂。彼奴らも正しく鹽谷浪人、これらが詮議二つに
は、紛失の一軸も
權兵　尋ね出してお家の榮え。まづそれまでは
傳次　石切り權兵衞。
權兵　傳次さま。
傳次　右の一儀を、ぬからぬやうに。
權兵　心得ました。

傳次　角内、參れ。

ト時の鐘になり、傳次、角内向うへ入る。あと合ひ方。

權兵　御恩送りの石碑の御用、只管願ひを種にして、現在妹の胎内を……それにしても、心の知れぬはあのおかる。文を拾はれ、これも矢ッ張り妹が運の盡き。どうでも戀は

トこの時奥にて

大勢　泥坊々々。

トこの聲にて、權兵衛悔り、思ひ入れあつて奥へ入る。下手より勘九郎、雲哲を捕へ、跡より五郎三、菊場、女皆々、浮橋縫之助も出てくる。

五郎　升屋の親方、こりやどうしたのでござりまする。

女皆　マアく、お靜かになされませ。

勘九　この坊主は、大盗人だく。

雲哲　御免なされませく。

勘九　御免なされも凄まじい。今日爰で秋葉講の、無盡の寄り金五十兩。それを知つてこの坊主めが、座敷へうせて、奉加を頼む顔で、その金をちよろまかした、太え坊主め。

五郎　この坊主は、先刻慥か鹽谷のお國の、菩提所と聞いたが

勘九　その國の殿が大だはけで、家は潰れたから、旦那寺の坊主は、泥坊でもせずば喰はれまい。大方鹽谷の浪人も、その上前でも取るであらう。イケ太え奴等だ。

トこれを聞き、縫之助思ひ入れあつて

縫之　コレ、出家の身で大それた、金の盜人。今こそ我れも町人なれ、以前は鹽谷縫之助、菩提所の名を云ひ立て、おのれが心一ツにて、兄上といひ義士の人々まで、名をよごす不屆き者。出家に似合はぬ、見下げ果てたる所存ぢやなア。

雲哲　すりや、あなた樣が鹽谷さまの御次男、縫之助さまでござりまするか。ア丶、面目次第もござりませぬ。云ひ譯ならねど一通り、お聞きなされて下さりませ。

ト合ひ方になり

愚僧が寺は鹽谷家代々の御菩提所、判官さま御切腹のその後は、一人として御跡を弔ふ者もなく四十七人最期の後は、猶以て無縁となり、當地は知らずお國の墓は、水一滴花一本、手向ける者なく、せめて印の石なりと建てたう思へども、貧寺の事ゆゑ、此お江戸へ勸化に出て、今日とても此お方が、持つたる金、取る氣はなけれど、せめてあの金が有つたなら、石碑も成就いたすで

あらうと、その願ひが叶うたら、跡ではその金拵らへて、此お方へ戻したらば、罪にもなるまいと、思ひがけない出來心から、判官さまの御名まで穢せし愚僧が科、御免なされて下さりませ。

縫之　すりや、私欲にあらぬ善根の、その心底世にあるならば、祠堂金納むるとても不足なき、我れさへ今は浪人の

雲哲　外にあだても情なや、ためし少なき人々の

縫之　斯うも浮世にうとまれて

雲哲　願ひも叶はぬその上に

縫之　よしなき人の口の端に

雲哲　かゝる無念さ、旦那さま

縫之　是非もなき世の、成行きぢやなア。

勘九　ハヽヽヽ、人の金を只してやらうといふ氣で、どうして願ひが叶ふものか。大名の子が藝者の箱持ちになるからは、旦那寺は橋本町、願人坊主の仲間へでも入るが近道。揃ひも揃つた大べら坊め。

トこの時浮橋こなしあつて

浮橋　モシ、御出家さま、その願ひ、わたしが叶へて上げませう。

縫之　ヤ、この願ひを叶へやうとは。

浮橋　サア、わたしが思案は

ト合ひ方になり、思ひ入れあつて

モシ、吉原の親方さん、御覽の通りのこの場の難儀。かうなる上は隱すに及ばぬ。わたしも鹽谷のお家には、御恩を受けたこの身の上、餘所に見ても居られませぬ。どうぞわたしが身を御相談なされて、五十兩の抵當に、お買ひなされて下さりませ。

勘九　ムウ、大分面白いわえ。最前から見たところが、隨分此方も商賣づく、蟲のあるのを合點で、奉公する氣なら、五十兩で買つてやらう。幸ひ無盡の金も丁度五拾兩。

縫之　すりや、その身を賣つて

浮橋　あの世にござる義士の方々、どうぞ未來を、お助け申す其ために

雲哲　アヽ、出來ました〳〵。女に似合はぬ忠義の心。長者の萬燈より、貧の一燈、佛達もさぞや感應。愚僧が願ひも叶ふといふもの。矢ッ張りこなたの忠義から

縫之　忝ない、浮橋、何にも云はぬ。

ト拜む事ある。

浮橋　なんのお禮に及びませう。これがわたしの望むところ。

勘九　得心ならば、相談は早いがよい。金は直さま渡します。證文の事、ざつと假の受取を。

縫之　志ざしのこの金、ちつとも早う

ト有り合ふ硯箱引寄せ、さら〳〵と受取を書き、勘九郎へ渡す。

勘九　これでよし。サア、金を渡せば女は此方へ。

ト金を出す。

雲哲　金は愚僧へ。

ト縫之助金を取る。雲哲懐より縮緬の財布を出し、右の金を入れる。

勘九　これで双方

雲哲　願ひも成就。

浮橋　モシ。

ト縫之助と顔見合せ、泣き落す。

雲哲　ア、南無阿彌陀佛〻〻〻〻〻〻。

ト回向して金を懐へ入れ、行きにかゝる。この以前よりおかる出かゝり居て

かる　御出家待つた。

雲哲　愚僧に何ぞ用でもござるか。

かる　用がありやこそ留めました。不肖ながら、ちよつと待つておくれ。

ト合ひ方になり、雲哲舞臺へ戻り

雲哲　わしに用とは

ト思はず顔見合せ

ヤ、われは

かる　おまへは父さん。

ト云ふを雲哲、云ふなといふ思ひ入れ。

アイ、云ふなら云ひますまいが、ちよつと聞きたい事がござんす。いよ／＼お前は、播州の御出家ならば、その教信寺のお宗旨はえ。

雲哲　ヤア……そりやアなにサ、その宗旨は法華、イヤ門徒。イヤ、當時は八宗兼學でござる。

かる　その御出家なら、大枚の金の受取、いま爰で書いて行かしやんせ。

雲哲　その受取は。
　　　ト頭を掻き、無筆の思ひ入れ。
かる　モシ、親方さんとやら。今の受取、ちよつと貸して下さんせ。
勘九　アノ、この受取を
かる　ちよつと貸して下さんせ。
　　　ト勘九郎、雲哲と顔見合せ、不請々々に出す。おかる取つて
かる　御出家さん、受取が書けずば、この受取を、この通り云ひなさんせ。
雲哲　なんだ、この受取を讀めと云ふのか。
かる　そこで高々と讀みなさんせ。
雲哲　讀まいでは。出家が無筆で勤まるものか。
かる　サア、早う讀みなさんせ。
雲哲　今讀むワ。讀まうと思つて居る所ぢや。思つたり讀んだり、兩方出來るものか……エヽ、何だ、一ツ。讀み憎い手だなア……金五十兩、慥かに受取り申しり候、以上、月日、めでたくかしく。
　　　ト出たらめに讀む。

かる　成る程、御出家だけあつて、詳らかな讀やうでござんす。モシ……まだ直らぬな。わたしの爲にもお主なら、お前にも矢ッ張りお主、其お方に勤めをさせ、それでお前は

雲哲　ハテ、賣つてやるのも佛の爲。

かる　佛を思へばその金を

雲哲　どうして金は

かる　そんなら爰で金の受取。

雲哲　サア、それは。

かる　サア

兩人　サア〳〵。

かる　その金戻して下さんせ。

雲哲　こりや堪らぬ。

ト逃げ出す。五郎三捕へる。立廻りのうち雲哲の衣裳脱げて、百姓の形になる。

縫浮　さては坊主は騙りであつたか。

菊塢　太い奴もあればあるものだ。

ト此うち雲哲、右の財布の中の金を出し、そつと袂へ入れ、懐より別の金包みを出し、財布の中へ入れる事。

つゆ　すんでの事にお京さん、深い所へ

浮橋　身を沈めやうとしたわいなア。

女皆　これといふのもおかるさん

きぬ　きついお手柄でござんすわいなア。

かる　この相摺りもまだ外に。

ト勘九郎へ目をつける。

勘九　コレ〳〵、おれは何にも知らぬぞ〳〵。その證文を返すからは、五十兩の金を此方へ返せ〳〵。

かる　直ぐにお前に返します……サア、今の金を戻しなさんせ。

雲哲　この金は

トしぶ〳〵する。

かる　もう斯うなつては叶はぬ程に、サア、出しなさんせ。

ト無理に懐へ手を入れ、財布を引出す。

雲哲　コレ〱、その財布は、おれがのぢや〱

ト　おかる、財布の中より金包みを出し、財布は雲哲へ返し、金を取つて

かる　ソレ、親方さん、五十兩の金……元へ戻れば双方とも、これで安堵。

ト　證文を裂く事。

雲哲　此方はこれで中安堵。

勘九　おれはさつぱり消え安堵。

菊塢　地口あんども云はれまい。

五郎　騙りの坊主は此まゝ爰で

菊塢　引摺り出して

ト　兩人、雲哲にかゝる。

かる　何事も金さへ戻れば、外に科もないこの人、わたしに免じて、この場は無難に。

勘九　エヽコレ、折角首尾ようやらかしたを、いらざる女が

かる　どなたも〱、足許の明るいうちに、きり〱爰を

雲哲　歸ります。歸ればまゝの四つ紅葉、狂歌でもあるまい……うまくかゝつた五十兩の、金はさそくに

見顯はされ、一旦騙りはしくぢつても、これから向うは山谷町、淺茅ケ原へ飛び行かん。ソレ。

ト宙乘りのやうに向うへ入る。勘九郎、五郎三、菊塢、女形皆々奥へ入る。縫之助浮橋おかる思ひ入れあつて

縫之　危ふい所を、おかるどの

浮橋　わたしが身の上、事なう濟んだも、お前のお庇、エヽ、有り難うござんす。

縫之　それにつけてもおかるどの、若い身空で帶〆めの、その錠前は何か仔細の

かる　サア、これには段々樣子のある事。わたしが赤穗に勤めた時、愉迦山への御代參、行あうたは晦日のざこ寢、その一村は闇がりで、緣を定める妹脊の祭。わたしもその夜についした戲れ、暗がりながら云ひ交した、後の證據の割り笄。夜が明けたら、互ひに顏を見ようと、樂むうちにその男は、武家方の人と見えて、御家來が急飛脚、鎌倉の騷動と、聞くと其まゝ押ッ取り刀、暇乞ひもそこ／＼に、聲を知るべのはかない別れ。それより男は持つまいと、思ひついての女達、證據の笄知れるやう、この通り頭へ差し、盛り場遊里を歩くのも、男を尋ねるばつかりに、いつ云ふとなう異名して、金笄のおかると呼ばれ、されども尋ぬる其お人は、正しく鹽谷家身寄りのお方。

縫之　道理こそ、わしらが身の上

浮橋　身に引受けて世話して下さんすも

かる　以前の古主二つには、男の縁に繋がりし、あなた方ゆゑどこまでも、身に引受けて致すが願ひ。

……爰から直ぐにお二人は、先へ歸つて幸ひと、今夜は八月二十八日、兩國夜店の花火の名殘り

雁木から屋根船で

二人　そんならお前は

かる　追つけ跡から。お二人さん、お先へ早う。どうやら雲も雨氣づく。曇らぬ其うち

トそこらにある番傘を取つてやる。其うち權兵衞後に出かゝり窺ふ。

二人　そんならお先へ。

かる　サア、お出でなされませ。

ト時の鐘にて二人向うへ入る。これを見て權兵衞うなづき、尻をからげ、同じく向うへ入る。奥より

勘九郎出て來り、おかるを見て

勘九　おかる、爰に居たか。いま渡した五十兩の金、改め見れば皆銅脈。本當の金を、サア渡せ。

かる　エヽ、そんならその金は似せ金とは……すりや父さんが

勘九 なんだ、父さんと吐かしたからは、あの坊主はわれの親だな。親の代りに、われを連れて行く。

かる それぢやというて、それをわたしが知ろかいなア。

勘九 知らぬとは云はさぬ。先刻金を受取る時、われが懐の内で摺替へたか。

かる どうしてそんな

勘九 さうでなくば、おれと一緒に。

かる 金はわたしが父さんに、逢うたその上詮議して、お前に返しませう。

ト向うへ行きかゝる。

勘九 イヤ、金よりは、てめえを連れて行くのだわえ。

かる イヽエ爰を。

トせり合ふうち、奥より五郎三、菊塢、花屋舗と書きたるぶら提灯を提げて出で來り、勘九郎をさゝへる。

五郎 日が暮れたれば眞の暗、これを持つて、ちッとも早く。

ト提灯を渡す。

かる 嬉しうござんす。遠くは行くまい。

勘九　邪魔な野郎め。

ト舞臺にて勘九郎、五郎三、菊塢、立廻り。おかる向うへ走り入る。時の鐘の送りにて、よろしく禪のツトメのツナギにて直ぐに引返し。

幕

六段目　三圍堤の段

七段目　兩國柳橋の段

役名‖斧定九郎。飾間宅兵衞。一子、芳松。獅子舞ひ、粂松。石切り、佛權兵衞。奉公人、直助實ハ與九郎。鹽谷縫之助。腰元、浮橋。百姓、與一兵衞。女達、金笄のおかる。加古川の亡靈。

本舞臺、三間の間、向う高足の土堤、前に石の鳥居、稻村、榎の大樹、出茶屋の片附けし床几あり、すべて三圍の土手下、夜の模樣。雨車、かすめたる雷の音、屋根船の騷ぎ唄、時の鐘にて幕明く。ト榎の下茶屋の床几に直助、古簑を着て、竹笠かざし、腰をかけ、雨やみして居る。直ぐに向うより與一兵衞、糸立をかぶり、俄雨にあひし體にて、捨ぜりふにて出て來る。下座の方にて

○竹屋ァ〳〵、向う越しだァ。

ト呼ぶ聲する。與一兵衛舞臺へ來て

與一　さて〳〵暗い晩だ。その上に俄の夕立。づぶ濡れになつた。併し、少しやんだな。

トこの聲を聞き、直助笠を取り、空を見て

直助　成る程、小降りになつた。

與一　アヽ、暗いに誰れかござるの。

直助　ハイ、わしは夕立にあうて、雨やみを待つて居ますよ。

與一　アヽ、さうか。それにしても、簑笠でござるではないか。

直助　左樣サ、簑笠を着て居ても、こりやア向うの畑にあつた、鳥おどしの破れ笠、簑だといつて案山子の簑サ。

與一　アヽさうか。併しさう云ふ聲は、どうやら聞いたやうな。

直助　ほんに、こなたは與一兵衛どのぢやアないか。

與一　ムウ、さういふ貴樣は與五郎か。ヤレ〳〵久しいの。して、貴樣は、やつぱり鳥越に居るか。

直助　イヤ〳〵、あそこは居られない破目で、石原町の石屋の内にごろついて居るが、亭主が屋敷の衆と、花屋鋪へ行つたから、迎ひがてら來て、夕立にあつたのよ。コレ、今ぢやアわしは直助といふ

から、さう思つて下さい。

與一　ハア、直助と名が變つたか。わしも今日は花屋敷へ用があつて行つたが、貴樣とは久しぶりだ。伯州から役に當つて、鹽谷の屋敷へお國中間、大部屋で付合つた儘だ。貴樣は商賣も出來たが、おれはまだよい年をして、まごついて居るが、併し今日は少つとばかり儲け事にかゝつて、コレコレ、よんどころなく後生願ひになつたやつサ。見さつしやい、ソレ袈裟よ。こりやァ珠數よ。なんと後生願ひであらうがの。

ト懷より珠數と袈裟を出し、探らせ見せる。

直助　ほんに年はよらうものだ。貴樣は後生願ひになつたの。ハヽヽヽ。今聞けば、儲け事にかゝつたと云ふが、隨分と稼いで儲けるがよい。

與一　イヤモウ、いくら稼いでも、稼ぐに追ひつく貧乏神があるから、一向内に金が居付かぬ。併し、今日は餘ツほどな儲け口よ。

直助　そりやァめでたいの。いくらほど儲かつた。

與一　聞いて下さい。貴樣だから話すが、五拾兩儲けた。

直助　ヤア、ナニアノ五拾兩。イヤ、とつけもない儲けやうだの。併し、貴樣の人體で、何をしたとて

與一 ……アヽ、そりやア嘘だ〳〵。どうして〳〵、三分か五匁。ナニ五十兩、嘘だ〳〵。

與一 これサ〳〵、嘘ぢやアない、五拾兩。しかも小判で。コレ、嘘ならば探つて見さつしやい〳〵。

ト首に掛けたる財布を見せる。

直助 ドレ〳〵、どうして貴様が五拾兩といふ金。

ト財布を探つて見て、思ひ入れあつて

イヤ、こりやア小判だ〳〵。イヤ、素敵に儲けたな。

與一 なんと違ひはあるまいが。働きのある親仁であらうが。どうして〳〵今時の、若い者に出來るものか。

ト自慢する。

直助 成る程、貴様は働きものだ。財布も慥かに縮緬と、探つたが、さうか〳〵。

與一 その通り〳〵。縞縮緬の財布へ入れてある。こりやア娘が單物の裂れだ。どうだ、働きものか、働きものか。

ト此うち直助、惡心きざしたる思ひ入れあつて

直助 働きものだ、めでたい〳〵。コレ、與一兵衛どの、そのめでたい次手に、わしもめでたい話しが

ある。それにつけても金が先だから、有りやうはその才覺に出た歸り。コレ、物は相談だが、その金へ高利を附けて返さうが、なんと、わしに貸してはくれまいか。

與一　ヤヽ。

ト恟りして

コレ〳〵、おれも命がけに働いたこの金を、利を付けやうといつたとても、居候ふ同然な貴様に、大枚五拾兩、どうして〳〵。

直助　これサ〳〵。そこが今云つた、おれが方にもめでたい話し。外でもないが、おれは今に、大名になるワ。なんとめでたい話しか。

トこれを聞き、與一兵衞、大笑ひに笑ひ出し

與一　ハヽヽヽ、ハヽヽヽ。イヤ、滅法界な事を云ふ男だ。猿廻しの與五郎が、なんで大名になるものだ。あんまりな嘘を云ふ男だ。

直助　成る程、嘘だと思ふも尤もだが、それにはきつとした證據がある。その證據といふは、鎌倉錦桐唐草の織り出してある、高野の屋敷の留裂れで、拵らへた守袋。外にない裂れだ。この内に産れ年月印しあるを、今までは知らずに居たが、わしはこれでも師直さまの落胤で、この頃俄に親類

方の屋敷で、わしを尋ねる最中。併し家の寶、菅家の正筆、今にもおれが手に入れば、それを以て跡目の願ひ。直ぐにわしは大名になれる。なんと人の身の上は、知れぬものでござらうの。

與一　成る程、さう聞けば嘘でもあるまいが、して、その守を持つてござるか。

直助　サア、そこだて。ちよつとした事で、鳥越を立退きの時、ツイ落した。

與一　ナニ落した。アノその證據を落したか。ハヽヽヽ、それ見たか。其やうな大事の物を落したと云うて、貴樣はそれでも大名になる。イヤ、大笑ひだわい。

直助　サ、そこが相談ものだ。その證據があれば、いくらでも金は出來るが、肝腎の書き物がないゆゑに、金に手づかへて居る。コレ、心安くした貴樣の事だ、間違ひはない。その守を尋ね出しさへすれば、直ぐに大名だ。それまでのところを呑みこんで、どうぞ貸して下さい〱。

與一　イヤ〱、貸されないの。ハテ、證據があつたところが、何だかおれにも解らねえ書付け。殊にこれといふ物を持たずに居る貴樣に、何を當途に貸すものだ。そりやア外で工面をさつしやい。又その内に逢ひませう。ヤレ嬉しや、小降りになつた。

ト行かうとする。直助引戻して、向うへ立ち、きつとなつて

直助　そんなら貴樣はこれ程に、云はれぬ大事を口外するも、その金が借りたいばつかり、聞分けなけ

りやアこれからは、腕づくでも借りるからさう思へ。

與一　ナニ腕づくで借りる。コレ、年こそ寄つたれ與一兵衞、惡い事なら仕拔いた親仁だ。そりやアおぬし、人を見そこなつたか。さう強面に出かけりやア、いらぬ金でも貸しはしねえワ。

直助　イヽヤ、借りるワ。

與一　どうして借りる。

直助　斯うして借りるワ。

ト懷へ手を入れ、立廻り。これより船の內の鳴り物をかり、兩人よろしく立廻り。茶屋の床几葭簀など使ひ、立廻りの內與一兵衞、直助の左の小指を喰ひ切る仕組み、トヾ直助、稻村の繩を取つて與一兵衞を絞め殺す事。この時與一兵衞の死骸は殘し、持つて居たる珠數と袈裟を落す。直助、財布のまヽ金を取つて

アヽコレ、金は取つたが小指をば、與一兵衞めが喰ひ切りおつた。アイタヽヽ。

ト思ひ入れ。この時向うより人音するゆゑ、思ひ入れあつて、探り〳〵下手へ入る。雨車、船の騷ぎ、時の鐘にて、向うより浮橋、縫之助、寺島花屋しきといふ番傘を相合にさし、安下駄をはき、花屋しきの貸提灯を灯し出て來り、直ぐに舞臺へ來て

縫之　アヽコレ、爰らあたりは取分けて道が悪い程に、氣を付けて歩きや。

浮橋　アイ〳〵、隨分と氣を付けて歩くわいなア。それにしてもアノおかるさんが、もう來なさんす筈ぢやが、なぜにマア遲い事ぢややら。

縫之　さればいの。今夜は八月二十八日、兩國の夜店の終り、連立つて行くと云やつたが、爰で船を呼ぶか。但し大川橋まで行つて待たうか。

浮橋　マア、そろ〳〵と行つて見ようわいなア。

ト禪のツトメになり、兩人下手の方へかゝる。この時向うより權兵衞、裾をからげ、一本ざし、頰冠りにて傘をさし

權兵　オヽイ〳〵、その提灯、待つてもらはう〳〵。

ト呼びかけながら足早に出て來り、舞臺へ來り

コレ、その提灯は、妹ぢやないか〳〵。

浮橋　ヤ、お前は兄さんぢやござんせぬかえ。

縫之　ムウ、そんなら勘當して今日まで逢はぬ、其方の兄の

權兵　ハイ、權兵衞めでござりますが、して、お前は

縫之　アイ、わしは藝者の箱持ち、佐助というて
浮橋　わたしが使ふ廻しの男。モシ、兄さん、わたしやお前の氣に違ふとて、思はぬ勘當。今日まで逢つても下さんせぬが、思ひがけなう今宵はどうして、呼びかけて來なさんしたえ。
權兵　成る程、仔細あつて勘當した妹、てめえに聞きてえ事があるゆゑに、跡追うて來た。外でもない、てめえは慥か
ト云はうとして、縫之助を見て思ひ入れあり
あのお人が聞く手前、ちつと遠慮が
ト云ひ兼ねる樣子。縫之助思ひ入れあつて
縫之　どうやら兄御さまは、わしへ遠慮の樣子。ドリヤ、わしは雨も晴れたゆゑ、向うの船を呼んで待ちませう。
ト行かうとするを
浮橋　アヽ、矢ツ張り爰に居て下さんせいなア。
縫之　アイ〳〵、船を呼んで直ぐに參ります。アヽ、暗い事ぢや。
ト提灯を榎木の枝へ引掛け置き

竹屋ァ〳〵。

ト呼びながら正面の石段を上り、土手へ入る。此うち捨て鐘、合ひ方になり

浮橋　アヽモシ、早う來て下さんせいなア。

權兵　コレ〳〵妹、勘當したこの兄が、今更詞かはすも、云ひ憎いものながら、聞きたい事があるわいの。

浮橋　改まつた其お詞、して、兄さんの聞きたいと云はしやんすは。

權兵　外でもない。今爰に居た若いのは、ありやわれが勤めて居た、鹽谷の御次男、縫之助どのであらうがな。

浮橋　アイ、さう御存じの上からは、兄さんに隱す事はござんせぬ。成る程、あなたは鹽谷の御次男、縫之助さまぢやわいなア。

權兵　さうであらう〳〵。して、われが懷妊して居るは、いよ〳〵アノ縫之助さまの御胤か。

浮橋　アイ、兄さん、叱つて下さんすな。お屋敷に勤めた時より、お情を受けしあなたさま、今はお家も斷絶して、御浪人の其うちも、わたしが覺えた三味線の、三筋の糸にあなたをば、御養育の其うち、宿せしあなたの御胤、それがお前のお心に、違うたと思ふから、勘當受けても今日まで、

お詫もせぬのでござんすわいなア。

権兵　すりや、いよ／＼縫之助どのゝ胤に、相違ないと云ふか。

浮橋　アイ、兄さん、堪忍して下さんせ。

ト権兵衛愁ひのこなしあつて

権兵　鹽谷の胤を高野の家中、垣坂氏の妹が、宿せし胤は、あの世の御主人、師直さまへ

浮橋　エヽ。

権兵　イヤサ、妹、ちつと頼みがある。

浮橋　わたしへ頼みとはえ。

権兵　マア、此方へ來い。

ト浮橋、権兵衛の側へ寄るを、拔打ちに切りつける。

浮橋　ヤア、何でわたしを……モシ、惡い事があるならばあやまりませう。どうぞ助けて下さんせ／＼

ト逃げるを権兵衛また切りつける。立廻り。トゞ浮橋、権兵衛の刀持つ手へ縋り付くを

権兵　われを殺さにやァ古主へ立たぬ。不便ながらも死んでくれ。

浮橋　兄さん、お前も知る通り、大事のお主のお胤をば、宿せしわたし。死なで叶はぬ事ならば、身二つ

になるまで待つて下さんせ。コレ、拜みますわいの〳〵。

ト思ひ入れ。權兵衞こなしあつて

權兵 オヽ、尤もぢや〳〵。がコレ、おれが云ふ事、よう聞けよ。

ト誂らへの合ひ方になり

この兄も妹も、御恩になつた師直さま、あなたの御家中、高祿頂戴いたしたる、垣坂作左衞門が二人の兄弟、おれは丁度十四の年、傍輩の子供をあやめ、直ぐに屋敷を御追放。その後町家で、人となり、今は石屋の權兵衞と、人に知られた石切り職人。縁でがな高野家師直さまの石碑の御用、これぞ死なれた親人が、お引合せと思ふから、値段に構はず落札にと、思ふに相違の疑ひは、石屋が妹は鹽谷の腰元、殊に次男の縫之助が、胤を宿せし女が兄、石碑の御用は叶はぬと、云はれて見れば皆尤も。それゆゑわれを殺した上、未來の親にも云ひ譯して、高野の屋敷へ内々にて、斯くと語れば行く〳〵は、お家も立たばそれにつれ、親仁の家名を引起すにもよい傳手と、それで其方を殺さにやならぬ。いらざる鹽谷の血筋の胤、懷妊したがわれが因果、妹、コレ、諦らめて死んでくれ。親の爲、家の爲、兄に命をくれいやい。

トいろ〳〵思ひ入れ。浮橋これを聞いて

浮橋　事を分けてのお頼み。深手を負うたわたしぢやゆゑ、どうで助かる心はなけれど、只悲しいはお腹の嬰兒……今はの際に一目逢ひたい、縫之助さま。縫之助さまいなう。

ト呼ぶゆゑ權兵衞、縫之助に聞かすまいといふ思ひ入れ。この時縫之助出て來り、この體を見て

縫之　ヤヽ、浮橋を

浮橋　縫之助さま。

縫之　なんで其方を

ト權兵衞を留めて立廻りうち、土手へ上がり、權兵衞へ組みつく。誤つて權兵衞、縫之助の右の肩先より腕へ掛けて切る。これにて縫之助、たじ〳〵として思はず土手より川へ落ちる。水音する。浮橋は權兵衞の裾にとりつき

浮橋　ヤヽ、お前は御主人縫之助さまを

權兵　サア、川端にてさゝへしゆゑ、肩先切りしと手ごたへして、思はず川へ

浮橋　アヽ、情ない。あのお方こそわたしが深う、云ひ交せし縫之助さま。お果てなさるゝその時は、お前はお主殺しぢやぞえ。そればつかりが悲しうござんす。

權兵　ヤヽ、何と云ふ。この兄が主殺しとは。

ト合ひ方、蟲の音。

浮橋　その譯これまでは申さぬか、お前は幼いその時に、屋敷を追放、町家の住居、お果てなされた父さまが、枕の許へわたしを招き、其方は身共が實の娘、兄三平は他家より養子、彼れが實の親といふは、鹽谷家の家中斧九郎兵衞、彼れが女房双子を出産、某が兄の男子を養子として、九郎兵衞には弟の男子、定九郎といふ悴こそ、兄三平が双子の兄弟、證據は實親九郎兵衞が、後の印と添へたる短冊「花だにも散らで別るゝ春ならば、いとかく今日をおしまざらまし」。この詠歌の上の句は、兄が守に入れ置きて、又下の句は弟へと、九郎兵衞さまより父さまへ、詳しいお話し。いはば兄は鹽谷の御家中、それを高野の身共が養子、さすれば兄の三平が、代りに鹽谷家へ奉公さすは、女ながらも其方ばかり。この事必ず口外すな、とわたしへ遺言。この仕儀ゆゑお知らせ申しまする。モシ兄さん、お前は鹽谷家の御家來筋、ひよんな事して下さんしたなァ。

權兵　ヤヽヽ、心覺えの妹が詞。守の内の短册は、親作左衞門が詠歌と存じ居りしが、さては鹽谷の家中にて、斧九郎兵衞どのは實の親であつたか。さすれば妹を手にかけて、主人の鹽谷家血筋のお胤。殊に思はず手を負はせし、縫之助さまといひ、申し譯なき身の誤り。ホヽホイ。

ト捨て鐘、提灯の灯消える事。懷中の守より短册を出し、當惑の思ひ入れ。浮橋すがり寄つて

浮橋 死ぬるわたしはいとはねども、案じらるゝは縫之助さま。どうぞあなたのお行くへ尋ね、命全う。
モシ、兄さん、これぱつかりが、わたしが願ひ。

ト いろ／＼あつて絆切れて落入る。權兵衞すがり寄つて

權兵 コレ、妹、許してくれ。堪忍せい。料簡してくれいやい……妹が死骸も胎内の、お主の胤も直ぐ
に水葬。そうぢや／＼。

ト 權兵衞、死骸を抱上げ、石段より土手へ上がり、向うの川へ死骸を流し、立戻つて鞘を探し、無き
ゆゑ

鞘を爰らへ。

ト 鞘を尋ねる思ひ入れ。替つた合ひ方、蟲の音、捨て鐘。向うより、おかる、花屋鋪の貸し傘をさし
提灯を提げ、下駄がけにて出て來り

かる ほんに思はぬ障入り。さぞマアお二人は

ト 此せりふにて舞臺へ來る。權兵衞見て

權兵 モシ／＼、どなたか存じませぬが、ちと尋ねます物がござります。少しの間提灯の灯を、お借り
申したうござりまする。

　　トこの聲を聞き、おかる、よく〳〵見て

かる　さう云ひなさんすは、先刻に逢うた權兵衛さんぢやァござんせぬか。

權兵　ほんに、さう云ふはおかるぢやの。

かる　アイ、かるぢやわいなァ。

權兵　ハテ、惡い所で

かる　エヽ。

權兵　イヤ、ちつと灯を。

かる　使ひなさんせ。

　　ト提灯を渡す。權兵衛これを取つて側を尋ね、鞘を見つけ

權兵　ヤレ嬉しや。これで安堵の

　　ト提灯をおかるへ返し、白刃を拭ひ、鞘へ納める。此うちおかる、この様子を窺ひ見て

かる　權兵衛さん、こりやお前、どうやら人を。

權兵　よんどころなく男の意地づく、仕留めた様子を、コレおかる、必ず口外してくれるな。

かる　アイ、女でこそあれ金輪際、他言せぬのが

權兵　男勝りの其方の氣性、知つたは權兵衞。

かる　この上お前も、心置きなう行きなさんせ。

權兵　ア、女に稀れな。

ト思ひ入れ。思はず灯にて與一兵衞の死骸を見つけ、恟りして

かる　ヤ、こりや父さんの死骸。こりや何者がむごたらしう。コレ父さん。こりやモウ縡が切れたわいの。

ト泣き落す。權兵衞思ひ入れあつて、立寄り見て

權兵　そんならこれがこなたの父親。ハテ、今までに見ぬ死骸。こりや何者が……ハテ氣の毒な

ト合點の行かぬ思ひ入れ。おかる此うち與一兵衞が死骸の懷中尋ね見る事あつて、口に殘りし小指を見付け

かる　花屋鋪での樣子といひ、正しく摺替へ渡したる、誠の金は父さんの、懷中にと思ひの外、見えぬばかりか、口に殘りしこの小指。そんなら敵の手がゝりは

權兵　ナニ、死骸の口に小指が殘つて

ト右の手に提灯を持ち、左の手にて與一兵衞の死骸を改め、口に小指のあるを見て

成る程、喰ひ切りし小指を含みし樣子。

ト この時おかる、權兵衞の指なきを見つけ、こなしあつて

かる　死骸の口に殘りし小指、いま灯にて窺ひ見るに、左の小指の切れたるお前、こりや、こなさんが父さんを

權兵　ヤ。

かる　親の敵の權兵衞さん、爰一寸も動かしやんすな。

ト きつと詰め寄る。權兵衞思ひ入れあつて

權兵　ヤレ待ておかる。成る程、人は殺めた。現在の妹ながらも

かる　ヤ。

權兵　アイヤ、云ふに云はれぬ譯あつて、成る程人を殺めたなれど、おぬしが親は毛頭切らぬ。證據はおれが白刃を其方に

ト 一腰を拔いて、おかるが前へ差出す。

かる　この一腰をアノわたしへ、渡す心は討たるゝ覺悟か。

權兵　イヽヤ、白刃を改め見やれ。

かる　エヽ。

　トおかる一腰を取つて鼻紙にて拭ふ。この紙へ薄く血のつく樣子。此うち權兵衞、提灯を差出し居る

　おかる、拭ひし紙を、よく／＼見て

矢張り白刃に血汐の殘り、紙にあり／＼

權兵　殘る血汐が殺さぬ證據。

かる　ヤ。

橫兵　橫死なしたる與一兵衞、襟に殘りしこの繩は、絞め殺したるこの死骸、惣身に疵もなく、おれが白刃に殘るは生血。さすれば餘人を切りたりとも、親仁を殺さぬコレ潔白。これで疑ひ晴らしやれ、おかる。

　ト思ひ入れ。おかるこなしあつて

かる　さう云はしやんすりや父さまに、疵のないのは、こりや外に殺せし者のあるにもせよ、死骸の口に殘りし小指、お前の左の小指の無いは、割符を合すわたしが疑ひ。

權兵　それも尤も、この上は、其方の親を殺したる、その曲者を詮議して、討たせにやならぬ男の面晴れ。されども失ひしその金の

かる　數は慥かに五十兩、財布の裂れはわたしが着替へ、縞縮緬の浴衣の裂れ。

權兵　それぞ證據のよき手懸り。助太刀せねばこの身の疑ひ、晴る〻それまで不肖でも、女房氣のない權兵衞が、內へ連れ行き表向き、女房というて側放さぬ、それがこなたへこの身の潔白。

かる　成る程わたしも疑ふ小指。誠討つたる外の敵のわかるまで、こなさんの側は離れぬ。さりながらもしこの事がわたしが尋ねる、男へ聞えりや不心中。

權兵　疑ひ受くるもそりや尤も。それには何ぞ仕やう模やうも

ト思ひ入れ。この時おかる、灯にて落ちてある袈裟と珠數を取上げ見て

かる　こりや父さんが、先刻に出家と僞りし、その時かけし袈裟と珠數。

權兵　それぞ幸ひ身の潔白。世間の人の噂する、佛權兵衞相應に、この珠數朝夕放さぬは、女房は持てど一つ寢を、せぬのがこなたの尋ねる男へ

かる　その心中はわたしも共々。男持つともなか〳〵に、枕交さぬ誓ひには、心は尼も同然に、肌にかけたる五條袈裟。これでは帶へ卸ろしたる、錠前よりも慥かな心中。

トおかるは袈裟をかける。權兵衞は珠數を襟へかけ、思ひ入れ。此うち直助後へ窺ひ出て立聞きする。

權兵　それでは堅い石原の、石切り商賣權兵衞が

かる　女房といふは表向き。
權兵　敵の手懸り知るゝまで
かる　いはゞ女のかゝりう人。
權兵　其うち夫が知れたなら
かる　必らずその時
權兵　おれが仲人。
かる　思ふお方と
權兵　添はせてやるワ。
かる　エヽ、嬉しうござんす。
直助　あの嬉しさうな
ト思はず云ふ。この時權兵衞振返り見て
權兵　慥か目見得の
かる　エ。
ト思ひ入れ。直助提灯を打ち落す。これを木の頭。權兵衞おかるを圍ふ。

權兵　降らねばよいが。

トよろしく、キザミにて拍子幕

引付けると船の鳴り物、祇園囃子、賑やかなる鳴り物にてツナギ。返す。

本舞臺、三間の間、向う一面に黒幕、眞中に柳の大樹、ふつさりとしたる同く吊り枝の上の方川岸端に盆提灯を吊し、柳の下に非人三人、蚊をいぶし居る。舞臺前波板、爰に加古川の死骸、前幕の形にて菰を掛け、繩にて留めて居る。非人これを番して居る體。尤も八月二十八日夜、藥研堀不動の縁日、鰐口の音、回向院の一ッ鉦聞え、雨車、かすめし雷の音、すべて元柳橋川岸通りの模樣よろしく幕明く。

非一　さて／＼きつい蚊だぞ、誠にあばれ蚊だ。

非二　時に今夜は八月二十八日、不動樣の縁日といひ、夜涼みの終り、人の出る晩だのに、今の夕立に涼み船も、橋の下へつけたと見えて

非三　これでも今夜は花火があらうか。

非一　無くつてどうするものか。是非花火は後にはあるであらう。

非二　早く花火が上がればよい。さもないと、あの女の浮死骸が目について、氣味が惡い。

非三　エヽ、けちな奴だ。浮死骸とは云ふものゝ、色も變らず生々と、生きたやうな女の死骸。もし化けて出ると、おいらは抱いて寢るのに

非一　或る程、その氣でなくちやァ死骸の番はならねえ。

ト話し合つて居る。一ツ鉦、時の鐘、さんげ〳〵の聲する。向うより前幕の宅兵衞、芳松を負ひ出る

獅子を冠りし兼松、捨ぜりふにて出て來り

兼松　ハテ、しつこい親仁だ。モウ〳〵、おいらが仲間へは置かぬ。貸した物を、サア〳〵返せ〳〵。

宅兵　ハテ、其やうに云はつしやるな。何と云つても、まだ子供ぢやわいの。

兼松　子供でなくつて。角兵衞獅子は皆子供だワ。其うちにもあんまり不器用な餓鬼だ。

ト云ひ〳〵舞臺へ來て

サア〳〵、獅子も太鼓も寄越せ〳〵。

宅兵　これはしたり、とつくりとマァ、勘辨して見さつしやい。子供の事ぢやわいの。

トこの爭ひを非人の皆々見て

非一　アヽなんだ、角兵衞獅子の雨に逢つたのか。何かごたつきを始めたな。

非一　コレ〳〵、獅子舞ひさん、暗闇下

非二　何をごたつくのだ。

宅兵　モシ〳〵、聞いて下さりませ。わしらは播州の者でござるが、この孫を連れて尋ねる人がござるゆゑ、この江戸へ參つたところ、この間あの人が見て、越後獅子の仲間へ入れと云ふから、マア幸ひとその仲間入りしましたを、この子が覺えぬ不器用ぢやのと、今から外へ行けと云ひます。あんまりな無理ゆゑ、その爭ひでござります。

兼松　コレ、聞いて下さい。わしも、又これ程不器用ではあるまいと、あの餓鬼を見込んで世話もして見たが、逆立ちは勿論、とんぼう返りも出來ぬから、そこで思ひ切つてお暇を遣るのだ。

非一　こりやア尤もだ。角兵衛獅子の身の重いは、よい〳〵を飛脚に使ふやうなものだ。

非皆　こいつア尤もだ〳〵。

兼松　これ〳〵、誰れが聞かしやつてもあの通りだ。サア〳〵、道具を返して、外へ行きやれ〳〵。

宅兵　其やうに云ふ事なら、よいワ、皆返します〳〵。サア〳〵、われも脱げ〳〵。

ト芳松の獅子も太鼓も取つて出す。

芳松　コレ、祖父さま、今夜はどこへ寢るのぢやえ。

宅兵　オヽ、どこと云つたら、橋の下か、人さまの軒の下へ

　　トほろりとする。三人これを見て

非一　成る程、小僧に親仁、厄介ものだ。併しこの雨では、軒の下にも寝られまい。コレ、斯うさつしやい。爰から四五丁ゆくと、橋本町といふ所がある。そこへ行くと、隨分泊める。さうさつしやい、さうさつしやい。

宅兵　ハイ／＼。そんならその橋本町とやらを尋ねて參りませう。コレ、獅子舞どの、道具は皆返しましたぞ。これはどなたもお世話でござりました。

三人　隨分急いで行かつしやい。

宅兵　ハイ／＼。サ、孫よ、しつかりと取附いてゐろよ。ドリヤ、橋本町を尋ねませう。

　　ト矢張り件の鳴り物にて宅兵衛、芳松を負ひ、下手へ入る。

非一　ハテ、遠國ものだに

三人　可哀さうにな。

兼松　なァに、あんな奴に油斷はなりませぬ。併し、この雨は止まうかな。

三人　イエ／＼、どうか又降りさうだ。

兼松　そいつア悪い噂だ。わしは板橋の商人宿から出ましたのだが、それぢやア今夜は歸られますまい
お前方は何だえ。

非一　おいらは爰へ流れ寄つた、浮死骸の番をして居るのよ。

兼松　それは幸ひ。モシ〳〵、どうぞわし一人を、お前方の番小屋へ寢かして下さるまいか。

非二　そりやア寢かしてもやらうが、今のやうに降ると、漏つてならぬ。爰よりは兩國の見せ物小屋が
よい。

兼松　どこでもようござります。寢られさへすればよいのサ。

非三　寢かしてはやらうが、貴樣、一升買はせるが合點か。

兼松　そいつは高い旅籠だが、濡れるにはましだ。一升買ひませう。泊めて下さりますか〳〵。

非一　合點だ〳〵。貴樣に酒屋を教へるから、一升買つて來るがいゝ。

ト此うち雨の音はげしく、かすめて雷聞える。

三人　アヽ、また降つて來た〳〵。

非二　サア〳〵、見世物小屋へ行かう。コレ、角兵衛どの、貴樣は仕合せだ。今夜は納めの花火を見せ
るワ。

兼松　そいつァ有り難い。降つてもあらうかの。
非三　あれ見さつしやい。玉屋の船が出て居らァ。
三人　サ、來さつしやい〳〵。

ト矢張り一ツ鉦、時の鐘、變りし合ひ方。皆々下手へ入る。この鳴り物にて向うより星五郎、新らしき小袖、裾をからげ、濡れたる體。大小にて裏付き草履を帯に挾み、新しき蛇の目の傘、少し破れたるをさし、出て來り、花道にて

星五　アヽ、少し小降りになつたが、思ひがけない夕立に、誠に難儀いたした。これにつけても御主人縫之助さまの御事。この邊にと聞いたゆゑ、尋ねて來たが、お行くへとても

ト思ひ入れあつて

ドリヤ、小雨のうちに、兩國あたりを尋ねませう。

ト舞臺へ來る。この時かすめて雷の音して、吊せし提灯のあかり、ほの闇くなり、消える。これにて寢鳥、薄ドロ〳〵、凄き合ひ方。前の流れへ燒酎火立のぼる。星五郎きつと目をつける。此とたんに上の方へ、髮を亂し、物凄き拵らへの幽靈の加古川をせり上げる。星五郎行合ひ、きつと見つけ、摺れ違うて加古川下手へ來り、星五郎は上の方へかゝり、怖毛立ちし思ひ入れにて立ちどまり、加古

川無氣味なる振りにて跡を見返る。星五郎も見返り、ぎよつとして刀を拔かうとする。加古川、忽ち消える。星五郎思ひ入れあつて

心の迷ひか知らねども、どうやら今のは加古川に。

ト思ひ入れ。この時本雨さつと降り來る。星五郎こなしあつて

また降り出したか。ハテ、うるさい雨だ。

トこの時下手、ばた〳〵にて、兼松、件の獅子を冠り、一升德利を提げ、捨ぜりふ云ひながら一散に向うへ走り入る。このうち星五郎、柳の方へ片寄り居て、向うをよく〳〵窺ひ見て

なんだ、彼奴は。アヽ、夕立に逢つた角兵衞獅子だな。

トこれをきつかけに下手にて、本鐵砲の音する。

大勢　玉屋アッ

ト譽める聲と一時に知らせあつて黑幕落ちる。向うは東兩國の方、一ツ目橋、お船藏、川の面には屋形船かゝり居る體。正面玉屋の船より、流星上がりしあかり、これにてよき所へ柳橋の袂を見せたる道具になり、この途端によき所へ加古川、御守殿女中の拵らへにて、薄ドロ〳〵にて現はれる。星五郎フッと見付けて、窺ひ寄つて

星五　ヤ、こなたは加古川。

ト これにて加古川、持つたる扇をさつと開く。これを木の頭。川面より流星、だん〳〵と落ちて消える。玉屋の提灯、船の内にて振る。これにて又黒幕落ちて黒闇の景色となる。加古川、扇にて顔を隠す。星五郎さし覗き窺ふ。これをキザミ、よろしく拍子

幕

八段目

小名木川隠れ家の段

役名――盗賊、暁星五郎　仮名斧田松月　實ハ斧定九郎。醫者、太田了竹。鹽谷縫之助。茶屋の女房、お勝。若い者、喜六。飾間の宅兵衛。一子、芳松。入間丑兵衛。林平内。町抱へ、亥之助。加古川の亡靈。

本舞臺、三間の間、中足の屋體、上の方九尺の障子屋體、一面に大和葺き、櫛形欄間、茶壁、正面更紗暖簾口、床の間違ひ棚飾りつけ、至つて美麗に、栗丸太簀戸の門口、斧田松月と記せし表札、舞臺先に柵附きの浪板。すべて本所小名木澤邊寮のかゝり。爰に丑兵衛、平内、浪人者。了竹、醫者にて、尺八の稽古して居る。茶屋女房お勝、若い者喜六、掛取りの體。亥之助、町抱へ、半纏股引、鐵

棒持ち、門口に立ちかゝり居る。誂らへの唄、尺八の附け笛にて幕明く。

亥之　お頼み申しやす〳〵。

平内　どうれ。

ト花を活けさし、門口へ來り

こなたは町抱への亥之助どの、何の用だか、此方へ入らつしやい。

亥之　御免なさいまし……ア、菊が威勢よく活かりやしたね。モシ、わつちも先生の弟子になつて、祭りの宵宮なぞには、おッ立つて見たいね。

平内　よからう。身共が下稽古をして遣はさう。

亥之　併し、尺八にしようか。

丑兵　ハテ、貴樣は見掛けに寄らぬ、風流な男でござるわい。

了竹　町抱へのこなたが、尺八を稽古して、何にさつしやる。

亥之　モシ、いゝ、いゝ、ひよつとこの囃子を、尺八でいつたら、新らしからうと思つてサ。

喜六　それぢやア面の代りに、天蓋を冠つて踊らざアなりますまい。

かつ　とんだ俄でござりますよ。

平内　ほんに、俄と申せば、久しく町へも推參いたさぬて。

丑兵　どうぢやな。この頃は北國は全盛かな。

喜六　モシ、お遊びは何でもこれからの事でござります。

かつ　道理で毎晩、小格子へ行くさうでござんすなう。

喜六　南無三、色の在所を悟られしか。

かつ　なんの厚かましい……モシ、客人のお迎ひに參りましても、おいらんの次の間で、寢言にまで小格子の女郎を、のろけるといふ評判でござりまする。

平丑　それは又きつい逆上せやうぢやな。

了竹　ちと三黄淨心湯でも調合して遣はさうか。

喜六　モシ、どうぞ其お藥をお願ひ申しまする。私しは喰べませぬが、女に服ませまする。

亥之　おきやアがれ。

かつ　お聞きなされませ。ちよつとしたところが、あの位なものでござりまする。ほんに、それはさうと、あなた方も、きついお遠々しい事でござりまする。是非今晩などは、裏に行かしやつておあげなされませ。

平内　行きたい事は行きたいが、入間氏、先生は思し召しがあるかしらん。
丑兵　左やうサ、傾城買ひまでが先生の御指南をうけるてな。
かち　ほんに旦那は、今日はお屋敷へでも行かつしやりましたかいなア。
亥之　お内なら、わつちもお目にかゝりたうござりやす。
平内　昨夕夜を更かしたせゐか、あそこで寝てござるが、ちよつとお起し申さうか。

ト平内、上の方障子屋體を明け、二枚折り屏風の側へ行き

モシ、先生、ちよつとお目にかゝりたうござります、先生。

ト呼び起す。この時屏風の内より平内を投げのける。星五郎、現の様に枕刀を取つて、立上がる丑兵衛、了竹驅け寄つて

丑了　モシ〳〵、先生。これはマア、いかゞ致した事でござる。

ト星五郎心付きたる思ひ入れあつて

星五　オヽ、そんなら今のは夢であつたか……思はず知らず。ハテサテひやいな。
皆々　ハテ、きつい魘はれやうな。
平内　すんでの事に、危ない目にあふ所でござつた。

星五　ハヽヽ。平内どの、お許しなされい。

ト合ひ方になり、平舞臺へ來り

了竹　これは了竹老、毎日御苦勞でござりまする。時に病人は、少しはよい方でござるかな。

星五　まだ今日は伺ひませぬが、何を申すも、昨日お話し申す通り、彼の高直な藥種を用ゐねばならず

それには又種々の

星五　その價の高直な儀も、隨分承知いたしてござる。

かつ　モシ旦那、あなた、御病人と仰しやりますは、御新造さまでござりますか。

平丑　ナニ、先生は當時獨身者でござる。

かつ　左樣かいなア。イエモウ、女のない內と申しまするものは、いつそ體裁のないもの。それに致しては、よう綺麗に風雅なお住居でござりまするなア。

星五　イヤモウ、風雅でもなく洒落でもないが、浪人のせう事なしに、松月と表札打つて、基双六尺八活花、或ひは劍術指南と申すも烏滸がましいが、習ひ覺えし遊藝の、役に立つたも廣いお江戶の有り難さ。日々殖え來る門弟中、その庇ゆゑに晝日中、足を延して高鼾、冥利に盡きたる惡い夢……イヤ、びつしよりと汗になりました。

かつ　ほんに、あなたもきついお勞れでござりまする。定めて昨夜などは、どこぞへこつそりと、入らつしやつたでござりませうわいなア。

喜六　但し盗人の晝寢も、當がなければとやらでござりませう。

　　ト何心なく云ふを、平内、丑兵衛、我れを忘れて

平内　ヤ、それをどこから聞き出して

丑兵　もしや、づきでも

星五　コレ……エヽ、氣の付かない

平丑　エ。

星五　酒でも出して下さればよいに。

かつ　イエモウ、お構ひなされますな。此方へ參りがけに、扇橋の旦那の所で、過しました。モシあなた、今晩は是非々々お連れ申しまするぞえ」

喜六　直ぐにこれからお供いたしませう。

星五　イヤ、今夜はよんどころない用事があるで、いづれ近々に參らう。ほんに、いつやらの勘定をせなんだ。附は何程おやな。

かつ　ナニ、お次手でよろしうございまするが、喜六どん、先頃の附はいくらであつたか。

喜六　慥か九両と二朱でございました。

ト紙入れより出さうとする。

星五　よし〳〵、附は見ずともよい。

ト手箱より十両出して

先づ、これを取つて置いてくりやれ。

かつ　あなた、お次手でもよろしうございますに。

ト小判を見て

モシ、十枚でございまするね。左様なら、七ツお剰銭を上げませう。

ト紙入れを出さうとする。

星五　なにサ。剰銭には及ばない。船にでも乗つて帰らつしやい。

かつ　これは有り難うございます。

了竹　さてよい船賃な。愚老、そなた衆を乗せる船頭になりたいわい。ハヽヽヽ。

喜六　時におかみ、もうお暇申さうではございませぬか。

かつ　この人も、お拂ひを戴くと直ぐに歸ると云ふは、あんまり現金な。

喜六　さうではござりますが、この頃は日が暮れると、殊の外物騷で、方々へ押込みが入るといふ噂でござりまする。

亥之　イヤ、その物騷について、モシ先生、わしやア町役人から云ひつけられて、お觸れがあつて參りました。

星五　町役人の觸れとは何事ぢや。

亥之　この頃慥か曉の星五郎といふ盜賊が、手下を連れて方々へ押込みに入るとの事、お上より嚴しい御詮議。もし少しも心當りがあるなら、早々代官所へ訴へ出るやうにと、お觸れでござります。

ト此うち平内、丑兵衞、はつと顏見合せ、思ひ入れある。

星五　ムウ。その曉の星五郎とやらは、聞いたやうな名ぢやなア。

了竹　ハヽア、先生にはお心當りでもござるかな。

星五　心當りがあると申すでもござらぬが……コレ、其お觸れは、身共が宅へばかりか。

亥之　イエ、門並でござりやす。訴へて出れば、モシ、褒美になる樣子でござります。

星五　ハヽヽヽ。褒美は所望でないが、もし見當つたなら、訴へ出るまでもなく、その曉の星五郎と

いふ奴、直さま召捕つて遣はさうて。

ト莨をのみながら空うそぶいて居る。平内、丑兵衞、氣味の惡い思ひ入れ。

勝喜　イヤモウ、怖い事でござります。

星五　ほんに其方衆は、日の暮れぬうち歸るがよからう。

かつ　ハイ、左樣なら、どうでも今晩はお出ではござりませぬか。

了竹　先生、ちよつと御病人をお見舞ひ申しませうかな。

星五　何分お賴み申します。

亥之　ドレ、これから、隣町へ觸れて來やせう。

かつ　これは旦那、有り難うござります。ハイ、あなた方。

喜六　左樣ならお近いうちに。

星五　內方へよろしくお賴み申す。

ト唄になり、お勝、喜六、亥之助、捨ぜりふにて向うへ入る。了竹は暖簾口へ入る。星五郎、平內、丑兵衞殘り

平內　頭、どこからどう觸れが廻つたやら

丑六　嫌な噂を聞くものでござるな。

平内　こりやモウ、この小名木川を

兩人　ふけざアなるめえ。

星五　ハテ、性根の据らねえ。そんなにびく〳〵する事はねえ。……誰れが爲、武士の身よりも名をば惜しまん。

ト謠をうたひながら立つて、あたりを見廻し、ちり手水を遣ひ、正面の神棚に隱しある菅家の一軸を取出し、思ひ入れあつて

世に羨ましきは、大星氏を始めとして、四十餘人の人々は、武士たるものゝ道を守り、末世に殘る忠の一字、忠といふ字は、變らねど、その行き方は雪と墨、黑白も分かぬ闇の夜に、山名の館へ込入りて、奪ひ取つたる菅家の正筆。

平内　それゆゑ今もあの如く、盜賊曉星五郎。

丑六　嚴しい詮議とあるならば、

星五　コレ、氣遣ひせずとも、奥の一間で

兩人　でも、もう爰には

星五　ハテ、御病人の介抱を

兩人　エヽ。

星五　お頼み申す。

ト奥へ思ひ入れ。これにて兩人、こなしあつて奥へ入る。星五郎思ひ入れあつて

主人の爲とはいひながら、世に淺ましき取沙汰を、聞くにつけても、この間、柳橋にてその以前、云ひ交したる女房の、加古川に巡り逢ひ、少しの知べに山谷町、與五郎が掛り人と、聞いたばかりにその後は、問ひ音信も絶えてなく、殊に加古川が親里に、預け置きたる悴芳松、これとても息災なるか。何を云ふにも今日あつて、明日は無き身と思ふゆゑ、今も今とて夢見の惡さ、思はず刀に手をかけて。アヽ、破るまじきは天下の掟。兎にも角にも世の中の、人と莨の善惡は

ト灰吹を叩き、思ひ入れあつて

煙とならねば、知れぬものぢやなア。

ト思ひ入れ。合ひ方、時の鐘にて、向うより宅兵衞、前幕の親仁にて、芳松の手を曳き、奉加帳を持ち出で來り

宅兵　ハイ〳〵、段々の不仕合せにつきまして、剃髪いたしまする者。どうぞ衣の奉加をお願ひ申しま

する。

ト此の聲を聞き星五郎、錢入れより錢を出し、手の内を入れようとして、宅兵衞と芳松を見て、思ひ入れあつて

星五　見れば足弱を連れて袖乞ひの老人。ハテ、氣の毒な。此方へ入つて、茶でも飲んで行きやれ。

宅兵　ハイ〱、それは有り難うござります。サア〱、芳松よ、旦那がぶう飲ませやうと仰しやる
サヽ、入りや〱。

ト内へ入り、星五郎手づから茶を汲んで出す。これを戴き、宅兵衞、芳松にも飲ませ、自分も飲んで

坊主めが殊の外かわきまするさうにござりまする。もう一ツお願ひ申しまする。

星五　サア〱、いくらでも飲まつしやい…アヽ、老人は上方筋の人と見えるが、さぞ難儀であらう。
その幼子は、こなたの孫と申すやうな事かな。

宅兵　ハイ、坊主めは、この親仁が孫でござります。

星五　ムウ。して、國は何國ぢや。

宅兵　ハイ、播州室の津で、宅兵衞と申す、水飲み百姓でござります。

星五　ムウ、すりやアノ其許が

ト思ひ入れ。宅兵衞こなしあつて

宅兵　モシ、旦那さま、ちよつとお見受け申しまするから、お情深いにあまへまして、お話し申します

私しと、この坊主めが身の上を

星五　ヤ。

宅兵　モシ、お聞きなされて下さりませ。

ト合ひ方になり

私しには一人の娘がござりまして、桃の井さまへ御奉公に上げて置くうち、鹽谷家の御家中、斧定九郎とやらいふ侍ひと馴染めて、儲けたは卽ちこの子。人に隱して產み落し、國へおこして丁度七年。祖父や祖母が手鹽にかけ、此やうに育てあげまする內も、中さば聟の定九郎どの、どうぞ一度は逢はうと思ふうちに、鹽谷さまのお家は騷動。ほのかに聞けばお主の爲に、盜賊をするとやら、惡い噂も耳に入り、また娘は不義の科ゆゑ、お暇のみか播州は、殿樣のお國ゆゑ、現在親の內へも歸れず、この東にさまよひ居るとの事。彼れこれを氣病にして、たうとう婆は去年の春、死んでのけましてござりますわいの。

ト思ひ入れ。星五郎こなしあつて

星五　ヤヽ、すりや、連合ひには……南無阿彌陀佛々々〳〵々々々々。

宅兵　ハヽア、勿體ない。見ず知らずの旦那さまが、其やうに御回向なされて、有り難うござりまする……そこでこの孫めが、友達の腕白を見るにつけ、おれにはなぜ父樣も母樣もない。あるなら逢はせて可愛がつてもらひたいとせがみまする。そこで國の家財を賣り拂ひ、二親に逢はせませうと、永の道中、野に臥し山に寢て、とんと乞食の境界。何をしても仲間にはこづき廻され、この上は出家なとして、上方筋を尋ねようと思ひますが、先のない私し、ひよつと今にでも死んでのけたなら、この孫めはどう致すでござりませうかと、それが悲しうござります。

芳松　旦那さま、祖父さまがあのやうに泣いてぢやゆゑ、坊が父樣や母樣を知つてござるなら、敎へて下され。

星五　オヽ、尤もぢや〳〵。尋ねる親は現在爰に。

トふつと氣を更へ

サ、尋ねる親は盜賊すると、いま老人の物語り。親の惡事は子に報ふ、天下の掟、譬へば身共を尋ねるその子の親として、現在爰で逢うたりとも、ヤレ舅どのか我が子かと、名乘りたうても名乘りはせぬ。親子互ひに知らぬ同士、それがまだしも天の助けぢやによつて、向後その子の二親

の事は思ひ切り、國へ歸つてその孫の、成人するのを樂みに暮らすがよからう……コレ、よい子ぢや。をぢが云ふ事よう聞きやれ、其方が逢ひたがる親といふはな、盗賊する邪慳な心。たとへ其方に逢うたりとも、さのみは可愛がりもせまい程に、祖父さまと連れだつて國へ歸り、おとなしう成人しやれ。

芳松　イエ／＼、わしは叩かれやうが殺されやうが、父様に逢ひたうござります／＼。

宅兵　オヽ、よう云うた。それ程までに逢ひたがる孫めが一心でも、その聟どのに

星五　逢はれぬも宿世の因縁、敵同士と諦めて、國へ歸るが上分別。ドレ、草鞋錢など合力いたさう。

ト手箱の内より小判一枚出してやる。宅兵衞、愕りして

宅兵　こりやマア、草鞋錢と仰しやつて下されたは、大まい小判で一兩。旦那さま、こりやどうした譯でござります。

星五　サア、餘りといへば痛わしさ……ハテ、大事ない。路銀にさつしやれ。

宅兵　イエ、これはお貰ひ申しますまい。

星五　そりや又なぜに。

宅兵　勿體ない御深切な旦那さまゆゑ、あまへましての親仁めがお願ひ。どうぞ私しを、あなたの所の

飯炊になと、お使ひなされては下さりますまいか。

芳松　コレ、旦那さま、わしをも置いて下さりませ。

星五　オヽ、よう云うてくれた。身共も何卒左樣いたしたいが、兎角儘ならぬが浮世、どうも其方衆の願ひは

宅兵　叶ひませぬか……エヽ、成る程なア。門々へ立つても、打ち擲きこそすれ、意地の惡い者ばかりで、情らしき詞をかけられませぬ袖乞ひが、始めて甘いお詞を聞きまして、ほたへ過ぎた事云ひました。御免なされて下さりませ……モシ、旦那さま、娘も孫も、不思議な事には、辰の年月揃ひし生れ、運がよいと聞きましたが。エヽ、年寄りの愚痴ばかり申しまして、さぞ御退屈でござりませう。もうお暇申しませう。

ト しな〳〵と立つて、門口へ出ようとする。芳松の帶解けかゝりあるを、星五郎見付けて

星五　オヽ、それ〳〵、帶がほどけさうで

宅兵　ハイ〳〵。ドレ、祖父が直して

ト 帶をほどき締め直さうとする。この時守袋落ちる事。星五郎駈け寄つて

星五　イヤ〳〵、をぢが締め直してやりませう。

宅兵　これは勿體ないっ　どうしてマア

星五　ハテ、大事ない。

ト星五郎、芳松の帯を締めながら、ぢつと顔を見て、帯を締める振りにて、抱きしめて、思はず抱きあげる。

芳松　アレ、祖父さま、をぢさまが坊を抱いて下されたわいの。

宅兵　ヤア。

ト振り返る。星五郎ちやつと振り放し

星五　コレ、必ず怪我などしてたもるな。

宅兵　そのお優しいお詞が、聟や娘に云はれたなら、何ぼう嬉しうございませう。何につけても、思ひ出しまする。

星五　思へば薄き親と子の

宅兵　エっ

星五　縁があるなら、また重ねて

宅兵　旦那さま。

星五　親仁どの。

宅兵　おさらばでござりまする。

ト時の鐘になり、宅兵衛、芳松の手を引き、小判を戴き〳〵、心を殘して向うへ入る。星五郎跡見送り

星五　燒野の雉子、夜の鶴、鳥類さへも血筋の恩愛、初めて逢うた舅どの、我が子と知りつゝ名乘らぬは、後難を思ふがゆゑに、足弱二人が路頭に迷ふを、見捨て歸すも父恩愛。アヽ、これを思へば世の人の、子を捨てるのも子が可愛さ。とはいふものゝ不便なは、日本國中尋ねたとて、現在親はコレ爰に……免して下され、舅どの。

ト思ひ入れ。この時ふつと足許に落ちてある守袋を見付け

ヤヽ、こりや守袋を忘れて行つたか。まだ遠くは行くまい。

トとつかはと門口へ出て

コレ〳〵、舅どの、親仁どの。

ト呼び返す。この時奥より了竹出て來り

了竹　これは御主人には、どこへお出でなされた。先生〳〵。

ト呼ぶ聲に星五郎心付き、戻り來て

星五　イヤ、これは了竹老。時に今日の御容體は、如何でござるな。
了竹　矢張り同樣と見えるが、さてあの金瘡は、根が餘ほど深い疵ゆゑに、まづ難治の症と見えまする
併し、法の立つ事も隨分ござりまするが、それには至つて高直な藥種が一味入用でござるが、い
よいよ左樣御承知かな。
星五　拙者が爲には大切なる病人、たとへいか程高直な藥種なりとも、調へねばなりませぬ。して、そ
の價は何程でござるな。
了竹　サ、蘭名はパルサンと申して、これが卽ち廿金の價でござる。
星五　よろしうござります。直さま代金は差上げまするでござりませう。
トまた手箱の内より小判廿兩出し
左樣なら　右の藥種を、此方へお貰ひ申しまする。
丁竹　これは〳〵、世の中に拂底な金子を、斯樣にお手近く御所持なさるといふは
星五　エヽ。
了竹　ハテ、お羨ましき儀でござる。ハヽヽ。時に先生、一つ叶へば又二ツとやら、あの御病症を、
愚老が屹度請合ひまして、全快させる法の立て方がござるが、これは至つて得難い品で、辰の年

月揃ひし者の生血があれば、いま目の前で全快させてお目にかけるが、これはなか／＼我れ人共に、得がたい品でござれば。

星五　ムウ、金銀にては調ひがたき、辰の年月揃ひし血汐。その儀ばかりは。ハテナア。

ト思ひ入れ。

了竹　大切な御病人とござるゆゑ、お心ゆかせ、右の一藥とても、調へ下さるやうにとは申すもの丶、實は彼の生血がなければ、七分三分全快は覺束なうござる。さう致して見れば、大金の藥種を調へられたところが、萬一の事のござつた節は、愚老、何とも氣の毒に存じまする。ぢやに依つて、これはとくと御勘考なさるがよろしうござらう。

トそこに有る金を押戻してこなし。星五郎思ひ入れあつて

星五　イヤ／＼、その血汐も得がたき品とは申すもの丶、心を盡しますれば、ふと手に入るまいものでもござらぬ。まづ／＼、何は兎もあれ、右の藥種は、調へるでござりませう。

了竹　左樣御意なされる事なら、右の良藥、お渡し申すでござりませう。

ト藥の包みを懷中より出し、星五郎に渡す。

星五　良藥は慥かに受取りました……この上は、辰の年月揃ひし血汐。

ト了竹、金を懐中して

了竹　イヤ、然らば愚老はお暇申しまする。

星五　左様ならば又明日。

了竹　お見舞ひ申すでござりませう。

星五　これは毎度御苦労でござります。

ト唄、時の鐘になり、奥にて尺八の稽古聞える。了竹は向うへ入る。星五郎、跡見送り思ひ入れあつて

いま了竹より受取りし、この良薬はありながら、辰の年月揃ひし生血。ハテ、如何いたしたものであらうなァ。

ト思ひ入れ。ふつと又守袋を見付け、思ひ入れあつて

こりや悴が忘れて行つた守袋。エヽ、また思ひ出させをるわい。アヽ、今頃はどこにさまよひ居る事やら、今宵はいづこへ宿るやら。

ト云ひながら守袋の迷子札を見て

播州室の津宅兵衛孫芳松、辰の七才。

トこれを思ひ入れにて見て、守の中より臍の緒の書付けを出し

「伯州鹽谷家の家中、斧定九郎悴芳松、辰の年辰の日辰の刻の誕生。」誠に悴芳松こそ、年月揃ひし生れであつたか。これぞ全く天の與へ。未だ主人の御武運に盡きざる印か。エヽ、忝ない……程は行くまい。跡追ツ駈けて、不便ながらも、オヽ、さうぢや。

ト門口へツカ〳〵と出かける。この時風の音烈しく、樹木の枯れ葉、ばら〳〵と散る。奥の尺八、寐鳥と聞え、蟲の音、時の鐘、凄き合ひ方にて、門口よき所へ加古川、怪しげなる奥女中の形にて、芳松の手を引き、すつくと立ち身にて顯はれる。星五郎窺ひ見て

加古　こちの人、定九郎どの。

暗うて黑白は分らねど、慥か女の

星五　ヤ、さう云ふ聲は女房の

加古　加古川でござりまする。打絶えました。お前も堅固で

星五　ヤヽ、思ひがけなう其方には、ようマアおれが隱れ家を。して、病氣と聞いたが、すりや快氣して

加古　アイ、お前の在所を風の便りに、聞くと其まゝ飛び立つやうに思うて、やう〳〵爰へ、たどりたどりて。

星五　オヽ、おれも其方に逢ひたう思うて居たところ。サア〱、爰へ入つて。身共はちつと行かねばならぬ、急な用事で

ト向うへ思ひ入れあつて行かうとする。

加古　お前の用は悴の芳松。

星五　ヤ、それをどうして。

加古　コレ、あの子も爰へ連れて來たぞえ。

星五　ナニ、今爰へ來たアノ悴を。

加古　コレ、父さんぢや、逢つて堪能。

ト芳松を側へやる。

芳松　父樣、なつかしいわいなう。

ト縋り付く。

星五　ヤヽ、今來た悴が妻と連立ち……オヽ、安堵した〱。入りや〱。

トこれにて風の音、捨て鐘、凄き合ひ方、蟲の音にて、加古川、芳松を連れ内へ入りよき所へ住ふ。

思ひがけなう、病氣と聞いた加古川が、悴を連れて、ようマア尋ねて來やつたの。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。加古川こなしあつて

加古　來らるゝ身ではなけれども、やう〳〵尋ね參りしも、お前に逢うて云ひたい事が。コレ、こちの人、わしに隱して、エヽ、お前は

ト顏を見詰め

恨めしいお方ぢやなう。

トきつと云ふ。

星五　コレ〳〵女房、おれに逢うて恨めしいとは……アヽ、聞えた。こりや其方には隱して云はぬが、いつぞやお國にて、兪迦山へ御代參のその砌り、顏は知らねど闇りの、ついした事から假枕、一度ちぎりし女の事を、其方、どこかで聞いて來たかや。その事を恨めしいといふのか。

加古　男の癖にて女房と、定まる女子のある上に、仇し枕を交す事、浮世にまゝあるならひ。わたしが恨むはそれではない。

星五　それではなうて何の恨みが

加古　お前の心が邪まに、なつたが恨みその上に、この子までも末々には、難儀さすると思ふから、それが恨みの種となり、淺はかな女子の心も、少しは推して今の世渡り、どうぞ止めて下さんせ。

星五　コレ、加古川、てまへは變つた事を云ふが、恨まれるは今云つた女の事。その外に覺えはないが聞けばてまへは、身共が方に、以前奉公いたしたる、與五郎といふ小者の一人、彼れが住家に掛り人、殊には病氣、それを聞いても此方から、便りのならぬ今の身の上、世上を忍ふ……サ、忍び暮らしの素浪人、世間を恐れて、それゆゑに音信せずに居たが、そんなら大方あの家來與五郎が、てまへを勸めて、恨みを云はせに寄越したか。さるにても、どうして悴を

ト合點のゆかぬこなし。此うち芳松居眠り、横になる。

加古　連れて來るのも今日が日まで、子仲までであるお前が事、今さら云ふではなけれども、世間へ晴れて女房とも、云へぬばかりがわたしの迷ひ、舅御樣も草の露、今はこの世になき人の、さすればお前も今の身は、二親もなし、血筋はこの子。今日參つたは改めて、女夫の杯。夫婦のかため、親子三人顏合す、これぞめでたい吉日と、モシ、こちの人、杯して下さんせ。

トこれにて星五郎、思案の思ひ入れ。

星五　イヽヤ、そりやなるまい。ハテ、心さへ變らねば、いづれに住ひ暮らしても、夫婦親子の緣は切れぬ。殊には以前と違うたる、いま云ふ通りの身は浪人。今更かためを改めて、するにも及ばぬ。斯樣にこの身は榮えても、もしもの事のある時は、天下の科人、天の網……サ、天の助けで主人

のお家、跡目相續その時は、めでたう杯。

ト盜人を隱す思ひ入れ。

加古　そりや情ない、つれない心底。コレ、わたしに隱すお前の心は、今の世渡り道ならぬ。もし露顯する時は、夫婦我が子でないといふ、難儀を掛けまいお前の胸中、それと悟つて猶更に

星五　ヤ。

加古　どうぞ緣を結んで下さんせ。

星五　尤もの其方の願ひ、其やうに云やる事ならば、今日よりして誠の女房。

加古　死なば諸とも二世三世。

星五　未來永々く。

加古　エヽ、嬉しうござんす。

星五　ドリヤ、杯を

ト合ひ方變つて、すんと立ち、神棚より神酒德利を取り、供物の入りし土器を持ち來り、盆の上に乘せて加古川が前へ差置く。この時上の屋體より縫之助、窺ひ居る。

サア、加古川、幸ひ神に供へたこの酒、其方が飲んで

加古 エヽ、アノ、神へ供へし

ト恟りして、わな／＼する。

星五 この神酒飲んで、さしてくりやれサ。

加古 サア、この神酒ばかりは、どうもわたしは

星五 飲まぬは女房にならぬ心か。

加古 アモシ、どうしてマア其やうな

星五 そんなら酒を

加古 サア

星五 サア

兩人 サア／＼／＼。

星正 神のこの酒飲まれぬか。

トきつと云ふ。加古川思ひ入れあつて、土器を取上げる。星五郎徳利を取つて酒をつぐ。薄どろ／＼にて加古川、受けたる酒に恐れ、苦しき思ひ入れ。星五郎、目をつける。縫之助、障子より窺ふ。加古川酒を飲まうとして、いろ／＼あつて、持つたる土器取落し、微塵に砕ける。縫之助、目を付ける。

縫之　聞きし噂に事變り、この家へ來る加古川が

星五　殊に受けたるあの神酒を、取落したる樣子といひ、何とも以て心得ず。

ト加古川心付き、きつとなり、縫之助、障子をさす。

加古　ドレ、寢させてやりませうか。

ト唄、時の鐘になり、加古川、芳松を抱上げ、ツイと奧へ入る。星五郎殘り

星五　合點のゆかぬ、ひよんな噂に加古川が、身の上案じるその中へ、思ひもよらず來りし女。今の素振りは何とも以て

ト此うち又ぞろ障子を明け、縫之助出て來り

縫之　コレ、今の樣子を其方も定めし

星五　縫之助さま、あなたもあれにて

縫之　窺ひ居たが、どうも合點の……ア、、あの顏色ではまだ病氣も、心ようないと見えるわいの。

星五　左樣でござりまする。病後と申し、夜道をこれまで……加古川は格別、あなたの手疵も、最前の了竹老より受取りし、彼の一藥は手に入つても

縫之　藥に用ゆるその生血、辰の年月揃ひし者の、血汐がなうては心に任せず。この手疵はいとはねど

可哀や我れに仕へたる、あの浮橋が思はぬ横死。殺せし者は彼れが兄、あの石原の

星五　いよ〳〵それに極まらば、あなたのお胤を宿せし浮橋、女が命は輕くとも、重き鹽谷のお血筋を、絕せし奴もお家の敵、正しく高野に

縫之　もしや由緣の

星五　アヽモシ。お氣遣ひなされまするな。

ト思ひ入れ。唄、時の鐘にて此まゝ道具廻る。

本舞臺二重の屋體、上の方にも障子屋體、よき所に柴垣、萩の盛り、松の立ち樹、この枝に釣燈籠を提げ、所々に飛石、軒口より手水手桶を提げ、上の方より舞臺前まで汐入り、流れ波板を取附け、下の方枝折り門、正面は座敷の體。爰に絹蒲團を敷き母衣蚊屋の内に、搔卷を掛け、加古川芳松と添ひ寢して居る。よき所に六枚屛風、短檠をとぼしあり彈流しの唄、蟲の音、かすめたる禪のツトメにて道具納まる。

ト本釣り鐘の音。加古川ふつと目を覺ます。蚊屋はばら〳〵開く。加古川思ひ入れあつて

加古　ありや寺々の後夜の鐘、添ひ寢にいとし可愛子の、側離れじと思うても、冥途の鐘の聞えては、捨てゝあの世へ

ト芳松の顏を、よく〳〵見て

父親とても明日知れぬ、惡い世渡り日蔭の身、母は日蔭のその上に、月影さへも恐ろしい、この身に受けては……千種にすだく蟲の音も、我れを迎ひの

ト芳松を見詰め、ほろりとする。合ひ方、蟲の音。奥より星五郎、一腰を持ちて、蚊遣り火を片手に持ち出て來り、加古川を見て

星五 オヽ加古川、爰へ寢やつたか。今年はいつより暑さが長うて、此やうに九月蚊帳。殊に爰は川端近うて、取分けて蚊が多い。コレ、蚊遣りを持つて來た。枕許へ置いて燻すがよからう。

加古 アイ〳〵、蚊も澤山でござんすが、取分けてあの蟲の音。なんと、マア面白う、よく鳴くぢやござんせぬか。

星九 イヤモウ、蟲の音にも聞き飽いた。コレ、加古川、思へば去年お家斷絶のその砌り、互ひに別れて近頃は、わしも浪人、其方も家來の掛り人、誠に久しう音信も、コレ、今日からは親子夫婦が、此やうに一つに寄れば、もう〳〵外へはやらぬぞや。

加古 そりやモウなんで參りませう。わたしは行かぬ心でも、お前は外に深い女中が

星五 これはしたり。愚痴な事を云はぬものぢや。コレ、夫婦仲といふものは、相性が惡いと口舌が絶



へぬといふが、聞けばてまへの年は、慥か辰の年とやらぢやの。

加古　アイ、わたしが生れは辰の年月、日時揃うた替つた誕生。その母にあやかつたか、この子の生れも

星五　辰の年月揃うた生れ、ハテ親子とも……年度の揃ふは又と無いもの……ドレ、おれも親子の添ひ寢をしようか。

トこの時火鉢の蚊遣り、ぱつと燃え上がる。そのあかり後の壁へ映る。星五郎の影ばかり映るを、これに目を付け

蚊遣りの燃え立つその火影、うつるは我が影、側に居る、加古川ばかりが影の見えぬは。

加古　エヽ。

トあたりを見て、短檠のあかりを吹き消す。星五郎心得、團扇を以て蚊遣りの火を押へ消す。影は消える。加古川思ひ入れ。星五郎氣を變へ

星五　イヤ、蚊には恐れるなア。

ト六枚屏風引廻す。唄、時の鐘になり、奥より平内窺ひ出る。門口より丑兵衞、窺ひ／＼出で、向うより喜六、頰冠り尻からげ、前幕の非人二人付いて出で來り、門口へ皆々こそり寄つて

喜六　お二人樣。

平内　われは先刻の

丑兵　喜六だな。

平内　頼みに任せて早速來たか。

喜六　合點の參らぬこの家の主。

非一　お尋ね者と沙汰のある

非二　曉星五郎といふ大盜人の頭分。

平内　縛つて出すその時は、おいらが細つた首を繼ぐ、その繼ぐ品はコレ爰に。

ト菅家の一軸を出す。

丑兵　そりやア正しく曉が、大事に守護する高野家の

平内　菅家の正筆、あの神棚に隱しあるを、盜んでくるは仲間を裏切り、高野家へ持參して、盜人仲間の足を洗ふワ。なんと、盜賊の頭の物を盜むとは、また上々があるであらうがな。

丑兵　そいつは出來た。この上は掛り人の縫之助、彼奴も片付け、高野家へ。

平内　それも合點。おれは殘つて事の樣子を

喜六　おいらも殘つて

非人　召捕る仕やうは。

平内　コレ。

ト囁き、喜六呑みこみ、段々に囁き合ひ

丑兵　庭に隱れて、必ずともに

平内　合點だ。ござれ。

ト思ひ入れ。合ひ方、時の鐘、三人は門口へ忍ぶ。平内は窺ひ奥へ、丑兵衞は向うへ入る。矢張り合ひ方にて屏風をそつと明け、星五郎、一腰を提げて、窺ひ〳〵出で來り、思ひ入れあつて

星五　アヽ、道理こそ蚊が多い。いぶしが消えて

ト火鉢を脇へ寄せる。母衣蚊屋へ障り、から〳〵と開く。加古川、搔卷を着て、顏を隱し寢て居る體芳松仰向きに寢て居る。星五郎、くらがりゆゑ、探り〳〵芳松の顏をさぐり當て、思ひ入れあつて、そろ〳〵上の方の松の枝にかけし釣り燈籠を取つて來り、我が子の顏を見て

絕えて久しきこの忰、今日來てくれたもこの親に、忠義を立てさす孝行を、その稚子を親の身で

ト側へ寄り抱かうとして、きつと氣を變へ、拾ひし守を咬へ、裾をからげる。本釣り鐘、これより獨吟になり、窺ひ寄り、飛石を取つて來り、門口の外へ置き、釣り手桶を取つて來り、白刃を拔き、寢刃を

合せる。屏風の内にては加古川、芳松に向ひ、よろしく思ひ入れ。唄一くさり切れると

加古　この子が目覺まし慕ひなば、又ぞろや重る迷ひ。修羅道の苦患のほど、思へばはかない淺ましい。

星五　邪慳な心も忠義と節義、思へば〱苦の娑婆と

加古　我れはあの世へ

星五　二道掛けて

加古　夫の心は

星五　我が子の生血。

加古　妾も同じ年月の

星五　思へば不便な

加古　この子が生立ち。

星五　可哀の者の

加古　寢顏ぢやなア。

ト兩人心々の思ひ入れ。また獨吟になり、いつぱいに切れる。本釣り鐘、合ひ方、星五郎思ひ入れあつて、一腰提げ、門口へ入り

星五　あの加古川が目覺めぬうち。さうぢや。

ト持つたる釣り燈籠の灯を消す。窺ひ〳〵芳松の方へかゝる。加古川、足音するゆゑ、寢た振りして居る。星五郎窺ひ寄るを

加古　誰れぢや〳〵。

星五　女房か。

加古　こちの人、この子をお前

星五　ヤ。

加古　どうなさんすぞいなア。

星五　サア、悴が側へ探り寄つたは……オヽ、それ〳〵、久し振りで親の内へ來やつたその子、ちよつと抱いて見ようと思うて。

トまた寄る。加古川、芳松を圍ひ

加古　アヽモシ、そりや噓ぢや。なんでお前は門口で、白刃を研いで、寢間へはござんしたえ。

星五　サ、それは。

加古　エヽ、胴慾なこちの人。コレ、わたしに隱して、お前の心は、我が子を手に掛け殺さうといふ、

その胴慾と見たゆゑに、寝た振りして窺ふところ、案に違はぬこちの人。コレ、お前はこの子が可愛くはないかいなア。

星五　コリヤ〳〵加古川、聲立てゝ御主人の、お聞きあつては妨げ。其方が推量に違ひなく、現在我が子を手に掛けるも、年月揃ふ悴が年度、主人の難病直したさ。そこ退け加古川。

加古　イエ〳〵、なんぼお主のお爲、お前の忠義の種なりとも、外の事なら留めはせぬ。我が子の命はなんぼでも、殺させぬ〳〵。

星五　ヤア、聞分けのないその詞。わりや現在連れ添ふ男に、忠義の二字をば取らせぬのか。

加古　それぢやというて、この子はどうも

星五　妨げするな。女房、そこ退け。

ト切つて行くを

加古　コレ待つた。

星五　エヽ、面倒な。

ト切りつける。加古川、芳松を抱き、立廻りながら逃げ廻り、有あふ母衣蚊帳をかせによろしくあつて、蚊帳廣がり邪魔になる仕組み。星五郎これにてあちこちするうち、加古川、芳松を抱き、上の方の流れへ

飛び込む。此とたんに火鉢の蚊遣りぱつと燃え立つ。この灯にて星五郎、加古川の様子を見る。この時前の流れへ加古川の浮死骸流れ寄る。星五郎、これを見てきつとなり、一ツ鉦、誂らへ早めの念佛になり、門口の脇より宅兵衛、髪をおろし、坊主かづら、前へ鉦をかけ、花手桶を提げ、千日参りの形になり、小提灯を持ち出で窺ふ。星五郎思ひ入れあつて

今まで爰に居合せし、あの加古川がその形に、寸分違はぬ浮死骸。悴と共に入水なしたか。さすれば悴は水底へ、沈めばお主のお役にも。ホヽホイ。

トこの聲を聞き、宅兵衛、内へ入り

宅兵　すりや、最前逢うた其許こそ、いよ〳〵違はぬ、娘が連れ添ふ

星五　さう云はるゝは先刻の老人。いかにも拙者は定九郎、樣子ござつて只今は、その名を隠して最前も、知つて居ながら他人向き、これと申すも人々へ、後の難儀を掛けまい爲。して、貴殿には最前と、事變つたる出家の姿は。

宅兵　最前歸る川續き、揚げくる汐に女の死骸。立寄り見れば娘の加古川、見ると心も狂氣の如く、歎きの内に孫の芳松、行くへ知れぬは迷ひ子に、なりおつたかと思うても、娘は死ぬる、孫めは失ふ。それゆゑ聟の其許へ、云ひ譯の爲め捨て坊主。コレ、聟どの、こりやマア、何としませうぞ

いなう。

星五　すりや、舅どのには加古川が、菩提の爲のその姿。さては今まで有明の、月の名殘と女房が、我にまみへしものならん。さるにても、悴の芳松、死靈の女が連れ行きしか。子を助くるは聞へしが、なぜに夫に武士道を、立てさせぬぞよ。女房加古川。

トきつと云ふ。この時ドロ〳〵寢鳥になり、開きし母衣蚊帳、ばら〳〵と返る。この内に芳松、茫然と俯向き居る。後へ加古川、死靈の姿にて顯れる。兩人芳松を見て

ヤ、孫めはあれなる蚊帳の内に。

星五　居合すからはお主のお爲、不便ながらも年月揃ふ

宅兵　アヽコレ待つた定九郎、頑是もない子を滅相な。

ト星五郎に縋り、留めようとするを振り拂ひ、走り寄つて白刃を振り上げる。薄ドロ〳〵にて加古川、腕を留める思ひ入れ。星五郎、たぢ〳〵となり、芳松、顏を見上げ

芳松　この子の命を取らんより、同じ年度の姿が生れ、悴が身替り、母が五臟を

ト加古川の死靈、乘り移りし體にて云ふ。星五郎思ひ入れあつて

星五　年もゆかざる悴が一言、さては死したる加古川が、我が子に附いて詞かはすか。

加古　こちの人。

ト星五郎の胸盡しをとつて

エヽ、聞へぬわいなア。

ト凄き合ひ方。一つ鉦、薄ドロ〳〵、思ひ入れあつて

二人が仲に儲けたる、たつた一人のこの悴、いかにお主の爲ぢやとて、逢ふと其まゝ殺さうとは、エヽ胴慾なこちの人。さはさりながら殺すも忠義、我が子も助け我が夫の、忠義も立てんと思ふより流れ寄つたる浮死骸、無念の最期も一念殘り、夫や我が子に逢ふまでは、生けるが如きこの屍、五臟も矢張り其まゝに、ほぐれぬ内に胎内あばき、血汐取り得てお主のお爲。サヽ、少しも早う

星五　さては女房が一念殘つて、血汐のお役に立つまでも、色も變ぜず生けるが如く。して、加古川には定業なるか、又は非業の死を遂げしか。

加古　定業ならぬ非業の横死。下部の與五郎惡心きざし、我れに渡せし鹽谷の重寶、花筐の短刀を、彼れが奪うて殺害なし、殊に彼れこそ高野の血筋、素性の書き物、守の裂れ、他家にて用ひぬ鎌倉錦、疑ひもなき高野の長男。お家の短刀彼れが手にあり、たとへ何國に祕め置くとも、詮議の手蔓は時ならぬ、花の盛りの所こそ、寶の在所と思されよ。我れ亡靈にて告げ知らさん。サヽ、少しも早う五

臓をあばき、我が子を助け、成佛させてたまはれよ。

星五　すりや、加古川を殺したは、以前の下部與五郎め。殊に高野の血筋とあれば、尋ね出して女房が敵。さるにても、無くて叶はぬ年度の生血、是非に及ばず亡き妻の、死骸の五臓を腑分けして

宅兵　あばく其うちこの親は、あの世を助くる鐘撞木。

星五　亡き我が妻の

ト誂らへ早めやうの鳴り物。流れへかゝり死骸を引揚げる。これより下手にて念佛、好みの合ひ方。宅兵衞、鉦打ち居る。星五郎、手拭にて白刃を巻き、死骸の胸先を貫く。薄ドロ〳〵、加古川、後にて苦しむ。芳松、加古川を見て

芳松　アレ、怖いわいなう

ト宅兵衞に縋る。星五郎思ひ入れつて

星五　目にこそ見えぬ苦痛の程も

加古　未練な我が夫、この胸許を

星五　忠義の血汐を

ト胸許より臓腑を掴み出し、手水桶の柄杓に入れ、薬と共に一つに混じて思ひ入れ。

加古　片時も早うお主へ進めて、お前の忠義を

星五　妻の血汐を薬と共に

トこの時平内先に喜六、非人二人窺ひ出て

平内　それくらはしては事面倒。

三人　その良薬を。

星五　おのれは手下の

平内　ソリヤ。

三人　合點だ。

トかゝるを星五郎、見事に投げのけ

星五　舅どのには、お主へ進めて

宅兵　オヽ、合點ぢや。

平内　それを。

トかゝるを星五郎引付ける。薄ドロ〳〵、殘りの三人立廻り。加古川後にて思ひ入れ。芳松に乘り移り
し體にて、三人を取つて投げちらす。これにて三人奧へ逃げ込む。加古川思ひ入れ。星五郎芳松を見て

星五　さては我が悴の働きも、死靈の業にてありけるか。
加古　血汐のお役に立つ上は、今ぞあの世へ。
芳松　母樣いなう／＼。
　　ト縋る。加古川振り切り、薄ドロ／＼、掛け煙硝にて消える。芳松「わつ」と泣き落す。
星五　さては女房が死靈も去つて
平内　觀念ひろげ。
　　ト拔いて切りつける。星五郎立廻つて白刃をもぎ取り、平内を見事に切り倒す。この時空にて大雷、雨車の音。上の障子を蹴破り、喜六投げられ出る。跡より縫之助に宅兵衞付いて、ツカ／＼と出て、星五郎縫之助、空を見てきつとなり、これより早めの合ひ方。
星五　こりや御主人には手疵の惱みも
縫之　いま老人が與へし一藥、血汐は辰の年月日時揃ふ、妻加古川が生血にて、本服なせしも其方が、悴までも殺さんと、その忠信の志し。
宅兵　さりながら、俄の雷電はたゝがみ。
星五　正しく奪うて隱し置く、高野の重寶菅家の正筆、血汐に穢せし咎めなるか。

平內　そんなら肩先切られし血汐、奪ひ取つたる一軸に

ト懐中の一軸を取出す。

星五　さてこそおのれが菅家の正筆。裏返つたる人非人、觀念なせ。

平內　この品持つて

ト駈出すを捕へ、一軸を奪ひとり、見事に平內を切つて捨てる。これにてポンと返る。此とたん縫之助、たぢ〳〵として萩垣に行き當り、撞となる。宅兵衞、介抱して

宅兵　娘が貞女に、あなたの手疵も

星五　平癒あれば、今より主從左右へ

縫之　別れ〳〵に

喜六　うぬをやつては

ト縫之助にかゝる。非人二人、星五郎へかゝるを引付ける。縫之助、花道の方へ行く。喜六、組み付く。宅兵衞、芳松の介抱して

宅兵　お家の短刀

星五　手に入るまでは

縫之　人目にそれと

ト行くを喜六かゝる。見事に振り切り、縫之助をさゝへる非人を星五郎見事に切り倒し、見得。縫之助向うへ入る。星五郎一軸を持ち、刀を拭うて跡見送る。矢張り石の鳴り物にてよろしくひやうし

幕

九段目

本所石原女夫石の段

役名……盗賊、曉星五郎 實ハ斧定九郎。權兵衛女房、おかる。下男、直助 實ハ猿廻し與五郎。丁稚、與茂太。一力升屋の勘九郎。植木屋、源次。同、松六。山名家中、北村傳次。大熊官藏。石切り、佛權兵衛 實ハ垣坂三平。

本舞臺、三間の間、二重の世話屋體、軒口に伊豫簾の上げ下ろし、牛の御前の祭り提灯。正面、眞中に暖簾、上の方、障子。下の方、鼠壁。門口の外は路地の入り口。上の方へ寄せて一間の二階家。この下には石屋の物置。すべてこの道具、本所石原町石屋の體。上の方に垣を結ひ、梅の花咲いてゐ

る。よき所に徳本の畫像を掛け、爰に講坊主、大鉦を打ち鳴らし、町人大勢、徳本念佛を申してゐる。おかる、前帶、世話女房の拵らへ。與茂太、前髪にて講中へ茶を運び居る。勘九郎、前幕の女郎屋にて催促に來て居る體。源次、松六、植木屋の拵らへにて、鍬を持ち、門口に立ちかゝり居る。屋體囃子、責め念佛にてよろしく幕明く。

皆々　なまいだ〳〵〳〵。

ト講坊主、鉦を打鳴らし

坊主　願以志功徳平等一切發菩提心往生安樂國、南無阿彌陀佛々々〳〵々々〳〵々々〳〵々々。

トよろしくしまふ。

かる　これは、どなたも御苦勞でござりました。サア〳〵、お茶上がりませ〳〵。

皆々　イヤ〳〵、構はつしやりますな。

坊主　時に皆の衆、爰の内の櫻は、とんだ時分に咲いたではござらぬか。

講一　さうサ、不思議な事も

皆々　あるものでござるて。

與茂　モシ〳〵、越後には七不思議とやらがあるさうだが、爰の内にも三不思議あるが、お前方は知ら

つしやるまい。

皆々　そりやア聞きたいな〳〵。

與茂　先づ一ツはあの櫻サ。一ツはこの頃親方が、俄に後生願ひになつて、此やうに毎日々々念佛講サ もう一ツは旦那さまと、おかみさまが、一所寢をせぬくせに、おかみさまが大燒餅で、旦那が外へ出ると。

かる　エヽ、また阿房云ふのかいの。

傳次　コレ、小僧どの、誂らへた燈籠は出來たかな。

松六　燈籠はどうだ〳〵。

與茂　エヽ、小やかましい。通らつしやい。

源次　この丁稚め、おいらを

松六　乞食のやうにしやアがる。

與茂　それでも無性に、とうろう〳〵と云ふから、通らつしやいと云つたのだ。

かる　これはしたり、モウ、どなたにもてんごふばつかり申します、モシ、植木屋さん、お前方はアノ原庭の寮から、石燈籠を取りにござんしたのかいな。

源次　旦那が、今日中に出來る約束だから、取つて來いと云はつしやるゆゑ。
松六　わしどもが持ち運びに來ました。
かる　さうでござんすか。押付け權兵衞どのが歸られませうほどに、待つて居て下さんせ。
與茂　待つて居たところが、この頃は、親方が毎日々々念佛で、牛の御前の祭りの世話にばかりかまけて、仕事はおだぶつ……ねぶつと祭のちやんぽんに。これは葱と鮪のすつぽん煮といふ洒落だが、なんと吉原の親方、これでは太鼓持ちになられませうか。
勘九　やかましいわい、此てうがふ野郎め……コレ、おかる、先刻から來て居るこの勘九郎には、さつぱり構ひつけないが、この間花屋敷で、おぬしが親の與一兵衞に、騙られた五十兩、直ぐにその場で取返したところが、いつの間に摺替へたか、みんな似せ金。それから探したところが、親仁の行くへが知れない。跡で聞けば、おかしな噂もあるし、この上は娘のおぬしが、正眞の五十兩は辨まへずばなるまい。それとも否と云ふならば、親仁とぐるになつて、この勘九郎を一杯はめたのだ。さうでなくば、たつた今、正金の五十兩返してもらはう。
かる　ホヽヽヽ、ぬしも異な事を云はしやんす。そりや、品によつたらその金は、娘のわたしが返すまいものでもござんせぬが、父さんとぐるになつて、お前をはめるといふやうな、そんな女子ぢや

と思うて居やしやんすか。

勘九　サ、さうでなくば五十兩、たつた今返してもらはう。

かる　ぢやというて金は今は

勘九　出來ずばよいワ。おれも吉原で一力升屋の勘九郎、五十兩といふ金を、玉なしにはしない……サア、おかる、おれと一緒に來てもらはう。

トおかるの手を取るを振り放し

かる　モシ、わしに來いとは、そりや、どこへ行くのでござんすえ。

勘九　知れた事だワ。五十兩の金の代りに、勤め奉公に出すのだ。四の五の云はずに來いといふに。

トまた手を取る。おかる、勘九郎の手先を直ぐに持ちかへて、しめ上げる。

アイタ、こりやアどうするのだ。

かる　どうというたら勘九郎さん、以前と違ひ主のある、わたしを捕へてあつかましい。たとへ女郎にしたところが、それこそお客を此やうに、振つて〳〵振り廻す。

ト勘九郎を振りまはして

手のある女郎と見込んでか、投げたりふんだりする足の、とつくりと洗ひもせず、餘ッほど惡い

ト勘九郎を見事投げる。

目利ぢやわいなア。

トこなし。勘九郎起上がり

勘九　アイタヽヽ。うぬ投げたな〳〵。コレ、どうするか見やアがれ。

ト鉢巻をして立ちかゝる。源次、松六、皆々中へ入り

皆々　マア〳〵、待たつしやい〳〵。

勘九　否だ〳〵。濟まないぞ〳〵。

ト無性にわめく。皆々留める。與茂太、「オ、シキ〳〵」とけしかける。屋體囃子になり、暖簾口より直助、飯焚き男にて、米かし桶を持ち出で來り、この中へ入る。勘九郎留めて

直助　これは親方、どうしたものでござります。マア〳〵、お靜かになされまし〳〵。

勘九　否だ〳〵。女に投げられては、男が立たない〳〵。

直助　ハテマア、其やうに立騷がずと、下にお出でなされまし〳〵。

ト勘九郎を押しすくめて下に置く。勘九郎、直助を見て

勘九　コレ、おれを無性に押すくめるが、こなたはマアどこの人だ。

直助　ハイ、わしはこの間奉公に參りました、爰の内の飯焚きでござります。
勘九　ムウ。飯焚きであらうが何であらうが、こなたはどうか物の解りさうな男ぢやによつて、云つて聞かせるが、一體此おかるといふ奴が、女のくせに
かる　モシ、何と云はしやんす。
直助　ハテマア、よろしうござりまする……モシ、勘九郎さまとやら、只今のわつぱさつぱも、臺所であらまし聞いて居りましたが、たとへ、あなたの方に十分の利はござりますとも、御亭主の留主に來て、おかみ樣を相手にして、もし何事ぞ出來た時には、理を以て非に落つるとやら、なんと、どなたも、左樣なものぢやござりませぬか。
源次　それ〳〵、女を相手に兎やかう云はうより
松六　御亭主が歸らしやつてから
皆々　詰め開きをするがよい〳〵。
勘九　そんなら何と云はつしやる。この間まで女達と、暴れ歩いた此おかるが
かる　アイ、ちよつとした譯で、權兵衞どのを亭主に持つたわいなア。
勘九　何の事だ。そんなら何も女を捕へて、筋を出すでもない。權兵衞どのが歸つた上で、五十兩の金

のしらちを
かる　附けるとも附けぬとも、勝手にしやしやんせ。
勘九　勝手にしないでどうするものか。
直助　ハテ、それが悪うございります。マア、あなたは奥へござつて、親方の歸りをば、待つてお出でなされまし。
源次　コレ、松公、横町の六が所へ行つて、祭りのお神酒でも馳走になつて行かうか。
松六　さうすべいく。道具を爰の内へ預けて置いて。
坊主　時に講中の衆、お暇申さうではござらぬか。
講中　お内儀、權兵衛どのが歸られたら
皆々　よろしくお頼み申しまする。
かる　もうお歸りでござりますか。いつもながらお粗末で
與茂　なんのお前、あの位牡丹餅を振舞へば澤山だ。
勘九　コレ内儀、おれにはとんだ手の骨法を振舞つたな。
かる　ホヽ、も一ツ上げようかえ。

勘九　イヤモウ、たべたも同然。

皆々　サア〳〵、行きませう。

ト屋體囃子になり、皆々は向うへ、源次松六はよき所へ鍬を置きて路地口、勘九郎與茂太は暖簾口へ入る。おかる直助殘り

かる　直助、聞いてたも。わたしや知りもせぬ事を、あぢに搦んで困らせるわいの。

直助　それが彼方の付け目でござります。旦那がお歸りなされたら、とつくりと洗つて、片をつけておしまひなされるがようござりまする。

かる　さうしようわいの。ほんに洗ふといへば、夏中着た單物に染が出たゆゑ、さつき洗濯して置いたが、爰へ干して置かう。

トそこにある衣紋竹へ、縞縮緬の單物を干す。此うち直助、おかるをヂロ〳〵見て

直助　モシ、おかみさんえ。いつやらお話し申しましたが、以前わたしが鳥越に居る時分から、お前樣を見知り越しに知つて居まして、アヽ、さつぱりとしておつな女だと思つたばかり、それからわたしは廻り〳〵て、爰の内へ奉公に、住むと間もなくお前さまは嫁入り、蟻の思ひが天とやら、お前の召上がるお飯を焚くといふは、まんざら御縁のないとも云はれませぬが、おかみさんは、災難

と思はつしやりますか。

かる　ホヽヽ、直助がじやら〳〵と、何を云うてぢややら。ほんに云やれば、わしも折々、見掛けた事もあつたわいの……それはさうと、こちの人が歸らしやんす筈ぢやが。

直助　モシ、おかみさん、爰の旦那は、よい日の下で生れましたわえ。

かる　そりや、なぜにえ。

直助　なぜと云うたら、片時も内にお出でなされぬと、お前に其やうに悋氣されるといふは、ほんに男の名聞、あやかり者でござります。

かる　直助が何を云やるやら。悋氣するといふ譯ではなけれど

直助　エヽ、嘘ばつかり、その旦那にあやかる爲、わしもちよつと

ト抱きつく。おかる、こなしあつて

かる　これはしたり、其方、わしをどうしやるぞいの。

ト振り放すを

直助　サア、抱きつきましたは、お前さまは女のくせに、劍術がお上手と聞きましたゆゑ、御指南を受けやうと存じまして。

トまた行く手先を捕へ

かる　それほど執心なら

ト緊めあげようとして、直助の小指にふつと目を付けて

直助　コレ直助、其方、小指を、こりや、どうしやつたのぢや。

　　エ。

かる　何か様子の

直助　モシ、たとへ嫌な男でも、斯う抱きつかれたら、まんざらほぐされも致されますまいな。

かる　ホヽ、嫌らしい取つてのかゝり。其やうに來るとな。

ト兩人面白き立廻りあつて、おかる、直助を投げて

　　此やうに投げてしまふわいなア。

トこなし。直助、顏をしかめ、起上がり

直助　アイタヽヽヽ、ようひどい目に

かる　エ。

直助　イヤ、感心いたしました。

ト思ひ入れ。摺り鉦入り、祭の鳴り物になり、向うより權兵衞、前幕の珠數を首に掛け、祭の世話人の形にて出で來り、直ぐに内へ入り

權兵　ヤレ〳〵、せはしない事だ。モウ〳〵、再び祭の世話なぞするものではない。コレおかる、もう講中の衆は歸られたか。

かる　わたしや知らんわいなア。

トつんとする。

直助　そりや始まつた。

權兵　何かに取紛れて、今日はまだ日課も繰らなんだ……ドレ、お念佛を

ト德本の畫像に向ひ、鉦打鳴らし

南無阿彌だんぶつ〳〵〳〵。

かる　モシ、こちの人、お前、其やうに外歩きする約束ではござんすまいがな。

ト權兵衞ちよつと此方を向いて

權兵　それだと云うて、今日は祭の宵宮ゆゑ、いろ〳〵さま〴〵な用があつて……南無阿彌〳〵〳〵だんぶつ。

かる　エヽ、おかしやんせ。その祭の世話役をかこつけて

直助　左やう〳〵。どこへお出でなされて、どのやうなお祭を渡さつしやる事か知れませぬて。

かる　ツイ半時が一時、一時が夜泊り、日泊りにならうも知れぬわいな。

直直　それ〳〵、夜泊りが日泊り、一月が二月、二月が三月、三月が四月、四月が五月、こりやアどこまで云つてもこの通りだ。

かる　それではモシ、こちの人、此やうに夫婦になつた甲斐があるまいぞえ。

權兵　ハテ、一旦詞を番うた上は、たとへ夜泊り日泊りをしやうが、其方の疑ひの晴れるまでは、なかなか側を離れる事では……南無阿彌だんぶつ〳〵〳〵。

かる　さう云はしやんすが、女子の狹い心ではナ。

權兵　コレ、それはおぬしが愚痴といふものだ。南無阿彌だん佛〳〵。

かる　エヽモウ、念佛もおかしやんせいなア。

權兵　そなたの愚痴もおきにしやれ……南無阿彌だんぶつ〳〵〳〵。

かる　お前の念佛もおかしやんせ。

權兵　エヽ、やかましい、てめえの念佛もおきにしやれ。

かる　お前の愚痴もおきにしやしやんせ……南無阿彌だんぶつ〳〵。

ト おかる、煙管を撞木にして煙草盆を叩き立て、あちこちになる。

直助　モシ〳〵、こりやア燒餅喧嘩へ念佛が移つたのか。念佛へ燒餅喧嘩が移つたのか。さつぱり分りませぬ。

兩人　ヤア。

直助　憚りながら、お若いとは申しながら、ちつとお前さま方も、お嗜みなされまし。

かる　ほんに、さう思やるも尤もぢやが、主と夫婦になつたのはな。

權兵　これサ……モウ〳〵、この後遠出もせまいほどに、勘忍しやれな。

直助　そりやこそ旦那の方から折れて來た。晩の御膳は斯うヤワ〳〵と、味く焚いて上げませうよ。ドリヤ、お相伴に白水を流して來ようか。

ト 屋體囃子かすめて直助、米かし桶を持ち、門口路地の内へ入る。兩人殘り、こなしあつて

かる　モシ、こちの人。お前はこの頃は、間がなお念佛を唱へなさんすが、どうした譯でござんすぞいなア。

權兵　これには段々譯のある事……兎角有り難いは德本樣の御名號、時ならぬ庭の櫻、あのやうに咲く

といふも、佛の功力、なんと有り難い事ではないか。
かる　成る程、さう云はしやんすりや、さういふ事もあらうわいなア。
權兵　時ならぬといへば、あの單物は誰れのぢや。
かる　あれはわたしのぢやがな、夏中人に貸したら染が出たほどに、摘み洗ひをしたのぢやわいなア。
權兵　アヽ、好い縞縮緬ぢやわい。
　ト この時七ツの鐘鳴る。
かる　ありやモウ七ツ、ドリヤ、仕掛けた仕事してしまはうかいなア。
　ト 唄になり、おかる、奥へ入る。跡合ひ方、權兵衛殘り、思ひ入れあつて
權兵　高野の爲とて殺したる、妹の浮橋、忠義が却つて不忠となり、この身の素性、現在主人を……南無阿彌だんぶつ〳〵。
　ト 念佛唱へて居る。聖天になり、向うより北村傳次、前幕の侍ひにて、中間一人付き出で來り、門口へ來て
傳次　石屋權兵衛は在宿いたすか。
　ト 權兵衛、門口へ來り見て

謹告

◎第十一回配本として第七卷を御屆け致します。本卷には「菊宴月白浪」「曾我梅菊念力弦」「敵討櫓太鼓」の三篇を收めて御座います。

◎最近、南北物上演の流行は、凄ましい位です。九月には「東海道四谷怪談」が大阪八千代座に、「盟三五大切」が東京邦樂座に上演されて劇壇の問題となりました。十月には「繪本合法衢」が帝劇で、梅幸幸四郎宗十郎勘彌松助河合左團次といふ大一座に上演されて絶大な賞賛を浴びました。同月本郷座で上演された「風鈴蕎麥屋」も、「當龝八幡祭」からヒントを得たものです。南北の眞價は、斯くして月毎に、認められて參りました。

◎前卷(第五卷)の口繪目次に、一つ落ちてゐたのがありました。それは、四〇〇頁の次へ挿入した錦繪です。あれば、三世坂東三津五郎の、三田の源六の姿で、「四天王櫓礎」の初演當時に發見されたものであります。

◎次回は、第十一卷で、「靈驗龜山鉾」「藤小船艤話」といふ龜山仇討の二大狂者を並べる外に、淸元のお染久松の品作たる「鬼若根元臺」を入れます。

◎第十二回配本分會費は十一月上旬迄にお拂込み願ひます。(會費送料共左記の通りでございます)

東京市内　四圓六拾貳錢　内地　四圓七拾七錢　臺灣、樺太、朝鮮、滿洲　五圓五錢

◎會費お拂込の際は御手數ながら「大南北全集第何回分」と御明記願上ます。

◎會費の御拂込は安全至便なる振替にお願申ます、尤も振替は普通郵便よりは遲れますからお急ぎの場合は小爲替でお拂込願度う存じます、本會專用の振替用紙は毎回配本の中へ一枚づゝ挿入致しておきます。

◎轉居の際は至急「はがき」で新舊御住所を御知らせ願上ます、お知らせがないためいろ〳〵不便を生ずる場合がございますので特にお願申ます。

◎前回配本の時弊店が指定した小包配達局名が間違つて居た爲めに、本の到着が遲れた方が御座いましたから、御面倒でもそちらの小包配達局名を次回會費拂込書に御記入御知らせ願ひます。

◎本全集のお申込を本會直接でなく、他の取次書店へお申込の會員は會費のお拂込その他一切その書店へお願申度く御送本もその取次書店より致します。

營業時間　自午前八時卅分　至午後五時　休業　第一、第三日曜

大南北全集刊行所
東京市日本橋區通四丁目五
春陽堂
電話大手（四五）二一〇一番
振替東京一六一七番

權兵　これは〳〵北村傳次さま。サア〳〵、見苦しくとも此方へ入らつしやりませ。

傳次　然らば許しやれ。

ト内へ入り、上の方へ住ひ

時に早速承はるは、おてまへ、申しつけたる大殿の石碑は、出來いたしてござるかな。

權兵　御覽の通り五輪は出來仕りましたが、巡りの玉垣が少し殘つて居りますが、いづれ近々のうち出來上がりまするでござります。

傳次　一日も早う石碑成就いたすやう、賴み存ずる。

權兵　ハイ〳〵、隨分出精いたすでござりませう。

傳次　それにつき、密かにお手まへへ賴み置いた。彼の高野の御血筋、又一ツには一軸の詮議、手掛りにてもござるかな。

權兵　私しも内々詮議仕りますろが、今以て一軸は相知れませぬが、血筋のお方は、少々心當りもござりまするゆゑ、押付け尋ね出し、お知らせ申すでござりませう。

傳次　それは重疊々々。身共もこの節、彼の淺草邊にて、與五郎と申す者、主人加古川を殺し立退きしゆゑ、この如く人相書にてお尋ね者。又一つは、この程世上に噂のある、盜賊曉星五郎といふ者、

四十餘人の手下を從へ、武家屋敷へ亂入する由、主人山名の館へ込入りしも、正しく彼れらが仕業、卽ち星五郎が人相書。この二枚を渡す間、おてまへ古傍輩のよしみを以て、密かに詮議してくりやるまいか。

ト人相書二枚渡す。權兵衞、思ひ入れあつて

權兵　折角のお賴み、見當るか見當りませぬか、何れ心懸けて見ませう。

傳次　イヤ、承はれば鹽谷の次男縫之助、狂氣いたしたと申す噂。彼れめも御主人島五郎さまを討たせたる、盗賊どもと一ツ穴、見つけ次第に容赦なく、片附けてしまふが、何かの近道、古主へ忠義。

權兵　左樣なら私しも……思はず不忠の

傳次　エ。

權兵　承知仕りましてござります。

傳次　萬事其許をお賴み申す。身共はお暇申さう。

權兵　これは餘りお麁末でござりました。

ト門口へ傳次出て

傳次　然らばくれ〴〵も、右の詮議をお頼み申す。併し、骨折はおてまへの手柄で、褒美は身共が申し請けるて。ハヽヽヽ。

權兵　これはようお出でなされました。

ト入相の鐘、かすめたる屋體囃子にて、傳次に中間付いて向うへ入る。跡合ひ方、捨て鐘、權兵衞思ひ入れあつて

この人相書に記したる、曉星五郎といふ盜賊も、妹浮橋が末期の一言。世上の噂、彼れこれ思ひ合すれば、これが慥かに……南無阿彌だんぶつ〳〵……ア、コレ、もう日暮になるに、行燈でも灯さぬか。

ト行燈へ灯をつける。合ひ方にて暖簾口より、勘九郎出で來り

勘九　權兵衞か。おらア貴樣の歸りを待つて、奧で一寢入りやつて居たが、もう日が暮れたな。

權兵　お前は勘九郎どの、わしが歸りを待つて居たとは、何ぞ用でもござりますかえ。

勘九　川といふは外でもない、聞けば女達のおかるを、こなたが女房に持つて居るといふ事だが、して見れば、あれが親の與一兵衞は、貴樣の爲には舅だの。

權兵　知れた事サ。女房の親なら舅に違ひないが、それがどうしましたえ。

勘九　サア、其こなたの舅親の與一兵衛が、この間惡い事をした上に、この勘九郎に似せ金を、五十兩摺替へて摑ませ、かいくれ行くへが知れない。この頃聞けば、死んだといふ噂もあり、さすれば掛る所は娘のおかる、其おかるを、女房に持つて居るこなた、差詰め相手にして、この筋道を分けてもらはねばならぬ。

權兵　そりや、事と筋によつてなら、筋道を分けまいものでもないが、して、どうすればよいと云はつしやるのだ。

勘九　どうといつたら、こなたが正眞の金を五十兩、耳を揃へて濟ますとも、それがならずば女房のおかるを、金のかたに勤め奉公に出すとも、二ツ一ツの返事を、たつた今聞かして下さい。

權兵　勘九郎どの、腹を立たつしやるな。おかるが親の與一兵衛、惡手な事を働いて、こなたに似せ金を摑ませたにもしろ、今になつては死人に口なし。貴樣ほどの者が、銅脈を請取るといふも、ちつと無念であつたなア。それをこの權兵衛に、藪から棒にたつた今、五十兩償へとは、そりやア橫であらう。

勘九　ナニ橫なものか。こなたの爲には舅親、似せ金遣ひの親を持つたが不肖、嫌々ながらも出る所へ出ねばならぬ。それとも女房のおかるを、金のかたに勤め奉公に出すか。

權兵　あのおかるは、ちつと義理のある女房、どうもさうはなりませぬ。
勘九　ならずば金で今返すか。
權兵　それだと云つて今が今、どうして金が。
勘九　出來ずばよいワ。こなたの親は似せ金遣ひと訴人をしようか。金を寄越すか、女房渡すか。權兵衞どの、二ッ一ッの返事が聞きたい。
トきつと云ふ。權兵衞當惑のこなし。よき時分、路地口より直助出て來り、門口にこの樣子を聞いて居て、この時ズッと内へ入り
直助　旦那さま、五十兩の金、わたしが貸して進ぜませう。濟ましておしまひなされまし。
ト縞縮緬の財布より五十兩を權兵衞が前へ置く。權兵衞思ひ入れあつて
權兵　ヤア、、直助、五十兩といふ大金、どうしてこなたが
直助　持つまいとも云はれませぬ。たとへ一季半季の奉公人でも、人は心懸けさへよければ、五十兩はおろか、地面地屋敷でも持たれます。家來の私しが親方の、今の切端を見るに忍びず、御用立てまする。決してお心遣ひには及びませぬ。サア、お遣ひなされませ。
權兵　志しは忝ないが、どうも其方のこの金は

勘九　コレ、方を付けずば、これから直ぐに

權兵　ヤ。

勘九　似せ金遣ひの訴人をしようか。

ト立上がるを權兵衞留めて

權兵　直助、この金借りたぞ。

直助　丁度員數も五十兩。御念には及びませぬ。

ト權兵衞、財布より金を出し、改めて

權兵　サア、勘九郎どの、正眞の五十兩。改めて受取らつしやい。

ト金を前へ出す。勘九郎取つて改め見て

勘九　ムウ、今度は正眞の五十兩。ヤレ〱、これで落付いた……とは云ふものゝ、高が飯焚きの奉公人が、五十兩といふ大金を

直助　どうしました。

勘九　イヤ、慥かに受取りました。

權兵　コレ、それで云ひ分はござるまいが。

勘九 云ひ分は隨分ある。
權兵 そりや何が
勘九 こなたの女房に最前、ひどい目にあつた。
直助 又おかみさんを呼んで來ようか。
勘九 イヤ〳〵、それには及ばぬ。お暇申す。
ト勘九郎は金を懐へ入れ、足早に向うへ入る。兩人跡見送り、思ひ入れ。
直助 旦那さま、あれぢやアうるさく、もう參りますまい。
權兵 思ひもよらぬ女房の、親の出入りのある金を、飯焚き男の直助が、濟ましてくれた五十兩、恩借の金の證文、主人から家來のおぬしへ、遣はさずばなるまい。
直助 成る程、あなたがそれ程に、思し召しまするなら、文言には、ちつと望みがござりまするて。
權兵 そりやモウ、恩借の五十兩、何とでも書かうほどに、サア、その望みを云つて見やれ。
直助 左樣なら申しませうが、證文お書きなされるなら、あのお内儀のおかるさまを、金が濟まずば私しに、遣らうと書いてあなたの印形、お捺しなされて下さりまし。
トきつと云ふ。權兵衛思ひ入れ。合ひ方になり

權兵　エ、アノ、女房をか。ハテ、捻つた望みの。併し、あの女は、ちつと譯があつて、外へといふては手放し憎いが、そりやハヤてまへが望みなら、その通り書くまいものでもないが、あの女にも話した上で、證文も書かうが、其うちも念の爲、假手形でも遣つて置かうが、おれが印形は、この守の内に入れて置いた。

ト襟に掛けし先達ての財布と守袋を出して置く。直助見て

直助　ヤ、その守は、どうして旦那が

權兵　こりやァこの頃拾つて來た。

直助　エヽ。そりやどこで拾はつしやりました。

權兵　淺草の新鳥越で。

直助　エヽ。

權兵　拾つて歸つたその跡は、何かもや〱した噂、何でもないが、これが廻つた。

ト件の與五郎の畫姿を出す。

直助　ヤ、そりや猿廻しの與五郎。

權兵　人相書いてのお尋ね者に、どうか似寄りの飯炊き直助、借金證文望みの通り、書きは書かうがそ

の代り、此お尋ねの與五郎も、てめえに尋ねてもらはざァなるまい。

直助　主人の仰しやりつけなれば、いかにも御用は足しませうが、人の訴人は、こりやどうも致されますまい。

權兵　成る程、云やればそれも尤も。併し似寄りのおぬしゆゑ。

直助　ハテ、似た物は烏とやら、似たのはいくらも世間には

權兵　面體似寄りはまゝあるが、これもよく似た財布の縞柄。

直助　して、わしが財布の縞が、何に似ました。

權兵　女房が浴衣のあの縞に、よくも似寄りのこの財布。

直助　エ、浴衣の縞にその財布。

ト吊せし單物と財布を引合せ見て

成る程、お內儀おかるさま、あなたの召した、お浴衣の、裂れに似寄つたこの財布。

權兵　縞の財布の五十兩、あの三圍の鳥居前。

直助　イヽエ、財布は昔から、持ち傳へたる古財布、まだそれよりは旦那さま、疑ひ掛けるはその守、鎌倉錦の桐唐草、正しく內には年月日時。

權兵　覺えがあれば高野の血筋、それをてめえは詳しく知つてか。
直助　わしが落した守ゆゑ、内の書き物存じて居ります。違はぬところが持ち主の、證據の爲に私しが、申すを其方で旦那さま、引合せて御覽じまし。
權兵　覺えがあらば其方で云やれ。違はぬ時は返してやらう。
直助　有り難うござります。

ト權兵衞は行燈の側で守袋を開き、見て居る。

延慶元年四月四日誕生の男子……外に一字も外事は、一切書いてはござりますまいがな。

ト權兵衞聞いて

權兵　成る程、てめえが云ふ通り、一字も違はぬ守の書附け。ムウ
直助　それが何より慥かな證據。サ、お返しなされて下さりまし。
權兵　して、この裂れの紋がらは。
直助　鎌倉錦の桐唐草、師直さまのお物好き。
權兵　それを存じた直助は。
直助　下郎ながらも高野の血筋、今は飯焚き召仕ひ、旦那ながらも石切り權兵衞、おれが屋敷へ出入り

の町人。
權兵　そんならわれが……イヤ、飯炊きの直助さまが、お出入り屋敷の高野の血筋。
直助　外戚腹でも落し胤、家を起せば即ち大殿、武藏守ともなるのはおれだ。さすれば旦那もその時は、わしに三拜するのは眼前。緣は異なもの、變つたものサ。
權兵　そんなら家來の直助は、養父の親の主家たる、高野の血筋か。
直助　ヤ、養父の親とは、して又高野の家中にて
權兵　親どもの家名は垣坂氏、伴左衞門が悴なれど、實の親は他家の家中に。
直助　さう聞くからは、この直助は主筋にて、師直さまの若殿だワ。
權兵　その若殿のあなたでも、主を殺せば天下の科人。
直助　ナニ、この直助を主殺しとは。
權兵　主に連れそふ加古川どのは、云はばこなたの主人も同然。それを手に掛け變名して、惡者なれど與一兵衞を、殺して取つた五十兩、財布の裂れも女房の、浴衣の共裂れこれ證據、それゆゑ廻るこの書姿。これでも覺えがござらぬか。エヽ、こなたはなう。
　　　トきつと云ふ。

直助　それも思はぬ出來心、親仁を殺して五十兩、元は舅が摺替へた、金の代りで云はば五分々々。併し只今申したる、親が高野の家來なら、おぬしもおれと遁れぬ主從、鹽谷の家來が連れそふ加古川、父の敵の端くれと、殺して所持する短刀は、再び鹽谷の家國を、引起させぬ爲ばかり。

權兵　すりや、その短刀を所持してござるか。

直助　隱して置くとも迂濶に云はれぬ。それもいつぞや山名の館へ亂入なしたる盗賊ども、高野の重寶菅家の正筆、奪ひ立退く上からは、正しく彼れらは鹽谷の浪人、斧が忰の定九郎、今のその名は曉の、星五郎といふお尋ね者。

權兵　そんならあなたが短刀の、在所は知つてござりますね。

直助　サア、迂濶には云はれぬ。さりながら、いよ〱家中の忰にて、主を思へば女房の、おかるを向後妻とも、お伽になされとおれにくれるか。

權兵　イヤ、おかるは譯あつて、外へ遣られぬ義理ござれば。

直助　そんなら今のその財布、證據の守も。

ト寄ろを押へて

權兵　この守と財布も共に、主のわしが預かりませう。

直助　そんなら此方も今云つた、彼の短刀の在所も滅多に
權兵　云ふに云はれぬ難題の、女房の無心も當人に、話した上で
直助　相談極めて挨拶しやれ。
權兵　いづれ返事をするまでは、矢張りお前はこの内の
直助　飯焚き直助。
權兵　主人は權兵衞。
直助　長らくお内に
權兵　奉公しやれ。
直助　ハイ、致しませうが、證據の守も
ト立寄つて取らうとする。權兵衞その手を拂ふ。立廻りに兩人とも左の小指のなきを互ひに怪しみ、
思ひ入れあつて
直助　旦那の小指も
權兵　下男の指も
直助　切つて間もなき

權兵　どうした怪我で

直助　こりやア薪割りで大きな怪我を

權兵　ヤ。

直助　ハイ、左でよろしうござりました。

ト唄になり、直助思ひ入れあつてツイと奥へ入る。權兵衞、晝姿守袋財布、三品を持つて跡見送り

權兵　この晝姿に違はぬ面體。殊に小指の樣子といひ、疑ひもなく親仁を殺し、奪ひし今の五十兩、おかるに話さば親の敵、證據は即ちこの財布、守の素性は高野の血筋、云はばお主のあの直助、妹が爲にもお主筋。さはさりながら鹽谷の血筋、絕す心になつたるは、主人と知らぬ……ハテ、がんじがらみなこの身の上。

ト思ひ入れ。唄、時の鐘、奥よりおかる、枕を持ち、跡より與茂太夜着蒲團を持ち出で來り權兵衞を見て

かる　旦那どの、爰にござんしたか。わたしや爰へ床を取る程に、お前も早う寢やしやんせ。

權兵　ア丶、何か、おれにも床へ入つて寢ろと云ふのか。

かる　イ丶エイナア、一緒に寢ぬといふは、お前も承知の夫婦仲、いつもの通り、あの二階へ行つて寢やしやんせいなア。

與茂　モシ旦那え。あの二階へ、あちらから廻つて、お床も取つて置きました。早く行つてお寢なされませ。旦那から方を付けぬと、家來が寢られぬ。氣をきかして早く寢太郎としたいね。

權兵　たわけづらめ。われは臺所をよく片付けてから臥せれ。

與茂　なにサ、臺所は飯焚きの直助どのが、どうかしやす。明日からはぶん流しても、葭町へは向かない若衆だね。

權兵　べら坊め、主の云ふ事を

與茂　オツトいきみんたん。御用ならこの間に。

ト與茂太は奥へ入る。

かる　イヤモウ、今日はお祭ちやの、行者講ぢやのと、いかう草臥れたほどに、早う爰へ床を敷いてくれ。

ト蒲團を敷き夜着を出し、六枚屏風を立て行燈を直し、枕を二つ並べる。權兵衞、じろ〱見て思ひ入

權兵　コレ〱女房、枕を二つ並べたは、今夜はわしを

かる　アイ、枕ばかりを此やうに、並べて二つ置いたのは、亭主を持つた女房の義理。寢なさんすなら寢所は別々。枕が一對並んだで、御祝儀は濟んだ。サア、これを持つてお前は二階へ。

ト枕を取つて渡す。權兵衞取つてこなし。

權兵　アヽ、そんならどうでも、別れ〳〵に寢るのか。

かる　アイ、それも隨分間を隔て、二階と下の天の川、上るりならば妹脊山、離れ〳〵の箱の内、思ひの絶へぬ女夫合ひ。

權兵　名代もないふられ客。これでも明日は早々に、晝の間は仲のよい、夫婦の仲で燒もち喧嘩、夜は他人に劣つた寢所。ハテ、ひよんな女房を

かる　エ。

權兵　ドリヤ、おしげりなされうか。

ト唄になり、枕を持つて權兵衞二階へ上がり、障子しめる。おかる、跡見送りて

かる　必ず明日の朝までは、爰へ來て下さんすなえ……ほんに門も締めて

ト門口のかき金を掛け、いろ〳〵思ひ入れあつて床の上へ上がり、横になつて、指して居る件の割笄を取て、よく〳〵見て

わたしが立つる心中の、殿御といふはこの笄……モシ、なつかしうござんす。一度添ひ寢の男でも、二人枕は交さじと、心も帶も此やうに、しやんと錠前卸ろしても、思ひがけない父さんを、

人手に討たれしその敵が、討ちたい願ひに疑ひを、掛けた男はこの家の主。それゆゑ爰へ縁づき、帯紐解かぬ女夫中、それもお前に心中を、立つるわたしが心根を、いづくいづれにごさんすとも、ちつとは推量なされませ。モシ、わたしやこれほど焦れまするが、女の念は屆かぬか。夢になりともお前のお顔を、どんな殿御ぢや拜みたい。逢ひたうござんす。モシ、なつかしいわいなア。

ト件の笄を持つて、よろしく思ひ入れあつて

それにつけてもこの程より、來て居る下男の直助が、小指が慥か……ア丶、思ひは絶えぬものぢやなア。

ト本釣り鐘誂へ凄き琴入りの合ひ方、所々蟲の音。九つの拍子木打つ。おかる、枕許へ行燈を置き、夜着を掛けて寢る。この鳴り物にて、向うより星五郎、黒の頬冠り、前に隱しつきの誂へ頭巾、黒絹股引、無紋の小袖、紫のしごきを腹帶に締め大小切わらぢ、腰に袋入りのもぢりを指し、鎖鍵繩帶に挾み、小ひさき龕燈を照らし、窺ひ〳〵出て來り、花道にて件の龕燈にて舞臺の櫻をきつと見て

星五　往來の噂に違はざる、この家に咲いたる櫻の一木、秋の内より開きしは、もしや死靈の加古川が、教へ置いたる詞に違はず、花筐の短刀、この家に隱しあるといふ、我れへ知らせの花の不思議か。さるにても心得ぬは、渡世は石切り、その町人の家に、尋ぬるその品が……我れもいつぞや山名

家にて、奪ひ來りし高野の重寶、菅家の正筆、肌身離さず

ト一軸を取出し

さるにても、心憎きはこの家の内。

ト一軸を懷中して、窺ひ〳〵門口に立ちより、戸へ當り、思ひ入れあつて、この時もぢりを出し、戸をこじる。内にはおかる、蟲の音の止しに耳をそばだて、顏を上げて

かる　今まで鳴きし蟲の音の、一度にやみしは

ト思ひ入れ。この時戸をこじる。音ばつたりとする。おかる愕りして夜着をかぶる。此うち星五郎、戸をこじて、そつとかき金もたげ、戸を押明けて内へ忍び入る。櫻の方へ行かうとして、臥したるおかるの樣子を見て、行燈の明りにて、指したる笄に目を付け

星五　臥したる女がつむりの笄

トよく〳〵見んと手を延し、取らうとすると、おかる、その手をきつと取らへる。星五郎ぎよつとする。

かる　女の寢間へ忍びしは、慥かに直助、證據の目印。

ト直助と心得、指したる笄を取つて、星五郎の腕へ突き立てる。星五郎は、だぢ〳〵となる。おか

ろ、逃がさじと引寄せ、あかりにて星五郎の顔を見て、悧りして
ヤ、直助ならぬ見馴れぬお人。さてはお前は

星五　東風吹かば、沖津白浪龍田山、唐土にては綠の林。

かる　エ。綠の林とあるからは、門から入りしこなさんは

星五　盗人ぢや。

かる　エ。

星五　女に稀れなる大丈夫、この手へ刺した笄の

かる　憎い男のいたづらは、後日の爲と突き立てし

星五　その笄の模樣は慥かに、後藤が細工の雪折れ笹、八重の象眼、覺えの一品。

かる　エ。それを詳しく知つたる盗人……イヤ、盗人さんは、よくマア御存じ。

星五　見覺えの笄を、所持して歩く盗賊も、云はば邪ま非道でない、金銀衣服に目も掛けぬ、仔細あつての今の身は、お主の爲の家尻切り、忍べば臥したる女が笄。心覺えは此方にも、所持の笄、覺えがあるか。

ト差したる刀の割り笄を取つて見せる。

かるヤ、、寸分違はぬ割り笄。これを所持して居やしやんす、盗人さんは、もしやいつぞや播磨路にて、ざこ寢のありし御社の

星五　身もその節は御代參、偸迦山より歸り道、立寄り窺ふ暗紛れ、男女の參詣入り亂れ、側なる女に戲むれの

かる　洒落が高じて恥かしい、ついした事の假枕、お情受けし殿御より、重ねてまみゆる印ぞと、下さんしたるこの笄の

星五　それを證據に逢はんぞと、東の白むを待つうちに、鎌倉表に御大事と、聞くより其まゝ氣も散亂の

かる　お別れ申せし事なれば、お顏も知らぬ戀人に、尋ぬる心中けふが日まで、外の男を持たぬのも、貞女とやらを思ふから、心に卸ろす錠前も

星五　身共に立てる女氣の、妻もある身を白浪の

かる　エ。

星五　サ、夜も白浪と露ほども

かる　知らで焦るゝ閨の內、窺ひ寄つた、さてはお前は

星五　鹽谷浪人、斧の悴、定九郎と云ひし者、いま變名して曉の、星五郎といふ、配符の廻りし



かる　すりやァノお前がお尋ねの

星五　コレ……して又其方は。

かる　わたしが親はお下の百姓、殊に鹽谷のお屋敷に、お末ながらも勤めたる、かると申した部屋方もの。

星五　さては屋敷に勤めた其方。

かる　ゆかしいお方は窺ふ盗人。

星五　尋ぬる女の在所と知らず

かる　闇をたどりて暗き夜に

星五　忍び入りしも結ぶの神

かる　導きたもふ

星五　今日今宵。

かる　ようマア盗みにござんしたなア……モシ、女だてらに帯留へ、卸ろした錠もお前へ心中、お目にかゝつた上からは、わしが心は上の空錠。あなたの鍵にてしつかりと、モシ、必ず見捨てゝ下さんすなえ。

ト帶の錠を取つて側へ捨て、星五郎へ縋つて思ひ入れ。よき時分權兵衛、二階の障子を明け、手燭を隱し、星五郎の畫姿を、この明りにて見くらべ、下家の方を窺ふ。

星五　我れも打捨て置かねども、願ひおつての今の身は、世上を憚る事あれば

かる　名乘り逢ふのも笄の、割符と知つてこの手疵、わたしもお前の笄にて

ト星五郎の笄にて左の腕を突く。

腕の疵も二人一緒に。モシ、これがお前へ、わたしが心中。

ト笄を抜き、星五郎へ渡し、疵口を手拭にて結へる。星五郎、笄を取つて

星五　流石は武家へ奉公の、女が氣性を見るからは

かる　女房といふも不束な、わたしながらもお寢間のお伽。

星五　隱さでいへば某も、妻子ある身でありけるが、それも女房は世を早う

かる　そんなら奥さま、加古川さま

星五　人手にかゝつて。

かる　エ、すりや、定業ならぬ

星五　横死を遂げし上からは、見やる通りの身が世渡り、鬼の女房になるのが承知か。

かる　アイ、鬼神と異名をとればとて
星五　そんなら今から女房おかる。
かる　夫のその名は定九郎さん、嬉しうござんす。
星五　盗人冥利、見捨てはせぬが、そちやこの家の女房でないか。
かる　それには段々譯あつて、この家の主の側を離れぬ
星五　男に持つたか。
かる　イヽエ、敵と疑うて
星五　ナニ敵とは。
ト この時二階にて
權兵　間男見附けた。
星五　ヤ、なんと。
ト 二階を見上げる。
かる　そんならお前は何かの様子を
權兵　下家の話しで目が覺めた。晝の亭主が見附けた間男。そこへ行つて近付きになりませう。

ト合ひ方變り、下りて來る。

星五　すりや此お方が、お内の御亭主。

權兵　佛權兵衞と申しまする石切り商賣、晝ばかりでも女房の、寢間にござつたこなさんは、云はずと間男。

星五　イヽヤ、身共は盜人でござる。

權兵　エヽ、アノ、お前が。

星五　云ひ交したる女の行くへ、尋ねし所が此お内、迎ひがてらに忍びし庭先、今を盛りの櫻花、一荷に荷ふ花盜人、貰うて爰を開きませう。御亭主、盜みに來ました。さう心得てもらひたい。

權兵　そんなら女房を、盜みにこなたが。

かる　わたしもあなたに、盜まれて行きたうござんす。權兵衞さん、さう思うて下さんせ。

權兵　すりや、敵の手蔓か知れての事か。

かる　イヽエ、手蔓は知れねども

星五　身共が方へ引取つて、敵の手がゝりあるならば

權兵　お世話なさらば此方も苦拔け。この程三國鳥居前、親仁のその名も與一兵衞、殺して取つた五十

兩、死骸の口に喰ひ切る小指、わしもその日に誓ひの爲、切つた小指の間違ひで、よんどころな
く引請け女房。

かる　亭主といふは表向き、肌身離さぬ五條袈裟、掛けて居るのがお前へ心中。

ト肌を脱ぐ。袈裟を掛け居る。星五郎見て

星五　女はかゝる潔白な、證據があるが御亭主は。

權兵　わしも掛けたるこの珠數の、異名も佛權兵衞に、思はぬ敵と疑ひの、それさへ晴るゝものならば、
直ぐに坊主と觀念して、女房は持てどしつかりと、帶へ挾みし錠前の

かる　情を立てたが、わたしが念願。

星五　その錠前を捻切つても、女は向後盜人の

權兵　連れてござらば女房の、舅が譯ある五十兩。して、その金の出所は

星五　その金出しても連れ行く女。

權兵　イヽヤ、金でも渡しませぬ。慥かにこなたの仕業ぞと、星をさしたる高野の重寶、菅家の正筆、
女が手切れに。

星五　ハテ、町人に似合はぬ望み。身共が一軸所持なすを

權兵　見極めて云ふその無心、それを渡さば此方から、去り状即ちこの書姿。

　　ト件の書姿を出す。星五郎見て

星五　これぞ當時のお尋ね者、その名も曉星五郎、その盜賊の人相書。

かる　すりや、その書姿は正しくお前の

星五　さてはそれゆゑ身が方に、高野の一軸あらんの疑ひ。さほどに思ふものならば、此方も詮議は櫻の根許。

權兵　時を違へし歸り咲き、わしも怪しく思へども、外から來たる盜人どの。こなたも花の咲きたるを

星五　詮議は横死の加古川が、死靈の知らせにお家の短刀、正しくあれなる櫻の根許。

權兵　鹽谷の寶と聞くからは、此方もちつと心當り、主のわしが根許の詮議。

星五　イヤ込み入る盜賊に、是非に櫻の

かる　コレ待つた。

星五　エヽ、面倒な。

　　ト有りあふ鍬を持つて來り、立ちかゝる、權兵衛も鍬を取上げ、立寄るを、おかる留める。此うち二階へ直助出かゝり、下家を窺ひ、よきキツカケに鳴り物になり、兩人鍬にて櫻の根許を掘り返す。

立廻り。おかる、この中へ交り、兩方を留める事。トヾ兩人、櫻の根許より白木の箱を掘り出し、おかる手早く取つて

かる　櫻の根許に白木の箱の

權兵　埋めありしは何者が

星五　これぞ正しく

　ト箱を取つて打ち碎く。中より短刀出る。

さてこそお家のこの短刀。

　トこの時懷より袱紗包みの一軸を落す。權兵衞手早く取つて

權兵　桐唐草のこの袱紗、これぞ正しく菅家の正筆。

直助　桐唐草とは高野の家に

星五　傳はるところのその一軸、山名の家にて奪ひしその品。

直助　それさへあれば、家を起して

かる　ありや直助が

權兵　この品持つて。

ト一軸を二階へ投げてやる。直助取つて

直助　こりやコレ一軸、管家の正筆受取つた。

星五　ヤヽ、一軸を

直助　彼奴ら夫婦を、殺らして跡より

權兵　心得ました。

星五　怪しい曲者。

ト行かうとする。直助、障子ぴつしやりさす。權兵衞、星五郎を留める。この時件の財布、守り袋、權兵衞の懷より落ちる。星五郎は守、おかるは財布を拾ふ。兩人思ひ入れあつて

かる　こりやコレわたしが浴衣の裂れと、同じ財布は父さんを、殺した證據の慥かな手掛り。

星五　鎌倉錦の桐唐草、いま一軸を包みし袱紗と、同じ模樣の守の紋柄。

權兵　それご高野の血筋の證據。

星五　ヤ、なんと。

權兵　財布はおかるが父親を、殺せし科人、あの與五郎。

かる　すりやアノ下男の直助が

權兵　師直どのゝ落し胤、證據は卽ちその守。わしも高野家由緒の町人、その上鹽谷縫之助、尋ね出して失ふ心。それゆゑにこそ妹浮橋、懷胎せしは鹽谷の血筋、不便ながらもこの兄が

かる　さてはお前は、現在妹を

權兵　手に掛けたるも鹽谷の跡目、立てさせまじき我が存念。

星五　さすれば現在お家の仇。

權兵　此方も高野のお家の仇、胤を宿せし妹さへ、不便や兄が手に掛けたれば、打洩らしたる縫之助、尋ね出して命を貰ふ。

星五　お主に敵たふ石切り權兵衞、相手は町人不足でも、命は貰はにやならぬ仕儀。親の讓りの千壽院刀の封切り、命の瀨戶。

ト封印引切り、立ちかゝる。この時件の短册落ちる。權兵衞目を付ける。おかる、この中へ入り、兩方へ心遣ひあつて

かる　お二人待つた。

兩人　女房、なんじ留立てする。

かる　サア、その女房とお二人の、詞ば違はぬ二人の夫、肌は觸れねどお前も夫、お前は枕交せし夫、

たとへて見れば車の輪、巡る兩輪のお二人さま、もしや一方凶事あつては、あれこそ添ひ寝をした夫と、サア、世の人口はいとはねど、どちらをどうと分けられやう。留めねばならぬ二人の殿御、義理と情に搦まれて、中に立つ身のわたしが術なさ、思ひやつて下さんせいなア。

星五　イヽヤ、邪魔いたすな某は、女が色に引かされて、主へ刃向ふ町人は、見遁し置かれぬ。

權兵　おれも女が留めればとて、敵の末は根を絶つて、葉を枯らすのは佛にあらぬ、爪ぐる珠數も古主の仇、切つてこの場で

ト件の珠數を切つて棄てる。

相手にならう、込入る盜人。

星五　斯くまで根強き佛權兵衛、佛の命も貰ふ盜賊、身共が刀の

ト立ちかゝる。おかる隔てゝ

かる　そこを暫く、わたしに免じて

星五　エヽ、面倒な。

ト立廻つて小柄をとつて引抜き、有りあふ繩にて縛り

暫くこれにて見物いたせ。

かる　こりや又あんまりな

　　ト寄るを權兵衛引付けて

權兵　それでは互ひに、足手纏ひを拂ふといふもの。互ひに勝負に氣おくれせぬ。サア拔け、盜人。

星五　われから

權兵　われから。

　　ト兩方詰めかゝる。おかる又この中へ入り

かる　マア〳〵待つて

　　ト縛られながら留めるを、兩人一度におかるを當てる。これにて「ウン」と倒れる。兩人手早く拔きかけ、きつと見得。花やかなる鳴り物になり、兩人よろしく立廻りあつて星五郎、權兵衛の肩先を一太刀切り込み、權兵衛、タヂ〳〵となる。星五郎また付け込むを、權兵衛立上がつて星五郎の刀を打落す。これにて星五郎タヂ〳〵となつて、手に障る掛竿を取つてあしらふ。權兵衛持つたる白刃にて竹の先を切り折る。この時おかる心付き、權兵衛を留める立廻りに、おかるの繩、程よく切れる。これにておかる留めるを、突きのけ〳〵、星五郎、件の竹にて突いて行く、立廻りよろしく、權兵衛の脇腹へ突き立てる。これにて權兵衛、タヂ〳〵となつて、この時短册と書置を落す。おかる見て

かる　ヤヽ、手負ひの上にその竹の

星五　いでや止めを

ト立ちかゝる。この時、落ちてある短册と書置を見て

心覺えのこの上の句「花だにも散らで別るゝ春なれば

かる　いとかく今日を惜しまざらまじ。」お前の刀に添へたる短册、その詠歌と連續せし、その上に添へたる書置。

星五　仔細ぞあらん……女房早く

ト行燈差出す。おかる、よく／＼見て

かる　「一筆書き殘し申し候、元某は鹽谷の家中、斧九郎兵衛が双子の悴、藁の上より高野の家中、垣阪作左衛門の養子となり、音信不通の身ながらも、名乘り合ふべき時節至らば、その時こそは疑ひもなき、兄弟の印ぞと、父九郎兵衛どのゝ手蹟にて、上と下とを引分けて、證據の短册添へ置きたり、弟は斧定九郎、兄は他家にて垣阪三平、妹を手に掛け胎内の、鹽谷の血筋御舍弟たる、縫之助どのへ手疵を負せ、その時妹が物語り、養父の親が末期に至り、妹ばかりは作左衛門が實の胤」

ト星五郎とつて見て

星五　兄は鹽谷の家中の忰、心得違ひの事あつては、忠義の妨げそれゆゑに、必ず兄に語るなと、遺言守り居たりしが、云はねばならぬこの仔細、お話し申すと云ひ死に、跡にて見れば證據の短册、さてこそこの身は切腹と、覺悟極めて居り候ふ、心中推察たまはれかし、弟定九郎どのへ、兄垣阪三平」。ヤヽ、すりや親人のお物語りに、別れ程經し兄者人、知らぬ事とてこの深手。

トあわてゝおかるも共々抱き起し、いろ〳〵介抱して

コレ、兄者人、氣を確かに持つて下さりませ。

ト竹を抜く。

權兵　出かした弟、主人の御舍弟縫之助さまに手疵を負せ、鹽谷の胤まで失なひしこの三平、切殺ぎ竹のこの成敗、こりや斯うなうては叶はぬところ。

星五　すりや、疾くより覺期の心底。

權兵　弟に打たせて忠義を立てさせ、それを不忠のこの兄が、未來のお主へ申し譯、科は遁れぬ竹の切尖。これ主殺しの天の御罰。

星五　親九郎兵衛も末期に至り、まッかう〳〵との物語り、それより尋ねし實の兄、三平どのにてあり

けるか。

權兵　其方は弟定九郎。お主は即ち高野と鹽谷。

星五　敵同士の家柄にて

かる　他家へ養子の兄御のお前。

權兵　廻り〱て思はずも

星五　兄弟二人が女房に

かる　なるも浮世に類ひなき

權兵　稀れなる夫婦兄弟の

星五　緣を結んだ

二人　事ぢやなア。

星五　されども二階に窺ひしは、以前の下部與五郎め、彼奴は女房加古川が、敵の上に高野の血筋。

權兵　それゆゑ一軸渡せしも、養父の親の主人の血筋、落しやつても天の網、こなたの親の與一兵衞。殺して取つた五十兩、敵も今のあの與五郎、財布の割り符その上に、小指の切れたは違はぬ證據。

かる　すりや、父さんを殺したる、敵は高野の血筋の與五郎。

權兵　敵ながらもこの家では、討たされぬのも養父へ義理。

星五　養父の主の血筋を思ひ、誠の親なるお主の血筋、それを身ごもる浮橋を、妹ながらも手にかけて古主の恩は御存じないか。

權兵　サ、その云ひ譯にはたつた今、弟に向つて非道の詞、わざと切られる身の覺悟。殊に古主といひながら、仇なる高野の血筋の守、これ渡さぬが申し譯、直ぐにこなたへ。

ト件の守を星五郎へ渡す。

星五　鎌倉錦の守の書き物、これが高野の

ト以前より源次、松六、後へ窺ひ出かゝり、この時後より

兩人　それを。

ト星五郎へかゝる。立廻りながら皆々二階に上がる。權兵衞、よろ〳〵として緣先にどうと腰を掛け、おかる星五郎、二人と立廻つて見事に投げ退ける。此はずみに正面の障子へ當り、ばた〳〵と倒れる。向うの庭に上下の石像、裲襠の石像、二つ並べある。兩人見て

星五　庭に並べし石像こそ、正しく亡君判官公。

かる　顔世御前と二方を
權兵　石屋が殘す手細工も、お家の血筋を絶せし云ひ譯、行者のお掛け畫、念佛も、誠は一つの石像へ
　申し譯なる佛の念佛。
星五　末世に殘す女夫石。
かる　五輪は即ち師直が
星五　すりや、あの五輪は
權兵　山名方より誂らへの、五輪は即ち師直が、時にとつての古主の敵。
　　ト有りあふ白刃を取つて、五輪の方へよろめき寄る。
星五　兄が末期に高野の血筋、證據の書き物、直さま門火。
權兵　武士の念力。
　　ト白刃を振り上ぐる。星五郎、守を火鉢へ打込む、權兵衞、石の角を切り缺ける。兩方とたん火鉢よ
　　り煙硝火立ち、向うにてドンと太鼓の頭を打つ。星五郎思ひ入れ。
星五　圍む合圖か。
權兵　修羅の太鼓か。

か權　片時も爰を

　ト權兵衞、竹の切尖を持ち、思ひ入れあつて落入る。おかる駈け寄る。星五郎愁ひの思ひ入れ。また向うにて獅子太鼓になり、大勢、木遣りの人聲。

星五　聞える太鼓は祭りの人聲。

かる　願ひある身は姿を變へて

星五　然らば一旦

　ト源次、松六、起上がりて

兩人　遣らぬワ。

　ト星五郎にかゝるを、左右に留めて權兵衞の死骸へこなし。

星五　南無阿彌。

　ト思ひ入れ。この見得にてチョンと軒口より簾いつぱいに下りる。直ぐに獅子の太鼓、木遣りの聲して、向うより、手古舞ひ大勢金棒を曳き、跡より家主、月行事の弓張りを持ち、窺ひ出て來り、門口より内を窺ひ、囁き合つて下手へ入る。矢張り八ツの鐘、拍子木の音、この時奥より與茂太、蒲團と寢茣蓙、木枕を持ち出て來り

與茂　なんだ、今夜は祭りの太鼓で、寢られるものではない。今から御輿を擔ぎに行かうか……イヤイヤ、今夜は宵宮だ。そんなら表を締めて、明日思ひ入れ擔がう。先づ爰らへ床を取つて、下素の樂は寢樂十皿としやせう。なんと新らしい洒落か。

ト門口へかき金をかけ、蒲團をかむつて寢る。矢張り獅子の太鼓にて、向うより傳次、黑股引、襷鉢卷きにて、跡より官藏、外に手古舞ひ五人、いづれもたるみの股引、誂らへの獅子の半纏、對の手拭を鉢卷きして、獅子といふ長張りの勇み提灯を持ち、十手を隱し、窺ひ〱出て來り、花道にて

傳次　然らばおてまへが、裏切りの手始めに、世にも手だれの星五郎、見事搦めて渡さつしやい。

官藏　お氣遣ひなさるな。一旦手下と騙し寄つて、頭と頼みし星五郎、繩かけてお渡し申さう。

傳次　組子の人數も油斷なく

手一　逃がさぬ手配りそれゆゑに、牛の御前の宵宮を幸ひ

手二　勇み出立ちの手古舞ひも、獅子の半纏一樣の

手三　木遣り音頭で人集め、たとへ逃げてゝ走つても

手四　いざり尾體の馬鹿囃子、聖天大間を合圖と定め

手五　ひよつとこ囃子のモシひよつと、取逃がしたら大がゝり。

官藏　寄つてたかつて大締めに、締める祭りのお定まり。必ず若い衆。

皆々　呑み込んだ。

ト矢張り獅子の囃子にて皆々囁き合ひ、手古舞ひ二人、門口に來り

二人　オイ〳〵、明けてもらはう〳〵。

ト戸を叩く。與茂太、顏を上げて

與茂　誰れだ〳〵。もう寢たワ。明日來さつし。

手一　なんだ、今夜は宵宮だ。今から寢る事があるものか。

手二　さうだ〳〵。ごたつきが出來たから、親方に相談があつて來た。起きてもらはう〳〵。

與茂　エヽ、やかましい手合ひだ。明日でもいゝぢやアねえか。眠くつてなるものぢやアない。

ト門の戸を明ける。時の鐘。

二人　捕つた。

ト十手を構へる。與茂太悄りして門口へ逃げんとする。傳次、十手を構へ、ズッと入る。與茂太、これを見て、「ワッ」と云うて奥へ逃げ込む。この時、簾上がる。內に屛風立てゝある。皆々見て

傳次　屛風の內か。

皆々 捕つた。

ト屏風を引返す。内に以前の星五郎の形にて、件の頭巾をかむりしおかる、顔を隠して一腰を抜き持ち、この人数と立廻り、よろしく見事にポン〳〵と切る。傳次、有り合ふ蒲團をかむり、隠るゝ。この時、門口路地の内より星五郎、おかるの形に着替へ、前帯にて袖頭巾をかむり、草履下駄、風呂敷へ刀を包み、これを抱へ、與茂太先に小提灯を下げ、ツカ〳〵と花道まで行く。兩人顔見合せ

かる アモシ

星五 怪我せぬやうに

かる 爰構はずと

與茂 や。

ト恟りする。

星五 コレ。

ト顔で知らせる。木の頭。與茂太、慄ふ。おかる、刀を拭ふ。これをキザミ、よろしく、ひやうし

幕

ト幕の外、時の鐘に誂らへの唄。與茂太先へ、慄へ〳〵、星五郎、女房なりにて向うへ入る。知らせ

につき、シヤギリ。

十段目

押上堤の段

十一段目

牛御前祭禮の段

淨瑠璃 是は其頭山科の仇者 是は其頭堺湊の稀者 色盛松楓道　常磐津連中

役名――盗賊、曉星五郎實ハ斧定九郎。下男、直助實ハ猿廻し與五郎。鹽谷縫之助。餅賣り、天川屋伊吾。伊吾餅の女房、おりん。

本舞臺、三間の間、正面、程よき草土手、秋草のあしらひ、うしろ淺黄幕、照葉にて紅葉の吊り枝、同じく立ち樹。よき所に普賢菩薩と記したる石の傍示杭。上の方に淨瑠璃臺、爰に常磐津連中居並びすべて本所押上堤の體。牛の御前の祭禮、屋體囃子にて幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃の役觸れあつて入る。直ぐに前彈き。

〽草叢の露に螢火、戀とかや、されば浮世はさまぐに、かりほの庵の妹と脊は、離れぬ仲の跡や先、荷物かたげて女夫連れ。

ト誂らへの鳴り物になり、向うより伊吾、前垂れがけ、好みのやつし餅賣りの形、ぽつとせかつら。跡よりおりん、對の前垂れ、好みのやつし、女房の拵へにて、伊吾餅と記したる商人屋體、この中に木鉢へ入れたる粟餅大分、竹の皮その外一式、尤も綺麗なる荷を、兩人して荷ひ出て來り、花道へとまる。

〽これは今年の出來秋に、實りも十分黄金色、粟の濡れ手も濡れによる、好いた同士のどれ合ひは、お江戸の水に洗ひ上げたる品物の、しかも色ある紅葉時、浪花の松に身を任せ、千歳重ぬる三つ重ね、三升はいつかしつぽりと、うまい仲ではないかいな、賣らうなら今ぢや伊吾餅召しませ〳〵と、堤傳ひに來りける。

トこの文句にて兩人、舞臺へ來り、荷物をよき所へ下ろし、思ひ入れあつて

伊吾　コレ〳〵、嚊衆、なんと思やる。いつもより昨日今日は、商ひも大分あつた樣子。幾日でやらあつたな。

りん　お前も嗜ましやんせ。今日は知れてある九月の十三夜、その上この近邊は、牛の御前樣のお祭り昨日今日はお祖師樣の、御縁日でござんすわいな。

伊吾　オヽ、それ〳〵、昨日は御難の牡丹餅、今日は日蓮さまの御縁日、この押上のお幡まんだらへ、

御參詣も澤山であらう。

りん それぢやによつて、爰で一精出してはどうでござんす。

伊吾 ハ、ア、流石はこちの嗅衆。この所にて商ひするとは、天晴れ高名々々。よくこそ心附かれたり

さらばこれより粟餅を、賣らばやと存じ候ふ。

〽そもく　この粟餅の始まりといへば、むかしく　安壽姫、對王丸と申す二人の同胞あり、姉の安壽姫は、粟畑の鳴子を曳き、群れ鳥を逐ひ、丹精をしたるによつて、粟の出來十分といへり、これを佐野の源左衞門どの求められ、粟の飯を炊き、最明寺どのに與へらるゝ、また薩摩方にては泡盛となす、我れらは下戸ゆゑかちんとなし、一名を伊吾餅と名く、旨い事は、痴話と手管で晒し立て、丸めく　て情で契る、こちが杵取り、嗅衆がこねる、わしが女房を賞めるぢやないが、一日三界飛びあるき、練れたところが、やつちやく　。

トおりんにしなだれよる。

りん 阿房らしい。何しなさんすぞいなア。

伊吾 ハヽヽヽ。時におりん、こなたもさぞ草臥れたであらうなア。

りん なんのいなア、わたしも加古川さまに、御奉公いたして居つたれど、旦那方は散りぐ　におなり

なされたゆゑ、お暇申してお前と女夫、しがない世帶も共稼ぎと思へば、さのみしんどうもござんせぬわいなア。

伊吾　イヤモウ、おれも前髮立ちの時分から、堺の天川屋へ奉公に行たれど、廻り〳〵て結ぶの神。伊吾とおりんが夫婦とは、どうした事やら、いつしかに

〽あぢな縁のころび合ひ、樫齒かけたる山下駄の、鼻緖も破れし痩せ世帶、蒲團一つが玉の床、外に男猫はあるまいと、思ひの外に性惡な、女猫は盛りがついたやら、長屋あるきは只ならぬ、隣のおぢいを見る目許、煮花の茶から洗濯の、綻びかゝる色仕掛け、なんと違ひはあるまいと、商賣筋の燒き餠に、サア〳〵〳〵と寄り添へば〽エヽおかしやんせ何ぢやいな、その當て言はお前より、わたしが方にたんとある、過ぎし初秋星合の、濡れて戻りし天の川、よそにしけりを内へ來て、見てくれがしの惡性と、思へどうした因果やら、惚れたに嘘はないものを、お前はどうか否さうな、外へ心を移し氣は、必ずやいのと取附いて、蝶は千草に戯むるゝ、花野に狂ふ風情なり。

ト兩人思ひ入れ。この時、寺の鐘鳴る。おこん、こなしあつて

りん　アレ〳〵、あの鐘は最敬寺さまの、お經が始まるさうな。

伊吾　そんなら搗きかけた今の餅を、臼と杵とを爰へ出して
兩人　ドリヤ、參詣を待ちませうか。
ト兩人、屋體の中より臼と杵を出し、伊吾は臼の中より餅を出し、木鉢の中へ入れる。おりんは黄名粉を附ける思ひ入れ。これに構はず
〽浮風に、萩にあふるゝ露ならで、野山も色の亂れ咲き。
トかけりになり、向うより縫之助、絹やつし、片袖を脱ぎかけ、しどけなき體。絲かつらを亂し、狂亂の拵らへにて。紅葉の枝を持ち、出て、花道にて
〽罷り出でたる者は、このあたりに年を經し、炭の翁にて候ふ。
縫之　なんぢや、炭の翁ぢや。オヽ、久しや〳〵、思ひきや、我れを待つとは思はざりき。ハヽア、冬を隣に待つ顔か。
〽月を待つとは草枕、戀しき人を夢に見て、我がうたゝ寝の袖しぼる、扇は露にしととんとん、かはく間もなき川添への、柳も今は散りて行く、空行く雁があれ〳〵〳〵、人の見る目もいとひなく、離れ〴〵の友鳥を、慕うて爰へ現なく。
ト文句のうち、よろしく振りあつて舞臺へ來る。兩人、縫之助を見て

兩人 名代の粟餅、お召しなされませ〱。
縫之 コレ、このあたりに、わしが思ひ人は來はせぬか。
伊吾 なんぢや、思ひ人は來ぬか。思ひ人とは何であらう。鐵を呑んだ關取、但しは石の地藏が化けたのか。

ト仕方して見せる。

りん 何を云はしやんすぞいな。斯う見たところが、お若いお方の形かたちといひ、只ならぬお顏つき
伊吾 ハヽア、此奴はおきちぢやな。モシ〱、お前、此やうになつたも、色事でござりませうな。
縫之 オヽ、色とも〱、その色里は初心の藝子、揚屋の座敷は又格別。
りん そんならお前さんも、色の始まりは、吉原でござんすかえ。
縫之 オヽ、吉原々々、粹は身を喰ふ手管の魂膽、野暮と思へど日文の數々。
兩人 そんならいよ〱色ゆゑに
縫之 オヽ、色とも〱。それにつけても思ひの種、誰れめとしつぽり雨の夜に
兩人 濡れあふ仲の
縫之 痴話口舌。

兩人 して、その頃は。

縫之 いつやらであつた。ォ、、それよ。

（祭文がかり）〽更けたまふ、下は四天なり、いでその頃は正月二日の事なりしが、廓は跡着の着衣始め、船乘りぞめともやひ解く、柳橋から押出して、北へ／＼と急がるゝ、そも／＼その日の出立ちは、羽織は羽二重三つ所、紋日物日の嫌ひなく、通ひ馴れても衣紋坂、とつと云うて囃された、實にも賑はふ色里の、蹴出し歩みの八文字、くるわ／＼の三つの朝、吉例變らぬ鼓の音 〽徳若に御全盛とは、御代も榮えてましんます、愛嬌ありけるおいらんの、遣り手禿を引連れて、しやなら／＼と太夫振り、誠に婀娜にてさむらひける。

ト思ひ入れ。兩人も浮れるこなしあつて

〽まつちやらこや／＼ 〽かゝるめでたき馴染の君が、あそこや爰の格子先、堅いやうでもどこやらに、色氣があつて油斷がならぬ、女子たらしの仕掛けぶり、誠に婀娜にてさむらひける 〽ホヽヤレ／＼、まつちやらこや／＼、斯樣に申す才藏なんぞも、ちつとんばかりは參る 〽參ると申せば 〽何がまた參る 〽廓見にくる椋鳥が、聲皺枯れて不拍子に。

トおりん伊吾思ひ入れ。

〽心よくもて追分女郎衆、淺間山から何が出る　〽夜ばいさんよ〳〵、昨夜は夜ばいは仰山な、誠にまがら仰山な、水瓶にけつまづいて、鐵漿壺へ飛び込んだ　〽お月さんよ〳〵、昨夜の晩げは雨ぐもり、誠にまがら暗いゆゑ、小溝をどんぶりこと踏みかいて、首たけ二人がそれから馴染み、今では實に　〽澤行く水の面白や〳〵。

ト振りよろしくあつて納まる。

縫之　面白い〳〵。サア〳〵、早う酒を持て〳〵。

伊吾　餅賣りに酒を持てとは、不遠慮千萬。早うどこへなと、行つたり〳〵。

縫之　オヽ、去ぬる〳〵。太夫が床はいつもの座敷、あの空炷きの香をしるべに、賴むぞや。

ト兩人を招く。伊吾見て

伊吾　アレ〳〵、何やら用があるさうな。嚊、わが身行て、何ぢややら聞いてやりやれ。

りん　イエ〳〵、わたしより、お前行て聞かしやんせ。

伊吾　イヽヤ、おぬし行きやれ。

りん　イヽエお前が

ト兩人爭ふ。

縫之　これは、どうしたものぢや。誰れにも致せ、早う來いよ〳〵。
ト手を打つ。伊吾、これを聞いて、おりんに行けといふ思ひ入れ。おりん、うち〳〵する。伊吾、見兼ねて前へ突き出す。これよりおりん、若い者のこなしにて
〽お手が鳴る〳〵銚子とは、かねて氣轉な若い者、小腰かゞめておだてのちよくら、大盡樣のお杯、我れらも頂戴鏡立て、冴えゆく月も櫺子から、見れば表に時廻り、もう何時と指折つて、ひいちよん、さんちよ、ちよん〳〵三々九つ、引四つなれば、ちとあちらへと押しやれば、灯影も暗き床の上〽待つ間に扱帶とけかゝる、寢卷姿のかいしよなく、間夫に逢ふ夜は氣が咎め、遣り手が部屋の鬼薊、つらい苦界ぢやないかいな〽わたしやお前にぶつつかり、女房にならにやならぬぞえ、あすが日盡になる身でも、男ゆゑなら年季を入れて、いつまで草のうか〳〵と、酒も茶碗であほつきり〽流れ次第に捨小舟、とても濡れたる四つの袖、こち寄らんせと引寄せて、口舌に取りし胸づくし、エヽ小自烈てえと振りあける、手管ぞ戀の常ならん。
トこの文句のうち伊吾は傾城、おりんは若い者、縫之助は客の振り、三人よろしくあつて納まる。
縫之　コレ〳〵、太夫、わが身は其やうな事云やつても、外に深間があるとの事。その男は、誰れぢや

誰れぢや。早う云うて、聞かしや〳〵。

ト伊吾の胸づくしを取る。

伊吾　成る程、おきちどのは色氣たつぷり。こなたのやうな人にかゝつてゐると、こちの鼻の下が干上がる。商賣の邪魔をせずと、嗅アどの、早くぼいまくつて、去なせ〳〵。

りん　モシ〳〵、マア待ちなさんせ。見請けたところが、まんざら賤しくもないお方。して、お前樣は

縫之　ナニおれか。我れらは卽ち京音頭の、かけ聲〳〵。

兩人　ナニ、音頭のかけ聲とは。

縫之　ハテ、えんや〳〵といふ事。

伊吾　ハテ、むつかしい考へ物。これはおれには判じられぬ。

りん　待ちなさんせ。えんや〳〵と仰しやるからは、最前のとりなりといひ、もしやあなたは

縫之　鹽谷々々、縫之助ぢや〳〵。

りん　ヤヽ、そんならあなたが御次男の

伊吾　縫之助さまでござりましたか。

りん　私しども二人は、以前はお家に由縁のある者。さりながらあなた樣には、何ゆゑあつてこのお姿

縫之 サア、この姿も、廓の俄ぢや。それ〳〵、そこへ俄が來た。ヤ、こなた衆も俄の練り物か。
伊吾 イエ〳〵、私しどもは
縫之 イヤ〳〵、俄ぢや〳〵。その俄なりと見たなれば、氣欝を散じてよからうな。
伊吾 ハヽア、聞えた、此方の商賣の屋體を見て、俄と思うてゐるさうな。
りん 今あなたのお詞には、氣欝を散じたならば、病氣も癒ると仰しやりましたが、狂氣の鎭まる事なれば
伊吾 眞似事なりとして
りん それぢやというて。
伊吾 古主の由縁のあなた樣へ、一つの忠義。
りん そんなら、てんぽの皮に間を合せ
縫之 廓の俄の全盛を
兩人 そんなら眞似事いたしませうか。
トこなしあつて
〽まづ吉原に鎭座ある、通ふ神とは大神祇、その大盡の末社には、男女の藝者打交へ、思ひ

思ひの趣向ある、數々多きその中に　〽朝な〳〵の田作りを、しやんとかたげた花聟どのは戀の在所に思惑様か、ありとは見えて頬かむり、寒の師走も日の六月も、通ひ詰めたる畔道傳ひ、脊丈の稲に袖濡らす、しよんがえ　〽さても見事な布晒す、ぢよん〳〵女郎衆の美しや、月雪花の唐錦、布つく振りを見せ參らせん、打つや砧の拍子よく。

ト これより誂らへ、砧、晒しの合ひ方になり、件の杵と臼を出し、おりん伊吾、よろしく振りあつて

〽散るや紅葉を手染めにしよな〳〵、繻子や朱繻子や縞繻子を、ちりめん〳〵ちんちりめん打つたる衣は唐衣、唐衣々々、しつとん〳〵しつとん〳〵、あの谷川の〳〵水より清き人に我れ、戀ぞつもりて名を流す。

ト 三人こなしあつて

〽山は色づくなア、なん〳〵中に、ひりひぞるは、われ木香、浮氣の露に濡れかゝる、男郎花とは白萩の、せめて一夜は藍の花、たより桔梗と鹿名草、筆に云はせて思ひ草、晴れし心の花すゝき、可愛らしさの女郎花。

ト 三人こなし。この時うしろより百姓二人、窺ひ寄つて

二人 縫之助、動きやアがるな。



りん伊 こりやお前方、何となされます、

百一 何とするとは知れた事、鹽谷の重寶、花筐の短刀紛失、本地へ歸參も叶はぬところ

百二 斧定九郎の忠義によつて、寶は元へ戻る上は、高野家に何かの妨げ、それゆゑうぬを引立てるワ

縫之 ヤヽ、すりや花筐の短刀は、定九郎が手に入りしとや。さすれば鹽谷の家名も開く瑞相。チエヽ忝い。

りん ヤヽ、今まで狂氣のあなた樣

伊吾 どうした事で、この體は。

縫之 寶の行くへの知れるまでは、まツ斷うせいと定九郎が敎へに任せ、狂氣と見せしは皆僞はり。短刀出づる上からは、片時も早く本地へ歸參。

百姓 うぬをやつては

ト かゝるを伊吾、隔てゝ

伊吾 女房おりんは、縫之助さまのお供なし、知るべの方までお見送り。

りん 心得ました。左樣なら縫之助さま。

縫之 然らば此まゝ

百姓　南無三、うぬを

　　ト振り切つてかゝる。皆々立廻り。伊吾は百姓二人を見事に引敷く。おりん縫之助、この體を見て

り縫　これは。

伊吾　構はずと、ござりませ。

　　〽さそくの氣轉かひ〲しく、裾端折つて身づくろひ、姿やさしき柳島、跡に見なして。

　　トこの文句にて縫之助先におりん附いて向うへ入る。此うち二人は起上がつて伊吾を突き廻し

百一　折角捕へた縫之助、うぬが支へたばつかりに、褒美の金を取り逃がした。

百二　破れかぶれとこの上は、粟餅賣りの甘口と、思ひの外の馬鹿力。

二人　咎め立てせず、退きやァがれ。

伊吾　イヽヤ退くまい、おれとても、昔は堺の天川屋に、年季奉公した時に、丁度捕り手がこの通り。旦那を見習ふ長持の、代りは屋體で間に合せ、上でひらりと大あぐら、男でごんすとこの伊吾も
　一番達引して見せうか。

百姓　面倒な、疊んでしまへ。

伊吾　何を小癪な、

百姓　どつこい。

〽しや面倒なと二人の手だれ、打つてかゝるを身をかはし、有りあふ臼をころ〳〵、南無三寳、桑原と、武者ぶりつくをづでんだう、あはやと見ゆる尻餅に、杵押取つて搗く曲は、今ぞ最中の玉兎、影も曇らぬ操の花道、實りの秋とぞ興じける。

ト三人この文句のうち立廻りあつて、トヾ伊吾は二人を臼の中へ打込み、杵にてヂツと押へる。この見得よろしく、太夫連中をあふりにて隠し、屋體囃子にて道具廻る。

本舞臺、平舞臺、見附牛の御前の社を畫がきし遠見、上下松の立ち樹、所々に神事の提灯、地口行燈など立派に建て、この前一面紅白の段幕を張り、すべて祭禮の模樣。爰に祭りの揃ひを着たる若い衆五人、紅紐の菅笠をかむり、紅絹をかむりし長柄の傘を持ち、並よく居並ぶ、この見得、渡り拍子にて道具とまる。

若一　ヤア、どなたも御苦勞でござりました。これでお祭も無事に納まり

若二　跡は御輿を待つばかり、日和續きの仕合せに

若三　世間に事なく氏子も繁昌

若四　町も田舍もおしなべて、五穀成就の踊りも住吉。
若五　祝ひに一つ
皆々　〱めやうか。
若一　それもよからう。
皆々　よい〳〵〳〵
　　ト手打ちをする。この時うしろ段幕の内にて
直助　神事の役人を、わりやア何とするのだ。
星五　怪しい曲者、動きやアがるな。
　　ト渡り拍子になり、段幕を切つて落す。祭の人數は左右へ別れると、眞中に直助、裝束立派に足駄を穿き、右の手に鉾を突き、左に天狗面を脫ぎ持ち、猿田彦の拵へにて立ちかゝる。星五郎、着流し、肌脫ぎ、大小りゝしき拵へにて、直助をさゝへて居る。兩人ちよつとほぐれる。
直助　いつも神事はお定まり、御輿の先へ猿田彦、それを支へる野郎を見れば、づきの廻つた定九郎、變名なして星五郎、たとへ以前は主人でも、見遁しならぬ天の網、召捕つて手柄にする。尋常に腕廻せ。

星五　小癪な。人の難より我が七難、その身に覺えあればこそ、姿を變えて面を隱し、窺ふ曲者、腕まはせ。

直助　何をおのれが。

ト振り切り行かうとするを、星五郎さゝへる。これにて祭の人數兩人を隔て、星五郎を取卷き、屹度なり

皆々　動くな。

ト直助見て

直助　これは。

若一　爰はおいらに任せて置き

皆々　神事を早く。

直助　心得ました。

ト直助は向うへ走り入る。星五郎見て

星五　彼れをやつては

ト行かうとするを

皆々　盗賊、動くな

ト皆々さゝへる

星五　ムウ。さてはうぬらは某を、召捕らんとする廻し者だな。

若一　知れた事だワ。練り子と見せしは討手の者。

若二　盗賊の張本、暁星五郎。

若三　誠は鹽谷の扶持放され。斧定九郎、尋常に

皆々　腕まはせ。

星五　うぬら一々、観念なせ

若一　面倒なッ、ソレ、

皆々　どつこい。

ト皆々住吉踊の形を取り、黒四天の捕り手となり、星五郎に打つてかゝる。星五郎は皆々を相手に立廻り、きつと見得。これより誂らへの鳴り物になり、よろしく立廻りあつて、トゞ皆々叶はず上手へ逃げて入るを、星五郎は追ひ込み、こちらへ來る。これを渡り拍子、バタ〳〵になり、向うより以前の直助、木綿やつし肌脱ぎ、縕袢、大わらはの形。おかる。矢張り肌脱ぎ。褄はし折り、兩人切り結びながら

直ぐ本舞臺へ出て來り、星五郎見て

星五 ヤ、そちや女房おかる。この體は。

直助 何ゆゑおれに刃向ふのだ。

かる ヤア、何ゆゑとはしらぐ〵しい。いつぞや隅田堤にて、父與一兵衞を手に掛けしは、おのれが仕業であらうがな。

星五 まだその上に主人たる、加古川を殺害せし、大惡人の與五郎め、我が爲には妻の敵。

かる 父の敵と名乘つてしまや。

直助 ヤア、身に覺えなき、その一言。妨げひろがば二人の奴ら。

ト兩人に切つてかゝる。この時直助の懷より前幕の一軸を落す。星五郎は手早くこれを取上げる。

おかるは直助の手先を捕へ、小指の無きに目を付けて

かる ヤ、小指の無きこそ慥かな證據。現在それを親の敵。

星五 この一軸は菅家の正筆。

直助 南無三それを

ト取らうとするを、おかる突き廻し、双方より詰めより

かる　一軸所持なす上からは、疑ひもなき高野の血筋。
星五　兄三平の義に依つて、鹽谷の寶戻りしゆゑ、一旦は見遁したれども、高野の血筋とあるからは、主君の敵、妻の仇。
かる　父が敵の直助與五郎、サア尋常に
二人　勝負々々。
直助　チエヽ口惜しや、今まで包みし我が存念、一時に露顯の上からは、何も彼も云つて聞かせるワ。高野家を引起さんと心を碎き、主の加古川ぶち殺し、花筐の短刀奪ひ取り、三圍堤で與一兵衞を手にかけたるは、いかにも斯く云ふ直助だ。
二人　さてこそなア。
直助　うぬら共々返り討だぞ。觀念ひろげ。
二人　小癪な事を。
星五　恨みの刃。
二人　思ひ知つたか。
　　トこれより三人立廻りになり、よろしくあつて星五郎おかる、双方より直助を一太刀切る。



直助　チエ、、残念な。

ト思ひ入れ。左右より又切りつける。此うち後へ捕り手大勢、弓張り提灯、十手を持ち、立ちかゝり

皆々　星五郎、動くな。

星五　何がなんと。

ト皆々よろしく立廻つて

皆々　どつこい。

星五　先づ今日はこれぎり

めでたく打出し

曾我梅菊念力弦

そがきやうだいおもひのはりゆみ

曾我梅菊念力弦

第一番目三建目の口　鎌倉雪の下年越しの場

役名――福島屋清兵衞。鬼王女房、月小夜。惣嫁、おいろ。いさみ、しつかいの荒七。同、平樂の平次。石部屋手代、覺兵衞。惣嫁、お花。箱根の兒、閉坊丸。梶原源太景季。鬼王新左衞門。稻野谷娘、十六夜。深川の大工、六三郎。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、前通り竹矢來、よき所に出入りある番屋、その際に「鶴ケ岡御普請小屋」といふ傍示杭。爰においろ、お花、夜鷹の拵らへ。景季、妓夫の拵らへ、呼びかけてゐる。蕎麥屋、風鈴の荷を下ろし、商ひしてゐる。荒七、平次、白ゆもじ、裸參りにて、誂らへの弓張りと鈴を持ち、蕎麥を喰つてゐる。すべて雪の下段かつらのあたり、上の方に蘆茂りし流れあり、大晦日年越しの體。大拍子、八つの捨て鐘にて幕明く。

ト左右より仕出し大勢出て來り、夜鷹をひやかして捨ぜりふよろしく、兩方へ別れて入る。矢張り大

拍子、活け殺しあるべし。

花い　モシ〳〵、お寄りな〳〵。

景季　ハイ、口明けでござります〳〵。モシ、提灯は御免だね。

荒七　コレ〳〵、蕎麥屋、寒くつて〳〵覺えがないが、いくら食つたか、よく覺えて居さつしやいよ。

平次　おいらは、錢はイサクサはないが、附けかけは、御免だ。

蕎麥　どう致して、信心參りのお前方へ、そんな太い事は致しませぬが、お二人で十八杯あがりました。丁度三百でござります。

荒七　そいつは素敵だの、てめえ、錢はあるか。

平次　あるよ。内から一本、褌へ挾んで來た。サア、勘定さつし。

ト錢を一本渡す。

蕎麥　ハイ、有り難うござります。

ト四百文のうちを三百文取つて渡す。

荒七　コレ、湯を下さい。下地をたつぷり入れてよ。

蕎麥　アイ〳〵。

ト湯を皿へ汲んで飲ませる。

はな　モシ〳〵、遊んでお出でな〳〵。

景季　口明けでござりやす。お前方が裸なら、此方もその氣で遊ばせやす。極まつて行きなさい。

いろ　それ〳〵、わつち等もさうするよ。

はな　溫まつてお出でな〳〵。

ト引ッ張る。

平次　エヽ、おきやァがれ。それぢやァ裸參りと夜鷹の取組みが始まるよ。

荒七　前代未聞の大ぜり合ひ、錢は戻り〳〵。ハヽヽヽヽ。

はな　エヽ、憎い口だの。

平次　もう一晩だ。參つて來よう。

蕎麥　ドリヤ、わしも廻りやせう。

ト大拍子になり、平次荒七は鈴を振つて下座へ入る。蕎麥屋も附いて入る。三人は呼びかけてゐる。この鳴り物にて向うより月小夜、手拭をかむり、絲立を抱へ、跡先へ思ひ入れあつて舞臺へ來り、三人を見て

月小　こりやァ寒い。どなたもお早うござんしたの。
いろ　オヤ、いつものおかみさん、お出でかえ。
景季　今夜は大晦日なり、年越しなり、一年中の物日の出じまひ、それにマァ遅く出なすつたの。どうでも素人衆は、爰らが抜けてゐるて。
月小　イエモウ、わたしも左様は存じたなれど、大晦日の年の夜ゆゑ、御主人方へ儀式のまねび。
はな　オヤ、おかみさんは、主持ちかえ。
ト云はれ、月小夜思ひ入れあつて
月小　イエ〳〵、お主はござんせぬが、年越しだけに夜鷹も身祝ひ。
ト上着の古小袖を脱ぎ、裏返して着る。黑の形になる。
いろ　サア、おかみさん、支度がよくば、あの見世へお入りな。
月小　わたしも左様存じますが、いま來る道で若い衆の悪口、その冗談がほんまになつて、あそこの小路で盗みをうつた花代がコレ
ト四文錢を一本と端を出し
丁度四百四十ござんすわいな。

景季　そいつは口明けがよかつたの。今夜は思ひ入れ稼ぎねえ。もう八つでもあらうか。

花い　夜明けまでに、もう四五本稼がにやァならねえよ。

ト大拍子になり、皆々呼びかける。向うより鬼王新左衛門、麻上下、花色の布子、山形木瓜の紋附き、朱鞘の大小にて、中抜きを穿き、黒木綿の頬かむり、頭巾をかぶり、繩に繋ぎし安下駄を提げ出て來り、花道にて

鬼王　ハテサテ、これはひどく寒いが、寒明けのせゐか。但しはおれが吹抜き松川、木村剛氣な名を繼いで、麻上下で出は出たが、いづれも樣の思し召し、おのれがやうな御家老が、江戸の曾我にはあるまいと、お叱りなさるは定のもの。毎年出島の梶原が、今年ばかりは有卦に入り、めでたい今宵の年越しに、惠方に向つて福は內、鬼は麁相な新左衛門、出まして留守ぢやと切拔けたが、さぞお屋敷は今時分、怨靈どもが居催促。これぢやァ築地へ歸られねえ。ハテ、結構な年の夜ぢやなァ。

ト思ひ入れあつて

アヽ、爰は雪の下の普請場。いつも辻君の出る所ぢやが、大方今夜も……オヽ、色達が出て居るが、年の夜には犬の子でも抱いて寢ろといふ。我れらもまん直しに、ドリヤ、夜鷹を求めて參ら

うかえ。

ト四つ竹の合ひ方になり、鬼王舞臺へ來り、この合ひ方をかり、頭巾の上へ頰かむりをして、あちこちと歩く。惣嫁二人呼びかける。

花い　モシ〳〵、お寄りよ〳〵。

ト鬼王と知らず、月小夜、袖を顔に當てゝ呼びかける。鬼王、思ひ入れあつて、月小夜が袖を引いて普請場へツイと入る。

はな　おいろさんや、どうしてもあのかみさんが立つちやア、わつち等はお茶だの。

いろ　まん直しに、氣を附けて來ようか。ナウ、源さん。

景季　山鯨で極めるもよからう。夜更けのせゐか、素敵に寒くなつて來た。二合半用ひようか。

兩人　さうせうわな。

景季　サア、溫まつて來ようか。

ト大拍子になり、三人は捨ぜりふにて下座へ入ると、バタ〳〵にて鬼王、頭巾のまゝ袴と大小を抱へ、逃げて出る。月小夜、手拭をかむりしまゝ、鬼王を捕へて

月小　泥坊々々。




火の用

ト鬼王を追ひかけ歩く。鬼王は無性に逃げる。矢張り大拍子にて、下座より以前の荒七平次出て來り、この體を見て

兩人　なんだ〳〵。

月小　くひ逃げでござんす〳〵。

兩人　捕まへてやらう〳〵。

ト追ひかけ歩き、鬼王を捕へてこづき廻す。

鬼王　アヽコレ、間違ひだ〳〵。

平次　くひ逃げするとは、ひどい奴だ。〆めろ〳〵。

月小　アヽモシ、捕へてさへ下さんすりや、ようござんす。勤めの代りに何なりと取つてやるわいなア。

荒七　それがいゝ〳〵。縕袍でも引ッ剝ぐがいゝ〳〵。

平次　可哀さうに、夜鷹を踏み倒すとは、あんまりな奴だ。

兩人　面を見てやれ〳〵。

月小　提灯を貸しなさんせ〳〵。

兩人　面を見ろ〳〵。

ト弓張りを差出す。月小夜、否がる鬼王を捕へ、腹立ち紛れに捨ぜりふにて頭巾を引ッたくり、互ひに顔を見合せ

鬼王　ヤア。

ト愕りして呆れた顔。月小夜、魂膽あるべし。鬼王うつむく。荒七平次、立ちかゝつて

荒七　年頃な野郎だが、下作な奴だ。

平次　ぶんのめせ／＼。

ト立ちかゝるを、月小夜とめて

月小　アヽモシ、もうようござんす／＼。これからはわたしが、よいやうに譯云うて、義理詰めに恥かかすほどに。お前方は又、風邪をひきなすつては惡い。サア／＼、もう去んで下さんせ／＼。

兩人　それだといつて、あんまりな奴だ。ぶんのめしてやらう／＼。

月小　アヽモシ、これはしたり。それでは却つてわたしが迷惑いたしまする。大きにお世話になりました。有り難うござりまする。モウ／＼、よろしうござりまする。サ、もうお歸りなされて下さりませ。

荒七　いかさまなア、てまへがさう云ふなら、無理にも云ふまい。早く歸つて、洗湯へでも入らうか。

平次　さうすべい〳〵。コレ、又くひ逃げがあつたら知らせて寄越せ。〆めてやらうぞ。サア、この勢ひで行くべい。

ト大拍子になり、二人は鈴を振つて向うへ入る。月小夜捨ぜりふよろしく、思ひ入れあつて鬼王の方へ差寄り

月小　コレ、こちの人、鬼王どの。

ト胸ぐらを取る。

鬼王　コレ。

ト思ひ入れ。合ひ方になる。

月小　エヽ、お前はなア、曾我のお家に誰れあらう、鬼王新左衛門とも云はれる武士が、この年の夜にうろたへ歩き、年にも恥ぢぬ夜鷹買ひ、夜鷹も多いその中に、現在女房の月小夜を、買ふと其まま逃げるとは、廣い世界に鬼王どの、コレ、お前より外にござんせぬぞえ。

ト縋つて思ひ入れ。鬼王こなしあつて

鬼王　尤もだ。其方の云ふその恨み、みな尤もだ。コレ、月小夜、只一筋に云ふ時は、この鬼王が大しくじり、未練な者とも思はうが、さら〳〵さう云ふ心でない。いかに今年は珍らしい、役に立た

ずの鬼王でも、曾我のお家の家老職、佛神に憎まれても、おれも侍ひ、武士の端、眞實夜鷹が買はれうかえ。

月小　さういふお前の心にて、なぜ又このやうに眼前に、夜鷹を買うて歩かんす。

鬼王　其方の身狀を見ようが爲に。

月小　そりや又なんで、わたしが身狀を

鬼王　探りし段は今宵の體裁。男に惡性あらうとも、鬼王といふ主のある、その女房が大それた、往來の人に肌を觸れ、身を穢しても大事ないか。淺ましや鬼王は、曾我の家老でありながら、使ひはやまに雇はれて、大磯小磯の文使ひ、艱難苦勞する中に、侍ひの女房が、夜鷹に出るとはコレ月小夜、われはどういふ氣紛れだ。天魔の見入りか。エヽ、見下げ果てた根性だ。

月小　鬼王どの、よう云うて下さんした。見下げ果てた女房とは、コレ、

ト懐より四百四十の錢を出し、思ひ入れあつて

曾我の家老の女房が、夜鷹をするも恥かしい。僅かな錢に目をくれて。

鬼王　ヤ、なんと。

月小　身貧な曾我の御一門、貢がんものと思うても、女子の力に叶はねば、思ひ附いたる辻君の、月夜

を恨む月小夜が、闇を待ちかね此やうに、爰の普請場材木の、蔭に立つては往來の、人を騙して恥かしい、僅かな錢もお主の爲、今宵も往來に近寄つて、どうぞ遊んで下さんせと、ひねの鮪を見るやうに、身を切り賣りの憂き勤め、お錢の數もこれ爰に、釣瓶で四百四十文、これも貢ぎの心から。

鬼王　さうとは知らず鬼王は、夜鷹を買うて女房の、その氣紛れを意見せん、その氣で爰をひやかして思ひがけなうぶち叩かれ、兩腰さへも拔かれぬは、大望抱へし御兄弟、それを存じて無念殘念、堪へて俠に手出しさへ

月小　ならぬ世帶を賄ふは、女子の役と此やうに、四百四十の錢に身を

ト思ひ入れ。

鬼王　亭主は俠にぶち叩かれ、これを思へば世の中に

月小　四百四十のお錢より

鬼王　きやんほど辛い

兩人　ものはないなア。

ト手を取りかはして思ひ入れ。

鬼王　おきやアがれ。氣のきいた鬼王も、こんな述懐を云ふやうぢやアおしまひだ。これからは、とても濡れた袖だ。月小夜が夜鷹なら、亭主の鬼王も、妓夫になつて、立前でも取らうか。

月小　さうしなせえ。他人に引手を出すのも無駄だ、お前が側で世話をしてくんな。

鬼王　そんなら鬼王、妓夫にならうか。誠にぎふの新左衞門だ。併し、御兄弟のお目にかゝつたら、ギウの音も出まい。

月小　併し、よたかな春ぢやわいやい。

鬼王　そりや又なぜ。

月小　ハテ、豐な春の地口ぢやわいな。

鬼王　おきやアがれ、いゝ機嫌な。

ト大拍子になり、鬼王、手拭をかむり、月小夜と並んで別れ、立ち身にて呼びかける。向うより覺兵衞、質屋の手代の拵らへ、石部屋といふ弓張りをともし、跡より清兵衞、襟卷、ぱつち、頭巾、雪駄にて、下男一人、小提灯をともしたるを連れ、出て來り、花道にて

清兵　モシ／＼、先へござるお方。八幡樣へは、まだ餘程ござりまするか。

覺兵　イエ／＼、もう僅かでござりまする。爰は雪の下の段かづら……アヽ、お前さん、こりや、當所

のお方でござりませぬか。

清兵　左樣でござりまする。江戶から商ひ用で、逗留いたして居りまする者。鶴ヶ岡へ年越しに、參詣に參る者でござりまする。

覺兵　左樣に見請けました。サア、斯うお出でなされまし。

ト大拍子になり、皆々本舞臺へ來る。兩人見附けて

月小　モシ〳〵、遊んでおいで〳〵。

鬼王　ハイ、口明けでござりまする。

覺兵　ナニ口明けだ。人を馬鹿にした。今夜もモウ八つ過ぎだに、とんだ夜鷹だ。

月小　さいなア。わたしや素人ぢやによつて、滅多な人には出ぬわいなア。モシ、町人さん、今宵は年越しの祝ひに、遊んでお出でんかいな。

ト清兵衞を引ッ張る。

清兵　アヽ、コレ〳〵、其やうに手荒うして下さるな。わしはこなた衆を買ふものではござらぬ。江戶の富ヶ岡で子供屋商賣、好い玉があらば、幾人でも抱へて行くが、野玉を買ふ氣はござらぬわいの。

月小　アヽ、そんならお前は、江戸の子供屋さんかえ。モシ、好い玉がありやんすが、相談なさんせぬかえ。
清兵　相談はしませうが、玉を見てからの話しサ。
月小　アイ、玉といふは、奉公に行く女子の事かえ。そりや氣遣ひなさんすな。その奉公人は外でもござんせぬ。わたしでござんす。
清兵　ナニ、こなたが江戸へ行きたいといふのか。
月小　アイ、まんざらでもあるまいぞえ。
清兵　イヤ、呆れたものだ。
鬼王　モシ、どうぞ御相談なされて遣はされませ。
清兵　アイ、下向に寄りませうよ。
鬼王　ハテ、さう云はずとちよつとマァ、相談を、モシ、お前も共に
　ト覺兵衛を捕へて、提灯のあかりにて顏見合せ
覺兵　ヤア、鬼王どのか。
鬼王　こなたは石部屋の

覺兵　アイ、覺兵衞でござりますが、好い所で逢ひました。

淸兵　オヽ、お知り人か。左樣ならお先へ參りませう。

月小　アヽ、コレ、お前に今の相談を

淸兵　歸りに寄りませう。

ト大拍子になり、供を連れ、振り切つて下座へ入る。鬼王月小夜、追ひかけんとするを、覺兵衞、二人を留めて

覺兵　アヽ、コレ〳〵。月小夜さんも御亭主も、好い所で逢ひました。モシ、お前方は、あの逆澤瀉の鎧の事は、どうさつしやります。流すなら流すと、挨拶をさつしやれば、小藤太さまへ直ぐに、その譯を申して請けてもらひます。サア〳〵、いま挨拶をして下さい〳〵。

鬼王　コレ〳〵、石部屋々々々、さうでもあらうが、もう四五日のところを

覺兵　イエ〳〵、なりませぬ〳〵。

月小　サア〳〵、尤もでござんすが、今さら人手へ渡しては、曾我さまの御難儀。それゆゑにこそわたしら夫婦が、鎧の金を拵らへる工面最中、どうぞこちら夫婦が、願ひを叶へて

覺兵　イエ〳〵、なりませぬ。親方も段々と、斷わつて來いと云ひつけました。お前方に逢うたが幸ひ

きつと斷わりました。

兩人　ハテ、さうではあらうが

覺兵　ハテ、斷わりました。コレ、どこの國にか女房に夜鷹をさせ、家老が妓夫をするやうな、そんな屋敷が唐にもあらうか。イヤ、馬鹿々々しい事でござります。

ト大拍子になり、振り切つて上手へ走り入る。兩人跡見送り

鬼王　エヽ、聞き分けの無いあの質屋め……とサ、云ふのは此方が皆無理かえ。

月小　いま四五日の、明日までのと、云うて騙した事なれば、聞いてくれぬも皆尤も。斯ういふ時にこなさんの、顏も知らねど弟御、團三さんといふたのが、ござんしたなら膝とも談合。

鬼王　サ、おれも疾から弟め、團三が事は思へども、まだ幼少なその時分、親仁の庄司左衞門が、劍難の相ありと、以前の旦那河津さま、お召しの馬の口取りに、赤澤十内といつたがあつて、その人へ一生不通の養子にやり、今では江戸に、職人と、聞いたばかりで行く先も

月小　わしもお前も知らぬ同士。

鬼王　家老の兄も世に落ちて、或ひは日雇、町使ひ、鎧を請ける相談も

月小　弟御さんがござんしたら

鬼王　三人寄らば文珠の智慧。

月小　二人寄つたら何の智慧。

鬼王　差詰め二人寄つたなら

月小　紋次の智慧でござんせう。

鬼王　出かした女房、さりながら、日雇に歩く鬼王が、足は豆やら皹やら。

月小　角力膏藥、治丹坊、熊の油に入りあげて

鬼王　身貧な中に物いりの

月小　それもお前の、皸皹

鬼王　これを思へば世の中に

月小　せまじきものは

ト兩人思ひ入れあつて

兩人　町使ひぢやなア。

ト唄になり、こなしあつて下座へ入る。直ぐに大拍子になり、向うと下座より仕出し四五人出る。この中へ向うより十六夜、絹やつし、一つ着、家中娘の拵らへ、黒縮緬紋附きの袖を直して頭巾にした

ろなかむり、扇を持ち、袖乞ひの體にて、仕出しに附く。仕出し皆々、「附くな〳〵」と云ふものもあり、腰提げより錢を出して遣るものあり、捨ぜりふよろしく、左右へ別れて入る。十六夜、舞臺へ來る。下座より清兵衛、下向の心にて、供を先へ立て、出て來り、行かうとする。十六夜、扇を出して物乞ふ體。清兵衛見て

清兵　年若な女中ぢやが、ドレ、合力しませう。

ト錢を遣る。

十六　ハイ、有り難うござります。

ト戴く。清兵衛、思ひ入れあつて

清兵　爪はづれの尋常さ。女中、こりやお前、浪人衆の娘御ぢやの。

十六　左樣でござりまする。長々の浪人の上、父さんに別れまして、母さんを養育の爲め、夜に入つての袖乞ひ。

清兵　それは御難儀。して、母親は御存じの上でか。

十六　イエ〳〵、母さんに申しましては、なか〳〵得心いたさぬと、存じついての出來心。八幡樣への心願と、親を僞はる不孝なわたし。

清兵　なんのそれが不孝でござらう。誠にお前は親孝行…………待ちなさい。さう聞いては身につまされて

ト思ひ入れあつて、紙入れより一分出し

僅かでござるが、これを進ぜませう。寒いに、早く歸つて下さりませ。

ト渡す。十六夜こなしあつて

十六　大枚なお金、エヽ、有り難うござりまする。重ねてお禮も申す爲、あなた樣のお名も所も、どうぞ仰しやつて下さりませ。

清兵　これはしたり、ナニこれしきに禮どころか。殊にわしは、當所の者でもござらぬ。これよりはるか東の者。江戸の内でも惡所場と、世間で云へど花やかな、色を商ふ富ケ岡、深川といふ所で、藝者子供の世話をする、福島屋の清兵衛といふ者でござるが、お前のやうな尋常な、氣立ての優しい女中があらばと、性は子供を抱へに來て、逗留して居ますのサ。

トこれにて十六夜、思ひ入れあつて

十六　エヽ、左樣ならお前は、江戸のお方で、藝者とやらのお世話なさんす

清兵　福清といふ子供屋サ。

十六　アノお前さんが

　　トこなしあつて

折に幸ひ、好いお方にお目にかゝつて、わたしが願ひを

　　トもぢ〳〵するを、清兵衛思ひ入れあつて

清兵　好いお方にと云はつしやるは、お前、女郎にでもなりたいのかえ。

十六　アイ…………イエ、左樣でもござりませねど、ちつと金子の入用がござりまするが、モシ、あなた樣、お世話なされて、アノわたしを、藝者に抱へて

清兵　お前が勤めて見る氣なら、相談もしませうが、マア〳〵、お前の内へ連れ立つて

十六　サ、それではどうも母さんに。

清兵　知れては惡いといふのかえ。ハテ、それぢやアわしも相談が

十六　なされ憎いと仰しやるも、御尤もでござりまする。これには段々わたしが方に

清兵　こみ入つた譯もござらうが、それ聞かうにも立ちながら、寒いに爰で

十六　お話し申すも往來の人目。幸ひ爰の番屋の内、ちつとの間お借り申して

　　ト番屋へ思ひ入れ。

清兵　成る程、番屋を借りて、委細を聞いたその上で、どうなりとも相談しませう。併しお前と差向ひ無遠慮でもあり、……コレ喜助、てまへ入つて待つて居ろよ。

下男　ハイ〳〵、畏まりました。

十六　左樣なら、私しが申す一通り

清兵　聞いて進ぜませう。

十六　エヽ、有り難うござりまする。

清兵　ハテ、その禮は、跡で云はつしやりませ。

ト大拍子になり、思ひ入れあつて三人とも、番屋の戸を明けて内へ入る。下座より景季、おいろ、お花、醉ひたる體にて、捨ぜりふ云ひ〳〵出で來り

景季　コレ〳〵、てめえ達は何と思ふ。今の鰒汁は、生煮えぢやアなかつたか。

いろ　それ〳〵、わつちもさう思つたが、どうでも今夜の事だから、その位な事はあらうと、我慢して食つたが、あの酒も火入れだの。

はな　さう云やアあの酒も、剛敵に石灰を入れて直したのだ。そのせゐかして、こんなに聲が枯れたよ。

景季　何を人聞きのいゝ。てめえの聲の立たねえのは、えてものだワ。

はな　オヤ、か印しはあやまるの。さう云つても、酒が足りねえかして、剛敵に寒いの。

いろ　夜が更けるほど寒くなるよ。斯うせうか、普請場へ行つて、鋸屑でも焚いて、あたらうぢやアねえか。

兩人　そいつはいゝのサ。温まらう／＼。誠に立ち切れねえよ。

ト矢張り大拍子にて、三人は普請場へ入る。かすめて七つの鐘鳴る。番屋の内より、件の三人、出て來り

十六　どうぞ只今申しました事、間違ひませぬやう、お願ひ申しまするわいなア。

清兵　氣遣ひさつしやるな。おしつけ駕籠を頼んで迎ひにくる。わしが旅宿は雪の下の瀧右衛門、今夜お前を同道して、證文の文言も、とつくりと掛合ひませう。その上、入用の金子も

十六　よろしうお頼み申しまする。

下男　旦那、私しはお先へ參りませうかえ。

清兵　さうしてくりやれ。提灯はおれに渡して、先へ歸つて、宿の手合ひにも、今の譯を話すがいゝ。おれはこれから大門先で、駕籠を雇つてくるから、てめえはマア、先へ歸れ／＼。

下男　畏まりました。

ト此あたりより以前の三人、普請場より出かゝり、窺ひ居る。

十六　左樣なら、偏へに金子調ふやうに

清兵　氣遣ひしまい。今に來ます……ドリヤ、駕籠を賴んで

ト大拍子になり、供の男は向うへ、清兵衞は提灯を提げて下座へ入る。十六夜殘つて

十六　エヽ、嬉しや、好いお方に逢うて、わたしが願ひも叶ふといふもの。それに取分け今のお方、お心立てといひ、世に人鬼は無いものぢやなア。

ト思ひ入れ。この時、件の三人立ちかゝつて

いろ　オヤ〳〵、源さん、見な、粋な娘だなう。

景季　さうサ、噂には聞いたが、今夜見たが初めてだ。この位な代物で、野玉の潜りに出られちやア、おいらが商賣は隙な筈だよ。

はな　コレ源さん、この女ッ子を連れて行つて、わつち等が仲間へ入れるがいゝわな。

景季　入れねえでどうするものか。サ、姐さん、おらが内へ來や。

ト引立てる。

十六　アヽモシ、こりやどうなされます。

いろ　どうするものかな、夜鷹の仲間へ入れるのだよ。

十六　エヽ、そりやなぜでござりまする。

景季　なぜといふ事があるものか。この頃この雪の下へ、夜に入ると娘の袖乞ひが出ると聞いたが、今見りやアこの番屋から、男を送つて出たのは、往來にぢなついて、野天の地獄を始めたな。爰らにそんな潜りがあつちやア、商賣の邪魔になる。サア、仲間へ入れる。來やアがれ。

十六　アヽモシ、滅多な事を仰しやつて下さりますな。私しは其やうな、人樣を騙しました覺えはござりませぬ。どうぞ御勘忍なされて下さりませ。

はな　これナ、姐さん、何も怖い事はねえ。高がわし等が仲間へ入つて、明日から爰へ夜鷹に出る分の事だよ。

十六　エヽ滅相な。どうしてマア左樣な事が。どうぞ、勘忍なされて下さりませ〳〵。

いろ　何も泣ツ面をする事はねえ。夜鷹の仲間へ入れるのだ。それとも否なら、てめえの親の名を聞かうか。

十六　サ、其わたしが親と申しまするは

景季　浪人者か、但しは何だ。

十六　親の家名は、爰ではどうも

景季　エヽ、小自烈たい。吐かさねえと、捻りあげて

ト〆めにかゝる。十六夜逃げるはずみ、帯の間より端錢、バラ〳〵と落ちる。

兩人　そりやこそ、錢をこぼしたワ。

景季　勤めに取つた錢であらう。サア、それを云へ〳〵。

十六　イエ〳〵、合力を願ひましたが、どうしてマア、この身を任して

景季　エヽ、吐かさねえな。吐かさねえと、ぶんのめすぞ。

兩人　おいらが寄つて、抓つてやらう。

ト太股を抓る。

十六　アヽモシ、御免なされませ。

景季　エヽ、泣ッ面をしやアがるな。

ト普請場の手頃の丸太にてくらはす。

兩人　いつそ連れてあゆびなせえな。

景季　サア、女ッ子め、うしやアがれ。

ト引立てる。大拍子になり、向うより六三、やつし形、廣袖、羽織を肩に掛け、たゝみの股引、白足袋、藤倉草履、垂れ扇と杏葉菊の比翼紋の手拭をかむり、誂への弓張りをともし、出で來り、十六夜が泣き聲を聞いて、この中へ入り

六三 なんだ〳〵、女の泣き聲だが、どうしたのだ〳〵。マア〳〵、放しねえな〳〵。

兩人 イエ〳〵、打ッちやつて置きなさい〳〵。

景季 お前方の知つた事ぢやアねえ。兄さん、退いてゐな〳〵。

六三 いゝよサ〳〵、退けと云ふなら退きもせうが、見れば女一人を寄つてたかつて、可哀さうにこづき廻すが、入譯はこんた知つて居やう。こりやアマア、どういふ始末だ。

景季 モシ、兄さん、聞きなさるなら云ひやせうが、わつち等は爰へ出る、野玉の妓夫でござりやすが、お聞きなさい、この女が、わしどもが出る場所へ來て、夜鷹の潜りをしやすから、野稼ぎの仲間へ入れようと、それから起つたごたつきサ。

六三 アヽ、てめえ達は夜鷹か。そりやアとんだ話しだの。コレ、姐さん、お前、本當にこの人の云ふ通りか。さうか〳〵。

十六 イエ〳〵、左樣ではござりませぬ。わしたや浪人の娘、母さんを養育の爲、一錢二錢の合力は致

しましたが、どうしてマァあられもない、あのやうな事を。

兩人　よく嘘を吐かす女だ。うぬ、手證を見て云ふわえ。

景季　憎い奴だ。モシお前さん、退きなさいやし。

ト立ちかゝるを、六三キッと留めて

六三　これサ、なんだ、人そばへな。おれが挨拶に入つて居るなら、大概にするがいゝワ。姐えに聞けば、今の通りだ。成る程、見たところが、てめえ達の商賣の、邪魔をするやうな恰好でもねえ。この子が云ふ通り、浪人の娘に違ひもあるめえ。こりやァ大方間違ひであらう。おれが貰つたよコレ、てめえ達もさう思つて、間違ひにしてしまはつしな。ハテ、女の事だ、どうなるものか。おれに下つし。マァ、さう思つてしまや〳〵。

景季　イエ〳〵、さうは致しやすめえ。きつと見附けて申しやす。アイ、わたし等は毎晩々々、この晋請場小屋で客を取つて、今夜も今までこの小屋で、娘の始末はしつかりと見て云ひやすに、お前も立派な兒さんだが、野王の筋道は知りなさるまい。モシ、わしも父斯う云へば、地金を現はすが、腹からの妓夫でもねえわな。身狀が惡いから、こんな態になつたが、これでもお前、根は大名の若殿サ。

六三　エヽ、アノ、おぬしやア大名の子か。
景季　さうサ、梶原の惣領で、源太景季とはわしが事サ。モシ、兄さん、今聞きなさる通りだ。この女を連れて行つて、明日から野玉の稼ぎに出したなら、否とも身親類が出て來やせう。それからが此方の仕事だ。ぬし達の知つた事ぢやアねえよ。そつくりと置いてくれ。
六三　イヽヤ、そつくりとは置くめえがどうする。
景季　なぜ〳〵。
兩人　なぜ置かれやせんね。
六三　やかましいッ、業人めら。料簡ならざア、姐えが事は構ふまいが、なぜうぬらア薄穢ねえ、この普請場で客を取つた。
いろ　エ、ナニ。
六三　コレエヽ、この普請場は八幡樣の、御修覆の木材木を引込んで置く、いはゞお宮の木柱は、御神木も同じ事だ。その御普請のこの小屋は、請負ひ大工の預かり場所、なぜその場所を穢した、イヤサ、薄穢ない夜鷹のうぬらが、なぜ寢所にしやアがつた。コレエヽ、只の職人だと思やアがるか。わざ〳〵江戸からお神輿を、荷ひ込んだるお江戸の生ぬき、左甚五郎はおれが親分、その外

竹田の番匠から、干鱈を貰ふ親方株、大工の六三と噂のある、職人はおれが事だワ。業人めら、ドリヤ、筋骨を抜いてやらうか。

ト立ちかゝる。

景季　アヽ、コレ〳〵、そんなら兄ィは、この普請場の棟梁か。

六三　預かりはおれだワ。サア、赤い野郎め、申し分はござりませぬ、不調法でござりますと、四つん這ひになつて、あやまつてうせろ。

景季　イヽヤ、さうは云ふまい。おれも態は悪いが、小口もきく出島の源太郎だワ。小二才に苛められて凹むものか。そのマア女は、おいらが仲間へ

兩人　源さん、引摺つてあゆびねえな。

六三　指でも附けて見ろ。

景季　何を利いた風な。

ト十六夜へかゝる。六三引退ける。景季、丸太を持つて打つてかゝる。六三、引ッたくり、十六夜を圍ひ、三人をしたゝかにぶちのめす。此うち始終大拍子。三人は這々の體にて下座へ逃げて入る。六三、思ひ入れあつて

六三　エヽ、薄穢ねえ、人そばへな亡者野郎めら。コレエヽ、江戸ッ子だワ。誰れだと思ふ、大工の六三だワ。とつけもねえ間抜け野郎めらだ……モシ、姐さん、案じなさるな。わつちが來ちやア、落ち附いてゐなさい〳〵。

十六　ハイ〳〵、有り難うござりまする。お聞きの通り、わたしや浪人の娘、袖乞ひ致すをあのやうにこの身にとつて覺えなき、あられもない事。

六三　よしサ〳〵、その位な事は、ぬしの恰好でも知れるわな。今の奴等が、まんざらの拵へ事と、疾からわつちやア人札をして置いたのサ。

十六　さう仰しやつて下さりますれば、わたしも嬉しうござりまするが、さぞ内でも母さんが、案じてでござりませう。殊に最前約束した、江戸のお方が、もし爰へ。

ト思ひ入れ。

六三　江戸の者とは、わしが事かえ。

十六　アイ、ちつと此方に、お話し申した江戸のお方が

六三　アヽ、おれだと思つたら、まだ外に江戸の者があると見えた。おきやアがれ、うぬばかり江戸ッ子だと思つて、自惚れた奴サ……左樣なら姐さん、氣を附けて歸りなさい。

ト行かうとする。

十六　アヽモシ、お前さん、もうお歸りなされますするかえ。

六三　歸りやすが、お前、用があるかえ。

ト十六夜、思ひ入れあつて

十六　アイ、さして用事もござりませぬが、もし又今のあの衆が

六三　成る程、わしが歸つたと見たら、又うせるであらう。そんなら斯うしやせう。ぬしの内まで、わしが送つてやりやせう。サア、委細かまはず、歸りなさい〳〵。わしが送れば、ほんの事だが、狼より慥かだね。

ト十六夜の手を引いて、無性に歸らうとする。

十六　アヽモシあなた、送つて下さりまするは、有り難うござりまするが、ちつとわたしや爰に居つて逢つて參らねばならぬお方がござりまして。

トもじ〳〵する。六三思ひ入れ。三味線入りの大拍子になり

六三　ナニエ、爰に居て逢つて行く人があるえ……コレ、そいつはお前、ちつと味だね。さう聞いちやア骨折り損だね。のろい奴サ。モシ、そんならお前、氣遣ひはないわな。逢ひに來る人があれば

大丈夫だ。わつちやァもうお暇申しやせう。ゆるりとおしげりなさい。

ト行かうとするを、十六夜とめて

六十　アヽモシ、お前さんがお出でなさんすと、また跡でどのやうな難儀に

六三　それだといつて、いつまで附いて居られるものかな。そしてお前、逢ひに來る人があるぢやァねえか。

十六　アイ、奉公の口があらばと、頼んで置いた

六三　アヽ、お前、奉公に行く氣か。

十六　アイ、母さんの爲に奉公せねば。

六三　して、奉公のその先は

十六　遠い所とあるからは、重ねてあなたへ今宵のお禮も

六三　ナニお前、これしきにお禮がいるものかな。わつちは又、禮を受けようといつて、あの位な世話はしねえのサ。

十六　左樣ではございませうが、今宵お別れ申しては、いつ又お禮を申す便りも

六三　ハテお前、禮には及ばぬといふに。それともお前、わつちへお禮なら、今でも出來る話しだわな

併し錢金のいるお禮は否だね。

十六 して、どのやうなお禮を致すのでござりまする。

六三 そのお禮は、お前、どうでもなる話しだわな。

ト十六夜の手を取つて引寄せる。

十六 アヽモシ、何をなされまする。

六三 何をするものか、お禮をするのサ。

十六 これはしたり、惡い事なされまするな。

六三 惡くつても、これがお禮だわな。

十六 それぢやと申して。

六三 ハテヽ、野暮な子ぢやアねえか。いゝワ〱。

ト十六夜の手を取つて、件の番屋へ引込み、弓張りの灯を吹き消し、戸をたてる。直ぐにバッタリと物音する。この途端一度の仕組み。本神樂になり、竹矢來を破り、閉坊、頰かむり、密書を咬へ、窺ひ〱出て來り、思ひ入れあつて

閉坊 蒲どの御所持なされたる、春筐の名笛こそ、先年平家盛んの砌り、俊成卿の御祕藏なりしが、山

城の國井手の里にて、殁り給ふその砌り、この名笛の行くへ知れず、然るに井手の山吹の、時來らざる雪間を分け、花の盛りを怪しみて、山吹の根を穿ちしに、さてこそ埋めありしゆゑ、人知れず奪ひ取り、隱し置かれし範賴公、又もこの度試みんと、鴫立澤に埋め置きしが、以前に變らぬ山吹の盛り。もしもこの事鎌倉へ、洩れ聞えては一大事、殊に小藤太成家どの、この書面にて賴み越されし、高野の奥の砒霜石、毒石ゆゑに別當行實、深く御寺に秘め置きしを、尋ね出して成家どのへ、ちつとも早く。

ト毒の箱を出し、密書もろとも持ち行かうとする。よき時分、鬼王月小夜出かゝり、立聞きして、この時走り寄つて手をかける。三人立廻りあつて

閑坊　こりやア引留め、なんとする。

月小　サア、お前を留めたはお若衆さん、遊んでお出で。

鬼王　それが否ならその品を。

ト手をかける。三人よろしく立廻りあつて、見得になる。これより大拍子の入つたる誂らへのだんまりの鳴り物になり、立廻りあつて、トゞ閑坊、二人を手ひどく投げつけ、一散に向うへ入る。兩人、やう／＼起上がり

月小　鬼王どの

鬼王　月小夜。

月小　だんまり模様であの品を、横取りしようと思つたら

鬼王　二人が二人投げられて、これでは築地へ歸られない。

月小　どうで今宵は年越しの、厄でも拂つて歸りませう。

鬼王　おぬしが女の厄拂ひ、珍らしいからこりやァ流行らう。

月小　お主の厄も我が厄も

鬼王　お厄拂ひ厄落し、鶴は亭主の定紋にて、龜は坂東彦三郎が門弟。

月小　頭の長いは福祿壽、とうぼうござんせ夜叉明神、浦島蕎麥屋も百六つ、惡魔外道をかい摘み

鬼王　築地の海へ、さらり〳〵。

ト大拍子になり

月小　お厄拂ひませう厄落し。

ト厄拂ひになつて向うへ入る。明六つの鐘、矢張り大拍子。番屋の戸を明け、六三は簪を持ち、十六夜は六三の手拭を持ち、探り〳〵出て來り、思ひ入れあつて

六三　そんなら必ず、どこのいづくに住めばとて

十六　お前にあげた簪の、紋を證據に

六三　おれも渡した手拭の、比翼重ねのその紋が

十六　また逢ふまでの互ひのしるし。してアノお前は、いよ〳〵江戸で

六三　大工の六三といふ職人。して、アノお前は

十六　アイ、今は浪人、以前は大家の

六三　家中の娘か。話せばわしも侍ひの。マア、こなさんの親御の家名は。

十六　アイ、恥かしながら

　　ト云はうとする。この時、清兵衞、小提灯を下げ、四つ手駕籠をつらせ、走り出て來り、十六夜を見て

清兵　待ちかねてか。サア、この駕籠で。

十六　ハイ、お待ち申して。

清兵　サヽ、極めた上では、コレこの金を

　　ト胴卷きの金を十六夜に見せる。

十六　有り難うございます。そんなら駕籠で
　　ト思ひ入れあつて駕籠へ入る。
六三　アヽ、そんならちよつと、今云つた
十六　母さんの爲・江戸への奉公。
六三　今度尋ねて逢ふ時は、簪は八つ丁子、裏の毛彫りは
　　ト見分かぬ思ひ入れ。十六夜も手拭を見て思ひ入れ。兩人顏見合す。この時、上の方蘆間に、羽音夥しく、水鳥舞ひあがる。清兵衞愕りして
清兵　これが誠にあし許から
十六　飛び立つやうに
　　ト駕籠より思ひ入れ。
六三　エ。
　　ト駕籠へ思ひ入れ。十六夜、垂れを下ろす。木の頭。これをキツカケに東の方へ、紅絹張りの朝日、霞の間より出る。清兵衞、提灯を吹き消す。六三、簪を見て、「ムウ」と思ひ入れ。これをキザミにて、とたん一度に、ひやうし

幕

幕引附けると、通り神樂にてツナギ。數多の水鳥、空に舞うてゐる。幕の間にて道中双六、福神双六、寶船々々。

ト通り神樂の間を商人の賣り聲にてツナギ、引返し。

第一番目三建目の切　鎌倉鶴ヶ岡境内の場

役名――見世物師、梶の長兵衛。石部屋丁稚、勘吉實ハ曾我の禪司坊。工藤犬坊丸祐友。大磯屋傳三。山崎小文次。梶原平三景時。盗人、矢尻の音。海野の太郎。新貝荒次郎。竹の下孫八左衛門。若い者、權七。千壽君實朝公。お厩の德竹。水茶屋娘、おくに。大工棟梁、船越十右衛門實ハ赤澤十內。石部屋金兵衛。工藤中老、宇佐美。稻野谷後家、おかや。同娘、おはん。

本舞臺、三間の間、正面廻廊の裏を見せたる道具、東西太き朱塗りの柱、上に白木綿龍膽紋附きの幕を絞り、此うちにいつもの出茶屋の道具を飾りつけ、上の方に遷宮の建て札、相州鶴ヶ岡八幡境内の模樣。日覆に水鳥數多、一羽の白鳩と爭ひ居る。爰に實朝、狩衣、刺貫の形。御所の五郎丸重宗、

かちんの素袍、兒畨にて朱の長柄をさしかけ、上の方に景時、白髮。海野太郎・新貝荒次郎、竹の下孫八、いづれも素袍立烏帽子にて、德竹、茶道の形にて實朝の太刀を持ち、仕丁大勢居並び、舞臺皆皆、日覆の鳥に目を附けてゐる。天王立、トヒヨ、風の音にて幕明く。

景時　ハテ、心得ぬ。いま右幕下賴朝公の公達實朝公、源家の武運祈りの爲、當鶴ケ岡八幡宮へ社參の折から

重宗　水鳥數多集まり群がり、一羽の鳩と食ひ合ふ有樣。

太郎　鳩は即ち正八幡の使はしめ。察するところ國々に

荒次　木曾平家の討滅らされ、まツこの如く鎌倉どのを

孫八　責め亡ぼさん企てなるか。

景時　殊に何やら白鳩の、一紙を咬へ、さまよふ有樣。

重宗　凶事か吉事か、何にもせよ、怪しき鳥の

皆々　振舞ひぢやなア。

トこの時、向う揚げ幕にて「エイ」と弦音して、日覆より吹替への、矢の立つたる鳩、舞臺へ落ちる。

これは。

ト向う揚げ幕にて

呼び　犬坊丸參詣。

ト序の舞になり、向うより犬坊丸、長上下、破魔弓を持ち、跡より宇佐美、中老の形にて、殘りの弓矢を持ち、小文次、麻上下にて附添ひ、菖蒲革の若黨一人附いて出て來り、花道にとまる。

重宗　工藤の子息犬坊どの、只今參詣めされたか。

犬坊　ハツ、父祐經、この程の所勞によつて、鴫立澤の別莊へ出養生。即ち父の名代として、犬坊丸祐友、只今參上仕つてござります。

宇佐　私しは、工藤の奥を勤めまする、宇佐美と申しまする者。近江八幡の兩執權も、左衞門さまへお附きゆゑ、即ち妾も社參の名代。

小文　介添へは山崎小文次。若殿樣には、まづ／＼あれへ。

犬坊　いづれも御免下されい。

ト鳴り物の切れにて、皆々本舞臺へ來る。

景時　いづれも、犬坊丸を取卷きめされ。

太郎　ハツ……犬坊丸、動くまいぞ。

宇佐　アイヤ、憚りながら梶原さま、何ゆゑあつて犬坊丸を

小文　斯くの如くに取巻かれしは。

景時　ハテ知れた事。源家の氏神、八幡宮の使はしめ、頼朝公にたとへたる、この白鳩を射とめしは、取りも直さず源家を調伏。

太郎　まだその上に、外の水鳥でも射とめる事か、跡は散亂、皆逃げ失せ

荒次　白鳩ばかり選りどつて、射とめられしは心に一物。

孫八　君の御前へ引立てゝ、糺明さするワ。

三人　キリ〳〵立て。

小文　イヽヤ、そりやいづれも様の横車だ。

皆々　そりや又なぜ。

小文　鳩は八幡の使はしめといふ事は、犬打つ童も存じた事、それを知りつゝ調伏と、合點で射とめる白痴があらうか。察するところ各々方、祐經出仕あるうちは、勝手の惡い事ゆゑに、難癖つけて御前を遠ざけ、欲しいまゝの惡巧み。その手にうま〳〵乘るものか。

孫八　ヤア、大老の前とも憚らず、無禮の一言。

荒次　殊に公達實朝公の御前。我れ〳〵に慮外があると

景時　父祐經まで重きお咎め。

小文　でも目前に無理非道、この小文次が耳に障るワ。

犬坊　小文次扣へい。

小文　ハツ。

犬坊　ハテ、仰々しい各々方。いま國々に殘黨餘類、やゝともすれば叛逆の企て。神の知らせに水鳥の白鳩一羽と食ひ合ふを、某數多の惡鳥を、射とめんには一挺の弓、一つの矢にて、元より鈍き小腕なれば、なか〳〵心に任せぬゆゑ。

景時　すりや、右幕下に譬へたる、鳥を射ても大事ねえのか。

犬坊　イヤ、物の命を取るべきとて、祐友、弓の稽古は致さぬ。

荒次　でも、この如く白鳩を

犬坊　いかにも拙者が射落しました。

皆々　なんと。

犬坊　刃を以て敵に勝つは、匹夫の勇と父の誡め。今の如く鳥の戰ひ、大敵を退けて、一羽の鳩を助くる軍法、これ見られよ。

ト立ちよつて鳩に差したる矢を引拔くと、トヒヨになり、口に咬へし書き物を置いて飛び去る。

皆々　これは。

宇佐　命を落さず羽交を縫ひし、若殿のお手際。

小文　サア、梶原さま、いづれも樣、これでもなんと犬坊さまに、云ひ分がござるか。

皆々　成る程、きついものだ。

宇佐　この上ともにいづれも樣、御疑念はござりますまいが。

景時　いかにも。

小文　年に不足も梶原さま。へゝ、ちつとさうもござりますまい。

重宗　これサ、小文次、初春早々梶原どのも、小さい子供にやりこめられ、某し甚だ氣の毒千萬。ナニ宇佐美どのとやら、この場の事は、重宗に免じられて。

宇佐　これは／＼、痛み入つたる御挨拶。それでは却つて此方にも

犬坊　烏滸がましき小兒の差配、いづれも御免下されい。

重宗　久しいものだ。梶原どの、いづれもにも、ちと嗜まつせえ。

實朝　流石は左衛門祐經の忰、射術といひ、父にもまさりし犬坊丸。

犬坊　ハツ、有り難きそのお詞。家の面目、この身の冥加。

宇小　有り難う存じまする。

ト この時宇佐美、鳩の落せし書き物を見附け

宇佐　こりや慥かに、義經公の含み狀とやら。

ト 景時、手早く取つて懷中して

景時　イヤ、こりやアなんでもねえ物だ。

宇佐　でも、正しく鳩の啄へし書き物。

皆々　なんと。

犬坊　ハテ、此方に係はるべき品にあらねば、打捨て置け。我が君様には御本社へ入らせられ、然るべう存じまする。

實朝　犬坊丸は、予と一緒に

重宗　イザ、神職方へ。

犬坊　お供仕るでござりませう。
宇佐　今のは慥かに
　　ト景時へ思ひ入れ。
景時　なにを。
犬坊　然らば、いづれも。
景時　我が君様にはまづ
皆々　入らせられませう。
　　ト管絃になり、實朝先に重宗、宇佐美、犬坊丸、小文次、仕丁殘らず附添ひ、下座へ入る。敵役皆々
　　殘る。
皆々　梶原どの。
景時　アヽ、いつも〳〵古いやつだが、小びつちよに頭を押へられた。いま〳〵しい。
太郎　して、いま懐中めされし一品は。
景時　さればサ、こりやァ義經どのゝ含み狀。先年高館の城にて討死せしは、四郎兵衛忠信が身替り
　と、鎌倉での評判。よし死んでも死ないでも、某が口先で、一旦ぼいこくつた判官どの。それゆ

ゐにこそ、この含み狀には、我れ〳〵親子、あくそもくそ、書いてあるに違ひない。

ト懷より以前の書き物を出して寸々に引裂き

斯うしてしまへば後腹病めず。なんぼ小僧に云ひ込められても、轉んで只は起きない某。

荒次　我れ〳〵とても、範頼公に一味すれば、なんぞのかぞの、怪しい事を見附けたら、尾に尾を附けて祐經や、和田北條の輩をば、遠ざける手段ばかり。

孫八　怪しいと申せば、この程鴫立澤に、時ならぬ山吹の花の盛り、夥しいと巷の噂。これ等の儀、何ぞの役には立つまいかな。

景時　先年平家沒落の後、山城の國、井手の里に、雪間を分けて山吹の盛り。範頼公怪しみ給ひ、山吹の根を掘らせ給ふに、一つの名笛出づる。これ即ち春篁と名けし、俊成卿の秘藏の名笛。大儀を思ひ立つにも、斯樣な寶なくてはならずと、その後近江小藤太に預け置かれしが、もし又その笛あの邊に、隱し置いたるその德にて、山吹が咲いたかも知れぬて。

太郎　何は兎もあれ、氣取られぬ工風が肝腎。

孫八　段々手番ひの好い儀でござる。

ト通り神樂になり、向うより金兵衞、胡麻鹽頭、質屋の亭主の形にて、跡より勘吉、丁稚の形、風呂

敷包みを持ち、附いて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

景時　こりやア石部屋の金兵衞、一夜明けても、まだ掛取りに歩くのか。

金兵　これは〳〵、お大名樣まで掛取りと御存じならば、申さぬも私しの損。あなたの御子息源太さま產衣の鎧で、百兩お貸し申したが、あれはちつと高過ぎましたを、無理にお口說きなされますゆゑ、通用にはなりませぬが、一遍はお貸し申せども、源太さまだけ、二度の掛けには致しませぬと申したら、ハテ、おれも大名の子だ、直ぐに返す〳〵と云ふうち、もう三年。利上げでもなります事か、いま泰平の世の中ゆゑ、流れに出ても買ひ手は無し、誠に困り切つて居りまする。三月四月の利分は、お負け申しませうほどに、どうぞお請けなされて下さりませ。

景時　これサ石部屋、そりやア何を云ふ。あの惣領の源太めが、梅ケ枝といふ賣女にはまつて、產衣の鎧まで、質にやつた不埒者、疾に勘當して、屋敷には居ぬぞよ。

金兵　エヽ、そんなら源太さまは、御勘當でござりまするか。ホイ。

孫八　イヤナニ、石部屋とやら、氣遣ひしやるな。源大どのは勘當されても、梶原どのは大盡だワ。百兩や二百兩の鎧、家の外聞になる事なら、いつでもお請けなさるワ。

太郞　その事は、我れ〳〵が請合ひだ。

金兵　そんなら、あなた方のお請合ひで、鎧の埒は明きませうかな。
皆々　いかにも。
金兵　エヽ、有り難いワ。まづ一つの鎧は片附きました。
景時　して、まだ外に鎧があるか。
金兵　ハイ、今一つのは、困り物でござりまする。曾我のお屋敷から参りました、逆澤瀉の鎧でござりまする。
景時　成る程、こりやァ請ける事はなるまい。鎌倉一の貧乏屋敷。なんとして〳〵。
　　トこれにて勘吉、ムッとするこなし。
金兵　左様でござりまする。鎧はおろか、上下に至るまで、手の屆くだけ口説いて借りまする。その上に、夜着て寢る物まで
　　トこの時、勘吉、聞きかれて
勘吉　アヽモシ、旦那樣、お前樣も、よい加減な事を仰しやりませ。なんぼ曾我さまのお屋敷でも、上下素袍、夜の物まで、どう致しまして、一度も參つた事はござりませぬ。
金兵　ハテ、てまへは異な事を心遣ひするな。曾我の屋敷では、この金兵衞が頭を振ると、鎌倉御所な

勤める事はならぬワ。

勸吉　イエ〳〵、曾我さまから參りましたは、逆澤瀉の鎧ばかり、それとてもお屋敷には沙汰なしに、お部屋住みの祐成さま、ほんの身の差合せとやら。

金兵　よく嘘をつく奴なア。祐成どのが、大磯の虎とやらに現をぬかして、揚げ代の、たゝまりに、千方盡きて鎧の質入れ、七十兩はむづかしい代物、おのれが差配で、百兩貸し、今以て請け戻さぬ。

景時　そりやその筈の事がある。祐成が廓通ひの着物は、そつくり上げ下げ首の殼。その利息さへ寄越しはしまい。

金兵　どう致して〳〵、利足どころか、悪く致すと、種まで返した事はございませぬ。

太郎　さうであらう〳〵、鎌倉登城のその砌りも、羽織も素袍も入替へ物。

孫八　老母の寐卷が大小と、代つて出仕のその朝は、麻風呂敷が行つたり來たり。

景時　相も變らぬ曾我の貧乏、みじめな態でござるわえ。

皆々　左樣でござる。ハヽヽヽヽ。

トロ々に云ふ。勸吉、無念の思ひ入れ。

勘吉　そりや又あんまり。

　　ト思ひ入れ。

金兵　コレ、てめえ、涙ぐんでゐるな。面妖、曾我の事を云ふと、腹を立つたり、また贔屓をしたり、なんぞ曾我に由縁でもあるのか。

勘吉　イヽエ、どうしてマア

金兵　イヤある……そこへ出ろ。

　　ト勘吉の襟髪を取つて引摺り出し

道理こそこの間中から、曾我から持つてくる雜物、値打のねえ代物まで、不相應に貸してやつたり、曾我の事を惡く云へば、目に角をぶッ立てゝ、お出入り屋敷のあなた方へ、無禮を働らく罰あたりめ。われが曾我の贔屓をしても、おりや生れ附いて曾我の奴等が大嫌ひだ。貧乏神を貢がうとて、おッつけ泥坊ひろぐも知れぬ。主に逆らふ大盜人め。

　　ト雪駄を穿いたまゝ顏を蹴る。勘吉この拍子に懷より秋野の狩衣を落す。金兵衞、何心なく見ようとする。勘吉、手早く懷へ入れる。

勘吉　こりや私しの大事の物。

金兵　そりやこそな／＼。たつた今云はぬ事か。その代物は、どこで盜んだ。

勘吉　滅相な。こりや私しが親の形見……イヤサ、片身ごろにも足りぬ、端の破れ衣。襦袢の繼にせいと申して、宿から送りしこの小裂れ。

景時　イヽヤ、ちよつと見るから見覺えの、秋野の摺つた河津の狩衣。

太郎　親の形見と吐かしたからは、云はずと知れた曾我の由縁。

勘吉　どう致しまして私しは

金兵　それでなくば今の品、そこへ出しておれに見せろ。

勘吉　それはどうも

孫八　そんならどこぞで盜んだのか。

勘吉　全くさうでは。

金兵　そんなら見せるか。

勘吉　サアそれは。

皆々　サアノ＼／＼。

金兵　エヽ、キリ／＼と出しやアがれ。

ト籠張りの貸盆にて、さん〴〵に打つ。大拍子になり、向うより十右衛門、大工の棟梁の形にて出て直ぐに本舞臺へ來り、金兵衛を突きのけ、勘吉を圍ひ

十右　こりやアあなた方、年のゆかぬ者を可哀さうに、なんで此やうにさつしやります。

金兵　貴樣はどこの人か知らぬが、此方の奉公人を折檻するに、脇から大きにお世話だ。退いて居さつしやい。

十右　成る程、こなたの奉公人を、こなたが折檻するに、通りかゝりのわしが、構ふ理屈はなけれども、わしは今度、鶴ケ岡造營について、普請一切請合つた、棟梁の船越十右衛門といふ者でごんす。普請のうちはこの境内は、いはゞ十右衛門が預かりの場所といふもの。その貸盆で、若い人を打ち打擲。ひよつと痛みでもついて、血の穢れでもあつた時は、神の庭先、殊にアレ、お大名も御社參の折節、もし神職から咎めでもあつた時には、何かと係り合ひに、わしも面倒だ。それで、ちよつと支へたのサ。何か譯は存じませぬが、この子はわしにお預けなさい。いづれも樣も、ともどもお願ひ申しまする。

景時　イヤ、一通りの折檻ではない。その素丁稚に詮議がある。

十右　そりや又なんの。

太郎　何やら怪しい一品を、所持して出さぬ、その童。

荒次　慥かに曾我へ身寄りの者。所持する品は秋野の狩衣。

十右　ナニ、秋野の狩衣を

ト勘吉の顔を見て思ひ入れ。

金兵　疑ひもなき曾我の身内、隠し立てするその代物。

ト勘吉へかゝらうとする。十右衛門隔て

十右　ハテ、珍らしい事を聞く。なぜ又曾我の身寄りなら、何の咎めで詮議なさるな。

景時　ヤ……それは、なにサ、その童めが、兎角隠して居るが怪しいわえ。

十右　アイヤ、憚りながら梶原さま、たとへ慥かなその品を、持つて居りましたとて、秋野の狩衣、曾我に限つた事でもなし、よし又曾我の由縁であらうが、日蔭者ではあるまいし、それを捕へて詮議とは、大人氣ないいづれも樣。

景時　なにサ、さのみ仰山にする氣でもなかつたのよ。ナウ、いづれも。

皆々　左やうサ。

トしよげる思ひ入れ。

十右　然らば其方の旦那どのも

金兵　イヤ、わしは曾我に云ひ分がござる。

十右　なんと云はつしやる。

金兵　さればサ、この丁稚めが曾我の贔屓ひろぐゆゑ、ろくでもない物に十兩二十兩、流れる品も度々に、この金兵衞が餘程の損、曾我の質でばかり、帳合ひが合ひませぬ。それもこの丁稚がする業主人に損をかけさせて、曾我の贔屓ひろぐゆゑ、折檻するが誤まりか。但し又、貴樣が、わしに損させた、その埋め草でもしようといふのか。深切らしく口きいても、金が出來ずば　すッ込んで居さつしやい……サア、わつぱめ、これからは又、内へ歸つて、どうするかおのれ。サア、うせい。

ト引立てにかゝる。十右衞門引分け

十右　アイヤ〳〵、金兵衞どの、今こなたの詞のうち、その帳合ひの埋め草は、どの位な事でござるな。

金兵　云ふも無駄ぢやが、三十兩ばかりの穴。その金だけはこの丁稚、叩き倒さにや埋まらぬわえ。

十右　ソレ、埋め草の三十兩、

ト懷中より金を出してやる。


遷宮



金兵　そんなら、貴様が

十右　ハテ、帳合ひさへ合うたなら、折檻するには及ぶまい。

金兵　成る程、世には大きな……金さへ取りやア云ひ分ない。

ト懐へ入れる。

勘吉　見ず知らずの私しを、金まで出して

十右　それも古主へ心ばかり……イヤサ、係り合つたが、わしが不肖サ。

景時　最前から餘程の間、我れ〳〵は君の御前へ。

皆々　御同道仕らう。

金兵　わしもこれから八幡様へ。

勘吉　十右衞門さまとやら、お禮は重ねて。

十右　ハテ、隨分奉公大事に、

ト勘吉、嬉しき思ひ入れにて、ホロリとする。

金兵　エヽ、不吉な吠え面め。

景時　然らば、いづれも。

皆々 まづ、ござりませう。

ト大拍子になり、景時、太郎、荒次郎、孫八、入る。金兵衞、勘吉を連れて下座へ入る。十右衞門殘り

十右 あの丁稚どのは、慥かに越後の久上寺に、稚なき時より出家なせし禪司坊さま、思ひがけないあのお姿、曾我の貧苦を餘所ながら、貢ぐ心も任せぬ浮世。坂東一の河津の悴。小僧々々と朝夕に町人匹夫に使はるゝ。アヽ、是非もない世の、成行きぢやなア。

ト床几に腰をかける。唄になり、向うよりおかや、さんすいなる後家の拵らへ、小さき珠數を持ち、舞臺へ來り

かや 八幡樣の御普請も、段々に出來て、綺麗な事ではある……オヽ、これはお客があるさうなに、お國さんは見世を明けて、どこへ行てござんす事ぢややら、ドレ、お茶を汲んであげませう。

十右 イエ／＼、わしは客ではござりませぬ。この普請中は毎日々々來る、大工でござりまする。

かや 左樣でござりまするか。さて／＼結構な御普請が出來まする。

ト側へ來て、思はず十右衞門と顏見合せ

ヤ、其方は十内ではないか。

十右　エヽ、あなたはおかやさま、思ひがけないこのお姿
かや　面目なうござるわいの。
トおかやこなし。十右衞門、おかやの手を取つて、上手の床几へ腰をかけさせ
十右　さて〳〵、何からお尋ね申さうか。合點のゆかぬあなたのお姿、如何なされてこの所には。
かや　サア、聞いて下され十内どの。夫の稻野谷半左衞門どの、千葉の家中の其うちにも、舊功の家筋とて、知つての通り殿樣の、お家に傳はる天國の短刀、夫半左衞門どのに預け置かるゝ。これ卽ち稻野谷の家の面目。大切に守護いたせしところ、譬へにさへ、守り手の隙とやら、いつの間にやら盗賊の爲に奪ひ取られ、殿へ云ひ譯立ち難く、直ぐに切腹なすべきところ、お上のお慈悲で百日の日延べ、その間に半左衞門どの、紛失なしたる短刀の、詮議に晝夜の分ちなく、さまよひ歩く其うちに、情なや何者とも知れず、夫半左衞門どのを闇討に、討つて立退き、死骸は家來が屋敷に舁き入れ。この事上にも聞しめされ、よく〳〵武運に盡きたりと、妻や子供はお屋敷を御追放。兎やせん覺悟も子供の不便さ、甲斐なき命長らへしも、何卒再び短刀の、詮議仕出して稻野谷の、家再興をなさんものと、姉妹二人の娘を連れ、妹のおはんは工藤家の中老、宇佐美どの方へお部屋子に預け置き、姉の十六夜もろともに、この鎌倉の大町に、微かな暮らし。昔に變る

この身の有樣、有爲轉變とはいひながら、はかない浮世でござるわいなう。

トこの話しのうち十右衛門、無念の思ひ入れあつて

十右 フゥ、初めて承りましたお家の騷動。武運の末か半左衛門さま、やみ／＼お果てなされし、御最期の一念、さぞ御無念にござりませう。もと私しめも赤澤十内の昔、河津の三郎祐安さまの、お馬添へなりしが、奥野の狩の歸るさに、遠矢にかゝりて其まゝ御最期。その場所にも在り合さぬこの身の越度。その後稻野谷半左衛門さまへ若黨奉公、その頃、鬼王庄司左衛門が次男、團三郎と申す者、養子にもらひくれよとの賴み、幸ひ拙者も男子なければ、直さま引取り育てし折から、團三郎が人相に、劍難の相ありとの事ゆゑ、武士の跡目に殘されず、元より拙者も古主へ立てる義理といひ、人らしき侍ひより、一生町人で朽ち果てんと、未だ稻野谷繁昌の砌り、悴を連れて江戸へ參り、幼なき時より細工好み、職人となつて、今では船越十右衛門。悴團三も今の名は、六三郎と相改め、親子とも／＼職人手業。河津さまといひ半左衛門さま、二度まで主人の御最期に、在り合さざるこの身の殘念。御推量下さりませう。

かや そんならこなたは今では町人、船越十右衛門どのとなつ わしとても今では町宅、流浪のうちも娘が孝行、そればかりが賴みでござる。

十右　して又なんぞ短刀の、手がゝりとてもござりまするか。
かや　サア、何をいうても女ばかり、世間も狹う暮らして居れば、自ら手がゝりとても、今に於て知れ
ませぬわいなう。
十右　すりや、これぞといふ證據もなく。
かや　たゞ神佛や、陰陽師を賴むばかり。
十右　ハテサテ、困つた事ぢや。
　　ト三味線入りの大拍子になり、向うよりおはん、羽二重の椎茸高髷にて、振り袖、抱へ帶、御殿者の
　　拵らへ、中間二人連れ出て來り、直ぐに本舞臺へ來て
はん　そこにお出でなされまするは、母樣ではございませぬか。
かや　オヽおはん。八幡樣へ、御代參におぢやつたのか。
はん　イエ〳〵、今日は旦那宇佐美さま、若殿犬坊丸さまのお供にて、この鶴ケ岡へ御社參ゆゑ、お迎
ひに參りましたのでござりまする。
かや　オヽ、それは大儀な事ぢやなう……コレ、十右衛門どの、これが今話した、わしが娘十六夜の妹
おはんでござるわいなう。

十右　これは〳〵、拙者お屋敷に居る時分は、まだお覺えはござりますまい。ハテ、怪しからず、御成人なされたなァ。

はん　母様、あなたは、どなたでござりますえ。

かや　以前父様のお出でなされた時分、勤めて居た、赤澤十內といふ人ぢやわいなう。

はん　ほんに、左樣仰しやれば、幼ない時に、名は承つて居りました。

十右　只今母上樣に、お家の成行き承り、誠に驚き入りました。

はん　不慮の事にて母樣も、いかい御艱難。この上ともに、力になつて下さりませ。

十右　何がさて、以前の御恩、お氣遣ひには及びませぬ。

はん　して、母樣、姉樣には、ます〳〵御機嫌ようござりまするか。久々便りも承りませぬゆゑ、心にかゝつて居りました。

かや　さいなう。十六夜は男まさり、朝夕の事まで孝行にして、あられもない、夜には、アノ袖……イヤサ、袖を抱へて結へても、わしに苦勞はさせぬと云うて、よう心を附けてくれるわいなう。

はん　それはマア〳〵、お嬉しうござりまする。私しとても、今は部屋子の事なれど、追つけ旦那樣のお執成しで、大奥を勤めまするやうになりましたなら、及ばずながら姉樣にも、お前樣にも、御苦

勞はさせますまい。それまでのうち、必ず〳〵御身の養生、御大切に遊ばしませ。私しは旦那様の御用があらうも知れぬ。これにてお別れ申しませう。

かや　アヽ、待ちや。わしも八幡様へ參りがけ、久し振りぢや、一緒に連れ立つて參りませう。

十右　私しも御普請小屋まで、お供いたしませう。

はん　左樣なれば御一緒に

かや　十右衞門どの

十右　サヽ、ござりませ。

　ト大拍子になり、三人は下座へ入る。この時向う揚げ幕にて

若者　泥坊々々。

　ト聲して、向うより音、巾着切りの形にて、文箱を懷へ隱し、一散に逃げて出て、直ぐに本舞臺へ來て、茶見世の藥罐を取つて口から湯を飲み、息の切れし思ひ入れにて、文箱を明けて舞臺へ捨て、中の文を明けようとする。また向うにて

泥坊々々。

　トこれにて音、うろたへ、出茶屋の茶簞笥の中へ、右の文を隱す。向うより若い者大勢、六尺棒を持ち、

追ひかけ出て

爰にうせた。ぶちのめせ〳〵。

ト音を追ひ廻す。音は、あちこちと潜つて、下座へ逃げて入る。若い者、追ひかけて入る。直ぐに大拍子になり、向うより長兵衛、白髪の親仁、廣袖の形にて、頬かむりをして出てくる。跡より傳三、羽織ぱつち、紺足袋、藤倉を穿き、眞田の上〆めしたる形にて出て來り

傳三　モシ、そこへ行くのは、長兵衛さんぢやァねえか。

長兵　誰れだ。

ト跡を振り返り

ヤ、傳三どんか。

ト早足に行きかける。傳三、長兵衛を捕へ

傳三　ドッコイ、また逃げようと思つて。今日はモウ絶體絶命だ。毎年〳〵、大磯屋の傳三と云やァ、我の揚げ代に、憎まれるのが當り前だが、今年は氣を變へて、梶の長兵衛どん、マア、云つて聞曾かせる事がある。ちよつと來さつせえ。

ト袖を曳く。

長兵　オイ、行くのサ。そんなに引ッ張らねえでもいゝわな。
傳三　ちよつと向うの茶屋まで。
長兵　あれサ、行くと云ふのに。

ト不承々々に本舞臺へ來る、

傳三　かみさん、ちよつと爰を貸しねえ……ホイ、誰れも居ねえさうだ。丁度幸ひ、マア、爰へかけなせえ。
長兵　ハテ、よく引ッ張る男だ。逃げやァしねえわな。

ト合ひ方になる。

傳三　なんだ、逃げやァしねえ。また逃げられた義理でもあるまい。いま改めて、長い事を云ふにやァ及ばねえが、こんたの娘のあのおきぬ、大磯で雪野といつて、藝者をして居た時分、こんたが博奕に負けたといつて、おいらが親方の大磯屋へ連れて來て、質といふでもねえがマァ預けて、七十兩といふ金を借りて、その後どんな嘘をついたか知らぬが、又おきぬをこなたの方へ捲きあげて、七十兩は返しもせず、度々親方が催促したら、こんたが大分不手勝手を云つたさうだ。わしも大磯屋で傳三郎といつちやァ、惡黨達にやァ嫌がられる商賣もしてゐるものだ。七十兩の金も返

さず、おきぬも其方へ捲きあげて、不手勝手を云つても、濟むものか濟まぬものか。ちよつとおれと一緒に、行く所まで行つて、そのしらちを附けて下せえ。わしも親方に賴まれて、貴樣の行くへを方々尋ねて歩いた。マア、何にしろ、ちよつと歩ばつせえ。

長兵　サア、成る程、一々尤もだが、おれもこの鎌倉では、ちつとやそつと道樂をした梶の長兵衛、好んで不義理をする氣もねえが、あのおきぬが事については、この八幡の普請に、江戸から來てゐる、大工の六三といふ野郎とくッついて、わしが所へ娘を貰ひに來たところが、何だか得體も知れねえ男に遣る事はならぬと、斷わりを云ひましたが、相手が職人だから、どんな滅法界な事でもしようかと、なんぼわしがやうな者でも

傳三　サア、そりやァ親だから、案じるは尤もだが、その六三とやらの事があるから、そこで親方の所へ連れて來て預けたは、わしも蛇の道だ、疾に知つてゐるが、こんたが惡い玉に使はうと思つて親方を騙くらかして、おきぬを其方へ捲きあげたのだな。

長兵　なにサ、さういふ譯でもねえ。執念深い六三ゆゑ、先の先まで根を掘つて尋ね出して、大磯屋に居る事も、疾に知つてゐる樣子。それゆゑ險呑だから、マア、おきぬを此方へ取返さうと思つても、七十兩の借りがあるゆゑ、どうせうと思ふうち、外に奉公にやる口があるから、其方の親方に話し

傳三　たところが、承知して、先の身代を引替へに、七十兩の方を附けようと思つて居るのサ。思つたばかりで、片が附かねば何にもならぬ。なにも、出來ねえ金を無理に取らうとは云はぬ。此方も商賣ものだ。まんざら六三が、どんな事をして來ようとも、おきぬに指でも差させる事ぢやァねえから、娘を此方へ返すがいゝわな。

長兵　サ、その事も娘に、度々話したところが、貴樣の前だが、只の奉公と違つて、水離れの悪いもの。ヤレ腹が痛いの、背が痛えのと、一日二日遲くなつたので、ちつと樣子があつて、娘は當分手離されぬ。七十兩の金は、是非わしが辨まへるから、どうぞもう二三日

傳三　イヤモウ、逢ふ度に、その位な事は聞き飽きた。代物も返さず、金の譯も附けずに、逃げて歩いて、今まで化かされてゐた。もうちよつとも待たれねえ。四の五の云ひ譯云はうより、否ともこんたに、砂利の上へ出てもらはう。

長兵　それだから、おれが只管頼むのぢやァねえか。誰れも返すめえとでも云やァしめえし。二三日待つ事がならずば、晩まで待て。

傳三　その晩方がおッかねえ。今まで待つても出來ねえものが、晩方までに、どうして又

長兵　そりやァ氣遣ひさつしやるな。これを見さつせえ。

ト懐より風呂敷に包みし短刀を出す。

傳三　こりやァ何だえ。

長兵　これは、さる屋敷からの拂ひ物、天國といふ短刀。値賣りをすれば、百五十兩にもなる代物、あの甘繩の金兵衛に預けて、七十兩は晩方までに、きつと貴樣へ返します。

傳三　カウ、長兵衛どん、どういふ譯で貴樣は、その大枚な代物を

長兵　エヽ……ちつと譯があつて。

傳三　ハヽア、こんたの身狀も、惡い噂を、わしも聞いたが……マア〱、こんな事はいらぬ世話だが、それが後まで埒が明かうかの。

長兵　喰いついてなりとも、七十兩は借りるつもりだ。

傳三　野暮な事を云ふやうだが、騙すと、こんたの惡そもくそを……傳三郎が地金を出すによ。

長兵　ナニ、間違ひがあるものかな。

傳三　そんなら、わしやァこれから梶原さまに逢つて、源太さまの揚げ代を取つてくるうち、その工面をして置かつしやい。

長兵　わしも氣障な所へ行くのは氣がねえ……氣遣ひせずと行つてござい。

傳三　そんなら長兵衛どん、間違ひなく賴みます……ドレ、行つて來ようか。

ト大拍子になり、傳三は下手へ入る。長兵衛殘り

長兵　ヤレ〳〵、因果なべら坊に逢つて、こけ嚇しに嚇しかけて、おれを暗い所へやらうと思つて……

イヤ〳〵、併し、おれが牢へでも行くと、今までの身狀といひ、どんな舊惡が出て、この首が細くならうも知れぬ。こりやア思案し直して、この七十兩は返してやらざアなるまい。どうか好い算段がありさうなものだ。

ト大拍子になり、下座より金兵衛、以前の形にて、財布を首に掛けて出て來り

金兵　今日は大分好い日だわえ。梶原さまをいたぶつて、息子の置いた鎧の利上げを、四十兩取つて來た。先刻奇特なべら坊は、棟梁の十右衛門、帳合ひも丁度三十兩、都合あはせて七十兩。

長兵　此方の都合も七十兩。

トこれにて金兵衛、愕りして

金兵　ヤ、貴樣は梶の長兵衛どん。

長兵　ハテ、いつも〳〵羨ましい。有る所には、づん〳〵と金儲けだね。

金兵　なにサ、年中損ばかりして居るのサ。

長兵　よく嘘をつく金兵衛さん……儲け次手にもう一つ、金を儲ける事がある。
金兵　なんだ、金儲けがあるえ。それは耳寄り、ちよつと聞きたい。
長兵　イヤ、外でもない、この代物だ。
　　ト以前の短刀を出す。金兵衛、懐より眼鏡を出してこれを見る。この以前より上の方へ宇佐美出かゝり、様子を聞いてゐる。
金兵　この品は。
長兵　こりや天國の短刀といつて、千葉の家中、稲野谷半左衛門が預かりの名劍、故あつてわしが手に入つた。値賣りをすれば、二百兩には請合ひのこの代物、百兩あまりの折紙も爰にござる。
　　ト折紙を出して
わしも元は、りやんこの果、身に降りかゝる難儀ゆゑ。こなたの持つた七十兩、わしが難儀も七十兩、丁度幸ひ長兵衛が、命にかゝるその金を、どうぞ貸して下さらぬか。
金兵　イヤ、貸しますまい。
長兵　エ。
金兵　買ひませう。

長兵　アノ、七十兩で、この短刀を
金兵　手離す氣なら、相談しませう。
長兵　それぢやァあんまり。

ト思案して

ようごんす、何事も、差當つての金の入用。身の差合せと譬への通り。
金兵　手を打たつしやるか。
長兵　アヽ、廉いものだ。

トこれにて宇佐美、頷き入る。

金兵　サア、卽ち金子七十兩、耳を揃へて。
長兵　ドレ。

ト金兵衞、胴巻より金を出す。大拍子になり、向うより權七、ぽつとせ、日傭取りの形にて駈けて出て、舞臺に落ちてある文箱を見附け

權七　この文箱が爰にあるからは

ト舞臺の二人を見て

この泥坊めら、その金を渡しやァがれ。

ト無暗に引ッたくらうとする。兩人憫りして

長兵　このべら坊め、何をしやァがる。

權七　何をするものか。おれが十六夜どのに頼まれて、阿母に屆けるこの文、巾着切りに引ッたくられ方々探したところが、爰に文箱が落ちてあるといひ、數も丁度七十兩、此方へ渡しやァがれ。

金兵　コレ〳〵、權七どの〳〵、滅多な事を云はつしやるな。その七十兩は、わしが今、梶原さまから受取つて、見さつしやい、七十兩のうち、四十兩は、一兩々々矢筈の極印が打つてある。

權七　ほんに、お前さんは、石部屋の金兵衛さん、お前さんの金なら、まんざら嘘もござりやすめえ。わしやァとんだ云ひ譯のねえ事をしました。

金兵　きついうろたへやうだ。どうさしつたのだ。

權七　サア、聞いて下さい。わしらが隣に、婆様と娘と、たつた二人で暮らしてゐる者がござる。朝夕の活計に追つて、母様の苦勞するが悲しいとて、可哀さうにその娘が、阿母に隱れて、江戸の深川へ藝者奉公に行き、その身の代の七十兩、わしを餘程正直者だと思へばこそ、どうぞ母様に屆けてくれろとの頼み。氣遣ひさつしやるな、直ぐに屆けてやりませうと、內へ行けば阿母は、八

三建目



四建目口



長兵　幡様へ來たといふ。跡を尋ねて來る道で、晝鳶がこの文箱を、引ツたくつて逃げ出すゆゑ、一目散に追ひかけても、人ごみゆゑに見失ひ、コレ、しかも爰に落ちてゐる、この文箱へ入れて來たそれゆゑわしもうろたへて、丁度數も七十兩、無暗に取りにかゝつたのサ。

權七　エ。

長兵　大方そりやァおらが仲間……ア、好い事をしやァがつた。

金兵　イヤサ、なかなかそれは、急には知れまいといふ事サ。

權七　ハテサテ、それは氣の毒千萬。この金は今この人から、天國の短刀といふ物を買つて、渡す金ぢや。

長兵　なんだ。蛤に納豆を買つたえ。なんぼ大所でも、七十兩が納豆や蛤を買はないでも、よさゝうなものだ……イヤ、こんな事より、この箱が、爰に落ちてあるからは、爰らにうせるに違ひない。こりやアどなたも麁相をしました。ドレ、雪の下の方へ行つて見よう。

ト一散に下座へ入る。

金兵　なんの事だ、膽を潰させた……そんなら、いよいよ短刀は渡します。

長兵　サア、七十兩、受取らつしやい。ちよつと賣渡しの證文書いて下され。

長兵　でも、爰に硯箱は無し。
金兵　ホイ、わしも矢立を忘れて來た。
長兵　なにサ、出所の知れた代物、どうせこの頃内へ仕掛けて……イヤサ、どうせこの頃に、書いて持つて行きますよ。
金兵　そんなら、きつと間違ひなく。
長兵　わしは急ぎますから、これで別れます。また其うちに。
　　　トそこ〳〵に挨拶して下座へ入る。
金兵　ヤレ〳〵、せはしない人だ。イヤハヤ、今日のやうに儲かる日はない。三十兩に四十兩、合せて七十兩が、また百兩のこの代物。こいつはうまいわえ……イヤ、うまいと云へば、腹がへつた。内へ歸るには道が餘程。錢を出しては詰まらず。神主の臺所で、ちよつと一膳やつて來ようわえ。
　　　ト大拍子になり、金兵衞下座へ入る。引違へてお國、茶屋の女にて、手桶を提げて出て
くに　ほんに、久しう見世を明けて置いて……これはしたり、茶碗も土瓶も臺なしに。わしが留守に喧嘩でもあつたのかしらん。
　　　ト何心なく最前の、音が隱したる文を見附け

「母樣へ、十六夜」……こりや隣裏の十六夜さんの文……どうしてこれが爰に。そしてマア重い事は、中に何ぞ入つてゐるかしらん。

ト懷へ入れ、捨ぜりふにてそこらを片附ける。大拍子になり、下座よりおかや十右衞門、連れ立つて出て來り

十右　左樣ならば、もうお歸りなされまするか。

かや　また娘が案じまする程に、もう、そろ／＼と歸りまする……オヽ、お國さん、見世を明けて、どこへ行つてぢやえ。

くに　ハイ、ちよつと內まで參じました……オヽ、ほんに阿母樣、今この見世の茶簞笥の前に、この文がござりました。十六夜さんの所から、お前さんへ。

かや　ナニ、娘の文が、どうして爰に……「母樣へ、十六夜」……ハテナア。

ト この時、下座バタ／＼にて、權七、走り出て來て

權七　アヽ、阿母さん、とんだ事をしました／＼。

かや　これは日傭の權七さん、何をマア其やうに。

權七　娘御十六夜どのが、江戸へ奉公に行くといつて、わしに屆けてくれろといつた文。しかも七十兩

の金まで添へて、お前さんへ届ける道で、晝鳶に引ッたくられ、方々探せど、行き方が知れませぬ。こりやどうしたらようござらう。

かや　何と云はしやんす。娘が江戸へ奉公に……すりや、この文が。

權七　ヤ、ほんにわしが取られた文。どうして爰に。

十右　何か樣子のありさうな事。マアその文を、讀んで御覽じませ。

トおかや、文の封を切り

かや　ナニ〳〵……「海山深き御養育の御恩、いつの世にか送り參らせ候はんと、常々心にかゝり候ふ折から、計らざる家の成行き、父樣の不慮の御最期、何卒再び天國の短刀を詮議仕出し、家再興致さんと、この年月の御艱難、また朝夕の活計も次第に薄く。

トおかや、あたりへ氣をかねる思ひ入れ。權七、汗など拭き、皆々氣の毒なるこなし。

兎や角心苦しめ候ふうち、幸ひの便り候ふて、遠き東へ藝者奉公に參り申し候ふ。卽ち私しの身の代七十兩、御渡し申し候ふ。これにて何卒、日々の煙の代になし下され、しばしの御別れには候へども、お目にかゝり候ふては、猶更に心引かれ、却つて御前樣にお嘆きをかける道理、二つには、御身の爲にも惡しからんと、不孝とは存じ候へども、隱れて參り申し候ふ。必ず〳〵我が

身こと御案じなう、時々の御いとひ願ひ上げまゐらせ候、末ながら妹にも、御奉公大切に勤め候ふやうよく〳〵お傳へ下さるべく候ふ」……ヤア〳〵、そんなら娘は、隱れて江戸の深川へ、奉公に行きやつたか。

十右 ハヽア、驚き入つたる御孝心。たとへ肌は穢さずとも、多くの人の氣をかねる、藝者奉公してなりと、母御を樂にさせんとは……エヽコレ、いま一日早くお目にかゝるなら、仕樣もやうもござらうもの。殘念な。

かや 一人便りの娘を手放し、何の爲に金がいらうぞ。一つ違へば人の身の、これ程までに落ちぶれて短刀詮議の手がゝりさへ、わが身一つでは何となる。察して下され、十右衞門どの。

十右 御尤もでござりまする〳〵。

權七 アヽ、モシ〳〵、大事の用を頼まれて、とんだ氣の毒な事をしましたが、廻り廻つて阿母樣の手に渡れば、わしも安堵。いま云はしやつた天國の短刀とやら、手がゝりがござりまする。

十か ナニ、手がゝりがあるとは。

權七 わしやァ何にも知りませぬが、先刻金を取られた時、南無三方と駈け歩いたところが、あの石部屋の金兵衞と、知らぬ親仁が七十兩の、金を持つてゐるゆゑ、わしやァ盗まれた金だと思つて、

矢庭に引ッたくりにかゝつたら、さうではなくてその親仁が、石部屋の金兵衛どんに、天國の短刀といふ物を、賣つた金サ。とんだ間違ひがあるものだね。

十右　何と云はつしやる。石部屋の金兵衛が、七十兩で天國の短刀を

權七　左樣サ、わしやアまだ蛤に納豆と聞き違へるやつサ。こいつは大笑ひだね。

十右　エヽ、忝い。おかやさま、お喜びなされませ、短刀の手がゝりが知れました。

かや　さいなう。都合も丁度七十兩、娘の身代。これといふも十六夜の孝心を、天も憐れみ

くに　ほんに、十六夜さんの心が通じて、此やうに手番ひよう行くのでござんす。

かや　して、その金兵衛どのをば、こなた知つてか。

十右　ハイ、隨分心安うござりまする。

かや　そんなら、ちつとも早く石部屋へ。

權七　アヽ、モシ〳〵、金兵衛どんは、いま神主の所へ行つて、飯を食つて居ました。呼んで來て進ぜたいが……オヽ、お國さん、一緒に來て、呼び出してくんねえ。

くに　アイ〳〵、ちよつと呼んで來てあげませう。これに待つてござんせ。サア、權七さん。

權七　ドリヤ、行つて來ようか。

ト大拍子になり、權七お國、下座へ入る。

かや　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。娘が身代七十兩、來ると其まゝ、短刀の行くへが知れるといふは、これも卽ち、八幡樣の引合せ。

十右　あの權七どのとやらが、晝稼ぎに取られたればこそ、間違ひで天國の在所も知れ、家再興は近いうち。お喜びなされませ。この石部屋も、もう來さうなものだ。

ト兩人ソワ〳〵してゐる。下座より金兵衞出て來り

金兵　おれに逢ひたいとは、誰れぢやしらぬ。

トあたりを見廻し、思ひ入れ。

十右　イヤ、誰れでもない、十右衞門でござる。

金兵　なんぞ用でもござるか。

十右　サア、用の段ではござらぬ。外でもないが、こなたが最前買ひ取つた、その天國の短刀、どうぞわしに賣つて下さらぬか。

金兵　藪から棒に早急な話し。成る程、先刻掘り出し物はこの短刀、百兩の折紙附いて、右から左スッパリと、耳を揃へたならば進ぜませう。

十右　アイヤ、その短刀は先刻に、こなた、七十兩で買つたではないか。

金兵　さうサ、違ひなし。七十兩で買ひました。

十右　それに又、百兩とは。

金兵　ハテ知れた事、七十兩の代物を、七十兩に賣る位なら、面倒らしく商賣はしませぬ。百兩で買ふ氣がなくば、强ひては賣らぬ。鎌倉中のお大名、どこの屋敷へ持つて行つても、百兩や百五十兩は、押へたばつた。今日買つて今日賣る代物ゆゑ、五十兩負けて金百兩。それが否なら、御勝手御勝手。

かや　コレ、十右衞門どの、娘が心を盡した、この七十兩では。

十右　成る程、三十兩不足の金……金兵衞どの、二三日のうち、わしが金子調達して、こなたの内へ持つて行くほどに、それまで必ずその代物。

金兵　脇へやるなといふ事かえ。そりやアよしにしませう。晩にも直ぐに屋敷へ持つて行き、百五十兩にしにやアならねえ。今この辛い世の中に、今日金を持つてござるか、明日買ひにござるかと、べん／＼と待つて居られるものか。

十右　すりや、いま爰で買はいでは。

金兵　イヤ、埒の明かぬ相談なら、よしにしませう、賣りませぬ。

ト振り切り、行きさうにする。おかや、金兵衞を引留める。この前より上の方へ、おはん出て、樣子を窺ひ居る。

かや　マア〳〵、待つて下さりませ。天國の短刀は、元を申さば盗みもの、表立つて詮議もならず、外外より短刀を、千葉のお家へ上げる時は、夫の家は一生埋れ木。娘も日頃心を盡し、可哀さうに姉娘は、見も知りもせぬ人中へ、心に染まぬ奉公に、今日といふ今日その身代、七十兩の金調達その時聞いた短刀の、行くへはそれと知れながら、足らず前の三十兩、調ふ當も情なや、四百四病の病より、辛い貧苦の艱難も、家再興をしたいばつかり、爰の道理を聞分けて、跡金調達するまでは

金兵　イヤ、口說きのきかぬ名代の質屋、挺でも動かぬ石部屋金兵衞、待つ事はなりませぬ。

かや　すりや、どのやうに頼んでも

金兵　百兩が一文缺けても、手放す事はなりませぬ。

十右　エヽコレ、最前は引負ひの、數も其まゝ三十兩。

金兵　古主へ貢ぎ、曾我の埋め方、そりやア云つても根にやア立たぬ。

十右 サ、それゆゑ只管十右衛門が

金兵 わしは、人に頼まれる事は大嫌ひサ、

十右 あまりと云へば胴慾非道に

金兵 生れ附いたるわしが持ち前。

かや 十右衛門どの

十右 おかやさま。

かや こりや何としたら

兩人 よからうぞいやい。

ト兩人思ひ入れ。おはん思案のこなしあつて、この時ズット前へ出て

はん 母樣、わたしを奉公にやつて下さりませか。

かや 其方は娘。何を云やるぞいなう。工藤家の御中老、宇佐美さまへ、御奉公に行て居やるぢやないか。

はん ハイ、わたしやその物堅い御奉公が、否でござりまする。

かや ヤ。

はん　大磯とやらいふ廓へ、奉公に行きたうござんす。

ト合ひ方になり

最前より、十右衛門さまといひ、母様の御苦勞、聞けば聞く程おいとしい。姉さんも江戸の深川へ、恥かしい奉公さしやんすと、聞いたわたしが身の悲しさ。親の爲にはどのやうな、辛い水仕の奉公も、いとふ心はござりませねど、金の切端に三十兩、所詮不束なわたしゆゑ、せめて傀儡の憂き勤め、身を切り賣りにしてなりと、お役に立つて下さりませ。

かや　これはしたり、わつけもない。なんぼ家を立てたいとて、一人ならず二人まで、辛苦をさせてなんのマア。殊に其方は、まだ奉公の身の上。ハテ、金は世界の廻り物、必ず苦勞にしてたもるな。

はん　イエ〳〵、それではどうも姉さんへ。

かや　ハテ、姉ぢやというて、長い苦勞はさせぬわいなう。

十右　ハテサテ、揃ひも揃ひしお二人の御孝心。それに引替へ金兵衛どの。

ト此うち金兵衛、おはんを見て思ひ入れ。

金兵　イヤ、得心しませう。

十右　何と云はつしやります。

金兵　七十兩に賣りませう。

かや　すりや、いよ〳〵得心して

金兵　サア、隨分得心もしませうが、ナニ阿母、爰に一つの相談がござる。親の爲、家の爲に、いつそ勤めなとして、この難儀を救はうと、思ひ込んだ娘御の志し、いかにしてもいとしうござるが女郎奉公しようと、思ふ程の心があらば、娘をわしに下さらぬか。

かや　エ。

金兵　さればサ、賤しい奉公してなりと、身を捨てゝこそ浮む瀬もあり。わしも貰うたとて、なか〳〵女郎や藝者にするのではござらぬ。わしも內には、才次郎といふ悴がござる。まだ定まる嫁もなし、丁度幸ひ、似合ひ頃な夫婦ゆゑ、見世を預けて、早うわしも樂をしたい。又、不躾ながら阿母も、そのさんすいな體では置くまいほどに、サヽ、相談は爰の所。今日買つたこの短刀、百兩ならでは賣られぬところ、七十兩に賣り渡せば、足らず前の三十兩、その代りにあのお娘、勤め奉公するよりは、なんとわしが相談に、乘せられる氣はないか。

かや　サア、差當る金の手番ひ、どのやうな事してもと思へど、この儀は一生の緣定め、娘の心もどうあらうか。

はん　アイ、母樣、わたしや行きたうござりまする。
かや　すりや、見ず知らずの殿御でも
はん　サア、勤め奉公にさへ行くところ、多くの人に肌觸るゝよりは、どんな殿御か知らねども、才次郎さまとやら、お名はどうやら優しいお方。母樣の爲、家の爲、よう合點して參りまする
十右　ハヽア、お出かしなされました。辛い辛苦もお家の爲……サア、金兵衞どの、まだ年のゆかぬ娘御、才次郎どのとやらに、添はせたいとの相談、早急ながら此方も手詰めの事。得心いたして、娘はこなたへ。
金兵　イヤ、相談極まれば兩方仕合せ。
十右　然らば短刀、七十兩で
金兵　イヤ、今は渡されぬ。
十右　そりや又なぜ。
金兵　ハテ、よく物を積つても見さつしやれ。一寸逃れに娘を得心さして、この短刀を七十兩で、其方へ捲きあげ、娘は其まゝ其方へズル〳〵。そんな惡ずもあるまいけれど、こりや斯うしませう。この頃に日を選んで、十右衞門どの、こなたが仲人であの娘を、此方の内へ連れてござるその節

七十兩は娘の持參、この短刀に折紙を附けて、賴みのしるし、帶代がはりに、引替へにしませう
一旦わしも得心して、なか〳〵外へこの短刀、手放す事ぢやござらぬわいの。

十右　すりや、嫁入りのその晩に

金兵　間違ひなう渡します。

かや　さりながら、娘の身の上、常の身なれば身の方附き、望んでやりたいところなれど、お屋敷から
お暇の出ぬうちは、此方の儘にも

十右　誠にそれも一つの當惑。

　　ト　この時宇佐美、奥より出かゝり居て

宇佐　アイヤ、その儀なれば氣遣ひ無用。

はん　あなたは旦那、宇佐美さま。

　　ト　合ひ方。

宇佐　何かの樣子は後で聞く。姉妹ともに揃ひし孝心。年端もゆかぬおはんが心底、賤しい奉公してな
りと、母の難儀を救はんと、思ひ込んだる心より、嫁に行きやればそもじの仕合せ、身の方附き
いまだ大奥へ出勤もせぬ身の上なれば、妾が心一つにて、これより直ぐに暇を遣はす。コレおは

ん、隨分ともに心を添へて、また折にはお屋敷へ、必ず便りしてたもや。
はん　有り難いそのお詞。母様、お禮仰しやつて下さりませ。
かや　イヤモウ、なか〱お禮が一通りに、詞で云はれるものかいの。長々おはんをおいたはり、身の方附くと直ぐにお暇。これで三方四方の納まり。
三人　エヽ、有り難うござりまする。
金兵　そりやこそ。何事も斯う都合よく行くのも、矢ッ張り緣づく。善は急げだ、十右衞門どの、早いが此方の勝手でござる。
十右　此方とても急ぎの品。近日娘を同道して
金兵　わしも支度して待つて居ます。
宇佐　最早若殿御歸館に間もあるまい……さりながら、長の別れも途中ながら、おはん、母御ともろともに、暇の杯しませうわいの。
はん　有り難うござりまする。
かや　左樣なれば御一緒に
十右　私しも何かの相談……金兵衞どの、必ず約束

金兵　變替へはならぬぞや。

はん　左樣なれば旦那樣

か十　サ、お出でなされませ。

ト唄になり、宇佐美先におはん、おかや、十右衞門、下座へ入る。金兵衞殘り

金兵　イヤハヤ、今日のやうなうまい事のある日はない。あの娘を才次郎に添はせ、紛失したといふこの短刀、こりや稻野谷の預かり、これを千葉の屋敷へ差上げれば、稻野谷に男子なければ、差詰め才次郎は跡目。我れらは隱居。うまい〳〵……この勘吉めは、どこへうせたか。エヽ、まゝよ、日が暮れては不用心。ちつとも急いで歸りませう。

ト大拍子になり、金兵衞向うへ入る。下座、バタ〳〵になり、長兵衞、駈けて出てくる。跡より傳三出て

傳三　出し穢ねえ男だ。金が出來たなら、早く渡さつせいな。

長兵　サア、どうせ遣らうと思つた七十兩は爰にあるが、ちつとのうちのツウクツに

傳三　おきやァがんなせえ。其方のツウクツか、馬の沓か知らねえ。なんでも今持つて行かにやァならねえ。サア、渡さつしやい。

長兵　聞分けの悪い男だ。ちつとのうち

傳三　ならねえよ。

ト金を引ッたくり、右の手に持ちかへ

悪い合點だ。返す物さへ返して置けば、又いつでも用が足りるわな。

ト揉みあひ、いろ〳〵する。この時後より勘吉出で、そつと傳三の持つてゐる金に手をかける。

誰れだ。

トこれにて勘吉、手を放して思ひ入れ。

なんだ〳〵、この餓鬼めは、おれが持つてゐる金に手をかけて。ハヽア、うぬは晝稼ぎだな。

ト長兵衞、勘吉を見て

長兵　おらが仲間にやア見馴れぬ小僧だが。

傳三　なんだ、仲間だ。こいつはおッかねえ。こんな所に長く居たら、どんな目に會はうも知れねえ。

ト勘吉を突きのけ、行かうとする。此うち音、後に出て、茶屋の見世をあちこち探し、傳三の持つてゐる金を見附け、物も云はずに引ッたくつて駈け出す。傳三、襟首を捕へ

そりやこそ、この泥坊め。

長兵　わりやァ家尻の音ぢやァねえか。早く逃げろ。

ト音、傳三を突き倒して、向ふへ入る。傳三、起上がり

傳三　うぬ、泥坊め、待ちやァがれ。

ト早めたる大拍子になり、追ひかけて入る。勘吉、そろ〳〵花道の方へ行きかゝる。

長兵　コリヤ〳〵、小僧、待て〳〵。

勘吉　ハイ。

ト思ひ入れ。

長兵　わりやァおれが仲間に見馴れぬ奴だが、誰れが許して稼ぎをする。

勘吉　イエ〳〵、滅相な。私しはそんな者ぢやございません。お赦しなされて下さりませ。

長兵　そんな者でない者が、あの金へなぜ手をかけた。

勘吉　エヽ。

長兵　いけッ太えわッぱめ。

ト勘吉を引据ゑる。この拍子に懐より狩衣を落す。

こりやァなんだ。

勘吉 アヽモシそれは。

ト寄るを、足にて踏まへ

長兵 動きやァがるな。なんだ、おつりきな物を持つてうせるな。こりやァどこぞで盜んだのか。エヽ、今から手先が働いては、おッつけ立派な泥坊になるであらう。心を改め、仲間へ入れ。錢箱のくすね錢で、屋體見世の買ひ喰ひ、どゞは夜歩き寢所も、車の上や臼の中、ぐれにならねえ其うちに、おいらが仲間へ無心に來い。大福餠の燒き遲れ、鯖の鮨の頭ぐらゐは、この爺さんが買つてやるワ。根性を變へろ、素丁稚め。仲間入りのそのしるし、この褞袍をおれが方へ、キリ〳〵脫いでうしやァがれ。

ト蹴倒す。勘吉、無念の思ひ入れ。

勘吉 いかに時世といひながら、匹夫下郞に土足にかけられ。チエヽ。

長兵 なんだ、匹夫だ。大層な事を吐かしたな。キリ〳〵脫げ。

勘吉 その品、此方へ渡せ。

長兵 エヽ、面倒な。

ト縫ひぐるみにて勘吉を、さん〴〵に打つ。十右衞門出で來り、留める。

邪魔をしやァがるな。

ト十右衛門に打つてかゝる。立廻りのうち十右衛門、長兵衛をポンと當てる。

勘吉　ヤ、お前は。

十右　河津さまのお馬の口取り、赤澤十内。あなたは久上の禪司坊さまではござりませぬか。

勘吉　越後を出でゝこの年月、曾我へ貢ぎも餘所ながら。

十右　それも浮世のこの成行き。

ト落ちてある狩衣を見附け

父御の形見大切に。この場を早う。

勘吉　そんなら此まゝ。とは云ふものゝこの死骸。人の咎めも

トこの時後へ五郎丸、犬坊丸、小文次出て

犬坊　イヤ、苦しうない。打捨て置かれよ。

十右　あなた様は。

小文　工藤左衛門祐經さまの若殿、犬坊丸祐友さま。

重宗　あの若者の身の上を、後で聞きし曾我の身寄り、一家の寸志は跡の納まり。

勘吉　すりや、現在父の敵たる

　　　ト十右衞門押へて

十右　コレ、未だ幼なき若殿の、仁義を守るこの場の納まり。ちつとも早う、あなたは内へ。私しがお供いたしませう。

重宗　あと構はずと、早く行きやれ。

十右　然らば此まゝ。サ、ござりませ。

　　　ト三重になり、十右衞門、勘吉を連れて向うへ入る。小文次、長兵衞に活を入れる。

長兵　うぬ、丁稚め。

　　　トうろ〳〵する。

小文　若殿へ對して無禮な奴め。

長兵　エヽ。

　　　ト悄りする。奥にて

呼び　還御。

重宗　若君の還御。下がり居らう。

長兵　へイ。

ト　ぶる／＼して居る。また奥にて

呼び　還御。

ト　下がり葉になり、下座より實朝先に、仕丁、長柄をさしかけ、景時、太郎、荒次郎、孫八、附き出てくる。此うち長兵衛、マゴ／＼してゐる。

景時　最早御臺政子御前の御催ふし、小松川の御遊の刻限。

孫八　設けの假屋へ、これより直ぐに。

實朝　母上樣にもお入りとあれば、犬坊丸と予と一緒に。

犬坊　ハッ。我が君の還御の道先、怪しき曲者、其方は何者ぢや。

長兵　ハイ、私しは

ト　景時を見附け

モシ、梶原さま、お馴染甲斐に、どうぞお執成しを、お頼み申しまする。

太郎　コリヤ／＼、何を申す。御大老がおのれら風情に、近附きがあつてよいものか。

景時　左やう／＼。身共はついぞ見た事もござらぬ。

長兵　呆れた現金な人達だ。なんぼ大名でも、そんなに大きな面をする事はねえ。悪い玉にやァ腹さんざ、おれを使つて、今さら知らぬ顔するはあんまりだ。

景時　コリヤ〳〵、ツカ〳〵と物を吐かすな。若君の御前、下がれ〳〵。

實朝　イヤ、武運長久祈りの社參、民安全の治世なれば、賤しき男子も其まゝに、敢へて咎むる事なかれ。

重宗　寛仁大度の御詞。直さまこれより

小文　絹笠山の御假家へ。

犬坊　イザ、我が君樣。

實朝　方々、來れ。

景時　君のお立ち。

仕丁　ハアヽ。

　　ト下がり葉になり、實朝先に皆々向うへ入る。長兵衞殘り、思ひ入れあつて

長兵　エヽ、いま〳〵しい。なんぞ役に立ちさうな、丁稚めは捲きあげられる。七十兩はたうとう取られる……イヤ、七十兩といへば、あの天國の短刀、脇へはかれぬ其うちに、石部屋へしけ込んで

……イヤ〳〵、ひよつと顔を合した時、おれではむづかしい。こりやア頭を連れて、家財殘らず此方へ引ッたくり、金はまん〳〵。こいつはうまい。

ト この時、權七出かけゐて

權七　ハア、さては親仁は泥つくだな。

長兵　エヽ、べら坊づらめ。

ト 權七を毆り倒す。權七、見事にかへる。これにて木の頭。

さううまく、やりたいものだが。

ト よろしく、ひやうし

第一番目　四建目

滿久

石部屋質見世の場

役名——見世物師、梶の長兵衞。石部屋丁稚、勘吉 實ハ曾我の禪司坊、石部屋悴、才次郎。番頭、平助。石部屋丁稚、團吉。髪結ひ、頓吉。石部屋番頭、覺兵衞。丁稚、與吉。石部屋下女、おさん。大工棟梁、船越十右衞門。石部屋下女、お袖。鬼王新左衞門。石部屋金兵衞。おはん母、おかや。盜人、山姥の權九郎。同、家尻の音。同、捨て鐘の鐵。同、かつさきの富。稲野谷おは

ん。盗賊、新藤德次郎。

本舞臺、三間の間、二階家の土藏づくり、世話場の二重。正面上下まいら戸の押入れ、暖簾口、帳面狀差しの書割り、質見世の掟書、軒に石部屋と記したる暖簾。舞臺上手へ寄せて帳場の格子、帳箱上にばら錢、大分積みあげあり、見世火鉢、莨盆など取散らしあり、下の方、路地口、いつもの所に門口、すべて質見世の體。幕の内より才次郎、やつし、息子の拵らへ、帳合ひしてゐる。覺兵衞、手代にて十露盤を扣へ、頓吉、髮結ひにて、團吉の髮を結つてゐる。質置きの仕出し二人立ちかゝりゐる。皆々捨ぜりふよろしく、通り神樂、てんつゝにて幕明く。

才次　六兩一分二朱、錢七百五十……十三兩二分……錢十七貫八百六十四文。

ト讀む。覺兵衞この通りに云つて十露盤をよせる。

覺兵　〆めて十九兩三分二朱と、錢十八貫六百二十八文。

團吉　髮結ひさん、ちつと靜かにしてくんなさい。アヽ、痛いく。

頓吉　おきやァがれ。月に六十四文ばかりの頭は、どうしても構はふものか。

仕出　オイ、番頭さん、この着物に錢が一本、先刻の下馬を出してくんな。

同　番衆、明日は直に請けるから、一分一本貸してもらひたい。
覺兵　左樣なら、今日はお貸し申しまする。跡は一分でござりまする。

ト一分と四百文出してやる。

頓吉　番頭さん、なされませぬか。
覺兵　わしは明日にしませう。
仕出　ハイ、お世話でござります。

ト通り神樂にてんつゝになり、仕出しは花道へかゝる。向うより金兵衞、前幕の形。跡より勘吉、革財布へつゝ包み金大分入れ、持つて出る。仕出しは摺れ違うて向うへ入る。

勘吉　モシ〳〵、大旦那樣、只今お歸りでござりまするか。
金兵　オヽ、勘吉、お金會所から今戻りか。
勘吉　左樣でござりまする。今出川さまお爲替の御用、即ち會所にて、三ツ星の極印金、一兩々々に改めて取つて參りました。
金兵　大儀々々。今夜は内にめでたい事もあれば、早く戻つて、われも手傳うてくれ。
勘吉　めでたい事と仰しやりますは、かね〴〵お話しのござりました

金兵　伜才次郎に、嫁を取つてやるつもりだ。
勘吉　それはおめでたうござりまする。
金兵　そのめでたい次手に、われにも元服さす。これから一人前の男ぢや。その祝ひには、おれが革足袋の古いのを遣るワ。
勘吉　何から何まで有り難う存じまする。

ト兩人舞臺へ來り、內へ入る。

皆々　大旦那樣、只今お歸りなされましたか。
才次　勘吉も一緒か。
勘吉　若旦那樣、三ツ星の極印金千兩、お受取り下さりませ。
金兵　才次郎、よく改めたがよい。箱へ入れて仕舞うて置け。この頃は大分物騷ぢやげな。
才次　只今もその話し。それが慥かに進藤德次郎とやら申す泥坊。いろ〳〵姿を變へるゆゑ、一向手に合はぬさうにござります。

ト箱へ金を入れ、戶棚へ仕舞ひ置く。この時奧よりお袖、下女の形にて、茶を持つて出る。

そで　ハイ、若旦那、お茶をおあがりなされませ。

才次　おれよりは、親仁様へ。

そで　わたしが汲んだお茶は、お前さんお嫌ひかえ。

ト嫉らしき思ひ入れにて、才次郎の膝を抓る。

ハイ、大旦那様。

ト金兵衛の目先へ出す。

金兵　ヤイ〳〵、恟りさせおつた。

頓吉　モシ、大旦那、なされませぬか。

金兵　髪結ひどの、おれはせぬが、今夜嫁を取るから、悴はするであらう。

頓吉　若旦那は、先刻なされました。

金兵　そりや何を。

團吉　あのお袖どのを。

金兵　何を吐かしをる。

才次　モシ、親仁様、今晩いよ〳〵、稲野谷おはんとやらと、私しは婚禮でござりまするか。

金兵　さればサ、帯代に遣はす天國の事も、今夜のつもりに、仲人船越十右衛門どのと、母御のおかや

どのとも、對談いたして參つた。
才次　左樣なら、わざつと上下でも出して置きませうか。
金兵　なにサ、世間へは客分にして置く嫁入りなれば、その上へ袴でよい。供の者、荷物なども、祝儀はお斷わりぢやぞ。
覺兵　それにしても、御祝言のまなびなれば
勘吉　お肴でも拵らへませう。お酌は差詰めお袖どの。
そで　わたしは知らぬわいなア。
トオ次郎を見てツンとする。
頓吉　私しも居合せたこそ幸ひ、何ぞお手傳ひ申しませう。
金兵　こなたには賴みがある。めでた次手に、あの勘吉めを、元服させてやつて下され。
頓吉　畏まりました。それは重ね〲おめでたうござりまする。
金兵　ア丶、コレ〱、其やうに喜んでも、御祝儀はお預かりぢやぞ。
頓吉　これは惡いお顏ね。
皆々　そんなら何かを、番頭さん。

そで　ハイ、若旦那、おめでたう存じます。

ト合ひ方になり、勘吉團吉覺兵衞頓吉、跡よりお袖、びんしやんして、皆々奥へ入る。

才次　モシ、親仁様、稻野谷おはんとやら申す女は、目つかちか、鼻缺けかは知れぬ者を、私しへ得心もさせず、お前様が云ひ約束をなされ、今夜の祝言。その上、大枚の天國の短刀を、帶代に遣るとは、根ッから合點が參りませぬ。

金兵　譯を知らねば、其やうに思ふも尤も。そのおはんといふは、工藤家へ奉公して、まだ手入らずのぼつとり者、親に如才があるものか。

才次　さう聞けば天國の短刀、帶代に遣つても、惜しいとは思ひませぬ。

金共　ところを、その天國も、遣らぬ法がある。

才次　ナニ遣らぬとは。

金兵　天國の短刀を、似合ひの似せ物と中心を入れかへ、彼奴等を一ぱい食はせる目算。その存じよりで、コレ見やれ、折紙までも似せ物を、拵らへて持つて居るワ。

ト懐より似せ物の折紙を出す。才次郎見て

才次　見覺えのあるこの折紙。

ト戸棚の中より本物の折紙と短刀を取つて來り、よく〱比べ見て

成る程、紙の古び、印判手蹟、寸分違はぬこの折紙。奇妙々々。

ト本物の折紙を懷中する。

金兵　それにしてもこの短刀、中心を摺りかへるに、似合ひの刄物。

才次　お待ちなされませ。私しの腰の物を

トまた戸棚より拵らへよき脇差を取つて來て、目釘を拔き、中心を差しかへ、しつかり合ふゆゑ、兩人思ひ入れ。

金兵　うまい〱。燒き刄、金色、寸尺まで、少しも違はぬこの一腰。これを帶代にして、今夜の婚禮

才次　して、この天國といふは。

金兵　元この短刀は、千葉家の重寶なりしところ、稻野谷半左衛門といふ者、預かり居たところ、何者とも知れず奪ひ取つて立退く砌り、その半左衛門を殺害なす。跡を繼ぐべき男子なきゆゑ、當分稻野谷の家は斷絕。ところで思ひ附いた謀叛、娘おはんを嫁にもらひ、才次郎と夫婦になして、おぬしが手よりその短刀を、千葉のお家へ差上ぐれば、それを功に稻野谷の、跡式は悴才次郎。おれは質屋の御隱居樣。なんと、うまいか〱。

才次　イヤモウ、うまい段ではござりませぬ。左樣ならこの似せ物の二品は、お前樣へお預け申します今宵の婚禮、生眞面目にお渡しなされませ。誠の折紙と天國は、私しが預かつて居りませう。

金兵　必ず人に覺られぬやう。

才次　そこに如才がござりませうか。才次郎は才智の才次郎。

金兵　祝ひに一つ〆めて置け。

兩人　シヤン／＼。

金兵　コレ。

ト通り神樂になり、向うより鬼王、木綿やつし、風呂敷包みを持ち、跡より平助、附け鬢、老けたる禮者の形。與吉、丁稚の形、股引にて、年玉を首に掛け、盆を持ち、附いて出る。鬼王は門口へ來て

鬼王　許さつしやれ。新左衞門でござる。

ト内へ入る。

金兵　これは／＼新左衞門さま、ようお出でなされました。

才次　サヽ、これへお通りなされまし。

ト此うち平助、門口へ來て

平助　葺屋町河岸、菊堂市右衛門、御慶申し入れます。

與吉　ヘイ、お年玉。

ト扇箱を置く。

金兵　菊堂の番頭どの、今日は市右衛門どのゝ名代か。

平助　左様でござります。市右衛門参る筈なれど、有り難い事には、見世が繁昌いたして取込み。失禮ながら私し、名代でござります。まづ結構な春でござります。

才次　お互ひにおめでたうござります……お茶あげいよ。

さん　ハイ／＼、畏まりました。

ト奥よりおさん、下女にて、茶を持つて出て

ハイ、お茶おあがりなされませ。

ト兩人へ出す。

平助　おさんどの、美しいの。こなたにもお年玉を進ぜう。

ト懐より四ツ目屋の薬包みを出す。おさん見て

さん　わたしは、梅幸が見世の菊堂かと存じましたら、これは四ツ目屋の薬。此やうなお年玉は否でご

ざりますよ。

ト投げ返す。この薬、才次郎の前に落ちる。につこりして才次郎懐中する。

才次　不躾ながら番頭どのには、禿頭と覺えましたが、今日は大分立派でござるが、ハヽア、芝居町近所ゆゑ、役者衆に借りたやら、鬘はめと見えます。

平助　左やう〳〵。伊勢屋市右衛門は仕合せでござります。梅幸丈の見世ゆゑ、大分繁昌いたします。

ト新左衛門、平助を見て

鬼王　成る程、鬢の毛は生えたやうだ。ハテ、好い細工でござる。

才次　あのやうに見えましても、矢ツ張り鬘はめの

金兵　市右衛門どのゝ名代とあれば、わざつとお杯を

與吉　左樣なら、私しも御一緒に。

さん　斯うお出でなされませ。

平助　ドリヤ、御馳走になりませうか。

ト合ひ方になり、平助與吉におさん附いて奥へ入る。

金兵　時に鬼王さま、何ぞ御用でもござりましたか。

鬼王　用といつたら、大變な事が出來ました。

才次　ナニ大變な事とは。

鬼王　されば、聞いて下され。この度大姫君には、今出川家へ御縁談きまりしところ、いつの間にやら祐成さまと乳繰り合つて、あまつさへ二人ながら行くへが知れない。そこで政子御前さま、今出川家へ立たぬとあつて、お預けの逆澤瀉の鎧もろとも、祐成が首討つて渡せとの事。

ト此せりふのうち勘吉、茶を汲み、出かゝりゐて

勘吉　ナニ祐成さまのお首を

ト茶碗をバッタリ落す。

金兵　何を致す。麁相者め。

勘吉　これは〳〵、眞平御免下さりませ。

ト前垂れにて拭く。

鬼王　右の始末ゆゑ、鎧が無ければ曾我一統の御難儀。請けやうにも金は無し。おれが才覺で、和田さまと北條さまで、代物を借りて置いたが、なんと入れかへて貸しては下さるまいか。

金兵　モシ〳〵、鬼王さま、とんだ事を云はつしやりませ。あの鎧は、入れかへどころか、去年流れに

出た代物ゆゑ、小藤太さまへ賣つてしまふ筈で、去年の暮にお前へ斷わつたところ、たつてのお賴みゆゑ、マア留めて置きましたが

才次　利上げをして、附けかへでもなされば、又どうともなりませうが、さもなくば、小藤太さまへ賣つてしまひます。

鬼王　とんだ事を云つたものだ。あの鎧を入手に渡して詰まるものか。いゝワ、どうするものか。百貫の抵當に笠一蓋とやら、利上げの代りに、この代物を、預かつては下さるまいか。

ト風呂敷包みより祐成の衣裳、素袍を出す。

金兵　ソレ、勘吉、改めて見い。

勘吉　畏まりました。

トよく／＼見て

見覺えある祐成さまの此お小袖。いかに貧苦に迫ればとて、斯樣な品まで形代に……サア、斯樣に申されます事なら、この品を利分の抵當になされ、鎧をお貸しなされて遣はされませ。

才次　三百兩の利上げには不足なれど、其やうに仰しやる事なら、ナア申し、親仁樣。

金兵　入れかへの品を見た上では、又どうとも御相談いたしませう。

鬼王　それば忝い。そんならこの通へ、利上げを附けて下さい。

ト懐より通を出す。

勘吉　畏まりました。

ト通り神樂になり、勘吉、通へ附けて鬼王へ渡す。此うち向うより徳次郎、紗の法衣、袈裟、くゝり頭巾、出家年禮の形。跡より權九郎、下男の形にて、挾み箱を擔ぎ、附いて出る。兩人直ぐに舞臺へ來て

徳次　權平、この内で訊いて見やれ。

權九　ハイ〳〵、畏まりました。

ト門口へ來て

御免なされませ。この近所に、伊豆屋次郎右衞門さまと申すはござりませぬか。

金兵　イエ〳〵、左樣な御仁はござりませぬか、商賣は何でござりまするか。

權九　何御商賣か存じませせぬ。

才次　それは空な尋ね者。何に致せ、この裏へ行つてお訊きなされませ。

權九　ハイ〳〵、忝うござります……旦那樣、私しはこの裏へ行つて、訊いて參りませう。

徳次 早う訊いて參れ。

權九 畏まりました。

ト挾み箱を置き、路地口へ入る。徳次郎こなしあつて

徳次 ちと御免なされ。只今御存じの通り、家來がお長屋を尋ねまする間、お見世をお貸し下され。

才次 お心安い事。これへ入つてお待ちなされまし。

徳次 それは忝い。許さつしやい。

ト内へ入り、下の方へ住ひながら

ハヽア、結構なお住居なア。

ト家内を見廻す思ひ入れ。

鬼王 時に御亭主、いま掛合つた通り、入れかへ物は、今夜長持で擔ぎこむよ。

才次 今晩は此方に、取込みがござりまする。自由ながら、明日になされて下さりませ。

鬼王 馬鹿な事を云やれな。大名が入れかへ物をするに、晝日中外聞が惡い。急に入用の鎧、是非とも今夜中に。

才次 御尤もでござりまするが、相成る事なら、どうぞ明晩まで。

鬼王　ならば今晩にしてもらひたいが、貴樣の云ふ事なら、明日の晩まで待つてやるべえ。そんなら入れかへの長持は、夜に入つて持込むによ。

三人　ハイ〱、畏まりました。

ト徳次郎、素知らぬ顏にて、何かの樣子を聞く思ひ入れ。

鬼王　御亭主、この奉公人は、柔和な若い者だ。生國はどこだ。

金兵　この者の生國は、越後の久上と申す所でござります。

鬼王　ナニ、越後の久上だ。常々からの樣子といひ、年恰好は、もしやあなたが、禪司坊さま。

勘吉　アコレ……サア、全體百姓が嫌いゆゑ、御奉公に參りました。

才次　勘吉、その代物を、藏へしまつて置け。

勘吉　畏まりました。

ト衣裳を抱へ、ツイと奥へ入る。鬼王、跡見送り

鬼王　あの若い者は、百姓の子にしては、氣高い生れだなア。

ト思ひ入れ。平助、醉つたるこなし。與吉附いて奥より出て

平助　今日は大きに御馳走になりました。

與吉　旦那様、有り難う存じます。

金兵　マア、ゆるりとさつしやりませ。

平助　イヤモウ、昆布鯡に數の子、大きに醉ひました……お侍ひ、まだござるか。イヤア、坊主がその
　上一疋殖えたな。坊主々々山の芋、こいつをとろゝにすればいゝ。

徳次　イヤア、怪しからぬ御挨拶なう。

平助　成る程、この侍ひは長い尻だ。尻も長いが、顔も長い。

　　ト門口へ出る。

鬼王　尻が長からうが、顔が長からうが、大きにお世話だ。

　　トむつとする。金兵衛才次郎、氣の毒なるこなしにて

才次　モシ〳〵、あの者は、酒の上が惡うござります。お寺様、鬼王さま、御料簡なされて下さりませ。

平助　ナニ鬼王さま。ハヽア、貴様は曾我の御家老様か。おらア又、駄折助だと思つた。

鬼王　この猿ッ返りめ、いろ〳〵な事を吐かしやアがる。痴事をつくと、足骨を叩ッ挫くぞ。

平助　ナニ叩ッ挫く。この久六め。坊主も相手だ。爰へ出やアがれ。

徳次　アヽ、コレ〳〵、わしは一向構ひは致さぬぞ。

鬼王　相手はおれだ。野郎め、今そこへ行くぞ。待つてうしやァがれ。

金兵　マアく、御料簡なされまし。

鬼王　否だく。料簡しないぞ。今でこそ曾我の御家老なれ、これでも築地に居れば、押しも押されもせぬ男だ。サア、野郎め、どうするか見やァがれ。

ト立ちかゝる。

才次　アヽ、コレく、喧嘩なら、見世先では迷惑。

金兵　和尚樣も、鬼王さまも、外へ出てもらひませうく。

德次　これは迷惑な。わしは爰に待ち合す人が。

トうぢくする。

金兵　イヤく、なりませぬく。

ト德次郎、鬼王、平助の三人を無理に突き出す。

鬼王　サア、野郎め、來たがどうする。

平助　おれが斷うする。

ト兩人摑み合ふ。德次郎、中へ入る。

德次　マア、待たつしやりませ〳〵。
　　ト支へる。奥より頓吉出て
頓吉　喧嘩なら旦那方、奥へござりませ。
才次　髮結ひどの、よいやうに賴みませう。
　　ト門口を締めて金兵衞、才次郎は奥へ入る。路地口より若い者二三人出る。頓吉も支へ
皆々　マア、料簡さつしやい〳〵。
鬼平　料簡しないぞ〳〵
　　ト摑み合ひになる。この中に德次郎、あちこちとこづき廻され、うろ〳〵する。喧嘩は花道へ行くと舞臺番、向うより留場一兩人來て、いつもの喧嘩のやうに鬼王、平助を引分ける。この時鬼王、花道よき所へ以前の通を落して置く。皆々捨ぜりふよろしくあつて、喧嘩を取りさへながら向うへ入る。
　　德次郎、うろ〳〵して
德次　アヽコレ、權平めは、何を致して居る。權平々々。
　　ト挾み箱を見て
家來が居らねば挾み箱も、斯うしては置かれまい。これは又迷惑。

ト挾み箱を意氣地なく擔ぎ、花道の方へ行き、何心なく落ちてある通を取上げ見て

「鬼王新左衞門さま、石部屋金兵衞。」ハヽア、こりや質物の通さうな。これも何ぞに。ムウ。

ト思ひ入れ。時の鐘、通を懷中する。路地口より權九郎出て

權九　旦那樣、伊豆屋次郎右衞門さまは、一向に知れませぬ。

德次　それでは、轉宅でも致されたのであらう。

權九　慥か鎌倉若宮邊へ、引越されたと申す事でござります。

德次　然らば若宮と訊いて行かずばなるまい。併し、得意の事なら仕方がない。

權九　左樣でござりまする……ヤ、今の間に、あなたの形は。

德次　其方が全體遲いゆゑ、この有樣……「お寺全體今の間に、得意の方へ斯う行くは、若宮なんぞをよくきくさうだ。」

權九　何を仰しやります。

ト通り神樂になり、兩人こなしあつて向うへ入る。あと合ひ方、時の鐘にて、奥よりお袖、才次郎の胸倉を取り、片手に行燈を提げ、出てくる。

才次　コレ〳〵、お袖、わしをどうするのぢや。

そで　お前、いよ〳〵おはんさんとやらと、今宵祝言しなさんすかえ。
才次　サア、わしは其やうな氣はないが、親仁樣が達てと仰しやるゆゑ。
そで　そりやお前、聞えませぬぞえ。わたしを此やうな身にして、外の女を女房に持つとは、そりや胴慾ぢや〳〵、ようござります。この事を大旦那へ申し上げて、わたしが立行きのなるやうにしておもらひ申します。

ト行かうとする。

才次　ア丶、コレ〳〵、それを云はれて堪るものか。
そで　そんならわたしを女房にして、今夜の祝言、變替へして下さんすか。
才次　サア、それは。
そで　但し、大旦那へ申し上げませうか。
才次　サア、それは。
そで　サア〳〵、どうでござんすえ。
才次　成る程、思ひ切つて今夜の祝言、變替へしよう。
そで　エ丶。

才次　先へ断わり云うて、おぬしを女房に持たう。
そで　エヽ、嬉しうござんす。モシ、それもたつた三日ぢやないぞえ。
才次　ハテ、疑ひ深い。町人冥理、嘘つかぬ證據は、この一品。

ト懐より以前の折紙を出して見せる。

そで　モシ、そりや何でござんす。
才次　こりや帯代として、天國の短刀に添へて遣る、大事の折紙。これが無ければ祝言はならぬといふ慥かな證據。
そで　すりや、この一品を、アノわたしへ。
才次　預けて置くが其方へ心中。
そで　疑ひ晴れた、才次郎さん。
才次　お袖。
そで　オヽ、嬉し。

ト抱く。時の鐘、唄になり、向うより十右衛門、袴羽織、弓張り提灯を提げ、次に駕籠一挺、これにおはん乗り、跡よりおかや出る。直ぐに皆々舞臺へ來り

十右　モシ、おかやさま、これが石部屋金兵衛どのゝ宅でござります。
かや　すりや、これが聟どのゝ宅でござるか。イカサマ、富家と見えます。娘は仕合せでござるわいの。
十右　左樣でござりまする。
ト門口へ來て
お賴み申しまする〳〵。
ト案内する。これにて兩人、ちやつと飛びのき、才次郎心得、囁く。お袖呑みこみ、奧へ入る。引違へて金兵衞、袴羽織にて出迎ひ
金兵　これは〳〵、十右衞門どの、母御にもお早いお出で。サヽ、お通りなされ。
十右　今日は日柄もようて、おめでたう存じます。
かや　娘、母が手を取りませう。爰へおぢや。
はん　そんなら、もう爰でござんすかえ。
ト合ひ方になり、おはん、駕籠より出る。
十右　駕籠の衆は、早う休息さつしやい。

駕舁　ハイ〳〵
　　　ト駕籠を擔いで向うへ入る。此うち才次郎、支度して出る。

か十　左樣なれば、御免なされませ。
　　　ト三人、內へ入る。皆々よろしく住ふ。

十右　かね〴〵お掛合ひ通り、今日は日柄もようござるゆゑ、嫁御おはんどのを連れて參つた。この上ながら、よろしうお賴み申します。

かや　モシ、舅御樣、不思議な御緣で、御厄介にあづかります。娘ことも、まだ若年でござれば、到らぬところは、どうせい斯うせいと、あなたのお子樣同樣に、お叱りなされて下さりませ。此やうに見えましても、子供同然でござります。萬事よろしく、お賴み申しますわいなア。

金兵　此方の悴とても、その通り。この上ながら、お互ひにお賴み申す……悴、いづれも方へ、御挨拶申せ。

才次　どなたも、お初にお目にかゝりました。この上ながら、よろしくお賴み申します。
　　　トこなし。おかや十右衞門、才次郎の顏を見て

かや　すりや、お前が聟の才次郎どのか。

才次　ハイ、左様でござります。
か十　アノ、いよ〳〵お前が
　　ト兩人、顏見合せて思ひ入れ。
かや　コレ娘、聟どのへ御挨拶申しや。
はん　何も存じませぬ不束者、この上ながら、お目かけられて下さりませ。
　　ト才次郎の顏を見て、ハツと思ひ入れ。才次郎はおはんを見て、ゾツとしたる思ひ入れ。
　左様なら、お前様が、ほんまの才次郎さんとやらかえ。
才次　おいなう。
　　トおはん、おかやの袖を引いて
はん　モシ、母さん、こりや、どうせうぞいなア〳〵。
かや　どういうたら、年よつたこの母さへ、恟りぢやもの。其方の恟りは、皆尤もぢや〳〵。
十右　尤もぢや〳〵。わしさへ恟りぢやもの、花嫁御の心では、尤もぢや〳〵。が、天國の短刀を取戻し、稲野谷の家を引起すが、各々の、去られた半左衛門さまへの皆孝行……ナ、只何事も、辛抱が大事でござるぞ。

はん　ぢやというて、これがマア

十右　ハテ、なる辛抱なら誰れもする。ならぬ辛抱をせずば、孝行者とは云はれまい。

はん　いかに父さんへの孝行なればとて、どうしてマアあのやうな

かや　コレ……あの世までも連れ添ふもの、隨分これから仲ようして

金兵　二人ながら、孝行を頼みますぞや。

才次　モシ、親仁樣、帶代の短刀を遣はして、早う祝言いたしたう存じまする。

十右　そりや此方も望むところ。ちつとも早う天國の

はん　すりや、どうあつても。

かや　取結ばねばならぬ仕儀。その代り、天國さへ手に入らば、跡は其方の心にある事。何時去つて戻されても、忝いと受取ります。

金才　ヤ。

かや　サア、受取りたいは、その帶代。

十右　嫁御も急いで、今宵の祝言。

金兵　左樣なら、約束の帶代を

ト以前の二品を出し
サヽ、めでたう受納さつしやれ。
かや　エヽ、忝い。この短刀
十右　折紙もろとも
ト兩人ちよつと改め
兩人　慥かに受納いたしてござる。
才次　サア、これから祝言々々。
金兵　お杯を持てよ〳〵。
ト手を打つ。
袖園　畏まりました。
ト合ひ方になり、奥より團吉、銚子杯。お袖も銚子肴を持つて出る。
そで　モシ、若旦那、どうあつても、御祝言なされますかえ。
才次　サア、何事もおれの胸に。
そで　それでも先刻變替へと

才次　云ふに云はれぬこの場の仕儀。それゆゑわざとあの折紙……サ、鬼神でも天狗でも、この美しさ
では、堪らぬ〳〵。ちつとも早う祝言を

そで　チエ、、お前はなア。

團吉　サア〳〵、燒き餅と祝言との始まり〳〵。燒き餅祝言柿八年とはどうだ。

才次　小僧、洒落るな。

金兵　お仲人、そこをよろしう。

十右　畏まりました。左樣なら私しが

ト杯を取上げる。

金兵　二人の者、酌いたせ。

そで　ハイ〳〵。

ト團吉、お袖はびんしやんしながら酌をする。これより祝言の杯ごとよろしく、よき時分

十右　相に相生の松こそ、めでたかりけれ。

か十　めでたい〳〵。

才次　おれは取分けめでたい。

そで　わたしやさつぱりめでたくない。

ト喜ぶ。

ト泣く。

才次　コレ……それぢやというて、今更どうも

そで　イエ〳〵、それぢや約束が違うた。エヽ、口惜しい〳〵。

ト才次郎の胸倉を取つてこづき廻す。金兵衛引分け

金兵　ヤイ〳〵、おのれ、最前より、お客人の手前も面目ない。めでたい折柄その吠え面、家風に合はぬ、出てうせい。

そで　エヽ。

金兵　團吉、此奴が荷物を、早う〳〵。

團吉　畏まりました。覺兵衛どの〳〵。

ト呼びながら奥へ入る。

そで　左様なら、私しはお暇を

金兵　早う出てうせい。

かや　モシ、舅御樣、お腹も立ちませうが、かゝるめでたい折なれば

十右　憚りながら、私しどもに免じられ

兩人　幾重にも御料簡を。

そで　才次郎さん、お前もお詫び事を。

ト才次郎、クルリと後を向く。

金兵　イヤならぬ。早く荷物を持て〳〵。

ト奥より覺兵衞、古葛籠と鏡臺を持つて出る。

覺兵　旦那樣、荷物は殘らず持つて參じました。

金兵　其奴に脊負はせて叩き出せ。

覺兵　畏まりました……サア、お袖どの、主と病、せう事がない。

ト捨ぜりふ云ひながら、お袖に荷を背負はせる。

十右　左樣なら金兵衞さま、事ゆゑなく取結び、まづは御安堵でござりませう。

かや　丸う納まる今宵の祝言、めでたう相濟む上からは、ちつとも早う

ト立上がる。おはん、こなしあつて

はん　母さん、もうお歸りなされまするかえ。
十右　コレ、歸るといふは忌詞。
かや　不遠慮千萬。これから萬事氣を附けや。
　　トおかや十右衞門、思ひ入れあつて門口へ出る。
才次　暇の出たその女
金兵　早く叩き出せ。
覺兵　お袖どの、夜更けぬうちに、ちつとも早う。
そで　入り船あれば出船とやら。わたしも道まで御一緒に
　　ト門口へ出て
　とはいへ、思ひがけない
かや　今宵の祝言ゆゑ、首尾よく手に入るこの短刀。
十右　千葉家へ差上げ、歸參せば
はん　家名花咲く稻野谷の
才次　おはんを女房に持つといふは

金兵　忰は古今の果報者。

そで　果報か阿房か、あの刎ね者。

ト才次郎へ思ひ入れ。

覺兵　コレ、今までの事を忘れたか。

かや　サア、忘れたいは親子の愛情。

はん　わたしが心をお察しなされて

十右　親御の心も察して見れば

十右　泉にあらぬこの涙。

かや　流れ渡りに主人の御流浪、何卒お家を取立てんと、やう〳〵これまで漕ぎつけて、心ばかりの船越が、忠義に渡す仲人役、今にめでたく相生の

かや　二人の娘は持ちながら、姉は苦界へ身を沈め、殘る妹は心にもなき、町人へ今宵の嫁入り。やがて家名を引起さば、離別を待つて末廣く

は十　モシ。

ト思ひ入れ。おかや、門口をピツシヤリ締めて

かや　サヽ、開きませう。

　　トおかや十右衞門にお袖附き、唄になり、向うへ入る。おはん、跡見送つてこなし。才次郎、フツと立つて

才次　ヤア、大變だ〳〵。

　　ト云ひながら、門口へ出ようとする。金兵衞覺兵衞、恟りして留める。

兩人　こりや、血相變へてどこへ。

才次　最前の折紙。

　　ト思ひ入れ。

金兵　ナニ折紙とは。

才次　サア、おれは紙が

金兵　紙は跡からやろ。初々しい二人の者、覺兵衞、奥へ、心をきかして、

覺兵　お二人樣、奥へ早う。

はん　イヽエ、わたしは

才次　あの折紙。

覺兵　無駄を云はずと、早う〳〵。

ト覺兵衞は才次郎とおはんを突きやりながら、奥へ入る。金兵衞殘り

金兵　まづ、まんまと首尾よく今夜の祝言。跡は斯う〳〵。

トうなづき

殘つた物は、おれが寐酒。門口も締めて

ト門口を締める。時の鐘になり、向うより權九郎、赤合羽、中間笠にて顏を隱し、箱提灯を持ち、富絹看板、木綿袴、侍ひの形。音、鐵、赤合羽、中間笠にて、顏を隱し、長持を擔ぎ出る。

富　石部屋金兵衞どの宅は、爰らであつた。

ト皆々舞臺へ來る。

賴みませう〳〵。

ト門口を叩く。

金兵　どなたか、今晩はもう臥りました。質物なら、明日の事になされて下さりませ。

富　曾我の家中、鬼王新左衞門より、急用で參つた者でござる。賴みます〳〵。

金兵　ナニ、鬼王さまからお使ひとは。

ト門口を明ける。

富　御免下さりませ。

ト内へ入り

金兵　私しは新左衞門よりの使ひでござる。して、急の御用とは。

富　鬼王新左衞門申し越しまするは、逆澤瀉の鎧の入れかへの儀は、明晩とお掛合ひ申しましたれども、今晩急に入用につき、新左衞門參る筈なれど、多用ゆゑ私しが、名代に參りました。お取込みではござらうが、今晩鎧を、お出しなされて下さりませ。

金兵　そりやハヤ當方も、商賣の儀なれば、今晩でもよろしうござるが、あなたは不躾ながら存じませぬお方。質物出し入れの儀は

富　御尤もの儀でござる。新左衞門も左樣存じて、念の爲、通を遣はしてござる。

ト以前の通を出す。

金兵　これは〳〵、御念の入りました。通さへござれば、間違ひもござるまい。左樣なら、入れかへの品を改めまして……覺兵衞々々々、

覺兵　ハイ〳〵

　　　ト綱雪洞を持ち、奥より出て

　　御用でござりまするか。

金兵　曾我さまより、鎧入れかへの品。われも手傳うてくれ。

覺兵　畏まりました。お長持、これへ。

　　　ト手傳うて内へ舁きこみ、皆々捨ぜりふよろしくあつて、蓋を明ける。中より德次郎、好みの凄き形にて、拔身を引提げ、ズツと出て思ひ入れ。時の鐘、凄き合ひ方。金兵衞覺兵衞、ハツトこなし。此うち富、上着を脱ぎすてる。夜盗の形、これも拔身を提げて立ちかゝる。兩人「ワツ」と云ひながら、逃げようとする。門口の三人、合羽を取り、これも思ひ〳〵の夜盗の拵らへ、いづれも拔身にてズイと内へ入る。兩人見て、ガタ〳〵慄へる。皆々、こなしあつて

權九　われは亭主か。

金兵　ハイ。

　　　ト思ひ入れ。

權九　金の在所を云へ。

金兵　私しは存じませぬ。あの者にお聞きなされませ。
富　エヽ、野郎め、金の在所を云へ。
覺兵　私しも存じませぬ。
　　ト兩人よろしくこなしあつて
兩人　泥坊々々。
　　ト大聲を立て、逃げようとする。權九郎、富、捕へ
權富　ソレ、ふん縛れ。
皆々　合點だ。
　　ト金兵衞覺兵衞に猿轡をかけ、腰より繩を出し、縛りあげる。此うち德次郎、あたり見廻し、顏にて指圖する。皆々心得、掛け硯、錢箱より錢金を出して見せる。これを德次郎、いろ〳〵見て、長持へ入れろと指圖する。權九郎、押入れより千兩箱を持つてくる。德次郎に見せる。兩人顏見合せ、ニツコリと思ひ入れ。この度々に金兵衞覺兵衞こなし。
富　サア親仁、われが内には、尋ねる代物がある。まだ外に金もあらう。早く吐かせ。
　　ト金兵衞の猿轡を取る。

金兵　どう致しまして、その外に、代物も金もござりませぬ。

權九　ナニない事があるものか。今日晝のうち、納豆配りの年禮に、化けて來たのはあのお頭。おれも一緒に附いて來て、内の樣子は見て置いた。

金兵　ヤヽ、そんなら晝のお寺樣は、あのお人かえ。

ト徳次郎の顏を見ようとする。權九郎、富「コレ」と支へる。徳次郎、手早く頰かむりする。

音　面倒な。びくしやくするなら、二人の奴等は

權富　いつその事に。

ト切らうとする。徳次郎入れかはつて

徳次　コレ。

ト思ひ入れ。時の鐘。

四人　ありやもう七つ。

徳次　もう七つか。ハテ、夜は短かいなア。

ト長持へ腰をかけて思ひ入れ。時の鐘にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、平舞臺、向う床の間、違ひ棚、襖、これに出入りあり、上の方に梅の立ち樹、柴垣、手水鉢、掛け手拭、庭の心、舞臺よき所に床を取り、行燈を置き、爰に才次郎、寝卷の形。屏風の外におはん、おさん、團吉、火鉢に倚つてゐる。すべて奥座敷の體。時の鐘、常の合ひ方にて道具とまる。

才次　互ひに待てば甘露とやら、今宵思はぬ嫁入りに、なぜ其方は浮き〳〵しやらぬ。早う爰へ來やいなう。

はん　イエ〳〵、わたしや寝たうござんせぬ。

才次　このマア夜の更けたに、風邪などひいては惡い。早う寝や〳〵。

さん　あのやうに若旦那樣が仰しやります。あそこへお出で遊ばしませ。

はん　其方衆までが其やうな事を。わたしや臥る事は、きつい嫌ひでござりまする。

團吉　わたしは又、寝る事は、きつい好きでござります。

はん　其方、眠くば、爰へ寝てたも。

團吉　ソリヤ、お許しが出た。

トよき所へ蒲團を敷いて寝る。

才次　小僧は寝をつたな。サア、女房ども、ちつとも早く。

トおはんの手を取る。

はん　エヽ、アタ嫌らしい……わたしやどうやら痞えが

さん　モシ、若旦那樣、あなたはお癪が。

才次　そんならおさん、名代に

トおさんに寄りそふ。

さん　何をなされます。

ト振り放す。

才次　コレ、女房ども。

トおはんにしなだれる。これも振り放す。才次郎、捨ぜりふあつて、兩人を追ひ廻すことよろしく、此うち奥より徳次郎、權九郎、富、音、鐵、いづれも拔身を振つて、この中へズツと出る。三人見て「アツ」と云うて逃げようとする。皆々取卷き

皆々　聲を立てると、ぶつた切るぞ。

三人　ハアイ。

ト思ひ入れ。徳次郎、指圖する。音と鐵は才次郎を腰繩にして、よき所へ縛りつける。此うち權九郎と富はおはんの形を見て、上着を剝ぎ取る。徳次郎、あたり見廻し、床の間にある才次郎の脇差を取つて、拵らへが好いといふ思ひ入れにて、腰へ差す。鐵は才次郎とおはんの着類、座敷にある物を持つて奥へ入る。徳次郎、思はずおはんの顏を見て、權九郎と富に囁く。兩人心得、おはんを引立てる。

三人　あれえ〳〵。

權富　聲を立てるな。

　　ト きつと云ふ。

三人　ハイ。

　　ト才次郎思ひ入れ。徳次郎、おはんを手荒くする。おはん、抗ふはずみに徳次郎の頰かむり取れる。おはん、徳次郎を見て思ひ入れ。こなしあつて屛風を引廻す。權九郎と富は、おさんと、寢てゐる團吉を引摺り起して、奥へ引立て入る。才次郎は、いろ〳〵もがいて、こなし。屛風明くと、徳次郎おはん思ひ入れ。

はん　モシ、お前さん、又いつ頃お出でなされますえ。

徳次　いつと云つても日も極められまいが、また其うち來やせう。

才次　ナニ、また其うち來る。イヤア。

ト思ひ入れ。徳次郎、才次郎を見て

徳次　ありやアお前の御亭主か。いゝ男だ。

はん　あんな憎い事を

ト徳次郎を抓る。

徳次　アヽ、痛い〳〵……そんなら姐さん

はん　必ずともに

才次　お近いうちに

徳次　また來やせう。

ト脇差を持ち、立ちかゝる。才次郎見て

才次　コレ、その脇差ばかりは、どうぞ殘して

ト寄らうとして、縄の届かぬ思ひ入れ。此うちおはん、徳次郎に寄りそふ。

はん　オヽ寒。

トこなし。才次郎思ひ入れ。時の鐘にて、道具廻る。

本舞臺、黑塀、忍び返し、此うち土藏の屋根、見越しの梅、正面に欄干附きの雨戸をたてたる二階家。この雨戸、明け閉てあり。奥、黑塀の切り戸口。爰に長兵衞、怪しき形にて、龕燈を照らし、拔身を下げ、天水桶に腰をかけてゐる。凄き合ひ方、本釣り鐘にて道具とまる。

ト左右より犬二三疋出て頻りに吠えるゆゑ、長兵衞、懷より握り飯を出してやる。犬はこれを咬へて左右へ別れ入る。右の合ひ方にて向うより町人、取上げ婆と連れ立つて出てくる。

町人　婆さん、大きに御苦勞でござります。

婆　イヤモウ、取上げ婆の事なら、さのみ苦勞とも思ひませぬ。

町人　それはさうと、男の子が生れゝばようござります。

ト此せりふのうち、舞臺へ來り、何心なく長兵衞を見て

兩人　モシ、もう何時でござります。

長吉　やかましいわえ。早く行きやアがれ。

トこれにて長兵衞の形を見て、「アッ」と云うて下座へ逃げて入る。長兵衞、こなしあつて切り戸口の方へ龕燈を見せる。内より音、鐵、赤合羽にて長持をかたげ、跡より富、拔身を持ち、權九郎、千兩箱を持つて出る。この中へ交り、勘吉、赤合羽、中間笠にて、鎧櫃を抱へ出る。長兵衞、權九郎に囁

き、千兩箱を、見物によく見せて長持の中へ打込み、四人は一散に向うへ入る。勘吉殘り、鎧櫃より逆澤瀉を出して引ッ抱へ、行かうとする。長兵衞、透かし見て

てまへは誰れだ。これまで仲間に見馴れぬ恰好。

卜合羽を取らうとする。立廻りのはずみに笠合羽取れて、最前鬼王が持つて來たる、祐成の衣裳、千鳥の素袍、下を高括りの形。長兵衞、心得ぬ思ひ入れにて、捕へようとする。立廻りに手拭取れて、掛け烏帽子、元服、祐成の鬘。長兵衞見て

ヤ、うぬは見馴れぬ

卜かゝる。勘吉、振り切つて行く。立廻りに長兵衞を當て、その間に鎧を抱へ、一散に向うへ入る。

南無三、面の知れないあの野郎、鎧を持つてうしやァがつた。彼奴は盗人の上前取りか。それはさうと、おれが賣つた天國が、首尾よく頭の手に入つたかしらん。

卜思ひ入れ。矢張り右の合ひ方、時の鐘にて、切り戸口より徳次郎、最前の一腰を差し、縛りあげし覺兵衞を引立て出る。長兵衞見て

頭。

徳次　コレ。

長兵　して、おれがこの内へ賣りつけた、彼の天國を、首尾よくこなたが

德次　サア、よもや外へは行くまいと、仲間の奴等が、いろ／＼探して見たが

長兵　短刀は見えませぬか。

德次　そこで、床の間にあつたこの一腰を、引ッ浚つて來たが、サア、野郎、この長兵衞から貰ひ取つた、天國はどこへやつた。それを吐かせ。

覺兵　サア、その天國は

德次　どこにあるか、早く吐かせ。

トきつと云ふ。

覺兵　申します／＼。その天國は……泥坊々々。

ト大聲あげて逃げようとする。德次郎、持つたる一腰にて、拔打ちに覺兵衞を切り倒す。この時、かすめたる雷、雨車、兩人心得ぬ思ひ入れ。二階の戸を明け、おはん下を窺ふ。

德次　此奴を殺らせば俄の雨。もしやこれが

長兵　天國ぢやアござらぬか。

德次　跡でとつくり。

ト白刃を振ひ、しやんと納める。鳴りやむ。

長兵　サア、夜明けぬうちに

德次　爰をふけつて

ト行かうとして

とはいふものゝ、あの娘、どうやらおれに

長兵　エ。

ト思ひ入れ。德次郎、思はず二階を見上げ

德次　慥かにあれは

ト長兵衞の龕燈を取つて二階を見上げる。この灯にておはん德次郎、顏見合せ

ヤ、先刻の娘。

はん　怖い殿御に、どうした事やら

德次　娘心に

はん　惚れたは惡緣。

德次　そんなら眞實

はん　アイ。
長兵　エヽ、畜生め。
德次　コレ。

ト龕燈を吹き消す。二階の戸をピッシヤリ締める。この途端、一時にチョンと木の頭。長兵衞、德次郎の脊中を叩く。德次郎、面目ないといふ心にて顏を外ける。この仕組みよろしく、時の鐘の送りにて、ひやうし

幕

第一番目　五建目

鎌倉大町帶屋の場
六浦川道行の場

淨瑠璃　帶文雪空解　清元連中

役名――六三郎女房、おきぬ。見世物師、梶の長兵衞。絲屋手代、勘藏。左官、傳兵衞。疊屋、甚八。大工、勘八。按摩、やみ市。大工棟梁、船越十右衞門。家主、箱根屋畑右衞門。石部屋金兵衞。稲野谷後家、おかや。稲野谷おはん。帶屋、長右衞門實ハ新藤德次郎。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附け重ね戸棚に帶地の巻き物、現金大安賣の書附け。正面納戸口、上の方、障子屋體、軒暖簾に帶やと記し、この下に日除け暖簾、御帶地御あつらへ織しな〳〵と記しいつもの所に門口。下の方に格子づくり、駒寄せ、用水桶、隣家の心。稻野谷と記したる暖簾口。右本舞臺、見世の方に代物賣切れ申候と下げ札。すべて鎌倉大町通りよろしく、幕の内より甚八、勘八傳兵衞、いづれも職人の拵らへにて、吸ひ物と酒肴を前に置き、前垂れがけの下男、給仕をしてゐる。おかや、前幕の拵らへにて、酌をして居る。通り神樂にて幕明く。

かや　どなたも、よろしうおあがりなされませ。

皆々　これは、いかい御馳走でござります。

甚八　今日は爰の内の見世開き、日柄が好いので、初商ひの代物は、もう賣切れ申候といふ書附け。

傳兵　今度新織の帶屋、見世開きの景物に、この手拭を各自にやるので、一倍買ひ手も餘計であつた。

勘八　兎角なんでも、おまけでなければ、得心せぬ世の中だ。

甚八　そこで、四日五日の仕事を急にこじつけ、見世開きの間に合うたによつて、大工手間取り、疊屋の此方まで、この御馳走でござります。

勘八　併し、とてもの事に、あの阿母の酌が、美しいたぼなら猶よからう。

傳兵　コレ〳〵、この阿母様は、お隣の稻野谷の阿母様、急がしいので、手傳ひに來てゐるのぢや。

勘八　これは〳〵、大きに不躾を申しました。私しは內方へ、この間から參りました職人。

甚八　たゞ醉ひますると、仕方がござりませぬ。

三人　御免なされて下さりませ。

かや　ホヽヽヽ、大事ござりませぬ。帶屋の內方は男世帶、殊更見世開きの、町振舞ひぢやのとお取込み、お隣がてらの御挨拶に參つて居りまする。御遠慮なう、たんとおあがりなされて下さりませ。

甚八　時に、長右衞門さまも、町內へ禮にござつて留守。あまり飮み過ぎては惡からう。

傳兵　それ〳〵、おいらが貰つた景物の手拭、ドしと書いてあるから、めでたく納めにしませうか。

かや　今に長右衞門どのも戾つてなれば、マア、ゆるりとおあがりなされませいで

勘八　イヤ、どうで明日も來て、また阿母様を使ひ立てます。

三人　大きに御雜作でござります。

かや　これはしたり、不調法なお取持ちでござりました。

三人　よろしうお賴み申します。

ト通り神樂になり、職人三人は花道へかゝる。向うより畑右衞門、家主の形にて、跡より長右衞門、町人の形、羽織袴、一本差し。下男を供に連れ出て來り、花道にて行きあひ

三人　オヽ、これはお家主樣、長右衞門さまも、今お歸りでござりまするか。

畑右　こなさん達は、もう歸らつしやりますか。長右衞門どのも、近所を廻つて、いま戻りました。

長右　ツイ戻りにも隙がいつて、こなさん達へも不あしらひ。マア、ゆるりと一つ飲んでござりませいで。

甚八　イヤ、お留守中に遠慮なく、御馳走になりました。

三人　お禮は明日、ゆつくり申しませう。

長右　これは〳〵、お禮どころか、急な見世開き、お庇で普請も間に合ひましてござりまする。

甚八　作料も各自に下さりましたからは、疊建具も又明日から、取附けに來まするて。

畑右　家賃も半年ぶり先拂ひにする長右衞門どの。こなさん達も如才なく、仕事を急いでもらひませう

長右　勘定が不足なら、遠慮なく云はつしやりませ。

傳兵　手間賃は貸し越してゐる勘定。いづれ又明日參りましての上。

畑右　イヤモウ、何かと骨折りでござりました。

長右　左様なら、また明日お賴み申します。
ト通り神樂になり、三人は向うへ、畑右衞門と長右衞門は本舞臺へ來る。此うちおかや、下男と膳椀を片附けてゐる。兩人、門口を入る。
これはおかやさま、何かとお世話にござりました。
かや　オヽ、長右衞門さま、お歸りでござりますか。畑右衞門さまも、御苦勞にござりました。
畑右　表を張つてござる長右衞門どののゆゑ、近所へ近附きに同道しました。稻野谷の阿母、留守の手傳ひでござるか。
かや　イエモウ、お隣りからお世話になつて、內同然に參つて居りますわいなア。
長右　軒ならびといひ、此方が男世帶、普請の間におかやさまの所を、物置同樣に借りうけて居ります畑右衞門さまも、氣を附けて進ぜて下さりませ。
畑右　イヤモ、長右衞門どのとは昨今。此おかやどのは、以前は由ある人とあつて、去年の冬からわしが借家に親子ぐらし。姉娘の十六夜どのが、奉公に出られた跡、味噌鹽までも仕送つてやりますも、世に出られたらばと思ふから。併し、妹のおはんどのも緣附かれて、先は大身代との事。この間見れば、內に戾つて居られますが、どういふ事でござりまする。

かや　左樣でござりまする。姉娘は外へ奉公。いま宿に居ります妹娘のおはんは、甘繩邊の町家へ緣附きましたるところ、四五日以前から氣合ひが惡いとて、人樣にも逢ひませず、とり臥して居りまする。

畑右　それは大方、先の聟どのが、氣に入らいでの事でござらうぞや。とつくり聞いた上で、男を持たせ變へるやうに、さつしやるがよからう。ナウ、長右衞門どの。

長右　イヤモウ、若い女中の病氣は、兎角ぶら〳〵煩ひなぞになりたがるもの。さういふ事なら、私しの所はお構ひなされず、お娘御の側にござるがようござりまする。

畑右　それに附けても、かれこれ不自由勝ちと、氣を附けて進ぜるこの畑右衞門。何事も遠慮なく、親類同然に思つて居さつしやるがよい。

かや　畑右衞門さまの御深切。先方も町家の歴々。大方今日あたりは、迎ひでも參るでござりませう。

長右　コレ與助、お隣の内にお賴み申して置いた、問屋場の荷物、お邪魔にならぬやう、勝手から行つて片附けて置きやれ。

下男　ハイ〳〵、問屋からの絲荷も、手傳うて此方へ、入れますでござります。

かや　なんのまア、いつまでなりと、大事ござりませぬわいなア。

トてんつゝになり、通り神樂にて、向うより長兵衞、遠國者の拵らへ、三尺帶、頰かむりをして、跡よりおきぬ、絹やつし、世話形、袖頭巾をかむり、出て來り

きぬ　父さん。わたしを、どこへ連れて行くのでござんすぞいなア。

長兵　おれが行く所まで行けば解る話しだ。マア來たがよい。

ト門口へ來り

長右　御免なされませ。旦那はお宿でござりまするか。

畑右　もう代物は賣り切れました。また明日お出でなされませ。

長兵　イエ、そんな者ぢやアござりませぬ。旦那にお目にかゝればよろしうござりまする。

トずつと內へ入る。長右衞門、見て

長右　オヽ……こなさんか。ようござりました。

長兵　この間、伊豆の次郎が話しで、見世開きがあつたと聞いたから來たのだ。

トあたりを見廻し

ムウ。これぢやア知れない筈だ。これから後は、誰れも來ねえか。

ト長右衛門、聞かぬ振りにて

長右　おかやさま、もうお構ひなされず、お出で下さりませ。コレ與助、御一緒に行つて、今の荷を片附けたがよい。彌兵衛も行つて手傳うたがよい。

かや　左様なら、ちよつと行つて參じませう。

畑右　わしも、おかやどのに相談もあり、内へ行つて話しませう。コレ與助、貴様は勝手から入るがよい。おいらも裏から行きませう。

かや　左様なら、長右衛門さま。

長右　これは大きにお使ひ立て申しました。また後ほどゆるりと。

畑右　そんならおかやどの、わしは裏口から廻りませう。

かや　後ほどお目にかゝりませう。

ト唄になり、畑右衛門は男を連れて納戸口へ、おかやは門口を出て稻野谷の内へ入る。長右衛門と長兵衛殘る。あと合ひ方。

長右　長兵衛、貴様も如才がなくつて晝日中、さういふ形で、どうしたものだ。

長兵　どうしたといつて、早い話しが、當分おれも白で暮らすつもりで、それにしては、どこぞ外でや

つて見ようと、その話し合ひに來たのサ。

長右　それも隨分よからうが、なんぞ當のある事か。

長兵　それだによつて、來たといふもの。

　　ト ちよつと門口へ來て

おきぬ、爰へ入れ。

きぬ　お許しなされませ。

　　ト 内へ入り、うぢうぢ下に居る。

長兵　長右衛門どの、こりやアおれが娘。この間中大磯へやつて置いたが、また此方へ取らにやアならぬ破目で、内へ置くにしては、いま云つた話しの邪魔。外へ行くに、此奴一人店を持たしても置かれず、そこで、まづこの娘を、こなさんの内へ預かつてもらつて、外を稼いでくる間、ちつとばかり金を借りて、工面を直すまでの一時しのぎに、どうぞ六七十立替へて下さい。その代りこの玉を、女房だとか、雇ひだとかいつて置いたら、内の見てくれも、鹽梅しきは好からうではあるまいか。

長右　ムウ。外ではなし、貴樣の無心、ちつとやそつとの事は否とも云はぬが、見る通り、金もかけた

長兵　帶屋見世、六七十のなんのと云つては

長兵　これサ、そんな事を云つては愛想づかしだ。出來ない話しをするではなし、現在一人の娘を預けるから、飯焚きにでも女房にでも好きにして、否なら其方の手で、宿場へやつても構ひはない。

きぬ　父さん、お前、なんぼ親類ぢやというて、わたしも六三郎といふ男もあり、やう〳〵とこの間大磯から戻るや否、また無理な事云うて、そんな事がなるものかいなア。

長兵　ヤイ〳〵、われが何も口を出す事はない。親の自由にする事だ。切りを稼がせやうが、地獄にせうが、おれが好きだ。オヽ、おれが娘だ。

きぬ　お前の娘は知れてあれど、今云ふ通り、わたしには男があらうが、亭主があらうが、親が不承知なら何でもない。ハテ、女房の親なれば、おれが苦しんで走り歩くに、粒三文でも寄越した事はあるまい。

長兵　そりや、お前の常からの商賣柄を、薄々六三さんも

きぬ　やかましいわえ。おれが身の上を、をかしく思つてゐる奴なら、猶の事あんな奴に、くッつけては置かれないワ。コレ、長右衛門どの、今云ふ通りだから、この娘を預かつて下さい。罷り間違つたら、どこへやつても其方の勝手。

長右　成る程、わしやァ獨り身。また斯うして、帶屋の長右衛門といふ商人、女房も欲しい、幸ひだが娘御の詞では、外に搦んだ救ひ手もあり、ハテ、困つたものではある。

ト頭を掻く。

長兵　ムウ。そんならおれが云ふ無心、御不承知か。金は貸せないといふのか。コレ、當分樂が出來ると思つて、さうした義理ではあるまいによ。コレ、帶屋にならうが、これまでのよしみ。命ぐるめの貸し借りは、七十兩ぢやァ廉いものであらうがの。

長右　ムウ、貸してやりませう。

長兵　ヤ。

長右　折角貴樣の無心の金、七十兩貸して進ぜう。

長兵　そんなら、このおきぬを預かつて。

長右　イヤ、そりやァ預かるまい。ハテ、おきぬどのは男のある身。此方へ預かつて置いたら、職人氣質の六三とやらが、また兎や角と

長兵　ハテ、そりやァ五分でも云はせまいといふ、現在親のおれが請合ひ。

ト懷より書附けを出し

四建目後



五建目



「一ッ、我れら娘こと、貴殿の女房に遣はし申し候ふこと相違これなく候ふ」跡の文言はお定まり。長右衞門どのへ、長兵衞。おれが自筆でこの印形……これではグッとも云ふ事はない。

きぬ　そんなら、どうでもわたしをば

長兵　ハテ、あの六三が根性骨、彼奴に添はしては、親のおれが寐覺めが否だ。

きぬ　それでは、わたしが

長右　これはしたり、親仁の云ひ分。あゝ云ひ出すからは、マア氣休めに此方に居て、表向きは商人のおかみ樣、內證は長右衞門が呑み込んで、こなたの思惑通り、そりや跡でまた兎も角もならう程に、當座は帶屋のかみ樣、世帶の世話もして下さりませ。

きぬ　仰しやる通り、父さんの云ひ條破つても、親への不孝、と云つて一旦云ひ約束した、夫への義理もあれど、この場の手詰め。マア、そんなら內方に、奉公なとして當分は

長兵　居候ふに居るがよい。長右衞門どの、そんなら、わしは直ぐに行きませうかい。

長右　それではこなさんの戾るまで、この一札は預かりませう。

ト簞笥の抽出しより包み金を出して來り

七十兩貸して進ぜまする。隨分精出して、また其うちに戾つてござりませ。

長兵　イヤ、滅多に歸らぬ料簡で、店も明けて來ました。
長右　そんなら急速に行かつしやるか。
　ト長兵衞、金を懐へ入れて
長兵　用が片附けば、この形も支度し直して、……これは大きに無理な事を云ひました。併し、同じ暮らしをして居た者が、表店の主、おれは矢ッ張りこの姿。目と轉んだら又その時。
長右　マア、達者で氣を附けて。また好い春に逢ふであらう。
長兵　暖かになつたら出て來ますよ。
　ト通り神樂になり、長兵衞、思ひ入れあつて、門口へ出て頰かむりをして、向うへ入る。あと長右衞門、おきぬ殘る。
長右　長兵衞どのが今のやうに、わしに預けて行かれたが、こなたとは初めての近附きなり、折を見て又その六三郎とやらいふお人にも、逢はせるやうにして進ぜませうほどに、氣遣ひさつしやりますな。
きぬ　あの父さんとは、どうした御懇ろかは存じませぬが、あの氣立てを知つてならば、わたしは御面倒受けてなりとも、六三さんの所へ遣つてほしいのでござりますわいなア。

長右　それなれば猶の事、長兵衛が娘といふ事を云はず、矢ッ張りこの長右衛門がおきぬぢやと、世間へは云うて置いたがよいではないか。

きぬ　今にでも六三さんに逢うた時、ツイ一通りではないやうに、思はるゝやうなれど、と云うて仕様はなし、ほんにマア、難儀なものでござりますわいなア。

長右　ハテ、そりやァ一札を預かるせりふ。今云ふ通り、その時にどうでもなる事。マア〳〵、内も急がしいなれば、勝手元なと手傳うて下さりませ。

きぬ　アイ〳〵。ほんに、もう日も暮れ方、灯をつけませうわいなア。

ト時の鐘、合ひ方になり、おきぬ、暖簾口より行燈を出してともす。下の稲野谷より、おかや出て、門口を覗き

かせ　長右衛門さま、御用の間なら、ちよつとお話し申したい事がござりますが。

長右　ホウ。おかやさま、先程は何かとお世話に……マア、お入りなされませ。

かや　ハイ、お許しなされませ。

ト内へ入り

イヤモウ、昨今のあなたに、申しまするも如何にござりまするが、お話し申すは、内に居ります

娘おはんの事でございます。

トおきぬ、此うち行燈つけ

きぬ　ほんに、つッともう、勝手が知れませぬので、をかしいものではある。

トおかや、おきぬを見て

かや　これはしたり、わたしと致した事が、どなたやら、お客のございますに。

長右　アイヤ、これは私しが女房でございまする。

かや　エ。

長右　ハテ、昨日は取込んで、今日跡から引越しで來た女房でございます。それ、お近附きになつて、お頼み申したがよい。

トおきぬ、こなし。おかや、會釋して

かや　左樣かいなア。私しはお隣づからに居りまする後家暮らし。なにか、長右衞門さまの御厄介になりまする。どうぞこの上、お心安うなされて下さりませ。

きぬ　ハイ、私しもよんどころなう、今日參りまして、女房のやうになつて居りまする、不調法者でござりまする。よろしくお頼み申します。

かや　アイ〳〵、そりやモウお互ひにござりまする。お内様とあれば、何も御遠慮申す譯もなし、長右衞門さまには、最前もちよつとお話し申しました通り、妹娘は若宮小路の歴々の衆へ、縁附けて置きましたるところ、この四五日前、心惡いと申す事で、養生がてら、内へ逗留に參つて居りまする。若い娘の事、先の親御の手前も如何と、駕籠でなりと去んだがよいと申しますれば、ただ氣合ひが惡いによつて、堪忍してと泣いてばかり。いろ〳〵と尋ねましても、なんぼでも先様へ去ぬる事は嫌な樣子。これには段々入り譯のござりまする事。どうぞ娘が合點いたしまするやう、譯を仰しやつて下さりませ。お頼み申しに參じましてござりまする。

長右　まだ娘御には、お目にかゝりませぬが、其やうな事は、女子同士でなけりや遠慮もあり。コレ、おきぬ、貴樣、娘御に逢うて、合點のゆくやう、よう云うて聞かせて進ぜたがよい。

きぬ　わたしだというて、初々しい娘御さんに、どのやうな事を、どう云うてよいやら。

かや　イエ、又そこは女子同士で、打明けたお話しも出來やうかでござります。おきぬさま、お前、お頼み申します。

きぬ　どういふ事やら知らねど、わたしで大事ない事なら、お目にかゝつた上、母御樣のお氣の休むやう、兎も角も申しますでござりませうかいなア。

かや　それはお嬉しう存じます。ほんに、お前樣がお出でなされたで、わたしも仕合せでござりまする

長右　とつくりとお話しのうち、奥で帳合いたしませう。コレ、おきぬ、勝手が知れねば、與助でも寄越さうほどに、おかやさまへ御酒なと一つ。

かや　お構ひなされますな。何かと大きにお邪魔樣でござりませう。

長右　なんの、大事ござりませぬ。マア、ゆるりとお話しなされませ。ドレ、粪花でも入れさせませうか。

ト唄になり、帳面と、はんざう盥を持ち、暖簾口へ入る。かすめて通り神樂。この唄のうち、向うより金兵衞、小提灯を下げて出て來て、直ぐに本舞臺へ來る。

金兵　日が暮れては門並がわからぬ。……申し、稻野谷は、お隣でござりましたか。

ト　おかや、金兵衞を見て

かや　ヤ、お前は金兵衞さま。何と思うて。

金兵　オヽ、おかやどの、好い所で逢ひました。

ト内へ入り

これはハヤ、内が大分廣うなつたやうなが、それは儘にして、この金兵衞、わざ〳〵來たは、嫁

のおはんが事。爰には見えぬか、どこに居ますな。

かや　ア、申し、こりや隣の帯屋のお内。おはんが事について、お頼みに參つて居りますのでござります。

金兵　そんなら爰でも大事あるまい。わしもとつくりと云はにやァならない。

きぬ　おかやさま、あなたは、おはんさんの舅御さんかいな。

金兵　石部屋金兵衞といふ親仁でござる。

きぬ　モシ、左樣なら、御遠慮なう、お話しなされませ。

金兵　おかやどの、嫁のおはんは跡月から、氣合ひが惡いといふ事で、醫者にも見せたり、藥も服ませたれど、否ぢやと云うて、里へ去にたいと、下女が連れて戻つてからそれなり。氣に入らいで戻る氣なら、帶代のしるしに致した品、戻した上での談合。大枚の金になる品を、たつた七十兩で貰つてやつたも、年寄つて財産を悴に讓り、老を樂しみに暮らさう爲。それを其方の望みの品は取つて置き、おはんを内へ引込んで、また外へ嫁入りさすつもりであうう。おはんを戻すからは此方から遣つた帶代の代物、受取つて歸らにやならぬ。

かや　イヤモウ、不束な娘をあげまして、大切な品を下された事、此方からそんな不實な事いたしてよ

うござりませうか。娘も兎角心悪いやうに申しまするゆゑ、無理に薬なと服んだがよいと、私しは元より、この内方のお二人へも、お頼み申して居りますのでござります。

きぬ　母御様が、きつう心遣ひなされて、私しどもも共々に、おはんさまへ、その事云うてあげると申して居ましたわいなア。

金兵　ハテ、おはんさへ内へ戻れば仔細はない。サア、直ぐに連れて去にます。

かや　でも、今宵と申しても、やがて初夜過ぎ。明朝なりと、早う此方から。

金兵　イヤ〳〵、晝は出入りも目に立つて悪いぢや。いま一緒に連れて行きませう。

かや　そんならおきぬさま、今おはんを爰へ呼んで、とつくりと云ひ含めて下さりませ。

きぬ　そりやよいやうに云ひませうわいなア。

トおかや立つて門口へ出ようとする。通り神樂になり、向うより十右衛門、旅がけの拵らへにて、飛脚提灯をともし、出て来り、門口の外にて顔見合せ

かや　ヤ、十右衛門ぢやないか。

十右　オヽ、おかやさま、爰にござりましたか。

かや　イヤ、いま石部屋の金兵衛さまが見えて、爰にぢやわいの。

十右　ナニ、金兵衛どのがござりましたかえ。

ト内を見て

かや　丁度幸ひ……して、お前様は、どうして爰に。

お隣づからの内同然、お心安い御夫婦、それで金兵衛さまとのお話しも爰で

十右　併し、遠慮な儀も外に

きぬ　何も遠慮はなされますな。お隣づから、一つ内も同じ事。

ト云ひ〳〵十右衛門を見て

ヤ、お前は。

十右　おきぬではないか。どうして爰に。

きぬ　イエ、わたしはちつと樣子があつて、こちの内に。

かや　ムウ。十右衛門と、あのおきぬさまとは

十右　近附きの段か、私しが養子に致した六三郎の……ムウ、それに父

ト　あたりを見て、内へ入り

見れば帯屋の商人見世。阿母樣の御挨拶から、そんならこの帯屋の

かや　お内儀のおきぬさま、どういふ事で其方は

きぬ　ア丶申し、その譯も、ゆるりと後で。

十右　成る程、譯のありさうな事。マア、それは後の事、金兵衛どの、こなさんには大分こみ入つた、尋ねにやならぬ此方の云ひ分。

金兵　イヤ、其方より此方から。……併し貴樣の云ひ分とは。

十右　別の事でもござらぬが、いつぞやおはんどのを嫁入らしたとき、其方から帶代のしるしと、七十兩で賣つてくれた短刀の事。

金兵　それが何としました。

十右　江戸表へ持參したところ、寸尺は似寄りなれど、折紙ともに眞赤な似せ物。

かや　エ丶、何と云やる十右衞門、あの天國が、似せ物であつたかいなう。

ト驚ろく。おきぬも思ひ入れ。十右衞門、短刀を出し

十右　稻野谷の家歸參の種と、差上げたところ、似せ物を以てお屋敷を僞はりしとあつて、重ね〴〵のお咎め。元より毛頭覺えなければ、十右衞門が麁相と、申しなだめては歸りましたが、金兵衞どの、どういふ事で此やうな似せ物を渡し、此方に難儀をかけるには仔細があらう。何よりは正眞の天

國を、引替へて渡しやれ。
金兵 ハ、、、、天國の短刀に、異名を附けてお前の云ひ分。今になつて七十兩の金が欲しいのであらう。そりや今にでも戻さう。それなれば此方から遣つた、天國の短刀も戻してほしい。
十右 サア、この短刀がこの通りの
金兵 似せ物は何にせう。此方から遣つたは正眞の天國。
十右 ヤ。
金兵 娘おはんをもらふ時、折紙ともに慥かに受取つたというて、正銘の天國、今になつて又似せ物ともがりかけてもその手は食はぬ。いつの間にやら其方で摺りかへ、娘も引上げた上、なまくら物を突戻して、七十兩を只取らうといふ企み事。イヤ、さういふ恐ろしい奴等に、一家になつては居られぬ。もう娘ももらはぬ。サア、正眞の短刀を渡さぬか。
十右 イヤ、さうは云はさぬ。似せ物を渡したは其方の企み。七十兩の金を取り、おはんどのを嫁にした上、深い企みがあるのであらう。
金兵 ハテ、さう云うたとて、賣つてやつた天國、折紙ともに嘘か誠か、なんでその時持つて行つた。
十右 なんと。

金兵　二月三月も過ぎた上、得知れぬ鍋搔き同然な物をば、持つてうせてねだり事。年寄つても石部屋の金兵衛、只の親仁と思うてゐるか。サア、此方から渡した、天國を戻さぬか。

十右　イヤ、その受取つた天國が

金兵　似せぢやと吐かして云ひ張るなれば、代官所へ届けて、御詮議を願ふばかり。それとも此まゝに娘を寄越しさへすれば、これなりに濟ましてやる。それとも緣者のちなみを切るなら、此方から遣つた誠の短刀、受取らう。

十右　サア、その短刀は

金兵　無けりや矢ッ張り一家のちなみ、おはんを內へ連れて行かう。

十右　すりや、誠の短刀は、どうあつても

金兵　其方で摺りかへた代物、なんで知らうぞ。阿房云やるないの。

十右　ウム。

トきつとなるを、おかや隔て、

かや　イヤ、金兵衛さま、おはんはお前の嫁に上げました事、その緣切つてと申すのではござりませぬ十右衛門が今の話し、聞いて悔り。御存じの通り、夫はよしある御扶持人、只今親子が艱難も、

あの短刀を詮議して、家名が立てたいばつかりに、可哀さうにあのおはんを……イヤサ、可愛い娘の事ゆゑに、お前の御子息に娶合せたのぢやござりませぬか。すりや一家同士なり、お内方へござんした上なら、緣を結べば一家のちなみ。ハテ、他人ではなし、緣者なら、お前の云ひ條は立ちますでござんせうがの

金兵　知れた事、おはんを連れて去ねば、緣者ゆゑ何も云はぬが、アヽ、あの十右衛門の詞では、帶代に遣つた短刀を

きぬ　それもこれも、緣者同志なら、とつくりと談合づくになりさうな事。十右衛門さまも、おはんさまが、今までのやうに緣組んでなりや、何も云はぬとある金兵衛さま、そこの所を、おはんさんに合點さしてあつたら、ハテ、短刀とやらの事もとつくりと、間違ひやら誠やらが、知れる事もござりませうほどに、撚を戻しての事ぢやござりませぬかいな。

かや　成る程、それでは金兵衛さまの云ひ條も立つ。一家なれば物事も、血を血であらはに云はずとも又その上では、ナウ、十右衛門。

十右　成る程、阿母樣の御料簡、辛抱強い仰しやり分。短氣は損氣短刀の、詮議の日延でも限つてあれど、さういふ事なら、この上ともに、談合づくに致しませう。

金兵　ムウ、それなら此方も、立つた腹を横にして、直ぐにおはんを
かや　サア、お連れなされても大事なけれど、夜分と申し、氣合ひも惡う、髪形も見苦しうなる。身じまひなとさして、跡から直ぐに、お前にあげるとせうかいなア。
金兵　イヤ、年寄つては氣がいらちになる。早う連れて行かうかい。
きぬ　そんなら、ちやつとマア、おはんさんを、爰へ連れましてお出でなさんせぬか。
十右　おはんさまが、御病氣で戻つてくるのも、大概聞えてある事ながら、それでは濟まぬこの始末。とも〴〵私しも、マア合點のゆくやうに申しませう。
かや　そんなら其方行つて、娘にあらまし云うた上、どうなとして、おはんを
十右　私しが參つて、おこしまするでござりませう。
金兵　早うしてほしい。夜が短かい。

ト合ひ方になり、十右衛門は稲野谷の内へ入る。向うより若い者出て

若者　モシ〳〵、畑右衛門さまは内方にござりますか。會所から用があつて參りました。
畑右　オイ〳〵、爰にゐます。何の用ぢやの。

ト合ひ方になり、長右衛門も連れ立つて出て來り

長右　これはお構ひ申しませぬ。
畑右　イヤモウ、大きに長話しをしました。時に、會所からとは何の用。
若者　何の用か存じませぬが、急に呼んで來いとの事でござります。
畑右　せはしなう呼び立てゝ何事か。ちよつと行かずばなるまい。長右衛門どの、また後に。
若者　お早うお出でなされませ。
畑右、ヤレモウ、せはしない事ではある、
ト畑右衛門、若い者を連れて向うへ入る。
長右　オヽ、おかやさま、またお出でなされましたか。
かや　內同然に、お邪魔にござりませう。
長右　なんの、大事ござりませぬ事。
ト三人を見て
おきぬ、あのお人は。
きぬ　おかやさまの御一家、娘御さんの舅御、金兵衛さまとやら。
長右　ムウ、金兵衛どの。

金兵　年寄つてなれば、内方へ御挨拶もしませぬ。免さつしやりませ。

かや　長右衞門さまへも、先刻にちよつと申しました、娘が事についてのお話し合ひ。それで今おはんをも、爰へ呼びます筈に致しました。

長右　何かは存じませぬが、舅御がお出でなされての事。とも〳〵私しも、云うてよい事なら、口をきいてあげませう。おきぬ、貴樣もよいやうに。

きぬ　アイ、段々と入組んだ譯もあれば、マアおはんさんが心次第。來てゞあつたら、わたしも云ひませうわいなア。

かや　ほんにモウいろ〳〵と、お前方の御深切にござりまする。これは又、娘とした事が、何して居やる。埒の明かぬ。

ト門口の所へ來て

おはんや、大事ないほどに、ちやつとおぢやいの。

ト隣の内にて

はん　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、おはん、やつし振り袖、駒下駄にて出る。おかや、門口へ出て

かや　これはしたり、母が惡いやうにはせぬほどに、マア、ちやつと此方へおぢや。內方の御夫婦も、お心安う仰しやつてなれば、お近附きになつてとつくりと、わが身も、斯うあゝといふ事を、お賴み申して、又その上での事。マア、恥かしい事はないほどに、ちやつとおぢや。

ト無理に手を引いて內へ入る。おはん、恥かしさうにて袖にて顏を隱し居る。おきぬ、こなしあつて

きぬ　母御樣が、いろ〳〵とのお心遣ひ。殊にアレ、舅御さんもわざ〳〵と、お前を欲しいと云うて來てなれば、マア一旦は元のやうに、嫁入りしてもらはにやなるまいぞえ。ほんにモウ、初めて逢うて此やうな事を云ふも、ソレ、いま十右衞門さまにも、あらましは聞きなさんしたであらう。マア、とつくりと思案して見なんせ。ナア、おかやさま。

かや　左樣でござります。私しも年寄つて一人の娘、どうぞ末々の力にもと存じまする。それも、お聞きなされまする通りの譯。コレ、おはん、いつぞや婚禮の時にも、云ひ含めたぢやないか。何事もわしが爲、二つには死ゆかれた連合ひの未來の迷ひ。こりや云はいでも合點してゐやう。なんぢやあらうと、ま一度あの金兵衞さまの方へ戻つてたも。母が其方へ賴みぢやわいの。

ト此うち始終おはん、俯向いて泣いてゐる。

長右　おかやさまの仰しやるは、御尤もでござりまする。娘御の心にもあり、また母親樣へ直には云ひ

憎いとかいふ譯もあるもの。他人で結局埓の明く話しもあり。ナウ、おきぬ、さうぢやアないか。

きぬ　さうでござんすとも。わたしら二人に心置かずと、打明けて云はしやんすがようござんす。これはしたり、何も恥かしい事はないほどに、マア〳〵、長右衛門どのゝ側へ來て、とつくりとお前の胸の内を云うて、その上で、ナア申し。

ト云ひ〳〵、おはんの手を取つて長右衛門の側へ連れてくる。

長右　それ〳〵、何事も母御の氣休め。先へ行つて居馴染むと、又まんざら妹より聟なり、舅御も大抵喜びではない。

ト此うちおはん、思はず長右衛門を見て、

はん　ヤ、お前は。

ト長右衛門も、おはんを見て

長右　ヤアヽ。

ト惘り、持つたる十露盤で金兵衛の頭をくらはす。

金兵　アイタヽヽヽヽ。

はん　ほんに思ひがけない。

長右　アイヤ、思ひがけない事もあらうが、何にも云はずと、舅御の手前。ナ、ハテ、爰で云うては惡いほどに、マア〳〵、ヂツと默つて、元の所へ、嫁入りするやうにしたがよいではあるまいか。

トいろ〳〵呑み込ませる。おはん、長右衛門を見て、否ぢやと頭を振つて俯向く。金兵衛、頭を抱へながら

金兵　御亭主の悔りで、おれが頭に瘤が出來、その上おはんが頭を振るは、そんなら矢ッ張り

長右　アイヤ、娘御は得心のゆくやうに、長右衛門が又、とつくりと云ひ聞かせませう。

金兵　無理往生にしつけても、當人が不得心では氣まづい緣組み。もう此方から變替へぢや。

かや　ア丶申し、それでは短刀の行き道も

金兵　十右衛門に逢うて、一度せりふせう。爰は帶屋の内。おかやどの、こなたの内へ。

かや　でもマア娘にとつくりと

金兵　ハテ、いつまで云うても埒明かぬ。手短かに白い黒いを分けるのぢや。

きぬ　それなれば、捨て丶置かれぬ十右衛門さまの難儀。わたしも共々聞いての上。

かや　マアその間長右衛門さま、おはんが得心いたしますやう

長右　サア、云ひ含めて置きませう。

金兵　サア、おかやどの、内へござれ。

かや　長右衛門さま、よろしうお頼み申しまする。

ト唄になり、おかや、金兵衛と一緒に、おきぬも附いて下の稲野谷へ入る。長右衛門立つて、門口を締める。合ひ方。おはん、顔を上げ、あたりを見廻し

はん　逢ひたかつたわいなア。

長右　ア丶コレ、聲が高い。マア、靜かに云や。

はん　いつぞやお前に逢うた時から、又の逢ふ瀬と思うても、お名も知れねば明暮れに、只その時の事ばかり、云ふに云はれぬ切なさゆゑ、病氣というて、人にも逢はず居りましたが、知らぬ事とて、ほんにマア、よう顔見せておくれなされましたなア。

長右　イヤモ、石部屋での事は、おくびにも出されぬおれが身の上。殊に今はこの通り、帶屋の長右衛門、其方と譯があるの何のと、これ程でも人が知つたら、互ひの大事。その時は兎もあれ、もう商人になつて居るおれを、兎や角思つても、その身の爲にはならぬほどに、矢ッ張りマア、嫁入りしてゐたがよからう。

はん　イエ／＼、わたしやどうあつても、内へ戻る事は否でござりまするわいなア。お前がどのやうに怖

いお方であらうとも、一旦斯うと思つた上は、もう〳〵なんぼでも。外へ去ぬる氣はござりませぬわいなア。

長右 ぢやというて、よう物をつもつても見たがよい。母御にも請合つて、共に意見せうと云うたおれが、まだマア年もゆかぬ小娘と、斯うした譯でと云はれうか。それから事の破れ。此方の身は兎も角も、其方はまだマア

ト十露盤を取上げ、ちよつと置いて

コレ。十四やそこらのと、おれとは、年もこれ程の違ひ。マア、よう合點して見たがよい。

トこの時フッと落ちてある短刀の袋と、白鞘を見て思ひ入れ。この時、稻野谷より金兵衛出て來り。内を窺ふ。長右衛門、とつくりと刀袋を見て

ムウ。この短刀は白鞘ながら、覺えのある寸尺。袋の模樣、慥かに天國。

トちよつと見て

中は似つかぬなまくら物。そんなら矢ツ張りいつぞやの

ト云はうとして思ひ入れ。門の金兵衛、これを聞いて思ひ入れ。

イヤ、いつぞやの事は、あれぎりぢやと思うて、さつぱり思ひ切つたがよい。ハテマア、近い譬

へに云ふ風の前の灯し火、油が盡くれば、ナ、暗い身の上、その危ふいおれが事を思はずとも、心を持ち直して元のやうに、ハテ、一旦内へ戻つたその上では、いつぞやのやうに、何時でも入つて、盗み出した上で、どこでなりと女房に持つ、これなりには仕憎いほどに、よう合點して見たがよい。

ト此うち金兵衛、とつくりと立聞きして、雪駄を脱ぎ、こそ〳〵と花道へ行き、一散に走り入る。おはん、始終俯向いて默つて居る。

これはしたり、今また母御やおきぬが來ては困るほどに、マア、おれが云ふ通りに

ト背中を撫で

これサおはん、癪でも起つたか……どうしたのぢや。

ト背中を撫で、腹帶の端を手に觸り

おはん。

はん　これぢやによつてな。

長右　腹帶か。

はん　アイ。

ト思ひ入れ。長右衛門悄りして

長右　アノたつた……ムウ。

ト思ひ入れ。通り神樂になり、向うより甚八先に傳兵衛勘八。跡より勘藏、吳服屋手代の形にて、各自提灯を持ち、若い者二人を連れ、出て來り、直ぐに本舞臺へ來て

甚八　長右衛門どのは内にか。ちよつと逢ひたい。

皆々　明けて下さりませ〳〵。

トこれにて悄りしておはん、上の方へ離れてゐる。長右衛門、返事しながら

長右　ハイ〳〵。明けて進ぜませう。

ト門口を明ける。皆々中へ入る。

オヽ、こりや疊屋の甚八どの、職人衆に問屋のお手代。夜に入つて何の御用。

甚八　何の用とは外でもないが、この間中の仕事の手間賃。

皆々　わしらが請合うた左官手傳ひ。

勘藏　問屋の仕切り勘定合ひに、受取つた金の事で

皆々　わざ〳〵來ましたわいの。

長右　手間賃が不足なら、今にでも勘定しませう。また問屋の勘藏さまも、その事でござりまするか。

勘藏　イヤ、金に不足はござらぬが、あの親方の云はれますには、新見世の帶屋から受取つた金、早う行つて取替へて來いとの事。

甚八　わしが取つたこの小判、建具屋へ持たせてやつたところが、譯があるとやらで、呉服屋樣の云はつしやる通り。

傳兵　職人仲間でもその通り、この金は受取られぬ、早う戻して來いと、云ひ立つての催促。

勘八　早う受取つて下さりませ。

長右　そんなら、わしが方から拂ひにやつた金が

甚八　三ッ星の極印とやらがあつて、お觸れのあつた金との事。

長右　ヤ。

ト思ひ入れ。

勘藏　今出川のお屋敷の金、持つてゐるのは係り合ひとあるゆゑ、なんであらうと受取つた上。

甚八　金が無くば、今まで拵らへた疊建具。

傳兵　手間は損にして、雜作の木柱は持つて行かねば、此方が迷惑でござる。

ト皆々懐より金を出し

皆々　サア〳〵、早く金を受取つて、何もかも戻してもらひませう。

長右　ムウ。すりや、その金が三ツ星の極印。ムウ。

ト思ひ入れ。皆々「さては」と思ひ入れあつて

勘藏　こりやア親方の云ひ附けた通り、送つた代物を擔げて行くがよい。慥かこの物置にあるであらう

三人　マア、勝手向きから持ち出しての事。

勘藏　男ども、サア來い〳〵。

ト正面の納戸口へ入る。長右衞門ヂツト思ひ入れ。おはん、最前より聞いてゐて

はん　長右衞門さん、そんならお前の身の上が

長右　石部屋の金から事の破れ。こりや、この身の大事。

はん　どうしたらよからうぞいなア。

長右　どうというたら、遁がれぬ天命。

はん　エヽ。

長右　さうぢや。

ト思ひ入れあつて、簞笥の抽斗より小脇差を出して腰に差し、行かうとする。

はんアヽ、これいな、血相かへて、お前はどこへ。

長右　所詮遁れぬ天の網、代官所へ名乘つて出れば、この身一人、其方の身に構ひはない。

はん　これいなア、わたしぢやとて斯ういふ身の上。お前に別れて、なんとマア。

長右　そんなら其方も

はん　所詮長らへゐられぬと覺悟して、疾から爰にこの書置。

ト懷より書置を出す

長右　覺悟極めた上からは、この長右衞門も、おかやどのへの云ひ譯に。

ト掛け硯にて、さら〳〵と書置を認め、一つにして卷く。この時、向うに人聲するゆゑ、思ひ入れあつて、右の書置を短刀の袋に入れ、白鞘と一つに掛け硯へ載せ、よき所に置き、もしと染めたる手拭をかむり、門口の外へ出る。向うより畑右衞門、行事の弓張を持ち出て來る。長右衞門は、おはんを連れて向うへ行きかけ、人影するゆゑ思ひ入れあつて戻り、下の方の用水桶の脇へ忍ぶ。畑右衞門は本舞臺へ來て、門口へ入り

畑右　長右衞門どの〳〵……內を明けて、どこへ行つたやら。

ト あちこち尋れる。この時、稻野谷の内より、おかや十右衞門おきぬ、出て來り

かや 定めておはんを金兵衞どのが、無理に連れてぢやあるまいか。

十右 マア、樣子をお聞きなされませ。

ト出合ひ頭に畑右衞門、皆々を見て

畑右 こなたはおかやどの、十右衞門どのもいつの間に

十右 私しは先刻戻りまして、只今まで

畑右 コレ〳〵、おかやどの、長右衞門はどこへ行つた。

かや コレ、十右衞門、おはんは爰に居やつたぢやないか。

畑右 コレ〳〵、おかやどの〳〵、大事な話しがある。爰の内の長右衞門は、新藤德次郞といふ泥坊だ

といふ事。

皆々 エヽ。

ト悄り。

畑右 サア、わしもろく〳〵身許は知らぬが、實銘な人だによつて、よもやそんな事はあるまいと思ふ

が、代官所から嚴しい詮議、云ひ譯の筋もあるか、また人違ひならば、どこまでも云ひ張つてやら

うと、駈けぬけて來たが、マア、どこへ行つた事だ。

トいろ〳〵詫れる。

十右 ムウ。噂に聞いた徳次郎が長右衛門なら、その手下で紛失の短刀も、こりや詮議して見にやならぬわえ。

きぬ 父さんが、わたしを連れての氣振りといひ、先刻の挨拶。もしや長右衛門さまが、その徳次郎ならば

畑右 この間、甘縄の石部屋へ押込みが入つて、今出川の金を持出した上、嫁入りした娘を弄み物にして行つたといふ事。

かや エヽ、そんならアノ、石部屋へ嫁入りの晩に

畑右 何もかも引ッ浚ひ、同類もたんとある、大泥坊だといふ噂。

十右 すりや、石部屋にあつた品は残らず

かや 持つて行つた盗人が、長右衛門どのなりや、道理で先刻に娘の悔り。

十右 身の上知れたとこの内を、逃げてうせた徳次郎。

きぬ あのおはんさんと、譯があつたのかいなア。

かや　こりやマア、どうしたらよからうぞいなァ。

トいろ／＼あつて、掛け硯の上の袋入りの短刀を見附けて取上げ

さうぢや。南無阿彌

ト死なうとする。十右衞門とめて

十右　こりや阿母樣、何ゆゑに。

かや　なんでとは一人の娘、町人の嫁にするさへあるに、盗賊騙りの徳次郎と、枕かはしたあのおはんみんなこの母が仕業。未來の夫へなに云ひ譯。わしや面目ない。それぢやによつて

ト死なうとするを又とめて

十右　ハテ、それも短刀の詮議から。マア／＼、お待ちなされませ。

きぬ　母御樣はともあれ、わたしこそ、夫のある身で、長右衞門といふ商人ぢやと思うて、女房ぢやと云うてゐたれば、寐臥しはせいでも十右衞門さまへ、今更面目なうござりまするわいなァ。

十右　ハテ、其方の身に曇りのないは知れてある。この十右衞門が雪いでやる。只この上は江戸表へ引ツ返し、何事もこの十右衞門が引受けて、短刀の在所知れるまでは、善惡ともにこの身にかぶるが古主へ忠節。金も少しは貯へあれば、これ持つて身の片附き。

きぬ　すりや、わたしが身の上は

十右　六三郎に逢うた上、一部伍什をとつくりと。マアそれよりは、おはんさまの身の上。

かや　どうぞ仕樣はない事かいなう。

ト刀袋の書置を見て

ヤヽ、何やら爰に。

ト十右衞門取つて

十右「書置きの事。」

畑右　ドレ〳〵、早く見さつしやれ。

ト提灯を差出す。

十右　ムウ。身の上知れた上からは、覺悟して六浦の川へ、身を沈めるといふこの書置。

きぬ　おはんさまも身の云ひ譯に、かねて覺悟の一つの書置。

十右　マア、何にしろ六浦の川へ

きぬ　ちつとも早う、おかやさま。

畑右　サア、跡追うて早く一緒に。

ト立ちかゝる。通り神樂になり、向うより金兵衞先に捕り手大勢、十手を持ち、バタ〳〵にて出て來て、直ぐに本舞臺へ來て、門口より

捕手 ソレ、踏んごめ。

ト早太鼓のやうなる通り神樂にて、皆々バラ〳〵とこみ入る。これに構はず、おかや先におきぬ、畑右衞門も、うろたへ、提灯を持ち、門口へ出ると、奥より勘藏甚八傳兵衞勘八出で來り

皆々 長右衞門は隨德寺か。跡追ッかけろ。

ト各自尻からげ、棒など持つて追ひかける。此うち甚八、足許に落ちてある短刀を見附け、拾つて腰に差し、このドサクサに皆々門口へ出る。

かや おはんヤアイ。

十畑 長右衞門ヤアイ。

ト呼びながら、勘藏等は東の花道へ、おかや等は本花道へ入る。十右衞門も跡より身拵へして行かうとする。この時、金兵衞、ツカ〳〵と出て

金兵 十右衞門、われにやア係り合ひがある。やる事はならぬ。

ト引きとめるを振り切るはずみに、行燈を打ちこはす。これより忍び三重、時の鐘、兩人探り合ひ

此うち川水柳の蔭より長右衛門おはん、手拭をかむり、さし足にて花道まで行く。十右衛門、窺ひ寄つて、

十右　慥かにおはん長右衛門。

金兵　それ逃がしては、

ト十右衛門を捕へる立廻り。此うち長右衛門おはんは向うへ入る。この途端に捕り手、バラ〳〵と出て十右衛門を取卷き、

捕手　動くな。

トかゝるを投げのけ、門口へ出る。金兵衛、續いて出ようとするを、暗がりにて捕り手、十右衛門と思ひ、金兵衛を取つて押へ、

捕つた。

ト十手にて矢庭にくらはす。金兵衛、恟りして門口へ出て、戸をシヤンと締める。木の頭。曲撥になり、捕り手皆々、金兵衛を窺ふ。よろしく拍子幕引附ける、通り神樂にてツナギ。引返し。

幕

本舞臺、三間の間、一面の淺黄幕、所々に藪疊、上の方に一里塚、開帳札。下の方に稻村、柳の立ち樹、枝しげり、すべて金澤鎌倉街道の體。時の鐘にて幕明く。

ト矢張り時の鐘、通り神樂にて、向うより勘藏、甚八、傳兵衞、勘八、前幕の形にて、弓張り提灯を持つて出て來り

勘藏　なんと、あの長右衞門といふ奴は、顔に似合はぬ太い奴ではござらぬか。

甚八　泥坊とは夢にも知らず、金を取引したからは、面々の身の上。

勘藏　損得かけて、尋ね歩かにゃなりませぬ。

傳兵　江戸の方へ逃げたか、但し、上方の方へ走つたか。

勘八　但し、娘と、心中なぞに出かけはせぬか。

甚八　なんでも手分けをして、探すがようござる。

ト時の鐘になり、皆々下座へ入ると、向うより長兵衞、前幕の形にて出て來り

長兵　今夜のうちに神奈川まで、ぼッつけようと思つたが、大分夜が更けた。併し、洲崎の漁師町から白魚船を借りて、夜のうちに漕ぎつけよう。それがいゝ〳〵。

トこの時、下座にて人音するゆゑ、ちよつと思ひ入れあつて小隱れする。下座より甚八、前幕に取り

たる短刀を持つて出て

甚八　帶屋の内で拾つて來たこの脇差、月影によく〳〵見れば、袋といひ、白鞘もの。こりやアてツきり噂の、天國とやらではあるまいか。

トこれを聞いて長兵衞窺ふ。

それなれば、どこぞへやつて金儲け。よし〳〵。

ト思ひ入れ。長兵衞、後よりこれを引つたくり、「それを」と寄るを、手拭にてぐつと締め殺し

長兵　帶屋の内から持つて來た脇差、天國であらうと吐かしたからは、打ツちやつては置かれぬこの代物。どうした事で此奴が

トこの時、向うにて

畑右　おはんやアい。長右衞門やアい。

長兵　あの人聲は。

ト短刀を透かし見て

エヽ、暗い晩だわえ。

ト時の鐘になり、下座へ入ると、向うより畑右衞門、若い者を連れ、呼びながら出て來り、直ぐに本

舞臺へ來て

畑右　アヽ、これは又ひよんな事ではある。併し、もう何時であらう。

若者　モシ、忘れた事がござります。宵に會所から廻りましたこのお觸れ書。お渡し申しまする。

ト觸れ書を渡す。

畑右　そりやァ矢ッ張り盗賊の詮議であらう。

ト開く。若い者、提灯を差出す。畑右衞門、ちよつと下に居て

「淨瑠璃名題、帶文雪空解、淨瑠璃太夫、淸元延壽太夫、ワキ淸元巳三次郎、同く宮路太夫、三味線、淸澤萬吉、上調子、淸元安次、相勤めまする役人、岩井粂三郎、尾上菊五郎、右の役人罷り出で相勤めまする」……こりやァおはん長右衞門の道行。アヽ、これがほんの事にならにやアよいが……おはんやアい。長右衞門やアい。

ト時の鐘、通り神樂にて、呼びながら下座へ入る。下の藪蔭より勘藏、頰かむりにて、弓張りを袖に隱して出て來り、あたりを見廻し、花道の附け際の所にて、弓張りのしるしを揚げ幕の方へ向け、合圖の心でとつくりと見せ、フッと吹き消す。時の鐘、合ひ方にて、向うより捕り手四人、いづれも黑の形にて出て、弓張りを消してこれを捨て、靜かに皆々本舞臺へ來り

捕手　合圖の知らせは。

勘藏　コレ。

　　　ト押へて、あたり見廻し

呉服屋の下男になつて、とつくりと探り當てた長右衛門が身の上。慥かに新藤徳次郎、娘を連れて駈落ちしたからは、慥かにこの道、御油斷なされまするな。

四人　すりや、双方へ忍び別れて

勘藏　ちつとも早う

四人　合點だ。

　　ト時の鐘になり、この人數皆々下座へ入ると、正面の淺黄幕を切つて落す。これと一時に、上手の張り物打返すと、太夫座になる。

本舞臺、一面の蘆原、東西、柳の立ち樹、吊り枝。立ち樹の側に、六浦川金澤道と書きたる傍示杭。正面蘆原、この向う打寄せ浪手摺り、奥深くして黑幕を張り、上の方太夫座に清元連中居並び、すべて六浦川磯端夜更けの模樣、時の鐘にて右の道具納まる。

ト直ぐに浄瑠璃。

〽朧なる、月も隠れて暗き身に、霽れぬ思ひの春雨や、或る夜ひそかに二人連れ。

ト時の鐘、浪の音にて、正面の蘆原を押分け、長右衛門、頬かむり一本差し。おはんの手を引き、ソツと出る。蛙の聲、忍び三重、くらがりの模様。この時、上の方より勘藏、縫ひぐるみの棒を持ち、窺ひ出て、兩人を見て、心を附ける思ひ入れ。長右衛門、おはんを連れて行かうとする後より

勘藏 見附けた。うぬらを

ト長右衛門を捕へにかゝるを、振り切り、ちよつとしたる立廻りにて、見事に投げのける。勘藏、起上がつておはんを捕へる。おはん、驚くはずみに、長右衛門の脊中のところへ寄り添ふ。長右衛門、勘藏を投げる。勘藏、後の蘆原へ中返りして飛びこむ。おはん、恟りするを長右衛門、手早くしやんと脊に負ふ。チヨンとキツカケにて、空へ朧月出る。一時に後の黒幕切つて落す。神奈川沖を遠く見せ、白魚船の篝見える。よき程にコンと本釣り鐘。

〽おはんを脊に長右衛門、浮名流るゝ川浪は、六浦の浪に風さそふ、柳生の糸のむすぼれし帶屋も跡になる鐘は、九つ爰へ遠ざかる、町を離れて濱傳ひ、野島を過ぎてやう／＼と、脊を下ろしてとり／＼に、姿つくらふ心根は、まだ娘氣の跡や先、白魚の灯の水や空、空やか

すかに三崎浦、憂きの中にも數々の、ほんに思へばきのふけふ、あのお屋敷の仕附け方、女今川庭訓を、書いて覺えし筆のあや、お伽勤めの折々に、芝居ばなしを菊五郎、その役者繪に思はずも、ふつとお前に新まくら、かはして堅い石部屋の、內外の手前氣がねして、それと云はれぬ養生に、乳母や子供の春遊び、氣を紛らして双六の、お伊勢參りや道中の、仇口口の小室節〽坂は照る〳〵鈴鹿は曇る、合ひの土山雨が降るナアエ、おじやれ女の一夜さも、思ひくらべて猶更に、心もくれて行きなやむ。

長右　コレ、おはん、道々も云ふ通り、この長右衞門はお尋ね者ゆゑ、先々が劍の中、所詮遁れぬこの身の上。連れて退いては二親の、恨み重なるこの身の罪科。兎角其方は長らへて、我が亡き後を弔うてくれろが、この上の事、思ひ直して、爰から早う戻つてくりや。

トおはん、頭を振る。

アノ、これ程に云うても。

はん　アイ。

長右　ア、思へば深い惡緣ぢやなァ。

〽おはん涙の露ちりほども、お前の無理ぢやあるまいけれど、わたしやいやいな、そんなそ

のよな胴慾な、年もゆかいで恥かしい、人にもなんと岩田帶、殿御を先へ長らへて、身二つになり大膽な、いたづら者ぢや惡性な、不心中なと人さんが、笑はんしても大事ないが、そりや可愛いのぢやない憎いのぢや、お前に別れその後が、氣で氣を病んで辛抱も、辛さ戀しさ心では、妙見樣や堀の内、お祖師さんへの願籠めも、罰があたろとなんのその、不孝の罪と世の人が、譏りもかまやせぬわいな、もう斯うなつた上からは、遠慮情は先の世で、緣を結ぶの神さんも、よもや粗相ぢやあるまいし、定まり事と諦めて、一緒に死んで下さんせと、戀を立てぬく娘氣の、思ひ詰めてはやるせなき 〽さほどに思ひ詰めし身の、命の瀬戸や金澤の、かねて覺悟もみつ潮に、汀に夜の鶴ならで。

皆々　娘やアい。おはんやアい。

〽娘々と呼ぶ聲に、見附けられじと足許の、石を袂に糸と針。

トこの文句のうちおはん、上着を脫いで、下の柳の枝にかけ

〽くゝり附けたる繻子の帶、ついしやら解けの春の雪、明日の噂となりぬらん。

ト、チヨンと知らせあつて、淨瑠璃臺を隱すと、捕り手四人、バラ〳〵と出て

捕人　ヤア、お尋ね者の德次郞、繩打つて引ッ立てる。

トかゝる。立廻りに長右衛門、四人を一人々々に烈しく投げのける。トヾ危ふくなる時、懐より小判の包みを出し、バラ／＼と蒔く。捕り手、うろたへてこれを奪ひ合ひ、拾ふ。此うち兩人思ひ入れ。

はん　長右衛門さん。

長右　覺悟はよいか。

はん　南無。

ト上の方の切り穴へ飛びこむ。徳次郎、行かうとして、捕り手かゝるゆゑ、ポン／＼と投げのけ、また小判を蒔く。

捕手　ヤア〳〵。

ト惘り。その間に長右衛門も、同じく切り穴へ飛び込む。よろしく、ひやうし　幕

幕引附けると、浪の音になり、舞臺前、雨落ちの所へ長右衛門、ひた濡れの心にて這ひ上がり、衣類を絞る。この時、雨車やんで、本釣り鐘にて、日覆へ月出る。向うより、やみ市、按摩にて、笛を吹きながら出てくる。長右衛門と花道にて行きあたり、惘りする。長右衛門、やみ市を捕へ、立廻りに衣類を引剝ぎ、手早く着替へ、やみ市をポンと幕の内へ投げ込み、笛を吹く。また本釣り鐘、誂らへの合

ひ方にて、向うへ入ろ。跡シャギリ。

第一番目大詰

鳴立澤對面の場

役名――工藤左衛門祐經。近江小藤太成家。山崎小文次。箱根の兒、閉坊。奥女中、宇佐美。小林の朝比奈。女小姓、糸遊。手越の少將 實ハ頼朝の息女大姫。八幡三郎行氏。化粧坂の少將 實ハ工藤の息女犬姫。曾我五郎時致。

本舞臺、三間の間、向う誂らへの亭屋體、茅葺き、綺麗なる障子たてきり、中足緣側つき、左右ともに槇の生垣、蜘蛛手の手水鉢。舞臺前の流れに山吹の早咲き。好みの枝折り門、冬木の茂り。すべて鳴立澤の草庵、祐經隱れ家の體。爰に十府の菅菰を敷き、誂らへの臺の上に宇佐美、在所女房。糸遊在所娘、木綿振り袖、誂らへの形へ前垂れ、手拭をかむり、砧にかけたる白布を打つてゐる。行氏、好のみやつし百姓の拵らへ、淺黄の股引、鉢巻きにて、立ち臼にて白布を手杵を持つて搗いてゐる見得。チリ／＼の合ひ方へ、通り神樂を打込みたる鳴り物にて幕明く。

ト三人よろしくあつて

行氏　ヤレ〳〵、しんどや〳〵、さぞお前方も勞れさんしたであらう。サア〳〵、庭へ下りて、煙草にさんせ、煙草にさんせ。

糸遊　お前がさう云うて下さんすを、有やうは待つて居たわいなア。

宇佐　わたしもいかう肩が痛うなつて來やんしたが、さぞマアこなさんも、お手に豆が、九つか十は出來たでござんせう。

糸遊　イエ〳〵、わたしよりお前が、さぞ草臥れたでござんせうぞえ。

ト云ひながら、庭下駄を穿き、兩人、臺より下りてくる。

行氏　サア〳〵、爰へ來て、一服吸はんせ〳〵……時に、聞かんしたであらうが、あの曾我の御惣領祐成どのが、何やら不義がましい事で、お預けの身分と聞きましたが、ハテサテ、氣の毒な事ぢやござりませぬかいの。

宇佐　さうおやといな。京都へ御緣談の極まりし、大姫さまと不義の取り沙汰、それぢやによつて祐成さまは、扇ケ谷のお屋敷へお預け。お姫樣は、お行くへが知れぬとの事でござんす。

糸遊　してマア、わたしらが、此やうな賤の姿になつて居るは、どういふ譯でござんすざいなア。

宇佐　これはしたり、その譯こなた聞かんせぬか。殿様祐經さまは、まだ御病後の御保養の爲、或ひは駿河の井手の里、又は六浦の金澤へ、お氣に入つた場所を見立てゝ、出養生をなさるのぢやわいなう。

行氏　されば、その出養生は聞えたが、なんで又あのやうに、お側へ呼んで置かつしやる、二人の遊君どちらが正眞の少將でござらうの。

宇佐　お前は何を云はしやんす。一人の女中は化粧坂、また一人のが手越の廓の、少將さんといふ女郎さんぢやわいなア。

行氏　アヽ、それで解りました。併し、こちの旦那が御病氣、御全快あるやうにと、あそこや爰の名所を尋ねてこの養生。この間は、この鴫立澤に、珍らしい山吹の早咲き、それを見物なされうと、俄のお出で。そこでわしの思ひつき、六玉川といふ琴唄を、慰みに折々の樂しみ、御近習のわしらまで、百姓の形で勤めいと、この通りに布を搗いたり、晒したり、仕附けもせぬ事でホッとしました。

宇佐　さいなア。そりやお前ばかりぢやござんせぬ。奥勤めのわたしらまで、砧打つのは津の國の玉川げな……「松風の、音だに秋は淋しきに、衣打つなり玉川の里」といふ、歌の心を此やうに、賤

の姿に仕立てたものぢやわいなア。

行氏　ハテ、こなさんは、きつい物知りぢやわいの。そんならわしにも同じやうに、布を搗けとのお指圖は、こりや大方、武藏の玉川といふやうな事と見えるわいの。

宇佐　大方そこらでござんせう。「調布や、晒す垣根の朝露に、つらぬきとめぬ玉川の里」といふ古歌もあるわいなア。

行氏　アヽ、そんならお前方は津の國。わしは布搗き、武藏の玉川。アヽコレ、山吹から出た井手の里、殘りの三ヶ所は、どこであらうな。

宇佐　ハテ、殘りは近江の萩の玉川。

糸遊　千鳥の陸奥、高野の玉川。

宇佐　これを合せて三ヶ所ぢやわいなア。

行氏　その殘つた三ヶ所は、大方旦那があの琴唄で、間に合はさんすと見えるわいの。

ト三人打寄り、煙草のみ、捨ぜりふになる。てんつゝになり、禪のツトメにて、向うより小藤太成家縞の錣頭巾、やつし袖無し羽織、上帶、誂らへの裁附けを穿き、杣の形にて、斧の先へ名酒の樽を附け、簑笠と一緒にして擔ぎ出て來り、門口へ來て

小藤　オヽ、こりや皆精が出まするの。ヤレ〳〵、草臥れた〳〵。

ト内へ入る。

行氏　ヤ、來さんしたか。まだ山は雪がごんせうの。

小藤　イヤモウ、名におふ相模の木曾山から、西北の山根まはり、薪を取りに歩いたが、どの山も〳〵殘んの雪……イヤ、雪といへば、爰へ來る道の町に、銘酒屋の見世開き。コレ〳〵

ト樽を出し、

卯の花銘酒とあるゆゑに、幸ひ旦那にお土産にと、買うて來ましたが、なんと氣が附いたであらうがの。

行氏　そりやよう氣が附きました。取分け旦那は、この鴫立澤へござつてから、めつきりと御全快の樣子。卯の花銘酒とは、それも矢ツ張り津の國の、玉川に寄せた銘酒。こりやお喜びであらうわいの。

小藤　サア、有やうは、わしもさう思うたゆゑ、買つて來たのぢや。垣根に咲ける卯の花は、卯月の盛り。なんぼ春でもこの山吹、まだ雪も降る頃から開くといふは

行氏　アイヤ、珍らしい事でもない。いつぞや山城井手の里に、時を違へて山吹の盛り。尤もその時は

俊成卿の御祕藏ありし、春筐といふ名笛を、井手のほとりに埋め給ふ、その珍事かと世上の取り沙汰。

ト小藤太思ひ入れあつて

小藤　ヤ、すりや、その時の山吹の珍事、世にいふ春筐の笛の奇特で

行氏　おいなう。

ト目を附ける。小藤太「さては」トこなし。

小藤　ハテサテ。そりやァ不思議な事もあるものだの。

宇佐　サア、さらばこれから奥へ參つて、遊君の少將さんを相手にして、在所めいたる侘びた仕事も、旦那樣へのそれも一興。こなさんは、その砧を持つてござんせ。

糸遊　合點ぢやわいなア。

行氏　わしらもしけこみ、御酒なと頂戴。サ、おぬしも一緒に。

小藤　布子着替へて、後から御前へ。

行氏　これはしたり。旦那も侘びた住居がお好き。矢ッ張り其まゝ。

小藤　でも、あんまりなこの姿。着替へておッつけ

宇佐　後から來なさんせえ。

行氏　待つてゐるぞや。

ト唄、念佛太鼓になり、行氏、宇佐美、小藤太が持ち來りし器の酒に目を附け、糸遊は砧の道具を持つて奥へ入る。小藤太殘る。あと合ひ方、思ひ入れあつて

小藤　すりや、先達て山城の、井手の山吹、時を違へし早咲きも、名笛埋めし徳なりと、彼れまで存じの上からは、もうこの所に埋め置く事も、危ない〳〵。

ト あたり見廻し、門口へ出て、小石を摑んで向うへ礫に打つ。時の鐘、太鼓、樂になり、向うより前幕の閉坊丸、毒の入つたる小さき箱を持ち、ツカ〳〵と走り出で　花道にて跡先を窺ひ〳〵、よき所へ來て

閉坊　小藤太さま。

小藤　閉坊丸、合圖を違へず。

閉坊　知らせの礫は、定めし火急の

小藤　用事といふは外ならず、山吹の根に埋め置く、春筐のあの名笛。正しく主人が覺りし樣子。さすれば爰に隱してはモウ置かれぬ。

閉坊　すりや、名笛を掘り出して、持ち行く先はナ

小藤　範頼公の山御殿、天城の館へ、これより直ぐに。

閉坊　心得ました。殊更お頼みなされたる、紀の國高野の深山に、生ずるところの砒霜石、佛法の靈地なれど、この毒石の生ずる山中、即ちこの毒石につもりし雪霜、解けて落ちるは高野の玉川。さてこそ世の人、高野の奥の玉川に、毒水ありと云ひ觸らす、その砒霜石、調合なして。

ト件の箱を小藤太に見せる。

小藤　出かした閉坊。幸ひ用意の卯の花酒、直さま仕込んで主人にすゝめ、命を取らんは瞬くうち。これなる酒へ、その毒、早く。

閉坊　心得ました。

小藤　我れは隠した山吹が根、又も穿つて名笛を、取出す其うち、あたりへ心を

閉坊　呑み込みました。

ト時の鐘、凄き合ひ方になり、枝折りの外なる山吹の根方を小藤太、斧を以て掘り穿ち、此うち閉坊花道にて、毒の包みを出し、酒の中へ調合する。上の方、生垣より、行氏窺ひゐる。東の口より小文次、秋野の狩衣にて首桶を巻き、引ッ抱へ、走り出て來り、行氏を見て

小文　行氏どの。

行氏　コリヤ……急ぎの知らせは。

ト上の方にて小聲に云ふ。

小文　知らるゝ通り先達て、我れと名乘つてお館へ、訴へ來りし十郎祐成、逆澤瀉の鎧を持參し、殊に河津の三郎祐安、最期の折まで着なせし、秋野の摺つたるこの狩衣、これを證據に祐成が、首討たれよと直さま切腹。即ち首級を

ト思ひ入れ。

行氏　すりや、その座にて生害とや。流石は河津の實の御男子。

小文　いよ／＼曾我へ御養子の

行氏　イヽヤ、久上へ上されし

小文　然らば弟の

行氏　コリヤ。

ト思ひ入れ。此うち小藤太、笛を取出し、閉坊へ渡す。閉坊、毒を調合し

閉坊　然らば笛とこの毒酒

小藤　引替へになし、重ねて恩賞。

閑坊　範頼公の御前よしなに。

小藤　氣遣ひ致すな。この酒すゝめて、今宵のうちに

行氏　證據の狩衣。首級もしかと。

小藤　主人の一命。

ト上の方を見かへる。行氏、思はず表の方を見かへる。兩人一度に顔見合せ、小藤太悧りして簀戸を外よりたてる。これをキッカケに唄。行氏、小文次を引寄せ、囁く事あつて、首桶と狩衣を持ち、ツカ〳〵と下座へ入る。小文次心得、身をひそめ、窺ふ。雨車の音。

この春雨を幸ひに、隱れ簑笠身にまとひ、名笛持つて、片時も早う。

ト簑笠を閑坊に渡す。

閑坊　然らばこれより、天城の館へ。

ト行かうとする。この時、窺ひ居たる小文次

小文　名笛所持する閑坊奴。

ト閑坊を引附ける。

閉坊　何を小癪な。

小文　渡さにや、おのれ。

ト拔いて切りつける。立廻りのうち、後より小藤太、小文次の白刃を奪ひ取つて、小文次を切る。

小藤　跡かまはずと

閉坊　心得ました。

トごん〳〵になり、笛を咬へ、簑笠を抱へ、一散に向うへ入る。小文次、起上がつてかゝるを見事に切り倒し、あたりを見廻し、血刀もろとも死骸を門口の草井戸へ蹴込み、思ひ入れあつて毒の器を持ち

小藤　アヽ、蛙は口から

ト思ひ入れ。向うバタ〳〵と物音する。小藤太こなし。雨車、誂らへの鳴り物になり、小藤太、下座へツイと入る。この鳴り物にて、向うより五郎時致、胡蝶ちらしの半素袍を脱ぎかけ、半股立ち、東下駄にて、笛を持つたる閉坊を捻ぢあげ、立廻りながら出て來り、花道で名笛を奪ひ取り、キツと引敷き

時致　思ひがけなき春雨の、霽れ間待つ間を一散に、この時致を見るよりも、面を隱せし曲者こそ

閉坊　さてこそ箱王。

ト かゝるを、見事に立廻りあつて、閉坊の簑を引ッかけ、笠を奪ひ取る。

その名笛を

ト 立ちよる。時致、刀に手をかける。閉坊、思はず懐へ出し、一散に揚げ幕へ走り入る。矢張り此う ち誂らへの鳴り物。

時致　箱根の御寺の兒閉坊、怪しの品を所持せしゆゑ、奪ひ取り見れば

ト 思ひ入れ。笛の袋の中に書きたる歌を見て

「駒とめて、なほ水かはん山吹の、花の露そふ井手の玉川」……殊に俊成と記しあるからは、聞き傳へたる春篁と名けしこの名笛。雪間を分けし早咲きの、この山吹の花の下、思ひがけなく時致が、手に入つたるも不思議の一つ。もしや大望成就なすべき、時到りしか。ハテ、何とやら。

ト 思ひ入れ。この時、雨車の音烈しく、障子の内にて琴の調べ聞える。時致、思ひ入れあつて

奥ゆかしき琴の調べ。鳴立澤の草庵へ、鎌倉方より何やらん、出養生にて旅宿を求め、この早咲きの山吹を、愛す異人はこれ正に、日頃逢ひたい見たいと思ふ、もしや仇人

ト 内をキッと見て

近寄る便りを求むるは、この名笛を十三の、調子に合せて、オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れ。障子の内にて琴唄。

〽晒し女や、晒す垣根の朝露に、世を卯の花の雪とのみ、消えて跡なき風の傳手、衣打つ音や衣打つ音や。

トこの琴唄のうち時致、門口にて件の笛を合せる。よき時分、薄ドロ〳〵、トヒヨになり、空に千鳥數多舞ふ。山吹の根には蛙、大分啼きつれる。時致、千鳥に目を附け

ハテ、心得ぬ。琴の調べに數多の水鳥。殊にこの家の庭前に、時ならざるに、アレ〳〵、群がり寄つたる數百の蛙。

トきつと目を附ける。障子の内にて

祐經「山吹の、花色ごろも見てしより、井手の蛙の、音をそのみ啼く」。

化粧 俄の春雨。

手越 庭の景色。

祐經 二人の少將。

時致 ナニ、少將とや。

ト目を附ける。

祐經　障子をあけい。

〽見え初めしは昨日今日、盡きぬ縁とてまた近江、萩出でたるも山吹の、云はぬ色なる身のつらさ。」

ト唄のかゝりにて障子引抜く。祐經、羽織衣裳、紫の鉢卷、よき所に琴を調べ居る、下手に化粧坂の少將、手越の少將、二人ともに着流し、しごき帶、白手拭をかむり、前垂れがけにて、手槌にて打つてゐる。よき所に結構なる鏡臺、鏡かけあり、後の床の間に、卯の花に時鳥の掛け物、よき所に鎧櫃、その脇の衣桁に秋野の狩衣、萩の模樣のあたり見えるやうに掛けある。誂らへの刀掛けを飾り、胡蝶二羽、狩衣の上に飛びめぐり居る見得にて、祐經、琴を調べる事あつて納まり、千鳥の啼く音に思ひ入れあつて、鏡を取つて空を見上げ、差出す。この鏡に千鳥の影うつる思ひ入れにて

祐經　ハテうるはしき大空に、千鳥の聲の慕はしき、思ひ出せば播磨路や、鳴尾の磯の濱千鳥、それは聞えし千鳥の名所。小松の内府重盛公、御祕藏ありしこの琴を、名けて呼べる鳴尾潟、この曲をなせる時、俊成卿の祕藏ある

時致　春霞といふ名笛に、合せてこれを調ぶる時は

祐經　音色を慕ひ數多の鳥、その座を去らず舞ふと聞く。それのみならず庭前に、時早うして開きたる山吹が根の水を分け、井手の蛙の啼く音といひ、衣桁にかけし秋野の狩衣。萩の模様に胡蝶の狂ひ。あれを見、これを考ふれば、取りも直さず玉川の、調ぶる唄も六玉川。

化粧　そよと吹くなる松風の、音だに秋は淋しきとの、詠歌に事かはり

手越　野田の玉川陸奥の、千鳥も爰へ通ひ路の

時致　紀の路は高野調布や、晒す垣根の卯の花の

祐經　卯の花垣に朝顏の、紅葉に鹿の友呼ぶ笛の音。

時致　ヤ、、なんと。

祐經　サ、紅葉に鹿も、色ある少將。

時致　すりや、少將が

祐經　色ある浪に

時致　ヤ。

ト祐經、鏡を表の方に差出す。時致の顏をうつさうとして、思ひ入れあつて

祐經　月宿るらん。

トこなし。また唄になる。

＼せめて恨みて陸奥の、心のうちで戀のため、啼いて千鳥の我が思ひ、汲みやしつらん、玉川の水。

トこの唄のうち時致、笛を合せる。二人の少將、砧を打つ。薄ドロ〴〵にて祐經・自然と眠る思ひ入れにて、側に有り合ふ鏡臺へもたれ、寢入りし思ひ入れ。この時、池の蛙、數多琴の上へ集まり、自然と琴の音色を出す。寢鳥にて、胡蝶も千鳥も飛び去り、狩衣の上へ心火燃える。琴の凄き合ひ方。時致、蛙の聲に耳を聳て、思ひ入れあつて

時致　ヤ、思ひがけなき庭より、我が姓名を時致と、呼び給ふは誰れ人ぞ。

化粧　誰れ調ぶとも見えねども、池の蛙のこの庵へ

手越　糸道わたせば其まゝに

時致　琴の音自然となきつるゝ、蛙の聲も過ぎたまふ、父の河津の時致に、物云ひ交すこの場の不思議……ヤ、なんと。すりや、兄弟が附け覘ふ、敵は近きにありといふ、告げ知らしめか。

トこの時祐經、寢入りしまゝにて

祐經　思ひ廻せば十八年。

時致　父を討たれて
祐經　無念なか。
時致　さん候ふ〳〵。
　　ト門口にて思ひ入れ。
祐經　親は無けれど、子は育つぢやなア。
時致　ヤヽ、なんと。
　　ト庵へ駈けこみ、思ひ入れあつて、きつとなる。兩人の少將へだて、祐經フツと心附き、あたりを見る。心火消え、蛙も飛び去り、ドロ〳〵打上げる。
化粧　あなたはお目が
兩人　覺めましたか。
祐經　二人の少將。すりや、思はずも現のやうに、物云うたか。
兩人　アイ。
　　ト祐經思ひ入れあつて
祐經　ハテ、面目次第も……ハヽヽヽヽ。

ト時致を見て

化粧　そな若者は、いづれより。
サ、いま門口よりお出でのお方。

祐經　何用ござつて。

時致　サ、思ひがけなうこの庵へ、駈けこみましたは、俄の春雨。

祐經　すりや、春雨をしのがん爲に

時致　跡先とても辨まへず、雨のしのぎと、無遠慮千萬。

祐經　それは定めし御難儀ならん。持ち合せたる雨具を、御用に立てませうか。

時致　イヤ、雨具に望みはござらぬ。お志しは忝う存じまするが、御覽の通り、簑笠は持參いたして
ござる。

トつか〳〵と寄つて、下より簑笠を差出す。祐經取つて

祐經　さては雨具は御用意とな。然らば春雨霽るゝまで、この草庵に足をとゞめ、お物語りも又一興。
二人の少將。

ト時致これにて思ひ入れあつて

時致　最前よりも少將と、呼べば答ふる二人の女中。して、少將と召さるゝ婦人は。
化粧　即ちわたしは化粧坂。
手越　手越の宿の、わたしは浮れ女。
時致　すりや、二人とも少將とな。
兩人　いかにも左やう。

ト時致、思ひ入れあつて

時致　合點のゆかぬその詞。手越は格別、化粧坂、我れを見知らぬ怪しき少將。
化粧　イヽエわたしはどこまでも、化粧坂に勤めの少將。
時致　少將なれば某が、面を知らぬ紛れ者。
化粧　サア、それは。
時致　なんと。

トきつとなる。

祐經　ハテ、何ゆゑに又其許は、少將と聞きその如く、氣色を變へて
時致　その少將は某が、名は聞き及べど、これまで今に

化粧　逢はぬも道理、籠の鳥、身は川竹の化粧坂。

祐經　二人根曳きし、この草庵へ。

時致　して、御庵主は憚りながら、何方より、この所へ。

祐經　予は鎌倉より所勞につき、出養生にと當所に逗留。

時致　只今聞えし琴の音は、其許樣の爪音よな。

祐經　いかにも左やう、と申すも云はゞ恥かしき、唄の唱歌に合せし笛の、調べも正に其許の

時致　拙なき業も我が身を、助くる爲の雨宿り。

化粧　その村雨も小止みの樣子。ゆるりと爰で、お二人ともに

祐經　打寛ろいで物語らん。その庭先へ、いつもの床几を

兩人　心得ました。

祐經　サ、客人、あれへ。

時致　參りますべい／＼。

ト對面三重になり、兩人の少將、以前の床几をよき所へ直す。祐經、二重より下りて來り、砧を脇息の代りに直す。侘びたる莨盆を、高座の上へ直す。祐經思ひ入れあつて

祐經　お客を差置き、主が高座いたすのも、病後でござれば偏へに御容赦。身の程知らぬ役目の表、いづれも樣。サヽ、お客人、これへ〳〵。

時致　イヽヤ、拙者はこれが勝手でござりまする……見ましたところが。お物好きなる敷物、脇息、侘びたる品をお好みある、御庵主樣の御胸中、奥ゆかしう存じまする。

祐經　イヤ、物侘びた暮らしをお目にかけるも、病後の失禮。この身の保養と伊豆相模、溫泉の場所を尋ね、この程までも箱根七湯に、保養を加へし歸り足、鴫立澤の磯の松風、やさしき眺めに暫く逗留。若年の砌りより、溫泉の場所が、至つて望みでござるて。

時致　左樣でがなござりませう。箱根の御寺に暫らくも、兒たりし小冠者ゆゑ、二所權現に參詣の、路次で互ひに宮の下、塔の澤邊の溫泉にも

祐經　湯廻りいたして、成る程その節

時致　御覽なされたか……ハテ、知らぬ事とて。

トきつと思ひ入れ。

祐經　予は伊豆の國、伊東に住居いたした砌り、溫泉多き其うちにも、名に聞えしは柏ヶ峠の……その麓にて

時致　ヤヽ、なんと。

ト誂らへの合ひ方になり。

祐經　南が岬は八幡山、そのあたりにも溫泉して

化粧　伊豆や相模の大小名、廻り〳〵の御趣向か、喜瀨川手越の色達を、晝夜召されて戯むれの

手越　まづ一番に惡性男、名におふ波多の右馬之丞。

化粧　二番は負けぬあたつきに、湯女も手取りのねぢ上戸、氣性も大場の景親さん。

手越　お連れは同じ年配も、實盛さんの眞似ぢやとて、鬢を染めたる黑油、お年も海老名の源八さん。

祐經　はるか下がつて又爰に、一際目立つ武士の、物好きしたる卷き羽織、丹前風の派手姿、奥ゆかしくも奥野なる、狩倉よりの歸り武士。

時致　して、尋ねたき事の候ふ。もしその勇士の召されたる、模樣は七草、萩桔梗、尾花が下の蟲づくし、秋野を縫うたる服ならずや。

祐經　ハテ、詳しくも客人の、存じの上はナニ包まん。手越の少將、狩衣これへ。

手越　ハツ。

ト立つて衣桁より狩衣を取つて差出す。祐經取つて

祐經　コレ、この秋野の狩衣に、似寄りの小袖、巻き羽織。後にて聞けば誰れあらう、萬夫不當と呼ばれたる

時致　その祐安を、ナ、なんと。

兩人　河津の三郎祐安さま。

ト詰めよる。

祐經　ハテ、若者のその顔色、氣色かはりし振舞ひは、仔細ぞあらん。ナウ、兩人。

時致　仔細は問はずと胸中に、覺えがあらん、この年月、尋ぬるところの仇敵。

祐經　サ、敵にあらぬ、こりや形見。

時致　ナニ、形見とは。

祐經　形見こそ……今は仇なれこれなくば……討たるゝ事もなかりしに。

時致　ヤ、なんと。

祐經　秋野の着たるは伊東祐親、竹笠さつと本枯しに吹きそらさせ、栴檀胴の弓携へ、村雨月毛にゆらりと跨がり、絶所惡所の嫌ひなく、駒を早めて歩ませたり。すは祐親よ、ござんなれと、一つ椎の木やり過し、引き絞つたる十三束、よつぴきへうと放つ矢に、鞍の山形射削つて、むかはぎの

際より、前へすつぱと射通したり。

ト此うち時致、思ひ入れあつて

時致　その物語り詳しくも、存ぜしからは、さては御身は。

祐經　イヽヤ、大役承り、首尾よく勤めぬ其うちは、矢張り名も無き予は浪人……さはいへおことがその面差し、斯程にまでも似るものか。ハテ、似たワ〳〵。

時致　そりや何者に似ましたな。

ト詰めよる。祐經、鏡を取つて差出す

祐經　色なる浪にうつりたる、月は一つ、影は二人の殿原ならん。疑がはしくば朝夕に、予が回向なす畫像に逢はせん。月の鏡で

ト時致へ打つてかゝる。時致、鏡を奪ひ取る。祐經、手早く手あぶりの火箸を床の間目あてに打ちつける。程よく當つて掛け物の上へ、大幅に仕立てたる故人松緑の河津の畫像、バラ〳〵と下りる。時致見て

時致　床へ掛けたる畫像こそ、正に河津の祐安さま。世に亡き故人へ回向とは。

祐經　一家の端を思ふゆゑ、予が手づからの閼迦の水、手越の少將、香華を早う。

手越　ハッ。

ト下座へ走り入る。時致、思ひ入れあつて

時致　河津の畫像を掛け置いて、一家の端と云ふといひ、殊に怪しき少將二人。正しく主の胸中に

ト立ちかゝるを、化粧坂の少將へだてゝ

化粧　この少將が身の上より、この家を窺ふお前の素振り。正しく曾我の

祐經　コリヤ。曾我とは何事。その曾我どのゝ養子たる、祐成こそは頼朝公の、憎しみ請けし、不義の科人。

時致　して、その不義の相手は何者。

祐經　即ち息女大姫君、討ち奉るは、科に依怙なき武將の嚴命。

化粧　サア、そのお怒りを暫らくも、鎭むる爲のわたしが願ひ。この山吹の、花の心を

ト山吹の枝を手早く取つて差出す。祐經、キッと目を附け

祐經　「七重八重、花は咲けども山吹の

化粧　みの一つだになきぞ悲しき。」

祐經　ヤ。

ト思ひ入れ。

化粧 身の一つだになきぞ悲しき。

ト祐經と顔見合せ、兩人愁ひの思ひ入れあつて、きつと氣を替へ、刀を取つて、拔討ちに化粧坂少將の首を打ち落す。

時致 ヤ、心得ざりし少將が、首討たれしは、何科あつて。

祐經 不義の科にて。

時致 その少將が、何ゆゑ不義の

祐經 イヤ、女は勿體なくも、賴朝公の御息女たる、緣邊きはまる大姫君。不義の相手は十郎祐成。これにて二人の成敗濟んだ。政子の方より使ひの宇佐美。

宇佐 ハア、。

ト宇佐美、裲襠衣裳に着替へ、首桶を持ち、ツカ／＼と出て、件の首を桶に入れ

大姫君の御首、慥かに持參仕るでござりませう。

時致 すりや、少將といひしは姫君。氣遣はしきは祐成の

トきつとなる。時計の暮れ六つを打つ。奥より小藤太、吉例の上下衣裳にて、長柄の銚子と、三方に

土器を載せ持ち、行氏、同じ拵らへにて首桶を抱へ、ツカ〳〵と走り出て

兩人　お立ちの刻限。

ト呼ぶ。向う揚げ幕にて

大勢　ハア、。

ト聲して、時の太鼓になり、紺看板の中間五人、庵に木瓜の紋附きたる箱提灯を持ち、羽織袴の歩行侍ひ二人、次に中間二人、庵に木瓜の金紋附いたる挾み箱を擔ぎ、次に二人、二本道具の槍を持ち、朝比奈、いつもの形の上へ紺看板を引ッ張り、合羽籠をかつぎ、下座敷持ち一人、この人數バラ〳〵と走り出て來り、舞臺後へ一ぱいに居並ぶ

皆々　お迎ひ。

ト扣へる。時致思ひ入れあつて

時致　さてこそ怪しき庵主ぞと、目を附け來るに疑ひなき、同勢美々しきその出立ち。殊さら庵に木瓜の、紋は正しくこの日頃、逢ひたい見たいと佛神へ、誓ひをかけたる父の仇。

小藤　お覺えめでたき一﨟職。

行氏　工藤左衛門

皆々　祐經さまだッ。

祐經　コリヤ、密かに申せ。

時致　さてこそ祐經、親の敵。

ト飛びかゝらうとする。朝比奈、看板を脱ぎすて、きつと留めて思ひ入れ。

祐經　最前とても祐經が、この狩衣の歸るさを、それと云はずに物語り、殊に掛け置くあの畫像、回向をなすも時來らば、討たれくれんず心底なれど、富士野の狩の惣奉行、思ひ設けぬこの度の大役首尾よう勤めぬ其うちは、討たるゝ事は罷りならぬ。されども時致憤激なし、祐經に過ちあらば汝ばかりか養父祐信、母滿江が難儀となるに、心が附かぬか。河津が胤とはいひながら、アヽ、若い／＼。

時致　すりや何と云ふ、役目終らぬ其うちは、敵討は叶はぬか。エヽ、寶の山へ入りながら、手を空しく立歸るか。エヽ、口惜しい。

ト有りあふ臼を取つて碎く。

小藤　イヤ、手を空しくは歸すまい。祐經さまへ、成家めがお願ひ。

祐經　ナニ、小藤太が願ひとは。

小藤　絕えて久しき一家の殿原、御對面のしるし、御土器下さらば、さぞかし曾我にも滿足にござりませう。この儀偏へに願はしう存じまする。

祐經　尤もの一條。然らば杯いたしてくれう。

行氏　イヽヤ御主人、その儀ばかりは、何とも以て、

小藤　行氏、貴殿は何ゆゑ止め召さるゝ。

行氏　主人を敵と附け覘ふ、曾我殿原へお杯の儀は、只管お止め申しまする。

小藤　ヤ、なんと。

祐經　イヽヤ、行氏、苦しうない。河津が胤の時致と、聞いて祐經、杯なさぬも卑怯に似たり。この場で杯、致してくれう。

行氏　すりや、どうござつても。

祐經　いかにも。

小藤　小藤太、お酌仕らう。

ト三保神樂になり、土器を差出す。祐經取つて

祐經　首級の兄へ獻したる上、時致、杯獻し申さう。

時致　戴きますべい〳〵。

　　ト近寄る。朝比奈、堪へろといふ思ひ入れ。小藤太、酌をして、祐經受け

祐經　祐經受けて兄弟へ。

　　ト酒を飲まうとする。薄ドロ〳〵になり、最前の胡蝶二羽、土器の上を舞ひ、パッタリと落ちる。

　いま引受けし土器へ、胡蝶來つて戯れしに、忽ち落ちて死したるは、怪しき酒の

　　ト土器の酒を、あたりの高野槇の生垣へかける。薄ドロ〳〵にて葉色變り、枝折れる仕掛け。小藤太思ひ入れ。祐經キッとなつて

　ハテ心得ぬ生垣の、槇の若葉も色を變へ

行氏　忽ち枝の折れたるも

祐經　これを思へば、忘れても、汲みやしつらん旅人の、高野の奥に生ずるこの槇……高野の奥の玉川の水……さては毒酒を

小藤　ヤ。

　　トぎよつとする。

祐經　ハテ、油斷のならぬ。

ト小藤太へ目を附ける。

ハヽヽヽ。既に命を。危ふい事の。

時致　すりや、其まゝに杯は。

祐經　絕えて久しき殿原へ、杯がはりは祐經が、所勞を助くる鉢卷きに、勿體なくも賜はつたる、三ケの莊のこの御敎書。

ト鉢卷きに卷きし墨附を出す。

時致　ナニ、三ケの莊の御敎書とや。

祐經　所領の仇も某一代、子孫に殘らぬそのしるし、亡き祐安と姬君へ。

時致　我れも最期の祐成が、この文體を煙となして。

兩人　手向けの門火。

ト兩方一緖に前なる火鉢へ打込む。煙硝火立つ。

朝比　祐經さまの一代に、工藤の家も

行氏　我れと亡ぼす御仁心。

祐經　アヽコレ……最早館へ。

小藤　お乘り物。

皆々　ハヽア。

ト下座より陸尺四人、乘り物を擔ぎ、これに糸遊、小姓なりにて附添ひ出る。

小行　御前樣には少しも早う。

祐經　夜風を防ぐ

ト戸を明ける。內より手越の少將、白無垢、袈裟にて、髻を拂ひしそぎ尼の拵らへにて、顏を出し

手越　我れに代つて犬姬が

ト愁ひのこなし。

祐經　犬の文字も一點を、切り取りたれば大姬君。あの犬姬に犬死を、ナ、大姬君は世に亡きお方。

小藤　さては身替り。

ト寄るを突き廻し、駕籠の戸をシャンと締めて

祐經　徒歩にて歩行。

ト宇佐美、乘り物を圍うて

宇佐　殿のお歸り。

第弐番目序幕



六建目大詰



皆々　ハ、ア。
時致　して、我れ〳〵に討たるゝ場所は。
祐經　この狩衣へ白布を、添へて約する、時節は卽ち
ト狩衣の上へ白を持ち添へ、鎧櫃へかける。布の白きを雪と見て、狩衣、仕掛けにて富士と見える。
時致　富士の姿の狩衣は
朝比　さては皐月の折を待ち
行氏　勝負を決せん御主人の
小藤　すりや、兄弟に、狩場に於て
祐經　討つ討たるゝは武門の習ひ、忍び來らば春筐、あの名笛を合圖のしはぶき。
時致　裾野の鹿の妻戀ふ笛竹。
祐經　音色をしるべに、討たるゝ契約。
時致　皐月下旬は五月雨の
祐經　その雨の夜の贈り物。
ト簑笠に卷いたる一品を差出す。時致取つて

時致　隱れ簑笠、慥かに落手。

祐經　必ず討てよ。

時致　おんでもない事。

祐經　狩家に忍ばゝ

時致　歩みの板まで

祐經　見事討つかよ。

時致　まッこの通り。

ト簑を引裂く。中より逆澤瀉の鎧出る。

時致　こりやコレ正しく

朝比　逆澤瀉。

小藤　ヤ、なんと。

祐經　アヽコレ。曾我への賜物。

時致　忝ない。

閉坊　それを。

ト最前より生垣に閉坊、窺ひ居て、この時かゝるを時致、見事に投げる。

祐經　行け。

時致　さらば。

トかけりになり、時致は鎧を抱へ、一散に向うへ走り入る。舞臺は祐經、眞中に扇を開き、立ちかゝる小藤太を隔てし見得。朝比奈は閉坊を押へる。行氏、宇佐美、めい〳〵首桶を持ち、供廻りの人數、乘り物を差上げる。アリヤ〳〵の聲、引ツ張りよろしく、

幕

引附けると打込み。二番目の呼び。

第二番目　序幕　深川仲町洗湯の場

役名――仲町福島屋淸兵衞。湯屋番頭、平助。いさみ、於左吉。宗庵下部、權平實ハ山姥の權九郎。湯屋の流し、三助。女髮結ひ、お梅。同、おつや。湯屋の流し、長八。神主、如鱗杢太夫所化、常念。福島屋娘分、おぎん。大工、勘六。福島屋の廻し、市助。千葉の家來、堤幸左衞門。福島屋抱へ藝者、おその。針の宗庵實ハ新藤德次郎。大工、杣の六三。

本舞臺、三間の間、向う横手に見たる洗場の體。柘榴口、東の方へ取り、眞中を腰だけに仕切り、手前は男湯、向うは女湯、舞臺上がり場、いつもの門口、丸八と染めたる三布の暖簾、高臺の上に平助、番頭にて坐り、よき所に八軒を吊し、寄席、落し噺、淨瑠璃の貼出し、男女隣り同士の洗湯、誂らへの通りに飾り、摺り鉦入りの太神樂にて幕明く。

ト舞臺上がり場に、黒木綿誂らへの頭巾をかむりし醫者形の者、一人、後向きになり、大鋏にて足の爪を取つてゐる見得。隨分顏の見えぬやうなる仕組み。その外若い者二三人、湯上りにて、帶をしめながら捨ぜりふ云つて居る。板流しには、いさみの於左吉、所化の常念、丸裸、股倉ばかりにて、小桶を散らし、長八、湯汲みにて、於左吉の脊中を流してゐる。女湯の方にはお梅、おつや、裸身にて中仕切りより立ち身にて半身見ゆる仕組み。風呂の内には長唄、念佛、そゝり唄、淨瑠璃の聲騷がしく、若い者は帶をしめて向うへ入る。引違へて向うより杢太夫、神主、烏帽子、白木綿の單物、淺黄木綿の刺貫、湯襷にて、榊を腰に差し、鈴を振つて出てくる。跡より權平、頬かむり、胡散なる風體にて、ウソ／＼出て來り、兩人とも門口へ來り、權平は格子より内を窺ふ。

杢太　拂ひ給へ淸め給へ……番頭、まだ寒いことの。

ト男湯へ入る。

平助　左樣でござりますが、お前樣は一倍お寒うござりませう。
杢太　イヤモウ、これも神職の役でござるて。
　　ト帶を解き、裸になり
イヤ、手拭を借りませう。
平助　ハイ／＼、これをお持ちなされませ。
　　ト貸し手拭を渡す。杢太夫、烏帽子をかむりしまゝ、猿股一つにて湯へ入らうとする。
ア丶、モシ／＼、お前樣、お頭に烏帽子がござります。
杢太　成る程、これは不調法。
　　ト烏帽子を取つて風呂へ入る。此うち始終通り神樂。風呂の内には、いろ／＼の聲する。
於左　あの神主は、烏帽子を足袋だと思ふか。頭と足と履き違へたさうだ。
長八　左樣サ、天地の違ひだ……モシ、お寺樣、流しませうか。
常念　イヤ／＼、今日は寒い。この頃に、暖かになつてから湯灌を頼まう。
長八　とんだ事を仰しやる。
うめ　オヤ、吉さん、お出でか、お寒いねえ。

於左　お梅さんか。強敵に長湯だの。

うめ　アイ、笊でも持つて掬ひにお出で。

つや　わたしらは、米揚げ笊でなければ掬へないよ。

於左　おつやさんか。お前は四方の豆を揚げる籠サ。

うめ　エヽ、憎い口だなう。サア、もう一遍入りやせう。

ト捨ぜりふにて、皆々また風呂へ入る。佃騒ぎに角兵衛獅子の鳴り物にて、向うよりおその、藝者の拵らへ、おぎん、娘分の拵らへにて、浴衣を持ち、幸左衛門、紋附きの黒小袖、大小にて出來り、花道にて

幸左　コレ〳〵、おぎんや、洗湯は向うの内か。

ぎん　左樣でござります。どう致しても今頃は、混み合ふでござりませう。

幸左　定めて男女入込みであらうな。

その　どうしてマア、そんなみだらな洗湯があるものかいなア。

幸左　ハテ、それは不自由な國ぢや。

ト云ひながら門口へ來て、内へ入る。權平は頭の道具へ目を附ける思ひ入れ。

ぎん　番頭さん、この間は。
平助　ヤ、お出でなされまし……この間はおそのさん、春はまだお出でなされませぬね。
その　内に風呂があるゆゑ、無沙汰をしやんした。
ぎん　平助さん、おそのさんから。
ト水引を掛けたる祝儀を出す。
平助　これは御祝儀を。へゝゝ、ほんに、まだ初湯でござりましたね。
トおその、おぎんと女湯の方へ行く。幸左衛門、思ひ入れあつて
幸左　身共も其方へ入らう。
平助　イエ〳〵、あなたは此方でござります。其方は女中ばかりでござります。
幸左　アゝ、爰が男女追分けの境ぢやな。
ト着物を脱ぎかける。矢張り佃節、角兵衛獅子にて、向うより市助、廻し男の拵へにて、手紙を持ち、早足にて出て来り、ズツと入る。この時分、おその、おぎん、浴衣に着更へ、風呂の方へ行く様子、半身見ゆる。爪を取つてゐたる醫者、足にてそろ〳〵脱いである法衣を引寄せ、平助が見へぬやうに外へ蹴出す。權平、足にて搔きよせる。

市助　ヤ、幸左衞門さま……モシ、私はお前さんにお屆け申す、御狀を持つて參りました。

幸左　オヽ、市助、どれから狀が來た。

市助　ハイ、お國屋敷の堀の彌藤次さまから、この御狀をお持ちなされました。

ト狀を渡す。

幸左　何だや「この間御申し越しなされ候ふ金子の儀、此方金預かり、片岡幸之進こと……」。

ト跡讀みさし、思ひ入れあつて

「下部段助と申す者、御用金百兩持參いたし、當月中旬ごろ江戸表へ參るべく候ふ間、道にて待ちうけ……」

ト市助へ思ひ入れあつて

して、使ひの者は、置いて參つたか。

市助　ハイ、洲崎まで行つて、歸りに寄ると云はれました。

幸左　左樣か。コレ、てまへは、使ひが參つたら、知らせてくりやれ。

市助　イエモウ、私しも、旦那にお話しがござります。左樣なら行つて參りませう。

幸左　ハテ、耳寄りな事を申して參つたわえ。


尾上菊五郎

ト手紙を疊み、袂へ入れ、裸になり、白の下帶ばかりにて、大小を平助へ預け、捨ぜりふにて風呂へ入る。市助は向うへ入る。此うち矢張り件の鳴り物。ほの暗き思ひ入れ。

平助　つけようぞや〳〵。

ト大きな聲で呼ぶ。件の醫者、幸左衞門が小袖を足にて門口へ刎ね出す。權平、外にて引寄せ、麻の衣に包み、足早に入る。三助、流し男にて、竹の先へ蠟燭を附けたるを持つて來り、捨ぜりふ云ひながら八軒に火をともす事あつて

三助　番頭さん、大工衆は、いつ來るえ。

平助　オヽ、今にもあの六三どのが來るであらう。今日昨日から追ひ〳〵に、人をやるわいの。

三助　どうぞ早くしたいものだね。

ト此うち件の醫者は履き物を尋ね、門口へ出かけ、新らしき雪駄を履きかへる思ひ入れ。

平助　ハイ、ようお出でなされました。

トまた鳴り物になり、醫者は早足に入る。摺れ違うて向うより六三、大工の拵らへ、着流し、たるみの股引にて、道具箱を肩にのせ、出てくる。跡に勘六、同じ拵らへにて附いて出て來り、花道にて

勘六　コレ〳〵、六ばうや。おいらが方の作料は、いつ寄越すのだ。明けても暮れても今日の明日のと

六三　職人の方へ、さう〳〵斷わりを云はれるものぢやァねえ。しつかりと挨拶しやな。

段々おぬしの云ふのも尤もだが、何を云つてもお屋敷のお拂ひが出ぬゆゑ、ツイ無沙汰になるが二三日中には、屋敷の金が出次第に、きつと分けるから、外の手合ひにも、いゝやうに云つて置いてくりやれ。

勘六　そんなら、屋敷の拂ひが出次第に、きつと分けるのか。さう物に極りが附けば、外の者にも斷わりが云へるといふものだ。必ず間違へちやァならねえよ。

六三　ハテ、おれも六三郎だ。その時は、それが內へ、連尺でも附けて持つて行きや。

勘六　持つて行かねえぢやァ。今度間違ふと、屋體骨ばかりぢやァねえ。嬶ァのおきぬまで、持つて行かずばうまるめえ。

六三　無駄を云はずと取りに來や。今度はスツパリ分けてやるワ。

勘六　お忝け。必ず賴むよ。

ト鳴り物になり、勘六引返して向うへ入る。六三は門口へ來り、內へ入り

六三　番頭さん、どこを直すのだえ。

平助　オヽ、六三さんか、御苦勞でござります。お前をお賴み申す程の仕事でもござりませぬが、風呂

の後の羽目板を、打ちつけてもらひたうござりますが、明日の朝の間にでも、弟子衆なりと寄越して下さりませ。

六三　なにサ、野郎どもだといつて、急な仕事にやりやすから、朝の晝のと云はずに、わしはこの頃、福壽まで仕事に來てゐやすから、どうで歸りがけだ。夜鍋仕事に直して行きやせう。

平助　それは御苦勞でござります。左樣なら、ちよつと御覽じて下さりませ……コレ、三助、代りに上がつて居や。

三助　アイ〳〵。

ト平助、高臺を下り、三助、代りに上がる。

平助　サア、此方へお出で。

六三　こいつは足袋を脫がにやアならねえ。

ト道具箱を置き、足袋を脫いで、平助先になり、柘榴口の脇より風呂場の後へ入る。通い神樂になり、向うより若い者出て來り

若者　コレ〳〵、番頭々々、お觸れを持つて來た。

三助　何のお觸れだ。

若者　新藤徳次郎といふ盗人の、人相書が廻つた。内で見たら、長屋へ早く廻してもらはう。
三助　オイ〳〵。そこへ置いて行かッし。
若者　爰へ置くよ。
　ト臺の上へ置いて引ッ返して入る。この話しのうちより、お梅おつや、湯文字にて上がつて來り、捨ぜりふにて着物を着てゐる。男湯の方より幸左衛門、於左吉、常念、杢太夫、上がり來り
於左　イヤ、强敵にいゝ湯だ。
幸左　今が入り加減ぢや。
うめ　コレ、吉さん、湯もいゝが、男もいゝよ。
於左　おれか〳〵。
うめ　なにサ、大工の六三さんが來なさつたよ。
つや　ぬしは粹な男だなう。
　ト云ひながら門口へ出る。
幸左　アヽ、なにか、爰らに六三といふがあるか。
於左　アイ、職人でござります。

幸左　アヽ、それだわえ。

ト彫り物の仕方をして思ひ入れ。

うめ　アイ、番頭さん、明日よ。

三助　お歸りかえ。

ト右の鳴り物にて兩人向うへ入る。おその、おぎん、浴衣形にて風呂の方へ上がり、小蔭へ入る。幸左衞門、腹の立つこなしあつて

幸左　いま歸つた女の云ふは、大工の六三、美い男だといふからは、慥かに彼奴が彫つてある

ト思ひ入れ。

三人　アヽ寒い。もう一風呂入つて來よう。もう一遍溫まらう。

トまた風呂へ入る。此うち矢張り角兵衞獅子、かすめて佃節。風呂の脇より六三、板を二三枚持つて出てくる。此うち三助、居眠る思ひ入れ。

六三　なんの事だ。こればかりの仕事に御大層な。無性に呼びに寄越した。どんなにでも叩きつけて行きやせう。

ト道具箱を取出し、板を削りにかゝる。此うち矢張りかすめて佃節。女湯の方のおその、六三を見附

けろ事あつて、おぎんに囁く事。

ぎん　エヽ、そんならお前の、常々話しなさんした、そのお方は、ぬしの事かえ。

その　アイ、これぢやわいなア。

トおその、腕を捲つて見せる。おぎん見て

ぎん　「六三女房」エヽ、素敵にのろいね。

三助　ぬるくば埋めようかえ。

ぎん　オヤ、寐言ださうな。モシ、早くあそこへ行つて逢ひなさいな。

その　でも、番頭さんが、男湯の方へ行つたといつて、叱らうぞえ。

ぎん　ナニ、打ッちやつて置きなさい……アレ、三公は眠つてゐるよ。そしてお前、證據とやらを、持つて居なさるか、

その　サア、それはナ、コレ、此やうに、お守同然に、襟に掛けて居るわいなア。

ト錦の守袋の中より、發端に取出したる比翼紋の手拭を出し

これが證據ぢやわいなア。

ぎん　そんなら早く持つてお出でな。

その　さうせうかえ。

ト　そろ〳〵男湯の方へ來て、あたりを見廻し

モシ、お久しうござりまする。

ト恥かしき思ひ入れ。六三、合點のゆかぬこなしにて

六三　アイ、わしを見て、お久しいといふお前。さう云へば、どうやら見たやうな。

ト思ひ入れ。

その　見たやうなとは六三さん、そりやお前さん、胴慾なわいなア〳〵。

六三　さういふお前の物腰は、慥かに

その　モシ、大事に持つて居りますぞえ。

ト件の手拭を疊みしまゝ見せる。六三取つて、思ひ入れあつて

六三　ヤ、こりやコレわしが紋附きの手拭。これを持つてゐるお前、そんならいつぞや鎌倉の

その　アイ、あの年の夜に、逢ふと其まゝ

六三　別れ忙しき東雲の。お前がくれた、コレ〳〵。

ト莨入れの中より件の簪を出し

八ッ丁子に三ッ扇。ぬしだと思つて、わしも大事に……してマアぬしは、アノ爰らにか。

ト此あたりより幸左衛門上がり來り　この體を見て思ひ入れ。おぎん差寄つて

ぎん　おそのさんとて評判の藝者衆。ぬしの話しで聞いてゐる、そんならお前が御亭主さん。

六三　アヽコレ、おいらはさう云ふ

ぎん　でも、この通り。モシ

ト おそのの腕を捲つて見せる。六三思ひ入れあつて

六三　なんだ「六三女房」……そんなら、これから

その　お前の側に、添臥しする氣で

六三　アノ、彫り物を

その　モシ、堪忍して下さんせえ。

ト彫り物を抱きしめ、思ひ入れ。幸左衛門、始終口惜しき思ひ入れ。三助、居眠り居て、思はず高臺より落ちる。この時、觸れ狀、上がり場へ落ちて飛び散る。幸左衛門、氣を揉み、逆上せて、ウンと目をまはす。この仕組み途端一度の模樣。三人悄りする。三助、目を覺まし、幸左衛門を見て

三助　ヤア、死んだ〳〵。肥つた人が死んだ〳〵。

ト呼び立てる。平助、長八、うろたへて駈けて出る。風呂の内より於左吉、常念、杢太夫出て來り

皆々　誰れが死んだ〳〵。

平助　ア、コレ〳〵、騒がつしやるな〳〵。こりやァこの旦那は、頓死と見えるわえ。

六三　これサ、番頭さん、この人は慥かに湯氣にあがつたのだ。灸でも据ゑるがよい。

平助　イエ〳〵、湯氣にあがつたのは灸では居かぬ。思ひ入れ水をかけるがよい。

六三　こいつは理屈だ。いつそ水船へ浚ひこむがよからう。

平助　犬のつるんだやうに、水をかけろ〳〵。

三助　さうしませう〳〵。

ト小桶や桝で皆々立ちかゝつて幸左衛門へ水をかける。此うち六三、おその、おぎん、小聲になり、何やら話してゐる。矢張り佃節にて、向うより市助先に、旅形の足輕、引はだ柄袋の大小を差し、赤合羽を風呂敷に包みしを脊負ひ、菅笠を持ち、スタ〳〵と出て來り

市助　幸左衛門さま〳〵、お使ひをお連れ申しました。

ぎん　コレ〳〵、市助どん、旦那は湯氣におあがりなすつて、氣を失つてだに。

市助　エヽ、そいつは大事だ。モシ〳〵、旦那々々、市助でござります……幸左衛門さま〳〵。

平助　サア〳〵、あの通りに呼んで下され。

皆々　合點だ〳〵……幸左衛門さま〳〵。

ト呼び生ける。幸左衛門、やう〳〵氣の附く思ひ入れ。

平助　ソリヤ、氣が附いたぞ。

皆々　ヤア、氣が附いた〳〵。

市助　モシ、旦那樣、お心が附きましたか〳〵。

幸左　市助か……コリヤ、申し分がある。身が小袖、大小を持て〳〵。

市助　アイ〳〵……コレ、番頭さん、あなたの大小をあけさつしやい。

平助　ヘイ〳〵。これでござります。

ト兩腰を渡す。

幸左　コリヤ、小袖を持て〳〵。

平助　ハイ、慥か爰に

ト尋ね廻り、見えぬゆゑ

モシ〳〵、旦那、お小袖は見えませぬ。

幸左　無うては濟まぬぞ。隅切り角に桐といふ字の紋の附いてゐる、黑い小袖だぞ〳〵。持つて參れ、持つて參れ。

市助　コレ〳〵番頭、あの通りの召し物を探さつしやい。アヽコレ、今の騷ぎに、板の間稼ぎが、うせはせぬかの。

三人　イヤア、早くてんでんの物を着るがよい〳〵。

トうろたへて着る。常念あちこちして

常念　ヤア、愚僧の衣が、見えぬ〳〵。

皆々　そいつは湯屋泥坊だわえ。

幸左　こりやャイ、番頭、侍ひが湯屋泥坊にあつて、丸裸では、濟まぬぞ〳〵。サア、きつと詮議いたして、身が着る物を、爰へ出せ〳〵。

平助　ハイ〳〵、只今詮議いたしまして、差上げまする〳〵。

常念　愚僧の衣も無くなつたぞ。

市助　それぢやァお寺へ歸られまい。とんだ不用心だ。みんなも氣を附けなさい〳〵。

皆々　サア〳〵、早く歸りませう〳〵。

ト上がり口へ來て、思ひ入れあつて

於左　イヤア、おれが雪駄が無いワ。

平助　アヽ、また履き物が……そんならどうでも、彼奴ぢや〱。

皆々　番頭〱、心當りがあるか〱。

平助　先刻に歸つた、あの惣髮の醫者めだわえ。

長八　番頭さん、その醫者は歸りましたかえ。

平助　黑い頭巾をかぶつて、面に痣のある、醫者だ〱。

三助　捕まへて來ませう〱。

三人　おいらも行くべい〱。

平助　お頼み申します〱。

ト佃節になり、長八三助、於左吉常念李太夫、一散に向うへ走り入る。

六三　ハテサテ、物騷な湯屋だ。モシ、おそのさんとやら、お前も用心しなさい。歸りなさるなら、送つてあげようかえ。

その　アイ、さうしておくれえ。

ぎん　サア、おそのさん、歸りませうぞえ。

ト三人出かゝる。

幸左　コリヤ〳〵、おその、待て〳〵。歸す事はならぬぞ〳〵。六三郎とやらも泥坊だぞ。滅多におのれ、歸しはせぬぞ。

ト猿股へ大小を差して思ひ入れ。

六三　モシ、お侍ひさん、妙な事を云はつしやるが、大工の六三が、何を盜んで泥坊だ。

幸左　オヽ、盜んだ。身が買ひ切つたこのおそのを、なぜ盜んだ。

六三　どうしたと。

幸左　おそのとおれは、色だ〳〵。オヽ、きつとした證據があるぞ……アヽ、ハックショ……アヽ、寒いわえ。コレ、番頭め、何ぞ着せぬか〳〵。

平助　ハイ、何も代りがござりませぬ。

市助　無くては濟まない。何でもいゝわな。

平助　ハテサテ困つたものだ。モシ〳〵、私しが古袷でも取つて參りませうか。

市助　サア〳〵、早くさつしやいよ。

平助　左様なら、何ぞ尋ねて參りませう。

ト佃になり、息せきと下座へ入る。鳴り物になり、向うより清兵衞、子供屋の拵らへ、廣袖、丸括けにて手拭浴衣を持ち、下駄がけにて出で來り、内の樣子を聞いて、門口より窺ふ。

市助　この冷えるのに、旦那はお寒からうに。モシ、あなた、何も着られさうな物をお持ちなされませぬか。

若黨　イヤ〳〵、何もござらぬが、爰に赤合羽が

市助　それでもようござります。サア〳〵、これでも召しませ。

ト若黨、風呂敷より赤合羽を出し、幸左衞門に着せる。

幸左　何でも大事ない。一向に立ちきれぬワ……こりやヤイ、町人め、われがおそのが色だと申す、證據を見せうか。

六三　サア、見ようわえ。

幸左　オヽ、見せるぞよ。

トおそのへかゝる。おぎん留めるを突きのけ、引附けるを、清兵衞、ツカ〳〵と入り、幸左衞門を留めて

清兵　アヽモシ、お前様、こりやア私しが抱へのおそのを、どうなされます。
幸左　わりやア誰れだ。
市助　モシ〳〵、この子の親方、アノ福島屋の
清兵　ハイ、私しは、清兵衛と申す者でござりまする。
幸左　アヽ、われが
六三　この子の親方、清兵衛さんかえ。
清兵　左やうサ。
幸左　親方なれば係り合ひだ。このおそのには亭主があるワ。其やうな怪しい女を、なぜ身共に呼ばせた。
清兵　亭主はどこにござりまするな。
幸左　即ち爰に居る六三とやらだワ。證據は腕にこの彫り物。
トつか〳〵と寄つて、おそのが腕を捲る。
コレ見ろ。「六三女房」と彫つてあるワ。なんと證據であるまいか。
トこれにておその思ひ入れ。

清兵　いつの間にやら、油斷のならぬ、「六三女房」とは、てまへ、少つと出來過ぎたの。

六三　モシ、清兵衞さん、こりやァお初にお目にかゝりましたが、承りますれば、おそのばうが、いらざる彫り物をしたばつかりに、膨れた人が、素敵に熱くなられましたが、親方のお前に、わしも氣の毒だから、斯うしやせう、このおそのは、わしが立て金をして、女房に貰ひやせう。マア、さう思つて下さりまし。

幸左　イヤノ〵、われが立て金するなれば、身も侍ひだ、町人風情に負けてはならぬが、コレ、六三とやら、ようおのれ、身が買うてゐるおそのを、横盤切つたなア。

六三　ナニ横盤を切つた。この二本棒め、とつけもない事を申し上げたな。なぜ又、侍ひの癖に、職人の嚊ァを盜みやァがつた。この間男侍ひめ。

幸左　こりやヤィ、なんで身共が間男したのぢや。幸左衞門は武士ぢやぞ。間男いたした覺えはないワ。

六三　知れた事だ。ナニうぬが面で、間男が出來るものか。薩摩芋の餡かけで、大福餅を食つてゐる面だワ。したが、侍ひの癖に、間男といふのは外でもない。六三女房と、きつとした極印があるおそのを、なぜ又こなさん、晝夜仕舞ひにして遊ぶのだ。

幸左　サ、それは。





六三　どうだ。この挨拶が出來まい。首を捥ぐところだが、親方の手前といひ、その分にして置くぞ。これからは六三さんのおかみさんだぞ。指でも附けるな。今日から用事を附けてナ、立て金はおれがするわえ。さう思つて居やァがれ。

幸左　さうはさせぬ〳〵。われが立て金するからは、身も侍ひだ、立て金せうが、福清とやら、身代はいか程ぢや。

清兵　ハイ、お尋ねならば申しませうが、その身代は百兩、手附けとあらば五十兩でござります。

幸左　オヽ、その手附け、渡してやらう。ナア、市助。

市助　左樣でござります。常からあなたの御恩になる私し、仲人に入つて働きませうが、只今お手附けが渡されませうか。

幸左　氣遣ひするな。持ち合せた金子は無いが、身共も武士ぢや。

ト合ひ方になり、大小を取つて市助が前へ差置き

湯屋泥坊にあつたゆゑ、合羽一つの此ざまでも、身が魂ひのこの兩腰、市助、五十兩の手附けに受取つてくりやれ。

市助　アヽ、左樣なら、五十兩のその代りに

清兵　兩腰お預けなさるゝとは、ちつと此方は迷惑な。
幸左　サ、そこを只管、手を下げ申す。
清兵　それ程までに仰しやるなら
市助　こりやァ取らずばなりますまい。
その手附けが濟めばァノわたしや、幸左衛門さまのお屋敷へ。
六三　イヽヤ、やらない。たとへ浮氣であらうとも、六三女房と彫つてある、女を外へはやられない。
市助　それでも手附けのこの兩腰。
六三　手附け欲しくば、おれも渡さう。
ト思ひ入れあつて、道具箱を淸兵衞が前へ持ち行き
モシ、親方、お侍ひが兩腰なら、わしも職人相應に、大工道具のこの箱を、お前を男と見たゆゑお賴み。百兩の出來るまで、御不承ながら淸兵衞さん、預かつて下さりませ。
清兵　イカサマ、お前もそれ程までに、事を分けてのそのお賴み。まんざら無下にもしますまい。手附けの代物、兩方から、預かりますで、どちらでも、身代早いその方へ。
六三　それで六三が面も立つ。忝うござります。

幸左　イヽヤ、それぢやァ身が方の

清兵　ハテ、兩方ながら手附けはお道具。それとも成らぬと仰しやれば、否とも變替へ申しませうか。

幸左　サア、そりやァ。

清兵　どうなされますな。

幸左　そんならいゝわサ。

六三　御承知なれば、手附けの一札。

清兵　それも歸つて印形据ゑ

幸左　身共が方へも

清兵　明朝までに

六三　そんならわしも、金の才覺。

その　ひよんな事から、お前に苦勞を

六三　ハテ、若いうちにやァ苦勞が樂しみ。六三が女房と極印打つた此おその、清兵衛さん

清兵　エ。

六三　預けましたよ。

ト唄、五つの鐘。思ひ入れあつて六三、向うへ入る。

幸左　身共が手附けの濟んだおその、清兵衛、ぬしにしつかり。ナウ、市助。

市助　お氣遣ひなされますな。側には廻しの市助が、頑張つて居ります。

清兵　おそのも必ず案じずとも……おぎんどの、連れ立つて行て下され。

ぎん　サア、おそのさん、來なさんせえ。

その　この上願ふは旦那さん、どうぞわたしを

清兵　ハテ、案じる事は無いといふに。

幸左　併し、大小渡しては、まんざら腰が

市助　旦那、よい物がございます。

ト門口の垣の竹を二本拔いて

モシ／＼、この竹をお差しなすつては、どうでございます。

幸左　これはしたり、此まゝ差しても

ト使ひに來た若黨を見附け

コリヤ／＼、其方の柄袋を出しやれ。

若黨　へイ〳〵、畏まりました。
　　ト若黨、柄袋を取つて渡す。幸左衞門、竹へはめて
幸左　イヤ、これでは見苦しくもないわえ。
市助　左樣でござります。サ、參りませう。
　　トこの時、奥より平助古き襦袢を一つ持つて出で
平助　モシ〳〵、旦那、これでも召してお出でなされまし。
幸左　たわけ面め。いつまで裸で居られるものか。もういらぬワ。コリヤ、身が着類を詮議いたして、明朝までに持參いたせ。
平助　へイ〳〵。出次第に持つてあがります。
淸兵　どうやら急に寒氣立つて……今夜の風呂は見合せて、顏でも洗つて歸らうかえ。
若黨　して、私しへの御返事は。
幸左　成る程、最前參つた狀の
　　ト思ひ入れあつて
ヤヽ、着類と一緒にあの狀を。こりや一大事。

清兵　エ。

幸左　エヽ、極道め。

ト平助を蹴倒す。

平助　これは迷惑。

ぎん　サ、參りませうぞえ。

幸左　お手を引きませうか。

その　知らぬわいなア。

幸左　イヤ、埋らぬ目にあふ。

市助　サア、參りませう。

清兵　ドリヤ、湯を使つて行かうか。

ト佃になり、おその、おぎんは、くめ本といふブヲを下げ、浴衣を抱へ、足早に向うへ入る。幸左衛門、件の形。市助大小を差し、道具箱を擔ぎ、若黨附いて揚げ幕へ入る。清兵衛は奥へ入る。

平助　ハテサテ、あの侍ひめは、やかましい奴ぢや。身ぐるみ取られたれば、あゝ腹も立たうか。ハヽハヽヽ。イヤ、五ツを打つた。拔かずばなるまい。男どもは、どうしをつたやら。

ト また佃になり、向うより於左吉、長八、三助、以前の醫者を引ッ張つて出てくる。醫者は額を隠し、思ひ入れ。跡より仕出し大勢、思ひ／＼に捨ぜりふ云うて出て來り、門口へ來て

皆々 どうするものか。來やァがれ／＼。

仕出 泥坊なら、ぶちのめせ／＼。

皆々 サア、來やァがれ／＼。

ト内へ引摺り込む。

平助 どうした。捕まへたか／＼。

長八 捕まへました。番頭さん、縛つて置きませうか。

平助 マア／＼、とつくりと詮議してからの事にするがよいが、面を見てやらうかいの。

於左 面を見て、灰墨を塗るがよい。

三助 サア／＼、灰墨も拵らへてある／＼。

ト片口に墨を溶いたるを持つてくる。門口には仕出し、捨ぜりふ云つてゐる。平助、醫者の襟首を捕へ

平助 サア、着物をどこへこかした。隠さず云つてしまやァがれ。あのお人の雪駄を盗んだが慥かな證

據だ。有やうに云はぬと、面を眞黒に塗つて、裸にして晒すが湯屋の仕置きぢや。ドリヤ、マア、面を見てやらうか。

ト頭巾を取る。宗庵、惣髪の拵らへ、片面へ痣を拵らへたる體。皆々見て

三人　イヤア。此奴は撫付けの按摩ぢやな。エヽ、太い奴だ。

仕出　好い男だが、太々しい面だな。

ト口々に喚く。此うち向うより權平、海鼠襟の合羽を着たる、醫者の供の拵らへにて、頰かむりにて顏を隱し、留守居提灯を合羽の下へ隱し、跡より若い者一人、これも頰かむりして、衣に卷いたる以前の小袖を抱へ、窺ひ〳〵出で來り、花道中程に隱れて窺ひ居る。

宗庵　コレ番頭、おてまへ方は愚老を捕へて、盜みをしたと申すが、此方決して覺えないが、して、何を盜んだといふのぢや、

平助　エヽ、板の間稼ぎの輩に、ようまア其やうに落ちつかれるものぢや。コレ、てまへが盜んだ代物は、黑い小袖に、紋は鬮切り角に、桐といふ字ぢや。覺えがあらうが、早うこかした所を、云はぬか、云はぬか。

ト胸づくしを取つて、こづき廻す。

宗庵　これサ〳〵、おぬしが方でばかり、愚老が盜んだと申すが、見らるゝ通り、此方は長袖の事、左樣な不埒な事を致すやうな身分ではないぞ。併し、樣子の無い事も申すまい。盜んだと申す證據を出しやれ。

平助　證據は今云うた通りぢや。盜まないものが、なぜあの人の雪駄を盜んだのぢや。

宗庵　イヽヤ、ありや履き違へたのぢや。着物は取らぬぞ。

平助　エヽ、まだ吐かさぬかえ。

仕出　エヽ、小自烈てえ。縛つて〆めるがいゝ。縛れ〳〵。

ト宗庵へむしやぶりつくを、振り放さうとする立廻り。この時、花道の權平、衣を取つて、提灯のあかりを隱し、若い者は小袖を抱へ、二人とも俄に足音高く、思ひ入れあつて

權平　泥坊め、これぢやァない。おれが包みを寄越しやァがれ。

若者　これより外に盜んだ物は無いよ。

權平　太い奴だ。寄越しやァがれ。コレ、これぢやァねえ。

ト二人して云ひ〳〵、門口へ來る。

仕出　なんだ〳〵。喧嘩か〳〵。

ト皆々立騷ぐ。權平は「これではない〱」と云ひながら、湯屋の門口を明け、小袖を内へ投げ込み、若い者を追ひ廻す。仕出しもこれに交り、ドサクサになつてワツと云ふと、件の若い者も一つになつて向うへ駈けて入る。權平、衣にて提灯を隱し、花道にひつそりする。

平助　なんぢや〱、門口に喧嘩があるか。戸を明けようとしをつた。締めて置け〱。

三人　表でも泥坊だと云ひました。

ト三助、戸を締めに出て、打込みし小袖を見附け

三助　モシ〱、番頭さん、こんな着物が捨てゝありやす。

平助　なんぢや、着る物ぢや。どんな物を捨てをつた。

ト廣げて見て

アヽ、黑い小袖に紋があるが、なんぢや、隅切り角に字が附いてある。ヤ、こりやア慥か。

三人　無くなつたお侍ひの小袖でござりますよ。

平助　アヽ、これがアノ、今の、無くなつた

三人　アイ、小袖が出ました。

ト平助、宗庵を見て

平助　イヤア。

トぎよつとする。宗庵、思ひ入れあつて

宗庵　番頭どの、その着類を見せやれ。

平助　アイ。

ト廣げて見せる。この時、幸左衛門が袂へ入れし手紙落ちる。宗庵、小袖を見て

宗庵　五所紋の黒小袖、今もわいらが云ふ通り、隅切り角に桐といふ文字。そんならそれがこの風呂場で、盗まれたといふ小袖だよ。

皆々　エ。

ト恟りする。

宗庵　盗まれたといふ代物が、外から出ては、愚老がよもや盗みはしまい。

皆々　サア、それは。

宗庵　ハテ、天道様は正直だわえ。

ト思ひ入れ。この時權平、そろ〳〵門口へ來り、掛けたる衣をあたりへ捨て、提灯を持つて出て、足早に内へ入り

權平　ハイ、旦那樣、お迎ひに參じました。

宗庵　權平か。

權平　ヘイ、お屋敷から、急にお召しでござりまする。

宗庵　お屋敷からお召しとあつても、歸られぬわえ。

權平　ヘイ、それはなぜでござります。

宗庵　コリヤ權平、愚老は只今、この内の者どもが、身に覺えなき盗人ぢやと申し立て、これまでに覺えぬ惡名受けたれば、所詮生きては戻られぬ。家内の奴等を一々に切つて捨て、愚老もこれにて切腹いたし、死なねばナ、御扶持を頂戴仕る御主人の手前、殿樣のお名の出る事ぢやぞ。この通りを屋敷へ歸り、役所へ審に申してくれい。

ト此うち平助はじめ皆々、ブル〳〵してゐる。

權平　ヘイ〳〵、畏まりました。成る程、外と違ひ、盗人と申されましては、御一分が立ちますまい。いづれとも思し召し次第になさるがようござります。私しはその通りを、お役所へ申し上げに、一走り行つて參りませう。必ずお急きなされまするな。

宗庵　愛い奴ぢや。早う歸つて來い。

權平　畏まりました〳〵。

ト宗庵は座を占めて身拵へする思ひ入れ。權平、走り行かうとするを、平助、縋つてとめる。

平助　アヽ、モシ〳〵、御家來衆、お待ちなされませ〳〵。

權平　イヤ〳〵とめるな〳〵。

ト行かうとするを、いろ〳〵とめて

平助　サア、あの旦那の御立腹は、誠に御尤もでござります。只今では此方が、みな不調法でござりまするが、お前まで腹を立たしつては、相談の仕やうがない。マア〳〵、お鎮まりなされませ〳〵。

權平　コレ〳〵、番頭、てまへ、其やうにとめるが、して、旦那樣の御機嫌の直るやうな、致し方でもあるか〳〵。

平助　サア〳〵そこが、御相談でござります。モシ〳〵、少しお待ちなされまし〳〵。

ト風呂場の脇へ駈けて入る。

宗庵　權平、何やうな事を申さうとも、打捨てゝ置け、是非々々家内の奴等を

ト睨み廻す。皆々、モヂ〳〵してゐる。平助、走り出て來り

平助　モシ〳〵、お供さん、ちよつとお目にかゝりたい。

ト權平を門口へ連れて行き

サア、斯樣でござりまする。誠にこれは、あまり輕少でござりまするが、あなた樣へ金子三兩、差出しまする。どうぞ旦那へ御酒なとあげまして、御機嫌の直るやうに、偏へにお頼み申します、お頼み申します。

ト金を握らせる。

權平　コレ〳〵、番頭、旦那の事を盜人と云つて、三兩出して濟ませろと申すのか。

ト聲高に云ふ。この時、淸兵衞、浴衣を抱へ、出かゝつて、あたりへ散つたる人相書を拾ひ、八軒の灯にて讀む事。平助、權平とめて

平助　アヽ、モシ〳〵、御尤もぢや〳〵……モシ、左樣なら、お前の働らきで、五兩出しませう　これも皆、私しの臍繰りでござります。親方へ知れましては、番頭、大のかぶりでござります。どうぞ、偏へに〳〵。

ト詫びる。權平思ひ入れ。淸兵衞此うち人相書と宗庵とを見比べる事。

權平　そんなら何と云ふ。この金で旦那へ、酒でもあけてくれろとおれを頼むのか。

平助　左樣でござります。どうぞ平淸へでもお出でなされて、御酒なりと。へヽヽヽヽ。

權平　云つては見やうが、どうしてこの位の事で、御料簡はなさるまい。

ト宗庵の側へ來り、五兩の金を出し

モシ旦那、お前樣へ御酒をあげたいと、あの者が私しへ。

ト件の金を出す。宗庵取つて、ひねくり見て

宗庵　屋敷抱への長袖に、惡名附けたその代り、僅かな金で詫びるのか。濟ましてやりたいものながら町宅しても針の宗庵、武家の扶持人、品も多いに盜人の

清兵　新藤德次郎が人相書の事。

宗庵　ヤ。

ト悄りする。

清兵　ハテ、痣やなまづで隱しても、似寄りの者もあるものだ。

トこれにて宗庵、思ひ入れあつて

宗庵　權平、お上の御用、行かずばなるまいか。

權平　ハイ、御勘辨なされて遣はされませ。

宗庵　濟ましてやらうか。

平助　それは有り難うございます。
清兵　ハテ、俄に風が變つて來た。
宗庵　おぬしは何だ。
清兵　ハイ、近所の者でございますが、無難にお濟ましなさるれば、誠に番頭、大きな仕合せ。この上ともに氣を附けさつしやい。
平助　ハイ〳〵、これに懲りました。
宗庵　濟ましてやらうがその代り、惡口ぬかした番頭はじめ、居合す奴等の面を、墨で塗れ。
平助　ヱ……ハイ〳〵、事濟みましたれば、何しに違背に及びませう。何分よろしう。
權平　よい料簡だ。
ト片口の墨を大刷毛にて平助の顏へ塗り
順に廻しやれ。
平助　ハイ……サ、御順でございます。
三人　私しどもゝ
ト於左吉、長八、三助の顏へ順々に塗る事。

平助　ハイ〳〵、お指圖通り

三人　殘らず墨塗り。

宗庵　濟まして歸るぞ。

ト門口へ出かゝり、小袖の袂より落ちたる、手紙を拾ひ開き見る。權平、提灯をあげる。其あかりにて

「下部段介と申す者、御用金百兩持參、當月中旬江戸表へ參るべく候ふ間、道に待ちうけ……」

ト思ひ入れあつて

ハテ、おつりきな。

權平　もしや仕事に

清兵　ヤ。

宗庵　コレ。

ト思ひ入れ。

清兵　この盜人も、どこへ塒を

ト人相書をちよつと見せる。

平助 カア。

ト羽叩きをする。

清兵 何をたわけた。

ト門の戸をバッタリ〆める。これを木の頭。

宗庵 提灯やれ。

トこれをキザミにて、佃節をかぶせて、よろしく、ひやうし

幕

通り神樂のツナギにて引返し

第二番目二幕目

兩國廣小路の場

松阪町の場

役名――六三女房、おきぬ。見世物師、梶の長兵衞。下部、段介。山姥の權九郎。古鐵買ひ、甚八。町役人、與九兵衞。下部、關内。見世物太夫、犬くらひの百。めでた若松の若い者、新八。茶屋女、おしげ。蛇使ひ、お袖。堤幸左衞門。町抱へ、七郎助。めでた若松の抱へ、らし、實ハ稻野谷おはん。足力醫者、針の宗庵實ハ新藤德次郎。

本舞臺、三間の間、正面、蛇娘の看板を掛けたる見世物の小屋、入り口に布交ぜの幕を張り、木戸前よろしく取附け、上の方、下座の口を取込み、正面、板がこひ、横手は葭簀を張り廻したる寄席淨瑠璃の小屋。下の方、同じく一軒の葭簀張り、前側に障子を二枚たて、これに足力採み療治と書き、「阿蘭陀一流痰の灸、針の宗庵」と染めたる小幟を立て、この前に御膳籠の上へ古藥鑵、古庖丁その外瀬戸物、大工道具の古物なぞ、いろ〳〵がらくた物を並べあり、すべて東兩國廣小路の模樣。爰に幸左衞門、前幕の形にて、立ちかゝり居る。下の方に權九郎、誂らへの毬栗頭、廣袖、やつしの上へ古き黑衣を引ッかけ、前に叩き鉦を附け、竹網代の大笠を側に置き、つくばつて居る。これを長兵衞雜股引、木綿やつし蛇娘の木戸番の拵らへ。甚八、木綿やつし股引、尻端折り、紙屑買ひにて、兩人とも幸左衞門に向ひ、詫言して居る。後に仕出し大勢立ちかゝり見てゐる。この見得よろしく、辻打ち、揚弓の音にて幕明く。

長兵　マア〳〵旦那、御料簡なされませ〳〵。

幸左　コリヤヤイ、今も申す通り、行違ひの慮外と申すではないワ。身が懷中へ手をかけしは、正しく違はぬ晝鳶。

權九　イヤモウ、鳶も烏も借り盡した揚句の出來心。

長兵　ヤイ〳〵、何も云ふな。默つて居ろ……イヤモウ、あなたのお腹立ちは、御尤もでございまするお侍ひ樣へ對して、イヤハヤ、申さうやうもない憎い奴でございまするが、いはゞ高の知れた、イヤ、取るにも足らぬ奴でございます。

甚八　お詫び申すも往來中、あなたも御不承ではございませうが、どうぞモウ私しどもに、マア〳〵

兩人　お預けなされて下さりませ〳〵。

ト兩人して詫びる。幸左衞門思ひ入れ。

幸左　エヽコレ、料簡いたす奴ではないが、それ程までに挨拶する事。よいワ、其方どもに免じて、この場は勘辨いたして遣はさう。

兩人　ハイ〳〵、それは大きに有り難うございまする。

ト長兵衞、權九郎に向つて

長兵　いらざるおいらがお詫びを、お聞濟みなされて下さつたからは、有り難いと思つて、サア〳〵、早く逃げろ。もう爰で稼ぐと、おいらが諾きはしねえぞ。

甚八　サア〳〵、早く行け〳〵。

ト思ひ入れ。

權九 ハイ〳〵。

ト もぢ〳〵思ひ入れあつて

これはハヤ、大きに御苦勞でござりやした。

ト 立たうとする。

幸左 コリヤ、待て〳〵、いま勘辨の上、料簡したも、われが身の上を幸ひ、身が問ふ仔細がある。何はともあれ爰は往來、あの大德寺の門前まで同道いたさう。案內いたせ。

權九 エヽ。そんなら、この上、まだ私しに。

ト 思ひ入れ。

幸左 アイヤ、何も氣遣ひな事ではない。この上は、身共がわれに折り入つて、ちつと賴みが……イヤ尋ね問ふべき用事がある。委細はあれにて。

權九 あなたのお供を致しますのかな。

幸左 いかにも。

權九 左樣なら、旦那樣。

幸左 世話であつた。

ト辻打ちにて、幸左衞門、權九郎に先へ行けといふ思ひ入れ。これにて權九郎、思ひ入れあつて入る跡より幸左衞門附いて下座へ入る。仕出しは捨ぜりふにて花道と下座へ別れて入る。長兵衞、思ひ入れあつて

長兵　思ひがけないあの野郎め、姿は以前に變つたが、慥かに山姥

甚八　ナニ山姥だえ。

長兵　なにサ、山出しだが、とんだ鄉在だ。

甚八　ほんに、とんだ奴に係り合つた。時に、おいらも今日は、小早く見世を片附けよう、晩には又、松坂町へ、がらくたの糶り物に行かにやァならねえ。

長兵　イヤ、古鐵屋さん、今日らはしつかりだ。ハタリがありやしたらう。

甚八　コレ／＼、そのハタリとは、何の事だえ。

長兵　エヽ、雜物があつたらうといふ事サ。

甚八　なにサ、わしも昨日までは、襤褸を買つて歩いたが、今日は天氣が好いから、見世を出して見たが、アヽ、がらくたもいけやせぬ。したが、お前方は今日はよからう。

ト荷なぞろ／＼片附けて居る。

長兵　さうサ、今日は天蓋はヤバなり、人がマカルから、相應に錢にもなりやしたのサ。

ト輕業の鳴り物になり、お袖、廣袖、やつし、扱帶の上へ模様の振り袖を肩へ引ッかけ、塗り下駄にて出てくる。此うち甚八は道具を片附け、荷拵らへしてゐる。

長兵　オヽ、お袖、まだハネにやァ早いが、合點だらうの。

そで　アイ、そりやァ承知サ。この間に、ちつと氣を附けようと思うて。

ト甚八、お袖を見て

甚八　オヽ、爰の太夫といふのはアノ

そで　オヤ、お前は昨日の紙屑屋さんだの。ほんに、丁度いゝ所で逢つた。お前に逢ひたかつたよ。

甚八　なんだ、わしに逢ひたかつたえ。何ぞ又、ばらす物でもあるのかえ。

そで　なにサ、昨日わつちが内でお前、紙屑を買つて行きなすつたつけの。

甚八　さうサ、昨日買つて行きやした。

そで　あの中にノ、何は無かつたかえ。

甚八　アイ、有りやした、紙屑が。

そで　エヽ、なにサ、紙屑は知れた事だがノ、アノなにサ、ソレ、大きな厚い紙をノ、二つに押ッぺし

よつて、何かソレ、こんなに文字を書いたものサ。それをノ、あの紙屑の中へ入れて、賣るのぢやァなかつたものを、ツイあの中へ入れてやつたから、お前に逢ひたかつたのは、その反古を一枚返してもらひたかつたからサ。

甚八　ナニ、大きな紙を二つに折つたものだえ。そりやァマァ何だらう。字だといふなら、よもや小倉の色紙ではあるまいし、イヽエ、何もそんな物は見えやァしなんだ。

そで　エヽ、見えねえ事があるものかな。カウ〳〵、横に二つに折つてノ、それを又三つに疊んで、その反古の名をばノ

ト此うち長兵衞、片脇に煙草をのんで居て、この時前へ出て

長兵　これサ〳〵、そんな事を云つて解るものぢやァない。マア、どうした譯だな。

そで　なにサ、昨日ソレ、すいがばれて、内に仕事をしてゐたが、あんまり錢が無くつて困つて居た所へ、この屑屋さんが來たから、幸ひ内に天德寺の古いのがあつたによつて、壁に貼つてあつた腰貼りもひツぺがして、いろ〳〵な紙屑を突ッ込み、やう〳〵六十四文に賣つたが、跡で思ひ出して見たら、ありやァ大事な反古だと聞いたから、わつちがこれまで鏡臺の抽出しへ入れて置いたのを、ツイ紙屑と一緒に賣つてやつたからの事だ。

長兵　なんだ、大事の物だと云ふかと思へば、反古だと云ふ。それぢやァさつぱり解るものぢやァない

そで　イヽエサ、その反古の名は、アノ、エヽ、なにサ、それ〳〵、折紙とかいふ物よ。

甚八　エヽ、あれがアノ折

ト云はうとして、思ひ入れあつて

イヽヤ、無い〳〵。何にもそんな物は、無い〳〵、無かつたよ。

ト長兵衛それを聞いて、思ひ入れあつて

長兵　コレ〳〵、そりやァ何か、西の内の紙だらう。紙面とやらに折つて、また三つに疉んで、その中に字が書いてあつたなら、そりやァ折紙ぢやァないか。

そで　それ〳〵、その折紙の事よ。

トこの時、大ドロ〳〵になり、甚八悄り、うろたへて、お袖を突きのけて

甚八　アヽ、萬歳樂々々々々。

ト兩方の耳をふさいで倒れる。長兵衛お袖、呆れて

そで　エヽ、この人は氣が狂つたかな。馬鹿々々しい。怪我をするわな。

甚八　アヽ、雷は、御免だ〳〵。

長兵　エヽ、おきやアがれ。ありやア小金の芝居のドロ〳〵だわな。さうしてお前、萬歳樂ちやア雷と地震と履き違へたのだ。

ト甚八を引起す。

甚八　エヽ、なんの事だ。おらア雷は嫌ひだから、心得て居て恟りするやつサ。

そで　エヽ、あんまり人を焦らすから、罰が當つたのだ。カウ、お前、きつと明日持つて來て返しな。返さねえと諾かねえよ。

甚八　それだといつて、無い物が、どう返されるものか。

そで　イエ〳〵、お前の今の素振りぢやア、有つたに違ひないよ。

ト兩人爭ふ。長兵衞、中へ入り

長兵　これサ、お袖ほう、どうしたものだ。そんな野暮を云ふものぢやアない。ぬしだといつて、日がな一日、裏店小店の端々から、紙帳の破れ、天徳寺、或ひは腰貼り、障子のへがし、油掃除の紙屑は、溜りませんかと掃き集め、高が二十か三十の、僅かな中で掘出しも、稀には無くつてどうするものだ。コレ、人聞きが惡いッ。そんなしみッたれた事を云はずとも、打ッちやらかして置くがいゝわな。

そで　イエ〳〵、何ぞといふと、男といふものは、そんな大風な事を云ふが、あれも別に賣れば、百や二百にはなるさうだわな。それを一緒に賣つちやァ、みす〳〵お前

長兵　ハテサ、百や百五十の事は、間がよけりやァ直さま取れるワ。商賣柄にも似合はない。そんなしみッたれた事は云はねえがいゝわな。

そで　ほんに、それもさうだの。なんの、これしきの事に馬鹿々々しい。併し、屑屋さん、それとも有つたら、持つて來てくんなよ。

甚八　アイサヽ、有つたら、いつでも持つて來やせうよ。

長兵　コレ〳〵、太夫、おらァちよつとキスをきめてくるから、小屋を頼むよ。

そで　アイ〳〵、ようござりやす。早く行つて來なさい。屑屋さん、頼んだによ。

ト辻打ちになり、お袖は小屋の中へ入る。甚八、荷を擔ぎ、長兵衛附いて花道へ行きかけ、長兵衛思ひ入れあつて立ちどまり

長兵　コレ〳〵、屑屋さん。

ト甚八に囁く。甚八思ひ入れ。

甚八　アイ〳〵、呑みこみやした。

長兵　そんなら、何にしろその反古を一枚、マア持つて來て見せてくんなさい。

ト花道にて兩人立ちどまり

甚八　アイサ、慥かに厚い紙の折紙が有りやしたよ。有つたといつて、あのお袖さんとやらに返して見なさい、十六文にもなりはせず、小面倒だから、あの子には無いと云つたのサ。モシ、有りさへしたら持つて來やせうから、お前、値をよく買つておくんなさいやし。

長兵　併し、又と云つて錢になるといふでもあるまいが、マア〳〵、見た上で、思ふやうな物ならば、百や百五十にやァなりもせうが、何にしても、晩におれが内まで來なさい。

甚八　アイ〳〵、承知しやした。晩には丁度次手がありやす。そんなら

長兵　オヽサ、入口の角から、丁度三間目の長屋サ。

甚八　アヽ、あの豆腐屋の路地かえ。

長兵　さうサ、間違へまいよ。

甚八　ようござります。そんなら長兵衞さん

長兵　待つて居るによ。

ト辻打ち、揚弓の音にて、甚八、荷を擔ぎ、向うへ入る。長兵衞、舞臺へ戻りくる。此うち上手の寄

席の小屋より、侍ひ二人、着流し大小にて出て來る。跡よりおしげ、やつし、前垂れがけにて出てくる。此うち長兵衞は木戸前へ上がる。

しげ　左樣ならあなた、また明日いらつしやりまし。

侍一　オイ〱。明日は住清が『二井戸』を語るさうだが、こいつは聞き事だて。

侍二　あの女の淨瑠璃は、餘ッほど達者なものだ。

しげ　イエモウ、あのお子は、聲柄がようござりますから、別して面白うござりますよ。

兩人　そんなら明日來ませう。

しげ　きつとお待ち申して居りますよ。

長兵　サア〱入らつしやい〱。評判の蛇娘。待ち札〱。

ト辻打ちになり、侍ひは花道へかゝる。向うより七郎助、着流し、日和下駄の形にて、鮭を銚子籠へ入れ、これを提げて出てくる。此うち長兵衞は呼びかけながら、木戸札を入れし笊の中のみだけ錢をさしへ通して居る。七郎助、花道にて侍ひと摺れ違つて舞臺へ來り

七郎　おしげさん、素敵に賑やかだの。

しげ　オヤ、七さん、きついお見限りだね。

七郎　さうよ。この間は、組合の仲直りの一件にかゝつてごたつきよ。春になつて、初めて橋を渡つたのよ。

しげ　さうしてマア、お前は、妙な物を持つて來なさんしたが、いつから魚屋になりなさんしたえ。

七郎　おきやアがれ。こりやアたつた今、そこで魚屋に逢つたが、いゝ鮭があるから、菜の物にでも買つてくれろといふから、直ぐに引ツ提げて來たのよ。

長兵　オヽ、こりやア誰れかと思つたら、七郎助どのか。

ト七郎助、長兵衞を見て

七郎　オヽ、こなさんは長兵衞どんか。ホウ、さうしてこなたは、なにか、爰へはいつから出るのだ。

長兵　アイ、爰へは今日から出やすよ。こなさんも知つての通り、わしやァ山下に大道を張つて居たがこの間この松坂町へ越しやした。

七郎　フム、アノ松坂町へか。ハテさうか。知らねえ事だ。さういふ事とは夢にも知らねえから、わしやアこなさんに、いろ〳〵話しがあるから、今日はわざ〳〵山下へ行かうと思つて居たが、丁度そりやア幸ひだ。晩に尋ねませうよ。

長兵　アイ、何の話しか知らねえが、夜はどうで内に居やす。來さつしやりませ。

しげ　モシ〳〵、七さん、お前、お聞きか知らねえが、今日はアノ駒留さんの所に會がござんすぞえ。

七郎　アイ、聞きやしたよ。昨日わざ〳〵人を寄越したから、ちよつと顔を出さうと思つて、それで出かけて來たのよ。それにしてもコレ、この魚を持つては行かれず。アヽ、どこぞへちよつくり預けて行きたいものだが。

トあたりへ思ひ入れあつて

オヽ、よし〳〵、あの足力の見世へ預けて行くべい。

ト下座の方へ來り

オイ、宗庵さん、邪魔だらうが、コレ、この魚を、ちつとのうち爰へ置いてくんねえ。

ト明けてある障子の間へ魚籠をちよつと置き

オイ〳〵、直に行つてくるよ。

長兵　時に、もう淨瑠璃の寄席もハネるだらうね。

しげ　アイ、イエ〳〵、まだ一段ありましたよ。

ト七郎助、思ひ入れあつて

七郎　エヽコレ、この様子ぢやア、彼の寄席へも行つて、何かの譯も聞いて行かにやアならねえから、

長兵衛どん、松坂町だの。
長兵　アイ、直に入口だよ。
七郎　そんなら晩に行くから、待つて居て下さい。
長兵　アイ〳〵、承知しました。
しげ　そんなら、七郎助さん。
七郎　ドレ、ちよつと寄つて行かうか。
ト辻打ちになり、七郎助思ひ入れあつて、おしげ附いて上手の小屋の內へ入る。長兵衛殘つて
長兵　エヽ、今日はいろ〳〵な、思ひもよらぬ奴に逢ふ日だ。いゝワ、何も構ふ事はない。この間に、
ドレ、一杯引ッかけて來ようか。
ト矢張り辻打ちにて、長兵衛、繋ぎ錢を懷へ入れ、下座の方へ入る。引違へて幸左衛門先に權九郎
以前の形にて、附いて出て來り、あたりへ思ひ入れあつて
權九　そんなら旦那、今のお話しぢやア、千葉の屋敷で金高は、百兩でござりますね。
幸左　オヽサ、しかもその百兩を、コレ〳〵、鵜の目小紋の財布へ入れ、飛脚の下部が持參する筈。し
かも內通いたせしからは、相違は無いワ。

ト權九郎、此せりふのうち、思ひ入れあつて

權九　フム、違ひはない。この間のあの手紙の

ト思はず云ふ。

幸左　ナニ手紙とは。

權九　ナニ、手形をしたより丈夫な仕事だ。隨分働らいて……何ぞ目じるしはござりませぬか。

幸左　オヽ、その目じるしは、兩掛けの荷物にしつかり、千葉の家中、片岡幸之進と記したる、繪符を附けしが慥かなしるしだ。

權九　ようござります。こんな仕事を待つて居たのだ。時に、今日はきつと爰へ來るに、違ひはござりませぬかえ。

幸左　コレ、氣遣ひするな。そこに如才があるものか。

權九　そんならわしも爰らあたりに、頑張つて居りませう。

幸左　コレ、必ずぬかるな。

權九　心得ました。仕し、首尾よく百兩やらかしたその時は。

幸左　骨は盜まぬ。褒美はしつかり。コリヤ、刀にかけて。

權九　イヤモウ、刀にかゝつてすんでの事、臺座の別れと思ひの外

幸左　濡れ手であはよく百兩を

　　　トこの時、ドンと遠寄せの頭を打込む。兩人悧りして、思ひ入れあつて

兩人　ヤア。

權九　エヽ、小金の芝居か。

　　　ト兩人顏見合せ

幸左　思はず身共も

權九　おきやァがれ。

幸左　いかいたわけた。

　　　トどんちやんになり、關內、紺看板、中間の形にて、息せきとして出て來り、直ぐに舞臺へ來て

關內　ヤア、お旦那、これにお出でなされましたか。

幸左　其方は家來關內、あわたゞしい。して、何用ぢや。

關內　イエ、何用ではござりませぬ、急用でござりまする〳〵。

幸左　急用とは何事ぢや。早く申せ〳〵。

關内　何事やら存じませぬが、お相役幸之進さま、仰しやりまするには、殿の御用向きにつき、急に御意得たく、青柳にと承れば、直ぐに其方供いたし、日のあるうちに、お屋敷へ參れよと、申されましてござりまする。サア〳〵、ちつとも早う、お出でなされまし〳〵。

幸左　すりや、殿の御用につき、アノ幸之進どのが、急に面談いたしたいとな。

關内　左樣でござりまする。お供いたして參りませう。サア〳〵、お出でなされまし〳〵。

幸左　エヽコレ、折の惡い、今といつては……さりながら、急御用とあれば是非がないが……イヤ〳〵どうも今は、コレ〳〵、われへ先へ歸り、身共に間違うて逢はぬと申せ。其うち後より罷り歸るであらう。

關内　ヘイ〳〵、左樣ならお旦那には、廣小路でお目にかゝりましたら、間違うて逢はぬと申せと、申しましてござりますと申しますのか。

幸左　エヽ、べらぼう面め。さうではないワ。只逢はぬと申すのぢやわヤイ。

關内　ハイ〳〵、只逢はぬのぢやわやい。

幸左　エヽ、たわけ面めが。アヽ、困つたものだ。エヽコレ、參らずばなるまい。コレ〳〵、いま聞く通り、身共は急な御用向きゆゑ、參らねばならぬ程に、きつとわれに賴んだぞよ……よいか、必

ずともにぬかるまいぞ。

權九　ようござります。わしが賴まれたからは、五分でも間違ひはござりませぬ。ちつともお氣遣ひなされますな。私しが呑み込んで居りますよ。

幸左　オヽ、小氣味のよい奴だ。先刻に云ふ通り、首尾よく行つたら、合點か。

ト權九郎に囁く。

權九　呑み込みました。直ぐにあなたのお屋敷へ。

幸左　コレ、首尾よく致せ。

權九　ハテ、御念には及びませぬ。

幸左　オヽ。然らば關內、供いたせ。

關內　サア〳〵、お出でなされませ。

幸左　とは云ふもの丶……首尾よく致せ。

ト思ひ入れ。流行り唄になり、幸左衞門、心を殘すを、關內せり立て〳〵、東の花道へかゝり、幸左衞門、思ひ入れあつて關內に囁く。關內呑み込み、引返して直ぐに下座へ入る。此うち流行り唄にかすめてドン〳〵をかぶせ、幸左衞門、心を殘す思ひ入れあつて東の口へ入る。あと彈き流しの合ひ

方。權九郎跡見送り

權九　お氣遣ひなされますな。うまくやつてお目にかけませう。

ト思ひ入れ。この時向うより段介、胸當て紺の脚絆、草鞋がけ、旅奴の拵らへ、誂らへの繪符を附けたる兩掛けの荷を擔ぎ、片手に菅笠を持つて、スタ〳〵と出てくる。此うち權九郎、衣を着たなり、手早く網代笠をかむり、道心者の思ひ入れにて、鉦を打つてゐる。段介、花道にとまり、思ひ入れあつて

段介　ヤレ〳〵、逆井の渡し場で、思ひの外に手間どつた。もう七つも打つたであらう。さりながら、最早爰は兩國の廣小路。お上屋敷ももう僅か。とてもの事に、ドレ、一息にほッつけようか。

ト舞臺へ來り、行かうとする。此うち權九郎、修行者の思ひ入れにて、段介の行く先に立ちふさがつて、鉦を叩きながら、片手を出し、報謝を乞ふ思ひ入れ。

ア、持ち合せが無い。附くな〳〵。

ト權九郎、矢張り附きまとふ。

ヤア、道を急ぐ旅の者。附くなと申すに。

ト權九郎、これに搆はず「ア、〳〵」と云ひながら、行く先へ附いて廻ろ。

エヽ、聞分けの悪いどう乞食め。そこ退き居らぬか。

ト權九郎を搔きのけて行かうとする。權九郎、わざとヒヨロ〳〵して、バツタリと轉ぶ。

權九　アイタヽヽヽ。こりや、投げたな〳〵。こりやァ膝頭を素敵にぶちこはした。サア〳〵、大事だ。大事だ〳〵。

ト腰の手拭を取つて手早く足に卷きつけ、段介に搦りより

コレ〳〵、待たつしやい。何も料のないおれを、何の意趣があつて、此やうに投げ出したのだ。

段介　アヽ、コリヤ〳〵、何しにわれを投げるものだ。ほんの時のはずみ。元より意趣のなんのと、此方に覺えはない。怪我と申すものぢやワ。投げたと思はゞ、料簡しやれ〳〵。

權九　なんだ、料簡しろも凄まじい。ヤイ〳〵、よく聞きやァがれ。思ふさま人をぶんのめして、疵まで附けて置いて、厚かましい、料簡しろとさへ云やァ濟まうと思ふか。コレエヽ、當がひ扶持の二合半、ぶんぬき中間ではそれでも濟まうがナ、おいらが方ぢやァ流行らねえワ。エヽ、馬鹿な面の小二才めだ。

段介　コリヤ、おのれ、武士たる者の家來に向ひ、悪口雜言、往來の人の報謝を乞ふ、道心者と思ひの外、さてはうぬは强請りだな。

權九　ヤイ〳〵、默りやァがれ、駄折助め。ついに一度、蟲を一疋殺しもしねえまッかう人に、强請といふ正札は、よく思ひ切つて附けやァがつたな。その代りにやァ只は濟まねえ。オヽ、貧乏ゆるぎもさせはしねえ。サア、濟まねえぞ〳〵。野郎め、マァさう思つて居やァがれ。

段介　ムウ。して、只は濟まぬと申すが、そりやァどうするのだ。

權九　そりやァ外でもない。うぬが懷に持つて居る、鶉の目小紋の渦あられ、財布と共に百兩を、養生代に置いて行け。

段介　イヽヤ、そりやァならねえ。よし又おれが懷に、金が有るまいものでもないが、分けて詳しく財布まで、鶉の目小紋の渦あられ、身にふりかゝる段介が、命を添へて大切な、その金高も百兩と、知つて居るのが聞きどころ。こりやァ誰れぞに賴まれたな。サア、その賴み手を眞直に、キリキリ爰で吐かしやァがれ。

權九　イヽヤ、おらァ誰れにも賴まれはしねえ。こま事云はずと、キリ〳〵金をさらけ出せ。

段介　イヽヤ、さうはならねえ。

權九　エヽ、面倒な。

トどん〳〵になり、後よりかゝるを段助、荷物を下に置いて、これを振り切る立廻り。兩人、タナタ

ザとして、荷物の方へこけかゝり、權九郎、手に觸る繪符を引拔いて打つてかゝる。段介、これを捕へて引ツたくる。權九郎は、段介の懷より金財布を引出す。よき時分、下座よりお袖出かゝり、後に窺つてゐる。段介、財布へ手をかけ渡さじと、片手に持つたる繪符にて權九郎に打つてかゝるを、權九郎これを拂ひのけるはずみに、繪符を後の木戸前に拋りつける。段介「南無三」と財布へ手をかけたまゝ、木戸の方へツカ／＼と寄つて、笊の側の木戸札を、繪符と間違へて引ツたくる。この時お袖、ズツと寄つて

そで　これナ、その木戸札をどうするのだ。

ト この中へ入る拍子に、權九郎、財布の紐を引切る。

段介　エヽ、邪魔な女め。

ト小太鼓の片シヤギリになり、段介、お袖を搔きのける。此うち權九郎、金財布を持つて驅け出す。

南無三、財布の紐を。

ト行かうとするを、お袖、邪魔をする。この間に財布を持つて下座へ逃げて入る。段介、うろたへてお袖を突きとばし、跡を追うて入る。片シヤギリを打ちあげる。お袖殘つて跡を見送り、呆れし思ひ入れ。

そで　なんだえ、あの手合ひは、狂人ださうだ。おへねえ耄碌ぢやァねえか。

ト「大阪放れて」の唄の入つたる輕業の鳴り物になり、下の足力の内より宗庵、やつし、袖無し羽織足力按摩の拵らへにて出て來り

宗庵　オヽ、そこに居るのは、お袖ぼうぢやァねえか。

トお袖、振り返り見て

そで　オヤ、宗庵さん、お前、この間は、お忙がしいかえ。

宗庵　さうサ、どうしても春先は療治もあるのサ。そりやァさうと、おぬしによんどころない用があるが、今朝から間が悪くつて逢はなんだ。幸ひ丁度いゝ間だ。マア、ちよつと爰へかけやな。

ト床几へ腰をかける。

そで　なんだな、宗庵さん、氣味の悪い。よんどころない用とは、何の事であります。早く云ひねえ。

ト嫌らしく思ひ入れあつて、同じく床几へ腰をかけて、宗庵が方へ寄る。

宗庵　その用といふなァ、ナニ、あんまり早急だが、ちつとのうち、なんと、おれが女房になつちやァくれめえか。

トお袖、思ひ入れあつて

そで　エ、なんだえ、女房になれえ。よしねえな、人ぢらしな。そんな事を云つて、また後で困らうと思つて。

宗庵　なんだ、困りやァしねえよ。却つて諾いてくれなけりやァ困る譯だ。

そで　ほんに困ると云ひなさりやァ、わつちだといつて、まんざら腹からの蛇使ひでもござりやせぬ。元はアノ鎌倉の、石部屋といふ内に居やしたが、その内の才次郎といふ息子が、なにがわつちに手を附けて、妊娠になつたところで、ちつと譯合ひがあつて、その内をだりむくり、それから仕やうもやうもなく、やう／＼子をば産み落し、江戸へ來るとその子も死んで、幸ひと濯ぎ洗濯賃仕事、乳の出るのがまだしもと、一分四百の里扶持を、手當り次第幾人でも、なんでもござれにこの頃中、あの長兵衛どんといふ人に勸め込まれて、恥かしい、いづれも樣のお弄さみ、押しの重たい蛇使ひとは、モシ、いゝ業晒しの見世物だね。

宗庵　なんのサ、それが恥かしい事があるものか。何をするのも身過ぎ世過ぎだ。なにも外聞の惡い事はねえ。ハテマァ、そんな事は打ッちやらかして、コレ、おれが云ふ事を諾かねえか。

そで　そりやァお前、眞實なら有り難いが、おどけならよしねえ、罪になるよ。そりやァお前、眞實嬉しいと云はして置いて、笑はれる、アイ、わつちでもねえのサ。それにやァ譯がありやせう。何

ぞ玉になる事か。お前の事なら何なりと、お先になるのは當り前サ。

宗庵 エヽ、あんまりお先になるやうなてめえでもあるめえ。コレ、さう星を指されたら、譯も話して聞かせうが、おぬしの爲にもなる事だ。コレ〳〵、斯ういふ理屈よ……外の事でもねえが、おれもこの間中から都合が惡くつて、困つて居る所へ、昨日の晩、元町に、捨て子があつたらう。なにが、そいつを町内へ引上げて、貰ひ手の有り次第、養育金を三兩附けてくれるといふ事だによつて、早速昨夜、番屋へ貰ひに出たところが、何かいろ〳〵な事を訊いた上に、其許は獨り者のやうに聞いたが、女房はと云ふから、流石のおれも當惑したが、フッとおぬしが乳があつて、里子を取る事も知つて居るから、成る程、女房もありますが、夫婦稼ぎに、これも朝から晩まで、内にと云つては居りませぬが、名はお袖と云ひますと、出鱈目にてまへの事を云つて置いたから、どうぞ、その捨て子を貰ふうち、ちつとの間、なんと、おれが女房のつもりになつてはくれまいか

そで 大方そんな事だらうと思つたよ。そりやアモウ、どうでもいゝがノ、その養育金とやらは、お前が取るのかえ。

宗庵 ハテ、その金だといつて、丸ッきり取つたところが三兩ばかり、そんな事にこせつくおれぢやアねえが、いま云ふ通り、折惡しく工面が惡いから、取らねえのも損だから、トいつておれも一人

で取らうとは云はねえ。その中をコレ、一兩てめえにやらうから、引取るうち、いゝやうに調子を合せてくれ。コレ、頼むワノ〳〵。

そで　いゝわな。さういふ事なら仕方がない、不承ながら、お前の女房だと云つてやらうがノ、その代りにやア、一兩は間違ひなく、きつと寄越しなよ。

宗庵　よく極める奴サ。

そで　それでも、お前のやうな者は、極めてさへまかうものを。

宗庵　いゝよサ、コレ、引取ると、現金だ。

そで　有り難いね。お禮から先へ云ひやせう。

ト此うち始終輕業の鳴り物にて、この時向うより與九兵衛、裾細の袴にて、町役人の形にて出てくる跡より番人、股引尻端折り、捨て子を抱き、附いて出てくる。宗庵、お袖に囁く。お袖、思ひ入れあつて、足力の見世へ入る。花道の兩人は直ぐ舞臺へ來り

與九　オヽ、足力の宗庵どの、そこに居られたか。

宗庵　これは、お家主の與九兵衛さま、サテハヤ夜前は。

與九　イヤモウ、折惡しく行事に當つた事ゆゑ、世話も是非がござらぬ。その節の一件につき、貴樣の

宅を檢分ながら、宿元にて引取いたさうと、尋ね參つたところが、見世にと承りしゆゑ、ちつとも早く埒明けようと、それゆゑ爰へ、わざ〳〵參つた。

宗庵　それは別して御苦勞でござりまする。イヤモウ、何かは夜前お話し申しまする通り、私しどもは夫婦稼ぎの事、女房など申して、宿には一向居りませぬ。幸ひ只今用事があつて、見世へ參つて居りますれば、お近附きの爲

ト見世の方へ向ひ

コレ〳〵、お袖や、ちよつと來やれ〳〵。

そで　アイ〳〵。

ト云ひながら出て來り

宗庵さん、何だえ……アヽ、彼の

宗庵　これサ。アレ、あのお方は、與九兵衛さまといふお家主樣だ。てまへとも相談した、子供の事について、わざ〳〵爰へお出でなされたのだ……ハイ〳〵、これが私しの女房でござりまして。

與九　オヽ、ヤレ〳〵、これは初めて逢ひました。時に、宗庵どのゝ云はるゝには、捨て子の子供を、たつて貰ひたいとある、至極奇特な事でござる。それゆゑ、子供は勿論、その節申した通り、養

育金も即ち三兩、これへ持つて參つてござる。
そで　イヤモウ、それが何より肝腎でござりますのサ。そんなら宗庵さん、早く引取りねえな。
宗庵　オヽサ、何もかも承知だ……イヤ、左樣なら、これでお渡しなされて下さりまするか。
與九　オヽ、渡さないでは。コレ〳〵、七助、その子をそこへ、渡して進ぜろ〳〵。
番人　ハイ〳〵。イヤモウ、私しなぞは、早く渡したくつてなりませぬ。サア、おかみさん、受取つておくんなさい。
ト赤子をお袖に渡し
そで　ヤレ〳〵、昨日の晩から、まんぢりともしませぬて。ほんに、こりやアとんだ好い子だよ。これからは、このお母さんが育てるによ。ヤレ〳〵、可愛や。オヽ、たがよ〳〵。
ト思ひ入れ。此うち與九兵衞、懷の紙入れより三兩出し
與九　コレ〳〵、宗庵どの。サア〳〵、養育金の三兩、改めて受取らつしやれ。
ト渡す。宗庵、金を受取り、捨ぜりふにて、ちよつと改める。
宗庵　ハイ〳〵。これはハヤ、有り難うござります。慥かに受取りましてござりまする。

與九　そんなら宗庵どの、印形持つて、明日の朝までに、番屋まで來さつしやれ。
宗庵　ハイ〳〵、心得ました。これは大きに御苦勞でござりました。
與九　コレ〳〵、必ず面倒見てやらつしやれや。
そで　なにもお氣遣ひにやァ及びやせぬよ。
與九　そんなら、二人の衆。
宗庵　これは途中で、お茶さへ差上げませぬ。
ト矢張り輕業の鳴り物にて、與九兵衞に番人附いて向うへ入る。お袖、宗庵殘り、右の三兩を持つて跡を見送り、思ひ入れあつて
たつたこればかり取るといつて、素敵に骨を折らしやァがつた。したが、これでも取らねえにやアましかえ。
ト金を懷へ入れようとする。
そで　カウ〳〵、お前、約束の物はどうする。直ぐに爰で分けてくんなさいな。
宗庵　オヽ、ほんに、さうだつけ。
ト包み紙を二つに破り、南鐐を四つ包み

これはマア、里扶持心で取つて置くがいゝ。

ト渡す。お袖、取つて見て

そで　コレナ、こりやアたつた二分しかないによ。これぢやア約束が違つた。もう二分寄越しねえ。

宗庵　さうよ、おれもてまへに一兩やらうとは思つたが、ちつと工面の悪い事があるから、跡の二分は當分借りだ。その代り、おまけにやアその餓鬼を、當分てまへの内へ連れて行つて、朝晩乳を飲ませてやつてくれ。コレ、後生になるワ。

そで　エヽ、ぶるい事を云ひねえな。そりやモウ、お前の事だによつて、乳はあるし、預かりもしようが、なんぼ苦しがりだといつて、あんまりだ。コレナ、そんな事を云はねえで、もう二分寄越しなよ。エヽ、お前にも似合はねえ始末合ひだよ。

宗庵　オヽサ。おぬしの云ふのは尤もだ。おれも、こんな事を云ひたくはねえが、二兩二分といふ金が是非々々無くつちやアならねえによつて、マア、不承ながら、さうしてもらはにやアならない。ハテ、假にも夫婦だと云つたからは、おぬしが爲にやアおらア亭主。その亭主が難儀を見ては居られまい。コレ、里ッ子一人取つたと思やア、濟まうぢやアあるまいか。

そで　さう割り口說きなされば、わつちだといつて、何も云ふ氣は無いが、コレ、必ずその心意氣を忘

れなさんな。

宗庵　ナニ忘れるものか。とぼけやァしねえワ。

そで　エヽ、人ぢらしな男だなう。

ト思ひ入れ。この時、後にて

樂屋　どつと褒めたり。

ト輕業の鳴り物になる。兩人思ひ入れ。

宗庵　オヽ、もうハネか。

そで　そんなら宗庵さん、明日お目にかゝりやせう。

宗庵　ドレ、そろ〳〵見世を片附けようか。

ト辻打ちになり、お袖、赤子を抱き、思ひ入れあつて向うへ入る。宗庵は足力の見世へ入る。この鳴り物を借りて、下座より長兵衛出てくる。

長兵　ヤレ〳〵、おらが夫太めが、さぞ待つて居るだらう。送つてやらずばなるまい。

ト云ひながら、木戸より内を覗き見て

オヽ、如才は無い、先へ歸つたと見える。ドレ、小屋を片附くべいか。

ト木戸場へかゝり、笊の中へ入れし木戸札を集めて居る。この時、以前の繪符を見附け、取上げ見て

こりやア何だ。「千葉の家中、片岡幸之進。」

ト讀み、思ひ入れあつて

こりやコレおれがその以前、勤めて居た、アノ下總の

トちよつとあたりへ思ひ入れあつて

どうしてこれが……フム、爰にあるのぢやア、おれが身の上を氣取つてか。それにしても、この繪符を爰に置いたは。

トいろ〳〵思ひ入れあつて

アヽ、まゝよ。何にしろ、マア、忍ばせて置くべい。

ト右の繪符を笊の中へ、札と一緒に入れ、その上へ木綿の座蒲團を打ちかけ、捨ぜりふにて、あたりを片附けて居る。ト唄になり、上の淨瑠璃の小屋の内より

きぬ　アイ〳〵、そんなら明日、お目にかゝりませうかいなア。

ト云ひながら、小屋の内よりおきぬ、好みの形、引摺り下駄にて出て來る。長兵衞見て

長兵　ヤア、わりやア娘のおきぬではないか。

トおきぬ悄り、思ひ入れあつて

きぬ　さう云ひなさんすは、父さんかいなア。

長兵　コレ〳〵、父さんどころかい。おのれはマア、いつの間に、この江戸へ戻つて來たのだ。さうして、爰らあたりにまごつくからは、こりやア又あの六三野郎の所へ、行きをつたのだな。おのれはなア、おのれはなア。

きぬ　イエモウ、お前の腹立ちなさんすは、尤もではござんすが、わたしがこのお江戸へ出て、すごすごと參りましたも、樣子あつての事でござんすわいなア。

長兵　そりやアハヤ、樣子もあらうが、マア、おれが云ふ事をよく聞けよ。いつぞやあれほど六三郎が手を切つて、アノ鎌倉の帶屋の長右衛門どのはナ、元からおれが懇意な人でもあり、殊に女房というてはなし、幸ひと思うて、われを達て賴んで戻り、その後はおれが方からも、さつぱり音信をせぬはナ、却つてわれが爲を思ふからの事だワ。ヤイ、そのマア世話になつた長右衛門どのゝ所をば、どういふ譯で拔けて來たのだ。サア〳〵、その譯を吐かし居らぬか。

きぬ　サヽ、そりやお前の云はしやんすは、道理でござんすが、樣子といふはその事ぢやわいなア。お前は何にも聞かしやんせぬか知らぬけれど、その帶屋の長右衛門さんはナ、不慮の事で、あの鎌

倉の六浦川といふへ、身を投げさんして内方の騷動。それについては、どのやうな、もしやこの身に難儀でも、サ、かゝる時はお前にまで、自然と苦勞をかけるが辛さ。それを思うてとつかわと、やう／＼江戸へ來る事は來ても、お前のござんす所は知れず、それゆゑお前も知つて居さんす、あの七郎助さんのお世話でナ

長兵　六三が所へうせたといふのか。

きぬ　アイナア。

長兵　そんならアノ帯屋の長右衞門は、アノ六浦の川へはまつて、水死したといふのか。アノ水死

ト思ひ入れあつて

どういふ譯か知らねえが、そんならヅキが

きぬ　エ。

ト思ひ入れ。長兵衞、氣を替へ

長兵　イヤサ、そりやアさうと、見れば、わりやア、この隣の土場から出た様子だが、おれもこの間中この近所へ店を借りて、しかも今日からコレ、爰の小屋を張つて居るが、そんならてまへは、なにか、この淨瑠璃の寄席へでも出るのか。さうか／＼。

きぬ　サア、わたしぢやというて今更に、土場へ出る氣はござんせぬが、兎角にこの身の不仕合せ、せう事なしの思ひつき。それもやう〳〵一昨日から、それゆゑお前が、このあたりにござんす事もえゝ知らず、尋ねませぬはわたしが麁相。モシ、堪忍して下さんせえ。

長兵　ソレ見やアがれ。それといふのもナ、あの大工の六三めに、いつまでもくッついて居るからの事だワ。又も彼奴が所へ行つたと聞いちやア、たとへ一日半日でも、われをやつちやア置かれぬわえ。思はず爰で逢つたが幸ひ、サア〳〵、直ぐにこれから親のおれが内へ歸れ。コレ、あの六三はナ、てまへが爲には貧乏神だワ。モウ〳〵、再び彼奴が事は思ひ切つて、サア〳〵、おれと一緒に、内へ來やれ〳〵。

トおきぬが手を取つて引立てにかゝる。

きぬ　サヽ、さうではござんせうが、マア、何事も今日のところは、六三さんの所へ行つて、よく事を分けて話した上、お前の所へ行かう程に、どうぞさうして下さんせいなア。

長兵　イヤ〳〵、幾度その手を食ふものか。コレ、よく聞けよ。一體われは六つの年、親知らずにこの長兵衛が貰うて、年月養育した、われが爲には義理のある、コレ、親だぞよ。エヽ、うぬに騙されていゝものかいやい。

きぬ　そりや、モウ常々お前の云はしやんす通り、わたしが爲には義理ある父さん、そのお前を勿體ない、なんのマア騙しませうぞいなア。もしいなア、さうして、聞いて下さんせ。どういふ事にかわたしはナ、この頃中から、夜に入ると、モウ〳〵眼が不自由になりまして、一向物の黑白も見え分かず、とんと困り切りまするゆゑ、お前に逢うたら、この事を云はう〳〵と、サア、思うて居たに丁度折よく、逢うたを幸ひ、爰から直ぐにと云ひたけれど、やがて日足も入相時。又もや因果な夜の盲目。その不自由はわたしゆゑ、お前にお世話も何一つ、心に任せぬその上に、却つて苦勞をかけるが辛さ、それぢやによつて、行つたとて詮ない事。諦めさんして、どうぞ今日のところは、早う歸して下さんせいなア。

長兵　ナニ、そんならわれは鳥眼になつたといふのか。アノ鳥眼に……コレ〳〵、そりやマアほんの事かよ。

きぬ　何しに嘘を云ひませうぞいなア。

長兵　エヽ、とつけもない病持ちになりやアがつたな。イヽワ、何も氣にする事は無いワ。生れついた不具といふではなし、病の事なら、癒る時には癒らうワ。さういふ事なら猶の事、六三が所へはやられない。おれが内は、ツイそこだによつて、暗くならねえうちに、ちつとも早く、サア〳〵

一緒に歩べ〳〵。

きぬ　ぢやというて、今というてはどうも

長兵　ハテサテ、イケ情のこはい。キリ〳〵とうせをれ。

ト長兵衞、おきぬを無理に引立て行かうとする。曲撥になり、下座より權九郎、頰かむりをして、以前の財布入りの百兩を持ち、無性に駈けて出て來り、おきぬを突き倒し、長兵衞に行きあたる。これにて兩人惘りして、長兵衞、おきぬを引起す。この途端に權九郎、襟にかけたる聾の木札、紐切れて落ちる。權九郎、キヨロ〳〵しながら花道へ行きかける。また立戻つて、あたりを見廻し、下の方の以前の籠に入れし鯰を見附け、手早くこれを引出し、右の財布を鯰の口へ無理に押込んでゐる。此うち下座より關內、頰かむりをして、權九郎が跡を追うて、ツカ〳〵と出て來り、この體を見て、そろ〳〵後へ廻つて、怖々、權九郎が金を隱すを見てゐる。長兵衞、權九郎が方へ行かうとする時、おきぬ、膝が痛むといふ思ひ入れ。これにて長兵衞、おきぬを介抱しながら、片脇へ寄つて居る。矢張り曲撥にて、下座より段介、いきせき出て來り、これもキヨロ〳〵しながら、下の方へ行きかけ、權九郎を見附け、引ッ捕へて

段介　ヤア、爰にうしやァがつたか。イケ盜人め。動きやァがるな。

ト權九郎に摑みかゝる。これにて關内は、コツ〳〵下座へ入る。權九郎は鮭を緣の上へ置き、段介を振り切り

權九　エヽ、しつッこい野郎だ。おらア知らねえわえ。

段介　知らぬと云つて、其まゝに置かうか。

ト權九郎を引留める立廻り。兩人タヂ〳〵として、後の障子へバッタリこけかゝる。此うち始終曲撥にて、障子を明け、宗庵、黑木綿の頭巾をかむり、鉢に入れたる膏藥を練りかけながら

宗庵　なんだ、この手合ひは。靜かにしないか。フウ、こりやア通りかゝりの喧嘩か。これサ〳〵、マア、靜かにさつしやい。

ト鉢を持つたまゝ二人を引分けにかゝる。兩人拂ひのける。この拍子に宗庵が持つたる膏藥の入りし鉢、はずみにて上の方へ飛び、おきぬが襟元へあたり、鉢は二つに割れて飛びちる。おきぬ「アツ」と云うて下に居る。長兵衞、吃りして介抱する。これにて練りかけし膏藥、おきぬが耳のあたりへかかる。權九郎、段介摑み合ふを、宗庵、二人を無理に引分ける。權九郎は振り切つて一散に向うへ駈けて入る。

段介　イケ盜人め。うぬを逃がしていゝものか。

ト宗庵を振り切り、曲撥にて、權九郎が跡を追うて入る。三人殘り、宗庵は合點のゆかぬ思ひ入れにて、二人が跡を見送り居る。此うち長兵衞、立つたり居たり、ウロ〳〵して、おきぬを介抱する。

長兵　エヽ、彼奴らはマア、とんだ事をしやアがつた。何を取つてぶッつけたのだ。人の大事の娘に、怪我でもさせたら、どうせうと思やアがる。

ト云ひながら、おきぬが襟のまはりを見て、膽をつぶし

ヤア〳〵、こりやアなんだ〳〵。コレ〳〵、娘、われは怪我をしたか。これサ、どこも痛みはせぬかよ。エヽ、とんだ事をしやアがつたな。

トうろ〳〵する。

きぬ　イエ〳〵、疵も附いたやうには覺えませぬが、何ぢややら氣味の惡い。いつそ爰らあたりが

ト耳のあたりを撫で廻す思ひ入れあつて、

エヽ、ほんに何やら、いつそ耳に入つたさうにござります。父さん、よう見て下さんせいなア。

長兵　サヽ、それだによつて、どこも痛みはせぬかとわれに訊くのだ。コレ見ろ、オヽ、剛氣に耳へ入つたワ。コレ、てまへはマア、聾にでもなつて見ろ、意氣地は無いワ。こりやマアなんだ。オヽ、定めし熱かつたであらう。コレ娘、耳を火傷したか……これサ、娘。

ト此うちおきぬ、膝の前に落ちてある以前の聾の木札を見附け　長兵衛がせりふのうち、片手にてソツとこれを取つて見て、思ひ入れ。此うち宗庵、着物へ茅薬のかゝりし思ひ入れ。捨ぜりふにて下の方にて、手拭を出して、あちこちとこれを拭ひ居る。長兵衛は、おきぬが黙つて居るゆゑ、あせる思ひ入れあつて

ヤイ〳〵、なぜわれは口をきかぬのだ、これサ、娘、エヽ、これほど云ふに黙つて居るは、わりやア聾になりはせぬか。コレ、耳は聴えるかよ。

トおきぬが耳の側にて大きな聲にて云ふ。おきぬ思ひ入れあつて

きぬ　アイ、わたしや爰では、住清と云うて、この寄席へ出ますわいなア。マア〳〵、何ぢややら、この耳がモウ、痛うて〳〵なりませぬわいなア。

長兵　ソリヤ〳〵〳〵、聾になつたに違ひはない。とつけもない挨拶をしやアがる。エヽ、いま〳〵しい。困つた事をしやアがつた。

ト立上がらうとして、側にある鉢の割れたを見附け

コレ〳〵〳〵、これだ〳〵。

ト鉢を取上げ、よく〳〵見て

なんだ、こりやア……へエ、こりやァこれ膏藥だが、どうしてこれを

ト鉢を持つたまゝ、合點のゆかぬ思ひ入れ、あちこち目を附ける。此うち宗庵も片割れを取上げ

宗庵　エヽ、いま〳〵しい。とんだ奴にかゝり合つて、鉢を一つ割つてしまやアがつた。エヽ、コレ。この缺けはどこへ行つたか。

ト鉢を持つて、そこらを尋ねる。長兵衛、此うち、宗庵が鉢の缺けを持つて居るのを見附け、思ひ入れあつて、

長兵　フウ、その缺けた鉢は、こなさんのか。

宗庵　アイサ……ハア、この缺けは、そこにありましたか。ハテ、こりやァわしがのサ。

ト何心なく長兵衛の持つてゐる鉢を取らうとする。長兵衛思ひ入れあつて

長兵　ナニ、わしがのもすさまじい。コレヤイ、よくこんな物をぶッつけて、大事の娘を聾にしやァがつたな。これからは、うぬが相手だ。さう思やアがれ。

ト宗庵、思ひ入れあつて

宗庵　コレ〳〵、そりやア間違ひだ〳〵。そりやァ尤もだが、斯ういふ譯だ。マア〳〵、聞かつしやい今のどさくさに、二人が摑み合つて、わしが見世へ踏み込まうとしたから、膏藥を煉りかけたま

ま、中へ入つて留めようとしたら、あの手合ひが拂ひのける拍子に、思はず飛んだと思つたが、そんならアノ、怪我をさつしやつたのか。こりやア氣の毒な事だ。全く怪我といふものだ。

長兵　イヤ〳〵、怪我でもあらうか、相手はわれだ。うぬがやうな奴は

ト割れた鉢を振り上げ、宗庵の顏をキツと見て、思ひ入れあつて

フム。どうやら、われは。

ト宗庵も長兵衞の顏を見て

宗庵　さう云ふわれは

長兵　慥かに以前の、頭の新藤。

宗庵　同じ仲間の梶の長兵衞。

長兵　頭。

宗庵　ヤレ、久し振りで

兩人　逢つたなア。

ト思ひ入れあつて

長兵　イヤ、わしやアこなさんの面體が變つたゆゑ、ツイ頭、見違へましたよ。

宗庵　オヽサ、おれも不仕合せで、ヅキが廻つて、せう事なしに面を變へやうばつかりに、わざ〳〵附けたこの痣よ。そりやァさうと、わりやァ早く足を洗つて仕合せだ。そんなら今ぢやァ、このあたりに。

長兵　アイサ、わしも疾から香具師仲間へ入つて、ぶらついて居やしたが、相應な引ッ張り物があつたによつて、この間松坂町へ引ッ越して、爰の小屋を張るのは、やう〳〵今日が初めてサ。それだによつて、こなさんが、爰に居るのは夢にも知らねえ。聞けば、こなさんには、何やら味な噂もあつたが、マァ〳〵、達者でめでたうごんす。

宗庵　イヤモウ、話せば長い事だが、おぬしも知つて居る通り、一旦足を洗つた體で、あの鎌倉で帶屋といふ、暖簾も掛けた長右衛門、商人とまでにはなつたが、あの三ツ星の金の事から

ト此せりふにて、おきぬ、ハツと心附いたる思ひ入れにて

きぬ　エヽ。

ト宗庵へ目を附ける。兩人も振り返り、三人顏見合せ、この時、ゴーンと入相の鐘鳴る。これにておきぬは心附き、目の不自由なることなし。宗庵思ひ入れあつて

宗庵　あの女は。

長兵　これサ。

ト押へる。矢張り捨て鐘思ひ入れあつて

アヽ、もう入相ぢやさうなが、彼奴も

トおきぬへちよつと思ひ入れあつて

コレ、頭。

ト宗庵へ囁く。宗庵思ひ入れあつて

宗庵　ウム、そんならあれが烏眼の上に、俄聾になつたといふのは、われが娘のアノおきぬか。

ト伸びあがり、おきぬへ目を附ける。おきぬも思ひ入れ。振り返り、兩人顏見合せ

きぬ　ヤア、お前は。

ト思ひ入れ。

宗庵　ヤ。

ト悄りする。

きぬ　サア、誰れさんぢややらしらん。もう日も暮れるかしらぬが、一向やくたい。殊さら怪我とはいひながら、耳まで不自由になるといふは、どういふ因果な身の上かいなア。

ト思ひ入れっ　宗庵も思ひ入れあつて、おきぬを、よく〳〵見て

宗庵　そんなら今のどさくさに、あの膏藥が耳へ入つて、……併し、今の樣子ぢやァ、鳥眼といふが、どうやらおれを

長兵　なにサ、もう入相が鳴つたからは、物の黒白は分らぬと見えるのサ。

きぬ　モシ、父さん、最前も云ふ通り、この目の不自由。どうぞ今宵のところは、あの六三さんの方へやつて

ト探り寄つて宗庵に取りつき

モシ、父さん、どうぞ聞分けて下さんせいなァ。

ト宗庵、思ひ入れあつて

宗庵　コレ〳〵……こりやァおへねえ困りものだぞよ。

長兵　なにサ、どうするものか。仕方がござりやせぬ。

トおきぬを上へ引廻し

いゝワ、六三が方へ送つてやらうサ。

きぬ　エヽ、すりや得心して、アノわたしを

宗庵　ヤ。

ト思はず云ふ。

ト惘れ思ひ入れ。

きぬ　サア、どうぞ得心して下さんせいなア。

宗庵　ムウ、俄聾の早耳かは知らねえが、これぢやア滅多に

ト思ひ入れあつて

コレ。

ト長兵衛を下の方へ招き

おれも兎角仕合せが悪くつて、今ぢやア、マア、こんな態をして、當時は針の宗庵といつて、足力の按摩取り。ところで聞きやれ、この頃は又、噂があるのに、急にヅキが廻らうも知れねえ。もし急な事なら、その時にやアコレ、ちつとのうち、其方の内へ、置いてもらはずばなるめえよ

長兵　アイ、成る程、こなさんの身の上の荒まし、人の取り沙汰で聞きもしましたが、何を云ふも、以前のよしみとはいひながら、わしも今ぢやアこんな身の上。もしもの事があつた日にやア、なんぼわしだといつて

ト思ひ入れあつて

マアく。そりやァその時……どうともしなさるがいゝのサ。

ト愚圖々々、不承の思ひ入れ。

宗庵　そんなら、急な時にやァ行くぞよ。

長兵　アイ、マアく、來なさい。

宗庵　いゝかよ。

長兵　アイサ。

ト不承々々に挨拶する。宗庵思ひ入れあつて

宗庵　オヽ、ほんに氣の毒な。なんぼ怪我とはいひながら、搗てゝ加へて聾に盲目。

長兵　それく、大勢樣の厄介にならねえうち、娘を連れて、ちつとも早く。サア、來やれ。

トおきぬが手を取つて下の方へ來る。

きぬ　そんなら今宵わたしをば、アノ六三さんの方へ、やつて下さんせや。

長兵　エヽ、不具になつても。まだ吐かすか。

宗庵　そんなら長兵衞。

長兵　明日逢ひませう。

ト流行り唄に時の鐘をかぶせ、おきぬ、眼の不自由なこなし。これを長兵衛、以前の笊を抱へ、おきぬの手を引いて、思ひ入れあつて、向うへ入る。宗庵残る。矢張り時の鐘、右の合ひ方にて、下座よりおしげ先に、七郎助附いて出て來り

七郎　今日はべら坊に日の短かい日だ。もう暮れるのか。

ト云ひながら宗庵を見て

オヽ、宗庵さんか。先刻は大きにお世話でござりました。

宗庵　オヽ、七さん、いま歸りなさるのか。大分遲うござりやした。

しげ　コレ〳〵、宗庵さん、お前、丁度よい所へござんした。サア〳〵、わたしと一緒に、ちよつと來て下さんせ〳〵。

ト宗庵を引ツ張る。

宗庵　コレ〳〵、おしげさん、お前も滅法界な。無性矢鱈に來てくれろと、そりやアどこへ行くのだ。

しげ　エヽ、なにサ、アノ、駒留へ、ちよつとマア、早く來て下さんせいなア。

宗庵　イヽヤ、駒留でも車止めでも、おらア今、見世を片附けて居るのだ。日の暮れに、他愛も無い事

だらう。

七郎 イヽヤ、他愛のない事ぢやァない。急な病人があつて、療治を賴むのだ。おれも今まで行つて居た内だ。なんだか、强敵に困つて居る樣子だ。早く行つてやんなさい〳〵。

宗庵 アイサ。コレ〳〵、七さん、お前、先刻預けた魚を、忘れずに持つて行きなさいよ。

七郎 オイ〳〵、ナニ忘れるものか。それを取りに來たのだ。コレ〳〵、お前は早く、行つてやるがいい、行つてやるがいゝ。

宗庵 お前がさう云ひなさりやァ、行かずばなるまいが、誰れがどうしたのだえ。

しげ なんだ、アノ向う河岸の春吉さんが、先刻にからいつそ癪が起つてね、いま目を引附けさんしたゆゑ、それでお前に來て下さんせと云ふのぢやわいなァ。

宗庵 エヽ、そんならさうと、早く云へばいゝに。

しげ サア〳〵、わたしと一緒に、ちやつとござんせいなァ。

宗庵 エヽ、忙しねえ、行くといふに。

ト流行り唄になり、おしげ急き立て、宗庵思ひ入れあつて、兩人下座へ入る。

七郎 アヽコレ、思ひも附かぬあの梶の長兵衞、先刻に爰で逢つたといひ、殊にこの近所へ引ッ越した

事は知らず、折角六三が頼む事、あのおきぬを二三日前から、この寄席へ出しは出したが、互ひに知つて居るかしらねえが、樣子も聞かうと寄りは寄つたが、生憎とあのおきぬには逢はず。今おしげに聞けば、疾に內へ歸つたとの事。晚には是非、あの長兵衞の所へ行つて、渡りを附けて置かずばなるまい。マア、何にしろ、あの鮭を內へ置いて、出直して行くべい。

ト椽の上にある鮭を見て

なんだ〳〵。こりやア籠の中から鮭が飛び出したな。ハヽア、こりやア犬でも引摺り出しはしねえか。何にしろ、寒い時分で持つたものだ。

ト椽のまはりを見廻し、ちよつと籠を尋ねる思ひ入れ。よき時分、下座の方より關內、頰かむりなして、ウロ〳〵出て來り、七郎助が居るゆゑ、後の方に窺ひ居る。

エヽコレ、籠はどこへやりやアがつた。いま〳〵しい。薄暗くはなるし、知れるものぢやアねえ

エヽ、仕方がない。引ッ提げて行くべい。

ト七郎助、鮭の尾の方を持つて、提げて行かうとする。この時、關內、窺ひ寄つて

關內　その魚にやア、此方に大事の

ト鮭を引ッたくらうとする。

七郎　エヽ、この野郎め。何をしやアがる。

ト關內を振り切る。又かゝるを、七郎助、毆り倒す。ちよつと立廻りにて辷り、鮭を抛り出す。關內取らうとするを、七郎助、ぶちのめす。此うち始終双盤にて、犬一疋出て來り、この鮭を咬へて一散に向うへ入る。兩人、これを知らず、關內は打たれながら鮭を探す。七郎助は無理に關內を叩く。薄暗き模様、をかしみの立廻りよろしく、トヾ見得よくとまる。時の鐘にて、此まゝ道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面誂らへの押入れ、錠をおろす事あり、下の方重ね簞笥・神棚、暖簾口、いつもの門口、外に朝鮮矢來、上の方に鼠壁、裾の方壁の崩れより人の出入り、すべて松坂町裏借家の體。後は回向院の双盤。爰に長兵衛、以前の形。與九兵衛、犬くらひの百、蛇の逃げたるを追ひ廻し居る。おきぬ、これに恐れて立騒ぎ居る。てんつゝに弔ひの鳴り物にて道具廻る。

與九　ソレ〳〵、そこへ逃げた〳〵。

長兵　犬くらひ。早く捕まへろ〳〵。

百　オツト、合點だ〳〵。

ト蛇を追ひ廻してあるく。おきぬも同じく逃げてあるく。

長兵　これサ娘、てまへを捕まへるのぢやアない。ヂツとして居ろ〳〵。これサ、怖い事は無いといふに。

トおきぬを捕へる。この間に百、蛇を捕まへて

百　ドツコイ〳〵、捕まへた〳〵。親方、この畚へ入れて置きませうか。

長兵　さうしやれ〳〵。その赤棟蛇は、兎角に逃げたがる。出ないやうにして置きやれ。

百　斯うして置くと、逃げる事ぢやアねえ。

ト蛇を畚の中へ入れ、しつかりと蓋をする。

與九　成る程、この男は、犬や蟲を食ふ程あつて、蛇を捕まへるは名人だわえ……イヤ、そりやアさうと長兵衞どの、その女中は、こなさんの娘御かえ。

長兵　左様サ、わしがたつた一人の懸り娘を、あの大工町の六三めにちよろまかされて、イヤモウ、貰はにやアならねえと云つた女はこれが事サ……して、大家さん、何の用でござりやした。

與九　サア、別の事でもござらぬ、お觸れがあつて來ました。コレ〳〵、この觸れ書は、お尋ね者の新藤徳次郎といふ者、天國の短刀を持つて居るのがその盜人。即ちこれが人相書でござる。

ト觸れ書を渡す。長兵衞、ギヨツとしたる思ひ入れにて

長兵　すりや、何と云はつしやります。天國とやらいふ短刀を、持つて居るのがお尋ね者の、徳次郎といふ盗人かな。

與九　さうでござる。

長兵　ハテ、そりやァよく〳〵、太い奴と見えまするの。

ト此うちおきぬ、うつかりして居る。

サア〳〵、犬くらひや。夜食にしてしまふぞよ。

百　さうしませう。コレ〳〵、親方、山田屋の御用が來たから、一升、當て身をくらはして置きやした。

ト一升徳利を見せる。

長兵　そいつは氣がきいたな。なんぞ肴の工面をせうか。

トよき時分より、最前の犬、鮭を咬へたまゝ、上の方、壁の崩れより這ひ出で、パリ〳〵と食つて居るを、百、行燈の灯にて見附け

百　この畜生め。

ト立ちかゝる。この聲に兩人驚き

長與　ヤ、また蛇が出たか。

ト犬を見附けて

長兵　ヤ、犬だ。とんだ所を破りやァがつたな。

與百　アレ〳〵、何か咬へて居ますよ。

長兵　成る程、何やらパリ〳〵食ふな。

ト角行燈を明けて窺ひ見て

イヤア、此奴は、好い鮭を咬へて來た。

百　そいつはいゝね。豆腐を買つて來ませうか。

長兵　ハテ、忙しない男だ。併し、好い肴だ。捕まへて下さい。

與九　手傳つて進ぜう。

三人　畜生め。鮭を置いて行きやァがれ。

ト割り木、棕櫚箒なぞを持つて追ひ歩く。犬は鮭を咬へて、あちこちして、また元の崩れへ逃げ込む。

この騒ぎにおきぬ、また蛇と心得、押入れの方へ逃げ行く。

與九　エヽ、惜しい物を逃がした。

長兵　この壁の崩れは、隣の囘向院まで拔けてゐるから、度々犬めが、とんだ物を咬へて入ります。モシ、大家樣、不用心でござりやす。直してくんなさい。

與九　イヤモウ、多用ゆゑ、さつぱりと忘れました。二三日中に、きつと直させませう。

長兵　お前の二三日も久しいものサ。

ト此うちおきぬ、そろ〳〵と探り來て

きぬ　モシ、また蛇が出ましたかいなア。どうぞ長蟲の居さうもない所に居りたうござります。

トうろ〳〵するを、長兵衞差寄り、耳に口を寄せ

長兵　コレ娘、いま騷いだは蛇ではない。犬めが魚を咬へて、壁の崩れから上へ上がつたのだワ。

きぬ　エヽ、犬が座敷へ上がりましたかえ。滅相な、そんなに大きな崩れが、どこにござりまする。

長兵　コレ〳〵、此やうな穴が明いて居るから、隣の墓所から、隨分と人の出入りも出來るワ。とんだ長屋ではないか。

トおきぬの手を引き、壁の崩れをいらはせ見せる思ひ入れ。

きぬ　成る程、こりやァ不用心でござりませう。爰からアノお隣の墓場まで、拔けられまするかえ。

長兵　さうよ。

きぬ　イエモウ、何よりは風が參つて、さぞ寒うござんせうぞえ。

長兵　なんと、好い普請の長屋ではないか。

與九　お褒めで家主、痛み入るわえ。ハヽヽヽヽヽ。そんなら觸れ書を置いて行きますぞえ。

長兵　アイ、順送りに廻しませう……コレ、犬くらひ、豆腐でも買つて來やな。

百　オイ〳〵、湯豆腐でも拵らへませう。

與九　然らばお暇仕らう。

長兵　こりやア御苦勞でござりました。

ト四つ竹節、さんげ〳〵になり、與九兵衛、百は味噌漉を持ち、連れ立つて向うへ入る。長兵衛、おきぬが側に差寄り

コレ〳〵、おきぬ、何も遠慮する事はない。耳が痛まば、コレ〳〵

ト五布蒲團を出し

爰らへ寢て居るがよい。コレ、親の内だ。何も氣遣ひする事はないぞよ。

ト耳の側へ口を寄せて云ふ。おきぬ、思ひ入れあつて

きぬ　ハイ、有り難うございます。それ程までにお前が、深切にして下さんすなれば、どうぞアノ六三

さんの所へ

長兵　たわけ面め。歸す事はならぬわやい。

きぬ　エヽ。マア、お前は

トむつとする思ひ入れ。

長兵　俄聾の明き盲め、どぶさつてうせろよ。

きぬ　ハイ、それは嬉しうござんすわいなア。

トにつこりとして喜ぶ思ひ入れ。

長兵　イヤ、とんだ因果なものだ。

トまた四つ竹節、さんげ〳〵になり、向うより宗庵、天德寺を風呂敷に包み、脊負ひ、辻番と出刃庖丁、木枕を繩にて縛り、これを提げて出て來り、門口へ來て

宗庵　モシ、物が訊きたうござりまする。梶の長兵衞どのといふのは、この長屋でござりまするか。

長兵　アイ、長兵衞はわしでござりまする。どれからござりましたえ。

ト門口へ出かゝり、顏見合せ

ヤ、頭かえ。

宗庵　アヽ、爰か。ヤレ嬉しや、落ちついた。

ト内へ入る。此うちおきぬは、蒲團を敷いて上手へ寢る。

長兵　頭、どうしてござりました。

宗庵　おれが來たのは、コレ長兵衞、定めしてまへも聞いたであらうが、この頃俄に惡い噂、ヅキの廻つた樣子ゆゑ、とつくり夜の目も寢られゝばこそ。店を明けて、かゝりに來た。噂のあるのも七十五日。その時には仕樣もあらうが、何を云ふにも年と身柄、話しが出來ねえ。ちつとの間、この内へ居候ふに置いてもらはう。さう思つてくりやれ。

ト荷物を下ろし、落ちつく思ひ入れ。長兵衞、迷惑なるこなしにて

長兵　そりやハヤ、前度から、一つ鍋の物を食ひ合つた仲間、殊には頭と頼んだこなさん。

ト門口を明け、表へ思ひ入れあつて、しやんと戸をさし

碇を下ろして居さつしやるがよい。

宗庵　そりやア忝い。安堵した。この間も深川で、小遣ひ取りにと、今までしつけぬ、薄外聞の惡い、板の間稼ぎをくらはしたが、その時、侍ひの小袖の袂に、この手紙、百兩持つてくる使ひの金をふんだくれと、文通をする位だから、おいらがするのは當り前だよなア。

ト おきぬの寢姿を見て

コレ〳〵、誰れか寢て居るぢやァねえか。

長兵 あれかえ。氣遣ひしなさるな。先刻膏藥で聾になつた、おきぬサ。

宗庵 ア、さうか。惜しい者を聾にしたの。ほんに、これまで聞かうと思つたが、あの娘は、ありやァてまへの實の娘か。

長兵 イヽエ、あれには、とんだ譯のある事サ。何を隱さうあの女は、わしが若い時奉公して居た、千葉の家中の娘だが、七つの年、あの餓鬼を、負つたまゝに駈落ちして、捨てるといつても七つの子、比丘尼に賣つても小錢にならうと、京都の柳の馬場には知るべもあるから、暫らくそこへ足をとめ、宮川町へ預けて置くうち、先で藝をば仕掛けさせ、雪野といつて、座敷も餘ッほど勤めさせ、もう好い時分と引ッ浚つて、鎌倉へ來てからも、大磯屋へ內藝者。そこも踏み玉。その罰かして、たうとう六三めに、揚げ玉にされようとしやしたよ。

ト此うち蒲團を上げて、おきぬ、マヂ〳〵として居る。

宗庵 して、そのおぬしが勤めて居た、屋敷はどこだ。

長兵 その屋敷は、これサ。

ト最前の繪符を見せる。宗庵取つて

宗庵　「千葉の家中、片岡幸之進」……アヽ、どうしてこれを。

長兵　今日兩國で、思ひがけなく拾つたこの繪符。この幸之進といふは、今ぢやァ慥か息子の代。この家の娘おきぬといふは、七つでおれが誘拐したを、本の親だと思つて居るが、まだも不便。産神に添へて、讀めねえ文字の書いてあるも、彼奴が素性。餓鬼の時から掛けた守を、其まゝにして置くが、有やうは、あの女は、主人の娘を誘拐したのサ。

ト矢張りおきぬ、蒲團を上げ、ヂツ〱と聞いて居る思ひ入れ。

宗庵　主の娘を誘拐して、その女にかゝるとは、てめえも餘ツほど大丈夫な者だ。

長兵　ナニ、さうでもねえのサ。併し、この繪符が爰らへ來るからは、彼奴が身寄りの幸之進が、江戸に居るかと思へば、ちつと不氣味だ。早くおきぬを金にしてしまひたいものだが、惡い時分疵物にした。

ト繪符を簞笥に入れる。

宗庵　さう聞いては、おれも、怪我をさせて氣の毒だ。烏眼なぞは直に癒る咒ひがあるが、誠に見えねえか。

長兵　ナニ嘘を云ふものかな。俄に耳の遠いも、違ひない事。それゆゑ、彼奴が側に居るのに、こんな話しもするのぢやァねえか。コレ、見なせえ。

トおきぬの蒲團を引きまくる。おきぬ、何心なき體のこなし。長兵衞、耳に口を寄せて

コレ、おきぬ、ちつとマァ起きなよ。

トおきぬ、思ひ入れあつて

きぬ　父さん、六三さんの所から、迎ひが來たのかえ。

長兵　おきやァがれ。あの野郎が事ばかり云つて居やァがる。

宗庵　この間、六三とやらを、深川で見かけたが、なんだか好かねえ野郎だよ。コレ、いま云つた呪ひは、これだよ。

ト短刀を拔いて、おきぬの目先へ差出す。おきぬ、愕りするを心で押へ、うつかりして居る。宗庵、きつと見て居る。

長兵　アヽコレ、どうさつしやりますな。

宗庵　成る程、こりやァ鳥眼の本阿彌。この天國の燒刃は、叢雲立つて稻妻の、光りに等しき刃の面、世にも希代のこの銘作。鳥眼の病のよき呪ひ、拜ませて置くがいゝ。

長兵　その天國を持つ者こそ、盗人の聞えある、新藤徳次郎に相違ないと、コレこの如く配符を以て、裏借家まで嚴しいお尋ね。

ト觸れ書を見せる。宗庵、シヤンと白刃を納め

宗庵　すりや、もう配符が

ト思ひ入れあつて、おきぬへ目をつける。

これほど爰でこの話し、見聞きせぬのは、ハテサテ不便な。

ト思ひ入れ。

一服吸はうか。

ト腰を探つて

南無三、莨入れを、戸袋へ挾んで忘れて來た。ドレ、取つて來ようか。

ト行かうとして

イヤ／＼、この觸れ書の表では、天國を所持する者こそ、徳次郎とあるからは、滅多に差しては行かれまい。コレ、長兵衛、歸つてくるまで、預けて置かう。

ト短刀を渡す。

中まく口



中まく



長兵　しつかりと預かりましたが、お前もこれまで醫者の眞似。腰が明いて他人の見る前、疑はれては
却つてその身の
　ト ずつと立つて、預かりし短刀を、簞笥の抽出しへ入れ、その中より件の白鞘の似せ物を持ち來り
これを差してござりませ。
　ト 宗庵取つて
宗庵　よく、おぬしは、こんな物を持つて居るの。
長兵　ハテ、そりやアいつぞや稻野谷の、後家に渡したその時の似せ物。廻り〳〵て帶屋の門口から、
また拾つて歸りましたよ。
宗庵　ハテ、そりやア味な緣で附きまとふな。
　ト 門口へ出る。バタ〳〵になり、向うより權九郎走り出て、宗庵を見て
權九　頭ぢやアねえか。
宗庵　山姥か。何をうろたへて
權九　コレ〳〵、頭、折角今日は仕事にかゝり、骨折り損のその上に、使ひの奴が追ひかけて來て、殊
にこなたや、この權九郎も、ヅキが廻つて來たからは、爰から直ぐに高ふけり。路銀の工面を、

頼みます、頼みます。

ト跡先へ心遣ひして話す。

宗庵　いゝわえ〳〵。急ぐ事はない。どうでおれも逃げらねばならぬが、マア〳〵、歸つてくるまで爰の内に……コレ、長兵衛や、權九郎を、そこらへ埋んでくりやれ。

長兵　承知しました。

ト二重舞臺の押入れを明けて

コレ、山姥、爰へ入れ〳〵。

權九　合點だ〳〵。

ト内へ入り、押入れへ隠れる。長兵衛、戸を閉し

長兵　頭、行つてござりませ。

宗庵　頼むぞよ。

ト門の戸バツタリ、唄になり、五つの鐘、所々にて拍子木を打つ。宗庵、思ひ入れあつて向うへ入る。長兵衛、跡を見送り

長兵　ヅキの廻つたあの新藤、どうでも今度は逃げられまい。おれが方から裏切つて、訴人をすれば、

マアこの首は助かる。それとも危ふく見えるなら、委細構はず高ふけり。その時路銀は新藤が、預けて行つたあの天國。古鐵買ひが話しに聞いた、折紙が正銘なれば、こいつを添へて金にする元手はしつかり。うまい〳〵。

トこなし、おきぬ、マヂ〳〵して居るを見て

コレ、聞いたか。

きぬ アイ。

長兵 ヤ。

ト恟りする。

きぬ 近いうちに、迎ひに參りまするよ。

長兵 エヽ、蜻め、恟りさせた……ヤ、得手があそこに。

ト押入れを見て、思ひ入れあつて

イヤ、怪しからぬ居候ふだ。

きぬ 結構な事でござります。

長兵 ドリヤ、夜食にしようか。

ト流行り唄になり、長兵衞、七輪を取出し、木片をくべて、藥罐をかけ、茶の支度する。この唄にて向うより七郎助、スタ〳〵と出て來り

七郎　あの畜生め、どこへうしやアがつたやら。思へば思ふほど、薄のろい目に會つた。

ト門口へ來り、内を窺ひ

モシ、御免なされませ。

ト戸を明ける。長兵衞、悔りして

長兵　ソリヤ、來たぞ。誰れだ〳〵。

七郎　イヤ、わしでござりやす〳〵。

長兵　ア、、七郎助どんか。

七郎　左樣サ。

長兵　悔りさせた。

七郎　こなさんの悔りより、わしが悔りしたわいの。

ト内へ入る。おきぬ、マヂ〳〵して居る。

ヤ、おきぬさんか。お前も又、親の内へ歸らば歸るやうに、この七郎助にも相談してもいゝぢや

アねえかな。さう自由ッこにされちやア、仲人が立たねえよ。サ、一緒に來さつしやいな。

トおきぬが手を取つて引立てる。おきぬ、一向合點のゆかぬ思ひ入れにて

きぬ　モシ、父さん、どうしなさんすのぢやえ。

七郎　ナニ、わしだわな。親仁ぢやねえよ。

ト思ひ入れあつて

コレ、長兵衞どん、この子は、どうかしたかえ。

長兵　さればよ、この頃は鳥眼だけなよ。その上、先刻兩國で、煉りかけた膏藥が耳へ入つて、右の耳が皆目聾だよ。

七郎　ア、、さうか。道理で味な調子だと思つた。併し、六三が前から頼まれて、仲へ入つた七郎助、こなさんも承知だから、預かつたぢやァねえか。それに、なぜ斷わりなしに連れて來たのだ。イヤ、さう面を踏まれちやア、濟み方が附いても、わしが濟まさねえ。サア、おきぬどのを戻して下せえ。不承知ならば只は歸らねえ。コレ

トあたりにある出刃庖丁を取つて、手拭に卷いて差出し

長兵衞どん、七郎助が面を立てゝ下せえ。

トきつと云ふ。高聲ゆゑおきぬ、聞きとりしこなし。長兵衛、悄りして

長兵　これサく、マア、腹ばかり立たねえがいゝ。これサ、兄い、どうとも話しは附けようぢやァねえか。

きぬ　アヽモシ、そんなら七郎助さんが、來てかいなアく。

七郎　オヽサ、コレ、爰に居るわな。お前、俄に不自由な耳になつたさうだな。

トおほごゑ大聲に云ふ。おきぬ、聞えしこなしにて

きぬ　七さんか。よく來てくんなさつたく。わたしやァどうもお前にも、六三さんにも、立たぬわいなア、立たぬわいなア。

ト七郎助に取りつき、慄へ聲にて腹の立つこなし。

七郎　尤もだく。いゝよ。わしは又、こなさんと親仁どのと相談づくの事と、ちつとの内でも疑つて居たによ。ぬしがその氣なら、わしに任せねえく。

ト左の耳へ口を寄せて大聲に云ふ。おきぬ、嬉しき思ひ入れにて

きぬ　どうぞ早う連れて行て下さんせ。お前も知つての通り、この間から不自由な鳥眼、その上にナ、先刻に両國で、膏薬の鉢が刎ねてナ、耳へ入つて、それから俄に右の耳では、何云ふ事も聞えま

せぬ。今の分では夜に入つては、目と耳が不自由では、こりやマア、これなりに癒らずば、わたしや、どうせうぞいな〳〵。

ト七郎助に縋つて思ひ入れ。

七郎　いゝよ〳〵。そりやア誠に怪我といふものだわな。今の間に癒らねえでどうするものか。案じなさんなよ。

ト大きな聲で云ふ。

きぬ　アイ〳〵、明日から堀の内様へ願をかけまする程に、お前、どうぞ大工町へ連れて歸つて、わたしを早くお祖師様へ、連れて行つて下さんせ〳〵。

七郎　お前がさういふ心なら、よしサ〳〵、呑み込んだよ。直にわしが連れて歸るよ。案じなさるな。……コレ、長兵衞どん。見る通りの破目だ、サ、いさくさなしにこの子は、わしに連れさせて歸してやつて下せえよ。さうねえと、是非ともこの出刃が物を云ふによ。

ト思ひ入れ。長兵衞も思ひ入れあつて

長兵　いゝわサ〳〵。さう急き込んで貴様が云ふなら、いゝわサ、ぬしの顏を立てまいものでもないが其方からせりふの附くまで、マア〳〵、貴様の方へ連れて行かつしやい。

七郎　そりやア忝うごんす……コレ、おきぬさん、大工町へ連れて行くによ。支度をしなさい〳〵。

ト大きな聲で云ふ。

きぬ　エ、歸りますのかえ。エヽ、嬉しうござんす。サヽ、ちつとも早く、連れて行て下さんせ〳〵。

ト身拵らへする。

長兵　エヽ、この女め、親の内から他人の内へ行くのを、素敵に喜びやアがる。罰あたりめ。

七郎　サア、行きませうか。

ト仕方をして見せる。おきぬ、こなしあつて

きぬ　アイ〳〵、お世話樣でござります……　ハイ、親仁樣、六三どのゝ所へ參りまするぞえ。

ト手を突いて云ふ。

長兵　勝手にしやアがれ。

七郎　アイ、四五日中に分けませうよ。

長兵　兄貴、賴みますよ。

ト唄になり、おきぬ行きかゝり、簞笥の方へ心を殘し、思ひ入れあつて、七郎助に送られ、向うへかかる。揚げ幕より甚八、風呂敷包みをかつぎ、スタ〳〵と出て來り、擦れちがうて兩人は向うへ入る。

甚八は木戸口へ來り

甚八　アヽ、慥か爰らだ……モシ、長兵衛さん、内かえ。

ト戸を明けて、内へ入る。

長兵　オヽ、先刻の古鐵屋さんか、よく來て下さつた。彼の品は持つてござつたか。

甚八　アイ、仲間のせり場へ行きがけに、約束の物を持つて來ました。ソレ、この通りの書き物でござるが

ト懐より折紙を出す。長兵衛見て、思ひ入れあつて

長兵　成る程、こりやコレ慥かに天國の

甚八　モシ〳〵、正銘の折紙かえ。

長兵　アヽイヤ、似せか誠か、そりやァ知らねえが、よし正銘にしたところが、さして大金な代物でもあるまい。寐かし物だが、貴様も折角持つて來た事なり、二百ばかりなら買つて置かうか。

甚八　コレ〳〵、そりやァお前さん、あんまり酷いぞえ。天國とやらは、剛敵な金高ではないかえ。

トわざと安値につける。

長兵　ハテ、その天國があつたらば、これが値にもならうが、いはゞ反古も同然だわな。

甚八　それもさうかえ。賣つてしまはう〳〵。

長兵　二百に賣るかえ。

甚八　ようごんす。賣りやせう。

長兵　サヽ、そんなら二百やりませう。

ト簞笥の抽出しより小錢を二百出し、甚八に渡し、折紙を受取り、懷中する。

甚八　コレ〳〵、次手に賣りたい物があるが、どうだ、買つて下さるか。

長兵　アイ、マア何にしろ、品を見せなさい。

甚八　そんなら、ちつと待つて居さつしやいよ。

ト合ひ方になり、とつかはと奥へ入る。甚八、捨ぜりふにて莨のみゐると、押入れより權九郎、そろそろと出て來り

權九　コレ〳〵、古鐵屋さん。

甚八　エヽ、悑りした。

ト飛びのく。

權九　コレ、お前、これをいくらにでも買つて下さい。

ト懷より提げ胴亂、紙入れの二品を出して、表の方へキヨロ〳〵しながら渡す。甚八、受取りながら、

　　　　胡散らしく思ふこなしにて

甚八　モシ〳〵、お前、これを賣るのかえ。

權九　さうサ、いくらでもいゝ、路銀の足しにするから、買つてくんねえ。

甚八　イエ〳〵、そりやァ値打が無いから、わしは氣がねえ。外へ見せなさい〳〵。

權九　ハテ、いくらでもいゝよ。

甚八　それでもわしやァ、買へませぬよ〳〵。

權九　エヽ、この人は強情な事を云ふものだ。そんならこんたに賣る物がある。待たつしやいよ〳〵。

　　　　ト奧の方へ心遣ひあつて、簞笥の中より長兵衛が入れし天國を持つて來り

コレ、此方へ出さつし〳〵。

　　　　ト無理に甚八を花道まで連れゆき、門口の戸を締め

コレ〳〵、この刃物を、今の代物に附けて賣らうから、買つて下さい。それぢやァ又まんざらでもあるまい。マア〳〵、見てから値を附けねえ。

　　　　ト無理に甚八に持たせる。甚八、迷惑さうに

甚八　コレ〳〵、兄貴々々、値を附けてもノ、わしは爰へ得手を持つて來ぬから、話しが出來ねえ、外

へ見せねえ、外へ見せねえ。

權九　コレ、急に要るから、いくらにでも賣るわな。ばつたに買つて下さいな。

甚八　それだといつて、得手を持つて來ないと云ふに。

ト兩人爭ひ居る。向うより息せきと段介、權九郎を尋ね來り、何心なく

段介　モシ〳〵、爰らへ脊の高い若い男が

ト權九郎を見附け

ヤ、野郎め、爰にうしやアがつたか。

權九　南無三。

段介　待ちやアがれ。

ト駈け出す權九郎を捕へる。振り切つて逃げ出す。段介追ひかけ、向うへ入る。甚八、天國を持つて

甚八　コレ〳〵、若い人、この刃物を持つて行かつしやいな。これサ、こりやアどこへやるのだ。持つて行かぬか、持つて行かぬか。

ト同じく權九郎の跡を追うて、天國を持つたまゝ駈けて入る。この時奥より長兵衞、針箱、鏡立て、日傘、古三味線なぞを持つて出て來り

長兵　ヤレ〳〵、待遠でござらう。サア〳〵、代物を見て値を附けさつしやいよ。

トあたりを見て、

古鐵屋々々々。こりやァどうだ。どこへ行つたのだ……こりやァなんだ〳〵。

ト胴亂、紙入れを取つて

爰らへ投げ散らして行つたが……ヤ、箪笥が明いてゐるワ〳〵。

ト思ひ入れあつて、抽出しの中を見て

ヤアヽ、天國が無いワ〳〵。そんならあの古鐵屋めが

ト思ひ入れあつて又、押入れの明きあるを見附け

押入れが明いて、權めがうせぬは、そんならあの野郎が行がけの駄賃と、あの天國を引摺り出して、持つてうせたか。折紙が手に入つても、肝腎のあの短刀、程は行くまい、引ッ捕へて。

ト折紙を持つて駈け出す。てんつゝになり、向うより四つ手駕籠に、判人新八附いて、息せきと出て來り、花道にて行合ひ、新八見附けて

新八　ヤ、長兵衛さんかえ。

長兵　オヽ、貴様は吉原の

新八　アイ、めでた若松屋の若い者、新八でござります。話しがあつて參りやした。

長兵　話しがあらうが、おらア急に

ト向うへばかり行きたがる。

新八　アヽ、モシ〳〵、忙がしからうが、玉を渡しに來やした。マア〳〵、ちつとのうち歸らしやつて下さりませ〳〵。

ト兎角行きたがる長兵衛を引ッ張つて、内へ連れて歸り、駕籠を門口へ下ろし

長兵　エヽコレ、おらア急に行かなければならぬ用があるに、サア〳〵、早く云はつしやい〳〵。

新八　アイ、左樣なら早速申しやせうが、マア、斯うでござります。

ト門口の駕籠より、長襦袢の上へ廣袖の布子、平括け帶を締め、新造の髮に結ひ直したる、おはんを連れて來り

モシ、長兵衛さん、この子を受取つて下さりませ。

長兵　ヤ、わしが預けたその娘を、貴樣が連れて、受取つてくれろといふは。

新八　サア、先達てからわしが親方へ、お前が段々賴みなさるから。親方も使ふ氣で、お前の話しの手拭の、延喜から名を附けて、めでた若松のよしといふ新造に仕立てゝ、見世へ出すばかりになつ

てから、勤めは御免なされませ、所詮女郎にはなりませぬ、たつてと仰しやると死にまする、と云ふ奉公人を抱へては置けませぬ。證文せぬのを幸ひに、引渡しに連れて來やした。長兵衛さん受取つて下さりませ。

長兵 そんなら何と云はつしやる。アノこの娘は、勤めはせぬと云うて

新八 アイ、どうで女郎衆にはなられますまい。長兵衛さん、しつかりとお渡し申しましたよ。

長兵 どうするものだ。わしが頼んだ奉公人、受取る內だ、置いて行かつせえ。

新八 そんならキッと渡しましよ。……コレ、とゝさん、お前、氣を取り直して、勤めをして見なせえまんざらでもないぞえ。エヽ、女の解らねえのは困つたものだ……駕籠の衆や、サァ行きませう

ト四つ竹になり、新八、駕籠の者、向うへ入る。おはん、下に俯向いて居る、長兵衛氣をいら立て

長兵 エヽコレ、今日のやうなムシャクシャする事はない。あの大事の代物は淩はれる。追ひかけて行かうとすりやア、うぬが戻つてうせるし。コレ、おらア氣が氣ではない。なんぼ年がゆかいでもうぬはマァ、あんまり聞分けがないわえ／＼。

トおはんを引附けて捻ぢ廻す

はん アイ／＼、御尤もでござります／＼。わたしも以前は侍ひの娘、また母さんも、姉さんもござり

まする。殊には思ふ男もあれば、妊娠になつたわたしなれど、云ふに云はれぬ事あつて、身を投げたわたしを助けて下さんした、いはゞ命の親同然、恩はあれども有やうは、いつそわたしを見殺しに、其まゝ殺して下さんしたなら、今の思ひはあるまいに、産み落した子にも逢はれず、なに樂しみに勤め奉公いたされませう。モシ、どうぞ御免なされませ〳〵。

長兵　なにを〳〵、泣ッ面をひろいで。コレエヽ、うぬはマア、恩といふ事を知らねえか。いつぞや鎌倉の六浦川で、水に溺れたおのれを見附け、高が女の事、何も後生と、コレ〳〵

ト腰に挾みし彼の手拭を見せて

この手拭へ取りつかせて、引上げて見れば、まんざらでもねえ生れつき。こいつは一番仕事にもならうと思つて、親の名も、うぬが名も、素性を訊いても吐かさばこそ。殊に妊娠と見たゆゑにこの江戸へ連れて來て、女郎にすべいと思ふから、餓鬼も産ませて、吉原の若松屋へ預け置き、日柄が經つたら勤めをさせうと、この手拭から、思ひついたうぬが名も、めでた若松の彼といふ、新造になりさへすれば、おれも浮むワ。それに否だと吐かす恩知らずめ。コレ〳〵

ト蛇の入りし畚を出し

エヽ、女め、女郎が否なら、コレ

ト蛇を見せて

この蛇を持たせて、うぬを蛇娘にしても、錢儲けをせねばならぬ。サア、今から蛇を使ひ習へ。

ト蛇をさしつける

はん　アヽモシ、どうしてマア恐ろしい、其やうな事がなりませうか。どうぞ御免なされて下さりませ

長兵　默りやアがれ。女郎も否、蛇使ひも否だと吐かして、何にならうと思ふやい。

はん　アイ、御尤もでござりまするが、どうぞわたしや死にたうござりまする。この上のお情には、せめてわたしが產み落した、あの男の子に、どうぞ一目逢はせて下さりませ。モシ、慈悲ぢや情ぢや、どうぞ逢はせて下さりませ。

長兵　べら坊め、あの餓鬼をいつまで抱へて居るものか。欲しがる者にくれてしまつたわエヽ。

はん　そりやマア、どこへおやりなされました。

長兵　どこへやらうと、うぬが知つた事ぢやねえワ。

はん　そんならどうでも逢はれませぬか。

長兵　知れた事だワ。

はん　エヽ、お前はなう。この身は水より揚げられて、大恩あれども、あんまり邪慳な無得心。いつぞ

この身は死んでなりとも

ト七郎助の持ちし出刃を取つて死なうとする。長兵衞、捕へてもぎ放し

長兵　死神の附いた女め。ひよつと爰で死なれて見ろ、跡の始末がむづかしい。どうでうぬは野玉へ、バッタリにぶち賣つてしまふ。それにしても、逃がしてはならぬワ。

ト身を揉むおはんを捻ぢ倒し、薪の繩にて縛りあげ、聲立てるゆゑ〴〵の手拭にて猿轡をかけ

もう〳〵、はした錢にでもして、肩を拔かねばならぬ。

トあたりを見廻し、押入れの内へ打込み、戸を閉めて思ひ入れ。

まづ、斯うして置いて、これからは、あの權めが持つてうせた刃物の詮議だ。なんでもマア、あの野郎を

ト行きかゝり、思ひ入れあつて

イヤ〳〵、あの野郎より、今にもアノ新藤が歸つて、先刻の短刀をと云ふとき、無くしたと云つても誠にしまい。殊にコレ〳〵

ト人相書を取つて

お尋ね者の德次郎、彼奴を生けて置いては、おれも同類、夜が寐られぬ。どうぞ彼奴を

ト思ひ入れあつて呑み見附け

あるぞ〳〵。

ト德利を引寄せ

赤棟蛇の血に合せて服めば、忽ちくたばる毒藥。

ト簞笥の中より毒の包みを出し

コロリとやれば寐覺めがよい。天國は無くしても、あの新藤が差してうせた似せ物へ、この正銘の折紙附けて、これで一番仕事のもくろみ。毒の仕込みは……さうだ〳〵。

ト四つ竹節になり、蛇を引裂き、毒と一つに德利の口へ捻ぢこみ、交ぜ合せる思ひ入れ。向うより宗庵、以前の形にて、歸つてくる。お袖、赤子を抱へ、附いて來り、花道にて

そで　これサ〳〵、宗庵さん、先刻は預からうと云つたがノ、わつちが方に急に好い相談があるから、さうすればこの子は大きに邪魔だから、お前に返しやす。サア、受取つてくんな。

宗庵　それだといつて、てまへ、預からうと云つたら、里にやつたぢやァねえか。さう云はずと、預かつてくれろよ。

そで　イエ〳〵、お斷わりだよ。たつた今わつちは桂庵の口で、好い旦那が出來たから、その人の世話

になりやす。サア・お返し申しやすく。
ト無理に赤子を宗庵に渡す。
宗庵　エヽ、この女も、強情を云ふものだ。コレエヽ、蛇女を世話をする男があるものか。よしんばあ
つたところが、化け物だヮ。
そで　なんでもいゝわな。打ッちやつて置きな。
宗庵　たつて返すなら、先刻の二分を寄越せ。
そで　エヽ、ありやァ流れだわな。里扶持にさういふ極まりはねえよ。
宗庵　コレ、返しやァがれ。
そで　よしてもおくれ。アヽ、肩が輕くなつた。
ト四つ竹になり、引返して入る。宗庵あと見送り
宗庵　イヤ、又おればかりと思へば、その上を行くあの女め、とつけもない太え奴だ。
トこの時、赤子泣く。
エヽ、小やかましい、吠え出しやァがつた。どうで今夜中に、橋からどんぶりだ。コレ、もうち
つとだ。泣くなく。たがよく。

ト件の鳴り物にて門口へ來り、內へ入る。長兵衞、悄りして德利を片寄せ

長兵　オヽ、歸らしつたか。見りやアお前、子を抱いてござつたが、そりやアどこの子だ。

宗庵　これか。こりやア捨て子よ。

長兵　エヽ、捨て子とは。

ト悄りする。

宗庵　何も驚く事はねえ。この餓鬼はこの間、兩國に捨てゝあつたを、町役人が寄つて、三兩附けてやらうといふから、小遣ひにしようと、あの蛇娘を嗅ァに賴んで、貰ふ面で三兩取つて、二分附けて蛇娘に預けたら、金ばかり取りやァがつて、直ぐに返して寄越しやァがつた。なんと、あの蛇使ひめは、イケ邪慳な奴ぢやァねえか。

ト此うち長兵衞、思ひ入れあつて

長兵　ハテ、こなさんは、とつけもないものを。そしてマア、どうするつもりだ。

宗庵　ハテ、いまに兩國橋からどんぶりサ。

ト仕方をして見せる。

長兵　今度は川へ捨てるか……イヤハヤ、お前は邪慳な人だ。どうでも子を持たぬ者は、その位なもの

だよ。

宗庵　ナニ、おらアこれでも子を拵らへたワ。

長兵　エヽ、いつ女房を持つた。

宗庵　ナニ、女房ぢやアねえ。てめえも知る通り、あの鎌倉の石部屋へ入つた晩に、嫁に來て居た娘を捕まへて、美しい餓鬼だから弄んだが、因果なものだ、たつた一度でその娘が孕んだワ。

　　トこの話しのうち、正面の押入れ、仕掛け物にて引抜き、綟子張りにて内の樣子を見物にばかり見せる仕掛け。おはん、内に縛られ、この話しを聞き、身を揉みあせる事、しつかりわかる。

長兵　エヽ、そんなら、あの娘を、こなさんが

宗庵　その娘を孕ませて、それから後が大町で、帶屋の長右衛門。知る通り、見世を明けた日に、その娘がおつりきに、廻り廻つてあの帶屋へ、來たと思やれ。直ぐにその日、三ツ星の極印で、もくが割れかゝつたワ。娘は五月だといふワ。殊に、おれが面をよく見覺えてゐるから、ハテこいつはどうしたものだと、そこで一番狂言を書いてナ、どうでおらア知る通りの身分だから、死なねばならぬと云つたら、わたしも死にたうござりますと云ふを幸ひ、心中しようと六浦川まで逃げて行つて、二人が上着を柳にかけ、娘を抱へて川にどんぶり。女ばかりを打ッちやつて、死んだ

と見せて川下から、這ひ上がつて針の宗庵、折によつては桂長庵、その長右衛門の時分は、これでも眞面目な色男サ。

ト此うち押入れの内にて、おはん思ひ入れ。長兵衞もこなしあつて

長兵　アヽ、それで讀めた。六浦川から揚げて來た。孕んだ女は、そんならこなたの

宗庵　ヤ。

長兵　アヽ、これで解つた。

ト思ひ入れ。押入れのおはん、身を揉むゆゑ、バツタリと戸へ當り、物音する。

宗庵　ありやアなんだ。慥かに押入れの内だが、アヽ、權であらう。

ト立たうとするを、長兵衞ズツと寄つて、手早く錠をピンと卸ろして

長兵　なにサ、頭、聞きなさい。あの權の野郎は、疾に逃けりました。

宗庵　それでも押入れの中で

長兵　跡へ入れかへにしたのは、お前の留守に横網から連れて來た。因果者の夫太だが、餘ツほどまぶい代物だから、仲間の手合ひに見せるが最後、直ぐに押ッかぶせをする。そこでマア、値段の極まるまでは、滅多に見せねえのサ。

宗庵　さうでもあらうが、息が籠らうぞえ。

長兵　なにサ・平常覗きの箱へ入つて歩くから、それから見れば極樂だ。

ト行燈を搔き立てるとて、油注しを見て

南無三、油が切れた。わしはちよつと買つてくるほどに、必ずお前、押入れの中を

宗庵　見て商賣の邪魔にならば、きつと見る事ぢやァねえ。

長兵　そんなら賴みます。ちよつと買つて來ませう。

ト門口へ出て、思ひ入れあつて

あのマア權野郎め、折角捲き上げた天國を

宗庵　どうしたと。

長兵　アイ、直に歸りますよ。

ト時の鐘、唄になり、思ひ入れあつて、門口の脇より路地へ入る。あと合ひ方、回向院の一つ鉦聞える。宗庵見送り

宗庵　ハテナア。商賣々々だ。見世物に出す代物でも、可哀さうに押入れへ入れて、錠を卸ろして置くさうな。

トこの時赤子泣く。

エヽ、やかましいわえ。よく吠える餓鬼だ。此奴も捨てられる位だから、ろくな奴の子ぢやァあるまい。爰へふさつて居やァがれ。

ト下に置くとて附け紐に附いたる守を見附け

アヽ、捨て子でも、守を附けてうせるワ。よく犬も喰はなんだ。

ト守り袋を出して、中より書き物を出して

アヽ、なんだか書いてあるワ。女の手だわえ……「庚申の夜誕生の男子」……アヽ、おれと同じ生れだな。此奴もしまひは、盗人にでもなるのであらう。

トこの事をおぼん聞いて、その子はお前の子といふ思ひ入れにてあせる。

三兩ばかり附けたとて、なんの足しにもならねえ。いつそ今から大川へぶちこんで來ようか。エ、それにしても素敵に寒い。火でもおこして

ト火鉢へ焚き物を仕掛け、火をおこす思ひ入れ。この時、一ツ鉦を聽きつけ

アヽ、あの鉦は、この後は回向院の惣卵塔、あの寺の鉦だな。兩國まで行く事もねえ。爰で絞め殺して、ツイ後へ抛り出せば、回向院の水子塚。爰で縊り殺してやらう。

トこの事を聞いて、おはんあせる。宗庵、心附かず

南無阿彌陀佛。

ト赤子を殺す。押入れの内のおはん、これにて氣を失ふ、途端に押入れの戸へ倒れかゝり、錠前切れて、戸一枚倒れる。おはん縛られしまゝ一緒にこけかゝり、行燈へあたり、灯消える。宗庵、恟りして

エヽ、なんだ、とんだ事をしたな。コレ、灯が消えたワ。サア〳〵、眞暗になつた。

トそこらを探し廻り、おはんが倒れ居るに探り當りて

ヤ、爰に女が倒れて居るな。アヽ、これが因果者の夫太とやらか。コレ〳〵、縛つてあるワ。口も結へてあるワ。可哀さうに、道理で氣を失なつた。見世物師といふものは、酷い事をするものだ。ドレ〳〵、解いてやらう〳〵。

ト手拭も縛り繩もほどき

アヽコレ、藥がなくて惡いな。水でも飲ませてやらう。

トあたりを尋ね、藥鑵の湯をおはんに無理に飲ませんとしても、齒を噛んで居るゆゑ

アヽコレ、口を閉ぢて居るな。待て〳〵。爰らがお醫者樣だ。

ト口うつしに湯を飲ませて、耳に口を寄せ
はん　コレ、見世物の女。氣が附いたか〳〵。
ト呼び生ける。この時、火鉢の焚き物へ火うつり、パッと燃えあがる。このあかりにて兩人、きつと
顏を見る。おはん、氣の附いたる思ひ入れにて
はん　ハイ、有り難うござりまする。心は慥かになりました。有り難う……ヤ、お前は長右衞門さん。
宗庵　ヤ、さういふは、おはんだな。
はん　長右衞門さん
宗庵　コレ、靜かに云へ。
はん　エヽ、お前はなう。
宗庵　尤もだ〳〵。コレ、おはん、あの六浦川で死んだと思つたが、そんならてまへは
はん　アイ、死なれぬ因果か、沈みもやらず、爰の内の長兵衞とやらいふ人に助けられ、江戸へ連れら
れ、吉原へ預けもの。其うちやう〳〵身二つに、なつたその子は
ト涙にくれて思ひ入れ。此うち始終一つ鉦聞える。
宗庵　コレ〳〵、てまへの產んだ子は、どうした〳〵。

はん　お前が愛でむごたらしう、殺さんしたが、二人が仲の子でござんすわいなア。

ト泣き出す。

宗庵　ヤ、そんなら愛で殺したが、現在おれが……ハテ、とんだ事をしてのけた。

ト思ひ入れ。おはん、こなしあつて

はん　コレ〳〵、この子の守に入れてある、庚申の夜の誕生と、書いて置いたはわたしが手蹟。思へば物の爭はれぬ、人の嫌がる庚申に、生れたこの子はお前の胤。現在我が子を親の手で殺すといふも、常からお前の惡い身狀。聞けばこの程嚴しいお尋ね、新藤徳次郎といふ盗人を、捕へて出せば、コレ〳〵〳〵

ト焚きさしの火にて、人相書を見附け、取上げ

これ此やうに面體まで、詳しく記してお尋ねあれば、所詮姿を變へたとて

宗庵　やかましいわえ。人が聞くわえ。靜かに云へ〳〵。知らぬ事とて、血を分けた餓鬼を親の手で

ト こなしあつて

どうするものか。今の若さで、幾人でも出來るワ。案じる事はねえ。併し、てめえは何者の娘だ

はん　アイ、わたしが父さんは、稻野谷半左衛門というて、千葉の御家中。お預かりの短刀を奪はれ、

その上に父さんは、人手にかゝつて

ト此うち宗庵、さてはといふ思ひ入れあつて

宗庵　ヤ、そんならアノ稲野谷半左衛門の、てめえは娘で

はん　アイ、父さんは、闇討ちにおなりなされましたわいなア。

トこの時宗庵、おはんを殺さうといふ思ひ入れあつて

宗庵　そんならいゝワ、敵持つ身。コレ、氣遣ひするな。てまへの親を殺した奴を、おれが又詮議して討たせてやるワ。案じるな〳〵。いはゞてめえも、おれも、六浦川で死ぬところを、助かるといふは、よく〳〵命強い生れだ。その代り、二人の命を、この餓鬼一人が背負つたのだ。これから又てめえと改めて夫婦になつて、又一稼ぎ稼いたら、金は湧き物だ。コレ〳〵、こんな手紙を拾つたワ。

ト前幕の手紙を出し

この文言はナ、百兩持つてくる、段介といふ使ひの金を引ツたくれと、幸左衛門といふ侍ひへ、彌藤次といふ者の所から寄越した文言だが、今ぢやア素人が、斯ういふ企みをするものを、道理で、盗み溜めた金は、残らず、三ツ星の極印。たうとう今はこの態だて。

はん　サ、そのお前の悪い働きを、どうぞ止めて下さんせ。

宗庵　案じるなよ。女房を持つからは、さういつまでして居られるものか。マア、何にしろ、久し振りで杯をしたから、盗みを止めるか始めるか、その相談を極めよう。幸ひ爰らに酒があつたが

ト以前の徳利を取出し、茶碗を取つて

サアく、てまへ、マア、始めるがいゝ。

はん　アイ、お前との杯、嬉しうござんすがナ、わたしやアノこの間から、どうぞお前に逢ひたいくと、観音様へ願をかけてナ、二百日が間、御酒をキッと斷ち物に致しましたわいな。

宗庵　エヽ、てめえも野暮な事をしたな。そんならおれが始めよう。

ト毒の入りし酒と知らず、茶碗へ受けてぐつと飲む。

アヽ、冷酒のせゐか、惣身へ滲みるワ。もう一杯飲んだ上でなくつちやア、流石おれでも仕事が

はん　エ。

宗庵　相手の無い酒は變なものだ。

ト又ついで飲む。

はん　アヽ、モシ、お前、醉ひなさんせうぞえ。

宗庵　ナニこの位で醉ふものかな。
はん　さはさりながらむごたらしい。この子の死骸は垣一重、隣は慥か回向院、葬むつて下さりませ。
宗庵　氣遣ひするな。おれが爲にも現在の
　ト油斷を見濟まし、白鞘の短刀を拔いて、おはんを殺さうとする。立廻りよろしくあつて
はん　アヽコレ、お前はなんでアノわたしを
宗庵　殺すも惜しいものだけれど、おれが素性を知つたゆゑ、無理心中の六浦川、それも運よく生き殘り、爰で逢つたがわれが因果だ。どうで助けて置かれぬ女。サ、死んでくれ〳〵。
　ト突いてかゝる。おはん逃げあるく。宗庵、追ひかけようとして、惣身へ毒氣廻り、よろ〳〵として
　苦しむ思ひ入れあつて
アヽ、俄に惣身節々まで、痛み惱むは……もしや酒に、なんぞ入つてか。
　ト德利を打割る。中より引裂きし蛇出る。
さてこそ酒にこの蛇の、浸してあつたその毒に、中つたせるか、胸先まで
　ト苦しみ、血を吐いて苦痛のこなし。
はん　エヽ、そんなら酒に其やうな、毒が仕込んでござんしたか。さうとは知らず、オヽ〳〵〳〵。

ト驚くを、宗庵よろぼひ寄つて、おはんが襟髪を摑んで引寄せ、キツとなつて

宗庵　こりやアうぬ、酒に毒のあるのを知つて、酒は斷つたと僞つて、うぬが飲まぬは、こりやアおれを殺す心で企んだな。うぬ、亭主を殺すか。こゝな罰あたりめが。

トむごく捻ちつける。

はん　アヽモシ、どうしてお前に其やうな、酒と知つたら飲ませませう。殊にはお前に何の恨み、何が憎さに、知つたらどうして。

宗庵　イヽヤ、恨みがある筈だ。うぬが口から今云つた、稻野谷半左衞門が娘のおはん、親を殺されたその恨み、それで男によくうぬは、騙して毒を飲ませたな。

はん　エヽ。そんならお前が父さんを

宗庵　すヽ、短刀うせしも新藤が、仕業と知つて尋ねるゆゑ、助け置かれず人知れず、闇討ちにぶツ放したは、この德次郎が仕業だワ。

はん　すりや、父さんを手にかけしは、いとしと思うた大事の男、アノお前の業と云はしやんすか。もうさう聞いては親の讐、わたしも武士の娘でござんす。殺されるまでも父さんを、手にかけた德次郎どの……モシ、父さん、お赦しなされて下さりませ。知らぬ事とてこれまでに、ゆかしと思

うたわたしが戀人、可愛さあまつて憎さが百倍。夫といへど假の契り、實の親には替へられぬ。
恨みの刃、思ひ知つたか。

ト落ちてある白刃を取つて、下より宗庵の急所をしたゝかに突く。

宗庵　ヤヽヽ。うぬは亭主を切つたな。突きやァがつたな。

ト宗庵、毒の廻りし上に深手を負ひ、よろぼひ／＼立ちかゝる。おはんは短刀を持つてあしらひゐる。よき時分より以前の犬、半分喰ひ切つたる鮭を咬へ、この魚の鰓のあたりより財布に入れたる百兩、プラ／＼と下がりあるを引摺つて、以前の壁の崩れより出かゝり、内へ入り、兩人が立廻りの邪魔になりて、また元の穴へ逃げ込むとて、財布の金は落して、犬は鮭の頭ばかり咬へて入る。此うち立廻りよろしく、キッとなる。これより回向院の双盤に、三味線を入れたる凄き誂らへの合ひ方にて、兩人立廻り、トヾ宗庵、毒氣段々に廻り、深手に苦しみ、倒れる。これより忍び三重、時の鐘、一つ鉦の念佛聞えて、火鉢の焚き火消え、闇のこなし。おはん、短刀を持ち、息の切れたるこなしにて、撞と座す。よき時分、壁の崩れより、おきぬ、窺ひ／＼探り出て、簞笥の方へ行く心にて、壁に傳はり、探りよりて簞笥の抽出しを引拔き、内を尋ね、最前目を附けし天國無きゆゑ、恟りして

きぬ　ヤヽ、この抽出しと思うた天國、無いのはそんなら父さんが

はん　ヤ、女中の聲は、そんなら近所へもう知れてか。生きては居られぬ人殺し。

ト思ひ入れあつて、持つたる白刃へ、宗庵が最前讀みし手紙を卷き、自害せんとするを、おきぬ、暗がりながら探り寄つてキツと捕へ

きぬ　慥かに女中。

はん　放して殺して

トこの聲をおきぬ聞きつけ

きぬ　待ちなさんせ。

はん　イヽエ、放して。

ト爭ふはずみに、おきぬ、おはんの持ちたる短刀をもぎ取り捨てる。短刀に卷きし密書は、おきぬが手に殘る。

きぬ　合點のゆかぬ女中の聲。顏は見えねど、死なうとは、こりやよく／＼な

はん　アイ、夫を殺した大膽者。どうぞ放して下さんせ／＼。

ト身を揉むをキツト留め

きぬ　エヽ、聞えぬ耳へもお前の調子。夫を殺した大膽と、云はしやんしたその聲は、どうやら覺えの

ト思ひ入れあつて、おはんもこなし。

はん　その物腰もどこやらに、心覺えに……ほんに、それ〳〵、あの鎌倉の、慥かに帶屋で

きぬ　オヽ、それ〳〵、逢ふと其まゝ意見した、おはんさんとやら云はしやんした

はん　アイ、そのおはんでござんす。お前は慥かに、その時のおきぬさん

きぬ　ほんに、お前ぢや〳〵……コレ、今云はしやんした、お前の夫といふは

はん　アイ、長右衛門さんといふお方でござんすが、現在わたしが父さんを

きぬ　アヽコレ、なんであらうと爰には置かれぬ。大方これもお前の書置。殘さぬやうに

ト帶へ挾み

今の刃物は、慥か爰らに

ト思ひ入れあつて探り、思はず財布の紐を探り當て、そろ〳〵と引寄せ、金を探り見て、恟り、これと共に、白刃も手許に寄るゆゑ、取上げ見て、思ひ入れあつて

嬉しや刃物もわしが手へ。殊に大枚、しかも小判で

はん　刃物をわたしへ

トまた取らうとする。おきぬ留める。宗庵心附き、起上がり

宗庵　よくうぬ亭主を

ト暗闇ゆゑ、おきぬへ武者振りつくを立廻り。よろ〳〵として、宗庵倒れる。

きぬ　無い命なら、跡へ難儀を

ト宗庵に止めを刺す。この物音に

はん　そんならお前が

きぬ　アヽコレ。

トおはんを引寄せ、思ひ入れあつて、あたりを尋れ、手にあたる血の附いたるまゝの手拭をおはんに頰かむりさせ、似せ物の短刀を宗庵の死骸に殘し、手紙と百兩とを、おきぬ、しつかりと帶へ挾み、おはんの手を取り、無理に引立て、門口へ出ようとする。この時、路地口より長兵衞、油壺を持ち、戻り來る。足音を聞きつけ、おきぬ、おはんを引ッ張り、以前の壁の崩れを探りあて、潜らうとする。

この時、長兵衞、門の戸を明け

長兵　これはお待遠。宗庵さん〳〵。

ト尋れる思ひ入れにて、白刃、足にさはるゆゑ、そつと取つて、思ひ入れあつて

慥かにおれが渡した短刀。

はん　エ。
きぬ　コレ。
　　ト二人の物音を聞き、長兵衞、壁の方を透かし見て
長兵　ア、、また犬か。
　　トこれを木の頭。兩人は崩れへ探り入る。長兵衞、死骸に爪づき、油注したを落す。その上へこけかゝり、探り見て
イヤ、これは大變。
　　トこれをキザミに、銅羅の送りにて、よろしく、ひやうし

幕

第二番目三幕目

大工町六三郎内の場

役名＝六三女房、おきぬ。下部、段介。古鐵買ひ、甚八。義太夫師匠、豐梅。同、倉時。清兵衞女房、お梶。大工、勘六。廻し男、市助。堤幸左衛門。町抱へ、七郎助。片岡幸之進。おはん母、おかや。福島屋の藝者、おその。大工、杣の六三郎。

本舞臺、三間の間、庇附きい平舞臺、上の方、障子屋體、正面、簾を掛けたる床に、菊壽の附いたる赤きぶら提灯を三つ吊り、下の方に弟子の塗り板、門口の外に路地の入り口を取附け、この見切りに丸太を大分立てかけ、屋根に棟上げの鏑矢を結びつけ、よき所に屛風を立て、これに逆さに、おはんの小袖を留め袖に直したるを掛け、机の上に香花燈明をともし、おかや、小袖に向ひ、鉦を鳴らし、回向して居る。豐梅、太棹の三味線を彈き、勘六、大鉢巻きにて義太夫を稽古して居る。倉時、同じく義太夫の師匠にて、七輪に藥鍋をかけ、煎じて居る。七郎助、下の方に鴨の毛を引いて居る。門口に甚八、籠を下ろして居る。後に飯籠、丸太の引切りなどとちらし、すべて大工町六三郎の內、女房おきぬ歿ひの體。初午の屋體囃子に稽古の太棹、回向の鉦の音にて幕明く。

甚八　モシ〳〵、親方、もう五十買つてくんなさい。

七郎　イヽヤ、それでよくば買はう。否なら此方も氣がねえ。外へ持つて行かつし。

甚八　ハテ、さう云はずと買つてくんなさい。わしも今日は初午の宵宮だから、早く片附けて歸りたうござりやす。

勘六　コレ〳〵、豐梅さん、この間からお前に習つてゐる、この「八重霞」の新屋敷は、餘ッほどむづかしいものだね。

豐梅　さればいなア、こりやァノ昔の島太夫の節附けで、大抵面白い語り癖のある物ぢやわいなア。
倉時　あの牢屋から引廻しのうちも、よう節附けがしてござんすぞえ。
七郎　イヤ又、昔の島太夫といつたのは、素敵なものであつたさうだ。ナウ、倉時さん。
倉時　左樣サ、そして、今日はおきぬさんの浚ひ日ゆゑ、わたしらも助けに來やんしたが、聞けば昨夜から氣合ひが惡いというて、寢て居なさんすぢやないかえ。
七郎　さうサ、何だか心持ちが惡いといつて、とりかぶつて居るさうだが、月なみの浚ひ日ではあるしおれも手傳つてやらうと、吸ひ物の支度をして居るのサ。
勘六　これナ〳〵、七さん、あの六三は、今日も留守かえ。
七郎　さうサ、今日は屋敷へ行つて、まだ歸らぬが、こなたは何ぞ用か。
勘六　用どころか、大さうな用サ。待つてゐるうち、淨瑠璃でも浚はう。豐梅さん、彈いてくんねえ。
七郎　アヽ、こなたは三味線をひくが、跛でもひけばいゝ。おらア鳥の毛をひくワ。
甚八　モシ〳〵、わしにくれると思つて、もう五十買つてくんなさい。
七郎　ハテ、この男は、情の強いものだ。コレ、この鉈が、あんまり擂粉木のやうになつたから、この代りにするから、負からずばよいのサ。

ト古い鉈を見せる。

甚八　エヽ、廉いものだが、ようござりやす。買つて行きやせう。

七郎　それで負けるか。

甚八　ようござりやす。元値が切れるが、仕方がねえ。

七郎　なんの、大方そこらで、只取つて來たらう。

甚八　エ。

ト悄りして

よくマアお前それを……エヽ、只といふ代物が、どこにあるものか。人ぢらしな。

ト前幕の天國の拵らへはとりほごし、白刃ばかりを出す。七郎助、これを見て

七郎　モシ、阿母さんえ、そこに錢が五百あらば、ちよつとお貸しなされまし。

かや　アイ〳〵、五百でようござんすかえ。

ト屏風の脇より錢を五百出して渡す。

七郎　オイ、古鐵屋。ソレ、五百あるよ。

ト錢を投げ出す。甚八取つて

甚八　こりやァ有り難うござりやす。なんぞ出たら、持つて來やせう。お賴み申しやす。

七郎　茶でも飮んで行きねえ。

ト短刀の身を、よく見て

イヤ、おつりきな鉈だわえ。

甚八　左樣サ、鉈にはお前、結構だわな。

ト四つ竹の合ひ方に聖天をかぶせ、甚八、荷を擔ぎ、呼びながら花道へ入る。七郎助は短刀の身へ布巾を卷き、鳥の骨を叩いて見て

七郎　なか〳〵こいつは、骨を叩くには手頃な鉈だわえ。

倉時　モシ、阿母さま、爰へ來て、このお藥の加減を、見て下さんせいなア。

かや　アイ〳〵、ドレ、わたしが加減を見てやりませう。

ト七輪の藥を茶碗へ計つて見る思ひ入れ。

豐梅　それはさうと、お前さんは、あのおきぬさんのお母樣か、六三さんの親御樣かえ。

倉時　それ〳〵、ほんにマア、どちらのお母さんでござんすぞいなア。

かや　イエ〳〵、わたしやちつと、あの六三郎に緣のある者。それで掛り人になつて居りまするわいの

七郎　さうして、あの女の小袖は、何の爲に回向をなされますえ。

かや　サア、ありやわたしが末の娘、十四の年、川へ身を投げて死にました。おはんといふが、形見に殘したあの小袖で、袖下とめて姉娘の、十六夜といふに逢うて、その子にやらうと思へども、今に於て

七郎　お逢ひなされぬのかえ。そりや、ほんにお力落しでござりやすね。

トおかや、ホロリとする。豐梅、倉時、氣の毒なる思ひ入れ。

勘六　コレ〳〵、お前方まで同じやうに、淚をこぼす事はないわな。ちつと浮々しなさいな……なんだ小袖だ、「小袖物狂ひ」を浚ひやせう。お前方、彈いてくんねえ。

豐梅　お前、あの景事が語られるかえ。

勘六　エヽ、おらァ春太夫の直弟子サ、ハヽヽヽヽ。

ト唄になり、勘六、淨瑠璃を語り出す。豐梅、倉時、三味線を彈く。七郎助、短刀にて鳥の骨を叩く。おかや、藥を煎じる。この唄にて向うより幸之進、羽織袴、大小の形。若黨、草履取り、附き出てくる。跡より六三、羽織を着て、附いて出て來り、花道にて

六三　ヤレ〳〵、あなたには、丁度よい所で、お目にかゝりましてござりまする。

幸之　拙者ことも今日は、大川橋のお藏屋敷より、其方の用事を片附けんと罷り越したに、丁度幸ひ。して、其許の宅は。

六三　ハイ、あれが私しの宿許でござりまする。御案内仕りませう。御免なされまし。

ト先へ駈けぬけて舞臺へ來り

サア／＼、ちつとそこらを片附けてもらはうぞよ。

ト云ひながら内へ入る。

七郎　オヽ、こりやァ六三どん。

かや　ほんに、さうして、どなたやら連れ立つて戻つたのかいなう。

六三　アイサ、いま道で、お出入り屋敷の幸之進さまにお目にかゝつて

ト思ひ入れあつて門口に向ひ

サア／＼、マアこれへ、お通りなされませ。

幸之　許しやれ。

ト内へ入り、上の方へ通る。

かや　これはあなた、ようお出でなされました。ヤレ／＼、生憎と取散らしまして

トそこらを片附ける。

七郎　これサ、倉時さん、莨盆でも出しねえな。

倉時　ほんに、これはしたり、氣の附かねえ。

ト倉時、三味線を下に置き、幸之進の前へ莨盆を持ちゆく。豐梅、茶を出し

豐梅　ハイ、お茶おあがりなされませ。

幸之　これは何やら、怪しからぬ賑やかな內方ぢやな。

六三　イエ、今日は私しどもで、淨瑠璃の浚ひを致すと申しまして、

勘六　コレ／＼。六三どん、おらァこなさんが歸るのを、先刻から待つて居たが、いま話しもなるまいから、奥に待つて居るよ。

六三　オヽサ、待つて居るなら、勝手に待ちやれよ。

倉時　ほんに、それがようござんす。モシ、七郎助さん、お前もお出でな。

七郎　オイ／＼。モシ／＼、阿母様、この鳥の骨は、もうようござりますから、此まゝソックリ爰へ置きますぞえ。

かや　こりやお前、お世話樣でござりました。

七郎　コレ、鉈も爰へ置きやす。危なうござりやすよ。

勘六　これサ七さん、いゝ加減にしなせえな。

七郎　ドレ、奥で一杯やらかさうか。

ト合ひ方になり、七郎助、鳥の骨に短刀の身を添へて片脇へ置き、勘六、豊梅、倉時は、三味線と稽古本を持つて、暖簾口へ入る。六三、表へ思ひ入れ。

六三　モシ〳〵、お前方、待遠でござりませう。そこから裏口へ廻つて、待つてござりませ。

若黨　ハイ〳〵。

ト侍ひと中間は下の方へ入る。

幸之　時に、早速ながら、其方請負ひのお長屋の御普請金、都合百兩のうち、半金は先達てお役所にて相渡したれば、右殘金のお拂ひは、今日拙者持参いたした。

ト懐の胴巻より五十兩の小判包みを出し

卽ち金五十兩、改めて受取りやれ。

六三　ハイ〳〵。それは有り難うござりまする。左樣なれば

ト金を受取り、ちよつと改めて

五十兩のお金、慥かに受取りましてござりまする。念の爲、受取を致しまして
　　トおかや、掛け硯を出す。六三、受取を書き
これはお役所と致しませうか。
幸之　アイヤ、矢張り片岡幸之進とばかりでよいて。
六三　畏まりました。
　　ト名宛を書き、印形を出して捺す。幸之進取つて、ちよつと見て懐中する。おかや、思ひ入れあつて
かや　あなたが片岡幸之進さまと仰しやれば、そんなら夫稻野谷半左衞門と、御同役の
幸之　いかにも、稻野谷半左衞門は、以前の同役。その半左衞門を、夫とお云やる其許は、
かや　お恥かしながら私しは、その半左衞門が後家、かやと申しまする者でござりまする。
幸之　ヤレ〳〵。それは存じもよらぬ儀、殊にこの家にござるといひ。
　　ト思ひ入れあつて
成る程、六三ことは、當時お國屋敷へ短刀の儀につき、逗留いたして罷りある、船越十右衞門が
養子の悴、すりや、其方が爲にも主筋。
六三　左樣でござりまする。親十右衞門が勤めましたる、稻野谷の後家御樣、私しが爲にも主人の御老

母、それゆゑ只今にては、私し方へ引取りまして。
幸之　それは深切に、よくも奇特な。して、今以て天國の短刀
かや　行くへ知れざる日延べのお願ひ、十右衞門ことお國へ參り、いまだ罷り歸りませぬ。姉娘の十六夜は、鎌倉に於きまして、母へ貢ぎの金代り、その身を賣つて行くへ知れず、妹娘のおはんと申すも、その後不慮に相果てまして、便り少なき母が身の上、御推量なされて下さりませ。
幸之　ムウ。すりや、娘御にも離れられしとな。それは氣の毒。ア、、思ひ出せば、身も幼年のその砌り、一人の妹にお松といひしが、六歳の年、家來の小者長兵衞といふ奴、彼れを召連れ出奔なし、それより今に行くへ知れず、常々親の詞には、千葉妙見の守の包み、幼名まつと記し置きしとの事、假初めながら數ふれば、丁度今年で十七年、どこにどうして暮らす事やら、身につまされて御老母の今の嘆き。ア、、さぞかしと推量いたす。
六三　すりや、あなた樣のお妹御も
幸之　今に朝夕、思ひ出すて。
ト思ひ入れ。唄になり、向うより段介、足早に出て來り、門口より内を窺ひ
段介　許さつしやれ。下郎は千葉のお屋敷より

ト思ひ入れあつて、幸之進を見附け

ヤア、お旦那、これにお出でなされましたか。

ト内へ入る。

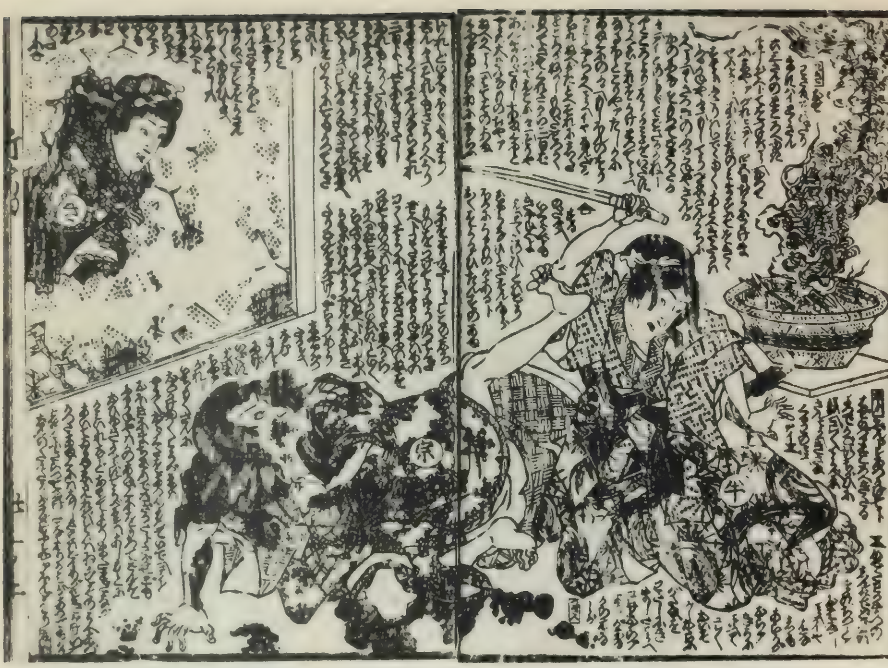
幸之　其方は家來段介。これまで尋ね參りしは、日限の延引といひ、定めし仔細があらん。して、用金持參いたせしか。

段介　ハッ、その御用金百兩、お國許より下郎が受取り、息もつかずに一昨日、やう／＼暮れ方、兩國の廣小路へかゝりしに、喧嘩仕掛けに怪しき曲者、無暗に引出す金財布、紐引ッ切つて駈け出すを、追はへ爭ふ暗まぎれ、皆くれ行くへを見失ひしが、道に待伏せして、詳しき樣子口走つたは察するところ、その相摺りこそ家中のうち、もしや後日の爲にもと、云ふも未練な恥面を、拭うて爰まで。殊に繪符まで失へば、申し譯には、奴がどん腹。

ト一腰へ手をかける。六三とめて

六三　ヤレ待たつしやい。成る程、さういふ事ぢやァ云ひ譯があるまい。一分も立つまい、といつて今更こなさんが、腹を切つて死んだといつて、盗み取られた御用金の、足しにはなるまい。

段介　ぢやと申して





六三　ハテサ、なんであらうと一旦は、六三が旦那にお願ひ申し、貰つた上で事濟まし。跡で始末はどうともならう。して、その盗人の面體は、こなさん覺えあらうがな。

段介　いかにも、面はしつかり奴めが、覺えあるゆゑ、所々方々駈けずり廻つて探しても、行くへの知れぬは運の盡き、それゆゑこの場で

ト また腹を切らうとするを、六三とめる。

幸之　待て段介。おのれ、盗賊の爲に金子を奪はれ、云ひ譯なさの生害と申すか。して、盗賊に奪はれしと申す證據があるか。

段介　サ、その申し譯なきゆゑに、生害いたして

ト また手をかけるを、幸之進、ツカ〳〵と寄つて、その手を拂ひ、段介の一腰を奪ひ取り

幸之　下郎が魂ひ、身が預かる。

段介　すりや、段介が

幸之　不屆き者の下部段介、金紛失の云ひ譯に、腹切つたとて何の益。その盗賊の面體を、存じ居るのがまだしも手がゝり、尋ね出して繩打ち來れ。それまで其方には暇をくれた。家來ならねば錆びたりとも、この一腰は取上げ置く。魂ひも無き大だわけめ。ハヽヽヽ。

段介　お情厚きそのお詞、命にかへても

六三　お金の詮議。奴どの。マアそれまでは、こなたの魂ひ

幸之　六三郎、其方にしつかと

六三　ハイ、お預かり申しまするでござりませう。

ト一腰を受取る。

幸之　下郎が一腰輕けれど、重きはお家の重器たる、天國の詮議が肝要。六三郎。御老母とても、隨分ともに

ト門口へ出る。下手より侍ひ中間出る。

六三　畏まりました。

かや　この上ともに、御前よろしう

幸之　然らば此まゝ歸宅いたさう。

段介　お暇の出た下郎めは、たとへお供は叶はずとも

六三　お見送りなら大事あるまい。お側を離れて、ナ、合點か。

ト段介へ思ひ入れ。

幸之　左樣ござらば、めでたい便りを

かや　幸之進さま。

幸之　相待ち申す

ト唄になり、幸之進に家來附いて向うへかゝる。餘程離れて段介、しを／＼と附いて、殘らず向うへ入る。六三おかや殘つて

六三　イヤハヤ、いつ何時どんな災難にあふも知れぬ。阿母樣、この一腰も戸棚へなりと

かや　しまうて置きませう。

ト床の下の引戸を明けて入れる。

六三　可哀さうにあの奴どのも、とんだ災難で、すんでの事に命一つを、棒に振らうとするやつサ。

かや　さればいの。その災難ゆゑにわしとても、今此やうに流浪して、思ひもよらぬこなたにまで、いかい苦勞をかけまするわいの。

六三　なにサ、その位な苦勞は、當り前でござりますのサ。ほんに、それで思ひ出したが、この間中から苦勞になつた、あの福島屋の一件。今日受取つた五十兩で、手附けの方を

ト云はうとして心附き、おかやと顏見合せ

イヤ、とつけもねえ話しさね。

ト紛らす。おかや、思ひ入れあつて

かや　イヤモウ、今も云ふ通り、いかに以前のよしみとて、ようマアわしを深切に、世話して下さる志し、嬉しうござる。それに甘えてこの母が、こりや打明けた話しぢやが、こなた衆親子二人には、同じながらも遠慮はなけれど、おきぬへの義理といひ、聞けばその上、おそのとやらに、深う馴染んで兎や角と。若い身空の事なれば、そりや有うちとはいひながら、そこが女房のおきぬへの、義理を思うて

ト思ひ入れあつて

ホヽヽヽ、わしとした事が、ツカ〳〵と、掛り人の身を以て、いらざる事に思はずも、意見がましい事云うたも、こなた衆親子二人をば、誠に杖とも柱とも、便りに思ふ心から。必ず悪う思うて下さるなや。

六三　なんの、それを悪く思ひませう。お前も又、其やうな事まで苦勞にして、ひよつと病でも起つては悪うござります。マア〳〵、何もかもぶん流して、奥へござつて、淨瑠璃の淩ひでも、氣晴らしにお聴きなさるがようござりまする。

かや　成程、それもようござらう。併し必ず、あのおそのとやらの

六三　エ。

かや　ドレ、勝手なと手傳うてやりませうか。

ト唄になり、おかや、思ひ入れあつて奥へ入る。六三郎、跡見送り

六三　ヤレ〳〵、年寄りといふものは、よくいろ〳〵な世話を燒いたものだ……マア、なんであらうと此方も男、意氣張りづくで手附けの代り、道具箱まで預けて置いたが、いろ〳〵な話しはあるし氣が氣ぢやァねえ。なんにしても、あの廻しの市助に、エヽコレ、早く逢ひたいものぢやが。

ト合ひ方になり、奥よりおきぬ出て來り

きぬ　アヽ、六三さん、歸らしやんしたかいなァ。

六三　エヽ、べら坊め、おらァ疾に內へ歸つてゐるワ。

きぬ　今日はいつもと違うて、月なみの淺ひ日、ちつとも早く歸つて下さんすりやよいに。內にも相應用もあるものでござんすわいなァ。

六三　エヽ、何を云やァがる。コレ、お出入り屋敷から御用があつてナ、呼びに來たから行つたのだワ遊んで步きはしねえわエヽ。

きぬ　誰れも遊んで歩かうと云はうぞいな。この頃中から夜に入ると、眼の不自由なその上に、搗てゝ加へて耳までも。サ、なんぼ聞えぬわたしでも、聞いた事もござんすが、胸に納めて何一つ、云はぬ心を不便とも、モシ、推量して下さんせいなア。

六三　エヽ、やかましい。どうとも勝手にしやァがれ。

きぬ　アイ、勝手には人さんも來て、手傳うてぢやわいなァ。

六三　エヽ、いま〳〵しい、とんだ福の神だ。

ト矢張り合ひ方になり、奥より七郎助出て來り

七郎　オヽ、おきぬさん、お前、爰に居なさつたか。モシ、どうだね、耳の痛みは、ちつとはようござりやすか。

きぬ　ほんに、お前は先刻にから來てぢやさうなが、まだろく〳〵に、挨拶も致しませぬわいな。

六三　イヤ、七郎助どん、昨日はおきぬが事、大きにお世話でござりました。

七郎　なにサ、さのみ世話な事もねえのサ。お互ひの事だ。コレ、そりやアいゝが。おきぬさん、お前昨夜から鹽梅が悪いといつて、今まで奥にとりかぶつて居たぢやァねえか。それに見りやァ、剛氣に薄着だが、冷えたら悪からう。なんぞ引ッかけて居なさい。ドレ〳〵、おれが取つて來てや

ちう。

ト暖簾口へ入る。

六三 エヽ、なにサ、あれが好きであゝして居るのだ。打ッちやらかして置かつしやいな。

ト直ぐに奥より七郎助、木綿蒲團を持ち、出て來り

七郎 サア〳〵、これでも引ッかけて居なさい。お前が着て居たのださうだ。

トおきぬの肩へ蒲團を掛けてやる。おきぬ見て

きぬ アイ〳〵、こりやお慮外でござんす。そんなら斯うして居りませう。イエモウ、大きに氣合ひもようござんすわいなア。

七郎 時に、おきぬさん、お前といふ者は、滅法界な者ぢやアねえか。昨日の晩、爰の内へ、おれが送つて來て歸ると、直にお前は、どこへか出たさうだ。日が暮れると眼が不自由な癖に、よる夜中一人で、どこへマア行きなさつたのヨウ。

ト七郎助、大きな聲にて云ふ。おきぬ、思ひ入れあつて

きぬ エヽ、あの時は、それ〳〵、昨日の晩、お前が歸りなさんしてから、急にわたしや思ひ立つて、アノ、彌勒寺藥師樣へ、眼の願がけに、探り〳〵參りましたが、もう〳〵、大抵困つた事ぢやご

ざんせぬわいなア。

七郎　困らねえでどうするものか。そりやァとんだ事だ。その不自由な身を以て、一人してよる夜中、どんな事があらうともいへねえ。ひよつとするとその上に、また怪我でもして見なせえ。重荷に小附けと云はうか。交ぜッ返した話しだ。まだそればかりぢやァねえ、お前、あの歸りがけに、わしやァ留守であつたが、預けてゆきなさつたあの娘を

ト云はうとする。おきぬ思ひ入れ。

イヤサ、娘子供ぢやァあるめえし。モウ／＼今度から、夜歩きはよしにするがいゝよ。

きぬ　ナニ、鰯を燒くえ。お前、風でもひきなすつたのかえ。

六三　エヽ、おきやァがれ。外聞の惡い。おへねえ圓通寺だ。

七郎　これサ、可哀さうに、そんなに云はねえがいゝわな。あの子だといつて、怪我の事だから、癒る時にやア、ツイ癒るだらう。

六三　それだといつて小ぢれッてえ。いま／＼しい山の神だ。

七郎　そりやァ定めし不自由でもあらうけれど、もしこなたがあの子に、愛想でも盡きた日には、あの親の長兵衛へ、第一おれの面が立たないといふものだ。

六三　なにサ、そりやァおれだといつて、外聞の悪い、今さら何しに愛想を盡かして、おぬしまで顔の立たねえやうな、不面目な事もしめえワ。マア〳〵、そんな野暮を云はねえで、なんと、サシでちよつと削らうぢやァねえか。

七郎　そりやァ有り難いが、おらァ内に用があるから。いま奥で昆布鱈で引ッかけて來たよ。

六三　そいつは如才はなかつたな。

ト奥より豐梅、倉時、三味線と稽古本を持つて出て來り

豐梅　オヤ、七さん、まだお前、爰に居なさんしたかえ。

倉時　モシ、おきぬさん、わたしらは、モウお暇申しますぞえ。

七郎　なんだ、お前方は歸るのか。待ちたまへ、おれも歸るから、そこまで一緒に送つてやらう。

兩人　そんなら、さうして下さんせいなァ。

六三　エヽ、お前方は、なんぼおれが歸つたといつて、さう逃げたがる事はねえ。マアいゝわな、遊んでゆきねえな。

倉時　オヤ、なんだな、六三さん、お前、いつの間にやら歸りなさんしたね。さぞおやかましうござんしたであらうわいなァ。

豐梅　サアノ〳〵、もう暗うなつたほどに、早う行かうわいな。モシ〳〵、おきぬさん、三味線も稽古本も、爰へ置きますぞえ。

きぬ　ナニ、明るいうちから奥へ鼠が出るえ。そりや氣味の惡いこつちやわいな。

豐梅　イヽエイナア、彼方は取込んで居るによつて、それで此方へ持つて來たのぢやわいな。

きぬ　エヽ、雨が降つて來たなら、傘を持つてお出でな。

六三　エヽ、おへねえ困りものだ。

ト此うち七郎助、門口へ出て

七郎　これサ、早くしねえ、日が暮れるわな。

豐梅　アイノ〳〵、おきぬさん、お大事になさんせや。

きぬ　ナニ、大事ござんせぬわいなア。

六三　そんなら七郎助さん

七郎　ちつと話しに來なさい。

ト唄になり、豐梅、倉時、跡より七郎助附いて向うへ入る。おきぬ、六三殘る。矢張り時の鐘。

六三　アヽ、いま打つのは暮れ六ツか。義太夫場の「小石川」なら、濡れ六つといふところだ。ドレ、

マア、灯をつけよう。

ト行燈を取出し、火打ち箱を持ち來り、から〳〵と打つ。おきぬ、この音を聞いて

きぬ　アヽ、火を打ちなさんすかえ。

六三　てめえ、これが聞えるか。

きぬ　鳥を拵らへる音ぢやと云ひなさんすか。

六三　誰れがさう云つた。

きぬ　エ……鼠が供餅を噛るとかえ。

六三　どこで噛る。

きぬ　エ、お隣ぢやと云ひなさんすか。

六三　なんの事だ……コレ、灯がついたが、見えるか。

ト大きな聲で云ふ。

きぬ　アイ、行燈は大方、この當てゞござんせう。

ト行燈の方へ指をさす。

六三　イヤ、こいつは奇妙だ。餘ッほど見えるわえ。

きぬ　エ、雨が降つて來たえ。

六三　なんだ、人だらしな。その耳で居られては、こいつは手古摺るわえ。

ト思ひ入れ。そこらを片附けゐる。おきぬ、探り／＼、三味線を取つて、絲を掛けかへる。唄になり、おその、袖頭巾をかぶり、バタ／＼にて駈けて出て來り、花道にて、跡先へ心遣ひあつて

その　ア、嬉しや、今の人音、わたしを追うてくるかと思うて。

ト思ひ入れあつて

六三さんの内は、大工町とやらいふ事、大方爰らで

ト窺ひ／＼門口へ來て、内をのぞき、六三を見附け

ヤ、六三さん、爰かいなア。

六三　ヤ、おそのか。

その　アイ。

ト内へ入らうとする。

六三　コレ。

ト思ひ入れあつて、そろ／＼と門口へ出て

ア、、こりやア待ち久しいから、てめえ、後金の催促に來たか。ナニ、氣遣ひしねえがいゝ。僅かな品でも大工道具を、おれが面づく、五十兩の代りに渡して、コレ〳〵

ト懐より一札を出して

手附けの一札取つて置けば、落ちついて居や〳〵。

その　さいな。そりやわたしも知つて居やんすけれど、今日聞けばお前の方も、また幸左衞門さんの方も、どちらも變替へとの事。その上、外に百兩揃へて、身請けの相談、その方へやる程にと、お梶さんがわしへの頼み。それ聞くと其まゝ、わたしや駈落ちして來たのぢやわいなア。

六三　ナニ外へやるとか。そいつは胸氣な話しだわえ。何と云つても此方が先約。マア〳〵、内へ來て居や〳〵。

その　それぢやというて、あそこに居なさんすは、お前の内方さんでござんせう。逢うてはどうも

六三　氣遣ひするな。おらが嚊アは、この中から鳥眼でナ、夜になると目が見えねえワ。その上に、耳へ膏薬が刎ねこんで、右の耳が聞えねえから、斯うするがよい、もしてめえを嗅ぎあてゝナ、あの子は何だと云つたら、三味線の稽古にあがつた弟子だと云ふから、そのつもりで居るがいゝぞよ。

その　其やうな事、云うてもようござんすかえ。

六三　いゝよ〳〵、大事ねえよ。おれに任せて置かつし〳〵。

ト手を引いて内へ入る。おきぬ、これを知らず

きぬ　モシ、六三さんえ、門が明けてあるかして、行燈の灯がチラ〳〵するぢやないかえ。

六三　オットその筈ぢや。コレ、今夜てまへの所へ、弟子入りの子が來たから、近附きにならッし。

ト大きな聲で云ふ。おきぬ、こなしあつて

きぬ　エヽ、弟子入りに來なさんしたのかえ。それはマア、ようお出でなさんした。サア、此方へお出でなさんせ。

ト脇の方を向いて挨拶する。

六三　これはしたり、其方ぢやアねえワ、此方だよ。

ト手を取つて此方を向かせる。

きぬ　これはしたり、麁相な。マア、これと申すもこの間、俄に鳥眼で不調法な。して、お名は何と申しまする。

その　アイ、わたしや

ト もぢ〳〵する。

六三　コレサ、大概な事は聞えねえ。何とでも云つて置くがいゝ。……コレ、この子の名は、お豆といふよ。

きぬ　エヽ、おまねさんと申しまするかえ。

六三　マア、そんならさうサ。

きぬ　モシ、六三さん、いつも弟子入りがあれば、わざとお杯を出さにやならぬわいな。慥か爰らに

ト 探り〳〵尋ねる。

六三　アヽ、コレ〳〵、世話をせぬがよい。おれが取つてやらう。コレ〳〵

ト 銚子杯を取寄せ

サア〳〵、爰にあるよ。てまへ、わざつと始めさつし。

ト 大きな聲で云ふ。

きぬ　アイ、いつもなら、わたしが始めてあげるが、眼病に酒は悪いといふ事。こりやお前、わたしが名代に始めて、そのおまねさんとやらに、一つあけて下さんせいなア。

六三　オツト呑み込んだ。サ、おその……ぢやアねえ、おまねさんだ、一つ飲みねえ。

その　アヽモシ、いとほしなげに、不自由なお方を側に置き、どうもわたしや氣の毒でござんす。もうもう、わたしや外へやつて下さんせ。

六三　ハテ、おれが内だ。いゝよ〳〵。

きぬ　モシ、六三さん、お杯を始めなさんしたかえ。

六三　オツト、始めた〳〵。サア〳〵、飮まつし〳〵。

ト無理に杯を持たせる。

その　マア、お前から始めなさんせ。

六三　なにサ、どうでもいゝわな。

ト銚子を持ち、酌にかゝる。

きぬ　モシ、六三さん、わたしが酌をしやんせうわいな。

六三　そんなら、さうさつし。

ト銚子をおきぬの鼻の先へ突出す。おきぬ、それを知らず探り延す。

オツト、爰にあるワ〳〵。

トおきぬ探り取つて

きぬ　サ、弟子入りの娘御さん、一つ飲みなさんしたら、わたしが名代に六三さんに、さして下さんせ。
その　これはしたり、憚りでござります。
きぬ　お杯は此方かいな。
六三　オツト、見當が違つた……爰だ〳〵。
　　トおきぬが手を持ち添へて一つ注がせる。おその飲んで
その　こりや、どうしやんせう。
六三　どうでもいゝわな。併し、施主の遺言だから、おれに献さッし。
　　トおきぬ、此せりふを聞いて、ホロリと思ひ入れ。六三、何心なく、おきぬの手を持ち添へ、手前の持つたる杯へ注がせる事あつて
　オツト、あるぞ〳〵。
　　ト飲んで
　サア〳〵、これでお弟子入りの御祝儀は濟んだよ。
　　トおきぬが左の方へ聞えるやうに云ふ。
きぬ　アイ〳〵、こりや大きにお世話でござんした……ほんに、勝手に、白魚の買うたのがござんした

阿扶様にお賴み申して、ちよつとお吸ひ物なと、拵らへてあげうわいの。

六三　ハテ、吸ひ物はいらねえよ。

その　どうぞ、お世話なされぬやうにして下さんせ。

きぬ　ちよつとさう申して來やんせう。

六三　これサ、吸ひ物はいらねえよ、

　　ト大きな聲で云ふ。

きぬ　ぢやというて、いつも弟子入りには、わざと箸を取らせますわいなア。

　　ト合ひ方になり、立上がつて、取りつき、探り〳〵奥へ入る。

その　モシ、六三さん、あのおかみさんが、譯あるわたしと御存じなう、誠の事と思うて、世話しなさんすを見るほど、わたしや氣の毒に思ふわいなア。

六三　なんの氣の毒。おらがやうな職人と懇ろしちやア、この位な事は有うちだわな。

　　トおきぬの噂なして居る。此うちおかや、奥より出て來り

かや　コレ〳〵、六三どのや、弟子入りに來なさんした、そのお子はどこにぢやぞいなう。

六三　ハイ〳〵、爰に居るのが、弟子入りに來た子でござりまする。モシ〳〵、必ず吸ひ物も何もいり

ませぬよ。

かや　さうではあらうが、おきぬどのが、あのやうに云うて居られますするわいの……ア、モシ、お前様ようお出でなされましたの。

その　アイ〳〵、これから度々参りまするでござりませう程に

ト兩人フツと顔見合せ

かや　ヤ、娘の十六夜ぢやないか。

その　オヽ、母さんかいな。

かや　娘かいなう。

その　母さん

兩人　逢ひたかつたわいなう〳〵。

ト縋り寄つてワツと泣く。六三、恟りして

六三　ヤ、娘といへば母さんといふを聞いては、そんなら常々阿母様のお噂なされた

かや　鎌倉に住んだ時、朝な夕なの暮らしを苦にやみ、わしに隱して、我れと我が身を賣りやつたる、十六夜といつたは、この子の事でござるわいの。

六三　エヽ、そんなら藝者のおそのといふは、あなたの御息女。左樣ござれば、わしが爲には、主人の娘御、知らぬ事とて

ト おそのと顏見合せ、ギヨツとしたる思ひ入れ。おそのもこなしあつて

その　六三さんのこの内に、實の母さんがござんすといひ、六三さんの今の詞。それではどうやら

かや　さいなう。以前勤めた十内が、今では船越十右衞門、その養子の悴は六三、すりや、わしが爲には家來筋、古主の落目と引取つて、心を附けての介抱は、若いにも似ぬ優しい氣立て。コレ、コレ娘、あの六三に、よう禮云うて下されいなう。

ト 喜ぶ思ひ入れ。おそのもこなし。よき時分より、おきぬ、暖簾口より窺ふ。

その　そんなら六三さんは、アノお前の爲に家來なりや、わたしが爲にも

かや　矢ツ張り家來筋ぢやわいなう。

その　エヽ。

ト 思ひ入れ。六三もこなしあつて

六三　その御主人の娘御と、知らぬ事とて情ない、身のいたづらに、現在お主のアノ腕に

ト 顏見合せて思ひ入れ。

その　アヽコレ、今更お主と云はしやんしては

六三　でも、現在お主の娘御。おそのさま。

その　アヽコレ、それではどうも

ト額見合せ思ひ入れ。

六三　アヽ、男の一分、立たぬわえ。

ト思ひ入れ。おきぬ、とつくり聞いて、暖簾の蔭へ入る。

かや　おそのさまと六三が云やるが、そんなら其方の今の名は、おそのと云やるかや。

その　アイ、お前に別れてこの江戸へ、身を沈めて藝者の勤め。今ではおそのと申しまする。して、わたしが妹のおはんは、定めし息才。してマア、どこに居りますぞいなア。

かや　サア、その妹おはんが事は

ト云つて、屏風に掛けし小袖を持ち來り

コレ／＼、おはんは爰に居やるわいの。

ト渡す。おその、思ひ入れあつて

その　見覺えのある妹が、振りの小袖の袖とめて、これをおはんと仰しやるは

かや　其方が江戸へ行きやつた跡、石部屋といふ町人へ、嫁入りさせたも紛失の、短刀が欲しさのまゝそれも間違ひ、似せ物の、その上、聟が氣に入らず、意見を賴みし帶屋の御亭主、その人と譯あつてか、二人駈落ち、あまつさへ、この小袖を形見に殘し、川へ身を投げ、死にやつたわいなう、

ト泣き落す。

その　エヽ、そんなら妹のアノおはんは、身を投げて死にましたかいな。知らぬ事とて、可愛い事をしましたわいなア。

ト小袖を取つて思ひ入れ。

かや　おはんが小袖の袖下を、直して置いたも、姉の其方に逢うた時、おはんが形見と渡したく、思ふ母が心のうち。その悲しみのその中へ、おそのと名を變へ來やつた其方、互ひに知らぬ同士といひ、もしや六三と、ひよつとマア

トこなし。

その　エッ

かや　母が心を、推量してたもいなう。

その　お道理でござりまする。さうとは知らずこの姉は、お側離れて不孝の上塗り。母さん、免して下さ

んせいなア。

ト小袖を抱へて、六三と顔見合せ、思ひ入れ。唄になり、向うより幸左衛門先に、幸之進同道して、草履取り二人附き、出て來り

幸左　半左衛門が後家おかやの同居いたす、六三が宅はあれでござるな。

幸之　左樣でござる。

幸左　御案内頼みまする。

幸之　心得ました……六三郎、宿に居るか。主用につき、堤幸左衛門どの同道いたした。イヤ、又ぞろ參つた。

六三　ヤ、幸左衛門さま、同道にて

幸左　ヤ、慥かに聲は

ト内へ入らうとする。

幸之　ハテ、性急な。マヽ、お扣へなされい。

六三　少しの間

トおそのを床の簾の内へ隱す。おかや驚き

かや　ヤ、なんで娘を

六三　ハテ、私し任せに……サア、お通り遊ばされまし。

ト門口に向ひ、思ひ入れ。

幸之　許し召されい。

ト兩人、内へ入る。幸左衞門、ヂロ〳〵内を見廻し

幸左　そんなら爰が、六三の宅か。

六三　幸左衞門さま、そんならお前も

幸左　身も主用で參つたぞ。稻野谷の後家御、久しう逢ひませぬ。

かや　ヤ、あなたは御家中

六三　すりや、幸左衞門といふお侍ひは

幸左　千葉の家中で當時お羽利き。大工の六三、おそのの事は、身共も手附けが濟んで居るぞ。それに

おのれが邪魔すれば、なんぞれかぞれで

ト六三へ立ちかゝる。幸之進思ひ入れあつて

幸之　これはしたり、幸左衞門どの、手附けとやら、何とやら、その御詮議ではござるまい。貴公のお出

では短刀の一埒、後家御へとくと仰せらるゝが、役目でござる。身共も即ち相役。役にも立たぬ手附けとやら、それもお上のお指圖かな。

幸左　イヤ、これは手前の私し事、何分御容赦下されい。

六三　して、幸之進さまの、又ぞろこれへお出でなされしは。

幸左　その趣き、身が申して聞かさう。六三が内に掛り人の、後家おかやどの、コレ、よく聞かつしやい。先達て日延べを願ひし天國の短刀、今以て差上げぬは、上を僞はる不屆きとあつて、願ひ出でたる船越十右衛門、お國屋敷へ人質なりと、きつと糺明いたし居るワ。

かや　エヽ、すりや、願ひに上がりし

六三　親十右衛門はお屋敷にて

幸左　オヽ、きつと糺明。聞けばわれが親だけな、あの十右衛門めは……その親の難儀は構はず、あのおそのめに現をぬかし、藝者狂ひの大工六三。

かや　エ、其おそのと仰しやるお詞、もしや娘の今の名は、おそのとあれば

幸左　そんなら後家御の娘のうち、姉は江戸にて奉公と聞いたが、さては

ト思ひ入れあつて

イヤ、それは差置き、今明日に右の短刀差上げねば、十右衛門めは重いお咎め。その上後家御も
お屋敷へ。サ、身共が連れて。

トおかやを引ッ立てにかゝる。六三とめて

六三　こりや此お方を、何とさつしやる。

幸左　ハテ知れた事、揚り屋へ打込むのだワ。

六三　すりやアノ、阿母様を

幸之　女儀の事ゆゑさま／＼と、身共が云ひ譯、お上にて取上げなきも、六三が方に同居のよし、聞く
と直さま厄病の、神で世に云ふ敵とやら、有ること無いこと沙汰する佞人。

ト幸左衛門が方へ思ひ入れあつて

氣の毒ながら、母御は屋敷へ連れずばなるまい。

トよき時分、簾の間より、おその、立聞き居て

その　エヽ、すりや母さんを

六三　アヽコレ、滅多に爰へ

ト思ひ入れ。おその、ちやつと隠れる。幸左衛門、目を附け

幸左　さてこそ、おその。

ト寄らうとする。

幸之　アヽコレ、役目の外は、御無用に遊ばれいサ。

ト思ひ入れ。勘六、奥より出かゝり居て、この時六三の側へ寄り

勘六　ハツ〳〵、御免なされませ〳〵……コレ〳〵六三、お屋敷のお拂ひが濟んだら、おれが方の勘定を、濟ましてもらはう〳〵。

六三　サ、お屋敷のお拂ひの儀は

ト幸之進へ心遣ひあつて、云はれぬ思ひ入れ。

勘六　これサ、お拂ひが出たら、勘定してもらはう〳〵。

ト催促する。六三、心苦しき思ひ入れ。聖天の鳴り物になり、向うより市助、道具箱を擔ぎ、スタ〳〵と出て來り

市助　六三さん、内か〳〵。

ト内へ入る。

幸左　ヤ、わりやァ市助ではないか。

市助　これは幸左衞門さま、そんならおそのが駈落ちを聞いて、その御詮議にお出でなされましたか。

幸左　すりやアノ……ヤイ〳〵、身共、詮議には參つたが、其やうな、おそのとやらが事では參らぬぞ。何をズバ〳〵と、ちつとあたりへ氣を利かせろヤイ。

ト幸之進へ心遣ひの思ひ入れ。

市助　ヘイ〳〵、これは不調法……コレ、六三さん、この間お前の所から受取つた、コレ〳〵、この道具箱、お前の顏だけ、五十兩のつもりで、一札もあげて置きましたが、ちつと俄に好い相談が出來ましたから、マア〳〵、この箱は返します。その代り、此方からあげた手附け證文を、返して下さりませ〳〵。

六三　コレ〳〵、市公、そりやアてめえ、大方おれが方ぢやア、五十兩が出來まいと思つて云ふであらうが、コレ、五十兩あるよ。案じる事は無い。サア、五十兩渡さうほどに、今更そんな事を云ふものぢやアないわな。

ト最前の五十兩を出して、市助へ無理に渡す。これを勘六見て、腹の立つ思ひ入れ。

市助　イエ〳〵、なにサ、さういふ譯ぢやアない。お前ばかりでもない……イヤ、幸左衞門さま、あなたにも申しまする。お手附けの五十兩は、後金延引ゆゑ、お腰の物にお返し申しまする。サヽ、お

受取りなされまして、お前の一札も、お返しなされて下さりませ。ハテサテ、お氣の毒でござりまする。

ト道具箱を六三へ渡し、大小を幸左衞門の前へ持ちゆき、差出す。幸左衞門思ひ入れ。

幸左　ヤイ／＼、此奴、さま／＼な事を吐かす。いつ身共が大小をわれに預けた。コレ、見ろ、この通り、兩腰は帶して罷りあるワ。ズバ／＼と、アヽ、此奴、狂人ぢやな、左樣か／＼、幸之進どの、御覽なされい、此奴、狂人と見えまする。

市助　イエ／＼、私しは、狂人ではござりませぬ。

幸之　成る程、どうやらあの者、狂人のやうにも見えまするが、あの又町人が持參の大小を見ますれば先達て貴公、殿樣より拜領の二腰、さすればさのみ狂人とも存じられませぬが、大小持參のあの者が狂人やら、殿拜領を預け物におしやるが狂人やら、どちらがどうとも、ハヽヽヽヽ。ハテサテ、狂人。笑止千萬な。

ト思ひ入れ。幸左衞門こなし。

六三　そんなら何と云ふ。手附けの濟んだおそのを、今更變替へ……さうはさせない。それが爲の手附けだ。是非とも五十兩渡して置く。外への身請けはさせないぞ。サ、五十兩、持つて歸れ／＼。

ト突きつける。

市助　それでも、この五十兩は受取られませぬ。

六三　イヽヤ、持つて歸れ〳〵。

ト爭ふ。勘六、思ひ入れあつて

勘六　コレ〳〵六三、てめえはマア、イヤ、とつけもない者だぞよ。おそのとやらいふ藝者に、手附けをやる。氣が強い。その位に金が廻らば、なぜ作料は拂はない。催促する度、お屋敷から拂ひが出ぬとの事……解つたワ。アヽコレ、讀めたワ。屋敷の金もとつくり受取り、藝者の手附けに、やつたのだな〳〵。

六三　イヽヤ、決してさういふ事ぢやアねえ。

勘六　して、その金は、どこから出たのだ。

六三　サア、そりやア。

幸左　コリヤ〳〵、職人、てまへ、屋敷の普請金は、お拂ひ殘らず濟んだぞ。

勘六　エヽ、左樣でございますか。さうあらうと思つた。サア、六三、諸職人の作料を寄越しやれよ
イヤサ、五十兩の拂ひは、どうするのだ〳〵。

六三　サヽ、それもちつと譯があつて

勘六　イヤ、譯は聞かねえ。コレ、この金を寄越せば濟むぞよ。

ト五十兩の金を取るを、六三とめて

六三　アヽコレ、こりやァ手附けの五十兩。

市助　コレ、此方は金はいらねえよ。お前、いるなら持つて行きねえ。

勘六　さうであらうよ。此方へ勘定。

ト初午の鳴り物にて、取らうとする。六三その手を押へる。立廻りよろしく、此うち向うよりお梶、

世話女房にて出て來り、門口にて内の樣子を窺ふ。

六三　おぬしが勘定、後方きつと。

勘六　イヽヤ、それぢやァ否だ〳〵。なんでもこれを

ト金へ手を掛ける。

六三　エヽ、聞分けのない。

ト取って投げる。勘六起上がり

勘六　わりやァ投げたな。それぢやァ猶々その金を

六三　どうもこの金は
勘六　そんなら外に金があるか。
六三　サア、そりやア。
兩人　サア〳〵〳〵
勘六　返事はどうだ。
ト せりつめる。六三、術なき思ひ入れ。おその、床の内にてあせる。市助、見附けて
市助　ヤ、おそのはあの床に
ト 駈けよるを六三、市助を捕へて
六三　エヽ、何をふざけた。
ト 引附ける間に、勘六、金を取つて
勘六　作料〆めて五十兩、勘定濟んだ。
六三　アヽコレ、それを
ト 市助を放して勘六の方へ寄る。此うち
市助　おそのを連れて

ト床へかゝるゆゑ、勘六を放し、市助を支へる間に、勘六は金を持ち、屋體囃子になり、足早に向うへ入る。六三、市助を投げのけ、門口へ行かうとする。お梶、ズツと入り

かぢ　六三さん、待ちなさんせ。

六三　何か知らぬが、急に此方に

幸之　コリヤ六三郎、用事を聞き捨て、いづれへ參る。

六三　サ、それは。

幸之　無禮千萬、他行はならぬぞ。

トきつと云ふ。六三、是非なく扣へる。

かぢ　六三さん、お初にお目にかゝりました。

六三　してアノ、お前は。

市助　わしらが親方、淸兵衞さんの内方、お梶さんとは、ぬしの事サ。

六三　そのお内儀が、何の用事で。

かぢ　おそのゝ事で。

六三　ヤ。

かぢ　折角お前や幸左衛門さまへ、手附け代りの品預かり、一札もあげたなれど、急に揃へて百両の、身請けなさるゝお方が出来て、よんどころなうこれへお返事。その斷わりに清兵衛が、參るところを名代に、女房のわたしが參りました。モシ、お次手ながら幸左衛門さま、あなたも左様、

ハイ、思し召して下さりませ。

幸左　ヤ、その女を外へ

ト云はうとして、心遣ひあつて

身共は左様な覺えはない。そりや間違ひであらう。

六三　間違ふ事も有うちだが、今更手附けを變替へされちやア、六三の面が、どうも世間へ。

かや　ア、コレ、聞けばおそのとあるからは、定めし娘の……アイヤ、藝者のおそのが事なれば、こなたに苦勞は掛け憎い。必ずともにわしが挨拶。コレ、どうぞ其まゝ置いて下されいの。

ト術なきこなし。

かぢ　左様でござります。今の詞の様子では、どうやらそのに縁あるお方。よし外々へ身請けがあらうと、まんざらお前の顔だけに、よごす事でもござんすまい。六三さん、マアさう思うて、あの子の身請けは、わたしが方へ。

六三　そんなら、どうでも

かぢ　顔を潰さぬその證據には、俄にそのは駈落ちと、聞いては來たが、あたりの聞え。もしやあの子がこの内に……サヽ、よもや居はしやるまいが、もし參つたら留めおいて、跡でゆつくり相談づくに。

六三　さうお前が譯道を、立てゝ云ふのをまんざらに、わしらがやうな傳法でも、聞分けねえでもござりやせん。今にも爰へおそのが來たら、とめ置いて、とつくりわしが入り譯を

かぢ　云うて聞かせて下さんせ。そんならどうぞ手附けの一札。

六三　お内儀さんの心意氣、二言と云はず手附けの證文。

ト證文を出し

サ、返します。持つてござりませ。

トお梶へ渡す。

かぢ　これでわたしも安堵しました。コレ、市助、あなたの方の一札も

ト幸左衞門へ思ひ入れ。市助こなしあつて

市助　ハイ〳〵、畏まりました……モシ、大小お返し申したからは、あの一札を

ト思ひ入れ。幸左衞門こなしあつて

幸左　身共は知らねどさる人に、世話燒きかゝつた手附けの一札、ソレ、返すぞ。エヽ、極道めが。

ト紙入れより一札を出し、市助に打ちつける。

市助　ハイ〳〵、これで兩方、事故なく

かぢ　濟めばわたしもあの子も仕合せ。直ぐに身請けの

六三　すりや、アノおそのは

かぢ　外へ身請けを

市助　慥かに爰に。

ト床の方へかゝるを、お梶隔てゝ

かぢ　コレ……サ、一緒に來さんせ。

市助　おかみさん。

かぢ　おやかましうござりました……ハイ、あなた方、これにお出でなされませ。

ト唄になり、お梶先に、市助は床へ目を附け、供なしで向うへ入る。この時奥よりおきぬ、淨瑠璃の寄せ本を持ち、探り〳〵出て來り

きぬ　コレ、六三さんえ。先刻來なんした弟子入りのお方は、どこに居さんすえ。稽古は何がよからうか。爰へ本を持つて來たわいな。

六三　アヽ、コレ〳〵、そこどころぢやァない。あの女は、疾にもう歸つたよ。

ト大きな聲で云ふ、

きぬ　エヽ、歸りなさんしたかえ。ハテ、氣の短かいお方ぢやわいな、

幸左　幸之進どの、役目でござれば、後家おかやを、お役所へ召連れまして

かや　すりや、短刀の御詮議ゆゑ、アノお屋敷へ

幸之　召連れ來れと仰せござれば、氣の毒ながら其許は、罷り越したる我れ〳〵兩人、同道いたしたその上にて。

六三　ア、イヤ、その儀は六三が何卒お願ひ。申さば主人の御老母を、お見捨て申して其まゝに、アノお屋敷へは、どうも遣はし憎うござりまする。その儀ばかりは

幸之　尤もの其方の願ひ。身共も左樣は

幸左　イヤ、上よりお指圖ござれば、是非とも母親連れ行かねば、貴公も拙者も役目が立つまい。殊につれなく當つたる、おそのが母の

ト床の方へ思ひ入れあつて

サ、引ッ立て行きて、厳しく糺明。

幸之　でも年寄つたる母親を、さほどにまでも

六三　サ、そこがあなたへ六三めが、お願ひ申して御老母様の

かや　ハテ、年老い朽ちし女子の身、たとへ命に及べばとて

幸之　身も聞き分けて罷りあれば、母の代りに誰れなりと、屋敷へ参る者なくては、身共も相役幸左衛
門どのも、素手ではどうも

六三　サ、その儀も御尤も。老母の代りに六三めが、女房のおきぬを差出しませう。何卒彼れを主人の
代りに。

かや　アヽコレ、どうしてマアおきぬどのを。殊に眼病、耳の悩み。

幸左　その病人のおきぬとやら、母の代りに同道ならぬ。それとも主人と思うても、いたはるならば、
コレ六三、われ縄かゝつて屋敷へ来い。

六三　ヤ。なんと。

幸左　その願ひなら、叶へてやらうワ。

幸之 それお聞濟みござるなら、六三をお連れなさるゝより、女房おきぬを同道召され。たとはゞ耳が不自由に致せ、隱し女のある事まで、お話しあつたら悋氣のほむら、定めてそのが

ト思ひ入れあつて

サ、その女を同道なさるが、よろしからうと身共は存ずる。

ト思ひ入れ。

幸左 イカサマ、貴公の詞では、却つて拙者が

ト思ひ入れあつて

願ひに任せてその女、身が同道いたすでござらう。

幸之 然らば聞濟みござるとな……コリヤ、六三、いま聞く通り其方が、願ひも叶へば、それなるおきぬを

六三 有り難うござりまする。早速彼れを……コレ〳〵、女房、今お屋敷より、てまへをお召しなさるのは、淨瑠璃をお好みと、コレ、お役人樣方が俄のお出で。てまへは仕合せ者だ。行かずばなるまい。サ、早く支度しや〳〵。

ト耳に口を寄せて云ふ。おきぬ、誠と思ふこなし。

きぬ　エ、なんと云ひなさんす。アノお屋敷から、わたしを雇ひに……これはマア、有り難うござります。左様なら、參りませう〳〵。併し、此やうな形では見苦しい。ちよつとアノ、着替へを出して

ト奧へ行かうとする。おかや、氣の毒なる思ひ入れ。

六三　アヽコレ、その着替へは、おれが取つてやらう。コレ〳〵

ト片脇より餘所行きの小袖を取出し

サア〳〵、これをちよつと着替へてから。

かや　何も知らいで粧ふ姿

きぬ　アヽモシ、ちよつとお前も……ハイ〳〵、御免下さりませ。

ト合ひ方になり、おかや六三立ちかゝつて、おきぬが不斷着を脫がせ、件の小袖を着せかへ、帶を締めさせる。

きぬ　アヽ、これは憚りでござります。

六三　左樣なれば、願ひの通り

幸之　母親の代りはそのおきぬ、拙者は殘つて、おかやどのに内談ござれば、幸左衛門どの、貴公よろ

しく、これなる女を

幸左　承知いたした。直さま召連れ參るでござらう。……コリヤ〳〵、家來ども、これなる女を同道いたせ。

中間　ハヽア。

きぬ　左樣なら參りませうが、アノ三味線はどなたが持つて

六三　コレおきぬ、迎ひのお方へお頼み申した。

ト大きく云ふ。

きぬ　それはマア、お世話樣でござります。左樣なら、ちよつと行つて參ります。

ト探り〳〵門口へ出る。六三、履物を直し

六三　ソレ、履物。

きぬ　アイ、お慮外でござりまする。

幸左　然らば身共が同道いたして

幸之　お頼み申す、幸左どの。

かや　アヽ、何にも知らいで

六三　アヽモシ。

幸左　お先へ參る。

幸之　萬事よろしう。

幸左　引ッ立てろ。

中間　立たう。

きぬ　ハイ〳〵、斯う參りますかえ。

ト唄、時の鐘になり、幸左衞門先に、おきぬ、何心なく出る。二人の中間、件の大小を持ち、おきぬが帶を捕へる。おきぬ、捨ぜりふ云ひながら、連れられて向うへ入る。幸之進、おかやを連れ、奧へ入る。六三殘つて、跡見送り

六三　不自由なおきぬを嘘云うて、やつたもお主の阿母樣

トこの時おその、ツカ〳〵出て

その　いとほしなけにおきぬさん、わたしが代つて

ト行かうとする。立廻りにて

六三　コレ、あなたは矢ッ張りお主の娘御。

との　ア、コレ、そのお主あしらひ、聞きたうもござんせぬわいなア。

ト耳へ袖を當て、思ひ入れ。唄、時の鐘になり、向ふより長兵衛、似せ物の短刀を腰に差し、早足に出て來り、門口にて、ちよつと内を窺ひ

長兵　頼まう〳〵。六三は内にか。ちよつと逢ひたい。

ト内へ入る。六三見て

六三　ヤ、こなさんは、おきぬが親の

長兵　オヽ、梶の長兵衛だ。コレ六三、娘のおきぬは、どうしました。

トうそ〳〵見廻す。

六三　アイ、あのおきぬは、急に雇ひの口が明いて行きましたが、モシ、長兵衛どん、何かとこなさんの、心に叶はぬ事だらけでもござらうが、これも互ひの縁づくでがなありませう。委細の事は七郎助に頼んで置きました。何分お頼み申しまするよ。

長兵　ハテ、何もかも七郎助に、よう聞いて來たのぢや。

トおそのを見て

コレ、この子は何ぢや。

その　アイ、わたしやアノ

　　ト云はうとする。

六三　アヽコレ、うつかり物を、ナ、コレ、云はぬものだよ。

長兵　これサ、六三、おれに隱してからが、疾から聞いて居る藝者のおその、譯ある事は知つてゐるぞや。ハテ、それにしても、娘のおきぬに

　　トうそ／＼見廻し、屛風に掛けてあるおとしの手拭を見附け、ソツと取つて見廻し

こりやコレ覺えのおとしの手拭、古びた鹽梅。こりやコレおれが

　　ト思ひ入れあつて

ハテ、よく似た染めもあるものぢや……イヤ、六三、今日おれが來たは外でもない。ちつとわしも、當分遠國へ行かねばならぬ事があつて、おきぬにも暇乞ひながら來たのぢや。それについて貴樣に賣りたい物があつて、わざ／＼持つて來た。六三、なんと買つてくれまいか。

六三　ハイ、そりやア何かは知りませぬが、職人のわしに、賣りたいと云はつしやるは、アヽ聞えた、大工道具の拂ひ物かな。

長兵　イヽヤ、そんな物ぢやアない。世にも稀れなる天國の短刀。

六三　エ、ナニ、天國え。
その　エ、その短刀を、どうしてお前が
長兵　サ、とんだ事からおれが手へ、渡つて來たは譯ある事、正眞正銘交りなし、しかも鑑定の折紙まで、添へてあるのぢや。コレ六三、なんとおぬし、買つてくれぬか。

ト風呂敷に包みし似せ物の短刀へ、正眞の折紙を添へて差出す。六三、おその、思ひ入れあつて、手に取り見て

六三　そんならこれが天國か、と云つたばかりで皆目に、目利の出來ぬこの六三。
その　わたしも噂に聞いた、家の立たぬもこの短刀。さはいへ誠の天國か、似せか誠か、女子のわたし。
長兵　どうしてそれが知れやうぞ。實に誠の天國ゆゑ、路銀の足しに買つて下せえ。それとも買はねば長兵衛が、持ちゆく先は、コレ〳〵

ト序幕の繪符を出し

千葉の家中の、片岡幸之進……この侍ひの同役に、幸左衛門といふ人が、尋ねる最中。これに賣るより有やうは、可愛い娘に連れそふ六三、貴樣に賣らうと持つて來た。正札附きの短刀の、値段は下直に金百兩、なんと、廉い物ぢやァござらぬか。

六三　すりや、短刀の價は百兩。

長兵　お氣に入らずば、外へ見せうか。

六三　イヽヤ、六三が貰ひまする。何を云つても目利が出來ぬ。餘所へ見せたその上で

長兵　鑑定を附けて買ふ氣だな。まづい仕方と思へども、賣つてやらうが、金はどうする。

六三　サ、金もいよ／＼正眞の、天國なりと極まつたら

長兵　イヽヤ、さういふ買ひ手には、おらァ賣るまい。

ト短刀を引ツたくる。

六三　アヽ、コレ／＼、それでは此方に

長兵　ハテ、百兩卽金受取らねば、渡さぬ短刀、金と引替へ。

六三　でも、大枚百兩の

長兵　金があるのに買はぬのか。

六三　何しにあらば、二言と云はず

長兵　イヽヤ、この場に金がある。外でもねえが此おその、幸左衛門さまが御執心、百兩出さうと仰しやれば、ぬしへ渡せば卽金で、百兩になるこの女。金の代りに、おそので賣らう。

六三　すりやァノおそのを、百兩の

その　代りとあれば此方にも、その短刀が欲しさが百倍。さはいへ嫌な幸左衛門、どうマアあそこへ

長兵　行きともないのか。そんなら是非なく外へ賣る。娘のおきぬを引上げて、まだこの上に此おその
まで、引込んで置くからは、六三は娘の引賣りか。誘拐かしをするのかえ。

六三　これサ、長兵衞、云はせて置けばズバ〳〵と、六三に於てはこれ程も、曇り霞みのない男だ。

長兵　なにを野郎が口綺麗に、大風な事を云ふが、コレエヽ、何もかも聞いて來たワ。娘のおきぬを千
葉の屋敷へ、てかけ妾の奉公人、跡でおそのをぬつくりと、女房にするか。そんな仕事にかけら
れて、四の五もくはぬ梶の長兵衞、面が立たぬワ。サア、おきぬを返すか。

六三　サア、そりやア。

長兵　但しはおそのを代りに寄越すか。

六三　サア、そりやア。

長兵　サア

六三　サア

兩人　サア〳〵〳〵

長兵　どうだえ。

ト六三、ギツとして居る。

理屈に責められ、返事はあるまい。娘が代りに、この女を

ト思ひ入れあつて、おそのを引立て、短刀折紙まで引ツたくり、行かうとする。六三、引退けるとて長兵衛を取つて投げる。

アイタヽヽヽ。

ト起上がつて

ヤイ、六三め、うぬは舅親の長兵衛を、手ひどくするな。おらアうぬが舅だぞ。手向ひしても大事ねえか。

六三　サア、その理屈は知つて居るが、無法にかゝる梶の長兵衛、聞分けなけりやア破れかぶれ、おきぬは勿論、おそのは猶更やられない。殊にそれなる天國も、洗つて見れば盗み物、代金無しに置いて行け。否だと吐かすとでんど沙汰。長兵衛、キリ／＼渡して行けサ。

長兵　うぬ、大風な事を吐かしたな。もうさう聞いてはこの短刀、うぬにはやらない。幸左衛門といふ人に賣つてしまふワ。

二ばんめ大切





ト行かうとする。六三、長兵衞へちよつとかゝるを、おその支へて

その　腹は立たうが、どうぞわたしに

六三　エヽ、退いてゐろ。その短刀は

長兵　イヽヤ、やらぬワ。

ト三人奪ひ合ひ、六三は手に當る道具箱の鑿を取つて無暗に打つてかゝる。おその、その手に取りつき

その　アヽコレ、怪我させては、却つてお前の

ト無理にもぎ取り、投げる。この鑿、長兵衞が額に當り、疵つく。

長兵　アイタヽヽヽ。うぬ等ア寄つて、おれをこりやア殺すのか。……コレ／＼、このいいん鑿で疵を附けたな。斯うなつては、もう／＼やらぬ。うぬが欲しがる短刀は、このげいん鑿で、斯うして斯うして

ト鑿を持つて短刀をしたゝかに打つ。似せ物ゆゑ、白刃捻れて、柄許よりポツキと折れる。

エヽ、これで餘ツほど腹が癒えたわえ。

ト投げつける。六三取つて

六三　ヤヽヽヽ、折紙添へたるこの短刀、もし天國に極まれば、掛けがへもなき千葉家の重寶。
その　白刃の面を打ち叩き、殊には折れて此やうに
長兵　それがうぬらへ腹癒せだワ。
六三　尋ねる品もこの如く、無法邪慳な長兵衞が……阿母樣への申し譯。もう助けては
　　ト爼板の上にある、誠の天國を鉈にしたるを取つて
鳥の骨さへ切れる事なら、うぬ、長兵衞が肩骨脊骨。
　　ト長兵衞が肩先をしたゝかに切る。長兵衞「ワ、ツ」と云うて倒れる。乘りかゝるのを、おその抱きとめる。立廻り。長兵衞は、やう〳〵起上がり
長兵　ヤア、切つたな〳〵。大工の六三が人を殺す。
その　アヽコレ、それを
六三　息の根とめて
　　ト又したゝかに切る。これより雨車、常磐町の騷ぎ、好みの合ひ方にて、三人立廻りよろしく、長兵衞、深手を負うて、よろめき廻り、おそのが脱いで置いたる平常着の小袖を枷に、立廻りのはずみ、長兵衞、片袖を引切り、摑みたるまゝ倒れる。おその、蒲團をかぶせる。雨車やむ。六三、思ひ入れ

あつて、件の鉈にて死なうとする。おその、その手に縋つて

そのアヽコレ、六三さん、お前は何で死なしやんす。

六三　コレ、おそのさん、これが死なずに居られうか。正しくこれかと思ひし短刀、刃金もこぼれて折れたる上は、阿母樣へどうマア云ひ譯。殊に怪我とはいひながら、この長兵衞はおきぬが親、舅を殺したこの六三、けちな死ざま見せんより、有りあふ鉈で腹切つて

ト死なうとする。おその、取りつき縋つて

そのサ、尤もでござんすが、假にも舅の長兵衞どの、殺した科と死なんしては、跡へ殘りしわたしと母さん、誰れを力に短刀の、詮議した上稻野谷の、跡目を立てませうぞいなア。コレ、死ぬるばかりが男でもござんすまい。それとも死ないで叶はずば、わたしも一緒に、お前の手に掛け、どうぞ殺して下さりませ。

六三　サア、人殺しより六三めが、死なねばならぬはお前の腕。

そのエ。

六三　コレ。

ト思ひ入れあつて、おそのが彫り物をまくり

お主の娘と知らぬ身の、ひよんな事から假り枕、洒落が高じて此やうに、六三女房と入れ墨の、家來のわしが一生の、疵物にした科人ゆゑ、どうも死なねばなりませぬ。

その　お前が死なうと云はしやんすりや、なんぼ主でも家來でも、腕に彫つたわたしが女房、どうして生きて居られませう。サ、お前が殺して下さんすりや、わたしが爰で

ト鉈を取上げ、死なうとする。六三とめて

六三　尤ものその詞、是非がない。いかにもわしが主人のお前を、手にかけたその上で、死んでしまふが申し譯。そんなら此まゝ

その　互ひに死ぬる、用意は爰に。コレ

ト　おはんが小袖を出し

妹が形見。

六三　回向の仕納め。

その　お前も亂れた

六三　鬢のほつれを

その　ドレ、撫でつけて。

ト思ひ入れ。六三、鉈へ手をかけるを、おその、きつと留める。時の鐘、凄き合ひ方になり、おその奥へ思ひ入れあつて、頭の櫛にて六三が鬢を撫でつける。この合ひ方をかり、向うより幸左衞門、頬かむりにて出てくる。この帯に、おきぬ取りつき、跡より市助、權九郎、勘六、附いて出て來り、花道にて

幸左　コリヤおきぬ、屋敷へ參ると見せかけて、われに頼んだおそのが身の上、必ずともに手引きして身共に渡せよ。其方が爲にも仇ある女、道々云つたを忘るゝな。

ト耳に口寄せ云ふ。おきぬ、思ひ入れあつて

きぬ　お氣遣ひなされまするな。仕負ふせてあげませう。

市助　モシ、旦那、外でおそのが身請けをさせ、お前の方へ揚げ玉の

勘六　その手番ひでは、わしらも共々。

權九　折角ものした百兩の、金も魚を見失ひ

幸左　無駄骨折つたその代り、われも働らけ。

權九　呑み込みました。

勘六　わしは向うのしがく場を

幸左　必ずぬかるな。

勘六　合點だ。

ト捨て鐘、合ひ方になり、勘六、向うへ入る。おきぬ、探り〱門口へ來り、三人は囁き合ひ、路地口に入る。おきぬは門口をさつと明けて

きぬ　ハイ、お世話様でござりまする。

トこれにて兩人驚き、死骸を圍ふ。おきぬ、探り〱、内へ入り

これはしたり、六三さん、どこに居なさんすえ。

トこれにて六三、思ひ入れあつて

六三　オヽ、おきぬか。なぜ、お屋敷から戻つた。

トおきぬ、こなしあつて

きぬ　サイナア、聞いて下さんせ。お屋敷へ連れられて參つたところ、肝腎のお客さんが、明日に延びたによつて、明日上がれと、權柄な云ひつけ。

六三　ヤ、合點のゆかぬおきぬの詞。よもや屋敷へ同道せし、幸左衛門が其まゝに

そのぬしを歸さう筈もなし、これには大方

六三　コレ。そんなら明日上がれとか。
きぬ　アイ、それでわたしや戻つたが、勿怪の幸ひ、お屋敷でお頼みは、「八重霞」の道行場、久しう浚はず置いたゆゑ、とんと忘れて居たものを、意地悪うお好みゆゑ、浚うてゆかずばなりますまい慥か三味線、一本も爰らに

ト探り〳〵、蒲團を探り見て

ヤ、誰れか寢て居なさんす。阿母様かえ。モシ、轉寢して、お風召しては……サ、ほんまに此方へ。

ト何心なく蒲團を捲り、長兵衞が件の片袖を握り、臥したる死骸を、おきぬ見て「ヤア」と云はうとして、物に紛らし、思ひ入れ。六三、手早く蒲團をかぶせて

六三　爰には誰れも寢ては居ぬ。必ず起すに及ばぬよ。

ト云ふを、おきぬ、聞きつけし思ひ入れにて

きぬ　アヽ、阿母様ぢやござんせぬか。そしてマア、誰れさんが寢てぢやえ。
六三　サ、爰に寢て居るは、アノ、ソレ、いつも湊ひに見える、伊勢久の若い衆サ。
きぬ　あなたがマア入り口に、前後他愛も……ホヽヽヽ、いかう醉ひなさんしたと見えるわいなア。

……モシ、三味線や本はござんせぬかえ。

ト探るとて、折紙を探り當て、思ひ入れあつて

アヽ、こりやコレ、どこからか、彈初めの摺り物が出來てかいな。ほんにマア、ちつとのうち居ぬと、此やうにマア取りちらして。彈初め淩ひは、お互ひの事ぢやによつて

ト折紙を懐中する。六三見て

六三　ヤ、その折紙を

ト取らうとする。おきぬ、その手を捕へて

きぬ　三味線わえ。

六三　アイヤ

トつかへる。おその慄ふ。

きぬ　調子が合してあるかしらぬ。

トあたりを探る。六三、おそのをキツと捕へて、三味線と撥を片手にて取り

六三　ほんに、爰にあつたわいの。

ト目先へ突きつける。おきぬ、探り取つて

きぬ　オヽ、よう取つて下さんした。本はあつても夜に入ると、見えぬ鳥眼の垣のぞき、ドレ、滚つて置かうか。

ト調子を合す。六三、おその、ホロリとして

その　とても二人は死ぬる身の、今際の際の妹が形見、せめて着替へて最期の曠れ着。殊にお前の大事の男、六三さんと二人して、心中するを見ながらも、いとしや鳥眼の病にて。

トおきぬへこなし。

六三　側に居ながら見聞きさへ、叶はぬのみか剰つさへ、親を殺され御主人の、この娘御と心中と、跡にて聞かばさぞやさぞ、恨まん事の、可哀や女房。

その　女子の道に違うたおその、この云ひ譯は未來から。モシ、お赦しなされて

ト手を合す。

六三　コレ。形見の小袖を

ト思ひ入れ。

きぬ　（淨瑠璃を語る）「手を引き合うて水入らず、死にゆく身の妹背鳥、千日寺へと辿りゆく、おそのは所體ほふ〳〵と、よしが形見風呂敷に、包むとすれど目に洩るゝ、涙は袖に三津寺の、觀音樣の

御緣から、實にや大悲の御誓ひ、暗きに迷ふ我れ／＼を、救ひ給へと伏し拜む、世の諺に違ひなし、わしもお前も數へて見れば、丁度十九と二十五の、厄の祟りか神の罰、重き罪科あるならば。

トこれを彈き語りのうち、おその、おはんの小袖を着る。六三、帶を締めさせ、いろ／＼あつて、件の鉈を取上げ

六三　死ぬる支度を露知らず、側で浚ひの八重霞。

その　おその六三の道行を、一口なりと彈き語り、物が云はする惡緣か。

六三　お主の娘を手にかくる、これも不思議な緣結び。

その　あの母さんの御存じないうち

六三　未來は一つ

その　蓮の臺

六三　さはいへ主人の

トは見詰めて思ひ入れ。

その　氣遲れしてか。

六三 是非に及ばぬ。

ト おそのが胸づくしを取つて突き立てようと、鉈を持ち直す。

きぬ 六三さん、待つた。

六三 ヤ。

ト 振りかへる。

きぬ わたしは親を退けば他人、遺恨によつてはそりや有うち。腕に殘る彫り物も、知らぬ昔は是非がない。コレ……いとほしなげにおそのさん、お前の手にかけ先の世まで、主殺しの惡名は、どこで拭はうと思はしやんす。

その すりやアノ、お前は

六三 そんなら病氣は

ト 持つたる鉈を思はずバツタリ落し、恟りする。おきぬ、ツカ／＼と寄つて、件の鉈を取るより早く長兵衞が死骸に駈けより

きぬ 親子といへど敵同士。

ト 顔を外けて止めを刺す。雨車烈しく聞える。おきぬ白刃をキツと見る。

六三 すりや、この程の怪我というたも

きぬ 聾の早耳。

その お前の鳥眼は

きぬ わたしへ遠慮させまいばつかり。

六三 見えぬ兩眼、怪我せし耳も

きぬ エヽコレ、聞えぬわいの六三さん、エヽ、お前はなう。

ト合ひ方になり、おきぬ思ひ入れ。

親を殺した天下の科人。されども正しくこの白刃、血をあやすれば俄の春雨。正しくお前の、詮議なさんす

六三 もしや尋ぬる

ト巻きたる鉈の繩を取り捨て、キツと見て

ヤヽヽヽ、鉈菜刀と思ひしに、銘はしつかり天國と、世にも鋭き刃金の鍛え。

その そんなら最前打ち折りし

六三 この短刀は、眞赤な似せ物。

ト折れたるを取上げる。

きぬ　長兵衞どのが正銘の、この折紙を證據にして、似せたも矢ッ張り日頃の惡心。短刀知れたる上からは、折紙添へて。

ト六三に渡す。

六三　して又おきぬが、鳥眼と云うたは。

きぬ　お前と譯あるおそのさん、わたしへ遠慮と思ふから、粹を通して此方から、見えぬ顏したばつかりに、出てする業も我が內で、目にかゝつたがわたしが仕合せ。この程兩國廣小路で、思はぬ怪我を幸ひに、耳が遠いと色氣なう、僞り云うたも親ながら、心の惡い長兵衞どの、惡事を聞き出す淺はかな、女子の智慧の拵らへ事、それゆゑにこそお尋ねの、徳次郎といふ盜賊こそ、既にわたしが一日も、親に連れられ鎌倉の、帶屋を出した長右衞門どの、おはんさんと二人連れ、死んだというたは皆僞り、姿を變へて針の宗庵。めぐる因果は稻野谷の、お前の親御を手にかけた、親の敵をおはんさん、討てどもそれは內證事、罪は遁れぬ人殺し。わたしが密かに伴なうて、預けた先も男氣な、お方を賴み、これ程も、外へ洩らさぬ深切を、いかにお前の氣に入らぬ、女房とても胴慾な、そりやあんまりぢや六三さん、これいなア、お前はつれないお方ぢやなう。

　　　　トきつとこなし。よき時分、奥より幸之進出かゝり、立ち聞く。

はん　すりや、父さんを殺したる、その新藤の徳次郎、妹のおはんが、かよはき小腕に

六三　敵を討てどもこれといふ、證據なければ人殺し。

きぬ　サ、その人殺しはこのおきぬ、假の夫の長右衛門、義理ある親の長兵衛どの、親と夫を殺せし大罪。

　　　　トこの時幸之進、ツカ〳〵と出て

幸之　すりや、長兵衛を手にかけしと、自身の白狀。して、その證據は。

きぬ　即ち死骸に殘りし片袖、これはわたしが着替へのちぎれ。

　　　　ト死骸の持つたる片袖を取つて差出す。幸之進見て

幸之　健氣な女……合點のゆかぬは。

　　　　ト思ひ入れあつて、落ちたる繪符を取上げ

　　こりやコレ家來段介が、失ひたりしこの繪符が、どうしてこの家に。

　　　　ト思ひ入れ。この時、七郎助、門口の路地より出かゝつて窺ふ。

六三　それぞこれなる長兵衛が、持參のその繪符。

幸之　すりや、横死せし

ト つか〱と寄つて、長兵衞の死骸を見て

さてこそ面體覺えある、頭は雪と變れども、正しく幼少の妹を連れ、逐電なしたる若黨長兵衞。

きぬ　それを義理ある親といふ、おきぬが素性、合點がゆかぬ。もし幼少よりこれまで持ちし

千葉妙見の掛け守、それに記せしわたしが幼名。

幸之　もしやお松と云はざるや。

きぬ　エヽさう仰しやれば、コレ〱〱。

ト 守の中より妙見の札を出し

「幼名まつ」と記せしお守。

ト 幸之進へ渡す。

幸之　さてこそ親御の御手蹟、これを持つたるおきぬこそ、六歳の時家來長兵衞、誘拐したる妹のお松

きぬ　そんならあなたは、誠の兄さん。

幸之　家名も片岡幸之進、知らぬ事とて其方は妹。

きぬ　お前は兄樣。

幸之　思ひがけなう

きぬ　變つた所で

幸之　同胞名乘り

兩人　合ひましたなア。

六三　すりや、おきぬが爲には、あなたは實の兄御樣。只心得ぬは、この短刀、どうして爰に。

ト この時七郎助、これを聞いて

七郎　そんなら先刻安錢で、鉈の代りに買つたのが、アノ天國の短刀であつたか。

ト 駈けよる。

幸之　その品、これへ。

六三　ハッ。

ト 幸之進へ渡す。よく〳〵見て

幸之　ヤヽ、疑ひもなき天國の、短刀尋ね出せしも、六三が手柄。其方、老母を同道いたして

ト 六三へ渡す。この前に、おかや出かゝりゐて

きぬ　嬉しやそれで、阿母樣も

かや　短刀戻れば稻野谷の、家の榮えも六三が働らき。その上おはんも存命と
きぬ　嘆きの中のお喜び、それをあの世へ土産にて、あなたのお手柄。
　　　ト兩手を廻す。
幸之　健氣な妹。
　　　ト捕り繩たぐつて立ちかゝる。おかや、おその縋つて
かや　女に稀れなおきぬどの
その　科人にして、どうマアこの繩
きぬ　イヽヤわたしはまだ外に、身に重なりし罪科に、繩かゝるのはかねての覺悟。必ず賴むはおはんさま。
その　そんなら妹の、おはんが行くへも
きぬ　賴み置いたは男氣な、七郎助どの、詳しう云うて。
　　　ト思ひ入れあつて
　　さはさりながらおそのさん、六三女房と彫り物の、消すに消されぬ入れ黑子、めでたう夫婦に
　　ト ほろりとする。この前より路地口に幸左衞門、市助、權九郎、出かゝり、窺ひ居て、この時

幸左　身共を偽るその女。人殺しなら

ト つか〳〵と入り、おきぬへかゝる。幸之進支へる。おきぬは拾ひし手紙を出し

きぬ　用金百兩奪ひ取れと、宛名は堤幸左衞門。

幸左　ヤ、それを。

ト寄るを幸之進引附ける。

權九　南無三、こいつは

ト向うへ駈け出す。此うち向うより段介出て來り、花道よき所にて行きあひ、兩人ちよつと立廻つて押し戻し、門口へ來り、取つて引敷き

段介　用金奪ひしこの盜人、その賴み手は慥かにそれなる

ト立ちかゝる。幸左衞門、權九郎、逃げんとするを、七郎助は幸左衞門、段介は權九郎と立廻り。市助は短刀を取らうと立ちかゝる。六三立廻つて疊をあげる。幸左衞門、權九郎、市助、バラ〳〵と床の下へ落ちる。六三、手早く疊を敷き、上へ上がつて

六三　極樂落しが床の下、事納まつて二人が詮議。

幸之　自身の白狀、不便ながらも

六三　すりや、どうあつても

きぬ　お主や夫に代る身の、あの世の縁は六三どの。

ト思ひ入れ。

幸之　科人、捕つた。

ト早繩をかける。おかや、おその泣き落す。

段介　主人の妹御、せめて面を隠すは幸ひ

トとしの手拭を取つて、おきぬにかぶせる。

きぬ　嬉しうござんす。情で顔は晒さねど、晒しに染めた手拭の、仇なるとしの散らし書、散らさぬやうに、おそのさん。

その　そんならわたしに、お前の男を

六三　添はすおきぬが氣強くも、男を去つた去り状の

きぬ　三下り半は、わたしが帯の

段介　そんならこれを

トおきぬが帯の間より、一札を添へたる件の金財布を取出す。

きぬ　ぬしへ渡して。
段介　ヤ、こりや失ひし百兩の
きぬ　鵜の目返しの覺えの財布。
六三　して、一札は。
　　　ト開き見て
　　　ヤ、こりやコレおそのが
その　年季證文。
かや　すりや、身代の百兩も
幸之　慥かに家來が失なひし
六三　屋敷のお金で身請けの納まり。
皆々　すりや、その金も
きぬ　拾うたながら其まゝに、訴へ出でぬは盜みも同然。
皆々　ヤ。
きぬ　この身一つに引請けて

幸之　依怙なき成敗。
段介　痛はしながら
　　ト繩を引き立て、おきぬを連れ、幸之進跡より附き、花道へかゝる。おきぬ、思ひ入れあつて
きぬ　おはんさんの形見の小袖、袖にせぬやう
六三　袖の切れたる
その　お前の小袖は。
　　ト件の着物を見せる。おきぬ、振り返つて
きぬ　それも形見と
六三　ヤ。
きぬ　回向して下さんせ。
　　ト時の鐘、唄になり、段介、幸之進、おそのを先へ立て、向うへ入る。四人殘つて跡見送り
六三　サア、この上は少つとも早う、短刀を阿母様、お前の手からお屋敷へ。
かや　それも急げど娘のおはん、あの子の顏も
七郎　それも尤も、さりながら

かや　心の急くはこの短刀、折紙添へてお屋敷へ

ト短刀を取上げる

六三　併し下家の三人を、遁さぬやうに

ト疊を上げる。この前より幸左衛門、權九郎、市助。路地の方より這つて逃げ出る。幸左衛門は市助と囁き合ひ、幸左衛門は向うへ走り入る。六三、下家を見て

南無三、詮議の殘つたあの侍ひ、下家を拔けて、程は行くまい。

七郎　ちつとも早く。

トこの時、門口の兩人、バラ〳〵と入り、おかやとおそのへかゝり

權九　その短刀を

市助　おそのは旦那へ

ト兩方よりかゝる。六三、兩人を引退け、立廻る。此うち權九郎、短刀を取つて向うへ走り入る。

六三　南無三。野郎め。

その　あと構はずと。

市助　われを。

トかゝる。おその、蒲團を市助にかぶせ、押へる。おかやは折紙を拾ひ、行燈へかざして見る。六三は一腰をぶッ込み、しやんと尻をからげる。此うち市助起上がつてかゝるを、七郎助支へ、屋體囃子になり、六三は向うへ入る。市助は、七郎助を振り拂つて、同じく向うへ追ひかけ入る。舞臺は皆々引ッ張りよろしく

幕

幕引きつけると、直ぐに屋體囃子のツナギにて、引返し。

第二番目大切　萬年橋初午祭の場

役名――片岡幸之進。山姥の權九郎。萬年橋の若い者、でんぼう傳四郎。同、小旦那寸太。同、惡玉善吉。大工、勘六。廻し男、市助。堤幸左衞門。大工、杣の六三郎。

本舞臺、三間の間、萬年橋、柾木稻荷初午の體。幟、地口行燈、提灯、花やかに飾りつけ、爰に幸左衞門、市助、勘六、權九郎、傳四郎、寸太、善吉、いづれも六三が持つたる短刀に手をかけ、引組んで居る見得。屋體囃子にて幕明く。

ト皆々立廻りあつて、「ドッコイ」ととまる。

六三　こりやアうぬら、この短刀をなんとする。

幸左　知れた事だッ。おそのが戀の意趣晴らし、その短刀を奪ひ取つて

市助　旦那の手からお屋敷へ、あげてしまへば稻野谷の

勘六　家を絶やすがまだしもの、腹癒せなりと仰しやるゆゑ

權九　引ッ浚つたる天國を、此方へ渡せばその通り

傳四　四の五と吐かせば頼まれた、おいらが寄つて幸ひな

寸太　萬年橋からどんぶりと、直ぐに水葬、川流れ。

善吉　おいらに短刀、六三、キリ〳〵

皆々　渡せエ、。

六三　幸左衞門に頼まれて、立前取りのがらくためら。邪魔をひろげば片ッ端、折も幸ひ初午の、柾木稻荷の神いさめ、劍の舞を始めるが、キリ〳〵爰を退くまいか。

權九　寄つてたかつて總がゝり、六三をしめろ。

皆々　合點だ。

ト六三にかゝり、立廻りよろしく、これより祇園囃子、初午の鳴り物なかり、短刀を枷に大タテよろ

しく存分にあつて、トゞ六三の手へ短刀納まる。この時、後より幸之進、ツカ〳〵と出て

幸之　六三、短刀は手に入つたか。

六三　氣遣ひなさるな、手に入りました。してアノおきぬは。

幸之　御吟味濟んで別條なく、命も助かり、お褒めのお詞。

六三　すりや、女房は……エヽ、忝い、

幸左　それを。

トかゝるを、六三、キツと引敷き

六三　動きやァがるな。

トちよつとあつて

まづ今日はこれぎり。

めでたく打出し

敵討櫓太鼓

かたきうちやぐらのたいこ

敵討櫓太鼓

序幕

瀬戸明神の場
島川太平内の場

役名――島川太平。磯貝藤助。源次兵衛娘、お雪。安森腰元、おさご。鷺の首太左衛門。安森下部、豆助。菊坂小源次。神職、榊左膳。遠山官藏。關口五平太。下部、權平。中間、角内。山の内の奥方、千草の前。海老名軍藏。安森源次兵衛。磯貝實右衛門。磯貝下部、友平。

本舞臺、向う一面の淺黃幕、石の玉垣、石の鳥居、これに瀬戸明神と記せし額を掛け、所々に石燈籠毛氈を掛けし長床几を並べ、爰に左膳、烏帽子裝束、神主にて、床几にかゝり居る。側に菖蒲革の中間二人、六尺棒を持ち、立ちかゝり居る。すべて瀬戸明神社内の體。よき所に松の立ち樹、日覆より同じく吊り枝。大拍子にて幕明く

中間　今日當社に於て、天下泰平の御祈念とあつて、即ち安達家の御名代、海老名軍藏さま
同　まつた、山の内家の奥方様、御參詣でござりまする。
左膳　非常を糺す辻がため。最早お入りに間もあるまい。よろしく警固いたされよ。

トこの時、向うにて

五平　怪しからぬ早え足だ。姐え達、待つて下さい。

ト大拍子になり、お雪、振り袖。おさご、腰元の拵らへ。豆助、中間の拵らへ。跡より五平太、浪人の拵らへ、五合德利を提げ、醉うたる體にて出て來り

これサ〳〵、先刻から呼ぶに、知らぬ顔をするとは曲がない。話しがある。待つて下せえ〳〵。
ゆき　これは〳〵、ついぞお目にかゝらぬお方ゆゑ、此方の事ではないと存じました。私しどもに何御用。お前、よいやうに御挨拶を、
さご　見受けますればお武家様さうなが、私しどもは今日、明神様へ參詣いたすもの。
豆助　何の話しか知りませぬが、立ちながらお話しもならぬ。お嬢様にも、マアあれへ。
五平　イカサマ、當つて碎けろ、男は氣で持てといふから
さご　あれへ參つて、お話しを承りませう。

豆助　サア、お出でなされまし。

ト四人舞臺へ來る。左膳、お雪を見て

左膳　安森源次兵衛さまの御息女お雪さま、ようこそ御參詣なされました。

ゆき　今日は御兩家樣の御參詣ゆゑ

さご　あなた樣にも、御心配でござりませうな。

豆助　モシ、お侍ひ樣、お孃樣に、何やら御用があるではござりませぬか。

五平　川といふは外でもない。モシ、お雪さん……………アヽ、いゝ御器量だなア。それゆゑ、友達の島川太平が、お前を女房に持ちたいといふから、仲人をしてやらうと請合つて來た。サア、おれと一緒に來てもらはう。

さご　これは又滅相な、壁に馬乘りかけたやうな。

豆助　藪から棒といはうか

ゆき　どうしてマア其やうな事が

五平　ならぬと云へば、おれも武士が立たぬ。末のところはどうなりと、足入ればかりを

ゆき　それぢやというて、

五平　ハテ、悪い事は申さぬ。ちよつと身共とお出でなされい。

　　ト手を取る。左膳出て

左膳　これはどうでござる。すべて縁談なぞと申すものは、一朝一夕にゆくものではござらぬ。

五平　なんだ、神主の知つた事ではござらぬ、すッ込んで居やれ………サア、お雪どの、是非とも一緒に。

五平　エヽ、邪魔をせずと、そこ退きやれ。さごアヽコレ、滅相な事をすると殑さぬぞ。

豆助　うぬ、狼藉な。何とする。

五平　何を此奴が。

　　ト豆助を殴りとばす。

豆助　もう料簡が

　　ト両人へ立ちかゝらうとする所を

中間　鎮まらぬか〳〵。

左膳　これはしたり、待たつしやい〳〵。

ト三人、五平太を支へる。お雪、おさご、ちよつと小隠れする。

五平　ヤア、肝腎の玉を逃がしちやァ

豆助　うぬ、侍ひめ、待ちやァがれ。

五平　何を此奴が。

ト兩人よろしく立廻る。中間、制して

中間　何に致せ、今にお入りだ。鎭まれく。

ト支へながら下手へ爭ひ入る。お雪おさご、窺ひ出て

ゆき　ほんにマア、無理と云はうか、狼藉と云はうか、思ひがけない今の侍ひ。

さご　あれも大方、太平どのゝ、指圖でござりませうわいなァ。

ゆき　それはさうと、奥樣の御參詣とあれば、藤助さまも、お出であらうわいな。

さご　それく、日頃から御執心なされまする磯貝さまの若旦那、もうお見えなされさうなものぢやな

ア……アレノヽ、噂をすれば影とやら、向うへござるは藤助さま。オヽイく。

ト三味線入り大拍子になり、向うより藤助、前髪かつら、麻上下、大小にて、跡より中間附いて、直ぐに舞臺へ來り、兩人を見て

藤助 安森源次兵衛どのゝ御息女、お雪どの、そもじにも御參詣でござるか。
ゆき ハイ、私しは、殿樣の御代參にて、只今明神樣へ。
さご 左樣ならあなたは、奧樣のお供ではござりませぬか。
藤門 拙者ことはお先へ參り、萬事の手番ひ。殊には、奧方には當社へ奉納の金子五十兩、某へ仰せつけられしゆゑ、コレこの如く、持參仕つて別當方へ。
さご お役目御苦勞に存じまする。あなたの御用相濟み次第……ナア、お雪さま。
ゆき サア、わたしはさう思うて居るけれど、どうやらあなたは
さご 申し、藤助さま、ちとあなたにも粹になられて、お雪さまのお側へ。
藤助 アヽ、これはしたり、男女七歲にして席を同じうせぬ本文。
さご 其やうな堅い事ばかり仰しやりますると、あなたを別當所へやりは致しませぬ。この奉納のお金も、私しが預かりまして

ト件の金を取る。

藤助 アヽコレ、それは大事の品、此方へ戾して下されい。
さご これが欲しいと仰しやるなら、もつと此方へお寄りなされませ。


尾上多見蔵
豊国画

藤助　其やうな事を申さずと、早うその品を

ト藤助取る　兩人爭ひよろしく、この時、後より權平、中間の拵らへにて、この中へ入り、財布を引つたくり、行きにかゝる。藤助、愕りして支へる。權平、皆々を突きのけ、一散に向うへ入る。

藤助　ヤヽ、大切なる御奉納の金子を

ゆき　思ひがけない、何者やら

藤助　おのれ曲者、遠くは行くまい。跡追ひかけて。ソレ

ト大拍子になり、藤助、花道へ行きかける。向うより太平、袴羽織、大小にて、件の財布を持ち、權平を引ッ立て來る。これを見て

ヤヽ、おてまへは島川太平との。その者は只今、御奉納の五十兩を、奪ひ取つたる曲者。ようこそ捕へて下さりました。

太平　拙者只今これへ來かゝる折から、見れば下郎が財布を持つて、駈け來るゆゑ怪しく存じ、引ッ捕へてござる。

ト權平を見て

ヤア、おのれはいつぞや取逃げ致した

権平　南無三。それ知られたら

ト振り切つて逃げて入る。太平、思ひ入れあつて

太平　詮議のあるあの曲者、取逃がしては

ト行きにかゝる。

藤助　アヽイヤ、金子さへ取戻せば、申し分はございませぬ。おてまへ様の御立腹も、拙者へお預け下されい。

太平　その御挨拶なくば、一詮議と存ぜしに、命冥加な下郎め……何は兎もあれ、右の金子、お受取り下されい。

ト財布のまゝ金を渡す。

藤助　御深切の段、忝う存ずる。金子は慥かに受取りました。お禮は重ねて。

太平　なんの〳〵、餘人は格別、其許の御親父實右衛門どのには、お世話にあづかる某。決して〳〵、そのお心遣ひは御無用でござる。

ゆき　太平さまには、ようこそ御參詣なされました。

太平　源次兵衛どのゝ御息女お雪どの、さて〳〵毎度ながら美しい……すりや、最前から藤助どのも、

この所にお居やつたか。
さご　左様でござりまする。
太平　ハテ、それはお羨やましい。
兩人　エ。
太平　イヤサ、お羨やましいは各々方。御主人に仕へて、何不足の無いお身の上。それに引替へ身共は見る影も無い素浪人の身分。貴公方と同席いたすも、氣の毒に存ずる。
さご　これは〳〵、卑下なさるゝも事に依りまする。御浪々なされても、鎌倉の御直參、今にも御歸參なさるれば、元のお歷々樣。
藤助　何は兎もあれ、御氣鬱を散じる爲、別當方にて御酒一獻。
太平　イカサマ、それも一しほ。然らば、お雪どのにも共々に
ゆき　有り難う存じまする。私しどもはお跡より。
藤助　左樣ござらば太平どの。
太平　磯貝氏、イザ、御同道。
ト三味線入り大拍子になり、藤助太平、下座へ入る。お雪おさご殘る。右の鳴り物にて、向うより千

草の前、裲襠衣裳。奥方の拵らへ。軍藏、實右衛門、麻上下、老けたる拵らへ、大小にて、源次兵衛上下大小。跡より絹羽織の若黨二人。跡より友平、下部の拵らへにて附きそひ、出てくる。此うち下手より左膳、神酒徳利と土器を持ち出てくる。舞臺の皆々も、よろしく出迎ひ

左膳　當社明神にて御祈念とござつて、山の内家の奥方樣。安達家の御名代として

ゆき　海老名の軍藏さま

さご　遠路の御參詣

三人　御苦勞千萬に存じまする。

千草　神職はじめ其方達、出迎ひ大儀。自らも喜ばしう思ふわいなう。

軍藏　拙者とても殿の名代、今日一日の安達盛長、山の内とは相役にて、即ち兩家は當五月

實右　賴朝公、富士の御狩の節、お留守を守護なすその折柄

源次　西に當つて怪しき星は、只事ならぬと度々の訴へ。

千草　それゆゑ當社へ祈願を籠め、今日滿願の事なれば、神慮をすゝしめ奉らん。何は兎もあれ神前へ

軍藏　然らば奥方。

千草　皆も一緒に

皆々　まづ、入らせられませう。

　　ト この人數皆々舞臺へ來り、千草の前、軍藏、床几へかゝり、外の人數よろしく居並ぶ。

ゆき　御祈念の滿願とあつて、奥樣はじめ軍藏さまにも、今日の御參詣、御苦勞に存じまする。

さご　友平どの、お前もよう來て下さんしたなア。ちやつと爰へ來て、顏を見せて下さんせいなア。

友平　アヽコレ。

　　ト 目顏で知らせる思ひ入れ。源次兵衞、實右衞門、ちよつと見て、こなし。

さご　それぢやというて、わたしやお前に

源次　これはしたり、奥樣の御前、扣へ居らう……恐れながら、奥樣へ申し上げまする。當社は武運を守護の御神なれば、猶も御祈念あつて、然るべう存じまする。

千草　いかにも其方が申す通り、この度、劍術に達したる者を召抱へたるも、この明神のお引合せでがなあらうわいなう。

軍藏　拙者主人安達家にても、懇望ある劍術の奥儀、神妙劍の一卷、所持なしたる神道流の達人、元は奥州の浪人、尾花六郎右衞門どのを、山の內家にて召抱へられしとの事。いよ〳〵おてまへ、神妙劍の一卷、御所持でござるか。

實右　その一卷は、拙者奥州に在りし時、同姓吉三郎と申す者、十四歳の時、同家中の忰に手疵を負はせしゆゑ、屋敷は追放、その砌り、彼の一卷を持參なし、家出いたしてござるが、數へて見れば十三年以前。

友平　左樣ござれば、弟御の藤助さま、お五つの時と見えます。今日にも御兄弟がお逢ひなされても、御存じはござりますまい。

實右　併しながら、左樣の事の前兆にや、某し祕藏に致したる、鶉の目貫の片々、それを包みし袱紗には、一首の上の句、「父戀し、片々目貫の啼き鶉」また弟の方へも片々の目貫、それに添へたる下の句は、「あはれ啼く子を取上げて見よ」と、この上下の歌、連續する時は、我が子の兄弟。

千草　すりや、吉三郎は、世にも稀れなるその一卷を

友平　神妙劍を所持なさるゝお方が、吉三郎さまでござりまするか。

實右　いかにも。

ゆき　左樣なれば、藤助さまにも、御兄弟がござりまするか。どのやうなお方やら

さご　どうぞお見上げ申したいものでござりまする。定めて藤助さまの御兄弟なら、よい御器量でござりませうわいなア。

左膳　ハツ、憚りながら、お毒味の上、神前の神酒、御頂戴あられませう。

千草　後刻参拝の上、其方達も頂戴いたしてよからう。

源次　ハツ、お流れ下さりまするとや。

皆々　有り難う存じまする。

ト大拍子になり、向うより町人二人、戸板へ、血に染みたる權平の死骸を載せ、跡より角内、町人の形にて、しをく＼と出て來り

町人　ハイ＼／＼、お願ひでござりまする＼／＼。

友平　ヤイ＼／＼、薄穢ない死骸といひ、奥方の御前。下がれ＼／＼、下がり居らう。

ト死骸をよき所へ直す。友平見て

角内　ハイ＼／＼、お願ひさまでござります。

町人　コレ＼／＼、兄貴、お願ひ申して、片付いたら又來ませう。

同　それまで、この境内に待つて居るぞや。サア、來やれ＼／＼。

ト二人は入る。

千草　何やら町人體の者の願ひ。聞き屆けて遣はせ。

源次　ハツ。コリヤ町人、有り難い奥様の御意。して、其方が願ひとは。

角内　ハイ〳〵、別の儀でもござりませぬ。この死骸は、私しの弟でござりまするが、夜前、雪の下の裏道に、殺されて居りましたゆゑ、早速參つて見ますれば、死骸の側に落ちて居りましたはこの文。宛名は「藤助さままゐる、雪より」とござりますれば、人殺しの證據。この人殺しは、源次兵衛さまのお娘御、お雪さまとの事。私しも、たつた一人の弟でござります。どうぞ下手人を取つて下さりませ。お願ひでござります〳〵。

皆々　ヤヽ、何と申す。死骸の側にその文が

軍藏　落ちてあつたと申すからは、人殺しは、あのお雪どのとや。ハテナア。

源次　コリヤ〳〵、娘、打捨て置かれぬ只今の訴へ。其方、覺えがあるか。早う申せ〳〵。

ゆき　なんのマア私しが、左樣な覺えは

さご　殊に夜前はお雪さまは、お宅にお出でなされたもの。

源次　でも證據あつての願ひとあれば、此まゝにも相濟まぬ。何は兎もあれ、その文、これへ。

角内　イヤ〳〵、大事の證據、滅多には渡されませぬ。

友平　それでは、いつまでも水掛け論。何しろその文を

ト引ッたくり

サ、お雪さま、お前様の御手蹟でござりまするか。

ゆき　なんのマア、覺えもないこの文。わしが手蹟ではないわいなう。

友平　アノ、これが。

ト思ひ入れ。

さご　似た名は世間にいくらもある。外を詮議なさんせいの。

角内　でも、「藤助さままゐる、雪より」とあるからは、實右衛門さまの御子息、磯貝藤助さま。そんなら一つ屋敷のお雪さま、二人が乳繰つてゐるを見附けられ、藤助さまと二人して、わしが弟を殺したに違ひござりませぬ。

ゆき　どうしてマア其やうな

角内　所詮四の五と面倒だ。この女を代官所へ

トお雪を引ッ立てようとする。よき時分より太平、出かゝりゐて、この時、ツカ／＼と出て、角内を見事に投げ、お雪を圍ひ

太平　最前より窺ひしところ、理非辨まへぬ素町人、殊には奥方の御前といひ、慮外いたさば免さぬぞ

角内　アイタヽヽヽヽ。お侍ひ樣、わしを爰へ投げ出したは、貴樣も人殺しの肩を持つか。

太平　身は島川太平と申す者。最前より窺ふところ、謀書に等しき證據を以て、これなる婦人を人殺しとの訴へ。さりながら、文にありく二人の名前あるゆゑに、血で血を洗ふ親々の心を察し、及ばずながら身共が引取り、聞き届けてくれうが、いよく このお雪どのが、其方の弟を、殺害いたしたと申すか。

角内　左樣でござりまする。

太平　して、その場所は。

角内　極樂寺の切通しで。

太平　默れ此奴。最前は雪の下の裏道と申し、今また極樂寺の切通しとは、詞揃はぬおのれが訴へ。

角内　サ、それは。

太平　何は兎もあれ、死骸をとくと改めた上

ト死骸を、よくく見て

ヤ、こりやコレ以前勤めし身が家來、我が方を取逃げ致せしに、又ぞろ最前御奉納金を、奪はんとせし重罪人。

皆々　ヤ、なんと。

太平　未だどうやら息ある樣子。斯樣な奴を生け置く時は、後日の爲によろしからず。いつそ身共が、この世の暇。

ト立ちかゝる。

角内　モシ、それはあんまり。

太平　下郎め、觀念。

ト權平を刺し殺しにかゝる。

權平　ヤア、こいつは堪らぬ。

ト兩人駈け出さうとする。友平は權平を、太平は角内を引附ける。この時、權平、懷より手紙の入つたる紙莨入れを落す。

友平　おのれ、何者に頼まれて、斯樣な事を致した。

太平　眞直に申さばよし、さもなくば眞二つに。

角内　アヽ、申します〳〵。誰れも頼みは致しませぬが、金が欲しさの出來心。

權平　それゆゑ斯樣に死人の眞似事。

角内　これより外に、申す事はござりませぬ。
兩人　御免なされまし〳〵。
友平　よく吐かした。その代りに
太平　生け置いては掟が立たぬ。
友平　いつその事に。
千草　ソレ、留めい。
實右　扣へ召され。
友太　でも、この者は。
實右　ハテ、奥方の御意でござる。
友平　ハッ。……
ト扣へる。
千草　慈悲は上にありと申し、殊に社内の庭先なれば、神慮の恐れ、兩人ともに、助命いたしてやりやれ。
源次　ハヽッ、誠に御仁心あるお計らひ。流石は大國の奥方様。

太平 有り難きそのお詞。然らば此まゝ
友平 命冥加な二人の奴等。
兩人 とく〳〵爰を立去り居らう。
ト突き放す。兩人起上がり
太平 誰そこの者どもを追ひ拂へ。
中間 ハッ。立ちませい。
トこれにて花道へ行く。
角内 併し、此まゝでも歸れまい。
權平 古いやつたが、狂歌でも云はうか。
角内 斯うもあらうか。「十藏の科ゆゑ今は門三から、阿房拂ひのしめ高を
權平 冠十するは明日の淺友」
角内 なんだか字數が多いでねえか。
中間 立ちませい。
ト時の太鼓になり、兩人向うへ入る。大拍子になり、友平、件の文の入つたる莨入れを開いて、中の

文言を、よく〳〵見て、思ひ入れあつて懐中する。皆々これを知らず

さご　モシ〳〵、お雪さま、危ない所へあなたがござつて、事なう濟みました。ちやつとお禮を仰しやりませ。

ゆき　心にも無き事ながら、ほんに當惑いたしました。親どもが計らひにも、如何と思ふその所へ

源次　こなたがござつて、娘を一人拾ひました。

軍藏　何事も拔け目なき島川氏。これと申すも、根が發明ゆゑ。劍術は實右衞門どのゝ御門弟、拙者とは從兄弟同士ゆゑ、斯樣に申すは如何なれど、一器量ある太平どの、さるによつて、お雪どのを宿の妻にと、度々申し入れても御承知ござらぬが、今日は殿の名代たるこの軍藏、お仲人いたさう。

友平　エヽ、なんと仰しやります。このお雪さまを、太平さまの御新造樣にでござりまするか。ハテ、怪しからぬ提灯に釣鐘。

軍藏　ヤ。

友平　イエサ、釣合ひのよい御夫婦、こりや御相談が出來ませう。

太平　たとへ相談が調ひましても、源次兵衞どのは山の内家のお歴々。拙者は當時浪人。大切なるお娘

御を、何を見當てに私しへ

軍藏　ハテサテ、卑下なさるも事による。今でこそその身分なれども、歸參いたさば天下の諸侯、それを聟にさつしやるは、源次兵衞どのと申し、お雪どのはあやかり者。平に拙者がお仲人。

源次　思し召しは忝うござれども、不束なる娘、やう〳〵當年十五歳、まだ子供でござりまする。その上、此方は陪臣者でござれば、牛は牛連れとやら、天下の御直參に、拙者望みはえゝござらぬ

軍藏　でも、折角の儀なれば、是非とも御返事が承りたい。

ゆき　申し、父さん、どうぞその事ばかりは

源次　オヽサ、其方が申す通り、この儀ばかりは

軍藏　これサ〳〵、御兩所、なぜ返事が成りませぬ。

源次　サア、それは。

軍藏　浪人の太平どのゆゑ御不承知か。

源次　全く以て。

軍藏　アヽ、そんなら仲人が氣に入らぬか。

源次　どう仕つて。

軍藏　然らば返事を。
源次　サア、それは。
三人　サア〳〵〳〵。
千草　コリヤ〳〵、爭ひ無用。源次兵衞、其方が娘雪には、云ひ號けがあるではないか。
源次　な、なんと御意遊ばしまする。
千草　外に云ひ號けあるに、率爾に緣談は成るまいぞや。
　　　ト呑み込ます。
源次　成る程〳〵、娘には、云ひ約束の男がござる。
軍藏　して、その男は、何者でござる。
源次　サア、その男と申すは……オヽ、それ〳〵、これにござる實右衞門さまの御子息、藤助どのでござる。
　　　トこなし。お雪おさご喜ぶ思ひ入れ。實右衞門、恟りして
實右　これは如何、何を仰せらるゝ。
源次　ハテサテ、娘雪は、實右衞門さまの御子息藤助どのと……サア、年も似合ひの好い女夫と、サ、親

と親とが番うた詞。なんであらうと、かゝる手詰めの、ナ、今さらよもや違背もあるまい。二人の者は云ひ號け……云ひ號けでござる。

ト思ひ入れ。實右衞門、呑みこみ、こなし。

實右　いかにも悴藤助と、これなるお雪どのと、云ひ號けに相違ござらぬ。

軍藏　すりや、いよ〳〵

源次　左樣でござる。

軍藏　ハテ、變つた仕組みの云ひ號け。これと申すも、奧方の御贔屓から

千草　ヤ。

軍藏　イヤサ、贔屓に思ふ太平どのゆゑ、折角お取持ち致さうと存じたが、お聞きの通りなれば、何とも以て氣の毒千萬。

太平　御深切忝うござれども、外に云ひ約束とござれば、近頃殘念に存じまする。

千草　この上は、最早妨げなきうちに、幸ひ今日は日柄も好し、藤助を呼び出し、この所に於て、祝言のまねびを

源次　藤助どのにも一通り、申し聞かしてようござりませう。

實右　悴は居らぬか。藤助々々。

ト奥にて

藤助　ハツ〳〵、畏まりました。只今それへ。

ト大拍子になり、奥より藤助出で來り

奥様はじめいづれも様、お早い御參詣。私しもお先へ參り、お待受けに何かの用意。して、火急のお召しは、御用でござりまするかな。

實右　その用と申すは別儀でない。只今奥方のお指圖にて、これなるお雪どのと其方、婚姻の取結び致せよとの御意。親々の云ひ約束ゆゑ、當人ども存じ居らぬも理り。御意もだし難く、右の御請け致してよからう。

藤助　これは〳〵、御主君の御意と申し、あなたの思し召し、有り難う存じますれど、私しには本郷八百屋の娘、お七とやら、未だ互ひに顔は存じませねど、私しとは云ひ號けではござりませぬか。

實右　サア、ムウ、いかにも、そのお七ことは、町人の娘なれども、以前は武士の胤ゆゑ、云ひ約束は致したなれど、その親たる久兵衞も病死との事。繼母は心よからぬ者にて、なか〳〵我れ〳〵には緣附くる所存なし。御大家様へ妾奉公にも差出す存念にて、母親より斷わりなれば、このお雪

どのを、某し疾より申し請け置きたれば、その心遣ひ、必ずともに。

藤助　違背ならざるこの場の仕儀。

實源　そんなら二人は得心なるか。

藤助　ハヽツ、この上ともに

ゆき　御前よしなに。

千草　年も似合ひの好い夫婦……オヽ、めでたい〳〵。

左膳　恐れながら、奥方様へ申し上げまする、最早祈念の刻限、神前へお入りあつて、然るべう存じまする。

千草　最前より、思はぬ事にて餘程の遲刻。

實右　忰藤助、當社へ寄附の金子五十兩、奉納いたしてよからう。

藤助　畏まりました。左樣ござらば神職方へ、相渡すでござりませう。

ト最前の財布を出し、金を見て悄り。軍藏、太平、見てこなし。

軍藏　最早神拜の刻限なれば、兩家よりの奉納金を

藤助　サア、その金子は

皆々　如何いたした。

藤助　今朝お納戸より受取りましたる節は、金子でござりましたが、只今見ますれば、似ても似つかぬ石瓦。

皆々　ヤヽ、なんと。

實右　コリヤヤイ、奉納金に凶事あつては相濟まぬ。して〳〵、その樣子は〳〵。

藤助　サア、最前これへ參りしところ、何者とも知れず、奪ひ取つて駈け出せしを、あれなる太平どのが、折よく取戻しくれられたゆゑ、直さま懷中いたし、只今見ますればこの通り。それより外に、人手に渡しましたる事はござりませぬが、どうも合點が。

太平　これサ、藤助どの、おてまへのやうに申さるゝと、手に觸れましたは、曲者と身共ばかり。何とも以て氣も毒千萬。畢竟其許の御油斷と申すもの。奪ひし金子、折よく手前取戻し、財布のまゝお渡し申したれば、中は石やら瓦やら、一向存ぜぬこの太平。それを手に觸れたるを、あのゝものゝと、おてまへには、異な事の申されやう。

藤助　成る程、御尤もなる仰せ。御覽の如くの當惑ゆゑ、思はぬ粗忽。眞平御免なされませい。

實右　おのれがうつそりから、斯くの仕合せ。それを何ぞや、人樣に兎や角申しては、太平どのゝ手前

面目ない……ナニ、島川氏、悴が粗忽、御立腹の段、拙者に免じ、御容赦下されい。

太平　これは〳〵、御叮嚀なる御挨拶。兎角お若いには、斯様な事はあるものでござる。ハテサテ、氣の毒千萬。

源次　今日よりは、聟舅なれば、外ならぬ一大事。右の金子の行き道は。

藤助　サア、その金子は。

實右　此奴、その金子に遲𨇽あつては、其方ばかりか、身共が越度。一家一門逃れぬ罪科。この上は、切腹なして申し譯いたせ。

藤助　仰せにや及ぶ。南無阿彌陀佛。

友平　アイヤ若旦那、早まらつしやりますな。

藤助　イヽヤ、放せ。

友平　御尤もにはござれども、御切腹には及びませぬ。

藤助　でも、大切なる金子の紛失。

友平　イヤ、その金子は、ござりまする。

皆々　なんと。

友平　サア、その金子さへ出ましたら、御切腹には及びますまい。

　　　トこなしあつて

太平　アノ、身共に。

　モシ、島川さま、イヤサ、太平さま、ちよつとお目にかゝりたうござりまする。

　　　ト大拍子、キツパリとして

　して、その用とは。

友平　外でもない、出して下さい。

太平　そりや何を。

友平　れこしきを。

太平　ナニ、れこしきとは。

友平　其やうに白を切らつしやると、此方も白で云ひますぞや。

太平　白で云ふとは。

友平　ハテ、最前の悪者が落した、紙莨入れの中に、今日の體裁を頼みの一通。今の死骸の側に落ちて
　あつたこの文と、比べて見れば、正しく同筆。

ト以前の手紙を二通出して見せる。太平、恂りして

太平　ヤヽ。

友平　先刻の死人も、紛失の金も、皆この手紙の宛名の企み。それを云はぬも、事穏便にしたいばかり魚心ありやァ水心。どうぞ術よく出して下さい。

太平　默れ、下郎。おのれのやうに申すと、どうやらその金を、身共が取つたやうに……これ見ろ、浪人こそ致せ、島川太平は侍ひだぞ。この大小が目にかゝらぬか。

友平　其やうに云はつしやるなら、この手紙、高々と讀みあげませうか。

太平　サア、それは。

友平　ところを讀まぬがこの場の花。ハテ、物には間違ひといふ事が間々あるもの。最前金を取返して下さる時、懐の内で、お前の御所持のこの品と、金が取替つて。

太平　イヤ〳〵、其やうな事は知らぬ。知らぬわい。

友平　知らぬとあれば、この手紙。

ト出しかけて見せる。

太平　アヽコレ、穏便々々。

友平　そんなら、間違ひにさつしやるか。

太平　仕方がない、間違ひだ／＼。

友平　左様なれば、懐をよく見せて下さい。

ト太平、金を出して

太平　成る程、こりやァ間違ひだ。身共、盆石に致さうと、求めて參つた石と、最前のドサクサに、思はず金子と取違へたと見える。ハテサテ、粗相千萬な。

友平　然らば、お大事の石をお返し申します。

太平　ソリヤ、金よ。

友平　ソリヤ、石よ。

ト取替へて

太平　役にも立たぬこの石のお庇で、エヽ、いま／＼しい。

ト打ちつける。

友平　物事無事に納まれば、有つて益なきこの書面。カウ／＼／＼。

ト引裂き捨てる。

これがほんの、石は石、金は金。

ト藤助へ渡す。

千草　事穩便の下部が計らひ、實右衞門、彼れは取上げ、召仕うてよからう。

實右　聊かの儀がお目にとまり、彼れが身にとり冥加至極。

友平　人數ならぬ下郎めへ、有り難き御諚、恐れ入り奉つてござりまする。

實右　太平どのは拙者劍術の門弟、浪人の事ゆゑ、不便を加へたれども、只今の仕儀、今日より手前方へお出では御無用。

太平　エヽ。

ト悄り。

實右　恩を仇なるさま〴〵の惡事。穩便の御沙汰ゆゑ、何も申さぬ。ハテ、見下げ果てたる犬侍ひめが。

ト思ひ入れ。太平、無念のこなし。

軍藏　計らざる儀にて餘程の隙入り。

源次　御寄附の金子、恙なく戻りし上は、少しも早く神職方へ。

藤助　左様ござらば、イザお受取り下さりませう。

ト左膳の前へ出す。

左膳　ハツ、慥かに受納仕つてござりまする。

源次　奥方様にも、神職方へ、

軍藏　拙者も主人の代參なれば、イザ、御同道。

千草　然らば方々。

皆々　まづ、お入りあられませう。

ト唄になり、千草の前、軍藏、侍ひ附添ひ、上手へ入る。實右衞門、立たうとするを

太平　アイヤ、實右衞門どの、お待ちなされい。

實右　身共に用事が

太平　左様でござる。

實右　して、その用とは。

太平　外でもござらぬ、云はぬ事は罪とござるゆゑ、何もかも云つてしまひます。何を隱さう、相摺りを頼み、奉納金を横取りしようと思つたら、まんまと首尾よくしくじつた。その上、おてまへに

は見放され、安森源次兵衛が高祿を見込み、聟にならうと思つた、お雪の縁談は脇へ極まり、つまらぬ者はこの太平……イヤ、磯貝氏、是非所望させておくりやれ。

實右　そりや何を。

太平　この下部を。

實右　イヽヤならぬ。おてまへのやうな畜生侍ひに、忠臣者のこの下郎は遣はされぬ。いつまでも身の家來。

太平　なんと。

實右　して、この者を御身に遣はせば、なんと致す。

太平　ハテ知れた事、滿座の中で面恥かゝせたこの下郎、身共が貰うて存分に致す。

トこれにて友平こなしあつて

友平　アヽ、モシ〳〵、私しも大事を思ふ旦那方の御難儀ゆゑ、思はず手に入つたあの手紙、よく〳〵見たら今の仕儀、それゆゑウカ〳〵と申し、あなたの邪魔を致しました。どうぞ御免なされて下さりまし。

太平　イヽヤならぬ、武士に面目を失はせた奴。うぬ、眞二つにする。

藤助　サヽ、御立腹は御尤もではござれども、見るかげもない下郎が身の上。ゆきこの儀は幾重にも、お免しなされて下さりませ。

太平　イヽヤならぬ。おのれをぶッ放し、跡で身供も切腹いたす分の事。

友平　すりや、いか程お詫び致して

太平　叶はぬ事だワ。

友平　ハテ、是非に及ばぬ。

ト思ひ入れあつて實右衞門に向ひ

旦那樣、私しにお暇を下さりませ。

實右　そりや又何ゆゑ。

友平　お聞きの通り、お詫び申しても、御承知なされぬ太平さま。私しの粗忽より事起り、御主人方の御迷惑になりましては、却つて不忠。それゆゑ、私しの命は、あなたへ差上げまする。何卒お暇を下さりませ。一合取つても武士の家來、覺悟を極めて居りまする。

實右　ウム。尤もなる願ひ、いかにも暇を遣はさう。

友平　ハヽツ、有り難う存じまする。この上は、一本立ちのこの下郎。サ、太平さま、御存分になされ

て下さりませ。

太平　好い覺悟だ。下郎め、觀念。

ト刀へ手を掛け、拔きかけ、竹光ゆゑ、ちやつと納めて思ひ入れ。

下郎めに刀は穢れ。サア、覺悟はよいか。

ト首筋を取つて、いろ〳〵思ひ入れあつて、ちよつと立廻る。友平、キツと留め

友平　ドツコイ、下郎も武士の端くれ。さうはゆきますまい。

太平　所を斬うして。

ト白囃子になり、兩人立廻りになり、銹びたる脇差を拔きかける。刀の竹光を友平拔き取りて、キツと差しつける。皆々思ひ入れ。

友平　お嗜み、天晴れ名作。

太平　それを。

ト取りにかゝる。友平、持ちかへ、キツと見得。

友平　この竹光では奴は切れまい。イヤサ、豆腐でも覺束ない。あまり不埒なお侍ひ。中心は慥かに古鐵買ひに。

ト太平、ちやつと脇差を取り

太平　イヽヤ、研ぎに遣はした。四季に研ぐは武士の嗜み。差替へなき浪人ゆゑ、表ばかりのこの刀。

友平　剣術手練の島川さま、餘人が正宗帯せしより、これが天晴れあなたの魂ひ。莫耶が剣も持ち手とやら。ハテ、よい心掛けなア。

太平　おのれ、武士を嘲弄いたすな。

ト また脇差にて切つてかゝる。立廻つて、竹光を差しつける。太平、面白なき思ひ入れ。

友平　サア、これでも御料簡はなりませぬか。但しは、お相手になりませうか。

太平　アヽイヤ、それには及ばぬ。手の内見えた。下部に似合はぬ天晴れ愛い奴、赦してくれる。

友平　すりや、何事も此まゝに。

太平　いかにも。

友平　ハヽ、有り難う存じまする。左様なれば、御免なされまし。

ト 抜身を太平へ渡し

ヤレ〳〵嬉しや、危ふい命を拾ひました。これと申すも、明神様のお庇、エヽ、忝い。

ト こなし。實右衛門、思ひ入れあつて

實右　下部に似合はぬ今の手の內、天晴れ出かした……サ、この上は約束通り、元の主從。

友平　すりや、以前の如く御家來に、エヽ、有り難う存じまする。

太平　下郎が命、助け遣はすその代り、かねて望みの劍術の印可、申し請けたい。

實右　成る程、望みに任せ、遣はしたい、と申したらよからうが、罷り成らぬ。

太平　そりや又なぜ。

實右　其方の心に問うて見やれ。すべて畜生鳥類でも、三日飼へば尾を振ると、恩を知らぬおてまへ、畜生にも劣つてござる。未熟不鍛錬な手の內で、印可の望み、そりや成らぬ、よしにしやれ。

太平　すりや、身共が手の內不鍛錬ゆゑ、印可は罷り成らぬとな。

實右　いま十年も修行して、望み召されい。ヤレ、馬鹿々々しい。

太平　面白い。身共が手の內、未熟か、未熟でないか、いま爰で……ハテ、何をがな。

トあたりを見廻し、下手の松ケ枝に目を附け、錆びたる脇差にて切り、枝をひけらかし

なんと見たか、立ち樹の松をスッパリと、しかも左で、まッこの通り。眼があらば押ッ開いて、とつくりと、これを見よ。

實右　成る程、見事。

トこなしあつて上手の松を、白刃を拔き、背にて切り

刃物を以て木を切るは、庭造りの爲す業。いがみくねつた心より、こりや斜に切つてある。しかも刀目が入つてある。これを見よ。背打ちの手練。植木の蟲が植木を枯らすとは御身の事。左樣な未熟で、誠の人はえゝ切れまい。爰な大だはけめが。

太平　切れるか切れぬか、身が手の内を

ト切つてかゝるを、ちよつと立廻り、見事に當てる。太平、悶絶する。

皆々　これは。

實右　ハテ、粗相千萬な。ハヽヽヽヽ。

ゆき　舅御樣へ一つのお願ひ。

實右　ナニ、願ひとは、

藤助　只今の御褒美に、これなる友平と、おさごを、女夫になし下さらば

ゆき　有り難う存じます。

實右　かねがね譯ある事は、ほのかに聞く。其方達が願ひの通り、夫婦に致しくれん。二人の者、嬉しいか。

二ツ目　序幕



序　幕



さご　これが嬉しうなうて、なんと致しませう。

實右　斯樣な事は寸善尺魔、結ぶの神の鳥居先。幸ひ爰に神酒土器、時にとつての雌蝶雄蝶、花に嵐の吹かぬうち、この場に於て

四人　そんなら、私しどもゝ

實右　假の祝言、杯しやれ。サヽ、席を正して。

ト三味線入り大拍子になり、上の方に藤助お雪、下の方に友平おさご、眞中に實右衛門、左膳が置いたる三方の神酒土器を取つて、祝言の杯事よろしく

四人　有り難う存じまする。

實右　杯濟みし上からは、跡に殘つて二女夫、めでたく爰で千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

四人　エヽ

實右　仲人は宵の程、ドレ、開きませう。

ト唄になり、實右衛門、思ひ入れあつて下座へ入る。跡矢張り右の鳴り物にて、四人囁き合ひ、いろいろこなしあつて、藤助とお雪は上の方へ、友平とおさごは下の方へ入る。時の鐘。橋がゝりより五

平太、上手より軍藏、窺ひ居て、思ひ入れあつて、太平へ活を入れる。これにて心附き、兩人を見て實右衞門を追ひかけて切らうと云ふこなしにて行きかける。

軍藏　島川氏、いづれへござる。

太平　知れた事、遺恨重なる實右衞門、奧へ踏ん込み眞二つに。

五平　成る程、最前よりの樣子では、腹の立つのも尤も。

軍藏　いま奧へ踏ん込み、仕負ふせたところが、狼藉者と召捕られ、犬死をしようより、いつその事に……コレ。

ト囁く。太平、呑み込み

太平　イカサマ、それは天晴れの手段、今日の意趣晴らし、彼奴に恥を與へたなれば

軍藏　是非ともそれでは破談になるワ。

太平　もし又それでゆかぬ時は

五平　親子ぐるめに

太平　おのれ磯貝

軍五　コレ。

太平　覺えてうせう。

ト早めたる大拍子になり、太平、一散に向うへ入る。軍藏五平太、下座へ入る。跡、三味線入り大拍子になり、藤助お雪、友平おさご、思ひ入れあつて出で來り、此うち豆助出て、手洗ひ水にて四人の手を清め

豆助　ヤア、旦那方ばかりと思つたら、こなた衆もお清めか。ハテ、今日は夥しい御參詣、お清めのお手水、お手水。

ト柄杓を持ちて思ひ入れ。

四人　何をお云やる。ハヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。大拍子になり、向うより官藏、絹羽織、若黨の形にて出て來り

官藏　ハツ、申し上げまする。私しは新參の若黨、遠山官藏と申す者、若殿千草之助さま、お雪どのを火急のお召し。片時も早くお屋敷へお上がりなされませうとの、御意でござります。

ゆき　そんなら私しを、アノ若殿樣が

藤助　お召しとあらば、ちつとも早う。

さご　お越し遊ばすなら、私しもお供を

ゆき　アヽ、イヤノヽ、其方は殘つて、母樣もろとも

豆助　そんならお供はこの奴。

ゆき　左樣なれば私しは

三人　片時も早う。

ゆき　豆助、おぢや。

ト大拍子になり、お雪先に、官藏豆助附いて向うへ入る。下手より實右衛門出で來り

實右　其方達、これに居つたか。して、太平めは如何いたした。

友平　私しどもが、暫時休息いたし居るうち、いづくへか。

實右　人に面を合すが面目なきゆゑ、歸宅いたしたと見える……イヤ、歸宅と申せば、雪は居らぬか。

さご　ハイ、お雪さまは、只今若殿樣火急のお召しゆゑ、御殿へお上がりなされました。

實右　あの雪は、神妙なる生れつきゆゑ、若殿の御意に入り。源次兵衛夫婦には、ハテ、よい娘を持たれた……イヤ、それにつき友平、其方の親庄兵衛は、身が奧州に在りし時の家來、一年用事あつて、江戸表へ上りしところ、關屋の里とやらで、女子の捨子を拾ひ、おくまと名づけ養育せしとの事。その後出生なしたる其方と申し、姉とても我が方に奉公なし、若氣のいたづらにや、若黨

才三郎と不義密通、殊には懐妊との事ゆゑ、それと云はずに兩人とも、暇を遣はしたが、その才三郎は今にては、安達家へ在りつき、戸倉十内と改め、立身との事。して、姉のおくまは、如何いたした。

友平　ハッ、手前が姉のおくま事は、お暇下されて其まゝ、宿へ下がる間もなう、女子の子を産み落せしが、親庄兵衛は物堅き性質ゆゑ、あなたのお目を掠めては道立たずと、縁を切らせ、産み落したる子は才三郎の胤ゆゑ、里へ預けましたが、この里親とても、行くへが相知れませぬやうにござりまする。

實右　ハテ、それは不便な事。年月數へて見れば、その産み落せしは、もう十五年。

友平　下郎の爲には實の姪、娘盛りでござりませう。

實右　おくまは別れし才三郎へ貞女を立て、其方達三人兄弟のうち、一人の弟傳吉もろとも、住ひ致すではないか。

友平　左樣でござりまする。弟傳吉方に居りまするが、その日暮らしの身貧な者。併しながら、傳吉めは正直一遍な役に立たずゆゑ、姉一人をば過しかねまする。

實右　イヤ〳〵、左樣申すな。親は泣き寄りとやら。身共が惣領の吉三郎めは、家の祕書、神妙劍の一

巻を所持なして、武術修行に家出を致したが、いづくの浦に暮らし居るやら、十三年の間音信なければ、心がゝり。

藤助　殊にはこの節、八丈小僧吉三といふ悪者、所々方々をあぶれ歩くとの事。

實右　もしやはそれが惣領の

友平　よもや兄御の

さご　吉三さまであらう筈もなし、

四人　ハテナア。

　　　トこの時、奥にて

呼び　御歸館。

　　　ト大拍子になり、下座より千草の前、軍藏、源次兵衛、侍ひ附いて出てくる。皆々平伏する。

實右　これは〳〵奥方には、最早御歸館でござりまするか。

源次　安達家の御名代にも、終日御苦勞に存じまする。

軍藏　これは〳〵、安森源次兵衛どの、磯貝御親子とも、何かの心配。それにつき、只今あれにて承れば、おてまへの御子息吉三郎、神妙劍の一巻所持召され、家出との事。拙者主人も、一巻殊の外

御懇望、今にてもその品、殿へ差上げる者には、五百石にて召抱へるとの事。その吉三郎どの、行くへ知れなば高祿にありつかうもの、ハテ、惜しい事なア。

ト向うより足輕走り出て

足輕　ハッ、申し上げまする。我れ〱辻がため致せしところ、はるか向うへ砂煙を立て、早打ちの武士相見えまする。アレ〱、向うへ駈けつけました。

ト云ひ捨て、引返して入る。直ぐに向うバタ〱にて、小源次、股引絆纏、鉢卷、大小、腰に鞭を差し、一散に出て來り

小源　ハッ、御注進々々。

軍藏　おてまへは戸倉十内の組下、菊坂小源次、火急の早打ち氣遣はしい。して〱、樣子は。

小源　されば、拙者は駿州よりの早打ち。富士の裾野に於て、二十八日の夜半頃、五月雨しきりに眞の闇、時節到來待ちうけし、曾我兄弟の者どもが、十八年の仇敵、祐經どのを討ち取つて、直ぐに御領の假屋へ切り入り十番斬り、されども天運盡きたるにや、兄祐成は仁田どの、まつた弟の時致は、五郎丸どのの組みとめしが、その夜の仔細見屆けて、拙者直さまこの早打ち。殿の御安泰をお知らせ申さん爲、晝夜をいとはず、只今參着いたしてござる。

千草　さては曾我兄弟、年來の本望を達せしか。
小源　これより直さまお上屋敷へ。
皆々　片時も早う。
小源　心得ました。

ト引返して入る。皆々こなしあつて

實右　さてこそこの程二つの悪星
藤助　西に當るは富士の根方。
源次　その兄弟の孝心を、天も感應ましく／＼て
藤助　討たしめ給ふか但し又
軍藏　世の動亂も計りがたし。
實右　この上は、鎌倉御所も固め申さん。
さご　奥方様には直さま御歸館。
藤助　路次の警固は家來友平。
友平　お見送り仕るでござりませう。

千草　然らば此まゝ

皆々　イザ、お越しあられませう。

ト大拍子になり、千草の前、軍藏、源次兵衞、侍ひに友平附いて向うへ入る。實右衞門、藤助、おさご殘り、こなしあつて

藤助　打捨て置かれぬ狩場の樣子。

さご　富士の根方へ見舞ひの御使者。

實右　悴藤助、明朝未明に出立おしやれ。

藤助　畏まりましてござりまする。

トこの時、向うバタ〳〵になり、お雪、髮を亂し、解けかゝりし帶を抱へ、豆助、猿轡をかけられ、荒繩にて縛られたまゝ、走り出で來り

ゆき　モシ、口惜しうござります、口惜しうござりますわいなア。

藤助　ヤア、お雪といひ、下部が有樣。

さご　合點のゆかぬこの體は。

實右　何は兎もあれ、その縛しめ。

藤助　心得ました。

　ト豆助の繩、手拭を取り

三人　して〳〵、様子は。

ゆき　最前若殿様のお召しとあるゆゑ、お屋敷への歸り道、朝比奈の切通しに、浪人體の者大勢、その中にアノ太平づらが打交り、わたしを捕へて無理無體。口惜しいわいなア。わたしやどうせう、どうせうぞいなア。

豆助　先刻迎ひに來た侍ひも、その中に居てわしを縛り、大勢でお雪さまを。

ゆき　申し、藤助さま、わたしや口惜しい、口惜しいわいなア。

實右　すりや、浪人が待伏せし

藤助　祝言すれば身が女房、そんなら其方をアノ太平が

ゆき　無理に捕へて……ハアヽ。

藤助　それで解つた。何も云ふな。ソレ

　ト股立ち取つて、行かうとする。

實右　コリヤ、うろたへて、いづれへ參る。

藤助　あの太平めを。
實右　尤も至極。行く心なら留めはせぬが、そちや何ぞ忘れた物はないか。
藤助　なんと仰しやります。
實右　太平と勝負の場所へ、持參いたさねばならぬ品があらうがな。
藤助　ヤ。
實右　殊に勸めて持たせた女房、親子の仲でも義理がある。その品持つて身が行かうか。
藤助　御持參なさるゝその品とは。

　　ト實右衞門、思ひ入れあつて、お雪の顏をあげ

實右　そちや島川太平が恨めしいか。
ゆき　アイ、女子の道が立ちませぬ、
實右　オヽ、尤もぢや。命を捨てるは忰へ貞女、其方が敵は、身が取つて遣はすぞ。
ゆき　嬉しうござんす。
實右　ハテ、逢ふは別れの初めぢやなア……年頃立てぬく武士の意地、不便ながらも

　　ト刀を拔く。

藤助　とは云ふものゝ。
實右　家の恥辱にや更へられぬ。
藤助　ハツ。
實右　南無阿彌陀佛。

ト刀を振りあげ、ホロリと思ひ入れ。この仕組みよろしく、知らせにつき、時の鐘の送りになり、この道具ぶん廻す。　（作者　重扇助）

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面破れ襖、上手一間の附け屋體、反古貼りの障子、角行燈をともし、いつもの所に門口。下の所に寒竹の生垣、出入りあり。爰に太平、以前の形にて、徳利茶碗を置き、酒を飲み、側に官藏、角内、五平太、丼を叩き、踊つて居る見得。すべて太平浪宅の體。甚句の唄にて道具納まる。

角内　甚句踊らば品よく踊れ。品のよいのをサア嫁に取る。
皆々　ヤンヤ〳〵。
太平　ヤイ〳〵、根太が抜けるから、いゝ加減にふざけろエ。

官藏　イヤモウ、こんな面白い事はねえ。併しまだ酒があるか。

角内　先刻取つたのが一升五合の酒だから、もうそんなにはあるめえ。

五平　無えと思つたから、この古挾み箱を、古鐵買ひに賣らうと云つたら、百五十に附けやァがつた。

　　　ト古き挾み箱を出す。

太平　その挾み箱も、世にある時は表道具。せめて一升にでもなればいゝに。

三人　酒の無くならねえうち、もう一杯やッつけべい。

太平　これサ、よせ〳〵、足りねえ酒だ。いゝ加減にくらへ〳〵。

官藏　ハテ、こんたは惚れてゐる娘を自由にしたぢやァねえか。

五平　こちとらは酒でも飲まにやァつまらねえ。

　　　トまた甚句になり、踊り出す。此うち向うより太左衛門、浪人者の拵らへにて出て、直ぐに舞臺へ來り

太左　太平どのは内か。この手合ひは何を騒いで居るのだ。

官藏　ヤア、こんたは鷺の首の太左衛門どの。

太左　オヽ、久しく見えなんだが、どこぞへ稼ぎにでも出かけたのか。

太左　四五日、脇へ用があつて行つて居たが、見りやァ大層奢るが、祝ひ事でもあつたのか。

太平　ちつと悦に入つた事があつたから、みんなに骨を折らせた禮よ。

太左　そいつは耳寄りだ。太平どの、この節は運が向いて來たと見えるな。おれも目と出る事があるて

太平　ナニ、好い事があつたか〳〵

太左　こんたの伯父御の上左衞門どのに頼まれ、上總へ行くとて木更津船の乘合ひに、小湊詣りの娘を連れた親子の旅人、その側に若い男が一人居て、乘合ひの暗がりで、若い男とその娘が、じやらくらを始めたのよ。

四人　そいつは氣が惡い。それからどうした〳〵。

太左　サア、おれも寐た振りをして居たが、業腹紛れに、その若い男の風呂敷包みを引ッ淩つて、船から上がつて中を見たところが、コレ、見さつせえ、こんな卷物、よく聞き合せたら、これが彼の神妙劍の一卷とやら。

ト懷中より出す。太平、取つて見て

太平　オヽ、成る程、正しく神妙劍。この品こそ、實右衞門が奥州にありし時、未だ尾花六郎右衞門の昔、悴吉三郎が持つて、家出をしたと聞いたが

太左　そんならその時の若い侍ひが、吉三郎とやらかも知れねえ。
太平　思ひよらざる神妙劍の一卷。さうして、これを
太左　わしが持つてゐても役に立たぬ物、どうぞ太平にやつてくれと、伯父御の頼みゆゑ、おれは外に禮を貰つたから、この卷物はお前にやるのサ。
太平　そんなら伯父御が、おれに出世をさせようと……エヽ、忝い。殊にはこなたの深切、有り難え有り難え。
太左　おれに禮を云ふにやァ及ばねえ。伯父御によく禮を云はつせえ。
太平　今日はめでたい事の重なる日だ。祝ひに一つどうだな。
太左　そいつァ有り難え。そんならこなた衆と
四人　ドリヤ、また酒とやらかさうか。
　　ト時の鐘になり、皆々酒盛りになる。向うより豆助、箱提灯を持ち、跡より實右衞門、袴着流し、大小にて、肩衣に包みし品を抱へ出て來り、ちよつと囁く。豆助心得、門口に窺ひ居て、よろしくあつて
豆助　ヘイ、太平さまは、お内にお出でござりまするか……お頼み申しますく。

太左　玄關に案内があるワ。
太平　掛取りなら留守だと云つてくれ。
太左　合點だ。
　　　　ト門口を明け、實右衛門を見て
　　ヤア、おてまへは磯貝
實右　實右衛門でござる、免さつしやい。ちよつと太平どのに御意得たい。
　　　　ト座敷へ通る。
皆々　ソリヤ來た〱。
太平　これサ、いづれも、立騒ぐまい。實右衛門どのを、これへ〱。
實右　ちとお話し申したい儀がござつて、推參いたしてござる。
太平　これは〱、ようこそ御入來。ソレ、お莨盆を
角内　畏まりました。
　　　　ト角内、莨盆を出し、實右衛門と顏見合せ
實右　ヤ、そちや先刻の町人。

角内　ハイ。へゝゝゝゝ。

ト しよげて片隅へ寄る、此うち下手より權平窺ひ出て、礫を打つ。これにて橋がゝりより軍藏出て來り、權平は軍藏へ槍を渡し、囁く。兩人こなしあつて、下手の藪垣の中へ入る。

太平　して、實右衞門どのには、何用ござつて。

實右　別儀でもござらぬ。最前は拙者召仕への下郎、おてまへに對し慮外を申し、既に手討とも相成べきを御容赦下され、滿足に存ずるゆゑ、御禮の爲、わざ〳〵伺候いたしてござる。

太平　これは〳〵、御叮嚀なるそのお詞。併し、あの下郎めは、差出者でござる。それと申すも、おてまへの仕附け柄ゆゑあの行跡。向後きつと仰せつけらるゝがようござる。

實右　イヤモウ、何とも以て氣の毒千萬。つきましては、この品、あまり輕少ながら、おてまへ御懇望と承り、些少ながらお目にかけます。御無心ながらお肴臺を……アヽ、イヤ、これを拜借仕らう、

ト 側の挾み箱を引寄せ、この上へ包みを載せ

時に取つてのお肴臺。島川氏、麁末の一品、御受納下されい。

太平　痛み入つたるこのお持たせ。何かは存ぜねども、辭退いたすも如何。お受け致すでござらう。

ト何心なく包みを明ける、お雪の本首。皆々見て恟り

お持たせのこの品。お肴と思ひの外

四人　こりやどうだ。

實右　卽ちこの肴は、太平どのゝ御好物とござるゆゑ、わざ〳〵持參いたしました。御酒のお相手、存分召上がつて下されい。

皆々　ヤア。

實右　煮魚なりとも刺身とも、不束ながら拙者が手料理、お振舞ひ申さうか。

ト刀を拔き、太平の目先へ突きつける。

太平　サ、それは。

實右　遠慮召されず幾杯なりと、お替へなされい。作り身の手練の程、この場に於てお目にかけうか。

トこれより合ひ方。

太平　ヤア。

實右　義理ある嫁に道を捨てさせ、悴が手前この親が、面目なさにまツこの通り。よくも大勢待伏せなし、一人の女を苛なみ居つたな。

五人　イヽヤ、左樣な覺えは

豆助　無いとは云はさぬ。證據は卽ちこの下郎。

ト慄へながら云ふ。

太平　すりや、何もかも……ハテ、是非に及ばぬ。いかにも、まだ手入らずのあのお雪、度々口說けど承知せぬゆゑ、その遺恨に苛なんだ。

實右　さてこそな。

太平　それゆゑ武士の表を飾り、お雪の首を討つて來たか。

實右　手にかけたれば女敵の、太平をはじめ殘りの奴等、一々に觀念ひろげ。

太平　斯うなるからは破れかぶれ。ソレ、いづれも。

皆々　合點だ。

ト木魚入りの鳴り物になり、五人一度に切つてかゝる。立廻りのうち實右衞門、太平をちよつと當てる。豆助、ウロ／＼して逃げ廻り、在りあふ紙帳をかむり、忍んで居る。太左衞門、逃げ廻るを、ちよつと眉間を切る。これにて太左衞門、逃げて向うへ入る。この立廻りに三人を見事に切り倒す。太平、心附き、起上がり、立廻り。右の腕を切られる。此うち軍藏、後へ窺ひ出で、よき時分に實右衞

門の脇腹を槍にてしたゝかに突く。實右衞門堪りかね、どうとなる。兩人乗りかゝつて止めを刺す。

軍藏　劍術手練の磯貝實右衞門、日頃の高慢も、騙すに手なし。まんまと首尾よく

太平　この上は當所を立退き、最前伯父の情によつて、不思議に手に入る神妙劍の一卷、かねぐ安達家にて懇望とあれば、身共は直ぐに仕官の願ひを

軍藏　その儀は拙者一家のよしみ、殿へ言上、推擧仕る。併し、直さま差上げなば、却つて妨げ。おてまへは暫らくその一卷を持つて、時節を待ち召され。

太平　なにさま、それも尤も。然らば其うち、今受けたる金瘡の療治。手疵癒えなば、その時貴公の推擧を以て。

軍藏　心得申した。當所を立退くその手當。些少なれども、これを路用に。

ト包み金を渡す。これを受取り

太平　何から何まで貴殿の深切。然らば直さま立退き申さん。さりながら、毒喰はゞ皿、とてもの事に彼れめが兩腰。

軍藏　なにさま、實右衞門が帶せし物なら、まんざらでもござるまい。

太平　左やう／＼。

ト兩腰の血を拭ひ、互ひに見込み

軍藏 流石は實右衛門、天晴れ魂ひ。丸の中に二つ銀杏の紋ぢらし。

ト此うち紙帳、ガサ〳〵と動く。

ヤヽ、爰に誰れやら。

太平 それこそ實右衛門が家來。

豆助 私しは何も存じませぬ。御免なされて下さりまし。

ト慄へ〳〵下手へ這ひ出す。

軍藏 生けて置いては後日の妨げ。

太平 下郎は口の

ト豆助を一かせ切ろ。豆助、逃げ廻ろ。この時、向うに足音するゆゑ

兩人 あの人音は

ト囁き合ひ

軍藏 コレ。

太平 心得申した。

ト思ひ入れあつてためらふ。此うち向うより友平、以前の形。藤助、袴を着流し、大小にて、友平に箱提灯を持たせ、足早に出てくる。此うち太平、窺ひ〳〵、花道の方へ行く。摺れ違うて向うへ走り入る。兩人心附かず、門口へ來り

藤助　父上のお歸り、あまり遲刻、その上どうやら胸騷ぎ。友平、ソレ案内。

友平　ハツ。……お旦那、お迎ひでござります。

ト内を覗き、暗闇ゆゑ

こりやどうだ。そんならもう、お旦那はお歸りであつたのか。

トあちこちを見廻し、實右衞門の死骸を見附け

ヤヽ、お旦那を何者か

藤助　ヤヽ、親人樣を

ト兩人、捨ぜりふにて探り見て

友平　こりやモウ絆は切れ果てしか。

藤助　ハアヽ。

ト當惑のこなし。豆助を見附け

友平 こりや豆助……コリヤ、心を慥かに……して〳〵、お旦那を何者が

藤助 サヽ、早く申せ〳〵。

豆助 お旦那を、あの太平めが

兩人 すりや、太平めが。

豆助 私しもこの通り。その上、お旦那の兩腰まで、奪ひ取つて立退く樣子。

藤助 ナニ、兩腰までを

友平 チエヽ、いま一足早くば、と云つても返らぬこの場の仕儀。

兩人 思へば〳〵。チエヽ。

ト豆助、此うち「ウン」と落入る。

友平 不便やこれも絆は切れたか。

藤助 逃げたる島川、遠くは行くまい。

友平 跡追ひかけて

藤助 友平、來やれ。

ト行きにかゝる。軍藏、窺ひ寄つて提灯を打ち落し、藤助の腰を槍にて突く。藤助「アッ」と思ひ入

れ。友平悔り、思ひ入れあつて、軍藏を捕へようとする。立廻りちよつとあつて、軍藏摺り抜け、花道へ逃げる。

藤助　おのれ曲者。

友平　取逃がしたか、

ト　これにて軍藏、礫を打つ。藤助、一時にどうとなる。木の頭。

殘念な。

ト　双方よろしく、これをキザミにて、よろしく、拍子幕外、ゴンの送りにて、軍藏、一散に向うへ走り入る。跡シヤギリ。

幕

（作者　音羽助）

二幕目

品川釜鳴屋の場

役名——釜鳴屋の抱へ、鐵灸お杉。岡村屋お春、小ぢよく、黑次。釜鳴屋の抱へ、四六のおくま。島川太平。八百屋手代、丈八。八山新左衛門。築地法印學山、判人、狸の金八。釜鳴屋武兵衛。太鼓持ち、出羽長。同、京助。小道具屋與七。釜鳴屋の抱へ。おやま　同、おしか。同、

おいの。衣裳屋文藏。下部、權平。若い者、權七。駕籠舁き、庄六。奴、友平。問屋人足、白山傳吉。

本舞臺、三間の間、常足の二重、正面、星の金物を打つたる誂らへの杉戸、「釜鳴屋」と記したる半暖簾、見世先へ紫の幕を打廻し、「木食上人宿」と記せし紙札、講中の丸提灯。下の方、格子造り、天水桶好みの通り飾りつけ、爰に與七、道具屋。武兵衞、亭主。金八、判人。權七、若い者。おいの、飯盛り女郎。おしか、同じく女郎にて、馬に蹴られ、目を引附けてゐるを、皆々立ちかゝり、呼び生けてゐる。すべて品川本宿の體、驛路の入つたる流行り唄にて幕明く。

ト權七、天水桶の水をすくひ、おしかの顏へ吹きかけて

皆々　おしかやアい〳〵。

武兵　これサ〳〵、其やうに怒鳴ると、却つて逆上せて惡い。マア、靜かにしやれ〳〵。

金八　時にこの子は、癲癇病みか、但し、疝癪がさしこんだのか。

いの　なにサ、此おしかさんは、いま馴染みの客人が通らしつたゆゑ、裸足で駈け出したところへ、馬が通りかゝつて

權七　横ッ腹を蹴倒したから、この通りサ。氣附けでも服ませてえものだ。

金八　早くまたゝびを服ませるがいゝ。

皆々　猫ぢやァあるめえし。

武兵　何にしろ、もう一度呼び生けて見るがいゝ。

皆々　おしかさんやァい〳〵。

　　トこれにて心附き

しか　エヽ、口惜しいなう〳〵。

皆々　どうだ、氣が附いたか〳〵。

しか　恐ろしや〳〵。先刻馬に蹴られたと思つたら、それから夢中。どこともなく行くと思つたら、向うにお寺があつて、一面に櫻の花盛り。その下に坊樣が二人居て、鐘の供養を拜ませる事はならぬ、歸れ〳〵と云ふかと思つたら、氣が附いた。これでも白拍子の類ゐだねえ。

金八　そいつはお前、仕合せをした。鐘の供養の坊樣が二人、それはてつきり地獄だ。

與七　なにサ、それはてつきり木挽町の、道成寺の夢だ。

皆々　何を云はつしやる。

武兵　これ程の騷動に、お杉が見えねえ。どこへ行つた。

いの　あのお杉さんは、きかない氣の女郎衆だから

權七　馬乘りの跡を追つかけて行つたかも知れねえ。

いの　何にしろ、氣が附いてめでたい。奥へ行つて、藥でも服ませませう。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト驛路の鈴、流行り唄になり、權七、おいの。おしかたゞ介抱して奥へ入る。あと合ひ方。

金八　人通りが澤山ゆゑ、いろ〳〵の交ぜッ返しがある。

武兵　イヤ、交ぜッ返しと云へば、こなたの判で內へ抱へた、婆ア女郎のおくま。たま〳〵客を取れば
ピンシャン〳〵振りつける。あんな女に四十の五十のと、大金を出してはならぬ。こんたの手先
で、どこかへ住替へに出して下せえ。

金八　成る程、その事も聞きましたが、どうであの子は江戸へは向かず、神奈川か藤澤の代物。そいつ
はお氣の毒な。

武兵　そこで、おれが一つの思ひつきがある。あの女の兄判をついた、傳吉といふ奴は　大の正直者。
どういふ譯か知らねえが、あのおくまを大事にする樣子。そこを附けこんで、思ひ附きといふの

は、コレ

ト囁く。金八、呑み込み

金八　そいつは奇妙。併し、肝腎の客人にする人が

武兵　オット、皆まで云ふまい。客人にする人は、おれが見立てる。萬事は胸に〳〵。

ト思ひ入れ。驛路の鈴、流行り唄になり。向うより四つ手駕籠に、庄六、先棒。傳吉、後棒にて、文藏、町人の旅形、附いて出て來り

文藏　成る程、駕籠といふ物は、四本足のせゐか強勢に早い。おれはがッかりした。

庄六　それでも旦那が、急けと仰しやりましたゆゑ

傳吉　お前さんも、お草臥れでござりませう。併し、猪牙船の後向きと、駕籠の跡から附いて廻るは、安い奴サ。

文藏　イヤ、これは御挨拶。

三人　ハヽヽヽヽヽ。

ト笑ふ。右の鳴り物にて、三人、舞臺へ來る。駕籠をよき所に下ろす。武兵衞、金八見て

武兵　若い衆、御苦勞でござります。こりやァお泊りかえ。

文藏　親方、上りには、大きにお世話でござりました。
武兵　衣裳屋の文藏さま、只今お下りでござりましたか。
文藏　今夜も又お賴み申します。
庄六　モシ、釜鳴屋の旦那、見れば、幕が張つてござりますが、あれは何でござります。
武兵　あれは、木食さまが江戸へござるが、わしどもは講中ゆゑ、今夜お宿を申すのサ。
傳吉　そりやァお泊りの旦那方は仕合せだ。お加持でもしてもらふがようござります……ハイ、旦那、お約束の所まで參りました。
ト駕籠の垂れを上げる。爰に丈八、旅形、手代にて、眠り居る。庄六、履物を直し
庄六　旦那、お履物を。モシ、旦那々々。
丈八　オイ〳〵。ヤレ〳〵、好い心持ちに、グツと一寢入り。もう釜鳴屋か。早く來たの。
武兵　これは〳〵、八百屋の丈八さま、島へでもお出でなされましたか。
丈八　イヽエ、わしは椎茸の仕入れに、甲州から駿河へ廻り、小田原で逗留のうち、旅芝居を見て、この伊勢吾といふ、人形町の衣裳屋さんと、連れになつて歸りがけ。
金八　お前さん、今夜は爰の內へ泊つて

文藏　椎茸より、松茸の仕入れがようござります。

丈八　仕入れといへば、此やうに旅歩きをして、八百屋物を仕入れるのも、内の後家御に氣に入られ娘のお七を女房に持ちたい願ひ。度々口說けど承知せぬ穴埋め、この釜鳴屋のお杉といふ女は、そのお七に生寫し、それゆゑ毎晩通つても、此奴も今に承知せぬ。こりやァ矢ツ張りお七を口說かうか、お杉を口說かうか。

傳吉　モシ〳〵、旦那、お七を口說くえ。七を口說くは當り前だが、杉を口說くは、天狗樣ではあるまいし。

庄六　うさァねえ。

皆々　ハヽヽヽヽ。

丈八　今日は是非とも、お杉を口說き落さねばならぬ。御亭主、こなたの威光で、得心するやう、云ひ附けて下さい。

武兵　畏まりました。何に致せ、座敷へござつて、お一つおあがりなされませ。

傳吉　これからわしどもは、歸りでも取りませう。ナア、棒組み。

庄六　それがいゝ〳〵。

武兵　傳吉どん、貴樣にちよつと話しがある。
金八　一服のんで下せえ。
傳吉　畏まりました。
庄六　そんなら、おらァ問屋前で
丈八　酒のみませうと洒落ようか。
皆々　左樣ならお客樣。
丈八　文藏さん、サア、一緒に。
皆々　サア、お出でなされまし。

ト矢張り右の唄にて、文藏丈八は奥へ、庄六は駕籠をかたげて下座へ入る。

傳吉　あの旦那も、顏に似合はぬ、餘ッほどの女好き。いろ〳〵な惚氣話しを請けさせました……イヤ話しといへば、何か私しに
武兵　イヤ、外の事でもねえが、お前が兄判で寄越したおくまが事、それについて、めでたい話しが
傳吉　めでたい話しとは、おくまが富でも取りましたか。
武兵　なにサ、其やうな事ではない。あのおくまに、好い客人が附いて、急に身請けする筈で、立て金

の五十兩。わしが方に預かつてゐる。こなたも兄判をついた事ゆゑ、ちよつと耳へ入れて置きます。

傳吉　何の話しかと思へば、怪しからぬ事を云はつしやります。あのおくまに、外の亭主を、持たせる事はなりませぬ。

金八　これサノ〱、お前が其やうに云ふと、話しが横になるぜ。

傳吉　そりやアなぜでござります。

武兵　ハテ、年季の内は此方の代物。住替へに出さうが、客人の方へやらうが、金との相談。

金八　殊に、五十兩といふ立て金が濟んでゐれば、今更どうも

傳吉　ならうが、おくまを外へ身請けをさせる事は、なりませぬ〱。

金八　それを傳吉どのが兎や角云ふは

武兵　どうも合點がゆかねえ。

傳吉　成る程、其やうに云はつしやるも尤もな事。何を隱しませう、あのおくまには譯あつて、外の男は持たされませぬ。それおやによつて、どうぞ變替へして下さりませ。

金八　それは困つたもの。どうしたらようござりませう。

武兵　さればサ、此方も客人の方へやるも商賣づく。今さら變替へするも氣の毒なり
金八　傳吉どん、斯うするがいゝ。田から行くも、畔を行くも同じ事。後方までに五十兩の金を拵らへて親方へ預け、おくまが身請けを其方へすれば、双方浪風なしに納まるといふものではないか。
傳吉　成る程、それではようござるが、併し、大枚五十兩といふ金が
兩人　無いと云へば、客人の方へ。
傳吉　それだと云つて、どうもわしが
兩人　濟む濟まないは、おくまに逢つて
傳吉　後方までに
兩人　否やの返事を
傳吉　畏まりました。左樣なら奧へ參じます。御免なされませ。
ト流行り唄になり、傳吉、草鞋を提げて奧へ入る。右の鳴り物にて、向うより學山、法印の拵らへにて、風呂敷に包みし、札箱、錫杖を持ち出で來り
學山　これはどなたも、いつも〳〵お賑やかで、よろしうござります。
金八　イヤ、築地の法印さん、釜〆めで、しつかりだね。

學山　正五九は私しどもの附け目サ。時に、いま道で逢ひましたが、本郷の八百屋の番頭、丈八さんは來てゐますか。

武兵　先刻から來てござるが、お前、馴染みか。

學山　アイ、久しい馴染みサ。

金八　馴染みといへば、あの一件に、この法印さんを賴んではどうでござりませう。

武兵　こいつはいゝ思ひ附き。ちよつと話して見て下せえ。

學山　イヤ、お心安い仲、何なりとも賴まれませう。して、その譯はネ。

金八　外でもない、斯ういふ譯サ。

ト囁く。學山、呑み込み

學山　なんだかをかしな賴まれものだが、併し、この形では

武兵　オツト、それはおいらが胸にある。

金八　まづこの事はいゝが、彌作が妹のあのお杉、當分質に取つて置きやしたが、金も濟んで、身儘になつたではござりませぬか。

武兵　さればサ、あの女を脇へ出すのも惜しいもの。後金を貸して、內の抱へにしてえもんだ。

學山　その商賣話しは後にして、今の一件に、かゝらうではないかね。
金八　イカサマ、それも一つの慾張り。
武兵　委細の事は奥で詳しく
學山　そんならお二人
武兵　サ、ござれ〳〵。
　　ト右の唄になり、三人、奥へ入る。町人一人出て來り
町人　オイ〳〵、頼みませう〳〵。
權七　ハイ〳〵、何でござります。
　　ト奥より出て
町人　これは問屋の衆、何でござります。今夜爰の内が木食さまのお宿の筈であつたが、急に魚沼の方へござるゆゑ、ちよつと知らせに來ました。講中の衆へもこの事を
權七　アヽ、さうかえ。そんなら晝見世を……モシ〳〵、今夜木食さまはござらぬゆゑ、どなたも見世をお張りなさい。

ト鹽笊を取出し、見世へ鹽を蒔く事あつて

この幕も、明がらすとしやせう。

ト件の幕を取る。見世の正面に、莨盆を扣へ、おくま、おやま、おしか、紋附きの木綿、やつしを引ッ張り、宿場女郎の拵らへにて居並ぶ。權七、樽へ腰をかける。右の鳴り物にて、向うより黑次、しみつたれたる小じよくにて、大きな雪駄を穿き、膏藥の袋、蓋茶碗に饂飩の入つたるを兩袖にて持ち、鼻唄にて出てくる。

權七　この餓鬼は、外へ出ると遲い。何をして居やァがつた。

黑次　おとらさんが、膏藥を取りにゆく次手に、饂飩を買つて來てくれろと云はしつたから、茹でるうち待つて居たのだよ。

權七　内が忙がしいに、早く歸りやァがれ。

黑次　そんなに云はなくつてもいゝわな……むごいばかりが男といはぬ、たまにや情もかけさんせ。

トそゝり唄を唄ふ。

權七　エヽ、この餓鬼め。

トくらはさうとする。黑次、逃げて入る。

やす　權七どん、今日は晝見世は無いと思つたゆゑ
しか　うつかりして、どんなにうろたへたらう。
くま　わちきも滅相にうろたへたよ。部屋で夏書をしてゐて、南無阿彌陀佛々々々々々々。
權七　なんだな、おくまさん、また念佛か。この子は、と云ふもをかしい大年増のおくまさん、お前は毎晩客人を惡くするゆゑ、お茶ばかりひいてゐる。ちつと元氣を出して、氣を附けなせえな。
くま　アイ、わたしを思うて、其やうに云うて下さるは嬉しいけれど、此やうな勤めをしながらも
皆々　客人に逢ふのが否かえ。
くま　どうぞ、その事ばかりは
權七　成る程、こいつは呆れたものだ。

ト思ひ入れ。曲馬の鳴り物になり、向うより鞍置き馬に、新五左衞門、遠乘りの侍ひにて乘り、お杉、宿場女郎の拵らへにて、馬の尾筒を取り、引摺りながら出て來り

新五　これは危ない、萬歳樂々々々。見掛けによらぬ強い女だ。こりやア身共を、どうする〳〵。
すぎ　どうもする事ではない。わたしは女の事ゆゑ、何も存じませぬが、先刻お前さんは、あの子供衆を、踏み殺してお通りだが、其やうなお許しを、どこから受けてお通りだえ。これサ、挨拶をお

しな。此やうな安い女郎でも、人間に二種はないよ。朋輩の事ゆゑ、お前さんをお連れ申した。サア、白い黒いの挨拶してお出で。わたしも釜鳴屋の鐵灸お杉、宿場を稼ぐ飯盛りでも、そこが江戸ッ子、膽がござりやすよ。

新五　尤もぢや／＼。どうぞ料簡してくれ／＼。

すぎ　料簡も狐拳も、あそこへ行つての事サ。

新五　そんならどうでも

すぎ　これから跡へ戻り馬。

新五　ヤ。

すぎ　酒手で廉く乘せ申すわな。

ト舞臺へ引戻してくる。皆々見て

權七　ヤア、お前はお杉さん、この馬は

すぎ　先刻お前に怪我をさせたお侍ひ樣、馬から下りて、何かのしらちを

新五　イヤ、身共は主用、是非とも爰から

すぎ　イケ情の強い。下りずば、わたしが

新五　アヽ、危ない。静かにしてくれ。エヽ、これといふも、おのれが悪いからだ。爰な、ほてツぱらめ。

ト新五左衛門を馬から引下ろす。

ト馬の尻を叩く。馬は刎れかへり、下座へ逃げて入る。新五左衛門、逃げようとする。

しか　どつこい、お前が相手だ。逃がしはせぬ／＼。

新五　イヤ／＼、逃げはせぬ。此方の不調法、料簡してくれ／＼。何にしろ、あの馬が

權七　イヤ／＼、なんであらうと、問屋場へ届け、存分にしにやアなりませぬ。

新五　コレ／＼、姐え達、詫び言を、頼む／＼。

やま　モシ／＼、お杉さん、この方がたつての詫び言。

くま　もう堪忍しておあげなされまし。

すぎ　料簡のならぬ所なれど、折角お前方の御挨拶ゆゑ、料簡いたしませう。

新五　その代り、膏薬代をくれろと云ふのか。

すぎ　イエ／＼、其やうな事ではない。仲直りのしるしに

新五　酒手を寄越せか。

すぎ　イエ〳〵、さうでもない。
新五　そんなら何を。
すぎ　遊んでお出で。
新五　ヤア。
すぎ　サア、子供でもあけて、一つあがつてお出で。
新五　イヤモウ、それで濟む事なら、此方も好きの道。して、身共が相方は
すぎ　あのおくまさんを
くま　モシ、わたしやお客を取る事は。
やま　これはしたり、お客を取らねば、内の首尾が
くま　それぢやと云うて。
すぎ　ハテ、此やうな田舍侍ひ、どうしてもよいわいなア。
新五　ナニ、田舍侍ひとは。
すぎ　サア、異な事を云はずとも、お前の相方はこのお方。
新五　然らばこの女郎が、身共の相方か。ハテ、大年増なア。

すぎ　お前が否と仰しやれば、此方も又料簡が……ナア、おしかさん。

しか　わたしや先刻の所が、ア、、痛い〳〵。

權七　こいつはいよ〳〵、問屋場へ屆けて

新五　ア、、コレ〳〵、是非がない。今夜は爰許で一宿いたさう。

皆々　サア値が出來た。そんなら、おくまさん

くま　どうでもわたしを。ア、、情ない。

新五　ア、、此方も情ない。

權七　お客だよ。

ト奥にて

子供　アイ、。

新五　若い者、案内おしやれ。

トまた流行り唄になり、權七、案内して、新五左衞門、跡よりおくま、悄れて奥へ入る。お杉、おやま、おしか殘る。奥より丈八、文藏、おいの出て來り、丈八、お杉を見て

丈八　イヤ、そこに居るはお杉ではないか。あまり暑さに、風に吹かれてゐるのか知らぬが、おぬしが

居ぬのゑ、浮かぬはこの丈八。いつぞやから度々通へど、まださつぱりと打解けてくれぬが、今日は是非とも、頼む〳〵。

文藏　お前と同樣、おれもおいのぼうを

いの　オヤ〳〵、わたしのお客はお前かえ。好かないよ。

しか　そんなら、わたしはお太鼓かえ。オヤ、好かないよ。

丈八　好いた好かぬは初手のうち。斯うおぬしに打込んだからは、一寸先は闇もいとはず、是非とも今日はおぬしとしつぽり

すぎ　わたしやどうあつても、お前へ出る事は

丈八　否だといふのか。

すぎ　アイ。

丈八　ヤア。

すぎ　それもたつてと云ふ事なら、わたしの顏の立つやうにして下さんせ。

丈八　オツト皆まで云ふまい。夜具は元より襠裲から、物日の仕舞ひ、それも合點、まづ今夜は內中で惣花。藝者を大勢呼んで洒落たら、まんざらでもあるまい。

すぎ　そんなら必ず

丈八　オット呑み込み。オイ、誰れぞちよつと來て下せえ。

　ト この時、下座より庄六出て來り

庄六　オヽ、先刻の旦那、私しでよいなら

丈八　オヽ、駕籠のこなたでも大事ない。岡村屋といふ茶屋へ行つて、太夫女藝者ありッたけ呼んでくれと、云ひつけて下せえ。

庄六　ハイ〳〵、畏まりました。

すぎ　モシ、あの人へも

丈八　オット合點。ソレ、骨折り賃。

　ト紙入れより金を出してやる。

庄六　エ、私しへ御祝儀。

丈八　急いで行つてくれ。

庄八　ハッ、飛ぶが如くに。

　ト語りながら向うへ走り入る。この時、揚げ幕の内にて

友平　これは皆樣御存じの一文奴。評判々々。

ト槍踊りの合ひ方になり、向うより友平、捻切り奴、藁の槍を持ち、ツカ〳〵と出て來り

今度この度、殿の御入府、宿入り下馬先、行列揃へて、振りこめ〳〵、サツサ、よやまかしよ。

トこれより地へ取り、槍の振り、ちよつとあつて舞臺へ來る。皆々見て

皆々　ヤンヤ〳〵。

やま　お杉さんの好きな、いつもの奴さんが來たわいなア。

すぎ　ほんに、いつ見ても、くつきりとした奴さん。

丈八　ハヽア、そんならお杉は、この奴に惚れてゐるか。

すぎ　アイ。

丈八　ヤア。

すぎ　サア、腹からの物貰ひとも見えぬ奴さん。どうやら、いとしらしい……サア、いとしい物貰ひではないかいなア。

丈八　イヤモ、おぬしが其やうに思ふもの、只も歸されまい。ソレ、手の内を

ト金を捻つて投げてやる。

文藏　ヤア、奴、〆めたな〳〵。

友平　〆めた段ではござりませぬ。今日はずつしり錢になつた上、お客樣から又お金を下さるとは、一文奴が福德の三年目。爰の見世先を借りて、ドリヤ、錢勘定いたしませうか。

ト流行り唄になり、捨ぜりふにて友平、下の方へ行き、懷より紙袋を出し、勘定してゐる。此うち向うよりお春、引手茶屋の女房にて出て來り

はる　これは〳〵、丈八さん、よう入らつしやりました。どなたも今日は。

やま　岡村屋のお春さん、お出でかえ。

丈八　今云つてやつた、藝者はどうだ〳〵。

はる　この節は、怪しからず賑やかゆゑ。藝者衆は一向ござりませぬ。やう〳〵太夫衆を一組、口を掛けてやりました。

丈八　そんなら藝者は切れ物か。是非がない。太夫一組で、下直の方も又よい。

すぎ　モシ、丈八さん、藝者衆が無いとあれば、そんなら座敷へ、あの奴さんを

皆々　そりやァようござんせう。廊下で今の槍踊りを

丈八　イヤ、とんだ事を云ふ。あの奴は物貰ひ。どうして座敷へ

すぎ　呼ばれぬところを、どうぞして、座敷へ呼ぶのがわたしへ心中。ナア申し、奴さん。
友平　有り難うございまするが、私しがお座敷へ上がりましたら、犬が吠えませう。
文藏　オヽ、さうだ〳〵。薄穢ねえ物貰ひ。
丈八　座敷へ來る事は、ならぬぞ〳〵。
すぎ　お前が成らぬと云はしやんすりや、わたしもお前の座敷へは
丈八　そんなら槍持ち、御苦勞ながら。
友平　でも、私しは
はる　物貰ひというたとて、乞食非人といふではなし
いの　そこはわたしらが呑み込んで
すぎ　そんなら座敷へ
友平　お許し受けて
丈八　皆も一緒に
皆々　サア、お出でなされまし。
ト流行り唄になり、この一件殘らず入る。引違へて權七、おくまを連れ出て、奥の方へ向ひ

權七　旦那、マア〳〵、御料簡なされまし。この子は私しにお預けなされまし……モシ、おくまさん、どうしたものだ。毎日毎晩、あんまりでござります。

くま　サア、わたしも、よんどころなう勤め奉公するゆゑ、お客の座敷へ出てゐるを、其やうに云はないでどうするものか。先刻のお侍ひ樣が、お前の側へ寄ると、ケン〳〵するゆゑ機嫌が惡い。兎も角もして、客人を寐かし、二度見世を張らにやアなりませんぢやないか。

權七　ハテ、四六屋體で、一人や二人の客を取つて、間尺に合ふものか。一日に十五六人づゝも、廻しを取るのは當り前だ。テキパキして、また見世へ出なせえ。

くま　そんなら又、見世へ出て、お客を取るのでござんすか。

權七　それが四六のあたほうサ。

くま　そんなら又、顏を晒しに

くま　ても情ない。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト思ひ入れ。また唄になり、おくま、しを〳〵として正面へ座る。この唄をかりて向うより太平、深編笠、浪人の拵らへにて、手紙を讀みながら出る。跡より權平、旅形、道で行きあひし心にて、附いて出て來り

權平　あなたに好い所でお目にかゝりました。爰は途中の儀なれば、御返事は御口上でよろしうござります。

太平　イカサマ、書面で拜見いたすところ、近々神妙劍の一巻持參の上は、鎌倉の安達家へ、推擧いたすべきとの文體。殊更お心附けられし、金瘡の藥まで添へられ、併し、辰の年度揃ひし男子の生血を取り得て、この藥を服する時は、いかなる金瘡たりとも、忽ち全快との事。して、その一藥は。

權平　即ちこれに持參いたしました。サ、お受取り下さりませ。

ト懷より出して太平に渡す。

太平　何から何まで拔け目なき、軍藏どのゝ計らひ。身共も伯父の方に掛り人の儀なれば、何か心に任せず、お禮旁々御貴面の節と、軍藏どのによろしく申し傳へてくりやれ。

權平　畏まりました。きつと御傳言申すでござりませう。

太平　大儀であつた。

權平　ハッ、左様なら

ト引返して入る。太平、二品を懷中して舞臺へ來る。權七、太平の袖を引ッ張り

権七　モシ〳〵、お上がりなされませ。

ト引く。

太平　身共は左様な者ではない。放しやれ、

権七　好い子供衆がござります。お泊りなされませ。

太平　ハテ、聞分けのない。放せと申すに。

ト権七を振り切るとて、思はず一巻を落し、これを知らずに舞臺を通り、東の歩みへかゝる。この時

奥にて

黒次　権七どん〳〵。

ト呼びながら出て

お客がちよつと

権七　エヽ、又ごてつくか。ハテ、忙がしい。

ト両人奥へ入る。正面のおくま、落ちたる一巻に目を附け、ツカ〳〵と走り下り、袱紗包みの一巻を取り、中を開いて、上書を見て

くま　ヤヽ、こりや神妙劍の一巻。

ト太平これを聞きつけ、懐を探り見て、ツカ〳〵と舞臺へ戻り、おくまが持つたる一卷へ手を掛ける。兩人爭ふはずみ、太平の編笠取れる。おくま、一卷をちやつと持ちかへる。

太平　それを。

トかゝるをその手を、おくま、ヂツと取り

くま　モシ、お客さん、遊んでお出で。

太平　イヽヤ、身共は外々へ

くま　お馴染みのお方があつて

太平　なか〳〵左樣な者ではない。戯れ云はずとその品を

くま　堅くろしい、流石はお武家。して、お前さんは。

太平　サ、身共は……オヽ、それ〳〵、身は鎌倉にて大家の家來、幼年の頃より、その一卷を持參なし武術修行の爲、諸國の遍歴。

くま　ヤヽ、さう仰しやれば、此方にも心當り。して、あなたの御家名は。

太平　仔細あつて、その名はどうも

くま　云はねどそれと、あなたの御家名。

太平　ヤヽ、なんと。

くま　他家に類なき神妙劍、御所持なされて諸國修行と、聞き及ぶあなたは正しく、尾花六郞右衞門さまの御惣領、吉三郞さま。

太平　イヽヤ、身共は

くま　ハテ、お隱し遊ばすな。十三年以前、家出なされた跡へ、私しは御奉公にあがり、仔細は詳しう承り居ります。お顏こそ存ぜねど、この一卷を御所持の上、その兩腰の緣頭、見覺えのある、丸に二つ銀杏の紋ぢらし、それをお帶しなされるが、慥かな證據。さすれば疑ひもなき、古主の御惣領、尾花吉三郞さま。私し事は、くまと申しまして、親旦那へ仕へし者。モシ、若旦那、おなつかしう存じまする。

ト此せりふのうち、太平こなしあつて、俄に氣を替へ

太平　さては其方は、我が方に奉公いたせしとか。仔細殘らず存ぜし上は、包むに詮なし。いかにも某は、奧州の浪人たりし、六郞右衞門が悴吉三郞。十三年以前國遠なし、不孝ながらも父母の、訪ひ音信も致さぬが、御兩親には、御安泰に居らせらるゝか。

くま　すりや、あなたにはお家の浮沈を、御存じはござりませぬか。

太平　ヤヽ、家の浮沈とは心がゝりな。して〳〵、その仔細は。
くま　サア、申し上げるも涙の種。あなたの家出なされた跡にて、親旦那様には、大家へ御仕官なされしと風の便り、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、おいたわしや親旦那には
太平　如何なされしぞ。
くま　人手にかゝつて、お果てなされましたわいなア。
太平　ナニ、親人には、人手にかゝり御最期とや。ハヽア……某お側に在り合さば、かゝる横死はあるまいに、家出なしたるこの身の不孝。して〳〵、敵は何者なるぞ。
くま　サア、その敵と申すは、浪人組の島川太平とやら。
太平　すりや、敵は島川太平とな。して、その者の年恰好は。
くま　あなたの爲には親御の敵、その面體は御存じないか。
太平　イヽや、島川太平とやら、存じやう筈がない。して、其方は。
くま　どう致して私しも
太平　知らぬと申すか。
くま　ハイ。

太平　それで身共も落ちついた。

くま　エ。

太平　イヤサ、落ちつかれぬはこの身の上。それは格別、合點ゆかぬは、何ゆゑにこの所に、かゝるいぶせき勤め奉公。

くま　申し上げるも恥かしながら、弟御の染五郎さま、敵討の御出立に、路用とてもお心に任せず、命の恩あるお主樣の若旦那、それと云はずに年たけた、私しが身を賣つて、何かを調へ御出立。

太平　すりや、其方が身代にて、弟は敵討の、出立を致せしとな。ハテ、忠節な者ぢやなア。

くま　心ばかりのお主へ忠義、お恥かしう存じまする。

太平　我れはそれには引更へて、國遠の不孝にて、今まで知らぬ父の仇。この上は、弟にめぐり逢ひ、兄弟一致に心を合せ、敵島川太平を討つて、父へ手向けん。何は兎もあれ、その品を

くま　イヤ、この一卷、お手渡す事は成りませぬ。

太平　とは又なぜに。

くま　あなたが御所持なされては、元より好む武術の御修行、又ぞろ國遠遊ばしては、父御へ御不孝。御本望お遂げなさるまでは、私しが慥かにお預かり申しまする。

太平　すりや、その品を。
くま　きつとお預かり申しました。
太平　ハテ、是非に及ばぬ。
くま　ヤ。
太平　サア、是非とも云はれぬ其方の忠義。然らば身共は
くま　わたしが馴染みのお客と云うて
太平　何かの話しは奥座敷で
くま　左様なれば、吉三郎さま。
太平　ア、コリヤ。
くま　アイヤ、お馴染みのお客。
太平　そんなら、おくまぼう。
くま　アイ。
太平　枕並べて、待つて居るぞよ。
ト唄になり、思ひ入れあつて奥へ入る。おくま、跡を見送り

くま　ハテ、思ひがけない、この神妙劍の一卷、大旦那奥州にござる時、常々のお物語りに、世に類なき神妙劍の一卷を、悴吉三郎所持なして、國を立退きしとの事。その跡にて大旦那は、鎌倉へ移らせ、やみ〳〵との横死。それを御存じなき若旦那、お顏は知らねど、お腰の物の御定紋とひ、この品を御所持なさるゝもの、外にはない古主のあなた。どうぞ御本意を遂げさせたく、お足をとゞめん爲、大切な品を預かりしが、人出入り多きこの家の内。ハテ、よい置き所が

トこなし。奥より傳吉、出て來り

傳吉　あのおくまさんは、お客の座敷にも見えぬが、どこへござつたしらん。

くま　ヤア、弟傳吉か。わしや其方に、大分話したい事があるゆゑ、逢ひたかつたわいの。

傳吉　わしもお前に、話したい事がある。さうして、お前の話しは。

くま　わしが話しといふは

トこの時、おいの出て

いの　おくまさん〳〵、先刻の馬乘りが、ぴん〳〵刎ね出したよ。早くお出でよ〳〵。

くま　時も時とて。マア〳〵、待つて下さんせ。コレ〳〵傳吉、これは大事の品。わが身に預けて置くほどに、大事に持つてゐてたも。

傳吉　アイ／＼、しつかりと預かりました。

ト受取る。

いの　これサ、早くお出でといふに。

ト捨ぜりふにておくまを引立て、奥へ入る。

傳吉　是非話さねばならぬ事。早く來て下さりまし。聞分けの無い、あのヨイ／＼女郎め。無理に連れて行き居つた。それはさうと、何だか結構さうなこの卷物。觀音樣へ納める、お經と見えるわい

ト捨ぜりふにて、件の一卷を懷中する。奥より學山、醫者の形に着替へ、金八、武兵衞附いて出て來り

武兵　金六どの、今の話しは、この旦那の方へ振りむけるつもりに、手を打つて下せえ。

金八　何にしろ、めでたい話し。當人も喜ぶでござりませう。

學山　イヤ、當人は兎もあれ、わしも安堵しました。

傳吉　これは皆樣、何かニコ／＼と、めでたい事とは何でござりますな。

武兵　傳吉どのか。好い所に居さしつた。こなたにも話して置いたおくまが事。いよ／＼この旦那の方へ、身請けの相談、めでたいとは、その話しサ。

傳吉　イエ〳〵、その事は、最前も申します通り、おくまが身請け、外へは成りませぬ〳〵。

學山　それでも、わしが方から、立て金の五十兩も遣はしたれば

傳吉　イエ〳〵、わしが方から、と云つても金は無けれど、外の男を持たせる事は成りませぬ。して、お前樣は。

學山　おれは築地の法印

武兵　エヘン〳〵。

學山　なにサ、おれは佐保典庵といふ、鎌倉の御典醫だ。

傳吉　たとへ、仙人掌でも心太でも、おくまを遣る事は成りませぬ。

武兵　此方はどこへ遣るも同じ事。そんなら五十兩の金はあるか。

傳吉　どうして、駕籠舁き風情。いま爰に

三人　無ければおくまは此方へ身請け。

ト立ちかゝる。

傳吉　モシ、マア待つて下さりませ。

三人　エヽ、面倒な。何をするのだ。

ト三人、奥へ行きかけるを、傳吉、支へるはずみ、懐より一巻を落す。此うち與七出かゝり居て、ツカ〳〵と寄り、一巻を取上げ、さてはトこなし。傳吉心附き、引ツたくり、懐中する。

傳吉　たとへどのやうに云はつしやりましても、おくまに外の男を持たせては、どうも私しが濟みませぬ。

武兵　そりやア何を云ふのだ。客人の方へ行けば、女も出世といふものだ。

學山　それを爰で兎やかう云ふは

三人　どうも合點がゆかねえ。

傳吉　成る程、左様仰しやりまするは、御尤もでござりまする。何を隠しませう、あのおくまは、私しが遁がれぬ者。あのやうに致して居りましても、歴とした亭主がござります。しかも、子までなしたる仲なれど、譯あつて、離れ〳〵の親子三人。年長けての勤め奉公も、云ふに云はれぬ浮世の義理。末々は、元の夫婦に致しませねば、どうも私しが濟みませぬ。それゆゑ外の男は持たせられませぬ。

金八　兄になつて判を捺すも古いやつだが

武兵　おくまは貴様の女房か。

傳吉　どう致しまして、左様な事ではござりませぬ。
學山　そんならそれにして、聞き届けてやらうが、親方の方へ、立て金の五十兩は。
傳吉　サ、それは。
學山　無けりやァ理詰めで此方へ身請け。
傳吉　アヽモシ、それでは。
二人　そんなら金か。
傳吉　サア
二人　身請けをさすか。
傳吉　サア
四人　サア〳〵〳〵
傳吉　切端つまつたこの場の仕儀。何としたらよからうなア。
　　ト思ひ入れ。與七、始終窺ひ居て
與七　オイ、若いの、ちよつと來さつせえ。
傳吉　ハイ、何の御用で

與七　外の事でもねえが、先刻から聞いて居れば、何やら難儀の樣子。金で濟む事なら、埒を明けるがようござる。

ト下手へ來て、こなし。

傳吉　サア、さう思へど、大枚五十兩といふ金が無ければ

與七　濟まぬと云はつしやるか。

傳吉　左樣でござります。

與七　その金、わしが貸してやりませう。

傳吉　エ、そんならお前が

與七　貸してはやらうが、その代り、五十兩の抵當が無ければ。

傳吉　借りたいは山々なれど、五十兩の抵當と云つては

與七　有る／＼。貴樣の懷にある今の卷物、それを屋敷方へ賣れば、百兩や二百兩にはなる代物。それをわしに預けたなら

傳吉　お貸しなされて下さりまするか。

與七　道具商賣のわしゆゑ、買出しに持つて來た金が、爰に五十兩、これを貴樣に貸してやりませう。

傳吉　左様なら、この卷物は、大金になる物でござりまするか。私しはお經かと存じました。これもおくまの身代金、左様ならこれをお預け申して

ト渡す。

傳吉　有り難うござります。

與七　ソレ、五十兩、改めて受取らつせえ。

ト金と卷物を取り交し。傳吉、元の所へ來て

サア、釜鳴屋の御亭主。ちよつとそれへ出てもらはうかい。

三人　なんだ、大層な事を云ひ出した。

武兵　おれに用とは、なんだ。

傳吉　外でもない、おくまが立て金の五十兩、改めて受取らつせえ。

ト金を出す。

武兵　ヤア、こりや正眞の小判で五十兩。

三人　どうして出來た。

傳吉　そこが錢金は沔き物。五十や百の目腐れ金に手づかへるやうな、傳吉でもないのサ。

學山　これは恐れ入つたものだ。
金八　成る程、傳吉どのは働き者だ。
傳吉　なにサお前、この位な事は何でもないのサ。
武兵　これで相談も極まつたといふもの。
金八　只お氣の毒なはお醫者様。
學山　仕合せしたは此方の御亭主。
與七　抛出し物で道具屋も
武兵　まんまと首尾よく
金八　大金儲け。
學山　祝ひに一つ
四人　ヨイ〳〵〳〵。
ト手をしめ
ドリヤ、一杯やりませう。
ト流行り唄になり、與七は件の一卷を持ち向うへ、學山、金八、武兵衞は奥へ入る。傳吉殘り、こな

しあつて

傳吉 ヤレ〳〵、嬉しや。これで姉御の苦患は助けてあげたが、先刻預かつた代物は、どういふ大事な品やら。あれを此方へ取戻すと、云うても大枚五十兩。また苦勞が出來たわえ。

ト流行り唄になり、傳吉、思案のこなし。この仕組みよろしく、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面、安見世の襖、左右腰障子、よき所へ麁末なる蒲團を敷き、酒肴取散らし、床の上に新五左衛門、手酌にて酒を飮んでゐる。下の方、二階の上がり口。すべて奥座敷の體。椀久の唄にて道具納まる。

新五 隣座敷で大分洒落をる。あの唄は椀久とやら。自體我れらは都の生れ。此方は西國の生れ。色に一向そやされぬ。いま〳〵しい。あの女郎は何を致して居る。誰ぞ來いよ〳〵。

ト手を叩く。奥より黑次出て來り

黑次 なんでありますえ。

新五 身共が相方のおくまとやらを、早く連れて參れ。

黑次 いま連れて來ます。その代り、大森細工の玩具を買つておくんなさいまし。

新五　オヽ、合點ぢや〳〵。早く呼んで來い。

黑次　アイ〳〵。おくまさんえ〳〵。

トこれにておくま、引違へて出て來り

くま　モシ、堪忍して下さいまし。いろ〳〵取込んだ事があつて……さうして、わたしをお呼びなされたは、何の御用。

新五　客が女郎に何の用があらう。サア、此方へ寄つてしつぽりと。

くや　イエ〳〵、わたしは男を斷つて居ります。

新五　ナニ、女郎が男を斷つてゐる。怪しからぬ事を申す。然らば身共が願ほどきを

トしなだれる。おくま、振りほどいて

くま　モシ、お武家樣、お嗜みなされませ。侍ひが色に耽り、身を亡ぼしたる事、唐土にては周の幽王また殷の國王、妲妃が爲に國を傾ける。我が朝にても名將勇士、國家を傾けしためし少なからず。されば古語にも、傾城傾國と申すではござりませぬか。

新五　ムウ、成る程。イヤ、その義堅い事を云ふ所が一しほ。こりやモウどうも

トしなだれる。

くま　モシ、そりや御無體。お放しなされませ。

ト逃げるおくまを追ひ廻す。奥より傳吉出て來り、この體を見て、新五左衛門を突きのけ、おくまを

圍ひ、眞中へ出る。新五左衛門見て

新五　ヤ、其方は。

傳吉　お侍ひ樣、憚りながら此おくまは、お前樣の自由にはなりますまい。

くま　ほんに好い所へ

新五　ヤイ〳〵〳〵、見れば素町人め、案内もなく臑を踏み込む慮外者。この寢所は身が城廓。麁相が

あると

傳吉　免さぬと云はつしやるか。そりやア此方から云ふ事でござる。

新五　そりや又なぜ。

傳吉　ハテ、此おくまは、身請けが濟んだからは、お侍ひ樣、必ず手出しはなりませぬ。

くま　ナニ、わたしが身請けが濟んだとはえ。

傳吉　親方へ五十兩の立て金して、さらりと濟んだ今日の身請け。

くま　その大枚の五十兩、どうしてそれを

傳吉　それには、いろ〳〵譯のある事。何かは後で話しませう。

新五　たとへ身請けしようが、初會に上がつた身共、そんな事に頓着はない。是非とも今夜は身共の物ぢやぞ。

傳吉　イヤ、その女には主がござる。

新五　なんと。

傳吉　しかも歷とした亭主がある。

新五　して、その亭主は、いづくの誰れだ。

傳吉　アイ、小鬢ながら、わしでござります。

新五　ヤア。

くま　アコレ、滅多な事を。

傳吉　ハテ、亭主では相談が出來ぬゆゑ、兄の判をついたこの女、洗つて見ればわしが女房。それを自由にすると云へば、こなたは間男、それ承知か。

新五　ヤア。

傳吉　これからこなたの首を取らうか。

新五　アヽ、コレ〳〵、待つてくれ〳〵。女郎買ひに來て、首を取られてたまるものか。君子は危ふきに近寄らず。身共は歸るぞ〳〵。若い者、預けた大小を持て〳〵。

權七　ハイ〳〵、畏まりました。

ト奥より大小を持つて出て來り

あなた、もうお歸りでござりまするか。まだよろしうござります。

新五　イヤ〳〵、あのおくま、身共を振りつけ、ぴんしやん致す。その筈、あの男は、以前は兄と申したれど、誠はくまが亭主との事。それでは我れらへ靡かぬ筈。それゆゑ、歸るぞ〳〵。

權七　フム、そんなら兄と云つた傳吉どのは、おくまさんの亭主であつたか。道理こそ、客を惡しくすると思つた。

新五　サア、歸るぞ〳〵。

權七　ハテマア、よろしうござります。左樣なら、外の子供衆をお見立替へなされまし。

新五　イカサマ、それもさうだ。ハテサテ、女は慾を知らぬ。身共が女房になれば、この度安達家にて神妙劍の一巻を所持する者を尋ね出さば、御褒美との事。また持ち主は、五百石にてお取立て。身共もその品を尋ね出さば、忽ち御加增。その時は、おくまは身が奥方。どうだ〳〵。

ト おくまにしなだれ寄る。この以前より太平、出かゝり居て、新五左衛門のせりふを聞いて、思ひ入れ。

くま　有り難う存じますが、どうもその事ばかりは

新五　ならぬと云ふほど思ひが増すわえ。

ト 寄るを傳吉隔てゝ、

傳吉　主ある女を、聞分けぬ二本棒め。

新五　ナニ、二本棒とは、うぬの頬桁を

ト 權七の持つたる刀を取つて立ちかゝるを、權七何心なく差添を置き、新五左衛門をなだめる。傳吉、恟りして、おくまの後へ隱れる。

傳吉　アヽ、御免なされまし〳〵。

新五　うぬ、それへ直れ。眞二つに

權七　マアヽ、御料簡なされまし〳〵。

ト 新五左衛門をなだめながら、兩人奥へ入る。この時、太平、ツカ〳〵と出て來り

太平　今の侍ひが申すを聞けば、この身の願ひの時節到來。預け置いたる一巻を、どうぞ身共へ。

くま　畏まりましたが、一巻をお渡し申す時は、あなた様には又ぞろ國遠。

太平　ヤ。

くま　サ、それぢやによつて一巻は、お心なう若旦那。

傳吉　モシ、姉貴、このお方を、若旦那と云はつしやるは

くま　其方にもかね〴〵話した、古主尾花の御惣領、家出なされた吉三郎さま。

傳吉　すりや、お噂ありしお前の御主人。お顔は知らねど、わしが爲にもお主筋。

太平　いかにも吉三郎と申す者。神妙劍の一巻を以て、いづれへなりと仕官にありつき、殿へ願うて敵討と、思ふに甲斐なき病氣の某。一巻は其方に預け置き、弟に手渡しなし、親の敵を討ちおほせその上にて鎌倉へ歸參なし、父の家名を引起せよと、傳言頼む。我れは草葉の蔭より……南無阿彌陀佛。

ト腹切らうとする。おくま、あわてゝ留める。傳吉、刃を見て慄へる。

傳吉　アヽ、光る脇差。南無阿彌陀佛々々々々々々。

くま　モシ、若旦那、こりや何ゆゑに御生害。

太平　何ゆゑとは、情ない我が身の上。諸國遍歴なす折柄、島川太平が餘類の者か、某を暗討ちにせん

と切りつけて、この如くこの腕の疵、破傷風の病となり、日夜の苦しみ大方ならず。されどもこの疵を癒やさんには、辰の年月日時揃うた、男子の生血を以て、この藥に混じ合せ、服する時は忽ち全快との事。藥はあれど、年度揃ひし血汐無ければ、なか〳〵本復思ひもよらず。生き長らへて腰拔け武士と云はれんも殘念。それぢやによつて、いつその事に。

　　トまた死なうとする。おくま留める。

くま　モシ、必ずともに、お急きなされますな。

傳吉　私しは眩暈病み、光る脇差は、どうぞ納めて下さりませ。

くま　若旦那さま、死は一旦にして易しとやら

太平　生は得がたきもの。それぢやによつて

くま　モシ、旦那様、あなたのお望み、叶へませう。

太平　ヤ、なんと。

くま　モシ。

　　ト囁く。太平、呑み込み、傳吉の方を見て

太平　そんなら彼れは

くま　ア、モシ……サア、御本復の上は、いづれへなりと御身を寄せ、時節を待つて御本望を

太平　首尾よく逹するそれまでは、活計をしのぐ右の一卷。

くま　イカサマ、それも御尤も。然らばあなたへ……コレ弟、最前預けし卷物を

傳吉　エヽ……あの卷物は

くま　いま聞く通りの譯ゆゑ、早う戻して

傳吉　サア、あの卷物は

くま　どうぞしやつたか。

傳吉　先刻、買ひ取るといふ人があつたゆゑ、賣つてしまひました。

兩人　ヤア〳〵〳〵。

太平　無ければならぬ大切な品。して、何者の手へ渡した。

傳吉　サア、どこの人やら、道具屋らしい、知らぬ人に。

兩人　エヽヽヽ。

ト悧り。太平、傳吉を引附け

太平　いかに心なき町人なればとて、折角手に入つたあの一卷……イヤサ、あの一卷なき時は、たとへ

本望達するとも、本地へ歸參は思ひもよらず。さすればおのれは家の仇。ア丶、どうしてくれう

ト有りあふ品にて傳吉を打据ゑる。

傳吉　サ丶、御尤もだ。さりながら、其やうな大事な物とは知らず、ツイうつかり……御免なされませ
御免なされませ。

太平　其方とても麁忽千萬。其方に預け置いたを、何ゆゑあつてこの者へ

くま　預けし仔細は私しも、多くの人の立入る中、過ちあつては如何と存じ、他人にあらぬ弟ゆゑ、暫しの間と渡せしが、思ひの外のこの難儀。御立腹は御尤も。とくと詮議いたして差上げませう。

太平　何ゆゑ大事の品を人手に渡し、金子を取つた。それ吐かせ。
暫しが間、お待ちなされて下さりませ……コレ、弟。

傳吉　サア、その金は。

太平　但し私慾に迷つたか。

傳吉　イエ／＼、左樣な事ではござりませぬ。これには段々譯のある事。

くま　そんなら早うその譯を

傳吉　姉貴、先刻話した、お前の身代。

兩人　何と申す。

傳吉　お前も以前の御亭主に、子までなしたる仲と聞き、どういふ事で生別れ。その御亭主も今では、出世してゐるとの事。その後お前はお主の若旦那が、敵討出立の、路用の爲に今の身の上。以前の亭主と縁は切れても、身を穢しては貞女とやらが立たぬといふお前を、いかに年季の內なればとて、外へやつて男を持たすと、親方の無得心。それが氣の毒ゆゑ、先刻の巻物を、買ひ手のあるを幸ひと、金につばめて親方への立て金。それもお前の苦界を助けて進ぜたさ。わしも悪い心でした事ではござらぬ。どうぞ堪忍して下さりませ。

くま　すりや、わしを思つて、親方さんへの立て金に

太平　大切なる一巻、人手に渡さばこの身は埋れ木。

くま　お主の爲に勤め奉公、わしが苦界は元より覺悟。この上は親方さんへ願うて、今の立て金取戻し
それで又ぞろ一巻を

太平　我が手に入れる手段が肝要。

くま　ちつとも早く親方さんへ

傳吉　話したとても、取り得ぬ時は

太平　汝が命、年度の生血。

ト拔きかける。おくま押へて

くま　モシ、兩川ともに私しに

傳吉　エ。

くま　サ、お任せなされて下さりませ。

ト唄になり、三人こなし。この仕組みよろしく、道具廻る。

本舞臺、正面杉戸、左右腰障子の附け屋體。爰に丈八、學山、文藏、お春、おやま、おいの、おしか出羽長、京助、大鼓持ちにて、三味線箱を置き、酒肴を取散らし、奥二階の體。吉原雀の唄にて道具納まる。

いの　サア／＼、お杯を流行らせませうぢやござりませぬか。

丈八　飲めや唄へや一寸先は闇雲に、築地の先生、一つ飲み給へ／＼。

學山　これは有り難い。犬も步けば棒に當るとはこの事だ。時に、岡村のお春ぼう、先刻の穴子はどうだ。

はる　ハイ。併し、今日の穴子は、少々むづかしうござります。

出羽　むづかしい〳〵。エヘン、爰に穴子の少々といふ者あり。

京助　ヤアハア、ボン〳〵。

文藏　エヽ、何を解らねえ事を。

やま　モシエ、出羽長さん、いつもの木琴の唄をおやりな。

黒次　アイ、お誂への蟹が來ました。

　　　ト丼へ蟹を入れ、持つてくる。

しか　オヤ、氣の利いた物を持つて來た。

いの　サア、おしかさん、わたしは蟹は手から先へ食ふワ。

出羽　かにて手くだとわしや食ひながら

文藏　テンツテン〳〵ツン。

　　　ト丼を叩く。

皆々　イヤ、音羽屋。

文八　カウ、それはさうと、あのお杉ぼうは、どうしたらう。

やま　お杉さんは今、癪が痛いとて

學山　オイ、相方の癪の癒るまで、もつと藝者を呼んで騒ぐがいゝ。

はる　ほんに、藝者と云へば、先刻の奴さんは、どうでござりませう。

皆々　成る程、これは好い思ひ附きだ。

學山　オイ、若い衆、その奴を呼んで來て下せえ。

權七　畏まりました。オイ〳〵、奴さん、來なせえ〳〵。

　　ト合ひ方になり、友平、以前の形にて出て來り

友平　これは〳〵、どなた樣も、眞平お免し下さりませ。

女皆　ようござんしたな。

學山　幸ひ持ち合せた。一杯飲まッせえ。

丈八　これサ〳〵、其奴に杯をやられるものか。御報謝酒を飲ませるのはいゝが、なんぞ入れ物があるか。

友平　ヘイ、左樣な物は

丈八　無いといふなら飲ませぬばかり。薄穢ねえ、二階へ上げるも此方の情。サ、約束通り槍踊りを

友平　どう致しまして、此やうなお座敷で

學山　ならぬと云ふなら、薄穢ねえ、爰へ置く事はならねえ。早く歸れ〳〵。

友平　イヤモウ、私しが好んで參つた譯でもなし。歸れとならば、ドリヤお暇いたしませう。

丈八　コレ〳〵、待たつせえ。斯う見たところが、貴樣も腹からの物貰ひとも見えぬ。折角來て、只歸すも氣の毒。女郎の一人も呼んでやるから、一杯飲んで歸るがいゝ。

友平　有り難うござりますが、どう致しまして我れ〳〵風情が

丈八　ハテ、此方で買つてやるから、案じねえがいゝ。サア〳〵、一杯飲むがいゝ。

友平　イヤモ、男は當つて碎けろとやら。其やうに仰しやつて下さる事なら、一つ下さりませう。

女皆　ほんに、それがようござりませう。

はる　お酌はわたしが……奴さん、一つおあがり。

丈八　そんなら奴どの、一つ獻さう。

權七　杯をお獻しなさるは、どうやら穢ない

丈八　エヽ、大事ない〳〵。萬事はおれが呑み込んでゐる……この人も腹からの物貰ひではあるまい。落ちれば同じ谷川の水とやら。ナウ、奴どの。

友平　左樣でござります。私しも親兄弟は、歷として居りましたれど、久しう逢ひませぬが、この身になつて、別れ〳〵に遍歷いたすも、何卒敵を……イヤサ、堅きお主に仕へました者なれど、身持ちが惡さに今の成行き。お話し申すも、面目がござりませぬ。

丈八　いづれ若い身の上にはある習ひ。そんならこなたも色ゆゑか。

友平　どう致して、私しのやうな者が

學山　そんなら酒で身を賣つたか。

友平　マア、其やうなものでござります。

丈八　幸ひ持ち合せたこの杯。サ、一つ飲みやれ。

ト杯を足に挾み、友平の目先へスット出す。

友平　有り難うござります。

ト取らうとして

モシ、旦那樣、あなたは大分御酒が廻つたと見えます。こりや御座興でござりませう。

丈八　イヽヤ、座興でない。

友平　そんならなんで臑にかけ

丈八　杯をくれるが、物貰ひには相應。有り難えと三拜して
文藏　杯を戴き、なみ〳〵ついで喰やァがれ。
友平　いかに落ちぶれたればとて、あまりと云へば
丈八　なんだ〳〵。その面はなんだ。うぬを爰に引出して
學山　酒の肴に弄りもの。
敵皆　こりやァ好い慰みだ。ハヽヽヽヽ。
友平　チエヽ、さういふ事とは露知らず、多くの人の入込むゆゑ、もしや尋ぬる手がゝりにもと、身をへり下り來て見れば、思ひがけないこの場の仕儀。願ひあるこの身ゆゑ、じつと辛抱してゐればあまりの振舞ひ。
學山　身に願ひがあるとは、足を洗ふ元手を拵らへる氣か。
丈八　但しは二階をへちまつて、枕探しをする心か。
友平　アヽイヤ左樣な
權七　さうでなくば、折角報謝に下さる杯。
文藏　なんで素直に受けねえのだ。

友平　それぢやと申して
學山　枕探しか。
友平　サア、それは。
丈八　杯受けるか。
友平　サア
皆々　サア／＼／＼。

トこの時、奥よりお杉、酔ひたる思ひ入れにて、ツカ／＼と出て、件の杯を取上げ

すぎ　イヤ、このお杯は主に代つて、わたしが貰ひませうわいなア。
はる　ヤア、お前は
女皆　お杉さん。
丈八　そんなら奴に成り代り、この杯を
すぎ　アイ、小髯ながら、この奴さんは、わたしが色でござんすわいなア。
皆々　ヤア。
すぎ　最前より聞いてゐれば、大事の男を大勢よつて、何のかのと憎て口。憚りながら、主に構つて下





さんすな。

學山　ヤア、思ひがけねえ横合ひから。ハテ、人といふものは知れぬものだ。

すぎ　もう斯うなつたら隱すに及ばぬ。疾から云ひ約束したわたしの色。ナア、申し。

友平　いかにも、二世も三世も變るまいといふ深い仲。面目次第もござりませぬ。

皆々　ヤア／＼／＼。

友平　身にも應ぜぬ物貰ひが……御推量なされて下さりませ。

丈八　待て／＼。どうも合點がゆかねえ。おぬしも釜鳴屋の鐵灸お杉、この一文奴と色事といふは呑み込めぬ。それには何ぞきつとした

すぎ　證據に立てる心中は

ト友平の脇差を抜き、指を切らうとする。

友平　アヽ、コリヤ、滅多な事を。

ト支へるを振り切り、指をポンと切る。

皆々　これは。

すぎ　二世と變らぬ男へ心中。サ、これ取つて下さんせ。

ト渡す。

友平　オヽ、心底見えた。しつかりと受取つた。

ト件の指を敵役にひけらかし、思ひ入れ。

丈八　ハテ、物好きもあつたもの。そんならいよ〳〵、奴とお杉は

すぎ　斯うした深い仲の爲に、丈八さん、お前はどうも否でござんす。

ト丈八、寄らうとするを、振り放し、杯を打ちつけて

丈八　こりやあんまり。

あのマア好かぬ顔わいなア。

ト寄らうとするを、友平、お杉を引廻し

友平　女房ども、もつと此方へ寄つてゐやれ。

すぎ　斯うかいなア。

ト寄り添ふ。

丈八　エヽ、氣が揉める。いま〳〵しい。

すぎ　ほんに可愛い

はる　ドレ、お閉帳に致しませう。

ト屏風を引廻す。これにて丈八、立上がり、目を廻して倒れる。

皆々　ヤア、丈八さんが目を廻した。

學山　こいつは大變。奥へ連れて行つて、灸でもするゑるがいゝ。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト皆々立ちかゝり、丈八を介抱して、捨ぜりふにて奥へ入る。あと合ひ方になり、屏風を開き

友平　さてハヤ、お前樣、何からお禮を申さうやら、有り難うございります。私しも身に願ひあつて、尋ねるものがござりますゆゑ、斯樣な人立ち多い所へ參り合せ、最前のやうに弄り物になり、口惜しうござりまするが、ヂッと蟄して居りますものを、恥面をかゝせられ、どうしてくれうと思ふ所へ、お前樣がござつて、恥を雪いて下され、此やうな嬉しい事はござりませぬ。どういふ譯で私しを

すぎ　サア、毎日お前が門へお出での度、どうぞと思へど折が惡さに、云ひかねて居た念が届いて、側へ寄つた嬉しさに、心中に切つたこの小指。

友平　勿體ない、どうしてマア。お前は歴としたお女郎樣、わしは物貰ひ。ほんまに指を切らつしやる

筈もなし、さぞ跡が痛みませう。何ぞ藥でも、と云うたところが爰には無し

すぎ　イエ／＼、必ず案じて下さりますな。お前ゆゑなら、どうなつたとて、大事ござんせぬ。

友平　これはしたり、どうして、見るかげもないわしへ、そりやア御冗談だ。まづ一旦わしが顔を、立てゝ下さつたこの指、お前様へお返し申します。外の男へやつて、喜ばすがようござります。ハイ、お大事の物を、有り難うござります。

ト以前の指を返す。

すぎ　そんならどうでも、この指は

友平　十分顔を立てゝ下された、この御恩は忘れませぬ。左樣なら私しは

ト立ちかゝる。

すぎ　モシ、わたしやこれ程に思うてゐるものを、なんで素氣なう

友平　エヽ、そんなら最前、時の間に合ひと思ひの外、ほんまにわしへ心中か。

すぎ　サア、嘘に此やうな事がならうかいなア。

友平　ムウ。その志しは忝いが、わしは大切な願ひのある身。女に心をほだされては

すぎ　願ひある身と云はしやんすは、そんならお前は、お主の敵を、

友平　ア、コレ、滅多な事を。
すぎ　鬼の女房に鬼神とやら、術によつては、わたしも共々
友平　ムウ、忝いお前の深切。誠明石の浦なれば
すぎ　人には見えぬ、互ひの胸を
友平　云うたり聞いたり、あの小座敷で
すぎ　そんなら必ず
友平　お傾城様。
すぎ　エ。
友平　ではない、女房ども。
すぎ　こちの人。
　　　ト寄りそふ。
友平　ハテ、味に搦んだ
　　　ト思ひ入れ。唄になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、元の座敷に戻る。角行燈をともし、最前新五左衛門の置いたる脇差あり。傳吉、おくま、思案のこなし。時の鐘、變つた合ひ方にて道具納まる。

傳吉　モシ、姉貴、あのやうに割ッつ口說いつ云ひましても、強情な親方、所詮金は返してはくれやすまい。こりやどうしたらようござりませう。

くま　大事な一卷、わしを思うての事の爲に、人手に渡し、あの品が無い時は、御主人樣の御難儀と云うて取戻すには金は戻らず、殊には先は知れず。これといふも、大事な品を、其方に預けたこの姉が、一生の誤まり。こりや何としたらよからうなア。

傳吉　思案も工風も、賴みの綱が切れ果てた。姉貴、どうしたらようござらう。

くま　どうと云うて、わしが料簡にも及ばぬが、この上は是非がない。がんじがらみの今宵の手詰め。お主の難儀にや替へられぬ。不便ながらも

傳吉　エ。

くま　鬼になつて、オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れ。時の鐘、誂らへの合ひ方になり、おくまあたり見廻し、敷いてある蒲團を裏返し、紙附きの方を表へ出し、よき所へ敷きかへ、傳吉に、あの上へ座れ、と顏で敎へる。傳吉、合點のゆかぬ

こなしにて、何心なく蒲團の上へ座る。此うちおくま、新五左衞門が置いて行つたる脇差を、有りあふ八寸へ載せ、傳吉が前へ置く。これにて傳吉、合點のゆかぬこなし。

傳吉　こりやア先刻の侍ひが、忘れて行つた脇差。どうやら光りさうな、氣味の惡い。わしが前へ置いて、どうするのでござる。

くま　弟、その脇差で切腹しや。

傳吉　エ……モシ、姉貴、わしがなんで腹切るのでござる。

ト慄へてこなし。

くま　成る程、其方が驚き尤も至極。元わしは、尾花六郎右衞門さま、陸奥にお出でなさる時より、三代相恩の御主人。若氣の誤まりとはいひながら、若黨の才三郎といふ人と、この姉は密通なして、既に命にも及ぶべきを、御主人樣のお情にて、何氣なうお暇下され、その御主人の義理を思ひ、才三どのと飽かぬ離別。產み落したは女の子、里親へ遣はしたる、その親達も行くへ知れず。わしがいたづらもお構ひなく、其方の兄の友平も、尾花のお家に御奉公。この度親旦那の不慮の御最期。御次男の染五郎さま、敵討の出立に、路用乏しく、わしが身を賣りこの苦界。世間の人は心なく、男を持てよ嫁けよと、云はるゝ度にこの身の辛さ。それゆゑにこそ、末の弟の其方をば

不釣合ひなる亭主と、云はれる度にこの身の辛さ。これとても以前の夫へ立てる義理。今日思はずも神妙劍、御所持は正しく主人の惣領、お足をとめる其ために、預かり置きし一卷を、其方に預けしは姉が誤まり。右の一卷賣り代なし、わしが苦患を助けうと、思ふが却つて不忠の上塗り、サそれぢやによつて死んでたも。殊に其方は辰の年度揃ひし生れ、その生血で吉三郎さまの、金瘡御全快ある時は、それが其方の身の云ひ譯。わしは殘つて寶の詮議。さすれば兄友平が武士も立ち、親へ孝、お主へ忠義。玆の道理を聞分けて、コレ弟、潔う死んでたもいなう。

傳吉　成る程、お前の云はつしやる事、いろ／＼聞分けました。さういふ譯なら、わしは死なねばならぬけれど、どうしてマア、その光る脇差で……モシ、外に仕樣はございませぬかえ。

くま　オヽ、道理ぢや／＼。刃物を見るとその病。いつそわしが一思ひに、とはいへ、いかに忠義なればとて、これが手にかけられやうぞ……イヤサ、わが身も武士の胤ではないか。こゝな未練者めが。

傳吉　成る程なア。今でこそ此やうな身の上なれど、以前はわしも侍ひの子。見事に死んで見せませうさりながら、久しく逢はぬ兄の友平どのへ、お前逢うたら、わしは忠義ゆゑ死んだと云うて、褒めてもらうて下さりませ。

くま　オヽ、よう云うた。わが身が忠義ゆゑ、死んだ事を、友平が聞きやつたら、さぞ羨やむであらう。わしでさへ嬉しいもの、忠義一圖の友平が、喜ばいでなんとせうぞいなう。

ト傳吉に涙を隱し、思ひ入れ。

傳吉　そんならわしは、もう死にます。モシ、姉御、跡のとひ弔ひを賴みます。

くま　氣遣ひしやるな、跡ねんごろに……南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト額を外けて思ひ入れ。傳吉、肌を脱ぎ、脇差を怖々拔き、手拭に卷き、突き立てようとして、愕りして前へ置く。おくま、この體を見て、目顏で思ひ入れ。傳吉、また取上げ、突きにかゝり、突かれぬこなしよろしくあつて、トヾ脇差を投げ出し

傳吉　こりやモウどうもいけませぬ。

ト逃げ出すを、おくま、うしろへ留めて

くま　コレ、聞分けのない弟、その愚ゆゑ今日の難儀。死んで忠義を立てゝくれ。コレ、拜む〱、拜むわいなう。

傳吉　わしも拜む。助けて下さい〱。

くま　得心なければ是非に及ばぬ。不便ながらも、姉が手にかけ、お主へ忠義。

傳吉 モシ、どうぞ命を
くま 今さら未練な。
　　ト捕へようとする。傳吉、逃げ廻る。この立廻りのはずみ、思はず行燈を蹴返す。時の鐘、暗き思ひ入れ。この時、奥より太平、窺ひ出て、立廻りの中へ入り、傳吉を一かせ切る。これにて「アッ」と苦しみ、思ひ入れ。おくま、我が手にかけしと心得
　弟、免してくれ。南無阿彌陀佛。
　　ト切りつける。立廻りのうち、奥より新五左衛門、行燈を提げ、窺ひ出て、この體を見て
新五 ヤア、おくまは亭主を殺した。亭主殺しだ〳〵。
くま アヽコレ。
　　ト制するはずみ、新五左衛門に薄手を負はす。
新五 ワア、人殺し〳〵。
　　ト云ひながら、二階の上がり口へ逃げて入る。この時おくま、太平、顔見合せ
くま ヤ、あなたは。
太平 そんならいよ〳〵

ト傳吉を見て思ひ入れ。この時、權七出て

權七　女め、うぬを

ト かゝるを振り切る。太平、權七を引附ける。この途端に以前の狀を落す。おくま、こなしあつて

くま　一卷失ふ申し譯、姉が手にかけ、まツこの通り。年度揃ひし弟が血汐。

太平　出かしたおくま。この一藥へ調じ合せて

權七　何がなんと。

ト かゝるを當てる。此うちおくま、有りあふ器を取つて

くま　イザ、お藥を。

太平　オヽ、心得た。

ト 右の血汐を器に受け、藥を入れて服む。此うち傳吉、手負ひのこなし。

傳吉　とても生きる事はなりませぬが、せめてお主の病を助ける

くま　オヽ、その良藥は、こなたの生血。

傳吉　お役に立ちましたか。

太平　今ぞ本復。

くま　大死ならぬ弟が忠義。

傳吉　嬉しやそれで心よう、あの世へ行きます。

くま　さはさりながら

太平　先刻の一卷。

くま　詮議はわたしが

　　ト この時、所々にて

大勢　人殺しだ〳〵。

　　ト 早拍子木を打つ。

太平　ヤヽ、あの聲は。

くま　大事の御身、必ずともに。

太平　萬事は重ねて

くま　この間に早う。

太平　心得た。

　　ト 階子の口へ行かうとする。下にて人音するゆゑ、上手の方へ走り入る。始終拍子木、アリヤ〳〵の

聲。おくま、ウロ〳〵する。此うち黒四天の捕り手四人、十手を振つて出て來り、おくまを見て

捕手　人殺しのおくま、捕つた。

トかゝるを、おくま、件の血刀を取つて切り拂ふ立廻り。ちよつとあつて、四人は奥へ逃げて入る。跡おくま、息の切れし思ひ入れ。あたりの銚子を取り、飲んで、思はず太平が落せし一通を取上げ

くま　「島川太平どの、海老名軍藏」。

ト此うち後へお杉友平、出かゝり居て

兩人　ヤヽ、その宛名は。

ト側へ寄る。おくま、捕り手と心得、ちよつと立廻つて、顔見合せ

友平　ヤ、姉者人か。

くま　其方は友平。

すぎ　そんなら お前は

トこの聲に傳吉、心附き

傳吉　ナニ、友平どのか。

ト立たうとして撞となる。

すぎ　ヤヽ、手負ひのお前は
友平　弟の傳吉。何ゆゑに、この體は。
傳吉　これもお主へ忠義の一つ。して又今の一通は。
くま　慥かに御主人吉三郎さま。
友平　ヤヽ、若旦那が、どうして爰へ。
くま　しかも一卷御所持の上、見覺えのある兩腰は、二つ銀杏の紋ちらし。
友平　して。その者の恰好は。
くま　肥り肉にて脊高く、二の腕かけて刀疵。
友平　ヤヽ、それぞ正しく島川太平。
三人　ヤ、なんと。
友平　合點ゆかぬは神妙劍を、どうして彼れが所持せしか。まつた帶せし二腰は、大旦那を殺害なした
　る折柄に、奪ひ取つたるその大小。
くま　エヽ、割り符の合ひし事ゆゑに、吉三郎さまと思うたは
すぎ　現在お主の敵と知らで

傳吉　年度の血汐をお役に立てんと、この身を捨てゝ金瘡のくま　惱みを助けん其ために
友平　弟が命を
皆々　ホヽホイ。
　　ト思ひ入れ。この時、後へ學山、權七、窺ひ出て
二人　人殺し、うぬを。
　　トかゝる。友平、お杉、二人を引敷く。爰へ以前の捕り手出て
捕手　おくま、捕つた。
　　ト立ちかゝる。おくま、フッと行燈を吹き消す。お杉は學山、友平は權七を見事に投げのける。傳吉がつくり落ち入る。双方よろしく、ひやうし
幕
（作者　鶴屋南北）

三幕目　湯島社内の場

役割——三吉おぢい土左衛門。水茶屋おたか實ハ腰元おさご。鷺の首太左衛門。道具屋與七。衣裳屋文藏。富岡屋廻し男、嘉助。八百久下女。おいち、手習ひ弟子、虎松。同、德藏。丁稚、三太。八百久後家、お竹。小間物屋娘、おせん。絲屋娘、おきぬ。八百久手代、丈八。富岡屋吉助。若黨、阿部丈助實ハ駕籠舁き彌作。八百屋娘、お七。

本舞臺、三間の間、向う餘程引下げて白壁。湯島天神宮の横手、これより少し離れて、廻り石の玉垣この内に石燈籠、狛犬。上の方、葭簀張りにて、よき所簾を掛け、長床几を並べて、坂の通り口の邊、水茶屋のかゝりよろしく、爰に仕出し三四人、遠眼鏡を見てゐる。おさご、やつし前垂れ、掛け茶屋女の拵らへにて、茶を運びゐる。辻打ち、鰐口の音にて幕明く。

仕出　ヤレ〳〵、今日は天氣がよくて、晴れてゐるせゐか、誠によく見える。面白い、サア〳〵、見さつしやい。

同　コレ〳〵、眼の下から向うまで、ゴチヤ〳〵、人の頭のやうな物が、一面に見えるは、こりやア

同　何だらう〳〵。

同　それ〳〵、見える段ではない。そして、北も南も、向うまで美しく赤くなつてゐるやうだ。

同　成る程、その通り、違ひない〳〵。

同　どこもかしこもギツチリ、人の頭のやうに見えるものは

同　見える物は、なんだ〳〵。

同　それ見やれ、矢ッ張り人様の頭だ。

皆々　ハヽヽヽヽ。

ト笑ふ。辻打ち、揚弓の音にて、向うより吉助、羽織着流しの形にて出て來り、跡より嘉助、やつし尻端折り、羽織を帯へ挟み、廻し男の拵らへにて、供をして出て來り、これに森田屋の頭巾をかぶり顔を隠したる非人、腰をかゞめ、手の内を乞ふ體にて、附いて出てくる。これより少し下がりて與七前幕の形にて附いて出てくる。舞臺へ來る時分、非人はウソ〳〵と上の方へ入る。與七、吉助を見て思ひ入れあつて

與七　モシ〳〵、富岡屋の親方ぢやアございませぬか。

ト嘉助見て

嘉助　オヽ、道具屋の與七さまではござりませぬか。
吉助　ヤレ〳〵、この間はお遠々しく、足まめで、儲け口でお忙がしいな。
與七　イエ、モシ、今日は爰に掛合ひ事がござりまして、これから直ぐに深川の本宅へ、わざ〳〵参るつもりでござりました。
吉助　オヽ、それは幸ひ。
　　ト云ひながら床几へかける。
さご　これは與七さん、ようお出でなされました。どなたも此方へおかけなされまし。
　　ト茶盆を差出す。
與七　アイ〳〵。コレ、おさごさん、お前の頼みの一件も、今日は荒まし取極めやせう。
さご　それは有り難うござります。是非々々お前さん、お頼み申しますわいな。
仕出　イヤ、わしは橋場の開帳へ廻つて行かにやァならねえ。
皆々　こりやァ姐さん、お世話でござりました。
さご　マア、御ゆるりとなされませ……左様なら
　　ト仕出しは茶代を置いて、花道と下座へ別れて入る。

吉助　モシ〳〵、與七さん、なんぞ好い掘出し物でもござりますか。
與七　なにサ、さうでもないが、わしもよんどころなく頼まれた事について、お前と御相談があるが、甚だ入組んだ筋合ひサ。
吉助　時に與七さん、その用向きは何ぢやな。
與七　イエサ、外の事でもござりませぬが、この茶屋のあの子の事でござりますが、それについては、お聞きなされ。いつぞや私しが、さる人から買ひうけた品がありますが、それをあの子が聞き出して、是非々々賣つてくれろとの事。さりながら、代金の事、當と云つても無い事ゆゑ、どうぞ藝者に出たいと、この間中からわしへ切の頼み。その入用の金高は、七十兩でござりますが、なんとお前、相談してやつては下さりますまいか。
吉助　そりやハヤ、外の事ではなし、お前の口入れの事なり、わしも有やうは奉公人を欲しいと思ふ所殊に見たところが、年恰好といひ、あれなら隨分相談して進ぜませうわい。ナウ、嘉助。
嘉助　左樣でござりまする、恰好といひ、面もよし、勤め盛りでござります。そんなら金高、七十兩でござりますかい。
與七　アイサ、いよ〳〵お前の方へ決着すれば、わしが方の代物は、直ぐに當人へ、その金高で賣り渡

す應對。尤も元金は、わしが五十兩で買つた代物を、ならうなら百兩にも仕やうと思つたが、云はゞ口の遠い代物。それゆゑ二十兩の利を附けて、あの子の方へ賣り拂ふつもりに掛合ひをしましたのサ。

トおさご、思ひ入れあつて吉助の側へ寄り

さご　これはあなた、お初にお目にかゝりましてござりまする。何か不束にはござりまするが、只今もお聞きなさる通り、是非入用の金子でござりますゆゑ、何かの事は、あの道具屋の與七さんに、お頼み申しましてござりまするが、どうぞ成りませうなら、あなた、よろしいやうに御相談なされて下さりませ。お頼み申しますわいな。

吉助　アイ〳〵、承知しました。何か又、詳しい事は、この與七さまへ掛合うて置かうてや。

さご　ハイ〳〵、よろしうお頼み申しますわいな。

嘉助　モシ〳〵、親方、爰でお取極めも出來ますまい。あの太夫元の傳五郎さまの、國衆の内でも借りませう。

吉助　オヽ、それがよからうか。コレ〳〵、ひよつと跡から、あの多十が來まいものでもない。なんと嘉助、こなた、爰にちつとの間待ち合してくれぬか。

嘉助　ハイ〳〵、畏まりました。左様いたしませう。

與七　モシ、富岡屋さん、なんと、一杯あがりませ。

吉助　イカサマ、相談ながら、マア、ござりませ。

さご　左様なら、お歸りにお寄りなされませ。與七さま、お頼み申しますぞえ。

與七　アイ〳〵、承知々々。

吉助　そんなら行てくるぞや。

ト流行り唄、大拍子になり、吉助先に與七、下座へ入る。矢張り、今の鳴り物にて、向うより花見の手習ひ子大勢、これに虎松、德藏も交り、他所行きの形、頭へ造り花の梅を差し、揃ひの手拭を襟へ卷き、藤倉草履にて出て來り、跡よりおせん、おきぬ、いづれも着流し、娘の形。お十、同じく頭へ造り花の梅を差し、出てくる。おいち、下女の形にて青傘をさしかけ、天神廻りの模様。餘程跡より土左衛門、老けたる拵らへ、屋敷の法被を引ッかけ、生醉ひの思ひ入れにて出てくる。文藏、衣裳屋にて、若い者、衣裳の葛籠を脊負ひ、附添ひ、この人數よろしく出て來り

土左　アヽ、こりやァ新造の揃ひだな。イヤア、綺麗々々。イヤ、瀧野屋ァ。畜生め。

トひよろ〳〵する。

これナ〳〵、何もそんなにおツかながる事はねえ。何かえ、今日は師匠様の花見だの。わつちも一緒に天神廻りを

ト花道のうち、此せりふを云ひながら附いてくる。女形皆々、怖がる思ひ入れ。お七、土左衞門と入れ替り、皆々足早に舞臺へ來る。おさご、お七を見て

さご　オヽ、こりやお七さん、早う支度が出來てぢやな。

ト お七、思ひ入れあつて

しち　おさごさん、おゆるしえ。

女皆　そりや來たぞえ。

ト皆々上の方の葭簀張りへ、バラ〳〵と片寄る。お七、下の床几へ腰をかける。おさご、思ひ入れあつて

さご　エヽ、なんぢや、お前方、恟りしたわいな。

せん　それぢやといふて、あの人が道々も、いろ〳〵な事云うてぢやわいな。

德藏　ありや大方お前方に、氣があるのだも知れない。おへねえ助平な奴だ。

虎松　ほんに、ありやァ狂人かも知れない。

きぬ　ありやァ狂人かいなう。をかしな形をして怖いわいなう。ほんにおッかないよ。今もわたしが側へ來たよ。

せん　そんな事をお云ひでないよ。いつそ酒の匂ひがしたから、ありやァ生酔ひだよ。

しち　これはしたり、おせんさん、お前までが同じやうに、默つて居やしやんせいなァ。

いち　左様でござりまする。もしひよつとした事でもござりますと、大抵迷惑な事ではござりませぬ。早う御別當樣へお出でなされませ。

しち　それがよいわいな。サア皆さん、來やしやんせ。

ト此うち土左衛門、ひよろ〳〵しながら舞臺へ來り、あたりを見廻し、よき所の床几へ腰をかける。この時女形皆々立たうとするを、土左衛門、ツカ〳〵と寄つて、上の方へ立ちふさがり、

土左　アイ〳〵、行きやす〳〵。爰まで送つて來たものを、行かねえでどうするものか。御別當樣へでもどこへでも、一緒に附いて行かにやァ男が立たねえ。サア、その姐さんは、おれが手を引いて行きやせう〳〵。

ト　お七の側へ寄らうとする。此うち文藏、土左衛門を支へて

文藏　これサ〳〵、どうしたものだ。みんな年のいかない女達だ。そんな事を云ふと怖がるわな。大人

氣ねえ、よしにさつしやいな。

土左　なぜ〳〵、女達ばかりで危ねえによつて、おれが連れて行つてやるのだ。それが、ド、ド、どうした。

文藏　ハテサテ、マア、いゝと云ふに。

トいろ〳〵なだめる。

嘉助　ハア、今日はこの天神樣に、席書があると聞いたが、その子供衆だな。次手にわしも席書を見て行かうかい。

土左　なんだ、席書だ。コレ、其方が席書なら、おらア又當て書といふものをするわい。コレ〳〵、姐さん達、お前方に敎へてあげやせう。

女皆　エヽ、なんの、其やうな事は知らぬわいなア。

トお七皆々の袖を引き、行かうといふ思ひ入れ。

土左　サア、それだから敎へてやらうといふのだ。マア、おれがする通りに

ト寄らうとするを、文藏とめて、

文藏　これはしたり、しつこい。もう好い加減にさつしやれな。

土左　なんだ〳〵、無性矢鱈におれをおッかじめるが、てめえ、この女の供か。
文藏　イヽヤ、供ぢやねえ。
土左　そんなら連れだといふのか。
文藏　イヽヤ、連れでもねえのサ。
土左　なんの事だ。そんなら彌次馬だな。おきやアがれ。ムウ、見りやア荷背負ひのやうな者を連れて居るが、ハヽア、糶り呉服だな。
文藏　これサ、おらアこの土地へ來る衣裳屋だよ。
土左　なんだ、衣裳屋だ。コレ、貴樣は衣裳屋か。そいつは面白い。おれもこの間は工面が惡くつて、こんな態だ。二三枚借りべいワ。コレ、なんぞ値打のある物をさらけ出して貸してやれ。
文藏　エヽ、イケ大層な横を云はしやんな。そんな事は流行らねえワ。馬鹿な面な。
土左　コレエヽ、貸されずば貸されねえと吐かしやアがれ、馬鹿な面とは、なんの事だえ。あんまり威張るなえ。腕づくて借りるぞ。さう思やアがれ。三吉土左衞門とはおれが事だワ。
ト土左衞門、鉢卷をして立ちかゝる。嘉助、この中へ入つて
嘉助　とんだ交ぜッ返しだ。コレ〳〵、外聞が惡いワ。料簡さつしやい〳〵。

土左　否だ〳〵。悪いと合點しねえぞ。うぬら、どうするか見やアがれ。
ト嘉助を突きのけ、文藏へ打つてかゝる。皆々捨ぜりふにて掛合ひになる。此うち辻打ちになり、向うよりお竹、八百屋の後家の拵らへにて、青傘をさし、跡より丈八、着附け羽織、小さき風呂敷包みを持つて出て來り、舞臺の方を見て
たけ　いかう人ごみゆゑ、何ぢややら間違ひが出來たさうなわいの。
丈八　左樣でござる。大方通りかゝりのごたつきでがなござりませう。氣をお附けなされませ。
ト云ひ〳〵、兩人舞臺へ來り
たけ　オヽ、アレ〳〵、娘のお七が居やるが、エヽ、危ないに、早う別當樣へ行きやればいゝ。
丈八　ほんにお七さん、コレ〳〵、怪我でもしてはなりませぬぞえ。それに下女のおいちどんも、まご
ついて居る樣子だが、もしやお七さんについての事ではないか。
たけ　アレ〳〵、丈八、とめやいの〳〵。
丈八　ハイ〳〵……これサ〳〵、爰は往來だ。マア、靜かにしなさい〳〵。
ト丈八お竹、ごたつきの中へ入りとめる。揚弓の音。
土左　イヽヤ、靜かにやアしねえ。おらア醉やアしねえぞ。否だ〳〵。

丈八　ハテサテ、其やうな事ばかり云つて解るものではない。マア、落ちついて、とつくりと譯を云はつしやい。

土左　なんだ、しつかり酒で鰯鮪。そんな物が食はれるものかえ。コレエヽ、譯をいつたら、高が斯うだ。あの娘におれが、一緒に行つてやらうと云ふを、彼奴等が兎や角と吐かすから

ト此うちお竹、土左衞門を、よく〳〵見て

たけ　ヤア、誰れかと思うたら、お前は土左衞門どのぢや。

土左　さういふのは、八百屋の後家御か。

丈八　ハア、この人は阿母さん、お前、お近附きの人でござりますかえ。

たけ　おいなう。コレ〳〵、さうしてあの娘お七を、どうしたと云はんすのぢや。

土左　ハア、そんならこなたの娘の、アノ評判のお七といふのは、この娘の事か。こいつは飛んだ話しだ。

ト お竹は文藏と嘉助に向ひ

たけ　マア〳〵、何ぢややら譯は知りませぬが、こりやわたしらが挨拶しませう。お前方も不承して下さりませ。

嘉助　なにサ、わたしは爰に居合した者ぢやが、女ばかりの事ゆゑ、見かねて裁人に入つたのサ。
文藏　わしも云ひたくはないが、あんまり横を云つて引ッ搦むからの事。お前方の挨拶なら、此方はどうでもようござります。
嘉助　それ〳〵、これ限りに濟みさへすりや、何も云ひ分はごんせぬ。
たけ　ハイ〳〵、それは御苦勞にござりまする。コレ〳〵、土左衛門さん、ぬし方もあの通りぢや。外聞の惡い、お前もちと嗜んだがよいわいの。

ト　お竹、土左衛門、下の方の床几へ腰をかける。

さご　これは八百屋の御内儀さん、今日はようお詣りなされました。
たけ　アイ〳〵、こりや何かと、いかいお世話になりました。
しち　嚊さん、お前、直に跡からござんすと思うたに、いかう隙がいつてぢやわいな。
せん　おばさんがござんせぬゆゑ、ナア、おきぬさん。
きぬ　それいな、わたしらばかりぢやと思うてナ、いろ〳〵な事云うて、怖うて〳〵ならなんだわいな。
いち　イエモウ、お知り人とは存じませず。私しはモウ、どう致さうかと、大抵心遣ひした事ぢやござ

りませぬわいな。

ト皆々よろしく入れ替つて床几にかける。おさご、丸盆へ茶碗を大分のせ持ち來り

さご　サア〳〵、どなたも、お茶一つおあがりなされませいな。

トかい〴〵しく差出す。

土左　そんならアノ爰へ、松竹梅といふ繪馬を上げた、お七といふのはあの娘か。成る程、美しい代物だ。

たけ　モシ、聞いて下さんせ。その繪馬は、この子が十一の年の書初めなれど、今度何やら願ひがあつて、書き直して上げたいと云ふゆゑ、幸ひ今日の席書、お宮の繪馬を下ろすつもりでござんすわいな。

さご　申し、お内儀さん、その繪馬の事は、この間もお七さんがさう云うてぢやゆゑ、下げさせて置きました。コレ〳〵、見なさんせ、この通りお預かり申して置きましたわいなア。

ト片脇より松竹梅と書きし古き繪馬を取り出す。お竹取つて

たけ　これ見やれ、まだ何ともないもせぬに、張り直すとは、ほんに費な事ではあるわいの。

丈八　左やうサ。美しう好う見事に出來たを、惜しいものでござります。

しち　それぢやというて、今に思へば、此やうな額を上げて置くは、恥かしうござんすゆゑ、どうぞ文字を書き直して、上げたうござんすわいなア。

丈八　ハア、それなれば、よもや今度は松竹梅ではあるまい。定めし外の文字であらう。モシ、お七さん、何といふ字でござりますえ。

しち　今度は願ひがあつて、只一字、「戀」といふ字を書いて上げるわいなア。

丈八　コレ〳〵、お七さん、お前、願ひがあると、アノ「戀」といふ字を書いて上げるえ。アノ「戀」といふ字を……ハテ、戀は思案のイヤ外でもあるまい。大方それも日頃から、この丈八が。イヤサ、丈八への戀といふ字、成る程、これは思ひつきでござります。

ト一人して嬉しき思ひ入れ。

土左　ウム、そんならアノ、この丈八とやらに戀といふ字か。ハテ、戀は思案の外だなア。

しち　なんのマア、誰れがアノ丈八と、

ト云はうとするを、お竹、ムツとして

たけ　イヤ、なんぼ思案の外でも、コレ丈八、おぬし、そりやあんまりであらうがの。コレ、氣の多いも程があるわいの。現在わしが見る前で、又お七も小娘の癖に、其やうな浮氣な文字は、モウモ

ウ、決して書かす事はなりませぬ。オヽ、この母が書かさぬわいなア。

ト腹立つて悋氣の思ひ入れ。

いちアヽ申し、おかみさん、そりやモウ丈八どのが、何と云はんせうが、お七さんに其やうな、みだらな事の無い事は、私しがよう存じて居りまする。折角日頃からのお願ひ通り、矢張りお七さんの仰しやる通りになされて遣はさるゝが、よろしうござりませうわいなア。

丈八それ〱、私しも成る程よい字だと思ふゆゑ、感心いたしてツイうか〱と、留めましたのでござりまする。必ず惡う思はずと、お七さんの詞を立て、その「戀」とやらいふ字を、お書かせなさるが、よからうと存じまする。

ト此うちお七、額の「松竹梅」を、友達の女手傳うて、大剝がしに剝がし、片脇へ置く。土左衛門、これを見て

土左アヽ、氣の早い、いつの間にかちよつくり額を剝がしたの。

ト「松竹梅」の剝がしを取つて

これ見たがいゝ。十一の書初めにしちやア、餘ツほど好く出來たものを、あんまり惜しいものだこりやアおれが貰つて置かうよ。

ト額の剝がした畳んで懐へ入れ、思ひ入れあつて

時に、お竹さん、幸ひこなたに折入つて、ちよつと話したい事があるが、アヽコレ、どうも爰では

トお竹、思ひ入れあつて

たけ　エヽ、久しいものだ。お前の用といふは、聞かいでも大概知れてある。大方また無心でござんせう。アヽ、困つたものぢや。

ト云ひながら、鏡袋より二分金を出して紙に包み

もう、誠にこれきりでござんす、重ねてからはお断り申しますぞえ。

ト差出す。土左衛門これを取り、思ひ入れあつて

土左　イヤ／＼、おれがこなたに用といふは、無心ぢやアねえ。ちつと内證で話しがあるが、他聞があつては云ひ悪い。それにしても、こりやア折角のお志しだ。有り難い。返されもしねえ。マア、小遣ひにありついたといふものだ。

ト搆はずに莨入れの中へ入れる。

丈八　ウム、噂に聞き及んだ程あつて、ハテ、如才のない代物だ。

ト此うち後へ、最前の頭巾をかむりし物貰ひ出かゝり、あちこち窺ひ居て、この時お竹が側へ置きし紙入れを浚ひ、一散に向うへ逃げて入る。

たけ　オヽ、わしが紙入れを持つて行つたわいなア。

丈八　ソレ、泥坊ぢや、泥坊々々。

ト矢張り揚弓の音、辻打ちの合ひ方にて、丈八うろたへ、跡追うて花道へ入る。

嘉助　イヤハヤ、晝中に呆れたものだ。こりや物騒だ、油斷はならぬわい。

文藏　油斷がならぬといへば、わしも芝居の衣裳を抱へて、うつかりしちやァ居られない。

土左　なんだ、彼奴は荒稼ぎか。誠に生馬の眼を拔きやァがつた。

ト呆れた思ひ入れ。

虎松　おせんさん、おいらは先へ行かうかい。

せん　待ちなさんせ、今に一緒に行くわいなァ。

きぬ　それぢやというて、この子達も待ち遠で。

しち　ほんに、もうお席書も始まつたでござんせう。そんなら母さん、わたしや皆さんと連れ立つて行くほどに、お前は跡からござんせいな。

たけ　オヽ、それがよい。そんならおいち、わがみ附いて行きやいの、
いち　ハイ〳〵、畏まりました。
さご　お席書が始まるなら、わたしも行つて見物したいものぢやわいな。
たけ　コレ〳〵、おさごさん、見世にはわたしが居る程に、行くなら早う行て來やんせ。
さご　ハイ〳〵そんなら、お頼み申しますぞえ。
嘉助　ドレ、おいらもちよつと覗いて見ようか。
しち　サア皆さん、行かうわいなア。

ト辻打ちになり、お七先に女形殘らず、これに子役とおいち、おさご、跡より文藏に、若い者、葛籠を脊負ひ、嘉助附いて下座の方へ入る。あと揚弓の音。お竹、土左衞門殘り、思ひ入れあつて

土左　コレ、お竹さん、どういふ話しといつて、外ぢやアねえ。以前こなたが育てゝくれた、甥のあの島川太平が事だが、あれが身の上について、手に入れたいは神妙劍といふ一卷。それさへあれば、今にも直ぐに五百石といふ知行取り。さうなつた日には、まづこなたには、以前世話になつた恩返し、直ぐに引取つて御隱居樣。又、斯ういふおれは、現在伯父の事ゆゑ、こんな態ぢやア居ねえ。今日の襤褸も明日の錦、立身出世。ところで、その望む一卷、その持ち主も知れちやア居る

が、何を云ふにも今では、道具屋の手へ渡つたゆゑ、金が無くつちやァさつぱり解らねえ話しだて。

たけ　これいなア、その一巻とやらは、いつぞやあの太平さんの手へ入つたといふ事ぢやござんせぬかいなア。

土左　サア、聞いて下さい。高くは云はれねえが、島川太平がぶッ放して立退いた、磯貝實右衛門めが奥州に居た時、その惣領の吉三郎といふ奴が、神妙劍の一巻を持つて、武者修行に出たとの事。ところが、太左衛門といふ者が、いつぞや木更津の船の乗合ひの中で、外の旅の武士が、女にじやらついてゐる奴があるを幸ひに、ちよろまかした荷の中に、こんな物があつたといふから、見ればその一巻ゆゑ、直ぐに甥の太平へ渡させたが、して見りやァその時船の中で、乗合ひの女に迷つて、荷物を盗まれた侍ひは、吉三郎に違ひはあるまいといふ事だが、そりやァさうと、聞かつしやい、執心のその一巻は、いつぞやひよんな間違ひで、人手へ渡つたけな。併し、道具屋が持つてる事ゆゑ、金さへありやァ今にでも、直さま解る話しサ。

たけ　そりやモウ、さういふ事なら、此方で金の才覺、しまいものでもなけれど、して、どの位な事でござります。

土左　その金は、大概七十兩サ。

たけ　イカサマ、七十兩というては、いはゞ大枚の事なれど、なんと云つても、あの太平さんを知行取りにすれば、成る程、わたしは好い隱居樣だ。それにしても、あの娘のお七は、ありやわたしが實の娘ではござんせぬ。一體、里に取つて養育した、わたしは里親、預けた者も女親で、十六年以前の事、今以てお七には隱して居れど、あの子を連れて八百屋の内へ、後妻に入つたわたし。もうあのお七も時分が來たによつて、相應な人に授けて、どうぞコレ、急に金にしたいものでござんす。

土左　ムウ、そりや貴樣さへその心なら、何も理屈はねえ。早い事はあのお七を、バツタリと賣らうものなら、忽ち七十や百の金は出來るが、なんとその方が、手短ではあるまいか。

たけ　そりやモウ、百兩にもなる事なら、それがいつち好い料簡、早うその相談になりたいものでござんす。

ト早めたる大拍子になり、向うより丈八、右の物貰ひを引ッ捕へ出て來り

丈八　うぬ、いけッ太い奴ぢやアねえか。この丈八が附いてゐるに、うぬらに好い事をされてたまるものか。サア、盜人め、紙入れを出しをれ／＼。

ト云ひ〳〵舞臺へ引摺つてくる。

たけ　オヽ、丈八、今の盗人を、捕へたか〳〵。

丈八　こんなヨイ〳〵を逃がしていゝものでござりますか。うぬ、どうするものか、見やアがれ〳〵。

トこづき廻す。この時物貰ひ、右の鏡袋を投げ出す。お竹見て

たけ　コレ〳〵、紙入れを出しをつたわいの〳〵。

ト鏡袋を取上げる。

丈八　ソレ、見をれ、うぬがやうな奴は、以後の懲らしめ、斯うしてやるワ〳〵。

ト物貰ひをぶちのめす。

土左　それがいゝ〳〵。思ふさまぶつてやれ〳〵。おれも相伴しようワ。

ト出茶屋の薪ざつぱを取つて立ちかゝる。

たけ　ほんに太い奴ぢや、女子ぢやと思うたら當が違ふぞ。こんな奴は、コレ、この草履が相應ぢや。これで存分に、斯うしてやるワ。

トお竹、穿いてゐる草履を持つてくらはす。物貰ひ、この草履を引ツたくる。土左衛門お竹、又ぶちにかゝる。この時、後へ吉助、出かゝり、この中へ入り

吉助　コレ〳〵、もうようござる〳〵。料簡さつしやれ〳〵。

ト留める。

皆々　なにサ、こんな奴は、思ふさまぶちのめすがいゝ。

吉助　ハテサテ、さうではあらうが、盗まれた品さへ恙なく戻つたら、もう料簡さつしやるがよいぞや

ト三人を留めるうち、物貰ひ、右の草履の片々を持つたるまゝ、下座へ逃げて入る。

吉助　イヤハヤ、晝中に油斷も透もなる事ではござりませぬ。併し、怪我でもさつしやらぬが、見附け物でござります。

たけ　ハイ〳〵、こりやアどなたやら存じませぬが、大きにお世話樣でござりました。して、お前樣はどちらのお方でござりますぞいな。

吉助　ヘイ、わしは仲町の子供屋でござりますが、この邊へ奉公人の事で、參つた者でござります。

トこれを聞いて土左衞門、お竹の袖を引いて、思ひ入れあつて

土左　コレ〳〵、持つてこいといふ所だ。あの娘の事を、そこへ話すがいゝ〳〵。

たけ　ほんに、それ〳〵、イヤモシ、お前とは近附きではござりませぬが、承れば、その御商賣では、ちと急に折入つて、お賴み申したい事がござりますが、まさか爰ではお話し申すも

ト思ひ入れ。

土左　そんなら斯うするがいゝ。裏門の高階屋へでも行つて、とつくりと相談するがようごんす。

吉助　ハア、商賣體の事と云はつしやるは、定めし奉公人の事でござりませうな。

土左　左やうサ。隨分玉は云ひ分無しで、親判の奉公人だから、氣遣ひがないのサ。

丈八　モシ〳〵、親判の奉公人の相談とはえ。

たけ　アヽ、コレ〳〵、それについても、其方にいろ〳〵話しがあるが……そんなら斯うして下さんせ

わしや跡から行く程に、土左衞門さん、お前、ぬしを先へ連れて立つて行つて下さりませ。

土左　オイ〳〵、合點だ。委細はわしが、とつくりと掛合ひませう。

吉助　わしも今云ふ通り、外に掛合ひもあるが。いづれ玉を見た上、早い方へ相談しませう。

たけ　必ずお頼み申します。

土左　サア、親方、歩きなさい。

ト辻打ちになり、吉助先に土左衞門附いて、下座へ入る。

たけ　コレ丈八、マア、爰へ來てたもいなう。

ト合ひ方になり、丈八、お竹の側へ行き、床几へ腰を掛け

丈八　イヤモシ、先刻にからの樣子、今のは慥かに深川の、子供屋と見えますが、合點のゆかぬ、どういふお話しでござります。

たけ　さればいの。それについては、こなさんにも相談せにやならぬが、わしが以前乳をあげた、お屋敷の若旦那、今度主取りをさつしやるといひ、殊更高祿に取附くについては、求めねばならぬ品があつて、七十兩といふ金の談合。それにつき、調へば直ぐに立身出世。さすればわしも御隱居樣と仰がれる身になる、それからの思ひつき。あの娘のお七を、深川へバッタリに、七十兩に賣り渡し、若旦那のお間に合せさへすれば、いま云ふ通りの樂しみ。さうなる時はコレ、わが身を男妾にして、氣樂にさせて置くわいなう。

ト丈八、呆れし思ひ入れにて

丈八　エヽ、あの娘御のお七さんを、七十兩に賣るとえ……イエ〳〵、それは好いやうな相談ながら、あまり浮いた話しでござります。

たけ　コレ〳〵、丈八、何が浮いた話しぢやわいの。

丈八　ハテ、いかにお前の育てた子なりとて、また自分に榮耀がしたいというて、あのマァ可愛らしいお七を賣らせて、その上、婆アの男妾とは……イヤサ、あのお七さんには、男があるぢやござり

ませぬか。しかも先は屋敷方で、キツとした云ひ號けの、男があるぢやござりませぬかいなう。

たけ　イヤ〳〵、その約束したは、死んだ此方の久兵衞どのゝ仕業。云ひ號けの男といふは、尾花染五郎といつた侍ひ。その後たしか名を變へて、アヽ、磯貝藤助とやら、何を云ふも、親仁どのは死んだ事なり、その男も今では落ちぶれて、浪人して居るとの噂。サア、其やうな者にかゝり合つては、間に合ふものではないわいなア。

丈八　ハア、そんなら云ひ號けの男といふは、落ちぶれてゐまするとな。それぢやというて、此やうに現在の娘御を、勤め奉公に賣られたのか。どこぞ好い男を持たせたなら、お前も樂隱居がしてゐられますぞえ、こりや賣らうより、その男がようござります。どうしてマア可哀さうに。

たけ　何が可哀さうな事があらう。コレ〳〵、あのお七はナ、十六年以前わしが、葛西の方に居た時、里に取つたあの餓鬼。その時分、ちつとした譯があつて、所にも居憎い事が出來たゆゑ、是非なう駈落ちしたところが、幸ひ世話する人があつて、お七がまだ十歳の時に、あの餓鬼を連れて、緣でがな八百屋久兵衞どのへ、後妻に入つた、このお竹。差當つた七十兩の金の入用といふも、いま云ふ通り。その品を買ひ求め、樣子あつて世を忍んでござる若旦那に、どうぞ出世がさせたし、又わしも樂がしたいからぢやわいなう。

ト此うち後へ太左衞門、古編笠をかむり、黒絹の單羽織、一本差し袖乞ひ浪人の拵らへにて出て來り、窺ひゐる。

丈八　イヤ〳〵、さういふ事なら猶以て、なんぼ親子の間柄でも、義理もあり、殊に世間へ對して、外聞が惡うござります。

たけ　なんの、外聞も當分もいつた事か。親仁どのも死んでしまうた事なれば、お七は煮ようが燒かうがわしが勝手次第。モウ〳〵、わが身に相談はせぬ。深川の親方も來てゐる事なれば、是非〳〵、今日中に方を附けにやならぬわいな。

トお竹行かうとして、草履の片々が無いゆゑ、あたりへ思ひ入れ。

丈八　それぢやというて、女のやうにもない、そりやあんまり邪慳といふものだ。

たけ　イヤ〳〵、もう〳〵何も云やんな。わが身には構はぬわいなア……エヽコレ、わしが草履の片々を、先刻の盜人めが持つて行きをつたさうな。これなと穿いて行かうわいなア。

ト片脇にある、おさごの引摺り下駄を穿き、辻打ちになり、お竹を丈八とめるを、振り切つて下座へ入る。丈八殘り、思ひ入れあつて、

丈八　イヤハヤ、呆れ返つた代物だ。とんだ奴をつまんだ報ひか、おれが心をかけてゐるお七をば、賣

られては、あの婆アと跡でどうして夫婦になられるもんだ。餘ッほど自惚れな婆アめだ。もう斯うなつては、うつかりしては居られぬ。なんでもあのお七を引ッ淺ひ、八百屋の内の諸道具も引摺り出して、こりや江戸を走るより思案はないが、どうかまだ外に好い思案が、それともあらうか。

ト手を組んで考へる。太左衞門、後より出て

太左　コレ〳〵、町人どの、それには至極好い工風がござるて。

ト丈八、太左衞門を見て、

丈八　なんだ、見ればこなたは、袖乞ひの浪人どのではないか。

太左　成る程、拙者は尾羽打枯らした浪人でござるが、いま思はず後で承れば、おてまへ樣には甚だお心遣ひのやうな。それについては、拙者が存じよりの事もござれば、苦しうなくば御相談相手にならうかと存じまする。

丈八　それは忝うござりまする。何もかも聞かれた上は、隱す事もござらぬ。して、早速ながらこなた樣の企みといふてはナ。

太左　サア、わしが存じよりの手段は……コレ。

ト差寄つて小聲に、いろ〳〵囁く事。丈八うなづき、承知の思ひ入れあつて

丈八　ムウ。イヤ、奇妙々々。さうすれば、わしが思ふ坪といふものぢや。

太左　それにしても、とつくりと云はねばならぬ事もある。アヽコレ、どうも爰では、

丈八　イカサマ、斯うしませう……イヤ〳〵、あそこの内へは婆アが行つてゐるし、いつそ池の端へ行きやせう。

太左　成る程、こつそり話し合ひには好い所でござる。

ト流行り唄の合方になり、丈八太左衞門、捨ぜりふにて入る。引違へて吉助、嘉助出てくる。

嘉助　モシ〳〵、親方、今日は、お掛合ひなされた奉公人でござりまするが、いよ〳〵お極めなされましたか。

吉助　マア〳〵、あら方取極めるつもりではあるが、ちつと不の附く事があるゆゑ、とても今日の事には行くまいてや。

ト矢張り合ひ方になり、お竹與七、捨ぜりふにて出て來り

たけ　商賣柄の事ゆゑ、お前の方に所々方々と口もあらうが、この間中からあの土左衞門どのが、お前を頼んでゐる一卷の事。すりやモウ、金高の事は、七十兩は承知でござります。その値段なら、

いづれわしが、きつと買ひ求めますゆゑ、どうぞそのつもりにして下さりませ。

與七　すりや、買ふと云はつしやる程の事ゆゑ、値段のところは、御承知でござりませうが、あの一卷の事は、先約がありますゆゑ、今さら返答も出來ず、近頃お氣の毒ではござりますが、どうもお前には御相談が、致し憎うござりまするて。

たけ　さうではあらうが、そこをお頼み申すのでござります。

與七　ハテサテ、なんぼお頼みだといつて、商賣づくといふものは、さういふものではござりませぬ。

たけ　その代りわたしが方は、殊によると金子は、今日直ぐに七十兩、爰でなりとお渡し申すやうに。

ト吉助を見附けて此方へ來り

オヽ、お前は深川の親方さん、いま高階屋へ行きましたが、間違うてお目にかゝりませぬ。ほんに丁度よい所であつた。モシ〳〵、定めて詳しい話しもお聞きなされたでござんせうが、只今七十兩といふ金子が、急にいりますゆゑ、アノわたしが娘を、お前の方へ、是非々々お買ひなさるつもりに、どうぞちつとも早う取極めを、致したうござんすわいなア。

吉助　アヽ、これはしたり、滅相な。そりやハヤ、玉も見た上で、氣にさへ入れば、隨分七十兩にも抱へまいものでもないが、何を云ふにも、肝腎の代物を見ずに、どうマア御相談が出來やうぞい。

嘉助　左樣でござります。誠に、穴の貉と云はうか。殊に高金な奉公人を、玉を見ずに相談する馬鹿者が、どこの國にあるものか。

たけ　成る程、こりや御尤もでござります。そんならちよつと娘をこれへ、連れて參りまする程に、どうぞ少しの間、お待ちなされて下さりませ。お手間は取らせませぬ。

ト行かうとする。この時下座よりおさご出で來り

さご　オヽ、お前さん、爰にござんしたかいなア。

たけ　コレ〳〵、おさごさん、お七はどうしましたぞいなア。

さご　アイ、お七さんは、別當樣のお座敷に、今お席書の濟んだところでござんすゆゑ、友達衆と一緒に、戻らしやんす筈でござんすわいな。

たけ　エヽ、さういふ事なら、ちつとも早う來をらいで、わしが行つて連れて來ずばなるまい。モシ、道具屋樣、お前もちつとの間、待つて下さりませ。

與七　ハテサテ、いくら待つてゐたとても、お前の方へ相談は出來ませぬ。サア、深川の親方、ござりませ。お前の方のお話しを極めてしまひませう。

さご　左樣なら、わたしが願ひの通り、いよ〳〵アノ七十兩の金子を、お貸しなされて下さりまするか

いなア。
吉助　アイ〳〵、わしが方は、隨分極めて進ぜませうぞや。
嘉助　左樣なら、ぬしの方へ、相談をお極めなさるか。イヤハヤ、手廻しでござりますな。
與七　いづれ一卷は、お前に賣りませうから、さう思うてござりませ。
たけ　そんならどうあつても、わしが方へ相談はして下さらぬのかいなア。エヽ、なんにしろ、早うお七が來をればよいに。
ト此うちお竹、あちこちいろ〳〵と氣を揉み居て、これを聞いて思ひ入れあり
ト始終流行り唄の合ひ方にて、下座よりおせん、おきぬ、虎藏、德藏、出て來り
せん　おばさん、爰にござんしたか。わたしらは先へ戻らうかいなア。
たけ　エヽ、そこどころではない。さうしてお七は、來ぬかいの〳〵。
きぬ　お七さんは、おツつけ後から來やんすわいなア。
たけ　エヽ、埒の明かぬ。モシ〳〵、道具屋樣、今に娘が參れば、直ぐに解る程に、どうぞわたしに賣つて下さりませ。
與七　ハテ、しちくどい、さうはなりませぬよ。

ト お竹、また吉助に向ひ

たけ コレ〳〵、なんであらうと是非々々お前、娘を買つて下さんせいなア。

吉助 エヽ、滅相界な。無理な事を云ふ女子ではある。

ト お竹、思ひ入れあつて

たけ そんならお前、どうあつても賣られぬのかいの……又お前も買はれぬと云はしやんす。これがほんの、賣らず買はずぢやなア。エヽ、自裂つたい、何をしてゐるやら、腹が立つて〳〵ならぬわいなア。

ト お竹、いろ〳〵氣を揉む思ひ入れ。

せん オヤ〳〵、おばさんが狂人のやうぢやわいなア。

子皆 ほんに、狂人ぢや〳〵。

ト 皆々笑ふ。

たけ なんだ、この餓鬼めらは、人の氣も知りをらいで、笑ひをると合點せぬぞよ。

さご ハテ、ようござりますわいな。お前方も、其やうな事云はずと、サア〳〵、早う戻らしやんせ。わたしが一緒に送つてあげようわいなア。

女皆　そんなら一緒に行かうわいなア。

吉助　サア、與七さん、わしらも行きませう」

與七　ヤレ〳〵、とんだ隙いりをしました。

たけ　コレ〳〵、さう云はずと、もう少し待つて下され。今に娘が來ますわいの。

ト　お竹、兩人を留めるを振り切り

吉助　ハテ、どうなと勝手にさつしやれ。

ト流行り唄にて、女形皆々、子供兩人、吉助、與七、嘉助附いて花道へ入る。お竹殘り、氣を揉む思ひ入れにて

たけ　ほんに、マア聞分けのない、強情な奴らめぢや。わしがどのやうな無理な事ても云ひはしまいし
イヤ〳〵、此やうな事云うてゐる間に、外へ一卷賣られぬうち、娘のお七を爰から直ぐに、あの
深川へ連れて行て、それがよい〳〵。

ト下座の方へ行かうとする。矢張り流行り唄にて、下座よりお七、おいち、以前の額を持ち、附いて出で來り

しち　オヽ、母さんかいなア。

たけ　エヽコレ、母さんかどころではないわいやい。

しち　それぢやというて、お席書が濟むと、直ぐにわたしや支度して戻つたのぢやわいなァ。

いち　ほんに、少しも隙取りは致しませぬ。サア〳〵、お歸りなされませいな。

たけ　エヽ、そこどころではないわい。サア〳〵、爰から直ぐに深川へ連れて行くのぢや。サア、早う歩きや〳〵。

トお七の手を取つて急き込んだ思ひ入れ。連れて行かうとする。兩人思ひ入れあり

しち　申し、母さん、なんで今から深川へ行くのぢやえ。

いち　モシ〳〵、おかみさん、不動樣のお開帳詣りなら、もう今日は遲うございます。重ねての事になさるがようございませう。

たけ　エヽ、おきやいの。開帳どころぢやない。コレ、娘、てまへを今から深川へ連れて行つて、七十兩に賣らにやならぬわいの。

しち　エヽ、阿房らしい。何を云はしやんすぞいなァ。

たけ　なんでもない、いま急に七十兩の金が無ければならぬゆゑ、われを勸め奉公に賣るのぢやわいなう。

しち　エヽ。

ト兩人、恟りしたる思ひ入れ。

いち　これいな、おかみさん、何やら合點のゆかぬ。なぜ又俄に其やうな事を、仰しやるのでござります。

たけ　イヤ〳〵、何もわいらの知つた事ぢやない。コレ、一體あのお七はナ、いつぞやも好い所へ口があるから、嫁入らさうと云へば、嫌ぢやと吐かす。又お大名へ妾奉公に出さうと思へば、四の五のと、なに一つ云ふ事をきかぬから、親の心に背く娘。それゆゑいつそ賣つてしまふのぢや。オオ、親が娘を賣るに、誰れが何と點の打ち手があるものかいの。

しち　そりやさういふ事でもござんせうが、わたしが兎やかう申しましたも、あの父さんがお達者なうち仰しやるには、其方がまだ幼少な時分、云ひ號けしたお方があると、常々からのお話し。それゆゑ外の男を持ちましてはナ

たけ　イヤ〳〵、そりやさうではあるまい。定めし外に色があらうな。

しち　イエ〳〵、どうして其やうな

たけ　イヤ〳〵、隱しやんな。男があれば、また相談のしやうもある。サア〳〵、隱さずと、早うそれ

を、云うて聞かしや〳〵。

しち　其やうに仰しやるなら、包むといふではなけれども、恥かしい事ながら、云へとなら申しませうが、いつぞや父さんと連れ立つて、小湊へお詣り申した時に、あの乗合ひの船で逢うたお方が、下さんした、吉の字菱の主さんへ

ト思ひ入れ。

いち　アヽモシ、それを爰で仰しやつては

ト　おいち押へる。おたけ、思ひ入れあつて

たけ　それ見やいの。さういふいたづらな事をすれば、猶の事、是非々々賣つて金にせにやおかぬ。サア、勤め奉公するか。但し嫌ぢやと吐かすのか。エヽ、キリ〳〵返事をしやらぬかいなう。

しち　イエ〳〵、なんぼ母さんの云はしやんす事でも、こればかりは

いち　左様でござります。勤め奉公のなんのと、滅相な。どうしてマア其やうな事が

たけ　ヤイ〳〵、下女の癖に、いらざる口出し、すツ込んで居やいの。サア、娘、勤め奉公いたしませうと、早う吐かせ。云はぬとおのれ、叩き据ゑても云はさにや置かぬ。とても甘口では應とは云ふまい。いつその事に

トお竹、有りあふ額を振りあげ、お七を打つてかゝる。おいち留めて

いち　アヽ、これはしたり、そりや御短氣でござりますわいなア。

トおいち、いろ〳〵留める。この時、丈八出て來り、これを見て中へ入り、お竹を留めて

丈八　これはしたり〳〵、どうしたものでござります。其やうな事なされて、もしやあの子に疵でもつけたら、どうせうと思はつしやります。

ト丈八、お竹の持つたる額を引ツたくる。

たけ　オヽ、こりや丈八か。わが身はこの娘の折檻といふと、留立てしやるの。久しいものぢや。なんぞといふと、お七を庇やるが、それがわしの氣に食はぬわいの。あの娘に疵が附いてはどうするえ。親が娘を折檻するは當り前ぢや。疵が附いても大事ない。いつその事に、面なぞいがめてやらうわいの。現在わしといふ者がありながら、娘にまで何のかのと、エヽ、面の憎い惡性男め。

トお竹、有りあふ茶碗を丈八へ打ちつけ、莨盆をお七へ投げつける。

いち　これはしたり、危なうござります。あちらへお出でなされませ。

トおいち、お七を圍ひ、上の方へ逃げる。

丈八　これは怪しからぬ。しつかい狂人の沙汰ぢや。

ト丈八、お竹を留めるを振り切り、茶臺と盆を取つて投げつける。

たけ　オヽ、狂人ぢや／＼。狂人ぢやによつて、どのやうな事せうも知れぬぞよ。

ト　お竹捨ぜりふにて腹立て、穿いてゐる片々の草履を脱ぎ、これを持つてお七を追ひかけ、打つてかかるを、丈八とめる拍子に、この草履、上の方の出茶屋の内へ投げ込む。

丈八　オヽ、滅相な。アレ／＼、あの貸し座敷の中へ今の草履が

ト丈八、ツカ／＼と寄つて上の屋體の内へ入る。此うちお竹、お七へ立ちかゝるを、おいち支へる。

この時、上の屋體の中にて

丈八　これは／＼、眞平御免なされませ／＼。

丈助　ヤア、武士の座敷へ、無禮であらうぞ。

ト合ひ方になり、簾上がる。内に丈助、着附け羽織、大小の形にて、片手に右の草履を持ち、丈八が手先を捕へ居る。これにて三人、愕り扣へる。

丈助　狼藉とや云はん、かゝる振舞ひ。して、其方は何者ぢや。名前を申せ。なんとぢや。

丈八　ハイ／＼、私しは本郷八百屋久兵衞と申す者の、手代でござります。あれに居りますが、即ち久兵衞が後家。あの娘のお七を折檻の草履が、思はずも飛びましたゆゑの儀でござりまする……

モシ〳〵、お前も早く、お詫びをなされませ〳〵。

ト お竹、前へ出て

たけ 只今あの者が申します通り、私しは久兵衛が後家でござります。何事も女の事ゆゑ、ハイ〳〵、どうぞ御免なされて下さりませ。

丈助 ムウ。すりや、いよ〳〵其方は、八百屋久兵衛が後家に相違ないか。

たけ 左様でござりまする。

丈助 久兵衛が後家とあれば、女ながらも猶以て、免し置かれぬ刀の手前。身が手にかけて眞二つ。覺悟いたせ。

ト 丈助、刀を構へる。皆々驚き

たけ アヽ、コレ〳〵、マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。久兵衛が後家とあれば免されぬとは、そりやマア、どういふ譯でござりまする。

丈助 いかにも、仔細一通り云うて聞かさう。某ことは、山の内に仕官たる、磯貝實右衛門が家來、阿部丈助といふ者。主人の御子息藤助どの、其方の娘お七と、云ひ號けありしが、親久兵衛病死の後、一向に音信とてもなく、尤も心變ずるは、町人の習ひと申しながら、餘りといへば不實なる

致し方。この段とくと相紀さんと存ずれども、江戸鎌倉と隔るといひ、殊に此方は主用しげく、それゆゑこれまで打捨て置きしが、若旦那藤助どの、お七を戀ひ病み給ひ、この程より御病氣。親旦那さまにはこれを聞かれ、拙者を招ぎ、申さるゝは、其方悴を同道なし、江戸表へ罷り下り出養生させくれよと、即ちその名醫は、云ひ號けのあのお七、彼れが母こそ憎けれども、身共悴が不便さゆゑとのお詞、それゆゑ若旦那を同道にて罷り下り、即ち駒込染井村に別莊をしつらひ旅宿を相定めしゆゑ、今日其方宅へ罷り越さんと存ずる折柄、思はずこれにて出會ひしこそ、申さば幸ひ。娘お七が緣談の儀は、身が詞に從つて、早速相談いたしなば、主人の心も解けるといひ、武士の道も相立つ道理。もしや金銀に係らば、此方より送つてなりとも首尾いたしたい。それといふも、親旦那のお心安め、且は若旦那の一命、あの戀煩ひがお助け申したいばつかり。なんと母親、決心いたして祝言さするか。返答が承りたい。どうぢや。さなきに於ては武士の意地。サヽ、返答が承りたい。どうぢや〳〵。

たけ　成る程、さう仰しやれば、一々御尤もではござりまするが、また此方の申す事もお聞き下さりませ。何を申すも差當つて、急に金子の入用な事がござりますれば、外に才覺の心當りもござりませぬゆゑ、是非なうこの娘を賣つてなりとも拵らへませねば、私しの身の立行きがなりませぬゆ

ゐ。

しち　いかに父さんが約束とはいひながら、よう思うて見やしやんせ、わたしのやうな不束ものが、お武家様へ縁附きます事は、どうもわたしや

ト思ひ入れ。

丈八　左やう／＼。ならう事ならお前は、矢ッ張り内にござつて、牛は牛連れ、馬は馬連れ、町人の女房になるが、いつち好い料簡でござりまする。

しち　さうは云うても母さんが、勤め奉公せいと云はしやんす。こりやどうしたらよからうぞいなア。

丈助　なんと申す。すりや、どうあつても母親には、娘を勤め奉公に賣り渡すとな。さう聞いては是非に及ばぬ。手前主人の云ひ號けの娘が、勤め奉公いたすと沙汰あつては、此方の家の穢れ、あまつさへ、土草履を打込み、身が面までよごせし無禮、きつと上へ申し立てる。女ながらも母親はじめ、召仕ひの男、其方達を相手に、これにて切り死を致す。兩人ともに覺悟いたせ。

ト丈助、刀へ反りを打つて立ちかゝる。お竹驚ろき、ガタ／＼慄へる。丈八、丈助に縋つて留める。

丈八　マア／＼、お待ちなされて下さりませ／＼。何もお心に叶ひますやうに、とも／＼取計らひますでござりませう。何を申すも、女の事でござりますれば、まづ／＼お止まり下さりませ。併しな

がら、母親とても退引きならぬ、金子の入用がござりまするからの事。その金さへ出來ますれば、何しに違背はござりますまい、と存じます。

丈助　ムウ。流石は町人、子を賣つても金子が欲しいとは尤もぢやが、此方も申し出した事、得心さへ致すなら、支度金として、金子二百兩、相渡して遣はさう。

たけ　エヽ、そんなら何と仰しやります。アノ支度金に二百兩下さりますとな。さういふ事なら、何しに變替へ致しませう。左樣なれば、只今これにて、お受取り申しませうかいなア。

丈助　アヽ、イヤ〳〵、これまでの樣子といひ、不實なる母親の事、もしや後にて間違ひのあつても如何。承知とあらば金子の儀は、即ち娘御と引替へ。此方にても取急げば、苦しうなくば今晩にも内祝言が致したい。

たけ　イエモウ、さういふ事なら、ちつとも早う、祝言を致させませう。隨分、晩ほどでも、只今でもようござりますわいなア。

丈八　左樣なら私しも、とも〴〵あの子にも勸めまして……とはいへ、今夜の祝言とは、わしは大きに氣が揉める吉祥日。殊に大枚の二百兩といふ支度金、母御のお前は女の事、番頭同然なこの丈八が立合うて、受取りまするでござりませう。

たけ　オヽ、そりやどうなりと……そんなら娘が支度は、幸ひ死なれた旦那が、拵らへ置いたあの子の着る物。
丈助　イヤ／＼、假の祝言であれば、目に立つては却つて迷惑。萬事密かに致したい。
たけ　そりや願うてもない事。有やうは、金さへ出來れば、なんの娘を賣りたい事はござりませぬ。差當つて入用は七十兩。あなたからは二百兩。差引き殘つて百三十兩の餘計が取れる。湯島の富に當つた祝言。此方も急げば、そんなら今宵、少し夜が更けても大事ござりませぬ。染井村の御別莊へ、娘を送りますでござりませうわいな。
しち　アヽ、モシ、母さん、滅相な。どうしてマア今夜のなんのと、其やうな早急な事といひ、さうなる時は彼のお方へ、わたしや誓うた詞も立たず。どうぞこの事ばかりは、
いち　アヽ、コレ／＼、そりや御無理とは存じませぬが、たつて否ぢやと仰しやれば、勤め奉公さすとの事。それではお前様の、かへつてお爲になりますまいわいなア。
丈八　それ／＼、何であらうと、マア／＼、今夜のところを、めでたう内祝言しなされば、また後で話しの解る事ぢや。ナ、サヽ、それがよいぞや／＼。
トお七、是非なく承知の思ひ入れ。

丈助　然らば今宵間違ひなう、娘御と金と引替へに致すでござらう。即ち染井村にて、入口の門に磯貝と表札がござる。尤も、道まで迎ひを差上げるでござらう。

たけ　ハイ／＼、何もかも承知いたしました。直ぐに歸つて、支度いたさせますでござりませう。

ト入相の鐘になり、丈八、思ひ入れ。

丈八　コレ／＼、もう入相ぢや。サア／＼、早う行て、支度なされませ／＼。

いち　さうでござんす。サア／＼、お七さん、何であらうと、マア／＼、お内へお出でなされませいなア。

しち　エヽ、何ぢややら、いつそ辛氣な事ぢやわいなア。

丈助　然らば拙者も、この段主人へ申し上げ、急ぎ今宵の祝言の支度。心も急けば、これにてお暇……ではない、お開き申さう。

ト時の鐘、唄になり、丈助、東の花道へ入る。お竹、嫌がるお七の手を取り、捨ぜりふにて、無理に引立て、おいち丈八附いて花道へ入る。矢張り時の鐘、バタ／＼にて、下座より土左衛門、以前の形にて、衣裳葛籠を抱へ、出てくる。これを文藏、追ひかけ出て、土左衛門を捕へ

文藏　ヤイ、待ちやアがれ。こりやアその葛籠を引ッ抱へて、どこへ行かうと思ふのだ。

土左　知れた事だワ。先刻にも云ふ通り、ちつと工面が悪いから、當分こりやア借りるのだ。

文藏　此奴が〳〵。イヤ、押しの重たい。借りるとは何の事だ。エヽ、此方へ寄越しやアがれ。

土左　エヽ、イケ邪魔な二才野郎め。退きやアがれ。

ト時の鐘、大拍子になり、土左衞門、文藏を引退けて行かうとするを、引留める立廻り。此うち下座より太左衞門、頬かむり、尻端折りにて、頭巾をかむり、以前の非人と連れ立つて出て來り、囁き合つて太左衞門、葛籠を引ッ浚ひ、行きにかゝる。土左衞門、文藏、思ひ入れあつて、これを捕へるを、非人支へる立廻り。太左衞門、振り切つて、葛籠を抱へ、一散に花道へ入る。續いて土左衞門、行きにかゝる。これを非人引留める。文藏、跡追ひかけて入る。兩人立廻り。非人、有りあふ薪ざつぱを取つて、土左衞門の脾腹をしたゝかに突く。これにて土左衞門、摚となる。矢張り時の鐘にて、非人は同じく花道へ、一散に駈けて入る。土左衞門、起上がり、跡を見送り、思ひ入れあつて

土左　エヽ、折角骨を折つたあの葛籠。これが誠に、犬骨折つてだ……ハヽア。

ト溜め息をつく。これにてチョンと木の頭。

イヤ、とんだ目にあつた。

ト呆れし體にて向うを見送る。これにて神樂になり、よろしく、ひやうし

幕

（作者　松井由輔）

四幕目　祝言の場

役名——阿部丈助 實ハ 駕籠舁き、彌作。鷺の首太左衛門。晝鳶、千駄木の音。同、龜。女非人、おなべ。下女、おいち。小姓、主水。後家、お竹。八百久若い者、丈八。八百屋娘、お七。磯貝藤助 實ハ 尾花吉三郎。

本舞臺、三間の間、高足の屋體。正面へ誂らへの屏風を立て、軒へは殘らず伊豫簾をかけ、縁側へ毛氈を敷き、上がり段へ石疊の花蓆を敷き、上の方に襷の入りし杉戸。舞臺前、流れに花菖蒲の盛り。下の方に皮附きの門口。これに蔦からみし體。この柱に磯貝といふ標札打ち、すべて染井村別莊の景色。爰に燭臺を照らし、丈助、太左衛門、音、麻上下にて、一本差し、道具を持運び居る。門口に若い者三人、油單かけの吊り臺より、簞笥、挾み箱、新らしき紬夜具、包みその外塗り鏡臺、はんそう臺、祝儀の道具を出し並べ、皆々捨ぜりふにて、この品を吊り臺のまゝ奥へ運ぶ體。木魚の入つたる合ひ方、時の鐘にて幕明く。

丈助　もうお道具の分は、これで殘らずでござるか。
若者　左樣でござりまする。
太左　これは大きに大儀でござつた。
若者　ハイ〳〵、お渡し申しました。
ト矢張り右の鳴り物にて、若い者、誂らへの紋附いたる箱提灯を持ち、向うへ入る。
丈助　して、若旦那は、いづれへお出でなされたな。
音　あなたは奥庭の杜若を、手づから手折つてお生けなさるとあつて、池の彼方へ
丈助　ハテ、夜風が御身に當りますだらうに、
ト思ひ入れ。
太左　イヤ、これはその筈、常から焦れてお出でなされたお七どの、今夜から誠に手活け。それが何よりのお藥サ。
音　それと申すも、丈助どのゝお働き。
太左　イヤ、お手柄でござつた。
ト時鳥の聲、寺鐘、樂の入つたる合ひ方になり、向うより吉三郎、五十日鬘、病ひ鉢卷にて、袴着流

し、手燭を持ち、片手に杜若の手折りしを持ち、庭下駄を穿き、跡より主水、袴一本差しの小姓の形刀を持つて出で來り、花道にて吉三郎、空を眺めて、

吉三「つれなさも、憂きには馴るゝ時鳥、待つと知らるゝ初音ならずば」……いとけなき時に親々の云ひ號けせしばかりにて、便り音信なき妻に、心迷うて見ぬ戀に、あこがれし身のこの病。今宵不思議に逢ふなれば、身の全快は目のあたり。ハテ、心よき

ト思ひ入れあり

侍ひの身にあるまじき、女子に迷ふと聞くなれば、さぞや浮世の人毎に

ト思ひ入れ。

主水　そのお手燭は、私しが持ちませうか。

吉三　イヤ〳〵、苦しうない。花を手折れば直ぐに座敷へ……供いたせ。

主水　ハツ。

ト鳴り物の切れにて兩人、舞臺へ通る。皆々出迎ひ

丈助　これは若旦那樣、夜風が御身に障りませうに、私しどもに仰せあらいで

吉三　左樣とは存じたが、其方が働きで、今宵不思議にその以前、云ひ號けせしお七と祝言。此やうな

三まく目



四幕目



喜びはないと、手づから手折つて嫁御へ馳走。身共がわざ〳〵この花を

太左　それは好い思し召しでござりまする。その儀を嫁御のお七さまが聞かれましたら、さぞ嬉しう思はれませう。私しがこの筒に入れて置きませうか。

菅　成る程、花はこなたが先生の事ぢや。サア〳〵、お活けなされ〳〵。

ト花活け、花盆、鋏などを取りて出す。また件の鳴り物になり、向うより龜。麻上下、一本差しにて足早に出で來り

龜　サア〳〵、嫁御のお越しでござる。只今道までお迎ひながら參つて、母御樣にもお目にかゝつて早速お知らせ申せと　先へ參つた。丈助どの、御祝言の用意さつしやるがようござらう。

吉三　ア、、なんと申す。そのお七が、參つたと申すか。

龜　左樣でござりまする。

丈助　それは早急な儀でござるが、よう早うお支度が間に合ひました。

太左　サア〳〵。お杯の用意いたしませう。

吉三　てまへ達、よいやうに賴むぞ。

四人　畏まりました。サア〳〵、御祝言の用意ぢや〳〵。

ト唄、時の鐘になる。下男、箱提灯を持つて、お竹先にお七、帽子をかぶり、嫁の形にて、おいち附いて、丈八、羽織袴の形。お七は祝言を浮かぬ様子。お竹、せり立てる體にて出て來り

たけ　サア〳〵、娘、歩きやいの〳〵。イケ埒の明かぬ。

いち　其やうにお急ぎなされたと申して、どうしてお七さまが、この夜道を、ナア

丈八　急いで歩くど、ようねれるぢや。そこでお聟様が……エヽ、羨ましい。

たけ　これはしたり。何を云やる。

ト皆々門口へ來り、標札を見て

たけ　アヽ、磯貝といふ標札。オヽ、爰ぢや〳〵。

ト云ふを聞き

龜　ソリヤ、嫁御のお出でぢや〳〵。

皆々　來たか〳〵。

皆々　參りました〳〵。

ト騷ぐ。

たけ　ハイ、御免なされませ。

ト皆々内へ入る。

丈助　これは母御樣、先刻はお目にかゝり、無理なるお頼み。ようお支度が間に合ひました。

たけ　イヤモウ、晩方極めて今夜の祝言。誠にうろたへましたわいの。ホヽヽヽヽ。

丈助　左樣でござりませう。サア、これへ〳〵。

ト皆々よろしく座につく。

たけ　して、云ひ號けなされた花聟の、藤助さまと仰しやるのは。

吉三　その藤助と申すは卽ち身共。母御へは初めてお目にかゝりました。拙者親ども鎌倉で、云ひ號け致した其許の娘、お七どの事。承ればその節、云ひ約束いたされし久兵衛どの、御病死の由。存ぜぬ事とて只今まで、疎遠に致し罷りある。この度江戸の屋敷へ勤番、好き次手、お宅をも尋ね申さんと、若黨どもに申し附けしところ、思はずも今日お目にかゝつて、相談極め、直さま今晩、内祝言のまなびをも、推して御所望いたせしに、早速御承知下され、拙者が身にとり滿足の至り。この上とても、姑と申しても其許お一人。娘御を申し請けますれば、誠の親子とも思し召され、必ず共に末長う、榮えまするやうに、偏へに賴み存じまする。

たけ　これは〳〵、御挨拶で痛み入りまする。娘が云ひ號けの儀も、承つては居りましたが、何を申

すも連合ひこと、年の上にか俄の往生。それゆゑそれなりに今日まで、打捨て置きましてござりまする。コレ娘、あのお聟様へ、御挨拶申しやいの……イヤモウ、何を申すも、まだ年がゆきませぬゆゑ、お頼み申しまする……これはしたり、御挨拶を申しやいの。ホヽヽヽヽ。

しち　ハイ／＼、お初にお目にかゝりました。私しは、不調法者でござりまする。何事もよろしうお目かけられて下さりませいな。

ト恥かしきこなしある。

丈八　これは、あなたがお聟様でござりまするか。私しは八百屋に年久しく奉公仕り、旦那病死の後は見世を預かり、商賣に精出しまする、丈八と申す者。只今にては番頭も同然。この上ともに、お目かけられて下さりませ。

たけ　イヤモウ、それは／＼、若いに似合はぬ實體な生れ。殊にめでたい今夜の婚禮。夫があらば、二人揃ふは祝言の習ひ。わたしが連合ひの名代に、お目かけられて下さりませ。ホヽヽヽヽ。

しち　これいなう、あなたにお目にかゝつた上は、もう内へ歸つてもよいぢやないかいなア。

いち　これはしたり。まだお杯も濟みませず、殊に、歸るといふ事は、必ず仰しやらぬがようござりまする。

丈八　さうとも〳〵。お杯が濟んで、あのお約束の二百兩

　　　　ト云はうとして

そのニヤクヤとした御挨拶はおつての事。モシ、丈助さま、御對談なされた、彼の……ハヽヽ、

おめでたうござりまする。

たけ　ほんに、そのめでたいのも、お話しのあつた、彼の……めでたう受納いたしたうござりまする。

丈助　イヤモウ、その儀は先刻より、對談の儀でござれば、承知仕つて居りまする。マア〳〵、お杯

が濟みました上の事でござりまする。

たけ　左樣なら、早うお杯をお急ぎなされて下さりませ。ホヽヽヽ。

丈助　心得ました。サヽ、お杯を持て。

なべ　畏まりました。

　　　ト合ひ方になり、奧よりおなべ、腰元の形、模樣物の小袖にて、三方に三つ組の杯、長熨斗附きし

　　蓬萊なかざりし銚子を持つて出て來り

なべ　これは〳〵、お嫁御樣、阿母樣え、今晩はおめでたうござりまする。私しはこの內に、針妙を致

しまする、不調法者でござりまする。この上ともに、お目かけられて下さりませいな。

たけ　イヤモウ、此方の娘も、まだ子供同然、何分お頼み申しまする。

なべ　ハイ〱、左様ならお杯。

丈助　心得ました。サア、お吸ひ物〱。

ト太左衞門。音。龜。吸ひ物膳を持ち、吉三郎お七お竹丈八へ据ゑる。

然らばわざとお杯は、お嫁御樣から

トこれにてお七、迷惑さうに杯を取り、差出す。おなべ、酌をする。

太左　めでたく謠ひまするでござりませう……池の汀の鶴龜は、蓬萊山もオヽよそならず、君の惠みぞ有り難き〱。

なべ　左樣なら花聟の若旦那樣へ。

ト三方を吉三郎の方へ持ち行く。

太左　今度は番頭どの、めでたく謠はつしやれ。

丈八　アヽ、私しが謠ひまするか。謠ひませう〱。何事も早う、彼のをお渡しなさるゝやうに、エヘン……實にや仰ぎても事も愚やあの金を、早く調伏いたしたい〱。

ト吉三郎飲んで三方へ置く。

丈助　イヤ、それにあまり夜も更けませうし、申さば俄の內祝言。お杯も物事あつさりと濟ませまして後にて幾久しくお祝ひ申すでござりませう。

たけ　何よりかより、彼のを〱。

ト思ひ入れ。

丈八　左やう〱。早う彼のに、めでたうお目にかゝりたうござりまする。

ト金の仕方して思ひ入れ。この時、蝙蝠大分、灯のあたりを飛び歩く。皆々驚き

しち　何やらわたしが顔のあたりを、ありや何ぢやぞいの。

いち　今のは慥か蝙蝠でござりましたが、どうしてマアこのお座敷に

しち　何ぢややら、わたしや嫌ひな蟲けら、もうわたしや、歸るわいの〱。

いち　これはしたり。歸ると仰しやる事は、禁句でござりまする。

丈八　きんく〱、きんくよりは彼のにお目にかゝりたうござりまする。

たけ　それが肝腎。殊にマア、いま飛んだのは、ありや蜻蛉か、蝙蝠か。

吉三　これはしたり、座敷へなに蝙蝠が舞ひませう。今晩はめでたい祝言の席ゆゑ、雛鶴なぞが舞ひましたのでござらう。

丈助　御祝言のお座敷へ、鳥が舞ふとは、めでたい〳〵。

太左　祝ひに一つ〆めませう。

皆々　三國一ぢや、嫁取り濟ました、しやん〳〵のしやん。アヽ、おめでたうございます。

ト手を打つ。

おなべ　サ、これからはお床をのべて、三々九度の色直しも、御内祝言の事なれば、わざつと略したがようございませう。

吉三　さうぢや〳〵。身も未だ病中にて、お屋敷の勤めを引いて居れば、表立つてお上へ聞へぬやう、隨分穩便に致すがよい。

いち　左樣なれば、お七さまの御持參のお夜具を、わざつと延べませうか。お寢間はどこでございますえ。

丈助　即ちこれがようござらう。いづれもお手傳ひなさい。

皆々　心得ました。

ト件の夜具を奥より取出し、おなべおいち、二重の上よき所へ敷く。お七見て、浮かぬ顏。

丈助　若旦那樣、然らばあれへ。

吉三　これは何かとこなた衆の心遣ひ。過分ぢやぞ。

丈助　然らば嫁御樣、あなたも此方へ。

しち　アヽコレ、わたしやどうも、あなたとは

ト思ひ入れあるを

丈助　ハテマア、めでたう

ト手を取つて連れてくる。

たけ　アヽ、モシ〳〵、肝腎の、れこは〳〵。

ト　お竹、仕方する。

丈助　これはしたり、件の儀は、身共が承知いたしてござるワ。

たけ　それなればようござんす。そんならわたしと丈八と、跡に殘つて一件を、受取つて參りませう。

コレ〳〵、おいちよ、わが身はあの男を連れて、先へ開きやれ〳〵。

いち　ハイ〳〵、左樣ならおめでたうお開き申しませう。モシ、おしさま、ゆるりとおしけりなされませ。

しち　アヽコレ、わが身が行きやるなれば、わしも歸らう。

いち　これはしたり、歸るとは禁句でござりますぞえ。

なべ　サア〳〵、嫁御樣は此方へ。

　　ト　お七を連れてくる。

いち　左樣なら阿母樣、お先へ參りますぞえ。

たけ　内を隨分氣を附けませうぞ。

いち　ハイ〳〵。

男三　これは女中衆、御苦勞。

いち　ハイ、おめでたうござりまする。

なべ　ドレ、お屏風を

　　ト　唄、時の鐘。提灯を持ち、おいち、向うへ入る。おなべ、丈助、太左衞門、音、龜、捨ぜりふにて奥へ入る。丈八は腹の立つ思ひ入れ。

丈八　エヽ、あのお七さまは、今夜定めて

たけ　これはしたり、娘の事より急ぎは彼の金、丈助どのから早う受取つて

丈八　それぢやといふて、この樣子を見捨てゝは

たけ　ハテマア、來てたもいの。

丈八　エヽ、腹の立つ。

　　ト丈八思ひ入れ。おたけ、無理に連れて奥へ入る。あと流行り唄になり

吉三　コレ、お七どの、斯う云へば侍ひの、どうやら恥かしい事ぢやが、幼ない時から云ひ號けばかりにて、顔も知らぬ其方なれど、連れそふ妻と思へばこそ、見らるゝ通りの戀ひ病。身が病氣の全快するも、こなたの心一つぢや程に、必ずつれなうしてたもるなや。

しち　そりやモウ、少さい時から父さんが、云ひ號けなさんしたと聞いたばかり。お顔も知らず、兎や角するうち、父さんは病死。一體わたしや今の母さんの所へ、生れ落ちると里に來て、實の母さんは外にござんすといふ事。それをわたしに沙汰なしに、あの母さんが八百屋へ連れ子。いはゞ生さぬお方ゆゑ、明暮れわたしへ無理ばかり。それに引替へ死なしやんした父さんは、それはそれはわたしをいたはり。

吉三　すりや、死なれた親御も、あの母も、實の親ではないといふのか。

しち　アイ、左樣でござんす。殊にあの母さんは、云ひ號けの男があつても武家の事。あのお方へは嫁入りさせぬとの事。それゆゑわたしや、ツイした事のいたづらが、思ひがけなう

ト思ひ入れ。

吉三　外に男を拵らへたか。

しち　サ、さうではなけれど、ツイしたあぢやらが

吉三　ほんまになつたと云ふのか。さう聞いては猶々思ひが。コレ、お七どの、氣に入るまいが、思ひ直して

しち　さう仰しやれば今さらに、そのいたづらな殿御へどうも、女の道が

吉三　立たぬと云やれば、身共は先から云ひ號け、殊に侍ひ。不義と聞いては武士の道が

しち　エ。

吉三　と云ふべき所を云はぬが當世。身が戀ひ病の癒る良藥。

ト　お七の手を取る。

しち　アヽモシ、それでは

ト逃げんとするを捕へ

吉三　首尾よく參つて

しち　エ。

吉三 夜風が肌に浸みる事わえ。

ト唄、時の鐘になり、屛風を引廻す。これより蟲の音、所々にて蛙の聲。變つた合ひ方になり、奥より丈八、探り〳〵出てくる。

丈八 ア丶コレ、どうぞあの婆アが、早く二百兩を受取ればよい。さうすると、その金を引ッたくり、都合が好ければ浚つて直ぐに駈落ち。それにしても、なんぼ拵らへ物でも、あの太左衛門どのがよく早く手廻しが行つたものぢや。

ト思ひ入れ。この合ひ方をかり、お竹出て來り

たけ コレ〳〵、丈八、なんでもあの侍ひに逢つて、二百兩をと思ふうち、皆くれに見えぬといひ、外の侍ひ衆も、どこへ行つたやら、見えぬわいの〳〵。

丈八 モシ〳〵、あの侍ひが居ませぬか。ハテ、合點のゆかぬ。その筈ではないが。モシ、あの善次に似た侍ひは居ませぬかえ。

たけ イヤ〳〵、あの善次のやうな、長い顏の侍ひも見えぬわいの。

丈八 そりや氣遣ひぢやわいの。何にしろ、金も寄越さぬ上に、あの娘御を、聟の侍ひに遣る事は出來ぬワ。

たけ　わしもさう思ふから、あの金の來るまで、娘を此方へ

丈八　さうなされませ。この屏風の內ぢや。

たけ　合點ぢや／＼。金も取らずに只は寢させぬ。サ、娘、來や。

トお竹、屏風の內へ入る。物音して、屏風の內よりお竹を投げ出す。見事に舞臺へ落ちる。此はずみに緣側へかけし毛氈、一度にめくれて、朽ちたる緣板、間より萱薄生えかゝりし體。丈八、悧りして同じく屏風へかゝる。これも投げ出され、此はずみに欄間へかゝりし簾落ちて、下は古き天女を描きし欄間になる。兩人起上がつて

兩人　聟めが投げた。

ト行きにかゝる。この時、緣の下より丈助、頰かむり、木綿やつしの形。太左衞門、以前の浪人の形ツカ／＼と出て、二人を支へる立廻りよろしく、太左衞門、タヂ／＼となつて門口の柱へ行きあたる。この時、磯貝の標札落ちて、立春大吉と記せし禪寺の古札現れる。丈八・丈助と立廻つて、上の方、杉戶へあたる、この時、杉戶倒れて、柳の大樹になり、下に高き石塔あり、此うち正面の屏風のうちより、お七逃げ出るはずみに、屏風倒れる。蒲團の上に吉三郎、八反の帶、誂らへ道樂肌になり、やつし一つ着にてお七の帶の端を捕へ、引寄せんとする拍子に、後へ立てし大屏風、バタ／＼と倒れ

後は荒れたる古寺の本堂、正面に本尊、羅漢、賓頭盧なその朽ちたる木佛あらはれる。六人一度によろしく見得にて、キッとなる。これより笙の入つたる寺めいたる凄き合ひ方。蟲の音。鐘の音、寺鐘になる。

丈竹　ヤヽ、すりや別莊と見せたるは

丈助　無住となつた古寺だワ。

丈竹　エヽ。

しちや　ヽ、そんならお前も云ひ號けの、藤助さまといふも僞りか。

吉三　娘を一番騙らうと、思ひ附いたも湯島にて、あの老ぼれが草履の打擲。頭巾で面は隱したが、あの時ぶたれた物貰ひ、その意趣返しを今こそ爰で

ト吉三郎、片々の草履を見せる。

たけ　アヽコレ、どうしてその草履、覺えはござらぬぞえ。

丈助　イヽヤ無いとはそりや云はさぬ。この祝言の相談も、最前湯島の出茶屋へ、打込んだ草履の片々、一足揃ふこの草履、これが證據で、こなたの履物。

ト丈助、一足合はせて見せる。

丈竹　そんなら草履の返報か。
太左　めぐり〳〵て湯島にて、ちよつと聞いたる八百屋のお七、その云ひ號けは山の内、家中に磯貝實右衞門、その悴の藤助が、云ひ號けの娘だと、聞き挾んだる地獄耳。仕事にならうと思ふから、賴んで聟に仕立てたも
吉三　顏も知らねば氏素姓、知らぬ磯貝藤助と、その名を騙つて祝言の、道具を引上げ、あはよくば、娘を此方へ揚げ玉に
丈八　そんなら先刻、あのうまい話しは、おれまで一ぱいはめる目算か。
たけ　此方は金のいる事から、二百兩とのあの話し、誠の事とはまつたは。
吉三　娘を引出す仕事の蔓、不便な者はお七ぼう、手籠めにあつたその上に、嫁入り衣裳も諸道具も、吊出す爲の今夜の祝言。こなたの門へこの頭巾、かむつて修行の物貰ひ、その時見染め染井なる吉祥院の隱居寺、無住であるを幸ひに、別莊なりと僞つて、弔ひならぬ婚禮を、引摺り込んだも白髮の阿母、罠にかゝつて遠方御苦勞、思へばいかいお力落しだ。

ト吉三郎、懷中より仲の町森田屋の頭巾を出して見せる。

丈八　そんなら先刻紙入れを、淩つて逃げた物貰ひ。





たけ　なんでおのれにその娘を

ト　お竹、立ちかゝるを太左衛門、引附ける。丈八かゝるを、丈助支へ、有りあふ古き卒塔婆を取つて荒縄にて手早く二人を棒縛りにして、施主の編笠をかぶせ、兩人を繋ぐ。お七、これを見て

しち　アヽ、母さんを

ト　駈け寄らうとするを、吉三郎、引附けるはずみにお七、懐より印籠を落す。吉三郎、取つて、よくよく見て

吉三　心覺えのこの印籠、吉の字菱の高蒔繪は

しち　それが尋ねる戀しいお方の

吉三　この印籠の持ち主を

しち　逢ひたう思うて明暮れに

ト　吉三郎、思ひ入れあつて

吉三　これを覺えてか。

ト　吉三郎、懐中より封じ文の紋附きし簪を見せる。

しち　ヤヽ、そりやソレわたしが覺えの簪。

吉三　いつぞや船の乘合ひにて
しち　小湊參りに父さんと
吉三　笠をかむつて顏さへも
しち　知らぬお方と大それた
吉三　其わざくれから渡したる
しち　吉の字菱の紋ぢらし。
吉三　封じ文なる簪を
しち　又の證據と取り交し
吉三　肌身に添へて片時も
しち　なくしともなう男ぞと
吉三　一つ印籠今日が日まで
しち　大事に持つた甲斐あつて
吉三　騙つた嫁が尋ねる女。
しち　怖いお前が戀しいお方。

吉三　思ひもよらぬ古寺で

しち　逢ふも不思議な

兩人　縁ぢやなア。

しち　逢ひたかつたわいなア。

トお七、吉三郎に縋る。皆々見て

丈竹　イヤ、呆れたものだ。

丈助　すりや、聟どのは、この子を前から

しち　只恨みなはその時に、わたしを捨てゝ

吉三　それもその節船の内、荷物を奪はれその中に、尋ねにやならぬ大事の一卷

太左　聞けば割り符の合ふ話し。そんなら違はぬその時の

吉三　ヤ。

ト思ひ入れ。太左衛門、さてはと思ひ入れあつて

太左　サア、逢うた女中はおしぼう、爰で逢ふのが勿怪の幸ひ。

吉三　今からおれが女房に

丈助　その仲人は即ちわしが
しち　わたしも今日こそ、お前の側を
吉三　離れぬ心か。
しち　なんのどうして、モシ、必ず見捨てゝ下さんすなえ。
　トお七、吉三郎に寄り添ふ。この時お竹、思ひ入れあつて
たけ　成る程、身腹を痛めぬ娘
吉三　親を捨てゝも
しち　殿御に附くは女子の習ひ。
吉三　その心なら、必ずこの上。
　トよき時分、後より龜、吾、頰かむり、勇み形にて、最前の吊り臺と、湯島で浚つた衣裳葛籠を、門口の脇より持ち出す。おなべ、手拭をかむりて乞食女房の形にて、小姓の主水これも襤褸を着たる乞食小僧の形、これをおなべ脊負つて出て來り
皆々　お頭、首尾よく
吉三　コレ。

ト思ひ入れ。

丈助　そんなら若黨、腰元も

音　盛り場覗ふ晝稼ぎ。

なべ　蒲鉾小屋の乞食の女房、この子を連れて二人前。

吉三　今夜の祝言、身の廻り、湯島で浚つた葛籠の内

丈助　衣裳がお間に相生の、めでたい婚禮。

しち　二世も三世も變らぬ夫。

吉三　これから直ぐに引ッ越し女房。

皆々　その行く先は、

吉三　コレ、滅多に爰では、

ト吉三郎、丈八とお竹へ心遣ひの思ひ入れ。

皆々　そんなら道具を

吉三　目立たぬやうに

皆々　合點だ。

吉三　目立たぬ次手

ト吉三郎、件の頭巾をお七に渡す。

しち　すりや、この頭巾で

吉三　顔を隠して

しち　お前と一緒に

ト お七、頭巾をかむり、吉三郎、手拭をかむる。

たけ　エヽ、腹の立つ。

丈八　あの子をやつては

ト丈八寄るを吉三郎、突きたふす。ヨロ〳〵としてお竹にこけかゝる。

しち　母さん赦して。

トお七、お竹に向つて手を合はす。

吉三　コレ。

ト木の頭。

皆々　お頭。

吉三　シイ。

ト押へろ思ひ入れ。皆々は荷を擔ぎあげる。お七は吉三郎に縋り、丈八とお竹はグンニヤリとなる。双方とたんの仕組み、よろしく、時の鐘の送りにて、　ひやうし　幕

（作者　鶴屋南北）

五幕目　　友平住家の場

役名——釜鳴屋の鐵灸お杉。友平女房、おさご。下郎、友平。磯貝藤助。家主、長右衛門。醫者大崎本立。米屋、ひね藏。書鳶、千駄木の音。判人、狸の金八。富岡屋吉助。道具屋友七。駕籠舁き、彌作。髪結ひ、佃の喜藏實ハ八丈小僧吉三。

本舞臺、三間平舞臺の世話場、向う鼠壁、上の方、障子屋體、正面押入れ、よき所に佛壇、下手門口、朝鮮矢來、すべて友平隠れ家の模樣よろしく、下谷山伏町あたりの體。てんつゝ、角兵衛獅子にて幕明く。

ト爰におさご、世話女房の拵らへ、七輪に藥鍋をかけ、煎じて居る。よき所に與七、道具屋の拵らへ

にて、金八と一緒に莨のみゐる。

與七　コレ／＼、お内儀、この間湯島で頼ましやつた、こなたの奉公の口。その事について、この金八どのといふ判人を連れて來ました。何分この品も、金さへ出せば、隨分御亭主に賣つて進ぜるつもり

金八　モシ、おかみさん、わしは金八といふ、判方を渡世にしてゐる者でございますが、この中、深川の親方が、お前に逢つて、身代金の事も、大抵小極まりになつてゐるとの事。それにしても、洗ひ方はわしらが役。そんならいよ／＼金高は、七十兩で承知でございますかね。

さご　ハイ、それはモウ、金の事は、いか程なりとも、あの道具屋さんから買ひうけまする、代物の價にさへなりますれば、外に望みはございませぬ。どうぞお前方、御相談で、あの品が友平どのゝ手に入りまするやう、お願ひ申しあげまするわいな。

與七　それは最初から話し合ひでござるが、何を云うても、お前も亭主持ちの事。此お人が云はれるには、去り狀が附かねばし憎いとの事。親方の吉助どのも、奉公人の事について、池の端の麥飯屋に來てゐられるゆゑ、今一應逢つて、早く方を附けて進ぜませう。

さご　何分よろしく、御所持の一卷を、夫の手に入れまするやうに、お願ひ申しあげまするこ

金八　そりや氣遣ひさつしやりますな。與七さんも七十兩なら、お前の方へ賣らうとの事。わしらが親方も、お前ならその金を出さうと云はれるから、これで双方極つてゐるが、御亭主の去り狀が肝腎でござるぞ。

さご　左樣でござりますか。委細承知いたしました。

與七　そんなら、かみさん

金八　親方を連れて來ませう。サア、行きませう。

ト兩人、向うへ入る。

さご　エヽ、忝い。やう／＼の思ひで、夫の望みが叶うた。若旦那にも、さぞお喜び。

ト此うち上手の障子を引抜く。藤助、病ひ鉢卷にて、煩らうてゐる見得。

藤助　忝い其方の深切。それ聞いて、病氣も一度に癒つたやうな。ヤレ嬉しや。手を清めて、神々樣へ。

ト我れを忘れ、立上がらうとして、撻となる。おさご、駈けよつて介抱なし

さご　お危なうござりますわいな。

藤助　大事ないノ＼。其方の話しに有頂天になつて、思はず立上がつたわいの……コレ、どうぞ神棚へ

御燈火を上げて下され。

さご　畏まりました。

藤助　ハテ、時節もあればあるものぢやなア。

ト唄、時の鐘になり、藤助、喜ぶ思ひ入れにて、探り〳〵舞臺へ出る。おさご、火打ち箱を取出し、神棚へ燈明をあげる。この鳴り物をかりて、向うより友平、二幕目の形、槍をかたげ、金才覺の思案しながら出て、思はず門口へ來て

友平　オヽ、うか〳〵來たら、われが內まで袖乞ひの姿で……イヤ〳〵、この形を若旦那にお目にかけては、一倍御病氣の障り。

ト思ひ入れあつて、件の槍を垣の間へ隱し、裾を下ろし、こなしあつて

女房ども、いま戾つたぞ。

さご　オヽ、こちの人、戾つてか。モシ、若旦那、友平が戾りましたわいな。

藤助　オヽ、戾りしか。嬉しや〳〵、待ちかねたわいの。

ト此うち友平、內へ入り

友平　もうお待ちかねだらうと、殊の外急ぎましたが、何やら彼やら用事がござりまして、只今戾りま

した。今日は御病氣は如何でござりましたな。

藤助　藥の加減か、心よい樣子なれど、何をいうても、大望抱へし身共ゆゑ、心に勵みはあれど、親人の御最期を思ひ出し、無念口惜しいと思ふのが、病の障り。膝口の疵が苦になつて、此まゝでは首尾よう願ひは叶ふまいかと、それゆゑ胸もふさがつて

友平　これはしたり、其やうに思ふが、矢ツ張り御病氣の元。疵口は、もう近々に御全快。それにつきましても、尋ねまする神妙劍。この間もお話し申します通り、在所を尋ね出し、手に入れまする一段でござりますれば、いま少し金子の調達いたせば、お手に入れまする……併しながら、私しが姉のおくまに、ソトめぐり逢ひまして、金子の事も賴み置きました。又外に、御家中の內でも相談に及ぶと仰しやつて下さるお方もござりますれば、是非とも一卷はお手に入れまする。必ずキナ〳〵思はぬがよろしうござります。

藤助　その一卷が何より氣遣ひ。この藤助が、尾花染五郎と申せし砌り、承れば五歳の時、兄者人吉三郎どのは、十四の年に御家中の子息と、子供喧嘩に手疵を負はせ、お國許にも居られず、わしが爰に持つてゐる、コレ

ト守り袋より目貫を出し

こりやコレ鶉の目貫、片々の方は兄者人、兄弟二人へ引分けて、親人の下されしこの片々を持たれ、お國を追放、その折柄、家に傳はる神妙劒の一卷を御所持あつて、武者修行のお望み、最早當年までは十三年、便り音信ないといふは、もしや兄者人、途中にて、病死などなされはせぬかと、思ひ過しが一倍身にこたへ、心細うなるわいの。

さご　これはしたり、其やうな事思し召しては、御病氣の障り。併し、兄御樣は、あなたが五つの時と仰しやれば、今年で丁度

藤助　二十六歳におなりなさるゝ。殊には友平が姉のおくま、我れ／＼が路用の足しにと、苦界の勤めその忠節が身に染みて

友平　アヽ、もう／＼其やうな、クサ／＼した事を思はぬがようござります。これまでお目にはかゝらねど、未だお年若な兄御樣、武者修行の途中にて、金子のお入用でも出來いたして、金子の抵當にあの一卷を……ナニ／＼、お命に障りは決してござりませぬ。私しもお案じ申しまして、所々で占ひを見てもらひましたれど、決して御身分に係りはござらぬとの事。

さご　その上、あなたの仰しやるには、一卷の在所が知れても、價の金の才覺が、どうしてならうと苦勞を遊ばし

友平　成る程、そりや御案じなさるも、御尤もでございまするが、モシ、若旦那、人はいつ何時、幸ひがあらうとも知れませせぬ。この間途中におきまして、御家中の服部藤太夫さま、御用人辻浦源内さまにお目にかゝりましたれば、段々とお尋ね下さりまして、この程如何暮らし居るとの事ゆゑ委細を申し上げましたれば、尤も至極、飯米なぞは、誰れ〳〵と申し合せて、不自由のないやうに送つて進ぜるから、心置きなう思ふがよい。また金子入用の事があらば、遠慮なく申して参るやうにと、仰しやつてゞございます。若旦那、お逢ひなされたら、ようお禮を仰しやつて下さりませ。

藤助　すりや、これまでの朋友方が

友平　左樣でございます。

藤助　エヽ、忝い。それといふも親人樣が、剣術の一手も、御指南ありし人々ゆゑ、志し過分。アヽ、忝い。

友平　仰しやる通り、みな大旦那のなさるも同然……それについても、女房、昨夜なぞも夜に入ると、おりやア皆目

藤助　ヤ、そんならわが身は、眼病なるか。

友平　イエ〳〵、眼病と申す程でもござりませぬが、轉ばぬ先の杖とやら、目藥なとつけて見ませう。
コレ、おさご、大儀ながら、池の端の目藥を買うて來てくれぬか。

さご　アイ〳〵、どうでわたしや、大師樣へお參り申すゆゑ、戻りに買うて來ませうわいな。

友平　旦那も夜は風が當りませう。お冷えなされぬがよろしうござります。

藤助　イヤモウ、夜が短くても、心に願ひのあるせゐか、寢られぬまゝに思ひ過しを……ドリヤ、寢所へ參らうわいの。

さご　私しは大師樣へ、モシ、行てくるぞえ。

ト唄になり、おさごは向うへ入る。友平、藤助を介抱して上手の屋體へ入れ、殘つてこなし。

友平　大望のあるお身の上ゆゑ、くよ〳〵思し召すもお道理。この奴めもこの程は、搗てゝ加へて鳥眼の難病。お聞きあつたらお案じと、隱して居れど夜に入ると……それにしても、氣にかゝるは姉者人、思ひがけなき人殺し、殊に亭主を殺せしと、世間の取り沙汰。切られて死んだは弟の傳吉。正しく敵の島川に、命を捨てゝ金瘡の、藥となるとは、なんの報ひで

トあたりを見廻し

これはしたり、此やうな事が若旦那のお耳へ入つては、又お案じ……何は兎もあれ、可哀や弟

の傳吉が、未來の苦患を助ける爲、せめて囘向を

ト佛壇へ向ひ、念佛を唱へる。てんつゝになり、向うより長右衞門、家主の形。本立、醫者の拵へ。

ひね藏、米屋にて、ワヤ〳〵云ひながら出て、門口へ來り

長右 サア〳〵、お醫者樣も、お入りなされまし。

本立 イヤ〳〵、マアお家主から

ひね マア〳〵、お辭儀なしに入らつしやりませ。

ト友平、この聲を聞き、うろたへて、そこらへ隱れんとするうち、三人ズツと入る。

長右 友平どの、よう內に

三人 ござつたの。

友平 ハイ、よいお天氣でござります。

長右 イヤモウ、天氣は結構でも、結構でないは家賃の催促。コレ、あまり投げやりでござるわいの。家主の長右衞門、地主へ濟みませぬ。たつた今、勘定が出來ずば、店を明けて下さい。イヤサ、店を立つて下さい。

友平 ハイ〳〵、御尤もでござりまするが、此方も國許より參りまする物なりが、今日まで

ひね　アヽ、コレ〳〵、物なりか雷が知らぬが、爰へ越して來た日から、三人の口を仕送つた、わしらが米代、いつ拂つて下さるのだ。借錢乞ひに米屋とは、あまり古風な催促ながら、せたげに來ました。友平どの、サア、方を附けさつせえ〳〵。

本立　モシ〳〵、米屋さん、命を繫ぐ米代の催促、御尤もでござるが、愚老も又、命を助ける藥代、疝口癒す膏藥から、氣分が惡いソレ煎藥、その上おまけに貴樣の眼病、若いお人の鍼按腹、その間には買ひ藥、煉藥散藥間に合はす、名醫と呼ばれし大崎本立、これまで藥を續けさせ、今更外の醫者へかけ拂が方へは御沙汰なし。それがお侍ひの行跡か。酒の呑み倒れは間々あれど、藥の呑み逃げ、愚老この年まで聞きませぬ。サヽ、藥代の勘定して下さい。何百何十何服と、此方にも記してござる。あまりと申せば、醫者を馬鹿にした男だ。

長右　イヤ、お前の腹立ち、いしやさま尤もだ。此方は家賃の勘定、疊を上げてこの通りと、地主へ見せねば役儀が濟まぬ。サア〳〵、奥から上げようか。勘定さつしやるか。

ひね　店立てを食ふなら、これまで食つた勘定さつしやれ。

本立　藥の呑み逃げ、でんどへ出ようか。

友平　サ、そこを暫く。





ひね　イヽヤならぬ。米代寄越すか。
友平　サア、只今とあつては
長右　家を明けるか。
友平　サ、そこを偏へに
長右　イヤ〱、地藏の顔も三度とやら。疊を上げて持つて行く。
木立　わしらもそこらの諸道具を
友平　サア、そこをどうぞ
三人　ヤア、退かつせえ〱。
ト縋る友平を、突きのけ〱、長右衛門は疊へかゝる。兩人はあたりの諸道具を持ち出さんとする。友平奥へ心遣ひをしながら、これを留めんとする。この時、懐より薬袋に入れし報謝米、紙箕入れよりみたけ錢、パラ〱とこぼれる。三人見て
それ〱。米粒と端錢が
ト取らうとするを双方制し、奥へ聞へると拜み、その上へべつたりと座つて
友平　お靜かに〱、お靜かになされて下さりませ。

ト合ひ方になり

お三人様、御尤も至極でござりまする。御恩になつたあなた方。袖に致さう心はござりませぬ。何を申すも浪人の、あの若旦那は御難病。この奴の艱難を、どうぞお知らせ申すまい、成るたけ隱して御主人に、不自由な體を見せまいと

トこぼれし米と錢を指さし

ナ、これでござります。定めて御推量なされたでござりませうが、一文奴が造り髭、手づからちよつとほつれたる、油氣もなき備後の國、伊兵衛佐兵衛の道行を、見習ひまして恥かしい、藁の鳥毛のお國入り、頭を大地へ踏みつけて、面押拭ふ袖乞ひの、一錢二錢の一摑み。面目ないが私しも、武士のはしくれ、無念でござります、殘念でござりますわいの。何を申すも主人の病氣。あだてに盡きて女房までに、隱し包んで古朋輩の、お貢ぎを毎日々々、受取りに參りますると僞るも、お主に御苦勞かけまい爲。御存じもないあなた方に、御不沙汰いたすもこの譯ゆゑ。モシお三人様、長うとは申しませぬ。あなたの御病氣全快まで……モシ、素手でお詫びを申すも如何少しなれども、この褞袍。

ト着附を脱ぎ、襦袢一つになり

これを差出します。これなとお賣りなされて、お心ゆかしに、お持ちなされて下さりませ。錢になるなら十本の、指を殘らず切つてなと、申し譯を致さうに、お三人樣、これぢや。拜みます。どうぞ暫くの間、御料簡なされて、お待ちなされて下さりませ。

ト手を合はせる。此うち三人、シク〳〵泣き出し

長右　成る程、こなた樣は、アヽ、天晴れな忠心者でござるわい、ナウ、お二人。

本立　左やう〳〵、着物を脱いで心ゆかしに、取つてくれと云つたとて、人を助けるこの醫者が、人を裸にどうされませう、

長右　お二人がその氣なら、この家主も家賃の勘定、待つてやりませうほどに、アヽ風邪でもひくと惡い、着物を着さつしやれ。

友平　イエ〳〵、それでは私しの心が濟みませぬ。どこの端へも足りますまいが、どうぞこの品、お取り下さりませ。

長右　コレサ〳〵、わしも家主こそ致せ、江戸ツ子の切れツ端でござるぞ。そんな逹引のない事は致しませぬ。貴樣の心の濟むやう、ちよつと受取を書いてやりませう。硯箱を貸さつしやれ、

ト友平、硯を持ち出る。長右衞門、鼻紙へサラ〳〵と書き

サ、この通り、店賃六月分、慥かに受取り申し候ふ。これで残つた所を、都合の好い時に拂はつしやい……これでは貴樣も達引に、この着物が着られるであらう。

ひね　成る程なア、大家樣は役柄だけ、解つたお人だ。コレ、友平どの、爰に白米が一分ぶりござる。これを貴樣に進ぜるから、勘定するといふ事は、先の物前まで待たれさうなものだ。サヽ、この袋の米、どうぞ取つて下さい。

ト擔いで來たる麻の袋の米を押出す。

木立　イカサマ、義を見てせざるは勇みなし。愚老も人を助ける醫者でござる。コレ、爰に廣東人參が少々ござる。今度かゝらしつた醫者が、もし人參と云はれたら、これを用ふるがよい。達引も知らいで、醫者の業はなりませぬ。

ト懷中より疊み包みし人參を出してやる。友平、こなしあつて

友平　アヽモシ〳〵、それでは却つて迷惑いたしまする。

三人　イヤ〳〵、大事ござらぬ。取つて置かつしやい〳〵。

ト此うち藤助、障子を明け、合點のゆかぬこなしにて

藤助　コリヤ〳〵、友平、何を爭ふのぢや。

　　卜これにて友平、この體を知らせまじと、思ひ入れあつて

友平　へイ／＼、何も爭ひは致しませぬ。この衆は、なんでござります。お家主樣に、この間まで御療治なされた大崎さま、あちらは米屋の御亭主。今朝まで滯りなく、藥種代、米代、店賃を、殘らず御勘定を致しましたるゆゑ、その禮を申されにござつて、猶この上の所を賴むと仰しやつて、ツイ高聲を致しました。

ひね　左やう／＼、御勘定も、ようお拂ひが出ましたゆゑ、何分澤山に米を取つて下され。

木立　左やう／＼、今朝ほどは又、藥禮を澤山に、御叮嚀な儀で、ちよつとお禮に罷り越しました。

長右　家賃も、世話の燒けぬお人ゆゑ、百萬年も私しの店にござるやうにと、お願ひ申しに參つた。

藤助　家賃諸拂ひ滯らぬやうと、家來に申しつけござれば、その筈の事。何事も手前が病中ゆゑ、御面會も仕らぬが、右の儀は、よく友平にお賴みなさるがようござらう。

長右　イヤ、友平どのも御承知の樣子。何分よろしう。

三人　お願ひ申し上げまする。

長右　オヽ、ほんに、わしはお觸れがあつて參つたが、コレ／＼、友平どの、この度賴朝公御上洛につきお留守中、もし叛逆人が鎌倉へ、討入るまいものでもないとあつて、町々へ櫓を建てられ、太鼓

をかけ、四ツを合圖に木戸〳〵を締め、往來の通路を止め、太鼓を打てば木戸〳〵を開き、往來さすとの事。もし濫りに太鼓を打つ者は、焙烙の死刑に行ふと、嚴しいお觸れでござるぞや。

友平　すりや、四ツ過ぎに太鼓が鳴れば、自由に木戸〳〵を往來が出來ますのぢやな。

長右　オヽ。まだその上に、この人相書。

ト懷中より書き物を出し

これは八丈小僧吉三といふ者。これは盜賊ぢやさうなが、本鄕八百屋の娘お七と申すを、云ひ號けの男と僞り、祝言の夜よりその女を連れ、行くへ知れずとの事。嚴しいお尋ねでござる。

ト　これを聞き友平、藤助、思ひ入れあつて

藤助　すりや、何と云はるゝ。八百屋の娘お七と申すを、云ひ號けの男と僞り、吉三と申す盜人が、同道いたして行くへ知れずとな。

長右　左やう〳〵。

藤助　兄者人の幼名も吉三郎。

友平　併し、その者は、八丈小僧と異名のある曲者。

藤助　身が云ひ號けのおしゆを騙り、行くへならなりしとあれば、世が世にあらば、その盜賊の、吉三とや

らは

友平 申さばあなたの女敵なれど、もしやその吉三とやらが、よもや兄御の

藤助 イヤ〳〵、世間に似た名はまゝある習ひ。殊にお觸れは盗人吉三。ハテ、似寄りの者も

ト思ひ入れ。

長右 いくらもござります。この間も宿場で、四六のおくまと申す女が、亭主とやら、兄弟とやらを殺して逃げたとの事、捕へらるゝとこれなぞは、獄門か磔刑。イヤ、恐ろしい奴もあるものでござる其おくまの人相書も爰にござる。

ト出して見せる。友平ギックリ。

友平 すりや、姉者人も

藤助 ヤ。

友平 アイヤ、思ひがけなきお尋ね者、殊におくまと申す女。

藤助 其方の姉も慥かお熊。

友平 エ……イエナニ手前が姉はおこま……ハイ、おこまと申しまする。

長右 イヤモウ、人殺しや騙りの詮議で、町役人はごつてかへします。これから又行事ゆゑ、町内を觸れ

ねばならぬ。忙しい事でござる。
本立　オヽ、お帰りなら御一緒に
長右　イヤ、私しは合ひ長屋を觸れて歩きますから、お別れ申しませう。
ひね　ほんにさうぢや、そんなら友平どの。
三人　お暇いたします。
友平　これはお早々……この上ともに
藤助　お心安う
ひね　サ、澤山に御用仰せつけられて下さりませ。
友平　ようお出でなされました。
ト合ひ方になり、長右衛門は下手へ、本立ひね藏は向うへ入る。兩人殘つて
藤助　コレ、友平、今日は大分心よいが、この鬢のほつれが、顔へかゝつてどうもならぬ。そつと束ねてはどうあらう。
友平　サア、私しも左樣存じましたゆゑ、歸りがけに醫者どのへ寄つて承りましたが、髮ぐらゐはお結ひなされても、大事ないと申されました、まだお風呂は惡うござります。

藤助　そんならわが身、ちよつと束ねてはくれまいか。

友平　イヤモウ、御覽の通り奴めは、髮の事は大分不調法ゆゑ、戻りがけに、喜藏と申す髮結ひに逢ひましたゆゑ、賴んで置きました。

藤助　それはよう心附いたな。顏ぐらゐは剃つても大事あるまい。

友平　それしきの事は、よろしうござります、そんならちよつと、湯を拵らへませう。

藤助　アヽ、取上げてもらつたら、さば〳〵と致すであらう。

ト藥罐へ水を入れ、七輪へ掛け、煽ぐ。唄になり、向うより吉三郎、廻りの髮結ひの拵らへ、五十日鬘、下駄がけ、鬢盥を下げ、跡より音、前幕の形にて、跡につき、出て來り

吉三　コレ、そんならてめえが今云ふ通り、この間おれが名乘つた、藤助といふなア、棟割り長屋の後合はせ、あの浪人の若い男か。

音　さうよ。鎌倉の浪人、磯貝藤助といふ侍ひは、八百屋のお七と云ひ號けだといふ事。內には夫婦者の、家來を使つて、薄々聞けば、敵を尋ねる浪人と聞いたが、この間の染井の始末。もし女敵とこなさんを。

吉三　そんな事かも知れねえ。いま丁度、そこへ仕事に行くから、すびいて見べえ。殊によつたらコレ

ト音に囁く。

音　そんなら今夜

ト こなし。

吉三　間違へるな。

音　呑み込んだ。

ト兩人、舞臺へ來り、音は橋がゝりへ入る。吉三郎、門口へ來て

吉三　ハイ、御免なされまし。お來ねなさるは、此方でござりましたね。

友平　オイ〳〵、此方でござる。御苦勞々々。

吉三　ハイ、御免なされまし。

友平　あれにござる旦那だが、御病氣で、さぞこぐらかつて、面倒だらうが、そつとお賴み申します。

そして、お顏も剃つてあげて下さい。

吉三　畏まりました。それぢやアお湯が

友平　いま沸かして置きました。若旦那、此方へお出でなされませぬか。

藤助　オヽ、左樣いたさう。

ト友平、藤助ないたはり、よき所へ連れ來り、盥に藥罐の湯を取り、澁團扇を毛受けにして、こなし。
吉三郎、藤助の後へ廻り

吉三　お髮から致しませう。

藤助　さぞこぐらかつてゐるであらう。

吉三　其やうでもござりませぬ。

藤助　ナニ友平、いま家主の話しといひ、よもやとは思へども、町所も同じ商ひ、八百屋とあれば、身が云ひ號けのお七と祝言なし、身が名を騙りし曲者は

ト　これにて、吉三郎こなし。

友平　へイ、八丈小僧吉三とやら……あなたの云ひ號けのお七どのを引出し、今に行くへが知れぬゆゑ鎌倉より嚴しいお觸れ。

藤助　云ひ號けなれは、便り音信いたし居らば、刀の手前、打捨て難き不義の兩人。疎緣に致したが、まだしも仕合せ。さはさりながら、討たねばならぬ

トきつと云ふ。吉三郎悔りして

吉三　エ。

友平　アモシ

ト思ひ入れ。藤助こなし、吉三郎、髪を結ひしまひ

吉三　ヘイ、お髪はようござります。お顔を剃りませう。

藤助　オヽ、世話ながら

友平　よう剃つてあげて下さい。

吉三　おしめしなされませ。

ト變つたる合ひ方になり、吉三郎、手合せする。藤助、顏をしめす。吉三郎、剃りにかゝり

モシ旦那、この頃噂のある、八百屋の娘を騙つた奴、お侍ひの名を騙つて、杯をしたれば、騙りながらも誠の夫婦、それでも矢ッ張り不義間男、とマア、あなたにしろ、もしそんな騙りに、あなたがお逢ひなされたら、どうなされます。

藤助　ハテ、そりや刀の手前、武士の常。

吉三　その二人の者を。

友平　御主人がお助けなされても、附添ふ家來が捨て置かぬ。助太刀しても

吉三　ヘヽ、イヤ、滅多には討たれますまい。

友平　そりや又なぜ。

吉三　ハテ、現在嫁を騙られる、腰抜けの聟に、助太刀しようと思つても、その切れ物は浪の上の浮丸竹光では討たれますまい。

友平　ハテ、そりや竹光でも木太刀でも、錆剃刀の刃を渡る、手練があつても見遁がさぬ。そりや職人づれの知らぬ事。

吉三　その職人の町髪結ひ、町場を廻る身分でも、病み耄けたる武家方より、ちつとやそつと手の内も

ト剃刀を逆手に持つ。藤助、思ひ入れあつて

藤助　身も間男と見るなれば、願ひある身の血祭りに、並べて置いて

ト腰の脇差を抜討ちに、側なる砥石を二つに切り

まツこの通り。

吉三　その手練なら髪結ひめも

ト剃刀を咽喉に逆手に構へる。友平、その手を捕へ

友平　まだ前髪のお旦那の、髭もないのに、ハテサテ麁相な。

ト剃刀を引ツたくり、きつとなる。

吉三　成る程お前の云ふ通り、お若衆樣に麁相な仕事。次手にお前も、ちよつとたばねて

友平　イヤ、下郎は地髮、御時節柄

吉三　髮結ひ錢のいらぬ算用。ハテサテ始末な

友平　ヤ。

吉三　奴さんぢやなア。

　　ト三人思ひ入れ。下手より音出て來り、門により

音　髮結ひさんは居りませぬか。オイ、お前、ちよつと束ねてもらひたい。おれと一緒に

吉三　ハイ、只今參ります。モシ、旦那、御用の節は何時なりとも、お呼びなすつて下さいまし。

友平　アイ、また賴みます。さうして、貴樣の內は

吉三　ハイ、この裏通りの棟割り長屋、この頃越した一人者。

友平　ア、、そんなら長屋內か。

吉三　左樣でござります。

友平　ハテ、知らぬ事とて

吉三　いつ何時でも

藤助　して、こなたの名は

吉三　ハイ、筑土下からこの間、越して來た髪結ひの喜藏。

友平　こなさんが喜藏か。

吉三　アイ、お心安う

友平　呼びに行きます。

藤助　來て下され。

吉三　畏まりました。

音　サア、早くしてくんねえ。

ト唄になり、せり立て、吉三郎、心を殘して出る。友平目を附け、藤助、思ひ入れあつて障子屋體へ入る。吉三郎、思ひ入れあつて、音と一緒に橋がゝりに入る。

友平　今の髪結ひ喜藏とやら、慥かにこの程藤助さまのお名を騙り、婚禮なしたる曲者に……ハテナア

ト思ひ入れ。唄になり。向うよりおさご、歸つて來り、内へ入る。

さご　友平どの、いま戻つたぞえ。

友平　おさご、なんでマア其やうな、味な身振りで……コレ、頼んだ目藥、買つて來たか。

さご　アイ、買うて來ようと思ふうち、近所のお方に逢うて、松坂屋で馳走になつて、その目藥を、ツイ忘れて戻つたわいなア。

友平　あれほど賴んでやつたのに……何にしろ、大さう醉つてゐるではないか。

さご　サア、其やうにたべたやうでもなかつたが、なぜか此やうに醉うたわいなア。

トこの時向うより、四つ手駕籠出て、駕籠の者は頰かむり。跡より與七、金八附いて出て來り、門口へ下ろし、窺ふ。

友平　てめえも好い氣な者ではないか。知つての通り、七轉八倒の苦勞をしてゐる、おれが前をも思はず、其やうに酒を飮み歩くといふがあるものか。

さご　あるものでも何でも、わたしには仕樣がないわいな。

友平　そんな挨拶があるものか。酒に醉つては相手にならねえ。

さご　飮んだが惡けりや、わたしに暇を下さんせ。わたしや暇が貰ひたいのぢや。

友平　ナニ、暇をくれ……うぬ、亭主に向つて、法外な事を吐かしをる。

ト立ちかゝる。この時、門口より與七金八、これを留めて入る。

二人　マア／＼、御亭主々々々、料簡しなせえ／＼。

友平　フム、ついに逢うた事もないお前方、何の用でわしが内へ

與七　サア、わざ〳〵わしらが來ましたは、今お內儀の云はれる通り、こりや女房に、暇をやらずばなりますまい。

友平　ア、コレ、藪から棒にいらぬ口出し。たとへ呑み倒れの女房でも、親旦那から貰うたれば、その義理へ對しても、滅多に暇はやられぬ仕儀。

ト此うち駕籠の中より吉助出て、聞いてゐて

吉助　その主人への義理を思はゞ、こりやお內儀に、暇をやらずばなりますまい。

友平　オヽ、また一人、知らぬお方が……なぜ暇をやらねば、主人へ義理が立ちませぬな。

吉助　その相談は道具屋の、與七どのゝ方にある、神妙劍といふ一卷、代金は卽ち七十兩、內儀が買ふと約束して、拵らへるは內儀の身代、たつてわしへの賴みゆゑ、七十兩に相談極め

金八　去り狀取れば直ぐに證文、內儀の身代七十兩。

與七　その金わしが受取れば、爰に持參の神妙劍。

ト懷より出しかけて見せる。友平、悄り思ひ入れ。此うち藤助、障子を明けて窺ふ。

友平　ヤヽ、すりやその一卷を手に入れうと、女房が身を賣つて、アノ七十兩を

さご　サ、それぢやによつて、わたしに暇を下さんせいなア。
友平　ムウ、出かした。いかにも暇を、サ、やらねばならぬ手詰めの場合。とはいへそれでは親旦那へ
　ト此うち藤助、立出で、
藤助　サ、草葉の蔭の親仁樣へ、身勝手ながら某が、あの御位牌へ申し譯。金拵らへるも家の爲、どちらへするも忠義は一つ。おさごが切なる願ひに任せ、暇の状を
友平　あなたが左樣仰しやつて下されば。なんの否を申しませう。去り状やればこの年月、尋ね探せし一卷が、あなたのお手に入る事なれば、いかにも去り状遣はしませう。
吉助　わしも認めて來たこの證文……オヽ、まだ内儀の名前を書き入れずに置いたゆゑ、極まれば直ぐに書き入れて、金も卽ち七十兩。
與七　望みとあれば神妙劍、直ぐに渡して
　ト吉助は證文、與七は一卷を出す。友平、硯を引寄せ
友平　いかにも、女房が志し、嬉しいぞよ。
さご　ちつとも早う、友平どの。
友平　オヽ、ちよつと一筆。

ト さら／＼と書き、宛名を書かうとして

いかに亭主が爲ぢやとて、罪なき女房へ暇の狀。

さご エ。

友平 世はさま／″＼な。

ト愁ひの思ひ入れ。この時、向うバタ／＼になり、お杉、宿場女郎の拵らへにて、走り出て直ぐ内へ入り

すぎ 友平さん、内にかえ。

ト友平見て

友平 ヤ、こなたはこの中

與金 アノ品川の

すぎ アイ、お杉だよ。友平さん、よくお前、騙したね／＼。

友平 アヽコレ、何もこなたを。

藤助 見馴れぬ女が、友平に馴れ／＼しく

さご してマアお前は、どこから來へ。

すぎ　アイ、わたしや品川の釜鳴屋に、質に入つた勤めの女、金のしらちもついたから、今から身儘にかゝり合ひの、これ程もない無疵もの。それだによつて、わたしや友平さんの女房サ。

吉助　ナニ、爰の亭主の

すぎ　アイ、女房だよ。

金八　イヤ、とんだ交ぜッ返しだ。

ト友平、迷惑なるこなし。おさご、ムツとして

さご　モシ、女中さん、お前、誰れに斷わりなさんして、友平どのゝ女房ぢやと云はしやんす。

すぎ　誰れに斷わりがいるものかね。當人の友平さんと、云ひ交した事だもの、誰れに遠慮があるものか。聞けばお前は、爰の女房のやうな事を云ひなさるが、コレ、友平さん、この女中は、本當にお前の女房かえ。

友平　成る程、こりや前々から連れ添うてゐる

トもぢ〳〵する。

すぎ　これいな。お前はわたしに、女房のある事は云はないよ。それだによつて、わたしも承知、仲人なしの轉び合ひ、古風なやつだが、今日爰へ駈け込んで來たのだよ。それを又、内に居るのが、

女房だと云ひなされば、お前、わたしを弄みものにしたのかえ。

友平　これはしたり、何しに好い機嫌らしう、こなたをわしが弄んでよいものかいの。たゞ、何事も旦那の手前、女房の聞く前、靜かにしてくれ〳〵。

すぎ　なにサ、靜かにする譯も何もねえ。あのおかみさんに暇をやつて、わたしを女房にさへ持つてくんなされば、彼れこれ云ふやうなわたしでもないわね、

さご　コレ、こちの人、このマア身貧な中で、ようマアお前、女郎狂ひを……エヽ、お前はなア〳〵。

ト友平の胸づくしを取る。友平、困りしこなし。

藤助　尤もぢや〳〵。今も今とて、我が身を賣つて金拵らへ、大切な一卷を手に入れんと、貞女を盡す女房を捨て、それに引替へ此やうな

すぎ　オヤ、此やうなとは、わたしの事かえ。大分大風に物を云ひなさるが、モシエ、この人だといつて、いはゞ袖乞ひ同然な。

友平　アヽコレ、それを云つては、どうもこの身の

すぎ　それ見なさいな。まだその上に、朋輩女郎のおくまさんは、聞けばお前の姉とやら。弟を切つたが間違ひで、亭主殺しと世間の評判。

藤助　ヤ、姉のおくまが、どう致したと。

友平　イエ〳〵、別してあなたが、お聞きなされる事ではござりませぬ……コレ、ちつと遠慮もあるものだ。云はいでもよい事を。

すぎ　ほんに、さしがあるなら云ひやすめえが、モシ、お内のおかみさんえ。ぬしの女房は、憚りながらわたしだよ。あの友平さんのおかみさんは、駈けこみ女房の、わたしがなるよ。

金八　コレ〳〵、今さらそんな交ぜッ返しが出ては、いま證文の一段になつて

さご　さうでござんす。仕方が惡ければ、もう〳〵わたしや、勤め奉公には行かぬわいな。

與七　それでは此方も、滅多にこの品出されぬわえ。

ト兩人ともに金と一卷を懷へ入れる。

さご　モウ〳〵、方が附かねば、わたしや滅多に行く事ぢやないわいな。

すぎ　ハテ、その方は直ぐに附くわな。お前は勤めに行つて、亭主に金を拵らへてやる氣ぢやアないか。それならそれで、お前が貞女とやらを盡して、金の抵當に賣られて行けば、友平さんは直ぐに獨り身、その跡へわつちが、ずる〳〵に入れば、それでも方は附き切つてゐる。

さご　アレ、あのやうな、厚かましい事を云うてぢやわいなア。

すぎ　何をわつちが厚かましい事を云ふえ。わたしも苦界の端を、ちつとは知つてゐるよ。何が厚かましいえ。ほんに、好い加減に馬鹿にしな。あんまり口が過ぎるによ。

ト最前の砥石を取つて、おさごの顏を打つ。これにて顏へ疵附き、ワツと云うて倒れる。

與七　ヤア、內儀の顏へ、疵が附いたく。

吉助　オヽ、此やうに疵物になつては、折角買はうと思つた代物が、こりや相談は

與七　イヤ、とんだ番狂はせだ。

さご　すりや、わたしの顏へ疵が附いたで

友平　一巻買ひ取る七十兩、それもおさごが身代と

藤助　思うたゆゑに現在の、家來の女房に去り狀を、書いて渡せと勸めるも、あの一巻が欲しさのまま。

友平　金が出來ねば、願ひに願ひし彼の品も……若旦那。

藤助　友平。ハテ

兩人　是非もなき。チエヽ

ト こなし。友平、堪えかね、お杉を引附ける。

すぎ　こりやアわたしを、なんで手荒う

友平　エヽ、おのれはなア。以前の情が今の仇、義理ある女房を賣るのも義理。われが仕業でおさごが顔に、疵が附いたで折角に、調ふ金の蔓も切れ、手に入る所をいたづらに、外手へ渡れば御主人の、願ひも叶はず友平が、よしなき女にたらされて、忠義の道も脇となり、なんでこの後夫婦になられう。詞交すも穢らはしい。思へば／＼下素女に、忠義の妨げ致されしか。チエヽ。

ト無念の思ひ入れ。お杉、こなしあつて

すぎ　女房の顔へこればかり、疵が附いたでアノお前は、わつちを二度目の女房に持たぬのかえ。

友平　お主の願ひを妨ぐる下素女め。詞交すもこれ限り。とつとゝ爰を

ト　お杉を下手へ突きやる。

さご　わたしの顔のこの疵は、いとはぬけれど、折角身を賣り拵らへた

友平　金が役にも、女房ども

さご　こちの人。

友平　斯うも鶍に

藤助　ヤ。

友平　面目なうござりまする。

ト當惑のこなし。お杉、思ひ入れあつて

すぎ　いらざるわたしが燒き餅から、折角女房になりに來て、男に嫌はれすご〳〵と、素手で歸つて、斯う〳〵と、話すもあんまり智慧がねえ。その上行けば今日直ぐに、友平さんの女房だと、朋輩女郎へ空を云ひ、どの面下げて元の鞘。こいつはちつと納まらねえ。

ト思ひ入れ。吉助が前にある名宛のなき去り狀を取つて、よく〳〵見て

友平さん、おかみさんへやんなさるこの去り狀、宛名は今のごたつきで、筆がとまつて書かない樣子。この去り狀へわたしの名を、ちよつと書き入れておくれよ。

ト差しつける。友平思ひ入れあつて

友平　今まで一時片時も、女房に持たぬ他人の女、三下り半のその端へ、お杉といふ名は書かれまい。

すぎ　そこを是非とも無理なお賴み。歸るわたしが云ひ譯に、去り狀もらつて來やしたと、それを土產に内外の手前、一日なりと女房になつたと、見せる證據のこの去り狀、友平さん、強情ながら、書いておくれ。

ト これにて友平、思ひ入れあつて

友平　此方の願ひを妨げた、憎くい女へこの末も、顔見合つても知らぬといふ、亭主でもねえ友平が、暇の狀は、願ひの通り

　ト件の去り狀へお杉どのと書かうとする。

さご　ア丶モシ、女房でもないあの女中へ、なんで去り狀

　ト留める。

友平　ハテ、たつての賴み、それゆゑに其方へ渡す去り狀の、端へお杉と

　ト宛名を書き入れ

女房ならぬ女でも、一度の情この上に、側へも寄らぬこの場の始末。望みに任せ宛名は卽ち、お杉どの、友平判……サ、キリ〳〵持つて

　トお杉に渡し、引ッ立て丶門口へ突き出す。お杉、思ひ入れ。

すぎ　これさへ取れば、わたしの願ひが

　トこの時、一人の駕籠舁き、手拭を取ると、彌作にて

彌作　叶へば直ぐに身代の七十兩、約束通りわしへ讓つて取引を、さしづめわしが兄判で

吉助　去り狀添へば此方でも、抱へるお杉が證文へ、判を受取り、七十兩は卽ちお前に。

ト與七へ金を渡す。

與七　耳を揃へて七十兩、金の代りはこの一卷、こなたへきつと。

ト一卷をお杉へ渡す。皆々見て

藤助　慥かに渡すは神妙劍。

友平　外へ渡らば御主人の

さご　願ひも望みも

すぎ　その叶はぬが、此方の附け目。

彌作　添はぬ男に去り狀を、取つたはこの後往來で、その日暮らしの鳥毛振り、一文奴に緣引いて

與七　嫌味恨みをきかぬ用心。

吉助　手切れの金を僅かでも

すぎ　アヽ、イエ、それも合點。男へ手切れは僅かだが、幸ひこれを

ト件の一卷を友平へ打ちつける。

友平　こりやコレ一卷。

藤助　そんならこれを

すぎ　男へ手切れに

ト駕籠へ乘る。

彌作　噂に聞いた義理ある女房。

友平　すりや、此おさごを

すぎ　賣らねえ爲に顏へ疵。

友平　すりや、何ゆゑに我れ〳〵を

彌作　妹が惚れた友平の、そのお主とも露知らず、人に頼まれウカ〳〵と、立ち前取つて磯貝の、お名を騙つた同類の

すぎ　その云ひ譯に年一ぱい、二度の勤めにお內儀さんの

さご　この身に代るも

藤助　我が名を僞る騙りの合摺り。

友平　お杉は兄の麁忽の詫びに

吉助　見上げた同胞。

友平　ゆかしい女。

彌作　不便と思うて、せめて折々

友平　エ。

すぎ　お出では御免。

ト駕籠の垂れを下ろすを木の頭。吉助、金八、與七、後を向く。彌作、先棒を舁きあげる。藤助、一卷を戴く。友平、駕籠に向ひ手を合はせる。おさご泣き落す。これをキザミにてよろしく拍子

幕

（作者　鶴屋南北）

六幕目

やぐら太鼓の場

役割＝＝堤彌藤次。菊坂小源次。三吉爺イ土左衞門。家主、長右衞門。同、杢右衞門。番太、角兵衞。八百屋娘、お七。吉三同心辨長　實ハ尾花吉三郎。

本舞臺、向う一面の黑幕。正面に誂への太鼓櫓を取附け、その下に自身番所。上の方に木戸。下手板塀にて見切り、橋がゝり西の揚げ幕に木戸を取附け、誂らへの大階子、辻行燈、用水桶など、すべて

夜の景色。時の鐘だら、五ツの拍子木にて幕明く。

ト向うより角兵衛、番人の拵らへにて、五ツの拍子木を打つて出てくる。上手より細引をかけたる四つ手駕籠を、人足二人擔ぎ、捕り手二人附添ひ、跡より彌藤次、絆纏股引、大小の形にて出てくる。舞臺よき所へ駕籠を下ろし、彌藤次思ひ入れ。この時、角兵衛、行きあふゆゑ

彌藤　コリヤ番人、それへ出い〳〵。

角兵　ヘイ〳〵〳〵、私しは夜番人でござります。晝番人を呼びませうか。

彌藤　たわけ面め、月行事を呼び出せ〳〵。

捕手　早く呼び出せ〳〵。

ト口々に云ふ。角兵衛うろたへ

角兵　ヘイ〳〵〳〵、長右衛門さん杢右衛門さん、ソレ、阿母さん、お呼びなされまする。ござりませござりませ。

トあはてゝ呼び立てるゆゑ、杢右衛門、家主の拵らへにて、うろたへ出て

杢右　ヘイ〳〵〳〵。私しは即ち月行事でござります。何の御用でござります。

彌藤　コリヤヤイ、この程亭主傳吉と申す者を、殺害して立退きし、宿場女のくまと申す者を、身共召

捕つて、只今代官所へ急ぎの道筋、提灯の用意なく、甚だ難儀いたす間、其方ども灯を出し、代官所まで見送り致せ。

李右　ヘイ、左様なら、お尋ね者のおくまを、お捕へなされてござりまするか。

角兵　どんな女か、ちよつと拝見いたしたうござりまする。

彌藤　默り居らう。大切なる囚人……サヽ、町役人、提灯を出して、見送りを申し附けい。

李角　ヘイ／＼／＼。

トこれにて自身番の内より月行事の弓張りを出し、灯をともし居る。向うバタ／＼になり、土左衛門走り出てくる。跡より小源次、絆纏股引、大小にて、捕り手二人を連れ、追ひかけ出て、あちこちと追ひ廻し、ト、小源次、十手にて土左衛門を打ち据ゑる事あつて

小源　怪しい奴め。

捕手　動くまいぞ。

土左　アヽ、モシ／＼、御免なされまし／＼。

トうづくまる。此うち彌藤次、小源次を見て

彌藤　ヤ、其許は小源次どのではござらぬか。

小源　さいふは彌藤次どの、辻駕籠に繩かけ召されたは。

彌藤　イヤ、お尋ねの亭主殺し、おくまと申す女、召捕つてござりまする。

小源　それはお手柄。拙者も怪しき異名を取りし、以前は三吉、今の名は土左衛門、老人ながらも詮議ある奴。

土左　アヽモシ、お役人樣、誠に正直正道な三吉爺イ土左衛門、何科あつて私しを

小源　ヤア、科はその身に覺えがあらう。この程湯島の社内に於て、葛籠を奪ひ、立退きしと訴人あつて、おのれが詮議。以前は三吉、今のその名は土左衛門、腕廻せ。

土左　モシ〱、それは大きな間違ひでござります。その時の葛籠は、折角ものして又外へ捲きあげられ、犬骨折つた私しは、その時の葛籠の行くへ、一向に存じませぬ。

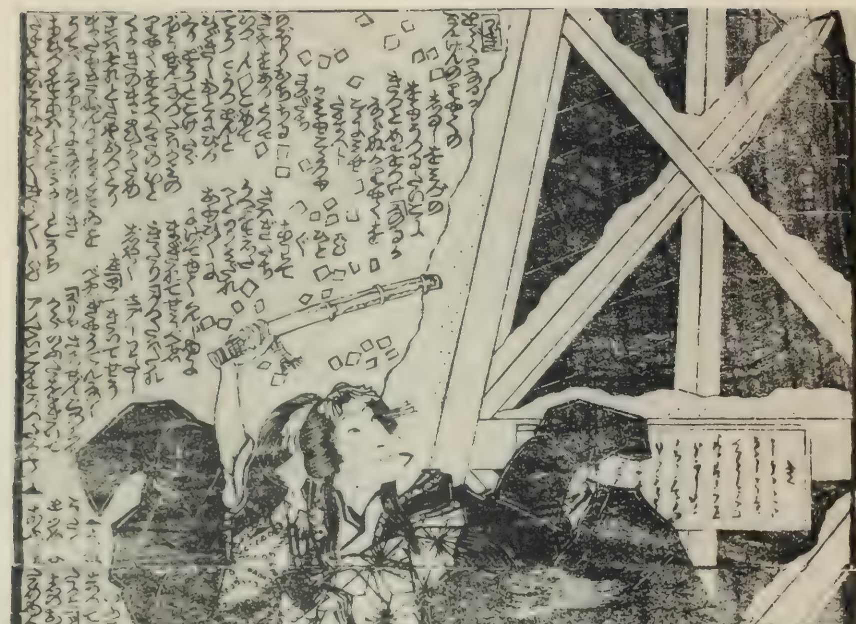
小源　知らぬと申して差置かうか。家來ども、ソレ、引ツ縛れ。

捕手　ハツ……腕廻せ。

　　トかゝるを彌藤次見やり、思ひ入れあつて

彌藤　ヤヽ、その者は島川どのゝ伯父。慥かにそれと

土左　オヽ、あなたは堤



ト云はうとするを、かぶせて

彌藤　アヽ、イヤ〳〵、わいらがやうな怪しい奴に、近附きは持たぬ。さりながら、この度大殿よりお尋ねなさる、神妙劍の一卷は、身共へ出入りの浪人が、手に入つたると今日の訴へ、さすれば屋敷へありつき出世。水の流れの人の身の上、どこへどのやうな幸ひがあらうも知れぬ。

土左　エ、その一卷が浪人者の手に入つて、その手先にてお屋敷へ。さすればおいらもその蔓で

ト思ひ入れ。小源次、こなしあつて

小源　何とも以て怪しい老ぼれ、イデ、繩かけて

ト立ちかゝるを、彌藤次へだてゝ、土左衞門を引敷き

彌藤　我が捕り繩にて……おくまを召捕る手次手に。

ト解けるやうに繩をかける。土左衞門も思ひ入れ。

小源　然らば繩附き土左衞門、即ち番屋へ預け置く……コリヤ、町役人ども、大切に引据ゑ置け。きつと預けたぞ。

李右　ヘイ〳〵、左樣ならこの囚人を、お預けなさるのでござりますか。私しは又、お見送り致さねばなりませぬ……コレ、角兵衞、組合の長右衞門どのは。

角兵　酒に醉つて、寢てゞござります。

杢右　それでは濟まぬ。起してこい〳〵。

角兵　ハイ〳〵。

ト自身番の內へ入り

サア〳〵、長右衛門さん、お起きなさい〳〵、御用向きがある〳〵。

ト醉ひ倒れ、寢惚けてゐる長右衛門を引ッ張つて出て來り

長右　ア丶、コレ〳〵、もう飮めぬ〳〵。御免だ〳〵。エ丶、面白い夢を見てゐるものを

杢右　これはしたり、どうしたものだ。わしは今、お見送りを申すから、この繩附きを大事に番をさつしやい。必ず逃がしてはならぬぞや。

長右　ナニ繩附きだ。布子か、袷か。

杢右　これはしたり、囚人だわな。……サ丶、この繩を、しつかりと持ちなせえ。

長右　ア丶、これは迷惑な。

ト杢右衛門、繩の先を渡すゆゑ、是非なく受取り、目をこすり〳〵、こなし。

杢右　サ、お見送りを致しませう。

彌藤　オヽ……家來ども、囚人くまを舁きあげい。

皆々　ハツ。

ト駕籠を舁きあげる。小源次、思ひ入れあつて

小源　コリヤ、町役人、その者しかと預けたぞ。

長右　とんだ災難。

土左　大家さん。御厄介でござります

ト合ひ方、捨て鐘になり、角兵衛と杢右衛門は弓張りを持つて先に立ち、四つ手駕籠を警護して、彌藤次小源次、捕り手附添ひ、向うへ入る。長右衛門は不承々々に繩を取つて、土左衛門を引連れ、居眠り〳〵、番屋の内へ入る。この鳴り物にて下座より風鈴蕎麥屋、麥飯と呼びながら出てくる。下手より斑犬出て、蕎麥屋に吠える。

蕎麥　エヽ、この畜生め、宵から吠えやァがる……シツ〳〵。なぜおれを見ると、いつでも吠えやァがる、大方蕎麥を食はせろと云ふのだらう。振舞つておたまりがあるものか……シツ〳〵、いまに四ツを打つと、方々の木戸が締まるワ。商ひは今の内だ。畜生め、シツ〳〵。

ト犬を追ひちらして、向うへ入る。犬はよき所へ寢る。この時番屋の内より土左衛門、繩附きしまゝ、

　　　忍び足にて逃げて出る。跡より長右衞門、寢惚け顔にて、繩の先を持ち出て

長右　コレ〳〵、どこへ行くのだ。逃がしはせぬぞ。

土左　ナニ逃げはしない。わしは小用に行きます。

長右　早くして來い。なんだか今夜は眠くつてならぬ。あの組合め、もう歸りさうなものだ。埒の明かねえ。

　　　ト自身番より出かゝり、座つてゐて居眠りをしながら、繩先を持つてゐる。

土左　イヤ、まだ夜が短かいからその筈サ。

　　　ト捨ぜりふ云ひながら身を揉む。これにて繩解ける。さてはト思ひ入れ。長右衞門、これを知らず

長右　なんだ。牛のやうに長い小便だなア。

土左　アイ、いま直でござります。

　　　ト云ひながら、繩の先を取つて、寢てゐる犬を縛りつける。

長右　どうだ。まだか〳〵。

土左　ヤレ、せはしねえ。

長右　逃げでもして見ろ。おれが係り合ひだ。サア、來い〳〵。

ト縄を引ッ張る。この縄に犬が縛られたまゝ、引摺られて入り、番屋の戸を閉める。外にて土左衛門思ひ入れあつて

土左　しめたく。

ト向うへ駈けて行かうとする。揚げ幕にて人音するゆゑ、東の方へ行かうとする。爰にも人音するゆゑうろたへて舞臺へ來り、用水桶を引ッくり返し、これをかぶつて隱れる。時の鐘、バタくになり、向うより、お七、ぶら提灯をともし、吉三郎を迎ひの心にて足早に出る。上手の木戸より吉三郎、前幕の形、髮を切つたる誂らへ、一腰を腰に差し、走り出て、舞臺にて行きあたり

しち　オヽ怖。

ト飛びのく。吉三郎、思ひ入れあつて

吉三　さういふ聲は、お七ぢやないか。

ト透かして見る。お七もこれにて、よくく見て

しち　ヤア、吉三さんか。

ト取りつく。

吉三　アコレ。

ト こなしあつて

其方に逢ふもこれ限り、樣子ござつて、これより直ぐに

ト 行かうとする。お七うろたへ、取り縋り

しち　お前の歸りの遲いといひ、案じに胸も休まらず、迎へに來たのに、なんでお前は、

吉三　この身の上の氏素性、父の敵を討つべき身共、これまで知らぬ身の誤り。それゆゑ菩提をとふべき發心、髻切つて吉三同心、出家のこの身。

しち　エ。

ト 吉三郎の頭を見て

ヤヽ、何ゆゑお前は髮切つて、出家なさるゝその身にて、父の敵と仰しやるが、矢ツ張り出家で父御の仇を

吉三　その譯詳しく云ひ聞けんも、尋ぬる敵は、正しくあたりに、窺ひゐると察せしゆゑ、跡追ひ來るも親への孝道。

しち　その孝心は妨げねど、どうぞ樣子を一通り

吉三　心急かれて猶豫はならぬ。運に叶はゞ後しての對面……さらば。

ト振り切つて行くを縋り

しち　さうなりや、わたしもとも〲に。

吉三　女を召連れ、世上の思わく。

しち　イヽエ、わたしやお前の女房。

吉三　女房なれば、夫が去る。

しち　そりや胴慾な。

ト縋るを振り切り、やるまいとする。兩人よろしく爭ひの立廻り。よろしくあつて吉三郎、あぐみたろ、思ひ入れあつて、トヾ焦れる。この時の途端、お七の急所を當てる。お七、「ウン」と悶絶する。

吉三郎、驚き駈けよらんとして身構へ

吉三　不便ながらも氣絶を幸ひ、敵の跡を……オヽ、さうぢや。

トごん〲になり、吉三郎思ひ入れあつて向うへ入る。これにて土左衛門、桶より出て思ひ入れ。お七、自然と心附きしこなしにて

しち　オヽ、吉三さんはどこへ、吉三さんイなう〱……そんなら連なうも、わたしを捨てゝ行かしやんしたかいなア。これいなア、わたしや離れぬ、お前と共に

ト向うへかゝる。この時、所々にて四ツの拍子木を打つ。木戸、四方ともに締まる。土左衛門、恟りして窺ひ居る。

すりやアノ後夜の拍子木と、共に木戸々々締まりしか。

ト此うち土左衛門は前へ出て

土左　譯を云つたら通用も……コレ、お七さん、わしと一緒に

ト これにてお七、土左衛門を見て

しち　オヽ、お前は慥か土左衛門さん、どうぞ通して下さんせいなア……早う吉三さんに追ひつきたいわいなア。

土左　そんならわしに附いて來なせえ。

ト土左衛門先に立ち、お七を連れて揚げ幕の所へ行き

サア、早く頼みなせえ／＼。

ト番所の木戸を叩く。内より番人の聲

番人　誰れだ／＼、何者だ。

しち　用があつて通るものぢやわいなア。ちよつと明けて下さんせいなア。

番人　イヤ〳〵、木戸を打つては、通用は叶はぬ〳〵。

しち　さう云はずとも、どうぞ明けて下さんせ。殿御に逢ひに行く者ぢやわいなア。

土左　モシ〳〵、番人さん、娘の子だ。通しても氣遣ひな者ぢやァないよ。

番人　嚴しい云ひつけ、ならぬ〳〵。

土左　エヽ、聞分けのねえ番太郎めだ……サア、向うの木戸へ行つて見よう。

　ト云ひながら、中の間のあゆみを渡り、東の揚げ幕の木戸際へ行き

しち　これいなア、爰明けて下さんせいなア。

　ト木戸を叩く。

番人　イヤ〳〵、四ッを打つては、通さねえ〳〵。

土左　ハテ、高が女の子だ。通してやんなせえな。

番人　女でも子供でも、嚴しい云ひつけ、ならねえ〳〵。

しち　後生でござんす。どうぞ明けて下さんせ。殿御に逢ふばつかりぢやわいなア。

番人　ならぬ〳〵。

土左　エヽ、聞分けのねえ奴等だ。そんなら彼方の木戸を頼んで見よう。

しち　どうぞ通して下さんせいなア。

土左　お前より、わしが通りたいのだ。お前をお先に有やうは……イヤサ、先へ立ちなせえ。

ト捨ぜりふ云ひながら舞臺上手へ來り

しち　爰明けて下さんせいなア。

土左　娘の子だよ。氣遣ひなしに、明けさつしやい〳〵。

番人　どうして〳〵。嚴しいお觸れだ。ならぬ〳〵。

しち　通るばかりぢや。どうぞ明けて下さんせいなア。

番人　その通るばかりが、ならぬよ。

土左　通されぬと云ふのか。

番人　知れた事だ。ならん〳〵。

土左　エヽ、いま〳〵しい、とてもの事に念晴らし、彼方の木戸を……サ、御苦勞次手だ。來なせえ、來なせえ。

ト橋がゝりの木戸の所へ來り

サ、賴んで見なせえ。

しち　アイ／＼、申し、爰の番人さん、どうぞ爰をお通しなされて下さんせいなァ。

番人　エヽ、やかましい。四ツが鳴つたら木戸は締めて、通用ならぬといふお觸れを知らねえのか。明ける事は、ならぬ／＼。

土左　そんなら、どうあつても通されねえのか。

番人　ならぬ／＼、ならねえわえ。

ト嚴しく云ふ。

しち　そんならどうでも、木戸は明かぬかいなァ。明かねば戀しいお方を見失ひ、今宵のうちに逢ふ事も叶はぬか。わたしや逢うて恨みの程が、云ひたいわいな／＼。恨み云ふにも我が夫に、逢ふ事さへも叶はぬか。こりやマアどうせう、何とせうぞいなァ。

ト泣き伏す。土左衛門思ひ入れあつて

土左　木戸が明かねばこんたより、おれが首にかゝる事、また捕まると縄抜けの押しぶち。どんな憂目を。こいつは大事だ。

ト思ひ入れ。この時、合ひ方變つて、日覆へ銀張りの月を引出す。土左衛門、空を見上げ、櫓へキッと目を附け

二十日亥中の月魄で、櫓に見ゆるあの太鼓、打てば忽ち木戸々々が

ト思ひ入れあつて

打たせる者は……コレ〳〵、お七ぼう、木戸を明けさせる工風が出來た。コレ、可愛い男に逢はれるよ。

トこれを聞きつけ、お七、起上がり

しち　エヽ、何と云はしやんす。木戸々々が明いて、いとしいお方に

土左　オヽ、惚れた男に逢はれる仕樣は。コレ、

ト櫓の太鼓へ指さし

櫓に吊つたあの太鼓、打てば忽ち木戸々々の、通用出來ると聞いたが幸ひ、なんと、太鼓を打つ氣はないか。

しち　すりやアノ櫓にかけてある、太鼓を打てば木戸々々開き、いとしいお方に追ひついて

土左　恨み云ふとも可愛いとも、つもる話しの、出來るは櫓の。

しち　太鼓を打てば身の罪科、焙烙死刑と恐ろしい。

土左　それが怖くて打たれぬか。

しち　イエ〳〵、なんのそれをいとはう。戀しと思ふ殿御に捨てられ。
土左　恨み云ふにはあの太鼓。
しち　打つてこの身は罪科に、どんな責め苦にあふとても
土左　戀しい男にや替へられぬ。
しち　夫ゆゑには松浦潟、石となつたる。
土左　女もあり、火に入り、水に溺るゝとも
しち　女の念力、なんのいとはう。
土左　持つたる撥を劍と定め
しち　打てば打たるゝ櫓の太鼓。

ト思ひ入れあつて、上を見上げ、キッとなる。これを早めになり、お七、思ひ入れあつて、階子へかかり、櫓へ上がる、土左衞門、仕濟ましたりと思ひ入れあつて、あたりに有りあふ縫ひぐるみを見附け、これを引提げ、番屋の口に立つてゐて、人が出たらばと窺ひゐる。お七は、やう〳〵階子を登り櫓に上がり、思ひ入れあつて

南無堀の内のお祖師様、七面様、妙見様、どうぞ木戸々々開かせ給へ。ゆかしい男に逢はせてた

べ。

ト撥を取つてドンと打ち、悧りして耳をふさぐ、土左衛門は下より氣をいらち

土左　早く打たぬか、夜更けぬうちに

しち　逢ふが樂しみ。

ト思ひ切つてドンと打つ。これにて向うにてドンと打合はせる。お七、又打つ。これにて東の方でも合はせる。

土左　サヽ、早く打たぬか〳〵。

ト思ひ入れ。番屋の内より長右衛門、目を覺まし、出て

長右　ヤア、太鼓を打つたは

ト云ひながら土左衛門を見て

うぬ、逃げたな。

トかゝるを立廻りよろしくあつて、此うちお七、しきりに打つ。これにて上下の木戸の内、東西の揚げ幕にて、太鼓を合はせる。土左衛門、長右衛門と立廻つて引敷き、櫓を見上げて見得。この模様よろしく、早拍子木にて

幕

大正十五年十月十八日印刷
大正十五年十月二十一日發行

『大南北全集第七巻』

非賣品

校訂 坪内逍遙
編纂者 渥美清太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常盤印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂



